

第5章 遺物

今回報告する出土遺物の量は、遺物収納ケースで532箱、総数にして59,312点におよぶ。人工遺物では瓦・埠に次いで陶磁器、金属製品の順で出土量が多い。自然遺物は貝類・骨類のほか、シーリ遺構からは種実類や糞石が得られている。

本章では、まず遺物を前半に人工遺物、後半に自然遺物とに分け、人工遺物は通し番号を付し、種別ごとの解説、観察表、実測図、写真の順で報告する。次に自然遺物は、基本的に貝類、骨類として報告するが、シーリ遺構内の自然遺物については、一括遺物として第27節に独立させて報告する。また、遺構や層序に伴う遺物については、前章において実測図のみを掲載したが、本章において種別ごとにまとめた観察表・写真により、詳細を報告する。

なお、遺物の写真は、その特性をより詳細に見せる目的から、実測図の傾きと異なる場合がある。また、その縮尺も基本的に33%としたが、大型・小型の遺物に関しては必要に応じ縮小・拡大し、展開を追加した遺物もある。また、今回報告する各遺物の集計表は、別添のCD-ROMに収めた。

第1節 中国産青磁（第3～10表、第48～54図、図版35～41）

中国産の青磁は総数2,019点出土し、時期的には14世紀～15世紀に位置づけられる資料が多い。器種は碗・小碗・皿・盤・鉢・器台・壺・香炉・餌入れなどが確認されているが、碗や皿類が大半を占める。以下に各器種の分類概念を記し、個々の特徴は観察表に提示する。

1. 碗（1～40）

A類：口縁部が斜上方に立ち上がるもの。外面に錦蓮弁文を描く（1）。

B類：口縁部が外反するもの。白い素地に釉薬を厚く施釉するもの（2、3）と灰色又は褐色の素地にガラス質の釉薬を薄く施釉するもの（4～10）があり、後者はさらに口縁部が舌状（4～8）と玉縁（9、10）に細分される。

C類：口縁部が直口するもの。外面に雷文帯を巡らせるもの（11～15）、細蓮弁文を描くもの（16～20）、両面にラマ式蓮弁文を描くもの（21）がある。

D類：直口口縁だがC類より器高が低いもの（22、24）や、内底を露胎にする粗製の製品（25）などがある。

碗底部：口縁部欠損のため断じ難いが、底部形態や文様からB類（27～33）、C類（34～38）、D類（39、40）に相当する資料が確認される。

2. 小碗 (41)

直口口縁で端部が内側に傾く。底部形態は不明だが、おそらく碁笥底と思われる。

3. 皿 (42~62)

A類：口縁部を外側に折り曲げる鉢縁口縁のもの。外面に蓮弁文、内底に貼付の双魚文などを施す（42~47）。

B類：外反口縁のもの。口唇部の形態などから外反皿（48~52）、稜花皿（53、54）、八角皿（55）などに細分される。

C類：器形はB類に似るが薄手で素地も白く、高台内面に白磁釉を施釉するもの（57）。

D類：直口口縁のもの。法量の差異から大型（58）と小型（59~62）があり、後者には菊花皿（59、60）もみられる。

4. 盤 (63~75)

A類：口縁部を外側に折り曲げる鉢縁口縁で、口唇端部を上方に摘み上げるもの（63~65）とそのままのもの（68、69）がある。前者は内面に蓮弁文を描く。

B類：口縁部を外側に折り曲げ、口唇部を稜花状に成形するもの。内面にラマ式蓮弁文や蓮弁文などを描く（70~73）。

C類：直口口縁のもの。内面に蓮弁文や唐草文などを描く（74、75）。

盤底部：口縁部欠損のため断じ難いが、A類に対応する可能性が高い（66、67）。

5. 鉢 (76~79)

器形は碗C類を大型にしたもので、器面に雷文や蓮弁文などを描く。

6. 器台 (80~83)

いわゆる夜学形の器台で、花瓶などと組み合わせる大型のもの（80~82）と瓶類の蓋置と考えられる小型のもの（83）がある。

7. 壺 (84~94)

壺は酒会壺と呼ばれる胴部の張りが強いもの（84~90、93、94）と、二階殿地区（沖縄埋文2005）に類例のある大型壺（91、92）が確認されている。

8. 香炉 (95)

小型の三足香炉で、聞香炉として使用されたと思われる。

9. 餌入れ (96)

口縁部が内湾する平底の餌入れで、外面肩部に輪状の把手を持つ。明代の磁器製餌入れは現在のところ類例が確認されておらず、貴重な資料といえる。

第3表 中国産青磁観察一覧1

図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 高 台径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第48図 図版35 1	碗	直 口	口 緑 部	15.9 — —	外面に 蓮瓣弁文。	明オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。	灰白色で やや細かい。	輦輪成形。龍泉窯で 13c後～14c前。	11	搅乱
第48図 図版35 2	碗	外 反	口 緑 底	17.4 8.5 6.9	外面にラマ式 蓮弁文、内面に 蓮花唐草文を 描くが不明瞭。	灰オリーブ色の釉 を全面に施釉後、 外底を釉剥ぎ。 全面に荒い貫入。	灰白色で 細かい。	輦輪成形。全体的に 被熱か、内面に剥製品 が付着。龍泉窯で 14c後～15c前。	19	B-4基盤状造構表面+B-4シリーズ 清掃中+B-4黄褐色 色+B-4東側灰 粘土層+搅乱
第48図 図版35 3	碗	外 反	口 緑 部	16.2 — —	無文。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉。	灰白色で 細かい。	輦輪成形。龍泉窯で 14c後～15c前。	19	E-4 5層
第48図 図版35 4	碗	外 反	口 緑 部	17.4 — —	無文。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉。	黄灰色で やや細かい。	輦輪成形で口緑部は 外側折り返し。 龍泉窯系で14c後～ 15c前。	19	E-5 6層
第48図 図版35 5	碗	外 反	口 緑 部	— — —	無文。	薄オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。 全面に細かい貫入。	灰白色で やや細かい。	輦輪成形。龍泉窯系 で14c後～15c前。	19	E-4 5層
第48図 図版35 6	碗	外 反	口 緑 部	— — —	無文。	薄オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。 全面に細かい貫入。	灰白色で やや細かい。	輦輪成形。龍泉窯系 で14c後～15c前。	19	E-4 5層
第48図 図版35 7	碗	外 反	口 緑 部	— — —	無文。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉。 全面に細かい貫入。	灰白色で 細かい。	輦輪成形。龍泉窯系 で14c後～15c前。	19	E-4 5層
第48図 図版35 8	碗	外 反	口 緑 部	— — —	無文。	薄オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。 全面に細かい貫入。	灰色で やや細かい。	輨輪成形。釉下に白 土？を塗布。龍泉窯 系で14c後～15c前。	19	C-3 野面石積み 南側栗石
第48図 図版35 9	碗	玉 緑	口 緑 底	14.9 7.2 6.1	無文。	灰オリーブ色の釉 を全面に施釉後、 外底を釉剥ぎ。 全面に細かい貫入。	灰色で やや細かい。	輨輪成形で口緑部は 外側折り返し。龍泉窯 系で14c後～15c前。	19	C-D-4・5 3層表面 +D-4・2層 +搅乱
第48図 図版35 10	碗	玉 緑	口 緑 部	18.0 — —	無文。	灰オリーブ色の釉 を両面に施釉。	灰白色で やや細かい。	輨輪成形で口緑部は 外側折り返し。龍泉窯 系で14c後～15c前。	19	C-3野面石積 み南側栗石 +C-2・3野面 石積み南側栗石
第48図 図版35 11	碗	直 口	口 緑 部	15.5 — —	外面に雷文+ 唐草文、内面 に唐草文。	明灰黄緑色の釉を 両面に施釉。両面 に荒い貫入。	灰白色で 緻密。	輨輪成形。龍泉窯で 14c後～15c中。	11	J-11 20～30
第48図 図版35 12	碗	直 口	口 緑 部	— — —	外面に雷文+ ラマ式蓮弁文? 、内面に 唐草文。	明灰黄緑色の釉を 両面に施釉。	灰白色で 緻密。	輨輪成形。龍泉窯で 14c後～15c中。	19	B-4 3層表面 +搅乱

第4表 中国産青磁観察一覧2

団 団版 番号	器 器種	器 形	部 位	口 径 器 高 台 径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・施用・質入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第48団 団版35 13	碗	直 口	口 縁 部	16.1 - -	外面に雷文、 内面に雷文 +草花文(人 形手?)。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉。 全面に細かい質入。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。龍泉窯で 14c後~15c中。	19	B-4 基壇状遺構溝中
第48団 団版35 14	碗	直 口	口 縁 部	17.0 - -	外面に唐草文 +細蓮弁文、 内面に雷文。	明灰黄緑色の 釉を両面に施釉。	白色で 緻密。	轆轤成形。全体的に 被熱。龍泉窯で 14c後~15c中。	19	搅乱
第48団 団版35 15	碗	直 口	口 縁 部	15.0 - -	外面に雷文+ 蓮弁文、内面 に牡丹唐草文 +如意頭文。	明灰黄緑色の 釉を両面に施釉。	白色で 緻密。	轆轤成形。龍泉窯で 14c後~15c中。	11	搅乱
第48団 団版35 16	碗	直 口	口 縁 部	14.1 - -	外面に細蓮弁 文、内面に唐 草文。	オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。	灰白色で 緻密。	轆轤成形。龍泉窯で 15c。	11	搅乱
第48団 団版35 17	碗	直 口	口 縁 部	- - -	外面に細蓮弁 文、内面に唐 草文。	明灰黄緑色の 釉を両面に施釉。	灰白色で 緻密。	轆轤成形。龍泉窯で 15c。	19	搅乱
第48団 団版35 18	碗	直 口	口 底	11.6 6.8 5.0	外面に細蓮弁 文、内面に捺 花文、内底に 印花文(寿字)。	薄オリーブ灰色の 釉を全面に施釉 後、外底を釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。外底に窯 道具?が溶着。龍泉 窯で15c後~16c前。	11	搅乱
第48団 団版35 19	碗	直 口	口 底	12.1 7.6 5.1	外面に細蓮弁 文。	灰オリーブ色の釉 を全面に施釉後、 外底を釉剥ぎ。 両面に細かい質入。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。器付に砂 が付着。龍泉窯系で 15c後~16c前。	11	搅乱
第48団 団版35 20	碗	直 口	口 縁 部	13.2 - -	外面に細蓮弁 文。	明灰黄緑色の釉 を両面に施釉。 全面に荒い質入。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。龍泉窯系 で15c後~16c前。	11	搅乱
第49団 団版36 21	碗	直 口	口 縁 部	14.4 - -	両面にラマ式 蓮弁文。	オリーブ黄色の釉 を両面に施釉。 全面に細かい質入。	灰白色で 細かい。	轆轤+型打ち成形。 龍泉窯で14c後~ 15c前。	11	搅乱
第49団 団版36 22	碗	直 口	口 底	12.3 5.6 4.3	内底に印花 文(牡丹)。	オリーブ灰色の釉 を内底から器付まで施 釉後、器付を釉剥ぎ。 両面に細かい質入。	灰白色で やや細かい。	轆轤成形。 部分的に被熱か。 龍泉窯系で16c。	19	B-4 基壇状遺構溝中
第49団 団版36 23	碗	直 口	口 縁 部	16.0 - -	無文。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉。 全面に細かい質入。	灰白色で 緻密。	轆轤成形。龍泉窯で 15c後~16c前。	19	C-5方形落込内 +C-5方形礎石 抜穴内
第49団 団版36 24	碗	直 口	口 底	13.2 5.3 5.9	両面に陰線彫。	灰オリーブ色の釉 を内底から高台際 まで施釉。	灰白色で やや細かい。	轆轤成形。 福建・廣東系で16c。	19	B-1 石積み6西側 上層+搅乱

第5表 中国産青磁観察一覧3

団 団版番号	器種	器形	部位	口径 高台径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範圍・質入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第49団 団版36 25	碗	直 口 底	口 底	16.7 — —	無文。	オリーブ灰色の釉 を内底から外面腰 部まで施釉後、 内底を釉剥ぎ。	鈍黄橙色で やや細かい。	織輪成形。釉下にオ リーブ褐色の釉を塗 布か。福建・広東系 で16c後～17c初。	11	搅乱
第49団 団版36 26	碗	—	底部	— — 4.8	外面、 内底の文様は 不鮮明。	明灰黄緑色の釉を 両面に施釉後、足 付を釉剥ぎ。両面 に荒い質入。	白色で緻密。	織輪成形。全体的に 被熱。龍泉窯で14c 後～15c前。	19	C-4 2層
第49団 団版36 27	碗	—	底部	— — 6.0	内底に 陰圓線+印花 文(蓮花)。	暗オリーブ色の釉 を内底から足付ま で施釉後、足付を 釉剥ぎ。全面に細 かい質入。	灰白色で やや細かい。	織輪成形。外底に窯 道具?が付着。 龍泉窯系で14c後～ 15c前。	19	C-3 野面石積み 南側栗石
第49団 団版36 28	碗	—	底 部	— — 6.9	内底に印花 文(蓮花)。	明オリーブ灰色の 釉を内底から足付 まで施釉。	白色で緻密。	織輪成形。龍泉窯で 14c後～15c前。	19	E-4 5層
第49団 団版36 29	碗	—	底部	— — 7.2	内底に印花 文(鹿?)。	灰オリーブ色の釉 を内底から高台外 面まで施釉。両面 に細かい質入。	灰白色で やや細かい。	織輪成形。龍泉窯系 で14c後～15c前。	19	B-2 石盤4段目上面
第49団 団版36 30	碗	—	底部	— — 6.2	内底に 陰圓線。	灰オリーブ色の釉 を内底から高台内 面まで施釉後、内 底を釉剥ぎ。全面 に細かい質入。	灰白色で やや細かい。	織輪成形。内底と 外底に窯道具?が 沿着。龍泉窯系で 14c後～15c前。	19	C-3 野面石積み 南側栗石
第49団 団版36 31	碗	—	底 部	— — 6.2	内底に 陰圓線+印花 文(牡丹)。	灰白色の釉を内底 から高台外 面まで施釉。	鈍赤褐色で やや細かい。	織輪成形。龍泉窯系 で14c後～15c前。	19	C-3 野面石積み 南側栗石
第49団 団版36 32	碗	—	底部	— — 6.6	内底に印花 文を施すが 不鮮明。	灰オリーブ色の釉 を内底から高台外 面まで施釉。全面 に細かい質入。	灰白色で やや細かい。	織輪成形。龍泉窯系 で14c後～15c前。	19	E-4 5層
第49団 団版36 33	碗	—	底部	— — 5.2	無文。	灰オリーブ色の釉 を内底から高台外 面まで施釉。	灰白色で やや細かい。	織輪成形。龍泉窯系 で14c後～15c前。	19	E-5 6層
第50団 団版37 34	碗	—	底 部	— — 6.2	外面に蓮弁 文、内底に陰 圓線+印花 文(菊花)。	明オリーブ灰色の 釉を内底から足付 まで施釉。	灰白色で 細かい。	織輪成形。龍泉窯 で14c後～15c前。	19	B-4 黄褐色土
第50団 団版37 35	碗	—	底部	— — 6.9	外面に蓮弁 文、内底に陰 圓線+印花 文。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉後、 外底を釉剥ぎ。	灰白色で 緻密。	織輪成形。龍泉窯系 で14c後～15c前。	19	搅乱

第6表 中国産青磁観察一覧4

団 団版番号	器種	器形	部位	口径 高台径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範圍・質入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第50回 団版37 36	碗	-	底部	- - 6.3	外面にラマ式蓮弁文、内底に花唐草文、内底に陰模様+印花文(蓮花)。	明灰黄緑色の釉を内底から豊付まで施釉。	灰白色で緻密。	纏織成形。外底に窯道具?が溶着。龍泉窯系で14c後~15c前。	11 + 19	B-2 石積4段目上面+搅乱
第50回 団版37 37	碗	-	底部	- - 5.5	外面に蓮弁文、内底に陰模様+印花文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉後、豊付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	纏織成形。龍泉窯系で14c後~15c前。	19	E-4 5層
第50回 団版37 38	碗	-	底部	- - 7.0	外面に蓮弁文、内底に花唐草文(捺花文)?。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	纏織成形。龍泉窯で14c後~15c前。	19	B-4 黄褐色土
第50回 団版37 39	碗	-	底部	- - 4.8	無文。	灰黄色の釉を内底から高台際まで施釉。	灰白色でやや細かい。	纏織成形。福建・広東系で15c後~16c前。	19	A-1 石積み6 西側上層
第50回 団版37 40	碗	-	底部	- - 5.3	無文。	灰オリーブ色の釉を内底から高台際まで施釉。	浅黄橙色でやや細かい。	袋物の可能性あり。纏織成形。釉下に白土を塗布か。龍泉窯系で14c後~15c。	19	C-D-4・5 3層表面
第50回 団版37 41	小碗	-	口 縁 部	6.4 - -	無文。	灰白色の釉を両面に施釉。	浅黄色でやや細かい。	纏織成形。焼成不良か。龍泉窯系で14c後~15c。	19	E-3 5層
第50回 団版37 42	皿	鈎 縁	口 縁 部	11.6 - -	外面に蓮弁文。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。全面に荒い質入。	灰白色で細かい。	纏織成形。龍泉窯で14c後~15c前。	19	搅乱
第50回 団版37 43	皿	鈎 縁	口 底	12.4 4.3 5.5	外面に蓮弁文、内底に陰模様+印花文。	オリーブ灰色の釉を内底から豊付まで施釉。	灰白色で緻密。	纏織成形。全体的に被熱。龍泉窯で14c後~15c前。	19	C-5 3層表面
第50回 団版37 44	皿	鈎 縁	口 底	12.8 4.9 6.3	外面に蓮弁文、内面に雷文+花唐草文、内底に双魚文。	オリーブ灰色の釉を全面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	纏織成形。外底に窯道具?が溶着。龍泉窯で14c後~15c前。	19	E-4 5層
第50回 団版37 45	皿	鈎 縁	底部	- - 6.2	外面に蓮弁文、内底に陰模様。	灰オリーブ色の釉を内底から高台両面まで施釉。	灰白色でやや細かい。	纏織成形。龍泉窯系で14c後~15c前。	11	搅乱
第50回 団版37 46	皿	鈎 縁	底部	- - 4.7	外面に蓮弁文、内底に陰模様+双魚文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉後、豊付を釉剥ぎ。全面に細かい質入。	灰白色で細かい。	纏織成形。龍泉窯で14c。	19	搅乱
第50回 団版37 47	皿	鈎 縁	底部	- - 6.2	外面に蓮弁文、内底に陰模様+双魚文。	オリーブ黄色の釉を内底から豊付まで施釉。全面に細かい質入。	灰白色でやや細かい。	纏織成形。龍泉窯系で14c後~15c前。	11	搅乱

第7表 中国産青磁観察一覧5

団 団版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 器 高 台 径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・質入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第51団 団版38 48	皿	外 反	口 縁 部	11.9 — —	内面に花唐草文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	織輪成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	B-4 2層
第51団 団版38 49	皿	外 反	口 縁 部	12.6 — —	無文。	オリーブ色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	織輪成形。龍泉窯で14c後～15c前。	11	搅乱
第51団 団版38 50	皿	外 反	口 縁 部	11.6 — —	内底に陰圓線か。	灰白色の釉を両面に施釉、全面に細かい質入。	灰白色でやや細かい。	織輪成形。龍泉窯系で14c後～15c前。	19	E-4 5層
第51団 団版38 51	皿	外 反	口 底	8.2 2.2 4.6	内底に陰圓線。	オリーブ灰色の釉を全面に施釉後、外底を釉剥ぎ、両面に荒い質入。	灰白色で細かい。	織輪成形。龍泉窯で14c後～15c前。	11	搅乱
第51団 団版38 52	皿	外 反	口 縁 部	— — —	両面に蓮弁文。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	織輪成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	B-4 2層
第51団 団版38 53	皿	外 反	口 縁 部	13.2 — —	外面上に弧線文、内面にラマ式蓮弁文か。	灰オリーブ色の釉を両面に施釉。全面に細かい質入。	灰白色でやや細かい。	織輪成形で口唇部は棱花状。龍泉窯系で14c後～15c前。	19	搅乱
第51団 団版38 54	皿	外 反	口 縁 部	13.6 — —	外面上に弧線文、内面にラマ式蓮弁文か。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	織輪成形で口唇部は稜花状。全体的に被熱か。龍泉窯で14c後～15c前。	11	搅乱
第51団 団版38 55	皿	外 反	口 縁 部	— — —	内面に雷文+雪文(瑞雲文?)。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	織輪+型打ち成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	搅乱
第51団 団版38 56	皿	— 底 部	— — 5.8	内底に陰圓線+印花文(菊花?)。	オリーブ灰色の釉を内底から脇付まで施釉。全面に荒い質入。	灰白色でやや細かい。	織輪成形。龍泉窯系で14c後～15c前。	11	搅乱	
第51団 団版38 57	皿	外 反	口 縁 部	16.6 — —	無文。	明オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	織輪成形で口唇部は輪花状。景德鎮窯で16c。	11	搅乱
第51団 団版38 58	皿	直 口	口 底	13.2 3.7 7.4	内底に陽圓線+印花文(牡丹?)。	明緑灰色の釉を内底から高台外面まで施釉。全面に細かい質入。	灰白色で細かい。	織輪成形。龍泉窯系で14c後～15c前。	19	E-4 5層
第51団 団版38 59	皿	直 口	口 縁 部	11.6 — —	両面に蓮弁文。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	織輪成形。全体的に被熱。龍泉窯で14c後～15c前。	19	搅乱
第51団 団版38 60	皿	直 口	底 部	— — 5.9	外面上に蓮弁文、内面に通弁文、内底に陰圓線+格子文(四方摺文?)。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、外底を釉剥ぎ。全面に荒い質入。	浅黄色でやや細かい。	織輪成形。龍泉窯で14c後～15c前。	11	搅乱

第8表 中国産青磁観察一覧6

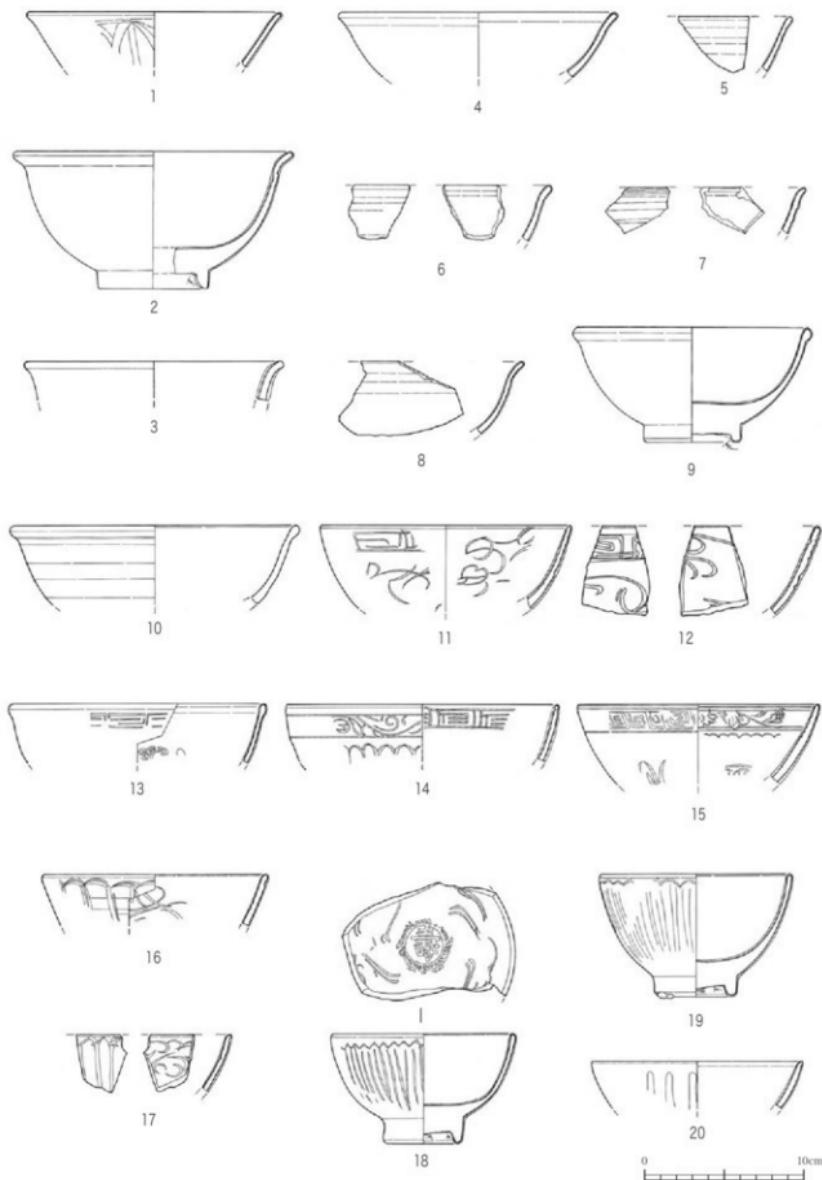
団 団版番号	器種	器形	部位	口径 器高台径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・質入)	素地 (色・質・混和)	所見		
第51回 団版38 61	皿	直 口 底	口 底	9.3 2.8 5.7	内底に 陽圖線。	明灰黃緑色の釉を 全面に施釉後、外 底を釉剥ぎ。	白色で緻密。	織輪成形。龍泉窯で 14c後～15c前。	11	擾乱
第51回 団版38 62	皿	直 口 底	口 底	9.3 3.0 5.5	内底に陽圖線。	明綠灰色の釉を 内底から高台外面 まで施釉。	灰白色で やや細かい。	織輪成形。部分的に 被熟か。龍泉窯系で 15c後～16c前。	11	擾乱
第52回 団版39 63	盤	鈎 緑	口 緑 部	24.4 — —	外面に陰圖線、 内面に蓮弁文。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉。	灰白色で 細かい。	織輪成形。龍泉窯で 14c後～15c。	19	E-4 5層
第52回 団版39 64	盤	鈎 緑	口 緑 部	20.4 — —	内面に蓮弁文。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉。 内面に荒い質入。	灰白色で 細かい。	織輪成形。龍泉窯で 14c後～15c。	19	E-4 2層
第52回 団版39 65	盤	鈎 緑	口 緑 部	— — —	内面に蓮弁文。	灰オリーブ色の釉 を両面に施釉。	灰白色で 緻密。	織輪成形。全体的に 被熟か。龍泉窯で 14c後～15c前。	11	擾乱
第52回 団版39 66	盤	—	底 部	— — 9.2	外面に陰圖線、 内底に陰圖線。	オリーブ灰色の釉を 内底から唇付まで施 釉後、唇付を釉剥ぎ。 両面に細かい質入。	灰白色で 細かい。	織輪成形。底部形態 は仄足か。龍泉窯系 で14c後～15c。	19	E-4 5層
第52回 団版39 67	盤	—	底 部	— — 6.9	無文。	灰白色の釉を内底 から唇付まで施釉。 全面に細かい質入。	灰白色で やや細かい。	織輪成形。龍泉窯系 で14c後～15c。	19	擾乱
第52回 団版39 68	盤	鈎 緑	口 緑 部	— — —	無文。	オリーブ黄色の釉 を両面に施釉。 全面に細かい質入。	灰白色で 細かい。	織輪成形。龍泉窯系 で14c後～15c。	11	I-9 南側
第52回 団版39 69	盤	鈎 緑	口 緑 部	— — —	外面に不明文、 内面に弧線文 (唐草文?)。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉。	灰白色で 緻密。	織輪成形。全体的に 被熟。龍泉窯で 14c後～15c前。	19	C-4 2層
第52回 団版39 70	盤	鈎 緑	口 緑 部	— — —	内面に弧線文 (ラマ式蓮弁文 ?)。	暗オリーブ色の釉 を両面に施釉。	灰白色で 緻密。	織輪成形で口唇部は 棱花状。龍泉窯で 14c後～15c前。	11	擾乱
第52回 団版39 71	盤	鈎 緑	口 緑 部	— — —	内面に弧線文 +唐草文。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉。	灰白色で 細かい。	織輪成形で口唇部は 棱花状。龍泉窯で 14c後～15c前。	19	E-4 5層
第52回 団版39 72	盤	鈎 緑	口 緑 部	— — —	内面に弧線文 +唐草文か。	明オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。	灰白色で 細かい。	織輪成形で口唇部は 棱花状。龍泉窯で 14c後～15c前。	11	擾乱

第9表 中国産青磁観察一覧7

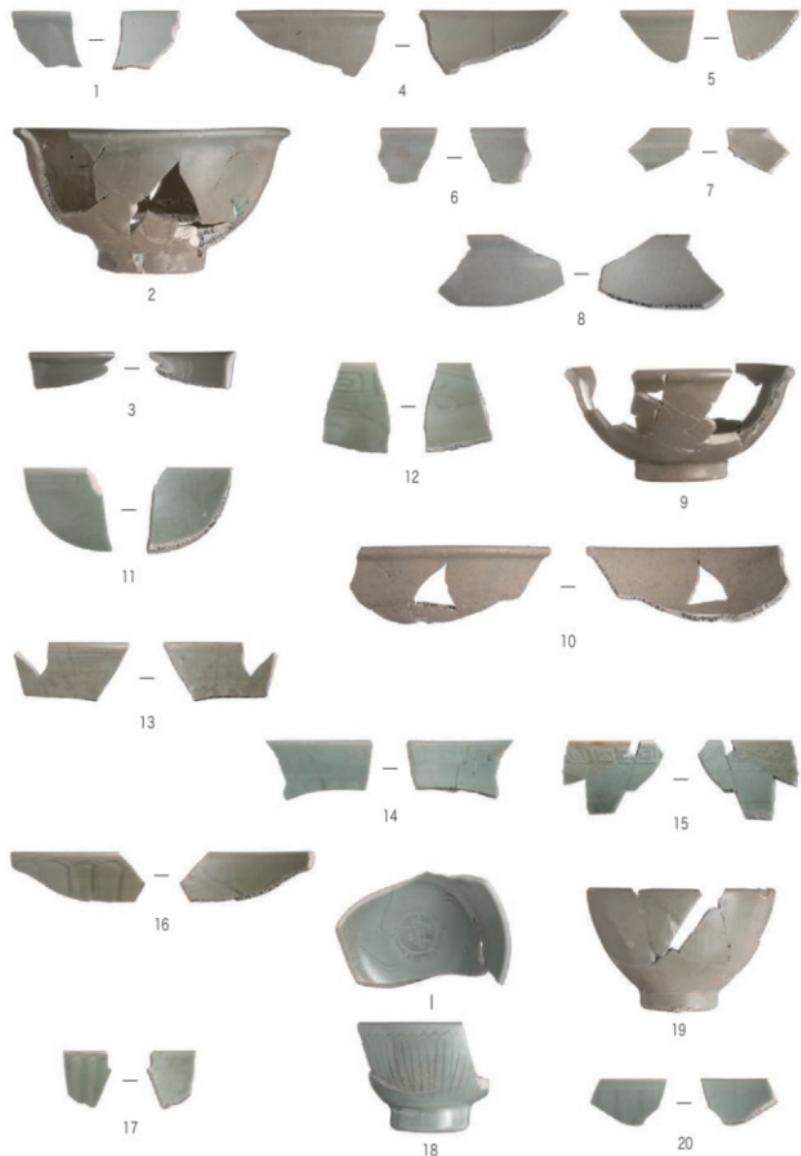
団 団版 番号	器 器種	器 形	部 位	口 径 器 高 台 径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・網目・質入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第52団 団版39 73	盤	鉢 縁	口 底	24.0 5.3 7.4	内面に弧線文 (唐草文?) +蓮弁文。	灰オーリーブ色の釉 を全面に施釉後、 外底を釉剥ぎ。 全面に細かい質入。	灰白色で やや細かい。	轆轤成形。龍泉窯で 14c後~15c。	11	J-10 20~30 +搅乱
第52団 団版39 74	盤	直 口	口 縁 部	24.4 — —	内面に陰圓線 +蓮弁文。	オーリーブ色の釉 を両面に施釉。 全面に細かい質入。	灰白色で 緻密。	轆轤成形。龍泉窯で 14c後~15c前。	19	B-4基壇状 造構表面 +B-4黄褐色土
第52団 団版39 75	盤	直 口	口 縁 部	— — —	内面に唐草 文か。	オーリーブ灰色の釉 を両面に施釉。 全面に細かい質入。	灰白色で やや細かい。	轆轤成形。龍泉窯で 14c後~15c。	11	搅乱
第53団 団版40 76	鉢	直 口	口 縁 部	— — —	内面に陰圓線。	オーリーブ灰色の釉 を両面に施釉。	灰白色で 緻密。	轆轤成形。龍泉窯で 14c後~15c前。	19	E-4 5層
第53団 団版40 77	鉢	直 口	口 縁 部	20.5 — —	外面に蓮弁文、 内面に唐草文。	明灰黄緑色の釉 を両面に施釉。 全面に細かい質入。	灰白色で 緻密。	轆轤成形。龍泉窯で 14c後~15c前。	19	B-4基壇状造構表面 +B-4-3層表面 +B-4黄褐色土 B-5-3層表面+搅乱
第53団 団版40 78	鉢	—	底 部	— — 12.5	外面に花唐草 文、内面に花唐 草文(蓮花?)、 内底に陰圓線。	オーリーブ灰色の釉 を両面に施釉後、 外底を釉剥ぎ。 外面に荒い質入。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。龍泉窯で 14c後~15c前。	11	搅乱
第53団 団版40 79	鉢	直 口	口 縁 部	20.3 — —	外面に雷文+ラマ 式蓮弁文、内面に 雷文+花唐草文 (菊花+蓮花)。	オーリーブ灰色の釉 を両面に施釉。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。龍泉窯で 14c後~15c前。	11	J-8 20~30 +搅乱
第53団 団版40 80	器 台	—	口 底	21.6 19.9 18.2	外面に五葉 文か。	オーリーブ灰色の釉 を全面に施釉後、 外底を釉剥ぎ。	灰白色で 緻密。	轆轤成形で口脣部は 棱花状。龍泉窯で 14c。	11	搅乱
第53団 団版40 81	器 台	—	口 縁 部	27.7 — —	外面に唐草 文か。	明灰黄緑色の釉 を両面に施釉。	灰白色で 緻密。	轆轤成形で口脣部は 棱花状。全体的に 被熱。龍泉窯で14c。	11	搅乱
第53団 団版40 82	器 台	—	胴 部	— — —	外面に五葉 文か。	オーリーブ灰色の釉 を両面に施釉。	灰白色で 緻密。	轆轤成形。龍泉窯で 14c。	11	搅乱
第53団 団版40 83	器 台	—	底 部	— — 10.9	無文。	オーリーブ灰色の釉 を両面に施釉後、 外底を釉剥ぎ。	灰白色で 緻密。	夜学形器台か。轆轤 成形。龍泉窯で14c。	11	搅乱
第54団 団版41 84	壺 蓋	酒 会 壺	底 部	30.0 — 18.4	蓋甲に花唐草 文。	オーリーブ灰色の釉 を全面に施釉後、 底内面から外表面 を釉剥ぎ。	灰白色で 緻密。	轆轤成形。龍泉窯で 14c後~15c前。	19	A-3裏込内 +A-4裏込内 +搅乱

第10表 中国産青磁観察一覧8

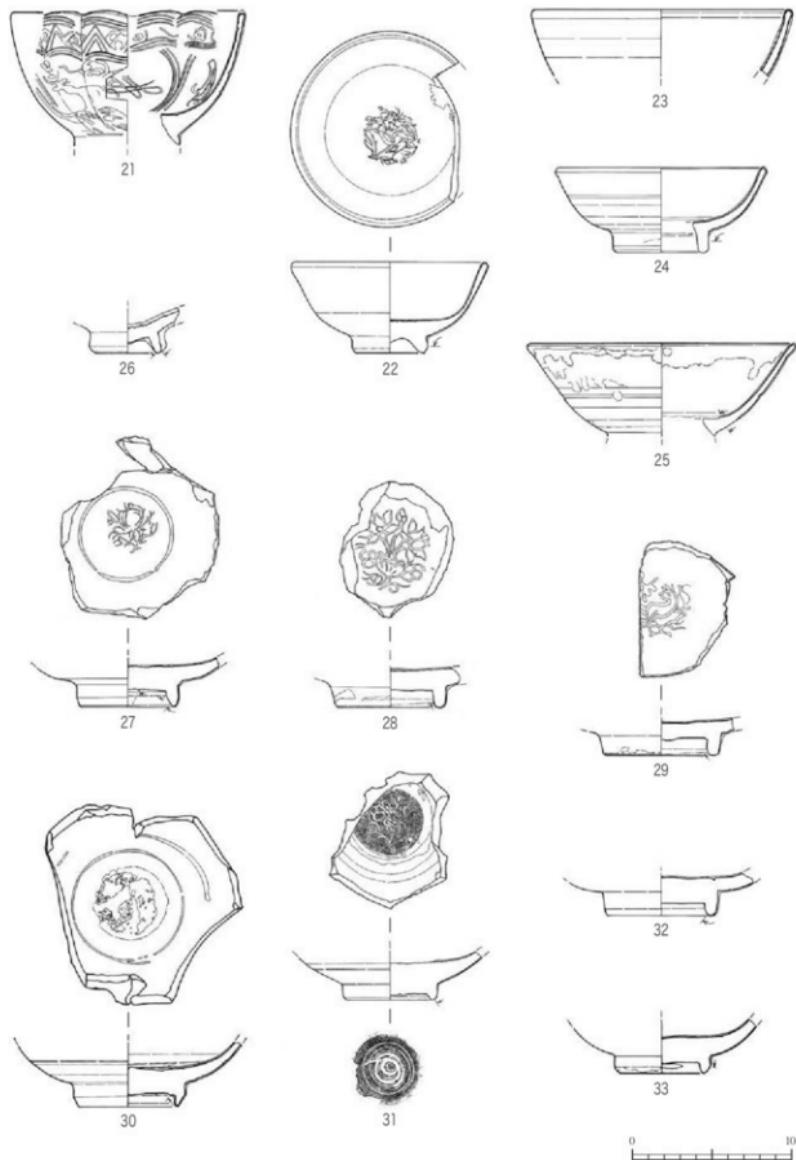
図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 器 高 台径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・質入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第54図 図版41 85	壺 蓋	酒 会 壺	持	— — 20.2	蓋甲に 蓮弁文。	オリーブ灰色の釉 を全面に施釉後、 底内面から持まで 釉剥ぎ。	灰白色で 緻密。	輦轆成形。龍泉窯で 14c後～15c前。	11	J-8 茶褐色灰混層
第54図 図版41 86	壺 蓋	酒 会 壺	底	— — —	蓋甲に 花唐草文。	オリーブ灰色の釉 を蓋甲から底端部 まで施釉。	灰白色で 緻密。	輦轆成形。全体的に 被熱。龍泉窯で14c。	19	E-4 5層
第54図 図版41 87	壺 蓋	酒 会 壺	底	— — —	無文。	オリーブ灰色の釉 を蓋甲から底端部 まで施釉。	灰白色で 緻密。	輦轆成形。龍泉窯で 14c。	19	E-4 5層
第54図 図版41 88	壺 蓋	酒 会 壺	底	25.7 — —	蓋甲に 花唐草文。	オリーブ灰色の釉 を蓋甲から底端部 まで施釉。外面に 細かい質入。	灰白色で 細かい。	輦轆成形。龍泉窯で 14c。	11	搅乱
第54図 図版41 89	壺	酒 会 壺	口 縁 部	— — —	外面に陰刻線 +花唐草文。	明オーリーブ灰色の釉 を両面に施釉後、 口唇部を釉剥ぎ。	灰白色で 緻密。	輦轆成形。龍泉窯で 14c後～15c前。	11	搅乱
第54図 図版41 90	壺	酒 会 壺	口 縁 部	— — —	外面に陰刻線。	明灰黄緑色の釉を 両面に施釉後、口 唇部を釉剥ぎ。	灰白色で 緻密。	輦轆成形。龍泉窯で 14c後～15c前。	11	J-10 20～30
第54図 図版41 91	壺	—	口 縁 部	— — —	両面に陰刻線。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉後、 口唇部を釉剥ぎ。 全面に細かい質入。	灰白色で 緻密。	輦轆成形。龍泉窯で 14c後～15c前。	19	E-4 5層
第54図 図版41 92	壺	—	胴 部	— — —	外面に花唐草 文(牡丹?) +唐草文。	明緑灰色の釉を 両面に施釉。	灰白色で 緻密。	輦轆成形で内面胴部 に継ぎ目あり。全 体的に被熱。龍泉窯で 14c。	19	搅乱
第54図 図版41 93	壺	酒 会 壺	底 部	— — 20.0	外面に蓮弁文。	明灰黄緑色の釉 を両面に施釉後、 鋏付を釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	輦轆成形。龍泉窯で 14c。	11	搅乱
第54図 図版41 94	壺	酒 会 壺	底 部	— — 17.0	外面に蓮弁文。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉後、 鋏付を釉剥ぎ。 全面に細かい質入。	灰白色で 細かい。	輦轆成形。龍泉窯で 14c後～15c前。	19	搅乱
第54図 図版41 95	香 炉	—	口 ゞ 底	8.8 4.6 —	無文。	明オーリーブ灰色の釉 を内面胴部から 外面に施釉。全面 に細かい質入。	灰白色で やや細かい。	輦轆成形で外 面に鋏足を貼付。 龍泉窯で14c後～15c中。	19	A-1 石積み6 西側上層
第54図 図版41 96	瓶 入れ	—	口 ゞ 底	5.0 3.6 2.9	無文。	オリーブ灰色の釉 を全面に施釉後、 外底を釉剥ぎ。	灰白色で 緻密。	輦轆成形。全体的に 被熱し溶着物多数。 龍泉窯で14c後～ 15c前。	19	B-3基壇状遺構 溝中+B-4基壇 状遺構溝中



第48図 中国産青磁 1



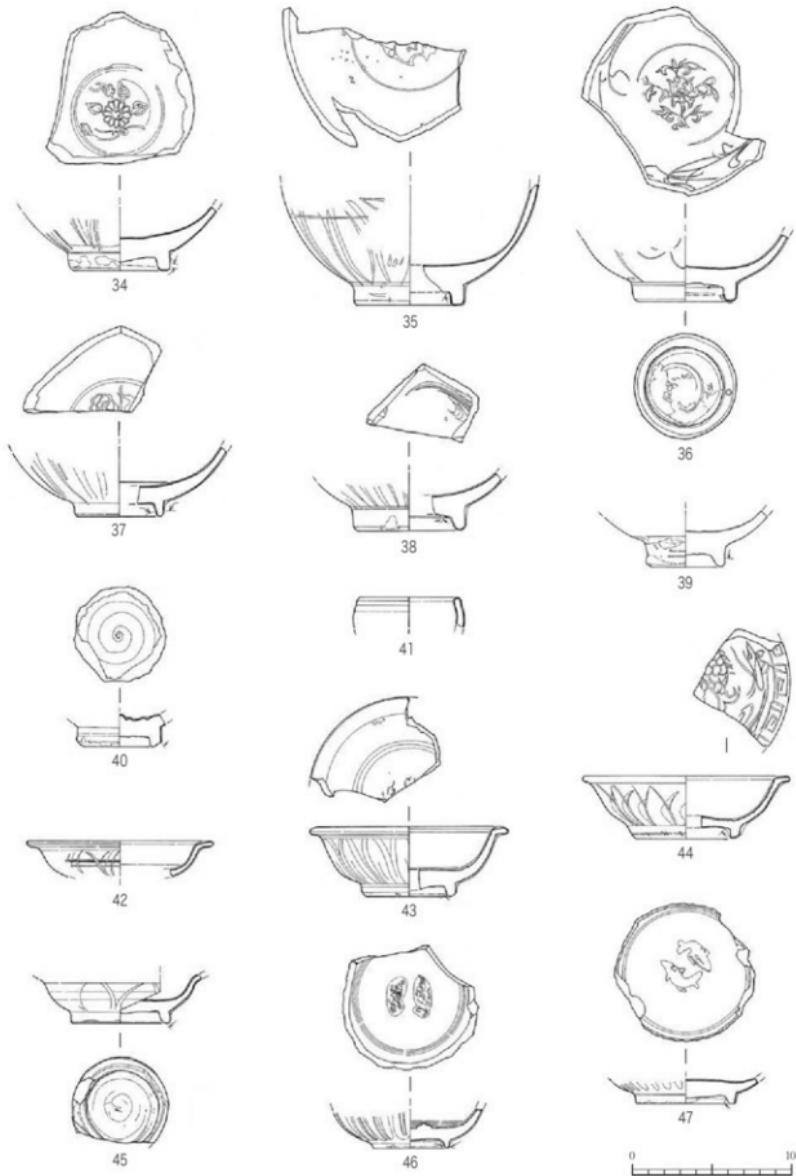
図版35 中国産青磁 1



第49図 中国産青磁2



图版36 中国产青磁2



第50図 中国産青磁 3



34



35



36



37



38



40



39



41



42



43



44



45

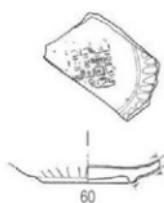
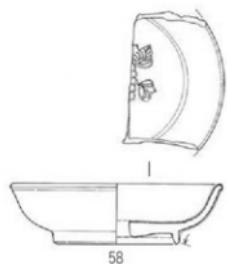
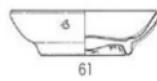
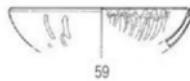
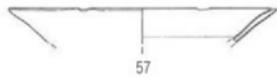
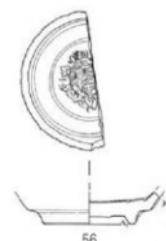
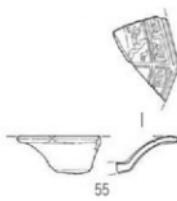
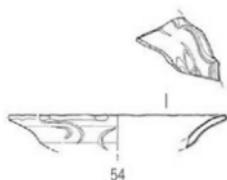
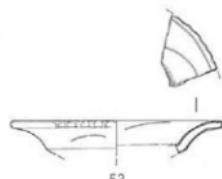
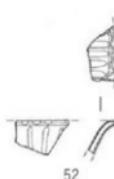
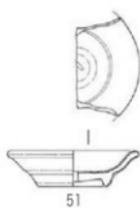
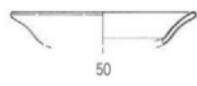
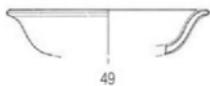
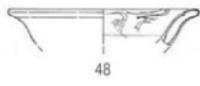


46

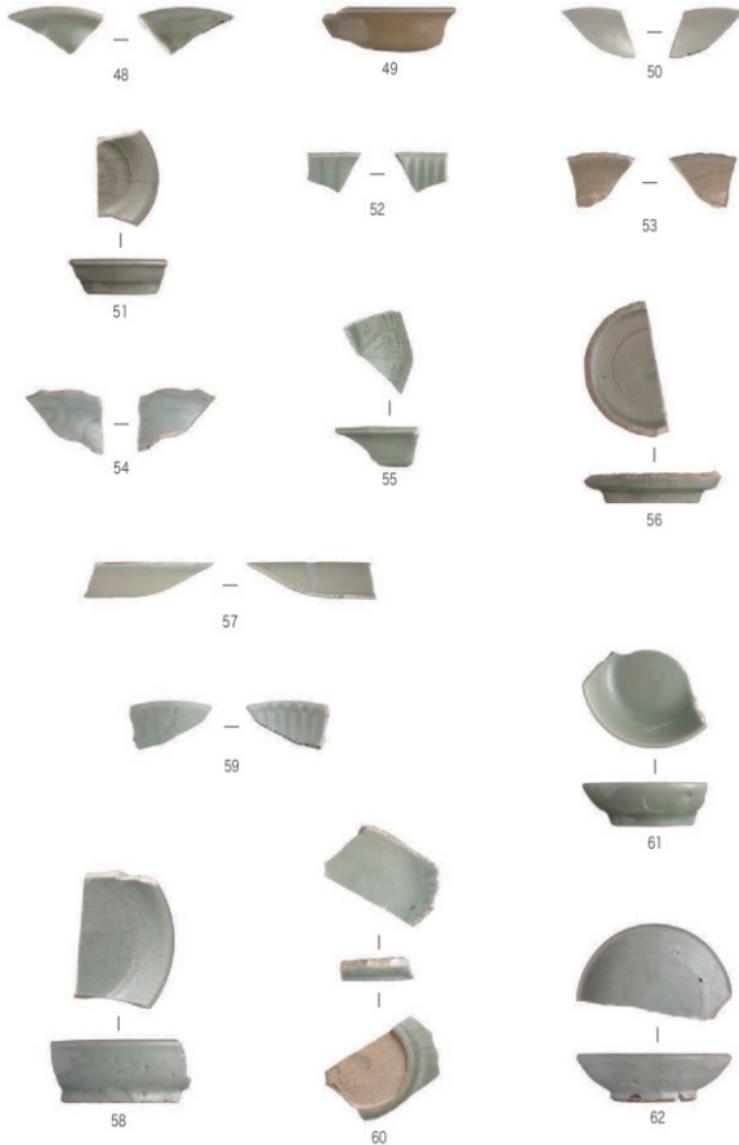


47

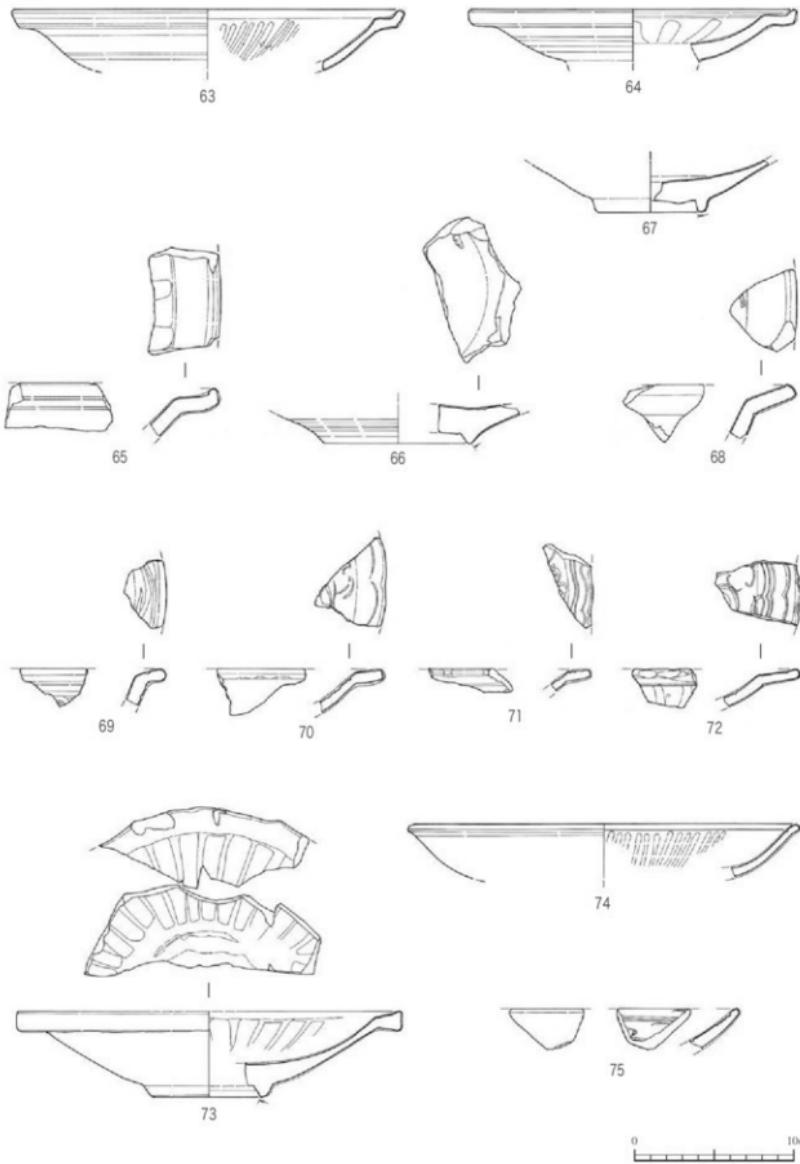
图版37 中国产青磁 3



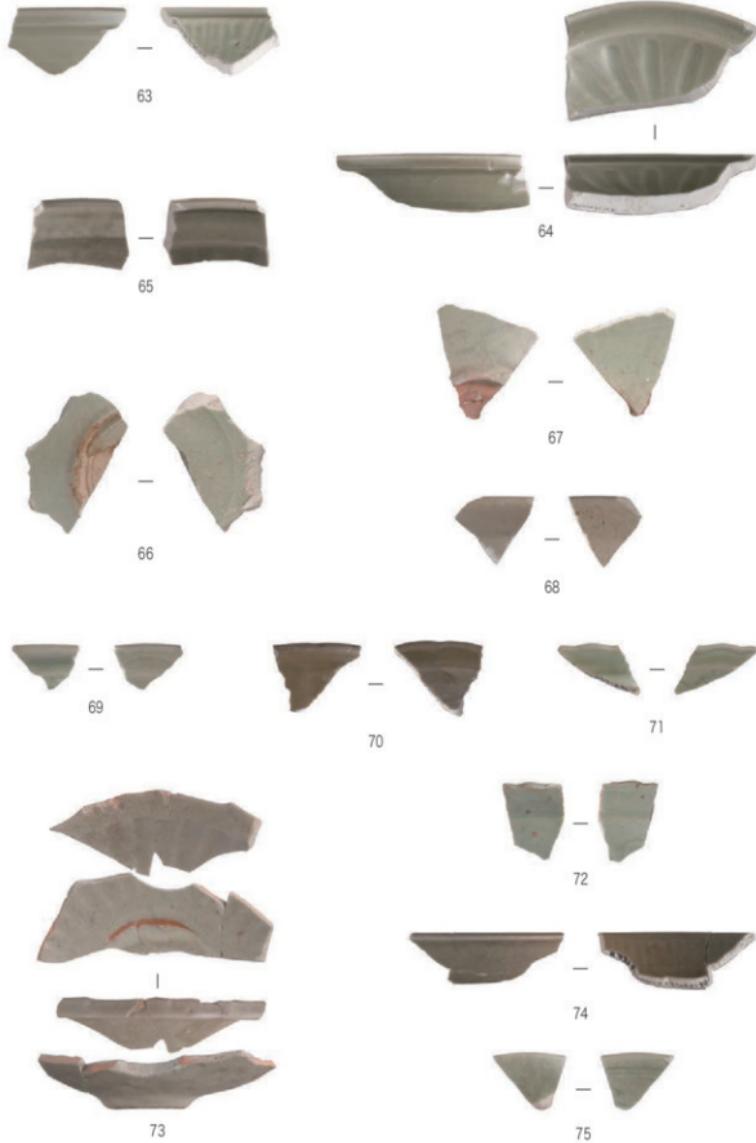
第51図 中国産青磁4



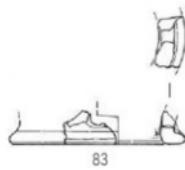
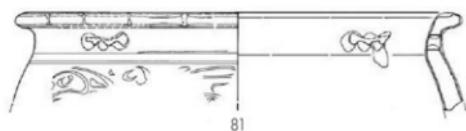
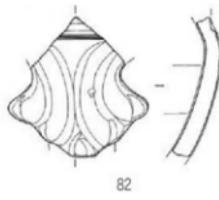
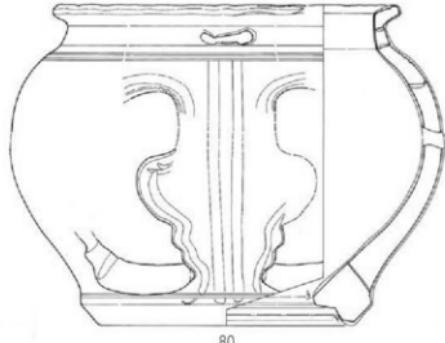
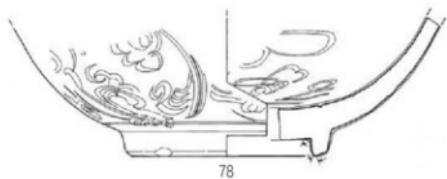
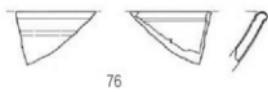
图版38 中国产青磁4



第52図 中国産青磁5

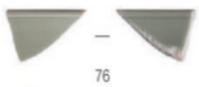


図版39 中国産青磁5

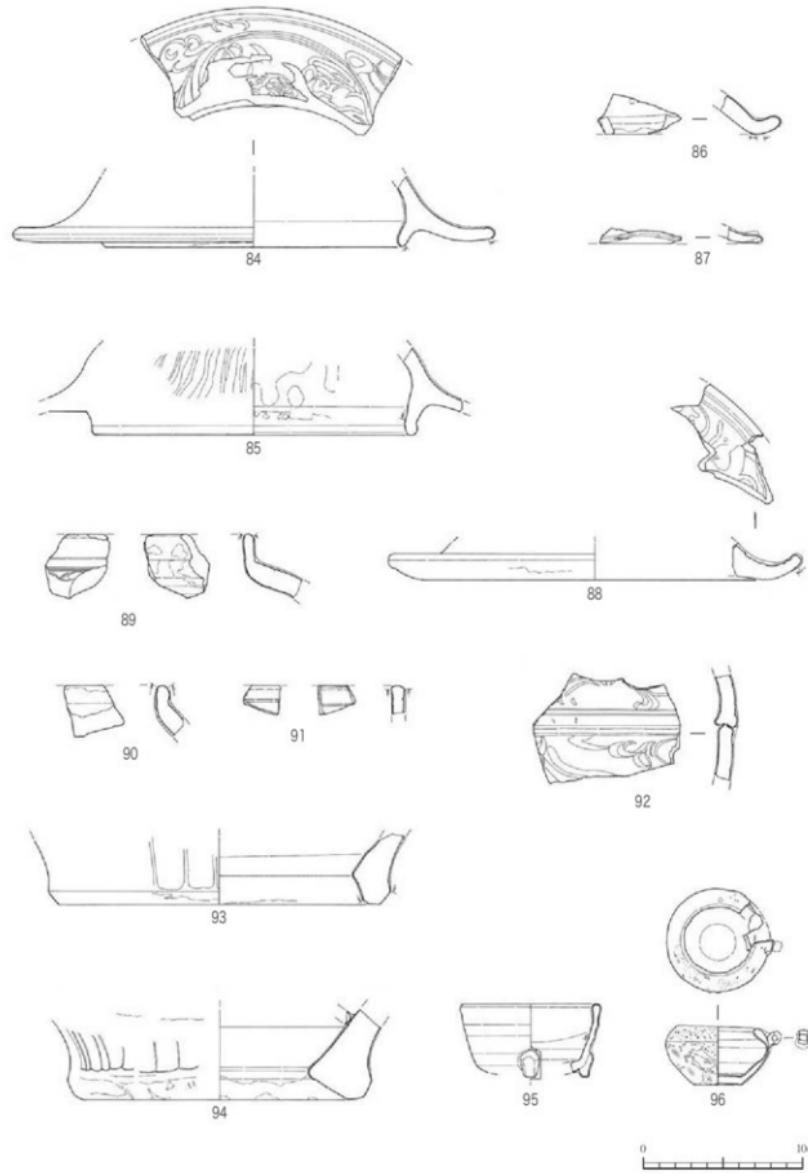


0 10cm

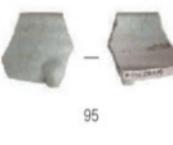
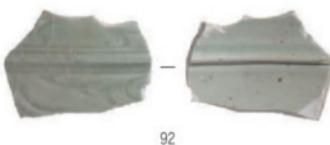
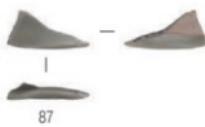
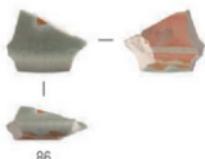
第53図 中国産青磁6



图版40 中国产青磁6



第54図 中国産青磁7



93



94



95



96

图版41 中国产青磁7

第2節 中国産白磁（第11～15表、第55～57図、図版42～44）

中国産白磁は総数592点出土しており、器種は碗・鉢・小碗・皿・小杯・瓶・壺・香炉・散蓮華が確認されている。年代は14世紀～19世紀頃まで幅広いが、碗及び皿類の大半や袋物は明代が多く、碗・皿の一部や小杯、散蓮華などが清代に位置づけられる。以下に各器種の分類概念を記し、個々の観察所見は第11～15表に譲る。

1. 碗（97～105、110～116、118～120）

A類：高台内削りの浅い厚手のもの。いわゆるビロースクタイプである（97、98）。

B類：口縁部が外反するもの。器肉は薄く成形も丁寧である（100～105）。

C類：口縁部が直口する粗製の白磁。内底及び外底を露胎にする（110～115）。

D類：端反口縁を呈する型造りのもの。口唇部と疊付を釉剥ぎする（118、119）。

その他：上記分類に該当しないもの。清代の製品が多い。

2. 鉢（106）

106は鉢の底部と考えられる。口縁形態は不明。外面に線彫りで文様を描く。

3. 小碗（107～109、117）

小碗は腰折で直口口縁のもの（107、108、117）と、外反口縁を呈するもの（109）がある。

4. 皿（121～147）

A類：腰折で外反口縁のもの（121、122、141）。二階殿地区（沖縄埋文2005）に多数の類例がある。

B類：直口口縁を呈する粗製の白磁（124～127）。抉入高台の皿（125、126）もある。

C類：口縁部が外反する薄手のもので、碗B類に概ね対応する（128～139）。

D類：B類に後続する粗製のもの。碗C類に対応する資料もみられる（142～145）。

その他：上記分類に該当しないもの。清代の製品が多い。

5. 小杯（148～150）

器形は端反口縁が多く、年代は明末～清代の製品がほとんどである。

6. 袋物（151～154）

瓶（151、154）と壺（152、153）を袋物としてまとめた。明代の資料が多く、外面に線彫りで文様を描くものもある。

7. その他（155、156）

155は香炉、156は散蓮華である。いずれも清代の製品と考えられる。

第11表 中国産白磁観察一覧 1

団 団版 番号	器 器種	器 形	部 位	口 径 高 台径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・糊厚・質入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第55団 団版42 97	碗	外 反	底 部	— — 5.8	内底に印花 文(蓮花文)。	灰オリーブ色の釉 を内底から外面腰 部まで施釉。	灰白色で 細かい。	輥埴成形。福建産で 14c後~15c前。	11	搅乱
第55団 団版42 98	碗	外 反	底 部	— — 4.7	無文。	透明釉を内底から 高台外面まで施釉。	灰白色で 緻密。	輥埴成形。福建産で 14c後~15c前。	19	E-5 6層
第55団 団版42 99	碗	—	底 部	— — 6.8	無文。	灰白色の釉を内底 から豊付に施釉後、 豊付を釉剥ぎ。 両面に細かい質入。	灰白色で 細かい。	輥埴成形。景德鎮窯 で14c後~15c。	19	B-4 基壇状遺構 表面
第55団 団版42 100	碗	口 折	口 綠 部	13.6 — —	無文。	明緑灰色の釉を 両面に施釉。	白色で緻密。	輥埴成形。景德鎮窯 で15c後~16c。	11	I-6 基壇東
第55団 団版42 101	碗	外 反	口 綠 部	14.8 — —	無文。	灰白色の釉を 両面に施釉。	白色で緻密。	輥埴成形。景德鎮窯 で15c後~16c。	11	I-9 南側
第55団 団版42 102	碗	外 反	口 綠 部	— — —	無文。	白色の釉を 両面に施釉。	白色で緻密。	輥埴成形。景德鎮窯 で15c後~16c。	11	搅乱
第55団 団版42 103	碗	—	底 部	— — 5.2	無文。	白色の釉を両面 に施釉後、豊付を 釉剥ぎ。	白色で緻密。	輥埴成形。景德鎮窯 で16c前。	19	A-1 石積み6 西側上層
第55団 団版42 104	碗	—	底 部	— — 5.6	無文。	透明釉を内底から 豊付・外底に施釉 後、豊付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	輥埴成形。景德鎮窯 で15c後~16c。	11	I-9 南側
第55団 団版42 105	碗	外 反	口 下 底	12.4 5.8 4.8	無文。	灰白色の釉を内底 から豊付・外底に施 釉後、豊付を釉剥ぎ。 両面に細かい質入。	白色で緻密。	質入は意図のか。 輥埴成形。景德鎮窯 で15c後~16c初。	19	B-4 基壇状遺構 溝中+搅乱
第55団 団版42 106	鉢	—	底 部	— — —	外面に 蓮弁文と 二重圓線。	明緑灰色の釉を 両面に施釉後、 豊付を釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	輥埴成形。高台内に 砂が付着。景德鎮窯 で15c~16c前。	11	搅乱
第55団 団版42 107	小 碗	腰 折	口 下 底	8.0 3.9 2.8	無文。	透明釉を全面に 施釉後、豊付と 内底を釉剥ぎ。	白色で緻密。	輥埴成形。景德鎮窯 で16c後。	11	搅乱
第55団 団版42 108	小 碗	腰 折	口 下 底	10.2 — —	外面に貼付 の突帯文。	透明釉を両面に 施釉。	白色で緻密。	輥埴成形。景德鎮窯 で15c後~16c。	11	I-6 基壇東 +搅乱

第12表 中国産白磁観察一覧2

団 団版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 高 台 径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範圍・質入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第55団 団版42 109	小 碗	外 反	口 緑 部	8.6 — —	無文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	纏織成形。景德鎮窯 で15c後～16c。	19	B-4 黄褐色土
第55団 団版42 110	碗	直 口	口 底 部	13.3 4.6 5.4	内底に雷文 +「堂」銘。	浅黄色の釉を内 面胴部から外面 腰部まで施釉。	淡黄色で やや細かい。	纏織成形。 福建・広東系で 15c後～16c前。	19	A-1 石積み6 西側上層
第55団 団版42 111	碗	直 口	底 部	— — 5.8	無文。	灰黄色の釉を内 面胴部から外面 腰部まで施釉。	淡黄色で やや細かい。	纏織成形。 福建・広東系で 15c後～16c前。	19	A-1 石積み6 西側上層
第55団 団版42 112	碗	直 口	底 部	— — 5.7	無文。	灰黄色の釉を内 面胴部から外面 腰部まで施釉。	淡黄色で やや細かい。	纏織成形。 福建・広東系で 15c後～16c前。	19	A-1 石積み6 西側上層
第55団 団版42 113	碗	直 口	口 緑 部	13.2 — —	無文。	明オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。	灰白色で 細かい。	纏織成形。 福建産で16c。	11	搅乱
第55団 団版42 114	碗	直 口	口 緑 部	14.4 — —	無文。	灰白色の釉を両 面に施釉。	灰白色で 細かい。	纏織成形。 福建・広東系で 16c後。	19	A-1 石積み6 西側上層
第55団 団版42 115	碗	直 口	口 緑 部	16.2 — —	無文。	灰白色の釉を両 面に施釉。	灰白色で 細かい。	纏織成形。 福建・広東系で 16c後～17c前。	19	B-5 シーリ内 木炭層
第55団 団版42 116	碗	直 口	口 緑 部	11.6 — —	無文。	透明釉を内面胴 部から外面腰部 まで施釉。	白色で緻密。	纏織成形。 福建産で17c。	19	搅乱
第55団 団版42 117	小 碗	直 口	口 緑 部	8.5 — —	無文。	白色の釉を両面 に施釉。	白色で緻密。	纏織成形。 福建産？で17cか。	11	J-9 西側
第55団 団版42 118	碗	端 反	口 底 部	9.3 4.4 4.8	無文。	透明釉を全面に 施釉後、口唇部と 盤付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	型成形。徳化窯で 18c後～19c。	11	搅乱
第55団 団版42 119	碗	端 反	口 緑 部	8.9 — —	無文。	透明釉を両面に 施釉後、口唇部を 釉剥ぎ。	白色で緻密。	型成形。徳化窯で 18c後～19c。	19	B-1 石積み4 裏込内(黒)
第55団 団版42 120	碗	直 口	口 緑 部	— — —	外面に 蓮弁文。	透明釉を両面に 施釉。	白色で緻密。	纏織成形。 福建産？で清代か。	11	搅乱

第13表 中国産白磁観察一覧 3

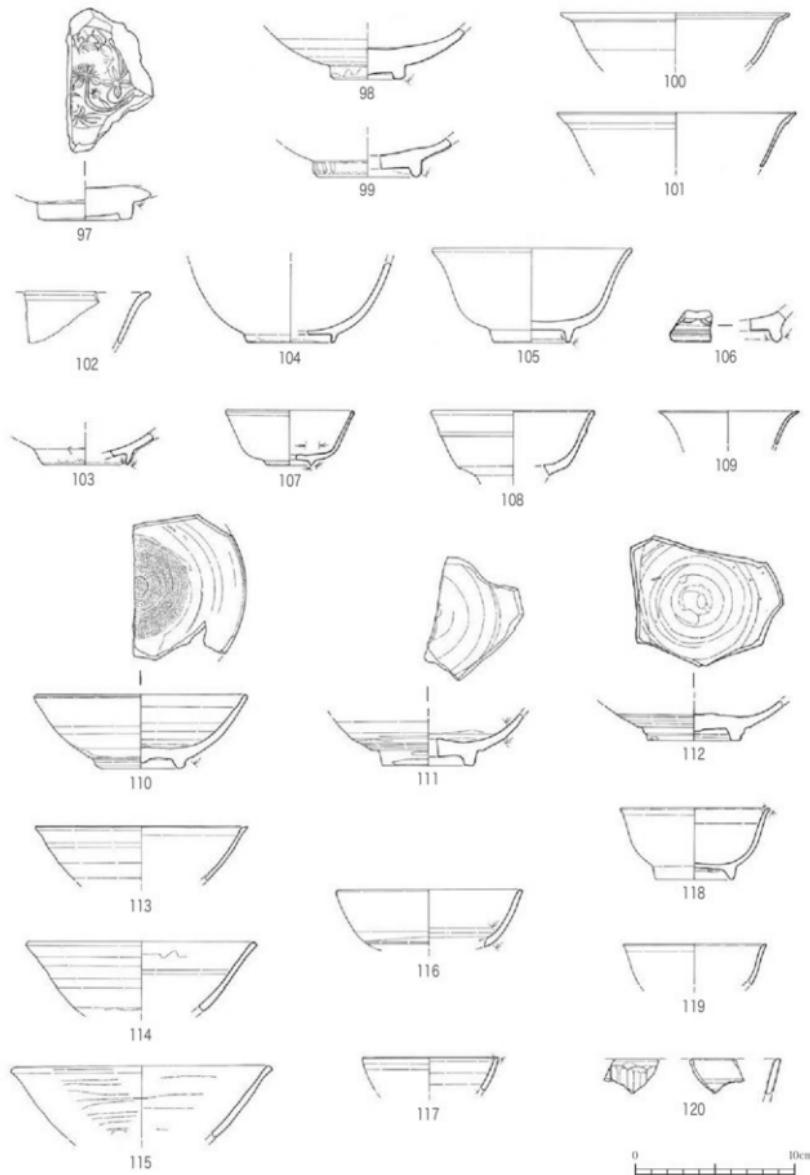
団 団版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 高 台径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範圍・質入)	素地 (色・質・混和)	所見		
第56団 団版43 121	皿	腰 折	口 緑 部	10.8 — —	無文。	灰白色の釉を両面 に施釉。	灰白色で 緻密。	撇輪成形。全体的に 被熟。景德鎮窯で 14c~15c。	19	B-4 基壇状造構 表面
第56団 団版43 122	皿	腰 折	口 緑 部	13.8 — —	無文。	灰白色の釉を両面 に施釉。	灰白色で 緻密。	撇輪成形。景德鎮窯 で14c末~15c初。	11	搅乱
第56団 団版43 123	皿	端 反	口 緑 部	13.6 — —	無文。	灰白色の釉を内底 から外面腰部まで 施釉。	灰白色で 細かい。	撇輪成形。福建産で 14c後~15c前。	11	搅乱
第56団 団版43 124	皿	直 口	口 緑 部	14.4 — —	無文。	灰白色の釉を両面 に施釉後、口唇部 を釉剥ぎか。	灰白色で 細かい。	撇輪成形。福建産で 14c~15c。	19	A-1 石積み6 西側上層
第56団 団版43 125	皿	抉 高 台	口 底	9.4 2.1 4.3	無文。	透明釉を内底から 外面脚部まで施釉。 全体に細かい質入。	白色で 細かい。	撇輪成形。内底に目跡 が2箇所残り、外面脚 部に頬足の破片が溶着。 福建産で15c~16c前。	19	搅乱
第56団 団版43 126	皿	抉 高 台	底 部	— — 4.6	無文。	淡黄色の釉を両面 に施釉。	灰白色で やや細かい。	撇輪成形。内底に目跡 が4箇所残る。 福建産で15c~16c前。	11	I-6 基壇東+搅乱
第56団 団版43 127	皿	直 口	口 緑 部	— — —	無文。	灰白色の釉を内底 から外面腰部まで 施釉。	灰白色で 細かい。	撇輪成形。福建産で 15c中~15c後。	11	搅乱
第56団 団版43 128	皿	外 反	口 緑 部	— — —	内底に陰圓 線1条。	灰白色の釉を内底 から外面腰部まで 施釉。	灰白色で 細かい。	撇輪成形。福建産で 15c中~15c後。	11	搅乱
第56団 団版43 129	皿	外 反	口 底	15.6 3.5 9.3	無文。	灰白色の釉を内底 から豊付・高台内 面に施釉後、豊付 を釉剥ぎ。	白色で 緻密。	撇輪成形。景德鎮窯 で15c後~16c前。	11	搅乱
第56団 団版43 130	皿	外 反	口 底	11.2 2.2 6.4	無文。	白色の釉を内底 から豊付・高台内 面に施釉後、豊付 を釉剥ぎ。	灰白色で 緻密。	撇輪成形。 豊付に砂が付着。 景德鎮窯で16c。	11	搅乱
第56団 団版43 131	皿	外 反	口 緑 部	15.0 — —	無文。	灰白色の釉を両面 に施釉。全体に細 かい質入。	灰白色で 細かい。	質入は意図のか。 撇輪成形。景德鎮窯 で15c後~16c前。	11	J-6 基壇東
第56団 団版43 132	皿	外 反	口 緑 部	15.5 — —	無文。	灰白色の釉を両面 に施釉。	灰白色で 細かい。	撇輪成形。景德鎮窯 で16c。	19	B-1 石積み6 西側上層

第14表 中国産白磁観察一覧 4

団 団版 番号	器 器種	器 形	部 位	口 径 器 高 台 径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	軸 (色・糊糊・質入)	素 地 (色・質・混和材)	所 見		
第56団 団版43 133	皿	外 反	底 部	— — 9.1	無文。	白色の軸を両面 に施釉後、豊付を 釉剥ぎ。	白色で緻密。	輥埴成形（型成形の 可能性あり）。景德 鎮窯？で15c後～ 16c前か。	11	搅乱
第56団 団版43 134	皿	外 反	底 部	— — 8.6	無文。	灰白色の軸を内底 から豊付・高台内 面に施釉後、豊付 を釉剥ぎ。両面に 細かい質入。	灰白色で 細かい。	質入は意図のか。 輥埴成形。景德鎮窯 で15c後～16c前。	19	搅乱
第56団 団版43 135	皿	外 反	底 部	— — 11.0	無文。	灰白色の軸を両面 に施釉後、豊付を 釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	輥埴成形。高台内 に砂が付着。景德鎮窯 で16c。	19	搅乱
第56団 団版43 136	皿	外 反	底 部	— — 10.8	無文。	白色の軸を内底 から豊付・高台内 面に施釉後、豊付 を釉剥ぎ。	白色で緻密。	輥埴成形。豊付に砂 が付着。景德鎮窯で 15c後～16c前。	11	搅乱
第56団 団版43 137	皿	外 反	底 部	— — 8.1	無文。	灰白色の軸を内底 から豊付・高台内 面に施釉後、豊付 を釉剥ぎ。両面に 細かい質入。	灰白色で 緻密。	質入は意図のか。 輥埴成形。景德鎮窯 で15c後～16c前。	11	搅乱
第56団 団版43 138	皿	外 反	底 部	— — 6.3	無文。	灰白色の軸を両面 に施釉後、豊付を 釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	輥埴成形。豊付に砂 が付着。景德鎮窯で 16c。	19	A-1 石積み6 西側上層
第56団 団版43 139	皿	外 反	底 部	— — 6.6	無文。	灰白色の軸を両面 に施釉後、豊付を 釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	輥埴成形。 内底と豊付に砂が 付着。景德鎮窯で 15c後～16c前。	11	搅乱
第56団 団版43 140	皿	—	底 部	— — 13.0	無文。	灰白色の軸を内底 から豊付・高台内 面に施釉後、豊付 を釉剥ぎ。両面に 細かい質入。	灰白色で 細かい。	質入は意図のか。 輥埴成形。景德鎮窯 で15c後～16c前。	11	搅乱
第56団 団版43 141	皿	腰 折	口 縁 部	8.0 — —	無文。	白色の軸を両面 に施釉。	白色で緻密。	輥埴成形。景德鎮窯 で15c後～16c前。	11	搅乱
第57団 団版44 142	皿	甚 筋 底	口 下 底	9.9 2.6 4.1	無文。	透明釉を内面胴 部から外面胴部 まで施釉。	灰白色で 細かい。	輥埴成形。 福建産で16c。	11	J-6 基壇東

第15表 中国産白磁観察一覧 5

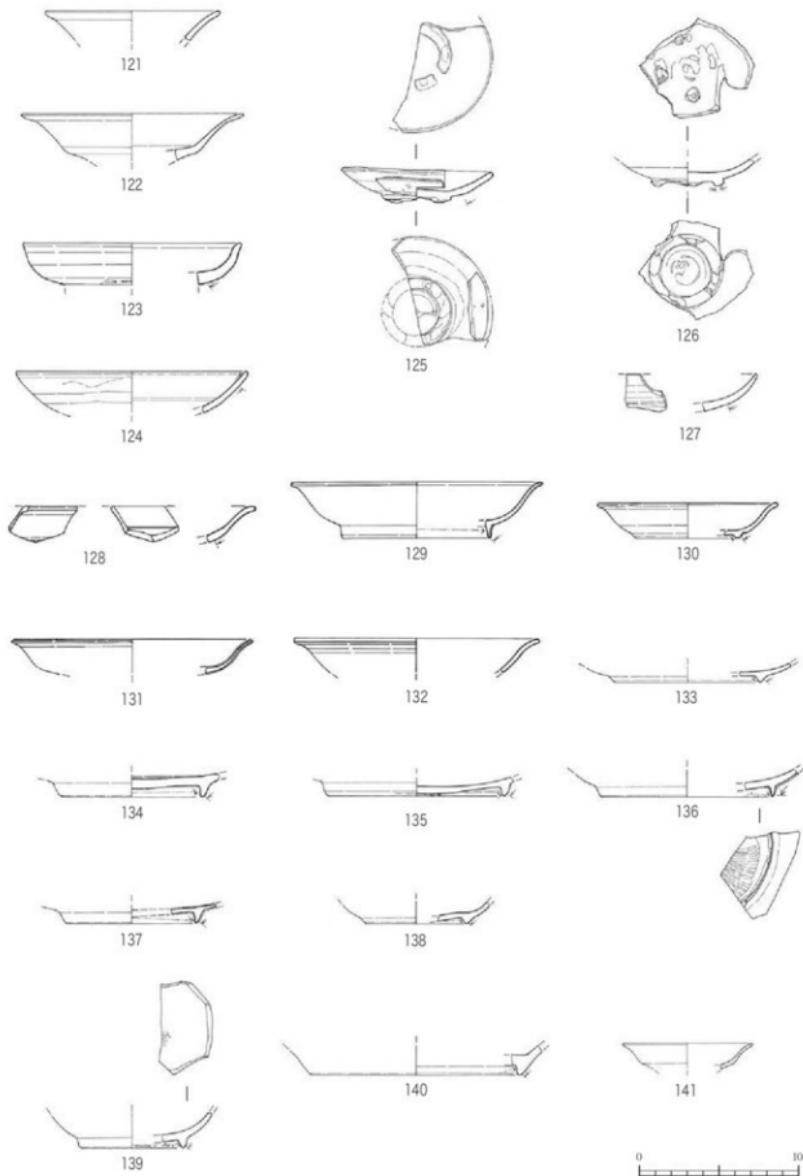
団 団版 番号	器 器種	器 形	部 位	口 径 高 台径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・糊厚・質入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第57団 団版44 143	皿	直 口	口 縁 部	9.2 — —	無文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で 細かい。	織輪成形。 福建・広東系で 16c後～17c前。	19	B-4 シリ内 黒褐色土
第57団 団版44 144	皿	直 口	口 縁 部	8.0 — —	無文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	織輪成形（型成形の可能性あり）。 景德鎮窯で15c～16c。	19	B-4 黄褐色土
第57団 団版44 145	皿	直 口	口 縁 部	— — —	無文。	灰白色の釉を内面 側部から外面側部まで施釉。	灰白色で 細かい。	織輪成形。 福建・広東系で 15c後～16c。	19	A-1 石積み6 西側上層
第57団 団版44 146	皿	端 反	口 縁 部	8.6 — —	無文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	型成形。徳化窯で 18c後～19c。	11	搅乱
第57団 団版44 147	皿	直 口	口 底 底	12.0 2.2 7.0	無文。	灰白色の釉を全面に 施釉後、豊付を 釉剥ぎ。	白色で緻密。	織輪成形。徳化窯 (日本産の可能性 あり)で19c。	11	搅乱
第57団 団版44 148	小 杯	—	底 部	— — 3.1	無文。	灰白色の釉を内底から 豊付・外底まで施 釉後、豊付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	織輪成形（型成形の可能性あり）。景德 鎮窯で16c後～17c前。	11	搅乱
第57団 団版44 149	小 杯	端 反	口 底 底	6.2 3.5 2.4	無文。	透明釉を内底から 豊付まで施釉後、 豊付を釉剥ぎ。	灰白色で 緻密。	型成形。 徳化窯で17c。	11	搅乱
第57団 団版44 150	小 杯	外 反	口 底 底	3.5 1.9 1.6	無文。	透明釉を全面に 施釉後、口唇部と 豊付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	型成形。高台内面に 砂が付着。徳化窯で 18c後～19c。	11	J-9 灰混層
第57団 団版44 151	瓶	—	口 縁 部	6.0 — —	外面口縁部下 位を蓮瓣状? に形成。	透明釉を両面に 施釉。	白色で緻密。	織輪成形（型成形の可能性あり）。景德 鎮窯?で年代不明。	11	I-7 10~20
第57団 団版44 152	壺 会 壺	口 縁 部	— — —	—	外面肩部に 模唐草文。	明オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。	白色で緻密。	織輪成形。全面的に 被然。景德鎮窯で 15c～16c。	11	搅乱
第57団 団版44 153	壺	—	底 部	— — 6.5	無文。	薄明緑灰色の釉 を内底から外面 側部まで施釉。	灰白色で やや細かい。	織輪成形。福建産で 13c～14cか。	11	I-6 基壇東
第57団 団版44 154	瓶 壺 春	玉 壺 春	肩 部	— — —	外面肩部にラマ 式蓮弁文+宝相 草唐草文。	明オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。	灰白色で 細かい。	織輪成形。内面頭部に 接ぎ目あり。景德 鎮窯で15c中～16c前。	11	搅乱
第57団 団版44 155	香 炉	—	口 縁 部	— — —	無文。	明緑灰色の釉を 内面頭部から外面 に施釉。	白色で緻密。	織輪成形。 景德鎮窯?で清代。	11	搅乱
第57団 団版44 156	散 蓮 華	—	肩 部	— — —	無文。	灰白色の釉を両面 に施釉。	白色で緻密。	型成形か。外底に 砂が付着。福建産で 17c～18c。	19	搅乱



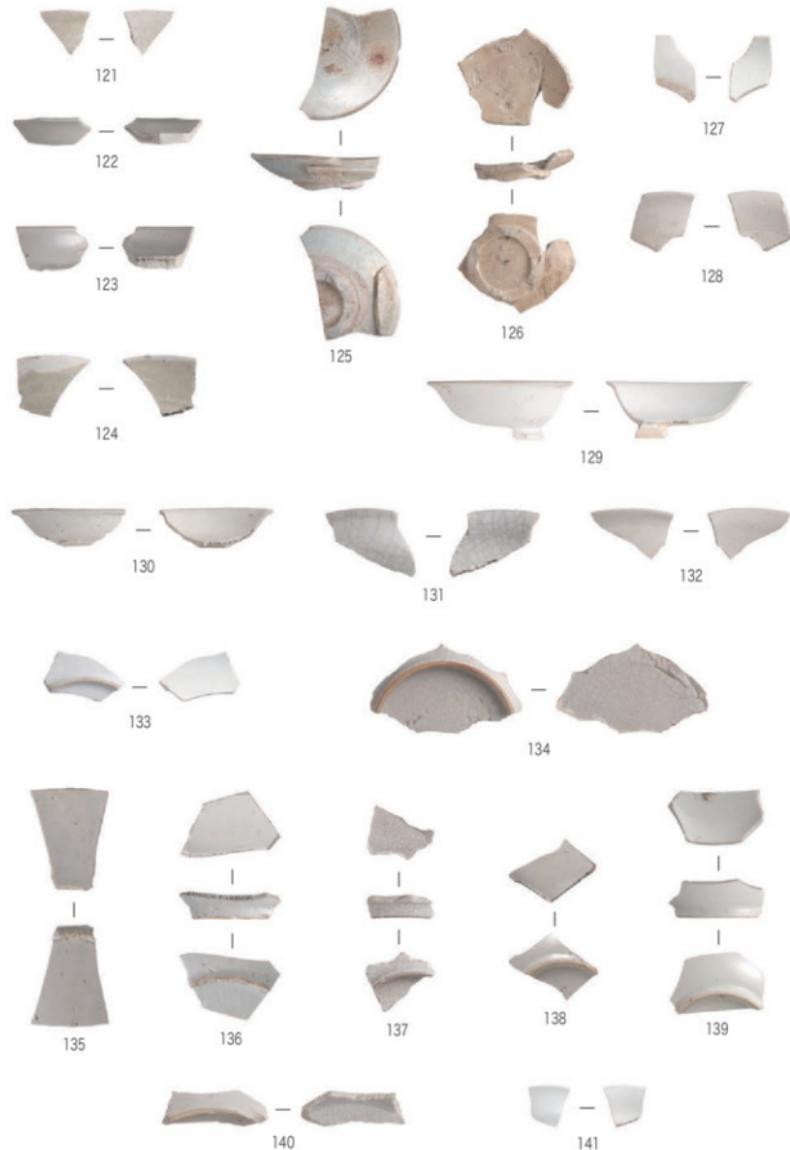
第55図 中国産白磁 1



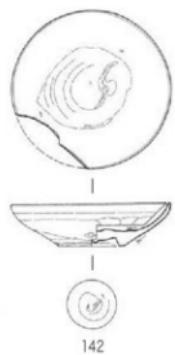
图版42 中国产白磁 1



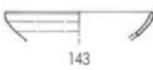
第56図 中国産白磁2



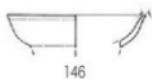
图版43 中国产白磁2



142



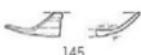
143



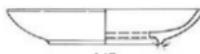
146



144



145



147



148



149



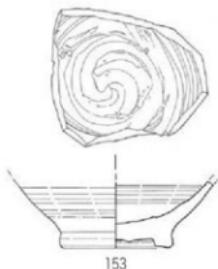
150



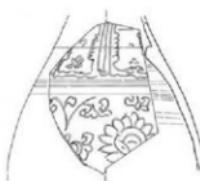
151



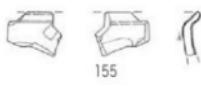
152



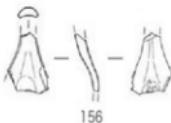
153



154



155



156



第57図 中国産白磁3



图版44 中国产白磁 3

第3節 中国産染付（第16～24表、第58～64図、図版45～51）

中国産の染付は総数2,249点出土している。器種は碗・小碗・皿・小杯・鉢・瓶・散蓮華などがあるが、大半を碗類が占める。年代的には15世紀～19世紀までのものがみられるが、いわゆる明末清初（16世紀後半～17世紀前半）に位置づけられる製品が一定量確認されており、当該期の陶磁器様相を知る上で重要と考えられる。以下に器種ごとの分類概念を記し、個々の詳細は観察表に提示する。

1. 碗（157～196）

A類：外反口縁のもの。景德鎮窯産で明代（157～163、196）。

B類：口縁部が直口するもの（164～172）で、腰折（165～168、170）や饅頭心（172）を含む。
景德鎮窯産で明代。

C類：口縁部が直口する粗製品。漳州窯又は福建・広東産で明末清初（173～176）。

D類：口縁形態は様々だが統じて器肉が薄く、成形も丁寧なもの。景德鎮窯産で明末清初（177、178）と清代（192～195）に大別される。

E類：福建・広東産の粗製のもの。清代（179～181）。

F類：徳化窯又は福建産のもの。清代（182～191）。

2. 小碗（197～219、233）

A類：直口口縁のもの。碗B類に対応する。景德鎮窯産で明代（198、207）。

B類：外反口縁で蛇の目高台を持つもの。景德鎮窯産で明末清初（199～201）。

C類：端反または直口口縁で轆轤成形と型成形がある。徳化窯又は福建産で清代（202～204、210、211、213～215）。

D類：薄手の端反または直口口縁。景德鎮窯産で清代（205、206、208、209、212、216～219）。

3. 皿（220～232、234、236～240）

A類：外反口縁のもの（224～229、237）と、基筒底で直口口縁（239、240）のものがある。
景德鎮窯産で明代。

B類：轆轤成形で端反もしくは直口口縁（220～223、236、238）のものと、型造りのもの（233、234）がある。徳化窯又は福建産で清代。

C類：上記分類に該当しないもの。明末清初の製品が多い（230～232）。

4. その他（235、241～256）

小杯（241～246）は端反や直口口縁が多く、景德鎮窯産で明末清初。鉢（235、247）は外反口縁と考えられるもので、景德鎮窯産で明代。瓶（248～252）はほとんどが景德鎮窯産だが明代～清代まで幅広い。散蓮華（253）は徳化窯、蓋（254～256）は景德鎮窯を産地とし、いずれも清代に位置づけられる。

第16表 中国産染付観察一覧1

団 団版番号	器 器種	器 形	部 位	口径 底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・質)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第58団 団版45 157	碗	外 反	口 底	15.1 6.2 5.2	外面に花鳥文、内底に草花文。	灰白色の釉を内底から豊付・外底まで施釉後、豊付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	輦輪成形。景德鎮窯で16c中～後。	11	搅乱
第58団 団版45 158	碗	外 反	口 縁 部	15.0 — —	外面に宝唐草文?+如意頭繫文、内底文様は不明。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	輦輪成形。景德鎮窯で16c中～後。	11	I-6 基壇束
第58団 団版45 159	碗	外 反	口 底	13.4 6.6 5.8	外面に花卉文、内底に草花文。	明緑灰色の釉を内底から豊付・外底まで施釉後、豊付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	輦輪成形。景德鎮窯で15c前～中。	11	搅乱
第58団 団版45 160	碗	外 反	口 縁 部	16.8 — —	外面に鳳凰文、内面に四方禪文。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	輦輪成形。景德鎮窯で16c後。	19	B-1 石積み6 西側上層
第58団 団版45 161	碗	外 反	底 部	— — 5.3	外面に蘆芝雲文+折枝文、内底に牡丹文。	灰白色の釉を両面に施釉後、豊付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	輦輪成形。景德鎮窯で15c前～中。	11	J-10 (20~30)
第58団 団版45 162	碗	外 反	口 縁 部	— — —	外面に三友文?、内面に四方禪文。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	輨輪成形。景德鎮窯で16c後か。	11	I-6 基壇束
第58団 団版45 163	碗	外 反	口 縁 部	12.0 — —	外面に花蝶文。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	輨輪成形。景德鎮窯で17c前。	19	B-4 シリーズ内黒褐色土
第58団 団版45 164	碗	直 口	口 底	13.6 6.5 5.0	外面に石榴唐草文、内面に四方禪文、内底に石榴文。	灰白色の釉を内底から豊付・外底まで施釉後、豊付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	輨輪成形。景德鎮窯で15c後～16c初。	19	搅乱
第58団 団版45 165	碗	腰 折	口 底	12.8 6.3 5.4	外面に波瀾文+花鳥文?、内底に法螺貝文。	明緑灰色の釉を内底から豊付・外底まで施釉後、豊付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	輨輪成形。景德鎮窯で16c前。	11	I-6 基壇束
第58団 団版45 166	碗	腰 折	口 底	13.0 6.3 5.2	外面に白抜き牡丹文、外底に「宣德年造」款、内面に四方禪文、内底に白抜き牡丹文。	明緑灰色の釉を内底から豊付・外底まで施釉後、豊付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	輨輪成形。景德鎮窯で15c後～16c後。	11	搅乱
第58団 団版45 167	碗	腰 折	口 縁 部	12.8 — —	外面に波瀾文+アラベスク文。	明オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	輨輪成形。景德鎮窯で16c前。	19	A-1 石積み6 西側上層

第17表 中国産染付観察一覧2

団 団版 番号	器 器種	器 形	部 位	口 径 器 底 径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第58団 団版45 168	碗	腰 折	口 縁 部	12.4 — —	外面に波瀾文 +アラベスク文。	明緑灰色の釉を 両面に施釉。	灰白色で 細かい。	繪輪成形。景德鎮窯 で16c前。	19	A-1 石積み6 西側上層
第58団 団版45 169	碗	直 口	口 縁 部	15.0 — —	外面に雲芝雲 文か。	灰白色の釉を 両面に施釉。	灰白色で 緻密。	繪輪成形。景德鎮窯 で16c。	19	B-5 シーリ内黒褐色土
第59団 団版46 170	碗	腰 折	底 部	— — 5.4	外面にアラベ スク文、内底 に渦花文。	灰白色の釉を 内底から盤付・ 外底まで施釉後、 盤付を釉剥ぎ。	橙色で やや細かい。	繪輪成形。景德鎮窯 系で16c中～後。	19	B-1 石積み6 西側上層
第59団 団版46 171	碗	直 口	底 部	— — 5.0	外面腰部に蕉 葉文、外底に 銘款、内底に 法螺貝文。	明緑灰色の釉を 内底から盤付・ 外底まで施釉後、 盤付を釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	繪輪成形。景德鎮窯 で16c。	11	搅乱
第59団 団版46 172	碗	直 口	底 部	— — 5.4	外面側部に草 花文?、外底に 字款、内底に白 抜き野蒼文か。	明緑灰色の釉を 内底から盤付・ 外底まで施釉後、 盤付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	繪輪成形。景德鎮窯 で16c中～後。	11	I-6 基壇束
第59団 団版46 173	碗	直 口	口 底	15.1 6.1 7.2	外面に花唐草 文、呉須の発色 は不良。	淡黄色の釉を 内面側部から 外面腰部まで 施釉。	淡黄色で やや細かい。	繪輪成形。内底に目 跡?が残る。全体に 細かい貫入。福建・ 広東系で17c前。	19	B-5 シーリ内黒褐色土
第59団 団版46 174	碗	直 口	口 縁 部	15.3 — —	外面に花唐草 文+宝文。呉須 の発色は不良。	灰白色の釉を 両面に施釉。	灰白色で 細かい。	繪輪成形。福建・広東 系で16c後～17c前。	19	B-4 シーリ内 炭泥粘土層
第59団 団版46 175	碗	直 口	口 底	15.0 6.0 6.5	両面に團線。 呉須の発色は 不良。	灰白色の釉を 内面側部から 外面腰部まで 施釉。	灰白色で 細かい。	外面全体に繪輪成形時 の痕跡?が残る。内底に 砂?が付着。福建・広東 系で16c後～17c前。	11	搅乱
第59団 団版46 176	碗	直 口	口 縁 部	15.1 — —	両面に團線。 呉須の発色は 不良。	明オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。	灰白色で 細かい。	繪輪成形。福建・広東 系で16c後～17c。	19	搅乱
第59団 団版46 177	碗	端 反	口 縁 部	14.6 — —	外面に白抜き 菊唐草文、内 面に菊瓣文か。	明緑灰色の釉を 両面に施釉。	白色で緻密。	繪輪成形。景德鎮窯 で17c。	11	搅乱
第59団 団版46 178	碗	鈎 縁	口 縁 部	12.4 — —	外面に鳥文か。	明緑灰色の釉を 両面に施釉。	白色で緻密。	繪輪成形。 景德鎮窯で17c前。	19	B-5 シーリ内 黒褐色土

第18表 中国産染付観察一覧3

図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 器 底 径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第59図 図版46 179	碗	直 口	口 底	12.0 5.4 6.4	外面に草花文。	灰白色の釉を内面 胴部から高台外側 ・外底まで施釉。 内底中央にも施釉。	灰白色で 細かい。	繪輪成形。 福建・広東系で 17c後~18c前。	11	I-9 南側
第59図 図版46 180	碗	直 口	口 底	13.2 5.8 7.2	外面に草花文。	明緑灰色の釉を 内面胴部から外面腰部 まで施釉。 内底中央にも施釉。	灰白色で 細かい。	繪輪成形。内底に 目跡?が残る。 福建・広東系で 17c後~18c前。	11	搅乱
第59図 図版46 181	碗	直 口	底 部	- - 7.2	不明。	灰白色の釉を内面 胴部から外面腰部 まで施釉か。	灰白色で 細かい。	繪輪成形。内底に 目跡?が残る。 福建・広東系で 17c後~18c前。	11	搅乱
第60図 図版47 182	碗	端 反	口 綠 部	14.5 - -	外面に梅花文 +寿字文。	灰白色の釉を両面 に施釉。	灰白色で 細かい。	繪輪成形。 福建産で18c。	19	搅乱
第60図 図版47 183	碗	端 反	口 綠 部	12.8 - -	外面に梅花文 +寿字文 +蓮弁文。	明オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。	灰白色で 細かい。	繪輪成形。 福建産で18c。	11	搅乱
第60図 図版47 184	碗	端 反	口 綠 部	13.2 - -	外面に梅花文 +鳳凰文+蓮 弁文、呉須の 発色は不良。	灰白色の釉を両面 に施釉。	灰白色で やや細かい。	繪輪成形。 福建産で18c。	11	I-7 30~40 +搅乱
第60図 図版47 185	碗	端 反	口 綠 部	11.6 - -	外面に鳳凰 文?+蓮弁文。	灰白色の釉を両面 に施釉。	白色で緻密。	繪輪成形。 福建産で18c。	11	搅乱
第60図 図版47 186	碗	端 反	口 綠 部	13.3 - -	外面に雲龍文。	灰白色の釉を両面 に施釉。	白色で緻密。	繪輪成形。 福建産で18c。	11	J-8 茶褐色灰混刷
第60図 図版47 187	碗	端 反	口 綠 部	12.0 - -	外面に雲龍文。	灰白色の釉を両面 に施釉。	白色で緻密。	繪輪成形。 徳化窯?で18cか。	11	搅乱
第60図 図版47 188	碗	直 口	口 綠 部	12.6 - -	外面に人物文。	明緑灰色の釉を 両面に施釉。	白色で緻密。	繪輪成形。 徳化窯?で18cか。	11	搅乱
第60図 図版47 189	碗	直 口	口 底	14.7 6.6 6.7	外面に丸文 +折枝文? 外底に「仁」 字、内底に草花文。	灰白色の釉を全面 に施釉後、豊付を 剥離ぎ。	灰白色で 細かい。	繪輪成形。 福建産で18c。	11	搅乱

第19表 中国産染付観察一覧4

図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 器 底 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素 地 (色・質・混和材)	所 見		
第60図 図版47 190	碗	端 反	底 部	— — 6.6	外面に草花文+蓮文、外底に銘款、内底に草花文。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、呉付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	搅乱
第60図 図版47 191	碗	—	底 部	— — 7.0	外面に玉取獅子文、外底に銘款、内底に玉取獅子文。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、呉付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 呉付に砂が付着。 福建産で18c。	11	搅乱
第60図 図版47 192	碗	外 反	口 縁 部	12.4 — —	外面に草花文。	透明釉を両面に施釉。	白色でやや細かい。	轆轤成形。 景德镇窯で18c後～19c前。	11	搅乱
第60図 図版47 193	碗	外 反	口 縁 底	14.6 6.5 5.7	外面に牡丹唐草文+ラマ式蓮弁文、外底に銘款、内面に花唐草文、内底に草花文。	明緑灰色の釉を全面に施釉後、呉付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 全体的に被熱。 景德镇窯で19c前。	19	搅乱
第60図 図版47 194	碗	外 反	口 縁 部	12.6 — —	外面に牡丹唐草文、内面に花唐草文。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。 景德镇窯で19c前。	11	J-9 遺構上西+搅乱
第60図 図版47 195	碗	直 口	口 縁 底	14.1 6.9 5.4	外面に鳳凰文?+八 卦文+波瀾文、外底 に「大清嘉慶年製」 款、内底に四方篆文、 内底に波瀾文+花文。	灰白色の釉を全面に施釉後、呉付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 景德镇窯で19c前。	11	J-9 灰混層
第61図 図版48 196	碗	—	底 部	— — 5.1	内底に樹鳥文。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、呉付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。 景德镇窯で15c前～中。	11	搅乱
第61図 図版48 197	小 碗	—	底 部	— — 6.5	外面文様は不明、外底に銘款、内底に花卉文。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、呉付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 呉付に砂が付着。 景德镇窯で16c末～17c前。	19	A-1 石積み6 西側上層
第61図 図版48 198	小 碗	直 口	口 縁 底	10.0 5.4 4.2	外面に宝相華唐草文、内底に「福」鉢。	明緑灰色の釉を内底から呉付・外底まで施釉後、呉付を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。全体に細かい貫入(被熱か)。 景德镇窯で15c後～16c前か。	11	J-10 (20～30)
第61図 図版48 199	小 碗	外 反	口 縁 底	9.4 4.9 4.2	外面に野菜文。	灰白色の釉を内底から呉付まで施釉後、呉付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。景德镇窯で1630～40年代。	19	B-5 シリーズ内里褐色土 +B-5 シリーズ内赤褐色 土1(畦)

第20表 中国産染付観察一覧5

図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 器底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第61図 図版48 200	小 碗	端 反	口 緑 部	10.6 — —	外面に花卉文か。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	施釉成形。景德鎮窯で17c前。	11	J-6 基壇東+搅乱
第61図 図版48 201	小 碗	端 反	口 緑 部	9.2 — —	外面に草花文か。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	施釉成形。景德鎮窯で1630~40年代。	19	B-4 シーリ内黒褐色土
第61図 図版48 202	小 碗	端 反	口 緑 部	10.8 — —	外面に線描きのみの牡丹唐草文。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で細かい。	施釉成形。徳化窯?で18c。	11	I-8 20~30茶褐色 灰混層
第61図 図版48 203	小 碗	端 反	口 緑 部	9.4 — —	外面に矢羽文。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	施釉成形(型成形の可能性あり)。 徳化窯?で17c後~18cか。	11	搅乱
第61図 図版48 204	小 碗	端 反	口 緑 部	10.0 — —	外面に梵字文。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	施釉成形。 徳化窯?で18c。	11	J-9 灰混層
第61図 図版48 205	小 碗	直 口	口 緑 部	— — —	外面に連続文+花唐草文、 内面に雷文。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で細かい。	施釉成形。景德鎮窯?で18c~19cか。	11	搅乱
第61図 図版48 206	小 碗	直 口	口 緑 部	— — —	外面に草花文。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	施釉成形。景德鎮窯?で18c~19cか。	11	J-9 遺構上西
第61図 図版48 207	小 碗	腰 折	口 緑 部	8.6 — —	外面に貼付の突帶文+牡丹文	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で細かい。	施釉成形。景德鎮窯で16c後~17cか。	11	J-11 (20~30)
第61図 図版48 208	小 碗	端 反	口 緑 部	— — —	口詰(口唇部に褐釉を施釉)。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	施釉成形。 景德鎮窯で16c。	19	搅乱
第61図 図版48 209	小 碗	端 反	口 緑 部	— — —	口詰(口唇部に褐釉を施釉)。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	施釉成形。 景德鎮窯で16c後~17c前。	19	搅乱
第61図 図版48 210	小 碗	直 口	口 緑 部	7.8 — —	外面に梅文+芭蕉文か。 内底文様は不明。	灰白色の釉を両面に施釉後、 口唇部を釉剥ぎ。	白色で細かい。	型成形。徳化窯で18c後~19c。	11	I-9 南側
第61図 図版48 211	小 碗	直 口	口 緑 部	8.4 — —	外面に草花文?、内底文 様は不明。	透明釉を両面に施釉。	白色で細かい。	施釉成形。 徳化窯で17cか。	11	搅乱

第21表 中国産染付観察一覧6

団 団版番号	器種	器形	部位	口径 器底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第61団 団版48 212	小碗	一	底部	— — 4.6	内底に 草花文か。	灰白色の釉を 両面に施釉後、 盤付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。景德鎮窯 で15c後～16c前か。	11	搅乱
第61団 団版48 213	小碗	端反	底部	— — 3.6	外面に仙芝祝 寿文、外底に 銘款、内底に 草花文。	明緑灰色の釉を 両面に施釉後、 盤付を釉剥ぎ。	灰白色で やや細かい。	轆轤成形。徳化窯? で18c。	11	搅乱
第61団 団版48 214	小碗	一	底部	— — 5.0	内底に人物 文か。	灰白色の釉を 内底から盤付・ 外底まで施釉後、 盤付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 徳化窯?で17cか。	11	搅乱
第61団 団版48 215	小碗	端反	底部	— — 5.0	外面に梵字 文、外底に銘 款、内底文様 は不明。	明緑灰色の釉を 両面に施釉後、 盤付を釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。 徳化窯?で18c。	11	搅乱
第62団 団版49 216	小碗	一	底部	— — 4.6	外面に白抜き ラマ式蓮弁文。	明緑灰色の釉を 両面に施釉後、 盤付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 景德鎮窯で18cか。	11	搅乱
第62団 団版49 217	小碗	一	底部	— — 4.6	内底に鳥文。	透明釉を両面に 施釉後、盤付を 釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 景德鎮窯で17c。	19	B-5 シーリ内赤褐色 土1(旺)
第62団 団版49 218	小碗	外反	底部	— — 4.6	外面に牡丹唐 草文?、外底に 銘款、内底に 草花文。	明緑灰色の釉を 両面に施釉後、 盤付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 景德鎮窯で19c。	11	搅乱
第62団 団版49 219	小碗	外反	底部	— — 4.0	外面に牡丹唐 草文、外底に 銘款、内底に 草花文。	明緑灰色の釉を 内底から盤付・ 外底まで施釉後、 盤付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 景德鎮窯で19c。	11	J-9 遣構上西+搅乱
第62団 団版49 220	皿	端反	口 底	16.2 3.4 7.8	外面に宝文?、 内底に 山水文か。	灰白色の釉を 全面に施釉後、 盤付を釉剥ぎ。	白色で 細かい。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	搅乱
第62団 団版49 221	皿	直口	口 底	15.4 3.9 7.8	外面に鳥文?、 内面に寿字唐 草文、内底に 寿字文。	明緑灰色の釉を 全面に施釉後、 盤付を釉剥ぎ。	白色で 細かい。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	搅乱
第62団 団版49 222	皿	端反	口 底	15.4 3.2 9.0	外面に宝文、 内面に折枝 文?、内底に 龍文。	灰白色の釉を 全面に施釉後、 盤付を釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	搅乱
第62団 団版49 223	皿	端反	口 底	16.2 3.5 8.8	内面に花卉 文、内底に 草花文か。	灰白色の釉を 全面に施釉後、 盤付を釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	J-9 遣構上西+搅乱

第22表 中国産染付観察一覧7

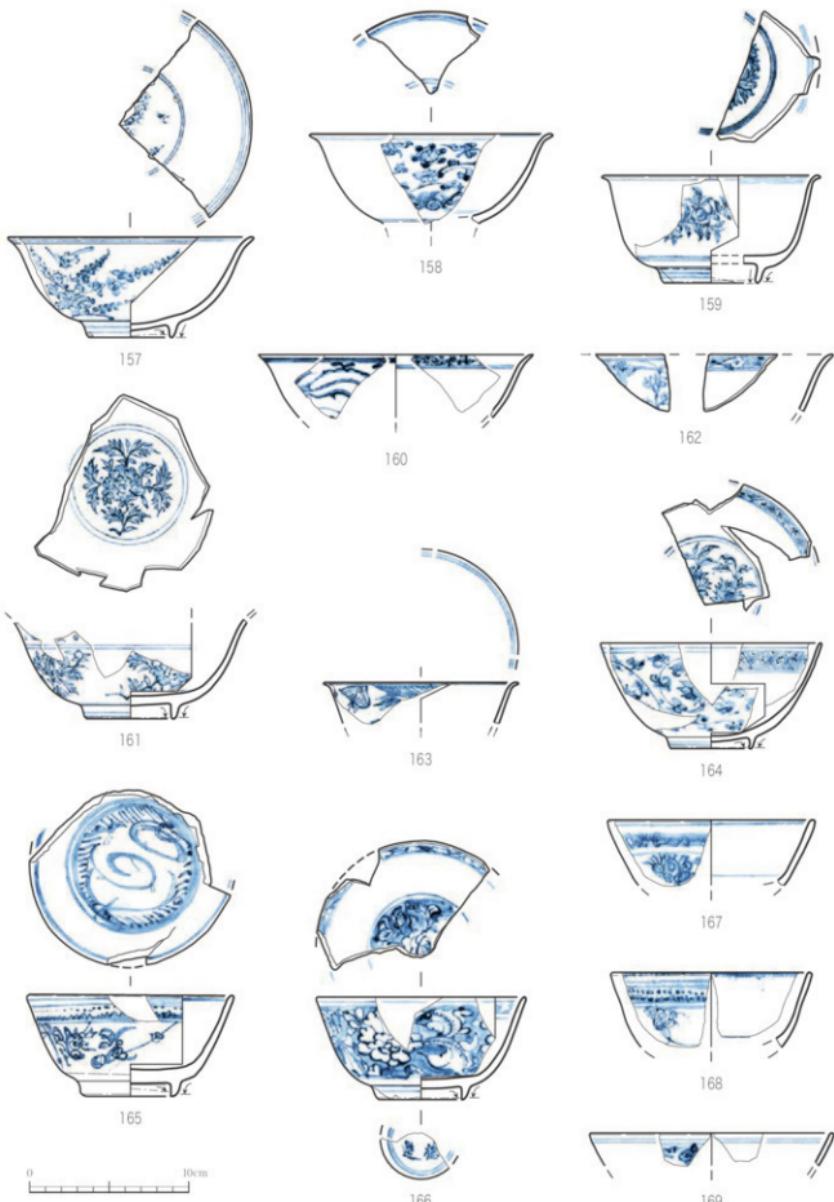
図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 器底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・施用)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第62図 図版49 224	皿	外 反	口 縁 部	14.0 — —	両面に宝相華 唐草文。	灰白色の釉を 両面に施釉。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。景德鎮窯 で15c後～16c前。	11	J-10 (20～30) +搅乱
第62図 図版49 225	皿	外 反	口 底	12.5 2.4 6.6	外面に宝相華 唐草文、内底 に玉取獅子文。	明緑灰色の釉を 内底から譽付まで 施釉後、譽付を 釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。景德鎮窯 で15c後～16c前。	11	J-11 (20～30)
第62図 図版49 226	皿	外 反	口 底	12.2 2.9 7.2	外面に宝相華 唐草文、内底 に玉取獅子文。	明緑灰色の釉を 内底から譽付・ 外底まで施釉後、 譽付を釉剥ぎ。	灰白色で 緻密。	轆轤成形。景德鎮窯 で15c後～16c前。	11	J-11 (20～30) +搅乱
第62図 図版49 227	皿	外 反	口 底	7.6 2.6 4.4	外面に宝相華 唐草文、内底 に十字花文。	明緑灰色の釉を 内底から譽付まで 施釉後、譽付を 釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。釉下に白 土を塗布か。全体に 細かい貫入。景德鎮 窯で15c後～16c前。	11	I-6 基壇東
第63図 図版50 228	皿	外 反	口 底	9.2 2.0 5.3	内底に 花唐草文。	灰白色の釉を全面 に施釉後、譽付を 釉剥ぎ。	灰白色で 緻密。	胫筋底状。轆轤成形。 景德鎮窯で15c後～ 16c前。	11	搅乱
第63図 図版50 229	皿	外 反	口 底	9.9 2.7 4.0	外面に宝相華 唐草文、内底 に十字花文。	明緑灰色の釉を 内底から譽付・ 外底に施釉後、 譽付を釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。 譽付に砂が付着。 景德鎮窯で16c。	19	A-1 石積み6 西側上層
第63図 図版50 230	皿	直 口	口 縁 部	10.6 — —	両面に團線。	灰白色の釉を両面 に施釉後、内底を 釉剥ぎ。	純黄橙色で やや細かい。	轆轤成形。全体に 細かい貫入。 漳州窯で16c後。	19	A-1 石積み6 西側上層
第63図 図版50 231	兜 鉢	口 縁 部	—	20.0 — —	不明。	透明釉を両面に 施釉。	白色で緻密。	轆轤+型打ち成形。 景德鎮窯で17c前。	19	B-5 シーリ内黒褐色 土(鉢)
第63図 図版50 232	皿	直 口	口 縁 部	15.4 — —	内面に花卉文。	透明釉を両面に 施釉。	白色で緻密。	轆轤+型打ち成形。 景德鎮窯で 1630年代。	19	B-5 シーリ内木炭屑
第63図 図版50 233	皿	直 口	口 縁 部	9.0 — —	外面に草花 文?、内面に 仙芝祝寿文。	灰白色の釉を両面 に施釉。	灰白色で やや細かい。	型成形。徳化窯で 18c後～19c。	11	搅乱
第63図 図版50 234	皿	端 反	口 底	10.0 2.4 7.2	両面に雲龍文。	灰白色の釉を全面 に施釉後、譽付を 釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	型成形。譽付に砂が 付着。徳化窯で 18c後～19c。	11	搅乱
第63図 図版50 235	鉢	—	底 部	— — 6.4	外面に花唐 草文+如意頭 繋文、内底に 草花文。	灰白色の釉を両面 に施釉後、譽付を 釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。景德鎮窯 で15c後～16c前。	19	A-1 石積み6 裏込内

第23表 中国産染付観察一覧8

図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 器 底 径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素 地 (色・質・混和材)	所 見		
第63図 図版50 236	皿	直 口	口 底	16.6 3.7 10.4	外面文様は不明、内面に梵文、内底文様は不明。	明緑灰色の釉を全面に施釉後、墨付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	繪埴成形。 福建産で18c。	11	J-9 灰混層 +搅乱
第63図 図版50 237	皿	-	底 部	- - 6.2	内底に樓閣文。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、墨付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	繪埴成形。 景德鎮窯?で18cか。	11	搅乱
第63図 図版50 238	皿	-	底 部	- - -	外底に「上利」 銘、内底に雲龍文。	灰白色の釉を両面に施釉後、墨付を釉剥ぎ。	灰白色で やや細かい。	繪埴成形。 福建産で18c。	19	搅乱
第63図 図版50 239	皿 筒 底	基 底	底 部	- - 4.0	外面文様は不明、内底に芭蕉文。	明緑灰色の釉を内底から外底際、外底凹部に施釉後、外底際を釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	繪埴成形。外底に 砂が付着。景德鎮窯 で15c後~16c前。	19	A-1 石積み6 西側土層
第63図 図版50 240	皿 筒 底	口 底	10.0 2.5 3.0	外面に波瀾文 +蕉葉文、 内底に芭蕉文。	明緑灰色の釉を内底から外底際、外底凹部に施釉後、外底際を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	繪埴成形。外底に 砂が付着。景德鎮窯 で15c後~16c前。	11	搅乱	
第64図 図版51 241	小 杯	外 反	口 縁 部	- - -	外面に花鳥文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	繪埴成形。 景德鎮窯で17c前。	19	搅乱
第64図 図版51 242	小 杯	直 口	口 縁 部	4.8 - -	外面に草花文か。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で細かい。	繪埴成形。 景德鎮窯で17cか。	11	搅乱
第64図 図版51 243	小 杯	直 口	口 縁 部	4.8 - -	外面に草花文か。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	繪埴成形。 景德鎮窯で17c前。	19	B-5 シーリ内木炭層
第64図 図版51 244	小 杯	-	底 部	- - 2.0	外底に「大明 成化年製」銘。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	繪埴成形。 景德鎮窯で17c前。	19	B-5 シーリ内黒褐色土
第64図 図版51 245	小 杯	外 反	底 部	- - 2.4	内底に跳魚文。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、 墨付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	繪埴成形(型成形 の可能性あり)。 全体的に被熱。 景德鎮窯で17c。	11	搅乱
第64図 図版51 246	小 杯	外 反	底 部	- - 3.6	外面に草花文、 内面に雷文、 内底に草花文。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、 墨付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	繪埴成形。 景德鎮窯で17cか。	11	搅乱

第24表 中国産染付観察一覧9

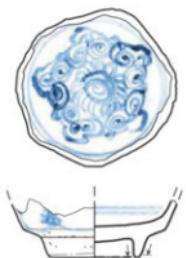
団 団版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 高 底 径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・施釉)	素地 (色・質・斑和村)	所見		
第64回 団版51 247	鉢	-	底部	- - 8.0	外面に蓮唐草文+如意頭繋文、内面に唐草文?、内底に團花纹。	灰白色の釉を両面に施釉後、墨付を釉剥ぎ。	白色で細かい。	輦輪成形。景德鎮窯で16cか。	11	J-10 (20~30)
第64回 団版51 248	瓶	-	口 縁 部	4.1 - -	口請か。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	輦輪成形。景德鎮窯で清代。	11	搅乱
第64回 団版51 249	瓶	玉壺春	口 縁 部	4.8 - -	外面に蕉葉文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	輦輪成形。景德鎮窯で15c後~16c前か。	11	J-10 (10~20)
第64回 団版51 250	瓶	玉壺春	副 部	- - -	外面に宝相華唐草文。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	輦輪成形で内面副部に雜ざ目あり。景德鎮窯で15c後~16c前。	19	B-4 シーリ内黒褐色土
第64回 団版51 251	瓶	玉壺春	底部	- - 8.5	外面に波瀾文+蓮弁文。	灰白色の釉を両面に施釉後、墨付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	輦輪成形。一部被熱か。景德鎮窯で16c前~中。	11	搅乱
第64回 団版51 252	瓶	-	底部	- - 1.4	外面に銘款。	灰白色の釉を外面全体に施釉後、外底を釉剥ぎ。	白色で細かい。	輦輪成形か。福建産?で18c~19c前。	11	搅乱
第64回 団版51 253	散蓮華	-	-	- - -	外面に草花文?、外底に銘款、内面に綴書きのみの牡丹唐草文。	灰白色の釉を全面に施釉後、外底を輪状に釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	型成形か。德化窯?で18c。	11	搅乱
第64回 団版51 254	蓋	-	底	11.6 - -	外面に梅花文+宝文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	輦輪成形。景德鎮窯で清代。	11	搅乱
第64回 団版51 255	蓋	-	底 + 持	5.6 1.9 5.6	蓋甲文様は不明、持外面に銘款文。	灰白色の釉を外面に施釉後、持端部を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	輨輪成形。景德鎮窯で清代。	11	搅乱
第64回 団版51 256	蓋	-	底 + 持	- - -	外面に蕉葉文か。	灰白色の釉を両面に施釉後、底端部内面を釉剥ぎ。	白色で緻密。	輨輪成形。景德鎮窯?で清代。	11	搅乱



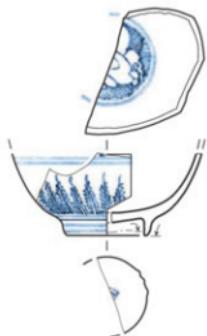
第58図 中国産染付 1



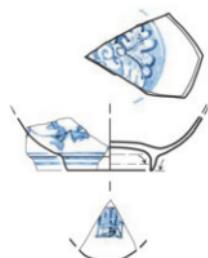
图版45 中国产染付 1



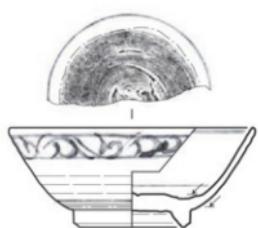
170



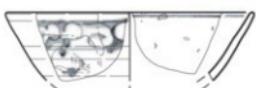
171



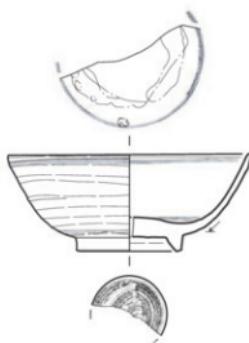
172



173



174



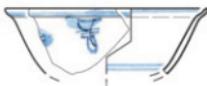
175



176



177



178



179



180



181

0 10cm

第59図 中国産染付 2



170



171



172



173



174



175



176



177



178



179



180



181

图版46 中国产染付2



182



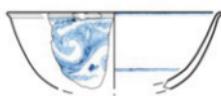
184



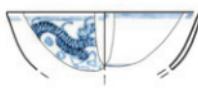
185



183



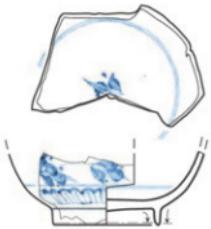
186



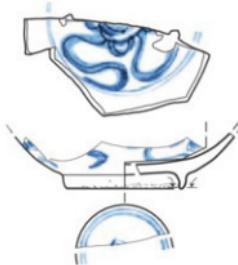
187



188



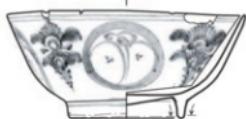
189



190



191



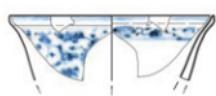
192



193



194

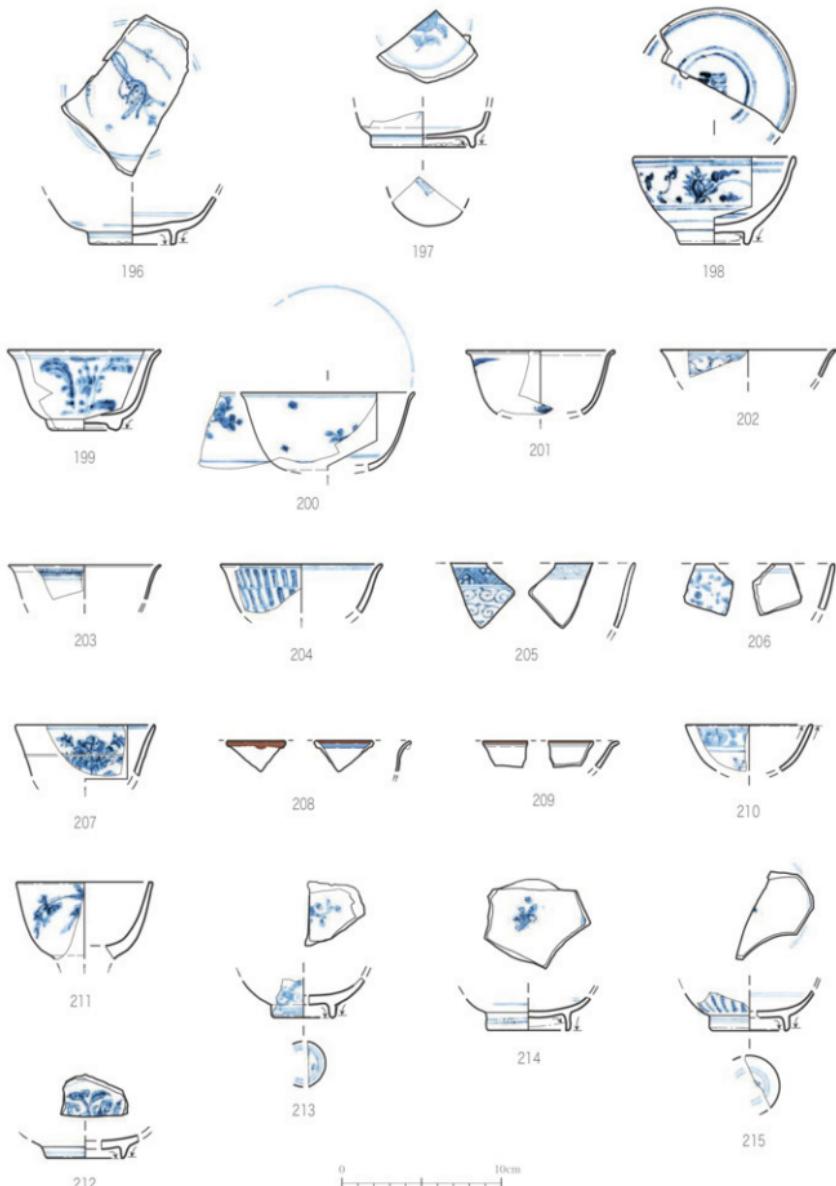


A scale bar indicating a length of 10 cm.

第60図 中国産染付 3



图版47 中国产染付 3



第61図 中国産染付 4



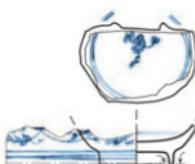
图版48 中国产染付 4



216



217



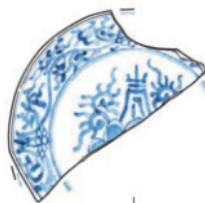
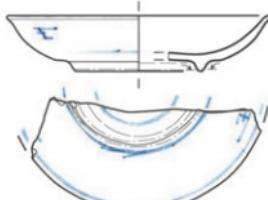
218



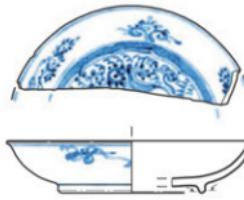
219



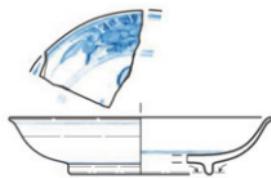
220



221



222



223



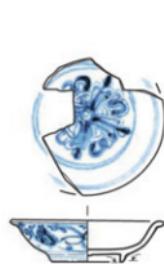
224



225



226



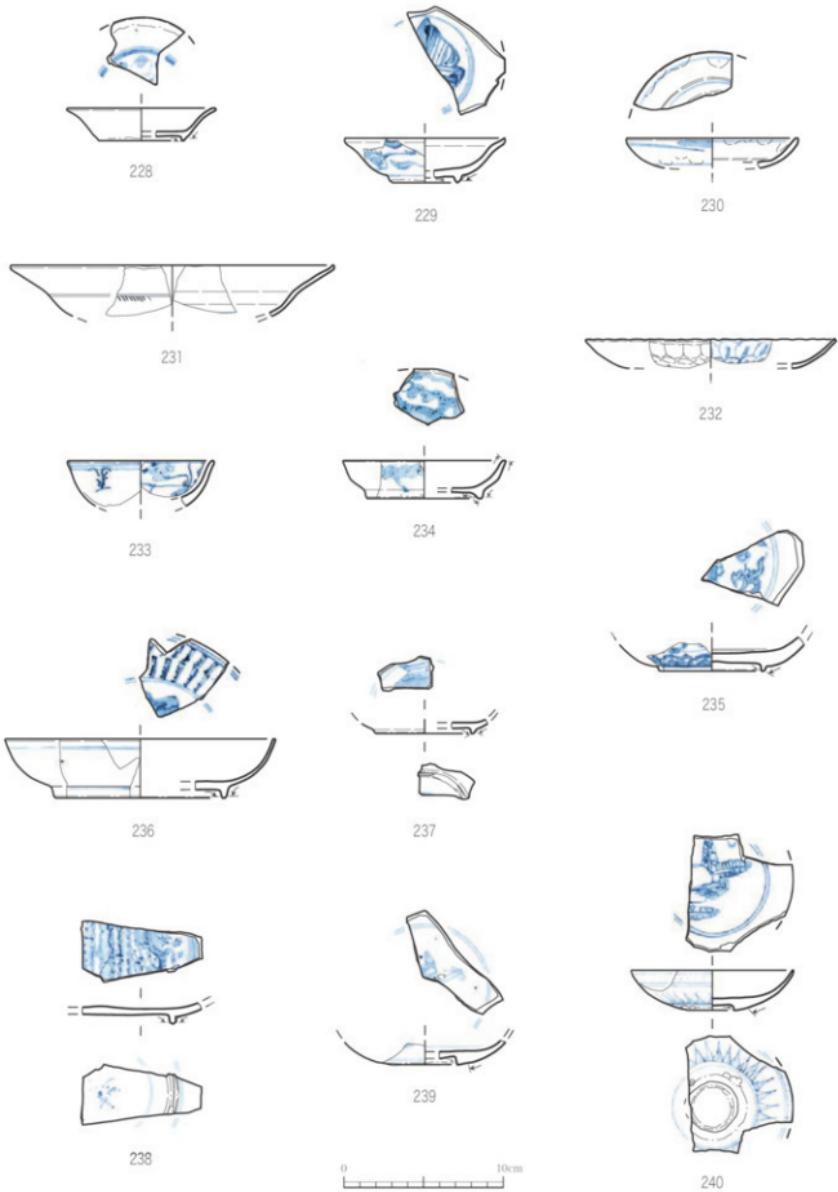
227



第62図 中国産染付5



図版49 中国産染付 5



第63図 中国産染付 6



图版50 中国产染付 6



241



242



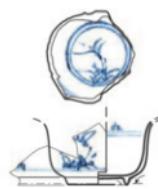
243



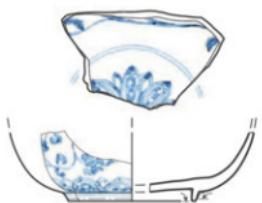
244



245



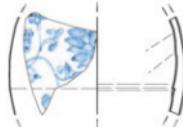
246



247



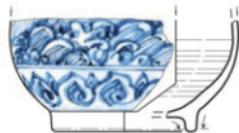
248



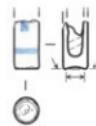
250



249



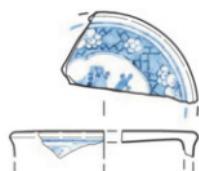
251



252



253



254



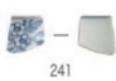
255



256



第64図 中国産染付 7



241



242



245



243



244

246



247



248



250



249



251



252



253



254



255



256

图版51 中国产染付 7

第4節 中国産褐釉陶器・無釉陶器（第25～28表、第65～69図、図版52～56）

総数16,504点を数え（無釉陶器9点含む）、中国産陶磁器の中でも最も多く出土している。器種は壺・瓶・鉢が確認されるが、壺が圧倒的多数を占める。他の中国産陶磁器と同様に全形が窺えるような資料は少量だが、特徴的な資料を第65～69図に図示した。以下に器種別の分類概念を記し、個々の詳細は観察表に譲る。

1. 壺（257～295、297、298、300、301）

- A類：最大径を肩部に持つ大型の四耳壺。素地が赤褐色を呈する厚手のもの（257～260）と、白濁釉を施す薄手のもの（277、278）がある。
- B類：最大径を胴部上位に持つ大型の多耳壺。胴部に貼付の文様を施す（261、262）。
- C類：最大径を肩部に持つ大型の無耳壺。肩部に焼成時の目跡が巡る（263～276）。
- D類：A～C類に比して小振りの壺。ほとんどが四耳壺になると思われる（279～293）。
- E類：「茶入」と称される薄手の小型壺（294、295）。

2. 瓶（296）

口縁部がラッパ状に開くもので、小型の長頸瓶と思われる。

3. 鉢（299）

直口口縁の鉢で、口縁部を内側に折り曲げ断面形態が玉縁状を呈する。

4. 無釉陶器（302）

中国産の無釉陶器は9点が得られている。第69図302に示したのは大型の甕で、出土例は非常に少ないが、首里城跡では一定量確認される資料である。

第25表 中国産褐釉陶器観察一覧1

図版番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド層
				文様構成	釉 (色・範囲・質入)	素地 (色・質・斑紋)	所見		
第65図 図版52 257	壺	口縁部	21.2 — —	無文。	灰褐色の釉を両面に施釉。	純橙色でやや細かく、赤褐色鉻物を含む。	輪轉成形で口縁部は外側貼付。 中国産で14c～15c。	19	B-5 3層表面 +C-4 灰混粘土層
第65図 図版52 258	壺	口縁部	21.6 — —	無文。	灰褐色の釉を両面に施釉。	純橙色でやや細かく、赤褐色鉻物や白色鉻物を含む。	輪轉成形で口縁部は外側貼付。外面肩部に目跡が残る。 中国産で14c～15c。	19	B-3 裏込内 +C-4 灰混粘土層

第26表 中国産褐釉陶器観察一覧2

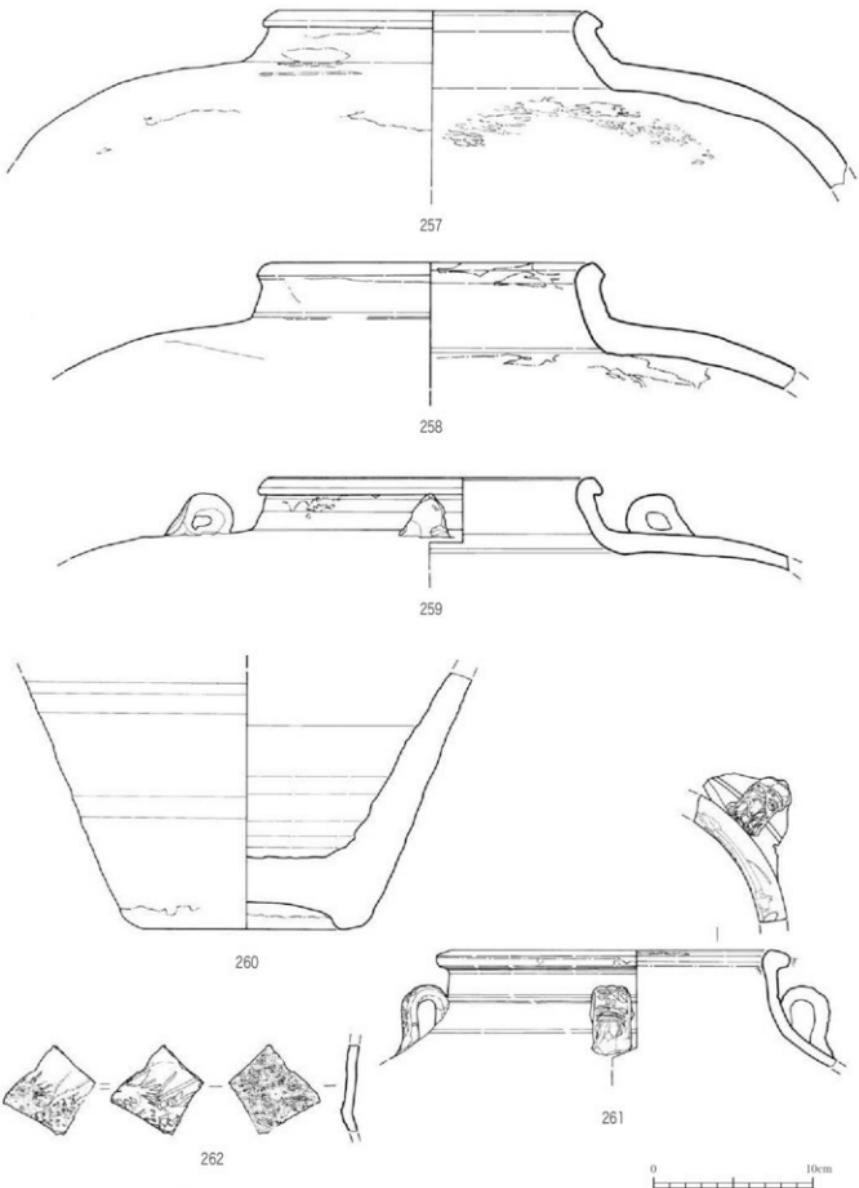
団 団版 番号	器 種	部 位	口 径 器 底 径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
				文様構成	釉 (色・範囲・質入)	素 地 (色・質・混和物)	所 見		
第65団 団版52 259	壺	口 縁 部	21.4	無文。	暗褐色の釉を内面 頭部から外面に施 釉。	純橙色でやや細かく、白色鉢物や赤褐色鉢物を含む。	轆轤成形で口縁部は外側 貼付。外面肩部に目跡が 残る。中国産で14c~15c。	11	搅乱
第65団 団版52 260	壺	底 部	-	無文。	純黃褐色の釉を内 底から外底際まで 施釉。	褐灰色でやや細かく、白色鉢物や黑色鉢物を含む。	轆轤成形。 中国産で14c~15c。	11	搅乱
第65団 団版52 261	壺	口 縁 部	22.0	外面に陰線彫。	オリーブ褐色の釉 を両面に施釉後、 口唇部を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かく、白色鉢物や黑色鉢物を含む。	轆轤成形。口唇部に目 跡が残る。 中国産で15c~16c。	19	E-4 5層
第65団 団版52 262	壺	胸 部	-	外面に貼付の 龍文。	純黄色の釉を外面 に施釉。	橙色で細かく、白 色鉢物を含む。	轆轤成形(叩き成形の 可能性あり)。 中国産で15c~16c。	19	搅乱
第66団 団版53 263	壺	口 縁 部	22.9	無文。	黒褐色の釉を両面 に施釉。	純黄橙色でやや細 かく、白色鉢物を含 む。	轆轤成形。 中国産で15c~16c。	11	搅乱
第66団 団版53 264	壺	口 縁 部	21.9	無文。	黒褐色の釉を両面 に施釉。	暗灰黄色でやや細 かく、砂粒を含む。	轆轤成形。口唇部や内 面口縁部に目跡が残る。 中国産で15c~16c。	11	搅乱
第66団 団版53 265	壺	口 縁 部	16.5	無文。	黒褐色の釉を両面 に施釉。	灰白色で細かく、白 色鉢物を含む。	轆轤成形で口縁部は 外側貼付。 中国産で15c~16c。	19	B-1 石積み6 西側上層
第66団 団版53 266	壺	口 縁 部	21.5	無文。	純黄橙色の釉を両 面に施釉後、口唇 部を釉剥ぎ。	灰褐色で細かく、 砂粒を含む。	轆轤成形で口縁部は 外側貼付。 中国産で15c~16c。	11	J-9 遺構上南 +搅乱
第66団 団版53 267	壺	口 縁 部	17.3	無文。	黒褐色の釉を両面 に施釉。	灰黄色でやや細か い。	轆轤成形で口縁部は 外側貼付。 中国産で15c~16c。	19	B-1 石積み6 西側上層
第66団 団版53 268	壺	口 縁 部	19.4	無文。	黒褐色の釉を両面 に施釉。	純黄色でやや細か く、砂粒や白色鉢 物を含む。	轆轤成形で口縁部は 外側貼付。 中国産で15c~16c。	19	D-4 2層
第66団 団版53 269	壺	口 縁 部	-	無文。	暗オリーブ褐色の 釉を両面に施釉。	橙色でやや細かく、 白色鉢物を含む。	轆轤成形で口縁部は 外側貼付。 中国産で15c~16c。	19	B-4 黄褐色土
第66団 団版53 270	壺	口 縁 部	12.6	無文。	オリーブ褐色の釉 を両面に施釉。	灰黄色で細かい。	轆轤成形で口縁部は 外側貼付。 中国産で15c~16c。	11	I-8 20~30 茶褐色灰混層
第67団 団版54 271	壺	底 部	-	無文。	暗褐色の釉を内底 から外底際まで施 釉。	純黄橙色でやや細 かく、砂粒や白色 鉢物を含む。	轆轤成形。外底に目 跡が残る。 中国産で15c~16c。	11	搅乱
第67団 団版54 272	壺	底 部	16.5	無文。	暗オリーブ褐色の 釉を両面に施釉。	灰黄色でやや細か く、黑色鉢物や白 色鉢物を含む。	轆轤成形。外底に目 跡が残る。 中国産で15c~16c。	19	B-4 黄褐色土
			18.4						

第27表 中国産褐釉陶器観察一覧3

団 団版 番号	器 種	部 位	口 径 器 底 径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
				文様構成	釉 (色・範囲・質入)	素 地 (色・質・混和材)	所 見		
第67団 団版54 273	壺	底 部	— — 15.6	無文。	純黄色の釉を内底 から外面肩部まで 施釉。	灰黄色でやや細か く、黒色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で 15c~16c。	11	搅乱
第67団 団版54 274	壺	底 部	— — 13.0	無文。	暗オリーブ褐色の 釉を両面に施釉。	灰黄褐色でやや細か く、白色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で 15c~16c。	19	B-4 黄褐色土
第67団 団版54 275	壺	底 部	— — 15.0	無文。	暗灰黄色の釉を両 面に施釉。	浅黄色でやや細か い。	轆轤成形。中国産で 15c~16c。	19	B-4 2層+B-4 黄褐色土
第67団 団版54 276	壺	底 部	— — —	無文。	灰オリーブ色の釉 を外面肩部に施 釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。中国産で 15c~16c。	19	A-1 石積み6 西側上層
第67団 団版54 277	壺	口 縁 部	16.2 — —	無文。	浅黄色の釉を内面口 縁部から外面に施釉 後、口唇部を釉剥ぎ。	黄灰色でやや細か く、黒色鉱物を含む。	轆轤成形(叩き成形の 可能性あり)。中国産で 15c~16c。	11	搅乱
第67団 団版54 278	壺	口 縁 部	15.8 — —	無文。	灰黄色の釉を両面施 釉後に内面白口縁部～ 頭部まで釉剥ぎ。	灰白色でやや細か く、白色鉱物を含む。	轆轤成形(叩き成形の可 能性あり)。外面肩部に日跡が 残る。中国産で15c~16c。	11	搅乱
第68団 団版55 279	壺	口 縁 部	9.5 — —	無文。	浅黄色の釉を両面 に施釉。	灰褐色で細かく、 白色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で 15c~16cか。	11	搅乱
第68団 団版55 280	壺	口 縁 部	7.2 — —	無文。	黒褐色の釉を両面 に施釉後、内面白口 縁部を釉剥ぎ。	灰白色でやや細か く、砂粒を含む。	轆轤成形。中国産で 15c~16cか。	19	搅乱
第68団 団版55 281	壺	口 縁 部	6.4 — —	無文。	黒褐色の釉を両面 に施釉。	褐灰色で細かい。	轆轤成形。中国産で 15c~16cか。	19	C-3 野面石積み 南側栗石
第68団 団版55 282	壺	口 縁 部	9.3 — —	無文。	黒褐色の釉を両面 に施釉。	灰黄色でやや細か く、白色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で 15c~16cか。	11	搅乱
第68団 団版55 283	壺	底 部	— — 9.8	無文。	暗褐色の釉を両面 に施釉。	灰白色でやや細か く、砂粒を含む。	轆轤成形。中国産で 15c~16cか。	11	搅乱
第68団 団版55 284	壺	底 部	— — 11.4	無文。	暗褐色の釉を外 面に施釉。	灰褐色でやや細か く、砂粒や白色鉱 物を含む。	轆轤成形。外面肩部に 日跡が残る。中国産で 15c~16cか。	11	J-10 (10~20) +J-10 (20~30) + 搅乱
第68団 団版55 285	壺	口 縁 部	9.6 — —	無文。	黄褐色の釉を両面 に施釉。	純黃金色で細か い。	轆轤成形。中国産で 15c~16cか。	19	B-4 黄褐色土
第68団 団版55 286	壺	口 縁 部	11.6 — —	無文。	褐灰色の釉を両面 に施釉。	褐灰色でやや細か く、白色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で 15c~16cか。	19	搅乱
第68団 団版55 287	壺	口 縁 部	10.0 — —	無文。	黑褐色の釉を両面 に施釉。	橙色で細かく、白 色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で 15c~16cか。	19	搅乱

第28表 中国産褐釉陶器4・無釉陶器観察一覧

団 団版 番号	器 種	部 位	口径 器底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
				文様構成	釉 (色・範圍・質入)	素地 (色・質・混和物)	所見		
第68団 団版55 288	壺	口 縁部	11.2 — —	無文。	灰黄褐色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。中国産で15c~16cか。	11	擾乱
第68団 団版55 289	壺	口 縁部	11.6 — —	無文。	オリーブ黄色の釉を両面に施釉後、内面口縁部を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。中国産で15c~16cか。	19	C-5・3層表面 +D-5・3層表面
第68団 団版55 290	壺	口 縁部	— — —	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	黄灰色でやや細かい、砂粒を含む。	轆轤成形。中国産で15c~16cか。	11	擾乱
第69団 団版56 291	壺	底 部	— — 12.0	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	灰黄色でやや細かい、砂粒を含む。	轆轤成形。外底に目跡が残る。中国産で15c~16cか。	19	B-1 石積み6 西側上層
第69団 団版56 292	壺	底 部	— — —	無文。	暗オリーブ色の釉を外面に施釉。	灰色でやや細かい、白色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で15c~16cか。	11	擾乱
第69団 団版56 293	壺	口 縁部	11.2 — —	無文。	灰黄褐色の釉を両面に施釉。	純黄橙色でやや細かい、白色鉱物を含む。	急須(罐)の可能性あり。轆轤成形。中国産で15c~16cか。	11	擾乱
第69団 団版56 294	壺	底 部	— — 3.8	無文。	灰黄褐色の釉を両面に施釉。	純黄橙色で細かい。	茶人の可能性あり。轆轤成形。中国産で14c。	11	擾乱
第69団 団版56 295	壺	底 部	— — 7.2	無文。	黒褐色の釉を内面に施釉。	灰色で細かい、白色鉱物を含む。	茶人の可能性あり。轆轤成形。中国産で14c。	19	A-1 石積み6 西側上層
第69団 団版56 296	瓶	口 縁部	7.2 — —	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	黄灰色でやや細かい。	轆轤成形。中国産で15c~16cか。	11	擾乱
第69団 団版56 297	壺	口 縁部	20.6 — —	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かい、砂粒や白色鉱物を含む。	甕の可能性あり。轆轤成形。中国産で15c~16cか。	19	擾乱
第69団 団版56 298	壺	口 縁部	16.0 — —	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	純黄橙色でやや細かい、白色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で15c~16cか。	19	B-1 石積み6 西側上層
第69団 団版56 299	鉢	口 縁部	— — —	無文。	灰黄褐色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	純橙色でやや細かい、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。中国産で14c~15cか。	11	擾乱
第69団 団版56 300	壺	口 縁部	11.2 — —	無文。	不明。	灰色でやや細かい、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	急須(罐)の可能性あり。轆轤成形。中国産で清代か。	11	擾乱
第69団 団版56 301	壺	胴 部	— — —	外面に貼付の 磨落文か。	褐色の釉を両面に施釉。	浅黄橙色でやや細かい。	轆轤成形。中国産?で15c~16cか。	11	擾乱
第69団 団版56 302	甕	口 縁部	55.2 — —	外面に貼付の 網目。	無釉。	明赤褐色でやや細かい、砂粒や白色鉱物を含む。	叩き成形で内面に当て具痕が残る。中国産で16c~17c。	11	J-10 (20~30)



第65図 中国産褐釉陶器 1



257



258



259

262

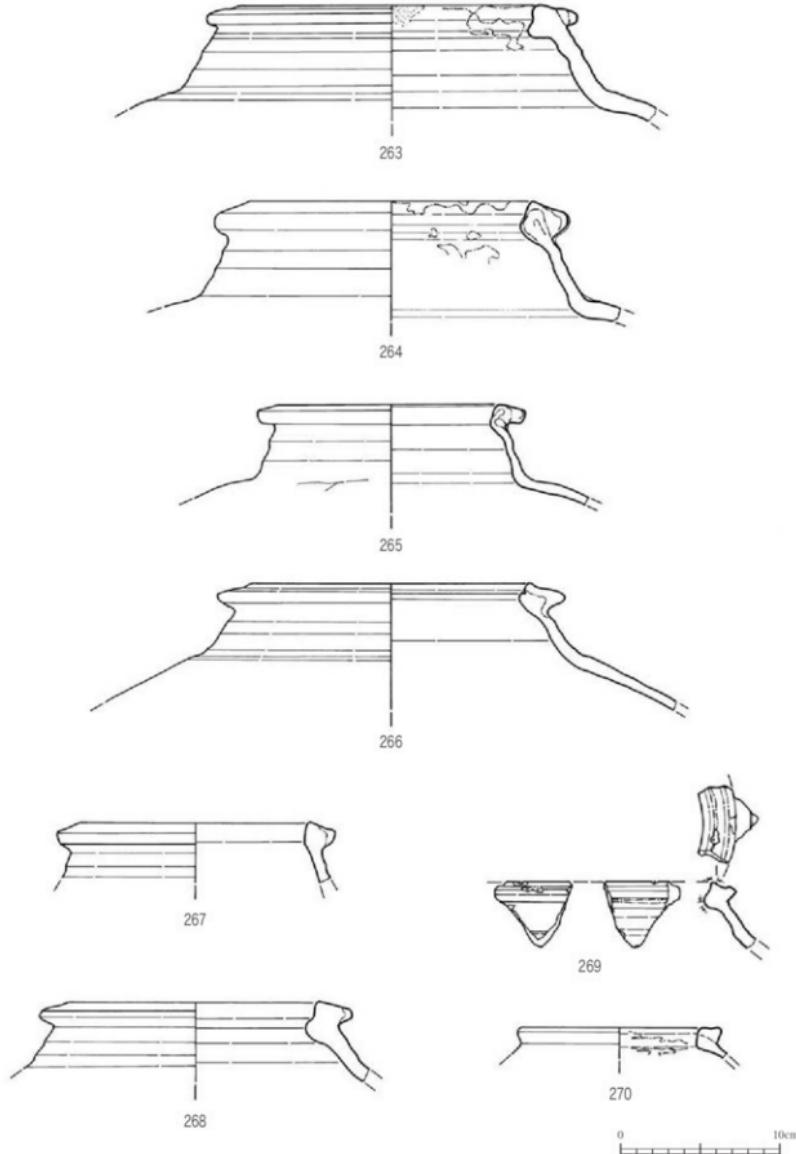


260



261

图版52 中国产褐釉陶器 1



第66図 中国産褐釉陶器2



263



264



265



266



267



269

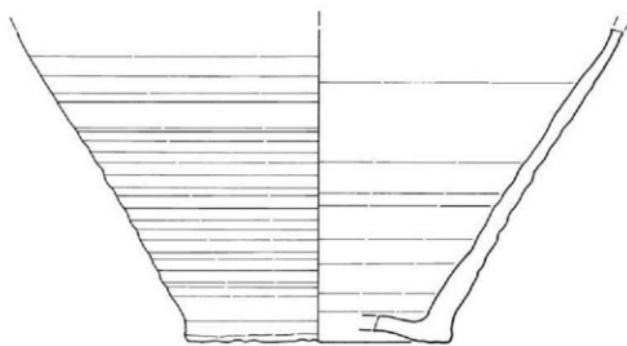


268



270

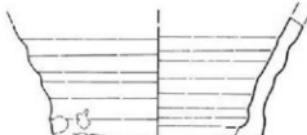
图版53 中国产褐釉陶器 2



271



272



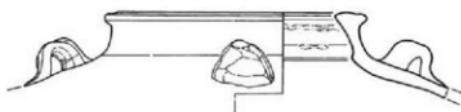
274



273



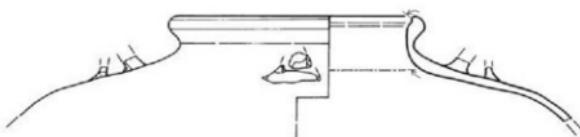
275



277



276



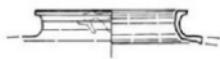
278



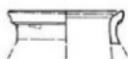
第67図 中国産褐釉陶器 3



图版54 中国产褐釉陶器 3



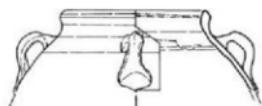
279



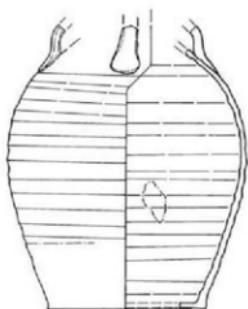
280



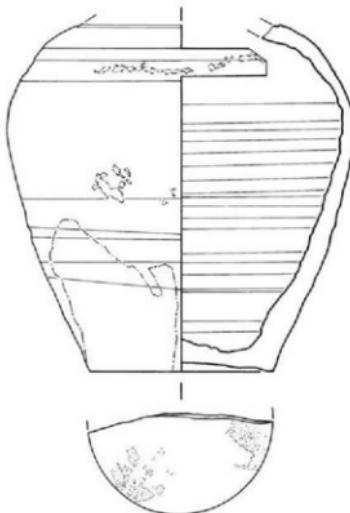
281



282



283



284



285



286



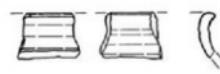
287



288



289



290



第68図 中国産褐釉陶器 4



284



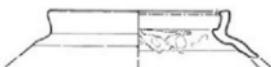
图版55 中国产褐釉陶器 4



291



292



293



294



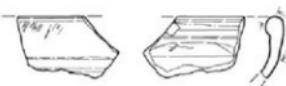
295



296



297



298



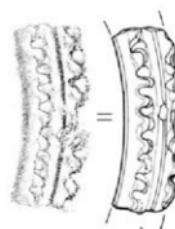
299



300



301

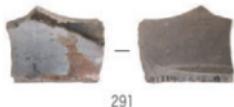


302

0 10cm

0 10cm

第69図 中国産褐釉陶器5・無釉陶器



291



292



293



294



295



296



297



299



298



300



301



302

図版56 中国産褐釉陶器5・無釉陶器

第5節 タイ産褐釉陶器（第29～32表、第70～72図、図版57～59）

タイ産褐釉陶器は総数3,407点出土している。確認された器種は壺のみだが、法量の差から大型と小型に大別され、大型も生産地で2種類に区分できる。以下に分類概念を記し、個々の所見は観察表に譲る。

1. 大型壺（303～327）

A類：口縁部をラッパ状に強く外反させ、端部をT字状に成形する四耳壺（303～310、325、327）。シーサッチャナライ窯で生産されたと考えられる。

B類：A類に比して口縁部の外反が弱く、端部を玉縁状に成形する四耳壺（311～324、326）。メナムノイ窯で生産されたと考えられる。

2. 小型壺（328、329）

長胴形の双耳壺である。シーサッチャナライ窯で生産されたと考えられる。

第29表 タイ産褐釉陶器観察一覧1

図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 器 底 径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・其入)	素 地 (色・質・斑柄有)	所 見		
第70図 図版57 303	壺	-	口 縁 部	19.4 - -	無文。	オリーブ褐色の 釉を両面に施 釉。	黄灰色でやや細か く、砂粒を含む。	輪轉成形で口縁部は内 側折り返し。タイ・シー サッチャナライ窯で15c。	19	B-4 黄褐色土 +擾乱
第70図 図版57 304	壺	-	口 縁 部	18.6 - -	無文。	黒褐色の釉を両 面に施釉。	褐灰色でやや細か く、砂粒を含む。	輪轉成形で口縁部は内 側折り返し。タイ・シー サッチャナライ窯で15c。	19	D-3 5層
第70図 図版57 305	壺	-	口 縁 部	24.0 - -	無文。	黒褐色の釉を外 面に施釉。	灰褐色でやや細か く、砂粒を含む。	輪轉成形で口縁部は内 側折り返し。タイ・シー サッチャナライ窯で15c。	19	擾乱

第30表 タイ産褐釉陶器観察一覧2

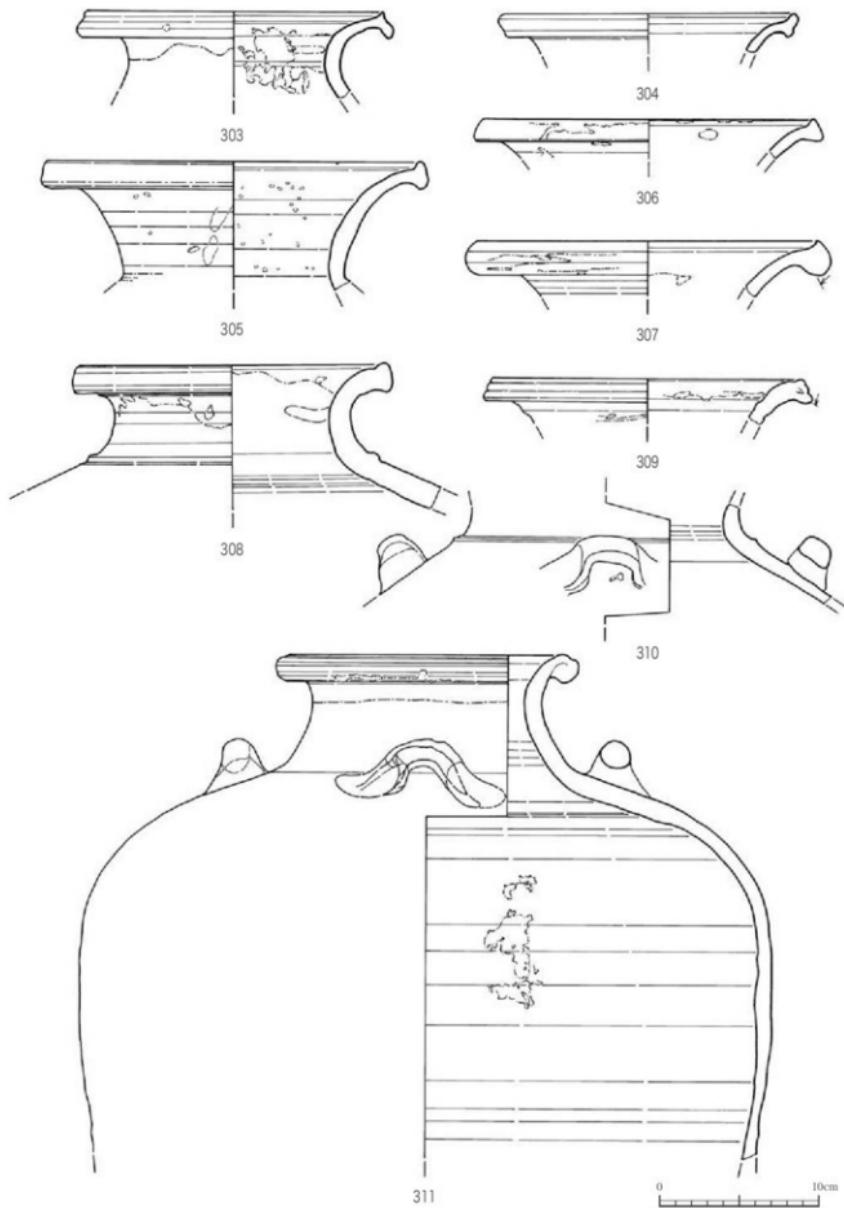
図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 器 底 径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (年)	グリッド 層
					文様構成	軸 (色・範囲・質入)	素 地 (色・質・混和)	所 見		
第70図 図版57 306	壺	-	口 緑 部	21.6 - -	無文。	浅灰色の軸を両面に施釉。	灰黄褐色で細かく、砂粒を含む。	輪埴成形で口緑部は内側折り返し。タイ・シーサッチャナライ窯で15c。	19	B-4 黄褐色土
第70図 図版57 307	壺	-	口 緑 部	22.6 - -	無文。	オリーブ褐色の軸を内面に施釉。	灰黄褐色で細かく、砂粒を含む。	輪埴成形で口緑部は外側折り返し。タイ・シーサッチャナライ窯で15c後～16c前。	11	J-10 10～20
第70図 図版57 308	壺	-	口 緑 部	19.8 - -	外面に陽圏 線1条。	オリーブ褐色の軸を外面に施釉。	純橙色でやや細かく、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	輪埴成形で口緑部は内側折り返し。タイ・シーサッチャナライ窯で15c後～16c前。	11	J-10 20～30 +擾乱
第70図 図版57 309	壺	-	口 緑 部	20.4 - -	外面口緑端 部に陰圏 線2条。	純黃橙色の軸を両面に施釉。	灰褐色でやや細かく、砂粒を含む。	輪埴成形で口緑部は内側折り返し。タイ・シーサッチャナライ窯で15c後～16c前。	11	擾乱
第70図 図版57 310	壺	-	胴 部	- - -	外面に陽圏 線1条。	黒褐色の軸を外面に施釉。	灰褐色でやや細かく、砂粒を含む。	輪埴成形。タイ・シーサッチャナライ窯で15c～16c前。	11	J-6 基壇東
第70図 図版57 311	壺	-	口 緑 部	18.7 - -	外面に陽圏 線1条。	浅黄色の軸を外面に施釉。	灰色でやや細かく、砂粒やガラス質鉱物を含む。	輪埴成形で口緑部は外側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c前。	11	J-9 遺構上南 +擾乱
第71図 図版58 312	壺	-	口 緑 部	17.2 - -	無文。	黒褐色の軸を両面に施釉。	灰黄褐色でやや細かく、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	輪埴成形で口緑部は内側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c中。	11	擾乱
第71図 図版58 313	壺	-	口 緑 部	17.0 - -	無文。	黒褐色の軸を内面から外面口緑部まで施釉。	褐灰色でやや細かく、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	輪埴成形で口緑部は内側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c中。	11	J-10 20～30

第31表 タイ産褐釉陶器観察一覧3

図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 器 底 径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	軸 (色・範囲・貫入)	素 地 (色・質・混和物)	所 見		
第71図 図版58 314	壺	-	口 緑 部	16.4	無文。	黒褐色の軸を両面に施釉。	純黄褐色でやや細かく、白色鉱物や赤褐色鉱物を含む。	輪埴成形で口縁部は外側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c前。	11	搅乱
第71図 図版58 315	壺	-	口 緑 部	20.2	無文。	不明。	純黄褐色でやや細かく、赤褐色鉱物を含む。	輪埴成形で口縁部は内側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c前。	11	搅乱
第71図 図版58 316	壺	-	口 緑 部	16.2	無文。	褐色の軸を両面に施釉。	褐色でやや細かく、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	輪埴成形で口縁部は内側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c。	11	搅乱
第71図 図版58 317	壺	-	口 緑 部	21.0	無文。	黒褐色の軸を両面に施釉。	灰褐色でやや細かく、砂粒を含む。	輪埴成形で口縁部は内側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c。	11	J-10 20～30
第71図 図版58 318	壺	-	口 緑 部	19.6	無文。	オリーブ褐色の軸を外面に施釉。	褐色でやや細かく、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	輪埴成形で口縁部は外側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c。	11	J-10 10～20
第71図 図版58 319	壺	-	口 緑 部	16.4	無文。	黒褐色の軸を両面に施釉。	褐色でやや細かく、砂粒を含む。	輪埴成形で口縁部は外側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c。	19	B-4 黄褐色土
第71図 図版58 320	壺	-	口 緑 部	10.9	無文。	黒褐色の軸を両面に施釉。	灰褐色でやや細かく、砂粒を含む。	輪埴成形で口縁部は内側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c中。	11	搅乱
第71図 図版58 321	壺	-	胴 部	-	外面に陽圖 線1条。	純黄色の軸を外面に施釉。	灰褐色でやや細かく、砂粒を含む。	輪埴成形。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c。	11	搅乱

第32表 タイ産褐釉陶器観察一覧4

図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 器底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (年)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・質入)	素地 (色・質・混和物)	所見		
第72図 図版59 322	壺	-	底部	- - 26.2	無文。	純黄色の釉を両面に施釉。	純橙色でやや細かく、白色鉱物を含む。	輥埴成形。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c。	11	搅乱
第72図 図版59 323	壺	-	底部	- - -	無文。	純黃橙色の釉を外面に施釉。	純赤褐色でやや細かく、砂粒を含む。	輥埴成形。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c。	19	A-3 裏込内
第72図 図版59 324	壺	-	底部	- - 22.7	無文。	浅黄色の釉を内面に施釉。	純赤褐色でやや細かく、白色鉱物を含む。	輥埴成形。タイ・メナムノイ窯？で15c後～16c。	19	A-1 石積み6 西側上層
第72図 図版59 325	壺	-	底部	- - 27.0	無文。	浅黄色の釉を外面に施釉。	褐灰色でやや細かく、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	輥埴成形。外底に胎土目積み跡が残る。タイ・シーサッチャナライ窯で15cか。	19	B-3 基壇伏道構内溝中 +C-4-2層 +C-4-3層表面 +C-D-4-3層表面+搅乱
第72図 図版59 326	壺	-	底部	- - 23.1	無文。	明黄褐色の釉を内面に施釉。	灰褐色でやや細かく、砂粒や白色鉱物を含む。	輥埴成形。タイ・メナムノイ窯？で15c後～16c。	11	J-10 20～30
第72図 図版59 327	壺	-	底部	- - 18.4	無文。	不明。	純赤褐色でやや細かい。	輥埴成形。タイ・シーサッチャナライ窯で15cか。	19	A-1 石積み6 西側上層
第72図 図版59 328	壺	双耳	口 縁 部	2.8 - -	外面上に陰唇線数条。	褐色の釉を内面口縁部から外面まで施釉。	灰白色でやや細かく、砂粒や黑色鉱物を含む。	輥埴成形。タイ・シーサッチャナライ窯で15c後～16c。	11	搅乱
第72図 図版59 329	壺	-	胴部	- - -	無文。	オリーブ褐色の釉を外面に施釉。	灰白色でやや細かく、砂粒や黑色鉱物を含む。	輥埴成形。タイ・シーサッチャナライ窯で16c。	19	B-5シ-1内木炭層 +B-5シ-1内木炭層(鞋) +B-5シ-1内上層(黄色土・堆) +C-5・3層直上



第70図 タイ産褐釉陶器 1



303



304



306



305



307



308

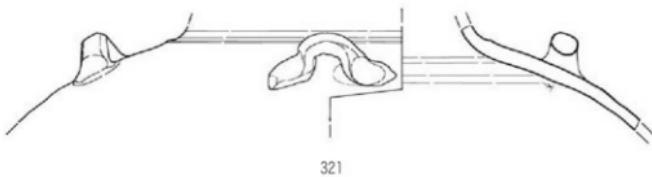
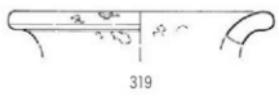
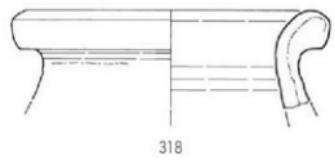
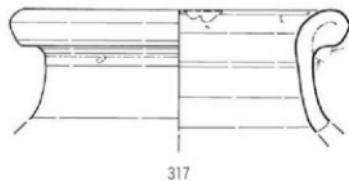
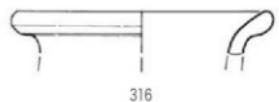
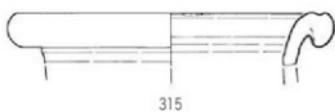
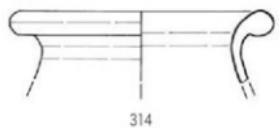


310



311

図版57 タイ産褐釉陶器 1



0 10cm

第71図 タイ産褐釉陶器2



312



313



314



315



316



317



318



319

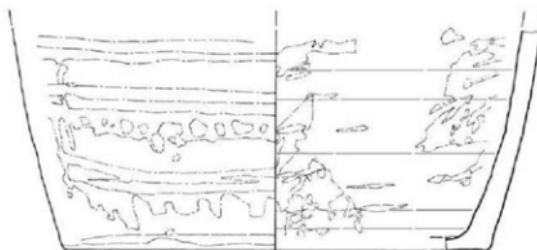


320

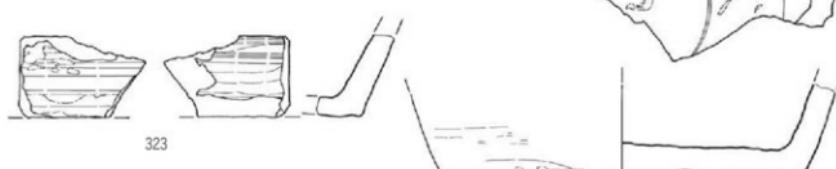


321

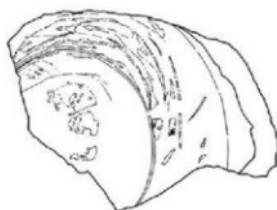
図版58 タイ産褐釉陶器2



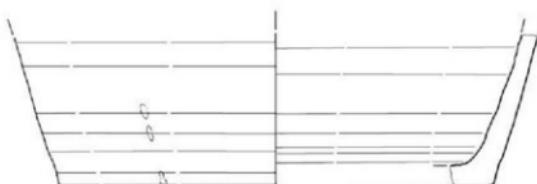
322



323



324



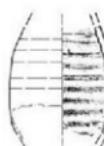
325



328



326



329



327



第72図 タイ産褐釉陶器 3



322



323



325



324



326



328



327



329



図版59 タイ産褐釉陶器 3

第6節 その他の輸入陶磁器（第33～37表、第73～79図、図版60～66）

その他の輸入陶磁器として、中国産は色絵・白磁餅花手・素三彩・褐釉染付・青磁染付・瑠璃釉・彩釉陶・黒釉陶器・土器、朝鮮産は象嵌青磁、タイ産は土器・鉄絵、ベトナム産は白磁・染付・色絵が出土している。以下に種類別に概観し、詳細は観察表に記す。

1. 中国産陶磁器（330～366、370～372）

色絵は明代（330～333）と清代（334～338）に大別される。前者は施釉後に上絵付けを施す五彩が主体で、後者はいわゆる豆彩が多い。器種は碗類が中心となる。白磁餅花手としたものは340と341で、外面に白盛りで文様を描く。素三彩（342）は皿の底部が出土しているが、器形や文様の特徴から東のアザナ地区出土品（沖縄埋文2004・第28図16）と同種と考えられる。褐釉染付（343、344）は端反口縁の小杯、青磁染付（345）は端反口縁の小碗が得られており、いずれも内面に染付による文様が描かれる。瑠璃釉は明代（347～349）と清代（346、350）のものがあり、両者は成形や施釉方法などで違いがみられる。351～358は低火度焼成の彩釉陶の一群で、華南三彩の名で呼ばれる明代（351～355）のものと、清代（356～358）のものに大別される。黒釉陶器は天目と称される鼈甲口の碗（359～365）と、小型の壺（366）が出土している。土器（370～372）は円盤状の蓋で、振や持たない。中国産褐釉陶器の壺C類に対応すると考えられる。

2. 朝鮮産陶磁器（367～369）

367～369は高麗後期に生産されたと考えられる青磁で、器種は碗と皿がみられる。いずれも器面に白土や黒土を象嵌して文様を描く。

3. タイ産陶磁器（373～384）

ここでは褐釉陶器以外の資料をまとめた。373～381はハンネラとも称される硬質の土器で、器種は全て落とし蓋である。褐釉陶器の大型壺に対応すると考えられる。鉄絵は合子の蓋（382）と身（383、384）が確認されている。

4. ベトナム産陶磁器（385～392）

白磁は碗（385、386）・小杯（387）・瓶（388）が確認されている。特に小杯は成形や施文が非常に丁寧であることから、いわゆる官窯クラスの優品と思われる。染付は高台を持たない平底の小碗（389）と、酒会壺の蓋（390）がみられるが、前者は鉄絵を併用しており古手と考えられる。色絵（391、392）は端反口縁の碗が出土しており、両面に赤や緑の上絵付けで文様を描く。

第33表 その他の輸入陶磁器観察一覧 1

団 団版番号	器種	器形	部位	口径 高径 底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (年)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・範囲・質)	素地 (色・質・霜付)	所見		
第73団 団版60 330	碗	端反	口 縁部	- - -	両面に赤・緑で牡丹又は蓮唐草文を描くが殆ど剥落。	透明釉を両面に施釉。両面に荒い質入。	白色で緻密。	纏織成形。景德鎮窯で16c。	11	搅乱
第73団 団版60 331	碗	-	底部	- - 5.2	外面に赤で蘭草、外底に二重蘭草+梵文。内底は赤で二重蘭草+花卉文。花卉文は2色だが落ちて不明。	灰白色の釉を内底から剥付。外底に施釉後、剥付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	纏織成形。景德鎮窯で16c前～中。	19	搅乱
第73団 団版60 332	小 碗	外 反	口 縁部	10.0 - -	外面に金で梅樹文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	纏織成形(型の可能性あり)。景德鎮窯で14c後～15c中。	19	C-5 方形健石 抜穴内
第73団 団版60 333	碗	端反	口 縁部	- - -	外面に赤・緑で玉取獅子文を描くが大半は剥落。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	纏織成形(型の可能性あり)。景德鎮窯で16c。	11	I-9 南側
第73団 団版60 334	碗	直 口	口 縁部	- - -	外面に染付で蓮唐草文。上絵付は剥落して不明。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	纏織成形(型の可能性あり)。景德鎮窯で18c。	11	J-8 仄混層 +搅乱
第73団 団版60 335	碗	端反	口 縁部	- - -	外面に金・赤・青で如意頭繁文と唐草文を描くが大半は剥落。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	纏織成形(型の可能性あり)。景德鎮窯で18c～19c。	11	搅乱
第73団 団版60 336	碗	-	底部	- - 6.6	外底は染付・金で蓮唐草文+如意雲文、外壁は染付で二重蘭草+大字蘭草正方形。内壁は染付+金で二重蘭草+蓮唐草文。両面とも上絵付は大半が剥落。	透明釉を全面施釉後に剥付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	纏織成形。景德鎮窯で18c前。	11	I-9 南側 +搅乱
第73団 団版60 337	碗	端反	口 縁部	- - -	外面に赤・青・黄で鉢荷文?+区画文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	纏織成形。徳化窯で18c。	11	搅乱
第73団 団版60 338	小皿	端反	口 底	7.8 2.0 5.8	内底に赤と緑で花文?を描くが大半は剥落。	透明釉を内底から剥付まで施釉後に剥付と口部を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	型成形。徳化窯で18c後～19c前。	11	I-8 20～30
第73団 団版60 339	小 碗	端反	口 縁部	- - -	両面に上絵付で文様を施すが殆ど剥落し不明。	透明釉を両面に施釉。	灰白色で纏かん。	纏織成形(型の可能性あり)。中国産?で年代不明。	19	B-2 埋ガマ直下
第74団 団版61 340	碗	端反	口 縁部	- - -	外面に白盛りで如意雲文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	纏織成形。景德鎮窯で16c。	11	I-7 10～20
第74団 団版61 341	皿	端反	口 縁部	19.8 - -	外面に白盛りで如意雲文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	纏織成形。景德鎮窯で16c。	11	搅乱

第34表 その他の輸入陶磁器観察一覧2

団 団版番号	器種	器形	部位	口径 底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・細緻・質)	素地 (色・質・霜付)	所見		
第74団 団版61 342	皿	-	底部	- - 8.6	外面に陽刻の雷文+雲文。高台外面に陰刻線。	透明釉を全面施釉後に骨付部分を釉剥ぎ。明青灰色の釉を外面のみ二度掛けするか喰ど剥落。	白色で緻密。	纏織成形。景德鎮窯で17c～18c前。	11	搅乱
第74団 団版61 343	小杯	端反	口縁部	- - -	無文。	外面褐色・内面透明釉の掛け分け。	灰白色で緻密。	纏織成形。景德鎮窯で17c末～18c初。	19	搅乱
第74団 団版61 344	小杯	端反	底部	- - 3.8	内底に染付で二重圓錐+山水文。外底に染付で圓錐+字款。	外面褐色・内面透明釉の掛け分け。全面施釉後に骨付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	纏織成形。景德鎮窯で17c末～18c初。	19	搅乱
第74団 団版61 345	小碗	端反	口縁部	- - -	内面に染付で二重圓錐+八卦文。	外面青磁釉・内面透明釉の掛け分け。	白色で緻密。	纏織成形。景德鎮窯で18c後。	11	J-8 茶褐色灰混刷
第74団 団版61 346	碗	端反	口 底	9.6 4.9 4.2	無文。	外面暗褐釉・内面透明釉の掛け分け。全面施釉後に骨付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	纏織成形。景德鎮窯で16c末～17c。	11	I-9 南側 +搅乱
第74団 団版61 347	碗	直口	口 底	12.8 6.1 5.1	無文。	外面暗褐釉・内面透明釉の掛け分け。外底は骨付を除き透明釉を施釉。	白色で緻密。	纏織成形。景德鎮窯で16c。	19	A-1 石積み6 西側上層
第74団 団版61 348	碗	端反	口縁部	- - -	無文。	外面暗褐釉・内面透明釉の掛け分け。	白色で緻密。	纏織成形。景德鎮窯で16c。	19	搅乱
第74団 団版61 349	瓶	玉壺春	底部	- - 6.5	外面に復唐草文? +牡丹府草文。	外面暗褐釉・内面透明釉の掛け分け。全面施釉後に骨付部分を釉剥ぎ。	白色で緻密。	纏織成形で内面削溝に接ぎ目あり。景德鎮窯で16c後～17c前。	11	I-6 基壇東 +搅乱
第74団 団版61 350	小杯	端反	口 底	3.6 1.9 1.7	無文。	外面暗褐釉・内面透明釉の掛け分け。暗褐釉の発色不良。	白色で緻密。	型成形。外底に焼成時の落着痕?が残る。福建窯で18c～19c前。	11	搅乱
第75団 団版62 351	盤	-	底部	- - 16.6	内面に黄で牡丹文。	緑釉を内底から外側脚部に施釉。	浅黄橙色でやや細かい。	纏織成形。釉裏の下地に白土を塗布。福建窯で15c～16c。	11	J-8 茶褐色灰混刷
第75団 団版62 352	香炉	-	口縁部	12.6 - -	外面に貼付の突帶文(残存4条)。	緑釉を外面に施釉後、突帶部分を釉剥ぎ。	浅黄橙色でやや細かい。	纏織成形。中国産?で明代または清代。	11	搅乱
第75団 団版62 353	水注	-	把手	- - -	無文。	緑釉を外面に施釉。	純橙色でやや細かい。	福建窯で15c～16c。	19	A-1 石積み6 西側上層

第35表 その他の輸入陶磁器観察一覧 3

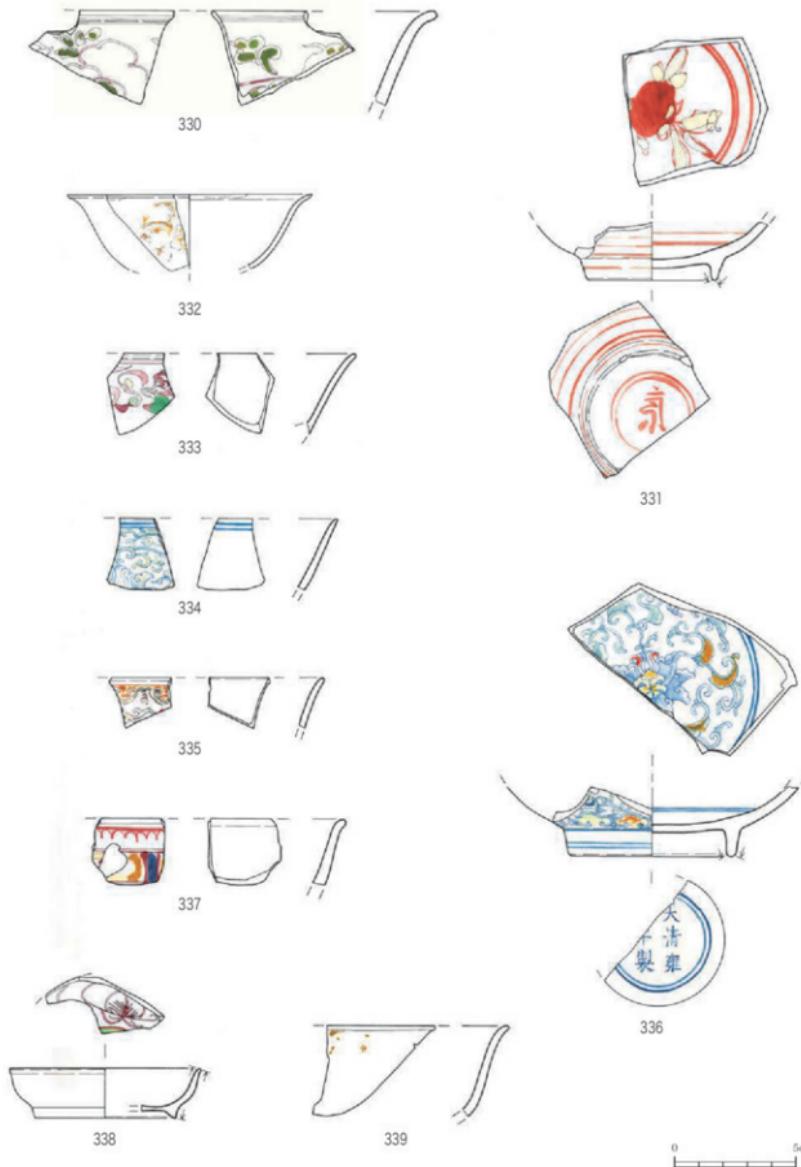
団 団版 番号	器 器種	器形	部位	口 径 器 底 径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・霜附)	所見		
第75団 団版62 354	蓋	一	撮	— — —	無文。	藍釉を外面に施釉するが殆ど剥落。	白色で細かい。	成型で下端に胸接ぎ跡あり。景德鎮窯で15c~16c	11	J-10 10~20
第75団 団版62 355	玉 壺 春	瓶	胴部	— — —	外面に靈芝唐草文か。	外面に翡翠釉を施釉するが殆ど剥落。	灰白色で細かい。	施釉の下地に白土を散布。纏織成形で内面胴部に接ぎ目あり。景德鎮窯で16c。	11	搅乱
第75団 団版62 356	鉢	稜 花	口 緑 部	29.0 — —	無文。	外面紫釉・内面綠釉の掛け分け。	白色で細かい。	纏織挽き後外面全体を花弁状に成形。中国南部で清代。	11	I-6 基壇東
第76団 団版62 357	壺	蓋	底 下 持	12.7 3.6 13.0	無文。	外面に銅綠釉を施釉。全体に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。	纏織成形。蓋甲端部の釉が青白く変色。中国南部で清代。	11	I-9 南朝+J-8 茶褐色灰混刷+搅乱
第76団 団版62 358	壺	蓋	底 下 持	11.9 — 9.4	蓋甲に折枝梅文を貼付、黄・紫で絵付。	緑釉を全面に施釉後、荷接底部を釉剥ぎ。	浅黃橙色でやや細かい。	纏織成形。釉薬の下地に白土を散布。中国産で清代。	11	搅乱
第76団 団版63 359	碗	天 目	口 下 底	11.4 5.6 4.4	内面に禾目多数。	内底から外面胴部に黒釉と黒褐色釉を二度掛け。	灰白色でやや細かい。	纏織成形で高台脇を水平に切り、高台内側は浅い。高台と胴部の間に接ぎ目あり。福建産で15c。	19	B-4 黄褐色土
第76団 団版63 360	碗	天 目	口 下 底	10.4 6.6 3.4	内面に禾目多数。	内底から外面胴部に黒釉とオリーブ褐色釉を二度掛け。	灰白色で細かい。	纏織成形で高台脇を水平に切り、高台内側は浅い。外側一部が被熱。福建産で14c~15c。	19	搅乱
第76団 団版63 361	碗	天 目	口 緑 部	11.4 — —	無文。	内底から外面胴部に黒褐色釉と純黃褐色釉を二度掛け。	灰白色で細かい。	纏織成形で高台脇を斜めに切る。福建産で15c。	19	B-1 石積み3裏込内+搅乱
第76団 団版63 362	碗	天 目	口 緑 部	12.3 — —	無文。	内底から外面胴部に暗褐色釉と黒釉を二度掛け。	淡黄色で細かい。	纏織成形で高台脇を水平に切る。福建産で14c~15c。	11	搅乱
第76団 団版63 363	碗	天 目	口 緑 部	13.3 — —	外面胴部に陰圓線1条。	内底から外面胴部に黒釉とオリーブ褐色釉を二度掛け。	淡黄色で細かい。	纏織成形。福建産で15c。	19	A-3 裏込内
第76団 団版63 364	碗	天 目	底 部	— — 4.6	無文。	内面に黒褐色の釉薬を施釉。	淡黄色でやや細かい。	纏織成形で高台脇を水平に切り、高台内側は浅い。福建産で14c~15c。	19	搅乱
第76団 団版63 365	碗	天 目	底 部	— — 4.0	高台外面に陰圓線1条。	内面に黒褐色の釉薬を施釉。	灰白色でやや細かい。	纏織成形で高台脇を水平に切り、高台内側は浅い。福建産で15c。	11	搅乱
第76団 団版63 366	壺	—	口 緑 部	5.5 — —	無文。	両面に黒褐色の釉薬を施釉。	灰白色で細かい。	纏織成形。中国産で明代か。	19	C-2・3 野面石積み 南朝架石

第36表 その他の輸入陶磁器観察一覧4

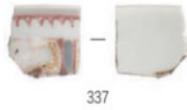
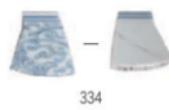
図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 底 径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・範囲・質)	素地 (色・質・霜付)	所見		
第77図 図版64 367	碗	直 口	口 縁 部	20.2	外面に白土・黒土象嵌で書文+花文+竹管文か、内面に白土・黒土象嵌で飛龍文+不明文。	暗オリーブ色の釉を両面に施釉。	純黄橙色で細かく。	織輪成形。朝鮮産で14c後～15c前。	19	E-4 5層
第77図 図版64 368	碗	-	胴 部	-	外面上白土象嵌で蓮弁文、内面に白土象嵌で竹管文か。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	黄灰色で細かく。	織輪成形。朝鮮産で14c後～15c前。	19	D-4 5層
第77図 図版64 369	皿	-	底 部	- 5.8	内面に白土・黒土象嵌で波瀬文? +連珠文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉後、墨付を釉剥ぎ。	灰色で細かい。	織輪成形。朝鮮産で14c後～15c前。	19	E-4 5層
第77図 図版64 370	蓋	-	-	14.4	無文。	なし。	橙色で細かく、赤褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形。下面に染料?が付着。中国産で明代。	11	J-10 20～30
第77図 図版64 371	蓋	-	-	-	無文。	なし。	純黄橙色で細かく、赤褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形。中国産で明代。	19	A-3 裏込内
第77図 図版64 372	蓋	-	-	-	無文。	なし。	橙色で細かく、赤褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形。中国産で明代。	11	搅乱
第78図 図版65 373	蓋	-	撮 鉢	2.1 2.8 10.9	無文。	なし。	橙色でやや細かく、褐色鉱物や赤褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形で底端部は上面折り返し。タイ産で15c～16c。	19	搅乱
第78図 図版65 374	蓋	-	底	- 12.6	無文。	なし。	純黄橙色でやや細かく、褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形で底端部は上面折り返し。タイ産で15c～16c。	11	搅乱
第78図 図版65 375	蓋	-	底	- 14.0	無文。	なし。	浅黄橙色でやや細かく、褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形で底端部は上面折り返し。タイ産で15c～16c。	11	搅乱
第78図 図版65 376	蓋	-	底	- 12.8	無文。	なし。	褐灰色でやや細かく、褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形で底端部は上面折り返し。タイ産で15c～16c。	19	B-4 黄褐色土
第78図 図版65 377	蓋	-	底	- 13.4	無文。	なし。	浅黄橙色でやや細かく、褐色鉱物や赤褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形で底端部は上面折り返し。タイ産で15c～16c。	11	搅乱
第78図 図版65 378	蓋	-	撮	3.0 4.7 -	無文。	なし。	浅黄橙色でやや細かく、褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形。タイ産で15c～16c。	11	搅乱

第37表 その他の輸入陶磁器観察一覧5

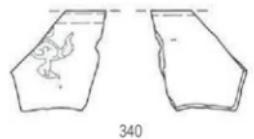
団 団版 番号	器 器種	器形	部 位	口 径 器 底 径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・細網・質)	素 地 (色・質・霜付)	所 見		
第78団 団版65 379	蓋	-	撮	3.3 (4.0) -	無文。	なし。	浅黄褐色でやや細かく、褐色飴物や赤褐色飴物を含む。	ナデ+削り成形。 タイ産で15c~16c。	11	J-10 20~30
第78団 団版65 380	蓋	-	撮	2.9 4.3 -	無文。	なし。	純黄褐色でやや細かく、褐色飴物を含む。	ナデ+削り成形。 タイ産で15c~16c。	11	搅乱
第78団 団版65 381	蓋	-	-	- - -	無文。	なし。	橙色でやや細かく、褐色飴物や赤褐色飴物を含む。	ナデ+削り成形。 タイ産で15c~16c。	19	B-1 石積み5 裏込内
第78団 団版65 382	合子	蓋	底	- - -	蓋甲に鉄絵で草花文か。	透明釉を蓋甲に施釉後、底端部を釉剥ぎ。	灰白色で細かく、黒色飴物を含む。	纏織成形。タイ・シーサッチャナライ窯で16c。	19	B-5 シーリ内木炭屑 (堆)
第78団 団版65 383	合子	身	口 縁 部	10.5 - -	外面に鉄絵で斜格子文+團線か。	透明釉を両面に施釉後、口脛部を釉剥ぎ。	灰白色で細かく、黒色飴物を含む。	纏織成形。タイ・シーサッチャナライ窯で16c。	11	搅乱
第78団 団版65 384	合子	身	底 部	- - 7.0	外面に鉄絵で團線か。	灰釉を外表面部まで施釉。	灰白色で細かく、黒色飴物を含む。	纏織成形。タイ・シーサッチャナライ窯で16c。	11	搅乱
第79団 団版66 385	碗	端 反	底 部	- - 6.7	内面に波瀬文、内底に花文。	灰白色の釉を内底から最付まで施釉後、脛付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	纏織成形で釉下に白化粧。内底に目跡が3箇所残る。ベトナム産で15c後~16c。	11	搅乱
第79団 団版66 386	碗	端 反	口 縁 部	- - -	外面に花唐草文。	透明釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	纏織成形で釉下に白化粧。ベトナム産で15c~16c初。	11	搅乱
第79団 団版66 387	小 杯	端 反	口 底	6.6 3.6 3.8	内面に牡丹唐草文、内底に花文。	透明釉を全面に施釉後、口脣部と脣付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	纏織成形か、ベトナム産で15c前。	11	I-6 基壇東
第79団 団版66 388	瓶	-	胴 部	- - -	外面に蓮弁文+鳳凰文か。	透明釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	纏織成形で釉下に白化粧。ベトナム産で15c~16c初。	19	A-1 石積み6 西側上
第79団 団版66 389	小 碗	直 口	口 底	8.6 4.2 4.0	外面に鉄絵+染付で蔓唐草文。内底に染付で不明文。	透明釉を両面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	纏織成形で釉下に白化粧。内底に目跡が1箇所残る。全体的に被熱。ベトナム産で15c。	19	A-3 裏込内 +A-4 裏込内
第79団 団版66 390	壺	蓋	底	12.6 - 9.6	蓋甲に呉須でラマ式蓮弁文。	透明釉を両面に施釉後、内面底端部を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かい。	纏織成形で釉下に白化粧。ベトナム産で15c~16c前。	11	搅乱
第79団 団版66 391	碗	端 反	口 縁 部	- - -	外面に赤・緑で菊唐草文か。	透明釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	纏織成形で釉下に白化粧。ベトナム産で16c。	11	搅乱
第79団 団版66 392	小 碗	端 反	口 縁 部	11.8 - -	外面に赤・緑で花唐草文、内面に赤で蔓唐草文か。	透明釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	纏織成形で釉下に白化粧。ベトナム産で16c。	19	搅乱



第73図 その他の輸入陶磁器 1



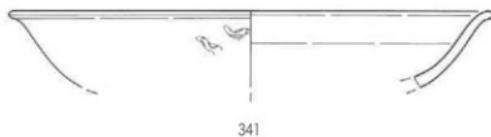
図版60 その他の輸入陶磁器 1



340



343



341

344



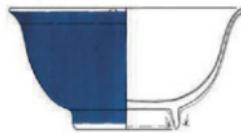
344



342



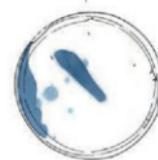
345



346



347



349



348



350



第74図 その他の輸入陶磁器2



340



343



344



341



I



342



I



346



348



I



350

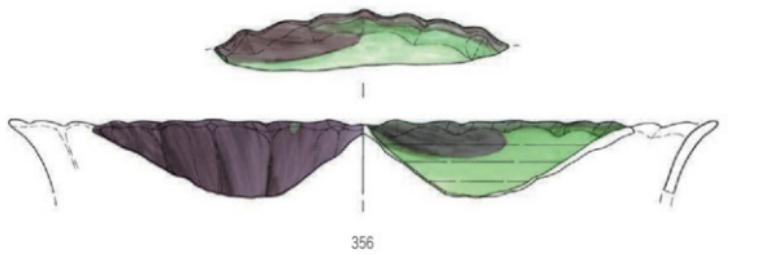
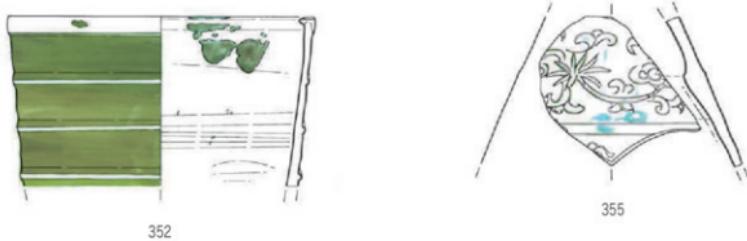
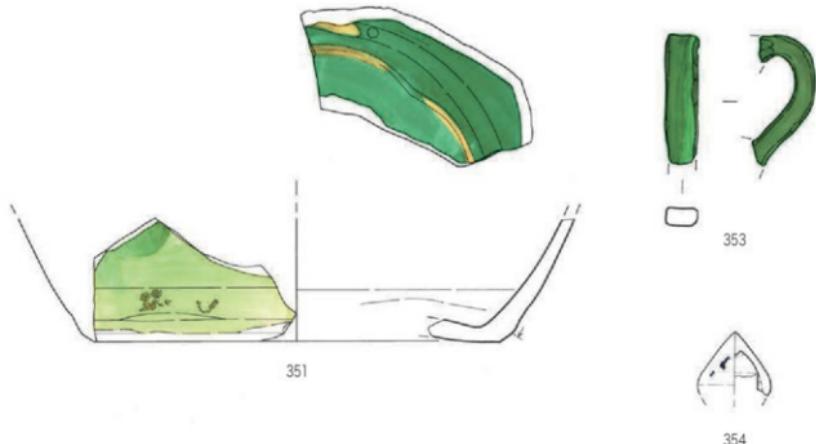


347



349

図版61 その他の輸入陶磁器2



第75図 その他の輸入陶磁器3



353



352



354



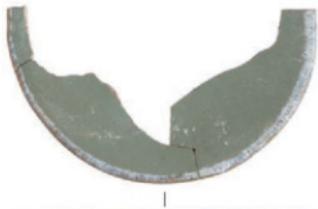
351



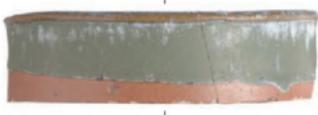
355



356



356

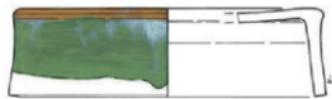


357

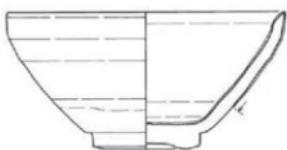


358

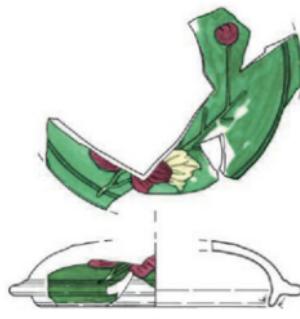
図版62 その他の輸入陶磁器3



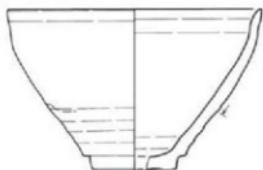
357



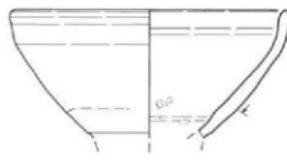
359



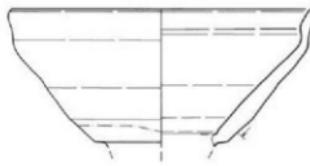
358



360



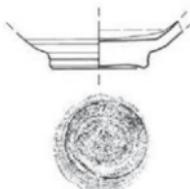
361



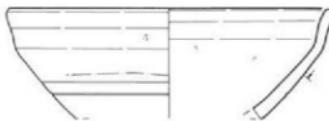
362



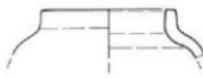
364



365



363



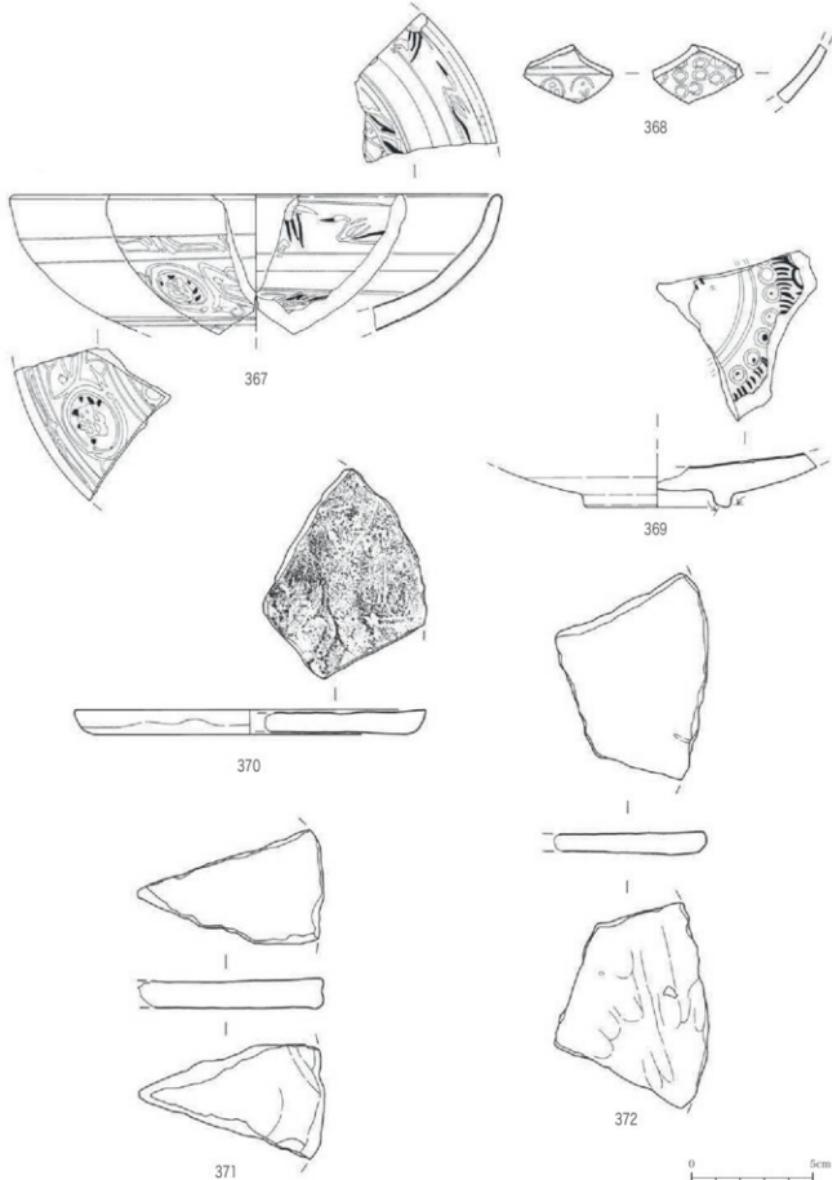
366

A scale bar ranging from 0 to 5 cm, with markings at 0, 2.5, and 5.

第76図 その他の輸入陶磁器 4



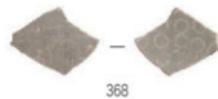
図版63 その他の輸入陶磁器 4



第77図 その他の輸入陶磁器 5



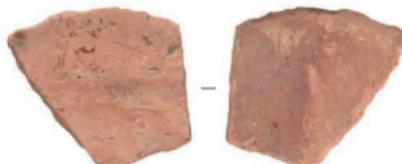
367



368



369



370



371



372

図版64 その他の輸入陶磁器5



373



374



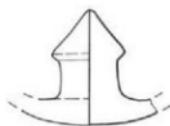
375



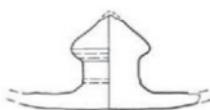
377



376



378



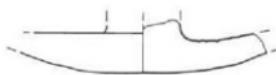
379



380



382



381



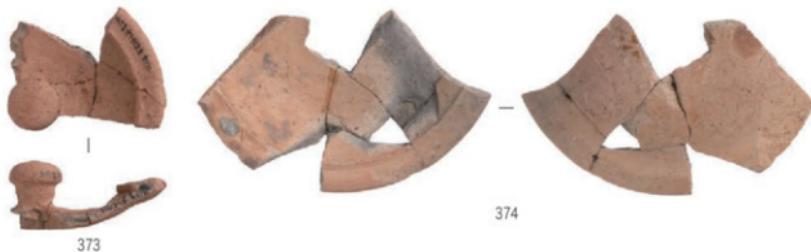
383



384

0 5cm

第78図 その他の輸入陶磁器 6



373

374

375

377



376

383



378

379

380

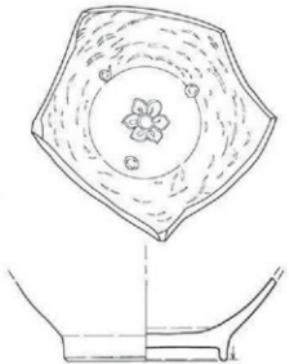


381

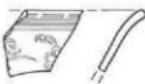
382

384

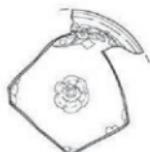
図版65 その他の輸入陶磁器 6



385



386



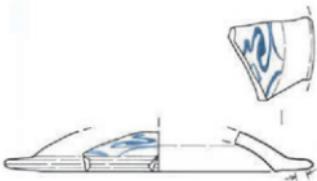
387



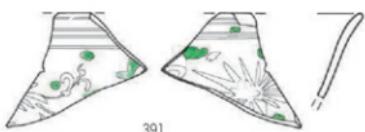
388



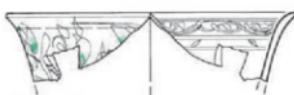
389



390



391



392

0 5cm

第79図 その他の輸入陶磁器 7



386



387



388



390



391



392

図版66 その他の輸入陶磁器 7

第7節 本土産陶磁器（第38～44表、第80～85、図版67～72）

今回の調査で得られた本土産陶磁器は磁器（染付・色絵・白磁）と陶器に大別され、産地は肥前（肥前系含む）・関西系（京焼含む）・薩摩・備前・瀬戸などが確認されている。時期別にみると一部に16世紀代に遡る資料もあるが、数量的には近世以降が圧倒的に多い。出土傾向として17世紀～18世紀は肥前陶器及び磁器・薩摩陶器、18世紀～19世紀は肥前磁器や関西系又は薩摩陶器が目立つ。以下にそれぞれの分類概念を述べ、個々の観察所見は第38～44表に記載する。

1. 磁器

①染付（393～414）

碗は器形から直口口縁（393～400）、端反口縁（401～404）に大別され、前者は時期的に17世紀後半頃と18世紀後半頃に細分できる。後者は蓋付碗が主体となる。瓶（405）は小型のラッキョウ形徳利で、沖縄地域で多く出土する。406はいわゆる蕎麦猪口で、外面に花唐草文などを描く。皿は内底蛇の目釉調ぎを施す直口皿（407）と、蛇の目四形高台を有する輪花口縁皿（408～411）がある。水滴（412）は箱形のもので、上面に型押しと呉須で文様を描く。合子も同じく箱形で、側面に文様を描く（413）。小碗（414）は青磁染付で、内面に呉須で文様を描く。

②色絵（415、416）

瑠璃釉に上絵付けを施した蓋付碗（415、416）。器形は端反口縁か。

③白磁（417～426）

碗は端反口縁（417）や蓋付（419）などがある。皿（418）は底部のみで器形は不明。瓶（420、421）は小型のラッキョウ形徳利と思われる。合子（423）・蓋物（424）・水滴（425、426）は素地や成形などの特徴から年代的に新しいと考えられる。

2. 陶器（427～480）

碗は直口口縁（427～431）と端反口縁（475）に大別され、前者には銅緑釉が施釉される。皿は全て直口口縁だが法量や意匠で異なり、銅緑釉を施釉するもの（432、434、435）、上絵付けで文様を描くもの（445）、貼付高台のもの（476）などがある。鉢は鶲口口縁（436、437、454～458）と端反口縁（438）があり、後者には植木鉢と思われる資料もみられる。描鉢は口縁部を直立させる薄手のもの（439）と、口縁部外面に肥厚帯を有する厚手のもの（470～473）がある。小碗は丸碗（441）とせんじ碗（442）、香炉は聞香炉（448）と考えられ、いずれも喫茶に関係する製品であろう。鍋は行平と呼ばれる把手付の製品（450～453）が多い。壺（459～461）や瓶（463～466）は装飾のない小振りの製品がほとんどだが、急須には白象嵌を施したもの（468）もある。

第38表 本土産陶磁器観察一覧 1

団 団版 番号	器 器種	器形	部位	口 径 底 径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・細かい質入)	素地 (色・質・霜付)	所見		
第80回 団版67 393	碗	直 口	口 底	14.0 7.8 5.0	外面に山水文、内底文様は不明。	灰白色の釉を全面に施釉後、豊付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	織輪成形。豊付に砂が付着。肥前で17c後。	11	搅乱
第80回 団版67 394	碗	直 口	底 部	~ ~ 5.6	外面に雲龍文、内底に萬葉文。	灰白色の釉を両面に施釉後、内底を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	織輪成形。豊付に砂が付着。肥前で17c後。	11	搅乱
第80回 団版67 395	碗	直 口	口 底	12.0 5.6 5.0	外面に樹葉文。	灰白色の釉を全面に施釉後、豊付を釉剥ぎ。	浅黄色でやや細かい。	織輪成形。全体に細かい質入あり。内底に砂が付着。肥前系で18c後。	11	搅乱
第80回 団版67 396	碗	直 口	口 底	12.6 6.5 4.8	外面に折枝梅文。	明オーリーブ灰色の釉を内底から高台・外底・外底に施釉。	灰白色で細かい。	織輪成形。肥前系で18c後。	11	搅乱
第80回 団版67 397	碗	直 口	口 底	11.8 5.4 4.4	外面に折枝梅文。	灰白色の釉を全面に施釉後、内底と豊付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	織輪成形。肥前系で18c後。	11	搅乱
第80回 団版67 398	碗	直 口	口 縁 部	13.6 ~ ~	外面に雪輪草花文か。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	織輪成形。肥前系で18c後。	11	搅乱
第80回 団版67 399	碗	直 口	口 縁 部	11.8 ~ ~	外面に折枝梅文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	織輪成形。肥前系で18c後。	11	搅乱
第80回 団版67 400	碗	直 口	口 縁 部	11.8 ~ ~	外面に折枝梅文。	灰白色の釉を両面に施釉後、内底を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	織輪成形。肥前系で18c後。	11	搅乱
第80回 団版67 401	碗	端 反	口 縁 部	~ ~ ~	内面に連弧文。	灰白色の釉を両面に施釉。	浅黄色でやや細かい。	織輪成形。肥前系で18c後。	11	搅乱
第80回 団版67 402	碗	端 反	口 底	10.6 6.0 4.5	外面に山水人物文?、内面・内底文様は不明。	灰白色の釉を全面に施釉後、豊付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	織輪成形。全体に細かい質入あり。肥前系で19c。	11	J-9 造構上西
第80回 団版67 403	碗	~	底 部	~ ~ 4.8	外面は区画内に花樹文?、内底に花卉文か。	灰白色の釉を両面に施釉後、豊付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	織輪成形。両面に細かい質入あり。肥前で18c後。	11	搅乱
第80回 団版67 404	碗	端 反	口 縁 部	9.2 ~ ~	外面に山水文か。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	織輪成形。肥前で17c後。	11	搅乱

第39表 本土産陶磁器観察一覧2

団 団版 番号	器 器種	器形	部位	口 径 器 底 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・細胞・貫入)	素地 (色・質・霜柱)	所見		
第80団 団版67 405	瓶	一	底部	— — 5.0	外面に圓線。	灰白色の釉を外 面に施釉後、豊 付を釉剥ぎ。	灰白色で細か い。	纏織成形。 肥前で17c後。	11	搅乱
第80団 団版67 406	猪口	一	底部	— — 5.9	外面に蓮花唐草 文?+蓮弁文、内 底に五弁花文。	灰白色の釉を両 面に施釉後、豊 付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	纏織成形。 肥前で18c後。	11	搅乱
第81団 団版68 407	皿	直 口	口 底	12.5 3.2 4.7	内面に二重斜格 子文。	灰白色の釉を両 面に施釉後、内底 と豊付を釉剥ぎ。	灰白色でやや細 かい。	纏織成形。 肥前系で18c後。	11	搅乱
第81団 団版68 408	皿	直 口	口 底	14.0 3.7 8.4	外面に如意頭文 崩れの唐草文、内 面に山水文か。	灰白色の釉を全 面に施釉後、外 底を釉剥ぎ。	浅黄色でやや細 かい貫入あり。	纏織成形。全体に 細かい貫入あり。 肥前で18c後。	19	搅乱
第81団 団版68 409	皿	直 口	口 縁 部	15.4 — —	外面に如意頭文崩れ の唐草文?、内面に四方 文?+刻葉文?+三筋格子文。	明緑灰色の釉を 両面に施釉。	灰白色で細か い。	纏織+型打ち成 形。肥前で18c 後。	11	搅乱
第81団 団版68 410	皿	直 口	口 縁 部	— — —	外面に如意頭文 崩れの唐草文、内 面に花唐草文か。	灰白色の釉を両 面に施釉。	灰白色で細か い。	纏織+型打ち成 形。肥前で18c 後。	11	1-9 南側
第81団 団版68 411	皿	直 口	底 部	— — 9.4	外面に唐草文、内 面に蛸唐草文、内底に 蓮紋文?+三友文。	灰白色の釉を両 面に施釉後、外 底を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	纏織+型打ち成 形。肥前で18c 後。	11	搅乱
第81団 団版68 412	水滴	一	口 底	— 1.7 縦:4.3 横:5.6	外面に型押しの 玉取獅子文か。	灰白色の釉を全面 に施釉後、一部側 面と外底を釉剥ぎ。	灰白色で細か い。	型成形。外底に 布目痕が残る。肥 前系で明治。	11	J-9灰混層 +搅乱
第81団 団版68 413	合子 の身	一	口 底	— 2.0 —	外面に四方 襷文。	灰白色の釉を内底か ら外面側部まで施釉 後、口唇部を釉剥ぎ。	灰白色でやや細 かい。	型成形。明治頃。	11	1-8 10~20茶褐色 灰混層
第81団 団版68 414	小碗	一	底 部	— — 4.5	内底文様は不 明。	内面に白磁釉、外 面に青磁釉を施釉 後、豊付を釉剥ぎ。	灰白色でやや細 かい。	纏織成形。全体に細 かい貫入あり。肥前 で17c~18c初。	19	B-4 2層
第81団 団版68 415	蓋	一	底	— — 9.4	外面に牡丹文? を描くが剥落。 上豊付は金か。	珊瑚釉を両面に 施釉。	白色で緻密。	纏織成形。肥前 で18c後~19c 前。	11	I-7・10~20 +搅乱

第40表 本土産陶磁器観察一覧3

団 団版 番号	器 器種	器形	部位	口径 器底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・範囲・質)	素地 (色・質・霜付)	所見		
第81団 団版68 416	碗	端 反	口 縁部	10.5 - -	外面に牡丹唐草文、 内面に雷文を描くが 剥落。上絵付は金か。	珊瑚釉を両面に 施釉。	白色で緻密。	纏釉成形。肥前 で18c後～19c 前。	11	搅乱
第81団 団版68 417	碗	端 反	口 底	12.9 5.1 4.6	無文。	灰白色の釉を両 面に施釉後、内底 と墨付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	纏釉成形。肥前 で18c後。	11	J-9 灰混層
第81団 団版68 418	皿	-	底 部	- - 3.3	無文。	白色の釉を両面 に施釉後、墨付 を釉剥ぎ。	灰白色で細か い。	纏釉成形。肥前 系で17c後か。	11	搅乱
第81団 団版68 419	碗	直 口	口 縁部	13.8 - -	無文。	灰白色の釉を両 面に施釉。	灰白色で細か い。	纏釉成形。肥前 系で19cか。	11	搅乱
第81団 団版68 420	瓶	-	底 部	- - 5.0	無文。	明緑灰色の釉を 外面に施釉後、 墨付を釉剥ぎ。	灰白色で細か い。	纏釉成形。墨付 に砂が付着。肥 前で17c後。	11	搅乱
第81団 団版68 421	瓶	-	底 部	- - 6.7	無文。	灰白色の釉を外 面に施釉後、墨 付を釉剥ぎ。	灰黄色でやや 細かい。	纏釉成形。外面に 窓あり。肥前 で17c後～18c前。	11	搅乱
第81団 団版68 422	瓶	-	底 部	- - 5.2	無文。	灰白色の釉を外 面に施釉後、墨 付を釉剥ぎ。	灰白色で細か い。	纏釉成形。肥前 で17c後。	11	搅乱
第81団 団版68 423	合 子 の 身	-	口 底	6.7 2.1 6.1	無文。	灰白色の釉を内底か ら外面脚部まで施釉 後、口唇部を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	纏釉成形。肥前 系で19c後～明治。	11	I-8 20～30 茶褐色灰混層
第82団 団版69 424	蓋 物	筒 形	口 縁部	25.1 - -	無文。	灰白色の釉を両 面に施釉後、口 唇部を釉剥ぎ。	白色で緻密。	纏釉成形。肥前 系で19cか。	11	搅乱
第82団 団版69 425	水 滴	-	口 底	- 1.4 -	上面に型押して 菊花文か。	灰白色の釉を全 面に施釉後、外 底を釉剥ぎ。	白色で緻密。	型成形。外底に 布目痕が残る。肥 前系で19c。	11	搅乱
第82団 団版69 426	水 滴	-	口 底	- 2.2 -	上面に貼付の菊 花文。	灰白色の釉を外 面上部に施釉。	灰白色で緻密。	型成形。外底に布 目痕が残る。肥前 系で18c～19c。	11	J-9 遺構上西

第41表 本土産陶磁器観察一覧4

団 団版 番号	器 器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・細胞・貫入)	素地 (色・質・霜付)	所見		
第82回 団版69 427	碗	直 口	口 緑 部	12.1 — —	無文。	内面に灰釉・外 面に銅緑釉を施 釉。	浅黄色で細か い。	纏輪成形。肥前 で17c後。	11	搅乱
第82回 団版69 428	碗	直 口	口 緑 部	— — —	無文。	内面に灰釉・外 面に銅緑釉を施 釉。	灰白色で細か い。	纏輪成形。肥前 で17c後。	11	搅乱
第82回 団版69 429	碗	直 口	底 部	— — 4.0	無文。	内面から高台際 まで銅緑釉を施 釉。	灰白色で細か い。	纏輪成形。肥前 で17c後。	11	搅乱
第82回 団版69 430	碗	直 口	底 部	— — 4.4	無文。	内面に灰釉・外 面に銅緑釉を施 釉。	純黄橙色で細 かい。	纏輪成形。肥前 で17c後。	11	搅乱
第82回 団版69 431	碗	直 口	底 部	— — 4.5	無文。	内面に銅緑釉を 施釉。	浅黄橙色で細 かい。	纏輪成形。肥前 で17c後。	11	搅乱
第82回 団版69 432	皿	直 口	口 緑 部	— — —	無文。	内面から外面部 まで銅緑釉を施 釉。	灰白色で細か い。	纏輪成形。肥前 で17c後。	11	搅乱
第82回 団版69 433	碗	—	底 部	— — 5.2	無文。	灰白色の釉を両 面に施釉後、内底 と付口を釉剥ぎ。	浅黄橙色でや や細かい貫入あり。 肥前?で18c前。	纏輪成形。両面に 細かい貫入あり。 肥前?で18c前。	11	搅乱
第82回 団版69 434	皿	—	底 部	— — 3.7	無文。	内底から外面部 まで銅緑釉を施釉 後、内底を釉剥ぎ。	灰白色で細か い。	纏輪成形。肥前 で17c末~18c 後。	11	1~7 30~40
第82回 団版69 435	皿	—	底 部	— — 4.1	無文。	内底から外面部 まで銅緑釉を施釉 後、内底を釉剥ぎ。	浅黄橙色で細 かい。	纏輪成形。肥前 で17c末~18c 後。	11	搅乱
第82回 団版69 436	鉢	鶴 緑	口 緑 部	— — —	内面に白土で刷 毛目の波状文。	灰黄褐色の釉を 両面に施釉。	純橙色でやや 細かい。	纏輪成形。肥前 で17c後~18c 前。	11	J~8 10~20
第82回 団版69 437	鉢	鶴 緑	口 緑 部	29.6 — —	内面に白土で刷 毛目の波状文。	灰黄褐色の釉 (銅緑釉?)を両 面に施釉。	褐灰色でやや 細かく、砂粒を含む。	纏輪成形。肥前 で18c。	11	搅乱
第83回 団版70 438	鉢	端 反	口 緑 部	13.2 — —	外面に鉄絵で草 花文か。	灰褐色の釉を両 面に施釉。	橙色でやや細 かく、砂粒を含む。	纏輪成形。肥前 で1590~1610 年代。	11	搅乱
第83回 団版70 439	縹 鉢	—	口 緑 部	24.8 — —	無文。	暗オリーブ色の 釉を両面に施釉。	純橙色でやや 細かく、砂粒を含む。	纏輪成形。肥前 で1590~1610 年代。	19	B-5シリーニ底面黒 褐色土(黒) +B-5シリーニ内黒褐色土
第83回 団版70 440	皿	兜 鉢	口 緑 部 底	17.3 4.3 5.7	内面に鉄絵で草 花文か。	灰黄褐色の釉を 内底から外面部 まで施釉。	橙色でやや細 かく、砂粒を含む。	纏輪成形。内底に 胎上目積み跡が残る。 肥前で1600~ 1620年代。	11	搅乱

第42表 本土産陶磁器観察一覧5

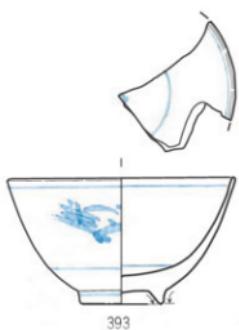
団 団版 番号	器 器種	器形	部位	口 径 底 径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・範囲・質)	素地 (色・質・霜付)	所見		
第83団 団版70 441	小 碗	直 口	口 縁 部	8.8 — —	外面に緑・赤で 籠文か。	灰白色の釉を両 面に施釉。	灰白色でやや細 かい質。	織輪成形。全体に 細かい質入あり。 関西系で18c。	11	搅乱
第83団 団版70 442	小 碗	せん じ	口 縁 部	8.8 — —	無文。	浅黄色の釉を両 面に施釉。	淡黄色でやや細 かい質。	織輪成形。関西 系(肥前の可能性 あり)で18c。	11	搅乱
第83団 団版70 443	皿	甚 筒 底	口 縁 底	6.6 1.5 2.2	無文。	無釉。	灰白色で細 かい質。	打明皿か。織輪 成形。関西系で 19cか。	19	搅乱
第83団 団版70 444	皿	甚 筒 底	口 縁 底	8.2 1.7 2.7	外面に純黄色の 圓線数条。	無釉。	灰白色で細 かい質。	打明皿か。織輪 成形。関西系で 19cか。	19	搅乱
第83団 団版70 445	皿	—	底 部	— — 3.3	外面に橙・緑で 籠文か。外底に 「寶山」の刻印	灰白色の釉を内 底から外面腰部 まで施釉。	淡黄色でやや細 かい質。	織輪成形。全体 に細かい質入あ り。京焼で18c。	11	搅乱
第83団 団版70 446	急 須	—	底 部	— — 6.0	無文。	鈍黄褐色の釉を 外面胴部に施 釉。	浅黄橙色で細 かい質。	織輪成形。関西 系?で19c前。	11	J-9 灰混層
第83団 団版70 447	急 須	—	底 部	— — 6.0	無文。	浅黄色の釉を内 面に施釉。	淡黄色でやや細 かい質。	織輪成形で獸足? を貼付。内面に細 かい質あり。関西系 で18c~19c。	11	搅乱
第83団 団版70 448	香 炉	筒 形	口 縁 底	7.8 5.7 6.6	外面に黒・青で 紗綾形文。	灰白色的釉を内 面胴部から外面 に施釉。	淡黄色でやや細 かい質。	織輪成形。全体に細 かい質入あり。京燒 で17c後~18c前。	19	搅乱
第83団 団版70 449	瓶 子	蓋	底	— — 2.4 5.0	無文。	無釉。	灰白色で細 かい質。	織輪成形。関西 系で近代。	19	搅乱
第83団 団版70 450	鍋	蓋	底	— — 15.6	蓋甲に陰圓線3 条。	灰白色的釉を両 面に施釉。	灰白色でやや細 かい質。	織輪成形。関西 系で19c。	11	搅乱
第83団 団版70 451	鍋	蓋	振	4.2 — —	蓋甲に陰圓線4 条。	灰白色的釉を内 底から振外面ま で施釉。	淡黄色でやや細 かい質。	織輪成形。関西 系で19c。	11	搅乱
第83団 団版70 452	鍋	行 平	口 縁 部	17.6 — —	無文。	灰白色的釉を両 面に施釉後、口 唇部を釉剥ぎ。	淡黄色でやや細 かい質。	織輪成形。関西 系で19c。	11	搅乱
第83団 団版70 453	鍋	行 平	口 縁 部	19.6 — —	無文。	灰オリーブ色の 釉を内面から外 面胴部まで施釉。	浅黄橙色でや や細かい質。	織輪成形。関西 系で19c。	11	搅乱

第43表 本土産陶磁器観察一覧6

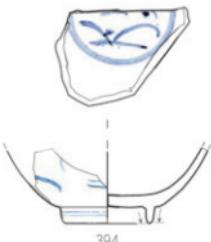
団 団版 番号	器 器種	器形	部位	口径 器底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・範囲・質)	素地 (色・質・霜粒)	所見		
第84団 団版71 454	鉢	鉢 緑	口 緑部	31.4 — —	無文。	両面に泥釉を施釉。	灰色でやや細かく、砂粒を含む。	纏織成形で口緑部は内側折り返しか。 薩摩?で18c前。	19	搅乱
第84団 団版71 455	鉢	鉢 緑	口 緑部	32.4 — —	外面口緑部に貼付の糞目状突帯。	暗褐色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	純褐色でやや細かく、砂粒を含む。	纏織成形。口唇部に糞目が残る。 薩摩で17c後。	11	J-9 灰混層
第84団 団版71 456	鉢	鉢 緑	口 緑部	— — —	外面口緑部に貼付の糞目状突帯。	黒褐色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	純褐色でやや細かく、砂粒を含む。	纏織成形で口緑部は内側折り返し。 薩摩で17c後~18c。	11	搅乱
第84団 団版71 457	鉢	鉢 緑	口 緑部	29.6 — —	外面に多数の横位沈線(成形痕か)。	暗オリーブ褐色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	純赤褐色でやや細かく、砂粒を含む。	纏織成形で口緑部は内側折り返し。 薩摩で18c~19c。	11	搅乱
第84団 団版71 458	鉢	鉢 緑	口 緑部	26.0 — —	無文。	両面に泥釉を施釉。	灰色でやや細かく、砂粒を含む。	口緑部は内側折り返し。沖縄の可能性あり。	19	B-4 黄褐色土 +2層
第84団 団版71 459	壺	—	口 緑部	10.0 — —	無文。	黒褐色の釉(泥釉?)を両面に施釉。	純赤褐色でやや細かく、砂粒を含む。	纏織成形。薩摩で18c~19c。	11	搅乱
第84団 団版71 460	壺	—	口 緑部	— — —	無文。	暗オリーブ褐色の釉を両面に施釉。	橙色でやや細かく、砂粒を含む。	纏織成形。山茶家(急須)の可能性あり。 薩摩で19c前。	11	搅乱
第84団 団版71 461	壺	—	底部	— — 15.6	無文。	黒褐色の釉(泥釉?)を両面に施釉。	灰色でやや細かく、砂粒を含む。	纏織成形。薩摩で17c。	19	搅乱
第84団 団版71 462	鉢	—	口 底	13.4 6.7 10.7	外面に暗オリーブ色の釉を流し掛け。	オリーブ灰色の釉を内底から外底際まで施釉後、外面腰部を釉剥ぎ。	灰色でやや細かく、砂粒を含む。	花器か。纏織成形。薩摩で17c。	11	搅乱
第84団 団版71 463	瓶	—	口 緑部	4.8 — —	無文。	灰オリーブ色の釉を両面に施釉。	褐灰色でやや細かい。	纏織成形。薩摩で17c前か。	11	搅乱
第84団 団版71 464	瓶	—	口 緑部	2.5 — —	無文。	黒褐色の釉を内面頭部から外面に施釉。	純橙色でやや細かく、砂粒を含む。	纏織成形。薩摩?で近代。	19	搅乱
第84団 団版71 465	瓶	—	底部	— — 5.2	無文。	褐色の釉を外面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	純褐色で細かい。	纏織成形。薩摩で18c~19c。	11	J-8・10~20 +搅乱
第84団 団版71 466	瓶	—	底部	— — 6.0	無文。	オリーブ褐色の釉を外面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	純褐色で細かく、砂粒を含む。	纏織成形。薩摩で17c後~18c。	19	搅乱

第44表 本土産陶磁器観察一覧7

団 団版 番号	器 器種	器形	部位	口 径 器底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・細かい質)	素地 (色・質・霜附)	所見		
第84団 団版71 467	急須	蓋	底 身	6.8 — 5.2	蓋甲に鶴頭で千鳥印。	灰白色の釉を蓋甲に施釉。	白色でやや細かい。	纏織成形。蓋甲に細かい質入あり。薩摩で18c後～19c。	11	1-9 南側
第84団 団版71 468	急須	身	口 縁部	6.1 — —	外面に白土象嵌で縱・横・斜線+菊花+梅花か。	黒褐色の釉を両面に施釉。	灰褐色で細かい。	纏織成形。薩摩?で近代か。	11	搅乱
第84団 団版71 469	急須	身	口 縁部	8.5 — —	外面に多数の横位沈線(成形痕か)。	褐灰色の釉を両面に施釉。	赤橙色でやや細かく、砂粒を含む。	纏織成形。薩摩?で18c中。	11	搅乱
第85団 団版72 470	擂鉢	—	口 縁部	— — —	無文。	なし。	純褐色でやや細かく、砂粒や白色艶物を含む。	纏織成形。備前で16c。	11	搅乱
第85団 団版72 471	擂鉢	—	口 縁部	— — —	内面に単位不明の櫛目(残存4本)。	なし。	黄灰色でやや細かく、砂粒や白色艶物を含む。	纏織成形。備前で15c。	19	B-4 黄褐色土
第85団 団版72 472	擂鉢	—	底部	— — —	内面に単位不明の櫛目(残存6本)。	なし。	黄灰色でやや細かく、砂粒や白色艶物を含む。	纏織成形。備前で16cか。	19	搅乱
第85団 団版72 473	擂鉢	—	底部	— — —	内面に単位不明の櫛目(残存6本)。	なし。	純褐色でやや細かく、砂粒や白色艶物を含む。	纏織成形。備前で15cか。	11	搅乱
第85団 団版72 474	甕	—	口 縁部	43.2 — —	外面に陰彫線2条。	浅黄色の釉を外面口縁部に施釉(自然釉か)。	灰赤色で細かい。	東南アジア産の可能性あり。纏織成形。備前で16cか。	19	B-1 石積み6 西側上層
第85団 団版72 475	碗	端 反	口 底	15.9 7.4 6.6	無文。	明黄褐色の釉を内底から高台際まで施釉。	浅黄色でやや細かい。	纏織成形。関西系?で18c～19c。	11	J-9 灰混層
第85団 団版72 476	皿	直 口	口 底	18.6 2.7 10.4	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	灰黄色で細かく、白色土がマーブル状に混ざる。	蓋の可能性あり。纏成形で焼成後に口部を開ける。九州南部で18c～19c。	19	B-5 シーリ内木炭屑(等) + 搅乱
第85団 団版72 477	火鉢	—	胴 部	— — —	外面にスタンプの菊花文。	なし。	純黃橙色で細かい。	香炉の可能性あり。纏織成形。内面に深い付着。14c後～16cか。	19	D-3 5層
第85団 団版72 478	鍋	—	口 縁部	— — —	無文。	オリーブ黄色の釉を口軽部から外面に施釉。	灰白色でやや細かく、白色好物を含む。	纏織成形。18c～19c。	11	搅乱
第85団 団版72 479	蓋	—	撮 身	4.8 — —	外面に陰彫線。	暗オリーブ色の釉を外面に施釉後、撮端部を釉剥ぎ。	純黃橙色でやや細かく、砂粒を含む。	纏織成形。薩摩?で19cか。	11	搅乱
第85団 団版72 480	蓋	—	撮 底	— 3.4 15.4	無文。	黒褐色の釉を全面に施釉後、底端部を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かく、白色好物を含む。	纏織成形。九州南部?で17cか。	11	搅乱



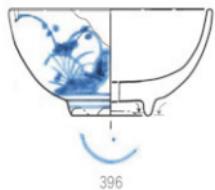
393



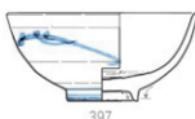
394



395



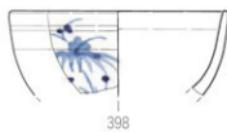
396



397



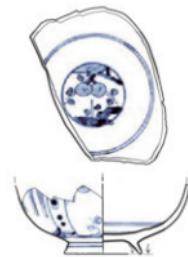
401



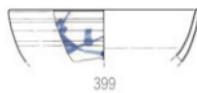
398



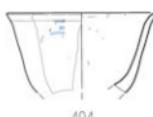
402



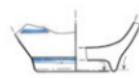
403



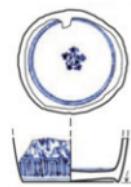
399



404



405



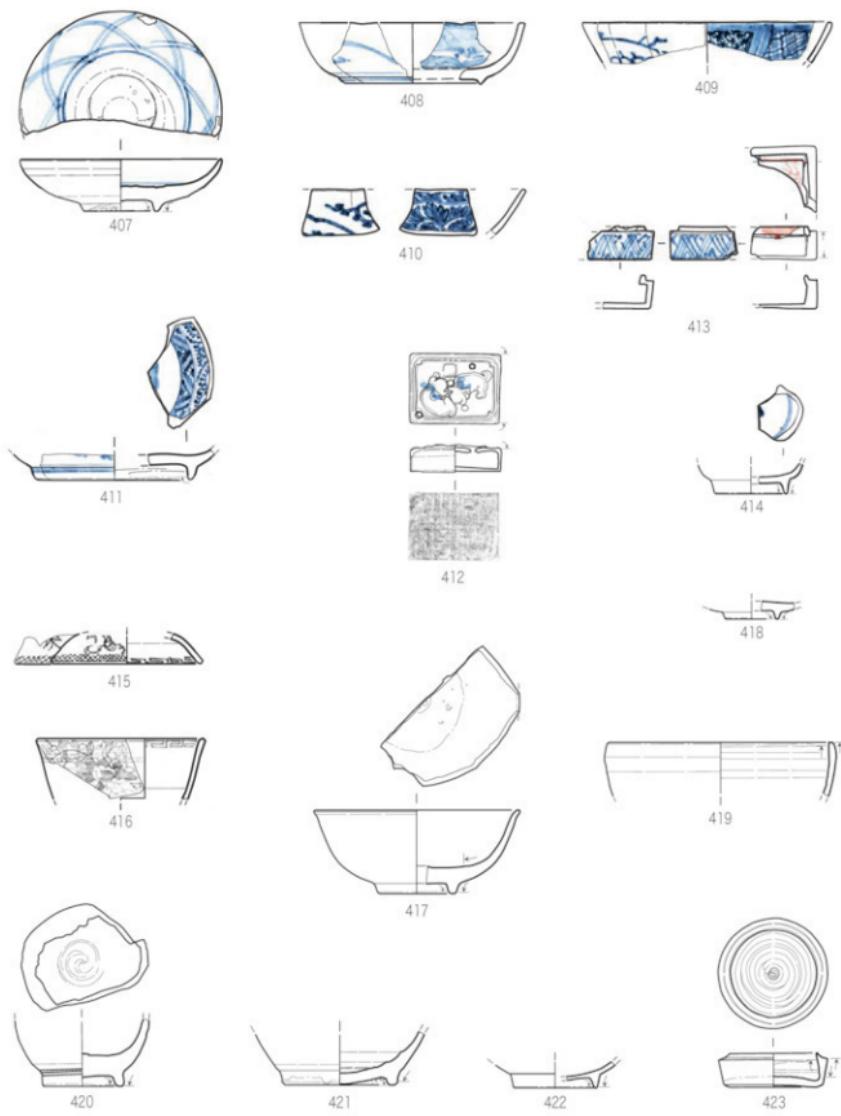
406



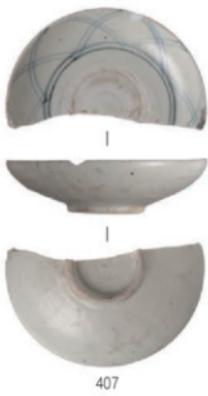
第80図 本土産陶磁器 1



図版67 本土産陶磁器1



第81図 本土産陶磁器 2



407



408



409



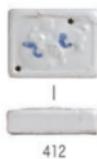
410



413



411



412



414



415



416



420



419



417



418



421

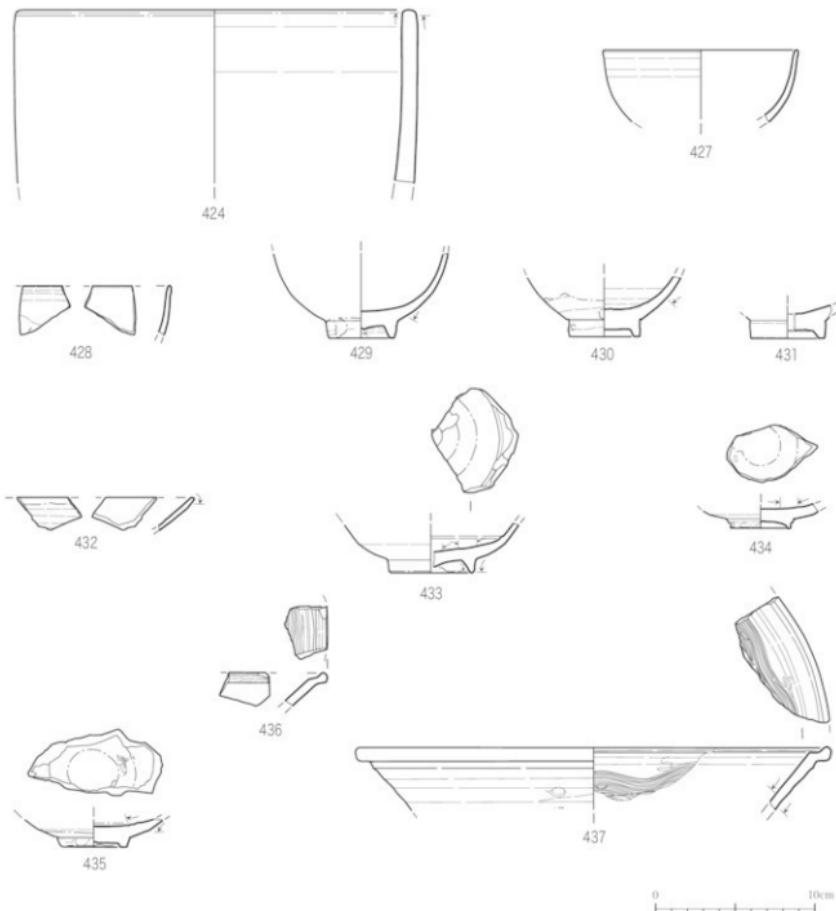
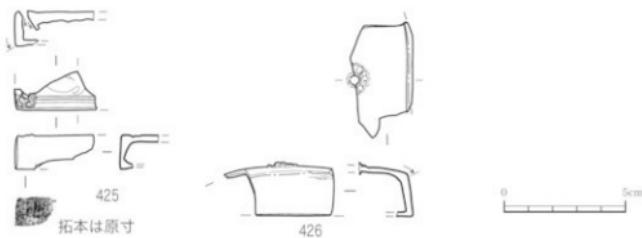


422



423

図版68 本土産陶磁器 2



第82図 本土産陶磁器 3



424



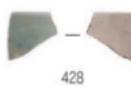
425



426



427



428



429



430



431



432



434



436



435

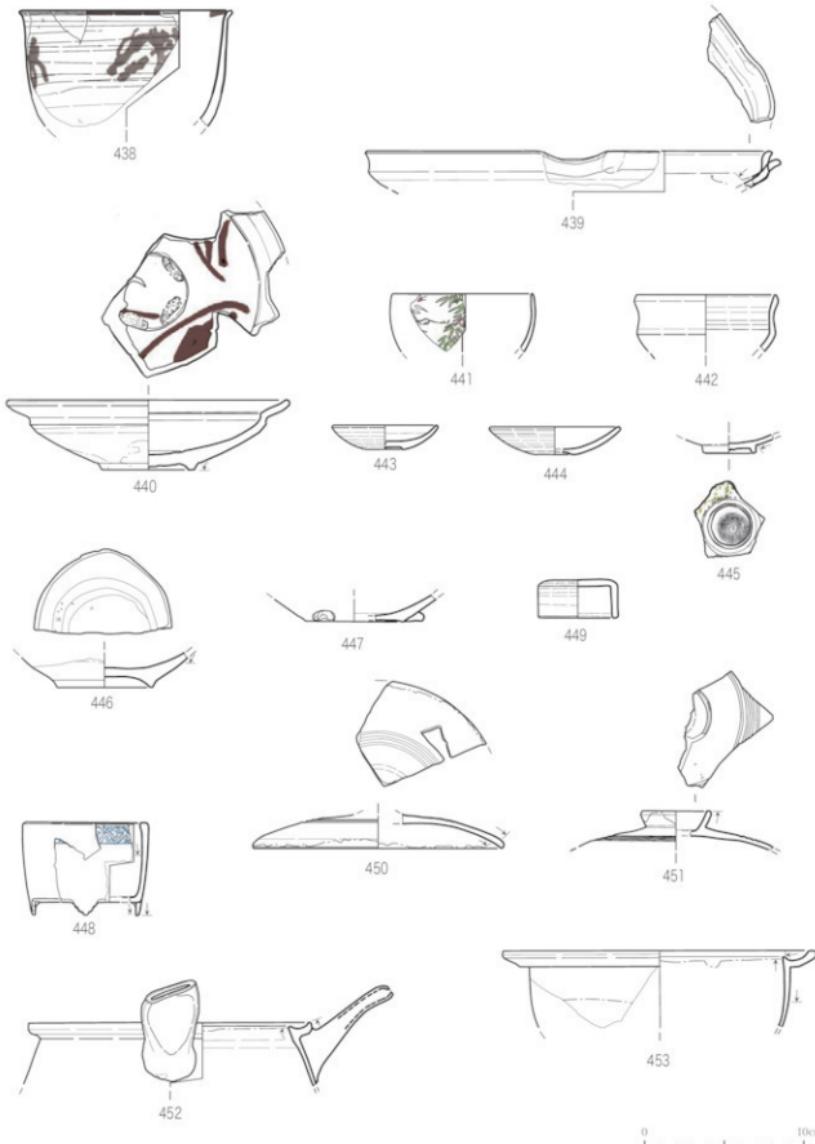


433

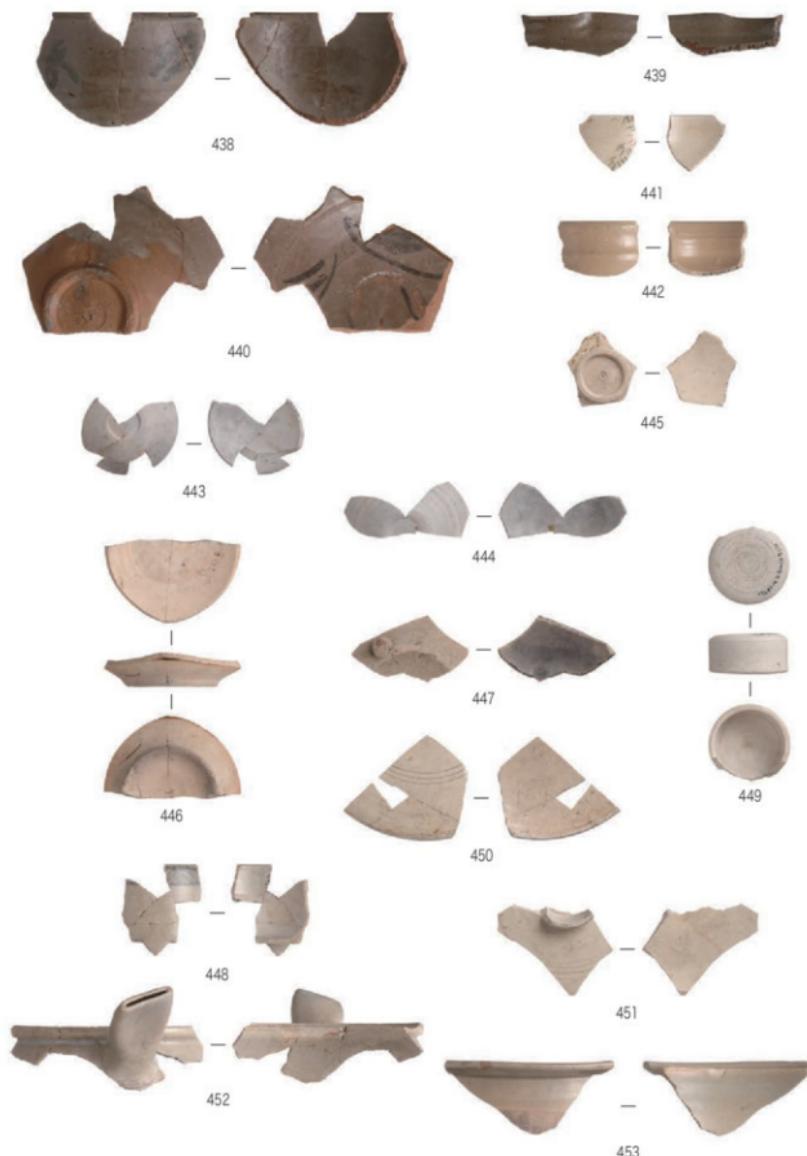


437

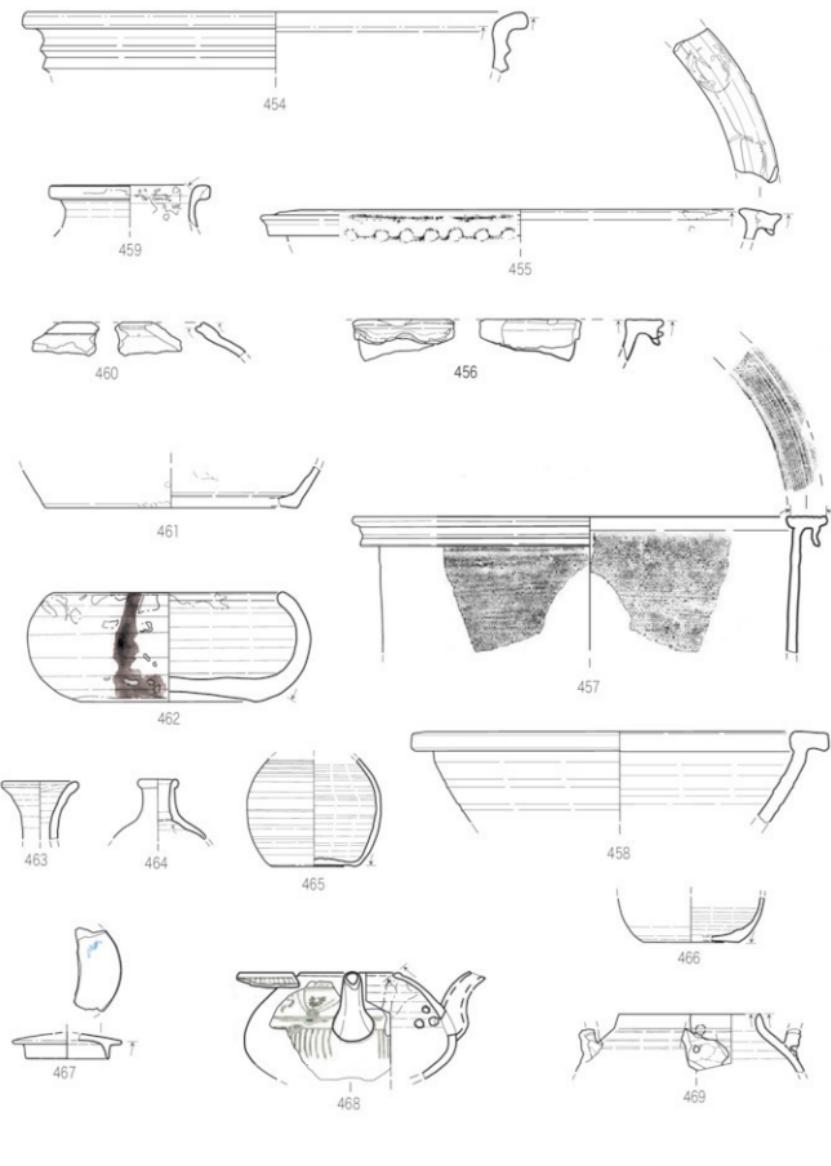
図版69 本土産陶磁器 3



第83図 本土産陶磁器 4



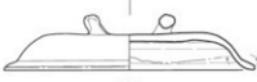
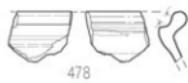
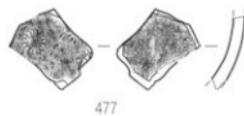
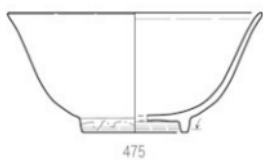
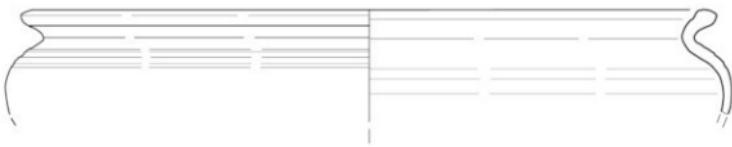
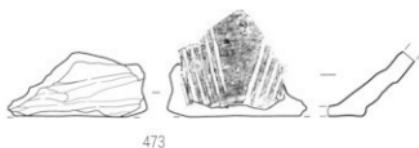
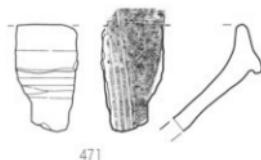
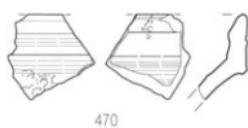
図版70 本土産陶磁器 4



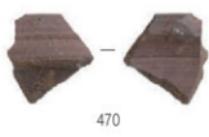
第84図 本土産陶磁器 5



図版71 本土産陶磁器5



第85図 本土産陶磁器 6



470



471



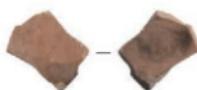
472



473



474



477



475



478



479



476



480

図版72 本土産陶磁器 6

第8節 沖縄産施釉陶器（第45～48表、第86～90図、図版73～77）

沖縄産陶器の中で、「上焼（ジョウヤチ）」と呼ばれる、器面に釉を施す焼物の一群である。本地区では4,609点が出土しており、そのうち特徴的なもの55点を図示した。器種としては、碗、皿、鉢、小鉢、鍋、蓋、灯明具、甕、壺、急須、瓶などが出土している。個々の詳細については観察表に譲るが、以下に各器種の概要を述べる。

1. 碗（481～501）

直口口縁で胴半ばまで灰釉を施釉し、胴部から腰部にかけて逆「ハ」の字状に立ち上がる器形として481～484がある。外反口縁で胴部にやや丸みを持つ器形には、鉄釉のみを施釉するもの（487）、鉄釉と白化粧を掛け分けるもの（491）、内・外面を白化粧と透明釉で施釉し、鉄釉で丸文を描くものや（499）、線彫りで花文を描くもの（500）などがある。直口口縁で胴部に丸みを持ち、白化粧と透明釉を掛けるものうち（497、498、501）、501は線彫りで丸文や花文などの文様を描く。

その他に特徴的なものとして、489、495のように外底に墨書の入る資料があるほか、493、494の資料は、外面に青釉を施釉後、密な雲文が線彫りされ、中国磁器の粉彩をモデルに丁寧に製作されており、製作にあたり中国の影響を受けたことがわかる。

2. 小碗（502～511）

口縁部が外反する資料が中心である。特徴的なものとして、外面に六角形の面取りを施すもの（504、505）、白化粧と透明釉に鉄釉を掛け分けるもの（507）、線彫りで丸文と十字文を組み合わせるもの（508）などがある。509は直口口縁で、内・外面に白化粧と透明釉を施し、内底に線彫りで巴文を描く。また、510のように内底に「神社」の文字が呉須で書かれた資料も見られる。

3. 皿（512～516）

外反口縁と稜花口縁が見られる。512、516は外反口縁で、512は内底に丸文を描く。514、515は稜花口縁で、514は内底に線彫りの二重圏線と「弓」状の文様を描く。515は線彫りで草文や斜沈線、印花文などを組み合わせている。他に特徴的な資料として、内底に「御内」の文字が墨書きされた底部資料（513）がある。

4. 鉢（517～521）

内湾口縁で内・外面に鉄釉を施すもの（519、520）、肥厚口縁で注ぎ口を持つもの（521）、その他に特徴的な資料として、外底に「寄・・」、高台脇に不明文字が墨書きされた底部資料がある（518）。

5. 急須（523～525）

灰釉と鉄釉を掛け分け、胴下部に丸みを持つもの（523）、胴部に丸文、巴文、方形文を組み合わせるものがある（524）。他に特徴的なものとして、胴上部に貼付された吊手に「天」の文字が印されたもの（525）がある。

6. 急須の蓋(526、527)

外面に白化粧と透明釉を施し、甲蓋端部に二重圓線と線彫りの星形文を描くもの(526)と、無文で鉄釉を施釉するものがある(527)。

7. 大型急須(528)

いわゆるアンビンと呼ばれるものである。内・外面に鉄釉を施す。

8. 壺(522)

頸部が長く、肩部が強く張り出す器形。内面に鉄釉、外面に黒釉を施釉。

9. 瓶(529)

いわゆるカラカラと呼ばれるものである。内・外面に白化粧と透明釉を施し、線彫りで文様を描く。

10. 鍋(530、531)

口唇の内側を窪ませ、底部から胸部にかけてゆるやかな丸みを持つ器形で鉄釉を施す。

11. 鍋の蓋(532)

鍋の蓋にあたると思われる。鉄釉を施す。

12. 灯明具(533、534)

足つきの灯明具で、鉄釉を施釉する。外底が平坦なものと(533)、高台が逆「ハ」の字形を呈するものがある(534)。

13. 壺(535)は口縁部が逆「L」字形を呈する。外面に灰釉、内面に白釉と透明釉薬を掛け、さらに緑釉を流し掛けている。

〈参考文献〉

沖縄県文化財調査報告書第111集「湧田古窯跡（I）－県庁舎行政棟建設に係わる発掘調査」
沖縄県教育委員会

那覇市文化財調査報告書第23集「壺屋古窯群I－個人住宅建設に伴う緊急発掘調査－」
1992 那覇市教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第2集「天界寺跡（I）－首里杜館地下駐車場
入り口新設工事に伴う緊急発掘調査」2001 沖縄県立埋蔵文化財センター

第45表 沖縄産施釉陶器観察一覧

団 団版 番号	器 器種	器 形	部 位	口 径 器 高 台径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様・形状	釉 (色・厚さ)	素地 (色・質・霜附)	所見		
第86団 団版73 481	碗	直 口 口 縁	口 底	13.0 5.6 6.6	無文	灰釉を胴半ばま で施釉。	締まりが強く、 色調は灰色。	胴部から口縁部へ逆 八の字に開く器形。胴 下部にわざかに丸み を持ち、腰部に明瞭 な抉りが入る。内底と 登付に砂目が付着。	11	J-9 遺構上西
第86団 団版73 482	碗	直 口 口 縁	口 底	13.2 5.5 6.4	無文	灰釉を胴半ばま で施釉。	締まりが強く、 色調は灰白色。	胴部から口縁部へ逆 八の字に開く器形。腰部に 浅い抉りが入る。	11	J-9灰灰層+ J-9遺構上西
第86団 団版73 483	碗	直 口 口 縁	口 底	13.4 5.85 6.6	鉄釉で一筆書き の文様を施す。	灰釉を胴半ばま で施釉。	締まりが強く、 色調は灰白色。	胴部から口縁部へ逆 八の字に開く器形。腰部に明瞭 な抉りが入る。登付に砂目が付着。	11	J-9 遺構上西
第86団 団版73 484	碗	直 口 口 縁	口 部	- - -	口縁部下に抉りが 入り、そこに白化粧 土を施す。表面にも 白化粧土がまばら にかかる。	灰釉を胴半ばま で施釉。	締まりが強く、 色調は灰白色。	胴部から口縁部へ逆 八の字に開く器形。	11	J-9 遺構上西
第86団 団版73 485	碗	直 口 口 縁	口 部	14.4 - -	口縁部下に抉り が入る。鉄釉で文 様を施す。	灰釉を施釉。	締まりが強く、脂 土は非常に密であ る。色調は灰白色。	胴部にやや丸み を持つ器形。	11	J-9 遺構上西 +I-7-30~40
第86団 団版73 486	碗	-	底 部	- 6.6	外面に絲線が入 る。	白化粧土を胴下部 まで施す。	白色粒混入、締 まりは弱く、色調 は乳白色。	胴部に丸みを持つ 器形。高台が逆三 角形を呈し、腰部 に深い抉りが入る。	11	J-8 茶褐色灰灰層 +搅乱
第86団 団版73 487	碗	外 反 口 縁	口 底	13.4 6.5 6.2	無文	鉄釉を腰部まで 施釉。	締まりが強く、 色調は灰色。	胴部にやや丸みを 持つ器形。底は蛇 の目釉剥ぎを施す。 腰部には深い抉り が入る。内底と登付 に耐火粘土(メガニ ク)が付着する。	11	J-8茶褐色灰灰層 +搅乱
第86団 団版73 488	碗	-	底 部	- 7.0	無文	灰釉を腰部まで 施釉。	締まりが強く、 色調は灰色。	胴部にやや丸みを 持つ器形。内底は蛇 の目釉剥ぎを施す。 腰部には深い抉り が入る。高台は低い。	11	I-9 南側
第86団 団版73 489	碗	-	底 部	- 6.2	外底に入面に似た 墨書きが入る。	鉄釉を腰部まで 施釉。	締まりは弱く、色 調は乳白色。	腰部にやや丸みを 持つ器形。腰部に 明瞭な抉りが入る。	11	I-9 瓦溜まり
第86団 団版73 490	碗	外 反 口 縁	口 底	13.2 6.0 6.3	無文	内・外面に白化粧 と透明釉を施す。	締まりは弱く、色 調は乳白色。	胴部に丸みを持つ 器形。内底を蛇の目 釉剥ぎする。内底面 と登付に耐火粘土(メ ガニク)が付着する。	11	搅乱
第86団 団版73 491	碗	外 反 口 縁	口 底	13.0 6.5 6.3	無文	外面に鉄釉を腰部 まで、内面に白化粧 と透明釉を施す。	白色粒が混入。 締まりは弱く、色 調は薄茶色。	胴部に丸みを持つ 器形。内底を蛇の目 釉剥ぎする。登付に 耐火粘土(メガニク) が付着する。	11	I-7-30~40 +搅乱
第86団 団版73 492	碗	外 反 口 縁	口 底	14.8 7.2 6.8	無文	内・外面に白化粧と 透明釉を施し、外面に 絲線を流し掛けている。	締まりが弱く、 色調は薄茶色。	胴部に丸みを持つ 器形。内底を蛇の目 釉剥ぎする。登付に 耐火粘土(メガニク) が付着する。	11	搅乱
第86団 団版73 493	碗	直 口 口 縁	口 縁 部	11.6 - -	雲文を外面に線彫 りする。	外面に鉄釉、外面に 白化粧を施し、外面に はさらには縁部に 絲線が掛けられている。	締まりが強く、 色調は乳白色。	口縁がわざかに 内湾する器形。	11	搅乱

第46表 沖縄産施釉陶器観察一覧2

団 団版 番号	器 器種	器 形	部 位	口 径 器 高 台 径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様・形状	釉 (色・厚さ)	素地 (色・質・霜付)	所見		
第86団 団版73 494	碗	-	底 部	- 5.7	雲文を外面に線彫りする。	外面に鉄釉、内面に白化粧と透明釉を施し、外面にはさらに碌種が掛けられている。	締まりが強く、色調は乳白色。	側部に丸みを持つ器形、豊付けを釉剥ぎする。493と同一個体になると思われる。	11	J-9 遺構上西
第87団 団版74 495	碗	-	底 部	- 6.3	外底に丸文の墨書がある	鉄釉を内・外面の腰部まで施釉し、内底にも施布。	白色粒が混入。締まりは弱い。色調は薄茶色。	やや丸みを持つ器形、豊付けに耐火粘土(メーガニック)の跡が残る。	11	J-9 遺構上西
第87団 団版74 496	碗	外 反 口 縁	口 底	12.6 6.0 6.0	無文	鉄釉を内・外面の腰部まで施釉し、内底にも施布。	締まりは弱く、色調は薄茶色。	側部に丸みを持つ器形、内底と豊付けに耐火粘土(メーガニック)が付着。	11	搅乱
第87団 団版74 497	碗	直 口 縁	口 底	12.4 6.6 6.2	無文	内・外面に白化粧と透明釉を施し、口唇に鉄釉を施す。	白色粒が混入。締まりは弱い。色調は薄茶色。	側部に丸みを持つ器形、内底と腰部に白化粧がある。豊付けに耐火粘土(メーガニック)の跡が残る。外底は豊付けのみ釉剥ぎする。	11	搅乱
第87団 団版74 498	碗	直 口 縁	口 底	12.0 6.45 5.8	無文	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	締まりが強く、色調は白色を呈す。	側部に丸みを持つ器形、腰部に圓窓状の抜き穴がある。豊付けを釉剥ぎし、内底は蛇の目釉剥ぎ。	11	J-9 遺構上西 +搅乱
第87団 団版74 499	碗	外 反 口 縁	口 底	12.4 6.0 6.1	鉄釉で丸文の中に十字文を描く。	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは弱い。色調は薄茶色。	口唇が黒く外反し、腰部に丸みを持つ器形、内底は蛇の目釉剥ぎする。豊付けも釉剥ぎされ、耐火粘土(メーガニック)が付着する。	11	J-9 遺構上西 +J-9遺構上南
第87団 団版74 500	碗	外 反 口 縁	口 底	13.2 6.5 6.4	線彫りで花文を描き、文様上に須頭を施す。	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	締まりは弱く、色調は薄茶色。	腰部に丸みを持つ器形、内底は蛇の目釉剥ぎする。豊付けも釉剥ぎされ、耐火粘土(メーガニック)が付着。	11	I-8-20~30 茶褐色灰混層 +J-8茶褐色灰褐層+搅乱
第87団 団版74 501	碗	直 口 縁	口 底	12.2 6.0 6.0	線彫りで文文の中に花文を描く。中間に孔があるためシルバーリングといふわれる。四角三字形の霜付り文を組み合せせる。文様の上に須頭紋が附かる。	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	締まりは弱く、色調は薄茶色。	側部に丸みを持つ器形、内底は蛇の目釉剥ぎする。豊付けも釉剥ぎされ、耐火粘土(メーガニック)が付着。	11	搅乱
第87団 団版74 502	小 碗	-	底 部	- 4.4	無文	灰釉を胴部下端まで施釉。	白色粒が混入。締まりが強く、色調は乳白色。	腰部に明瞭な抉りが入る。内底と外底に砂目が付着。	11	J-9 遺構上西
第87団 団版74 503	小 碗	外 反 口 縁	口 底	8.9 3.9 4.2	無文	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	白色粒が混入。締まりが強く、色調は乳白色。	側部に丸みを持つ器形、豊付けのみ釉剥ぎする。	11	J-8茶褐色灰褐層+搅乱
第87団 団版74 504	小 碗	外 反 口 縁	口 底	8.4 4.5 3.6	外面に六角形の面取りを施す。	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは弱く、色調は薄茶色。	腰部に丸みを持つ器形、内底は蛇の目釉剥ぎする。内底と豊付けに耐火粘土(メーガニック)が付着する。	11	I-9 瓦溜まり
第87団 団版74 505	小 碗	外 反 口 縁	口 底	7.8 5.4 3.7	外面に六角形の面取りと五角形の面取りを組み合わせる。	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	締まりは弱く、色調は薄茶色。	口唇が黒く外反し、やや筒形とする器形、豊付けに耐火粘土(メーガニック)が付着。	11	J-8 茶褐色灰混層
第87団 団版74 506	小 碗	直 口 縁	口 底	8.4 4.35 4.0	無文	内・外面に白化粧と透明釉を施す。	締まりは弱く、色調は薄茶色。	側部に丸みを持つ器形、内底を蛇の目釉剥ぎする。内底と豊付けに耐火粘土(メーガニック)が付着。	11	搅乱
第87団 団版74 507	小 碗	外 反 口 縁	口 底	9.1 4.8 4.2	無文	内面に白化粧と透明釉、外面に鉄釉を施す。	締まりは弱く、色調は薄茶色。	側部に丸みを持つ器形、内底を蛇の目釉剥ぎする。豊付けに耐火粘土(メーガニック)が付着する。	11	搅乱

第47表 沖縄産施釉陶器観察一覧3

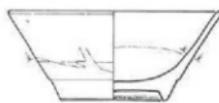
団 団版 番号	器 器種	器 形	部 位	口 径 高 台径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様・形状	釉 (色・厚さ)	素地 (色・質・霜付)	所見		
第87団 団版74 508	小 碗	外 反 口 縁	口 底	9.4 4.55 4.0	外面に線彫りで丸文 の中に十字文を描き、四つの区画に崩し た巻き文?を描く。	内面・外面に白化 粧と透明釉、口唇 に鉄釉を施す。	締まりは弱く、 色調は薄茶色。	腰部に丸みを持つ 器形。剥けた部分 に耐火粘土(メ ーガニク)が付着。	11	J-9 遺構上西
第87団 団版74 509	小 碗	直 口 口 縁	口 底	8.6 4.7 3.8	内底に線彫りで 凹文を描き、縁 釉を施す。	内面・外面に白 粧、口唇に鉄釉 を施す。	締まりは弱く、 色調は薄茶色。	側部に丸みを持つ 器形。内底は蛇の目 焼と、耐火粘土(メ ーガニク)が付着。豊 富に釉剥落する。	11	搅乱
第87団 団版74 510	小 碗	-	底 部	- - 3.6	内底に「神社」の 文字が須彌で書 かれる。	内・外面に白化粧 と透明釉を施す。	締まりは弱く、 色調は焦茶色。	側部に丸みを持つ 器形。豊付けのみ 釉剥落する。	19	搅乱
第87団 団版74 511	小 碗	-	底 部	- - 3.8	無文	内面に灰釉・外 面に鉄釉を施す。	締まりは強く、 色調は灰白色。	豊付けのみ釉剥 落する。	19	B-1 石積み4裏込内 (黒)
第88団 団版75 512	皿	外 反 口 縁	口 底	13.2 4.0 7.3	鉄釉で内面口唇 下部に周線を1 条、脚下部に2条 這らせる。内底に は丸文を描く。	外面は脚上部ま で、内面は脚下部 まで灰釉を施す。	白色粒が混入。 締まりは弱く、色 調は薄茶色。	腰部に丸みを持 つ器形。	11	搅乱
第88団 団版75 513	皿	-	底 部	- - 6.2	内底に「御内」の 文字が墨書きされ ている。	外面に灰釉を高 台まで施す。	締まりは強い。 色調は灰白色。	側部に丸みを持 たない、平たい皿 になると思われる。	11	搅乱
第88団 団版75 514	皿	稜 花 口 縁	口 底	9.8 2.7 5.8	内底に線彫りで二重 圓線を引き、その中 に線彫で文様を描く。 文様の上に貝殻を 施す。口唇外側の一部 に鉄釉を施す。	内・外面に白釉を 施す。	締まりは強い。 色調は灰白色。	内側する器形。豊 付けを釉剥落する。	11	I-7・20・30 +搅乱
第88団 団版75 515	皿	稜 花 口 縁	口 底	11.5 2.8 6.6	外面に線彫りで草文を描き、内面 に草文で草文、内底 に印文花と斜沈 線を組み合わせる。	内・外面に白釉を 施す。	白色粒が混入。 締まりは弱く、色 調は乳白色。	内側する器形。高 台内側まで施す。	11	J-8 茶褐色灰混層
第88団 団版75 516	皿	外 反 口 縁	口 底	13.4 4.1 6.0	無文	内・外面に白釉を 施す。	—	腰部に丸みを持つ 器形。内底を蛇の目 焼とする。内底と 豊付けに耐火粘土 (メーガニク)が付着。	11	J-8 茶褐色灰混層
第88団 団版75 517	小 鉢	外 反 口 縁	口 底	9.8 4.2 4.0	無文	内・外面脚半ばま で灰釉を施す。	締まりは強い。 色調は灰白色。	側上部に丸みを 持つ器形。腰部 に明瞭な抉りが 入る。	11	搅乱
第88団 団版75 518	鉢	-	底 部	- - 11.6	高台の墨書きは判読 不明、外底には判読 不明な二文字と 「寺」の字を墨書きする。	外面腰部まで鉄 釉を、内面に灰釉 を施す。	締まりは弱く、色 調は乳白色。	高台が高く作られて いる。内底は蛇の目 焼とし、豊付けと 内底に耐火粘土(メ ーガニク)が付着す る。	11	J-9遺構上西 +搅乱
第88団 団版75 519	鉢	内 灣 口 縁	口 底	22.8 10.9 12.3	無文	内・外面に鉄釉を 施す。	白色粒が混入。 締まりは弱く、色 調は薄茶色。	内底を蛇の目釉 とし、豊付けを釉剥 落する。内底と豊付 けに耐火粘土(メー ガニク)が付着す る。	11	J-9遺構上西 +搅乱
第88団 団版75 520	鉢	内 湾 口 縁	口 底	27.4 13.2 15.0	無文	内・外面に鉄釉を 施す。	締まりは弱く、色 調は灰色。	側上部に丸みを持つ 器形。底部は側面底 になってしまい、豊付 けを釉剥落する。外底 の一部に砂目が付着す る。	11	J-8茶褐色灰混 層+搅乱

第48表 沖縄産施釉陶器観察一覧4

団 団版 番号	器 器種	器 形	部 位	口 径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様・形状	釉 (色・厚さ)	素地 (色・質・面相)	所見		
第88団 団版75 521	鉢	肥厚 口 縁 底	口 内 底	30.0 14.7 12.8	無文	外面・内面に鉄 釉を施釉。内面は 胴上部まで施釉。	締まりは強く、色 調は灰色。	腰部に丸みを持 つ器形。縦付けを 釉剥がす。	11	J-9 遺構上西 + 捷乱
第89団 団版76 522	壺	外 反 口 縁 胴	口 内 底	7.4 — —	無文	内面に鉄釉・外 面に黒釉を施釉。	白色粒が混入。 締まりは強く、色 は灰茶色。	頭部が長く、肩部 が強く張り出す 器形。	11	J-9 遺構上西
第89団 団版76 523	急須	—	口 内 底	5.4 8.4 —	無文	内面に灰釉・外 面に鉄釉を施釉。	白色粒が混入。 締まりは強く、色 は灰色。	胴下部に丸みを持 つ器形。底部に円錐 状の脚を3カ所添 付する。	11	捷乱
第89団 団版76 524	急須	—	口 内 底	6.0 9.2 7.4	胴部に文様を描き、 その中に二つの巴文 と方格文、丸文を描く。	内・外面に白釉を 施釉。一部に緑 釉を掛ける。	白色粒が混入。 締まりは弱く、色 は薄茶色。	胴部に丸みを持 つ器形。腰部に三 角形の縫合線を三 所添付する。口には丸 が2カ所空されている。	11	捷乱
第89団 団版76 525	急須	—	胴 部	— — —	胴部に線彫りで圓 線をめぐらされ、上 から鉄釉が施釉。	外面全体と内面 の一部に灰釉を 施釉。	締まりは弱く、色 は薄茶色。	耳に「天」の文字 が印されている。	11	J-9 茶褐色灰混層
第89団 団版76 526	蓋	完 形	—	6.6 2.95 4.4	甲蓋端部に二重圓線 をめぐらせ、内側に圓 線で星雲の文様を描 き、具足、鉄釉を施す。	外面に白化粧と 透明釉を施釉。	—	急須の蓋にあたる。 撮み器部に4mm の孔を1個穿つ。	11	捷乱
第89団 団版76 527	蓋	撮 口 符	—	5.7 3.3 4.2	無文	外面の甲蓋端部 まで鉄釉を施釉。	白色粒が混入。 締まりは強く、色 は薄茶色。	急須の蓋にあたる。 撮み器部に1.9cm の孔を1個穿つ。	11	捷乱
第89団 団版76 528	大型急須	口 内 底	—	10.4 — —	無文	内・外面に鉄釉を 施釉。	白色粒が混入。 締まりは強く、色 は灰色。	大型の急須(アンビ ン)にあたる。口唇部 を補強する。内面 に灰が大量に付着。	11	J-9 遺構上西 + J-8 茶褐色灰 混層
第89団 団版76 529	瓶	—	口 内 底	4.6 10.1 7.5	頭部と胴部に線彫り で「重縞をめぐらせる」。 その内側に放射状 に13本の線を入れる。	内・外面に白釉を 施釉。	締まりは弱く、色 は薄茶色。	カラカラと呼ぶほどの 口唇部を保護す る。口唇部を保護す る。外軸を蛇の目輪消す る。外軸に砂目が付着。	11	捷乱
第90団 団版77 530	鍋	—	口 内 底	16.2	無文	外面胴下部・内 面胴上部まで鉄 釉を施釉。	白色粒・黑色粒 が混入。締まりは 強く、色は灰色。	口唇の内側を保護す る。底部から胴部にかけ て、ゆるやかな丸みを持 つ。口唇に細緻の耳 を添付する。	11	J-9 灰混層 + 捷乱
第90団 団版77 531	鍋	—	口 内 底	13.0	無文	内面胴部全体(一 部無釉)・外面胴下 部まで鉄釉を施釉。	白色粒が混入。 締まりは強く、色 は赤茶色。	口唇の内側を保護す る。胴部に丸みを持 つ器形。口唇に紐状 の耳を添付する。	11	I-9 南胴 + 捷乱
第90団 団版77 532	蓋	—	撮 口 底	8.0 5.1 15.9	無文	外面口蓋・胴部・ 内面口唇部まで 鉄釉を施釉。	白色粒が混入。 締まりは強く、色 は赤褐色。	鍋の蓋にあたるも のか、撮みの上面 に砂目が付着。	11	J-9 遺構上西
第90団 団版77 533	灯 明 具	—	口 内 底	4.5 4.95 3.8	無文	外底をのぞいた 全体に鉄釉を施 釉。	締まりは強く、色 は灰色。	足付きの灯明具。 外底は平たく、轆 轤跡が明顯に残る。	11	J-9 遺構上西
第90団 団版77 534	灯 明 具	—	口 内 底	9.8 5.1 4.8	無文	脛付けをのぞいた 全体に鉄釉を施 釉。	白色粒が混入。 締まりは強く、色 は茶色。	足付きの灯明具。 高台は逆八の字 形を呈す。	11	J-9 灰混層 + 捷乱
第90団 団版77 535	甕	外 反 口 縁 胴	口 内 底	40.6 — —	無文	外面に灰釉、内面 に白釉を施釉し、上か ら縞釉を流し掛ける。	白色粒が混入。 締まりは強く、色 は灰白色。	口部は逆八字を呈 す。頭部に3条、胴部 に1条縞線をめぐらせる。 胴部に丸文が付する。	11	捷乱



481



482



483



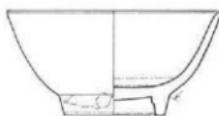
484



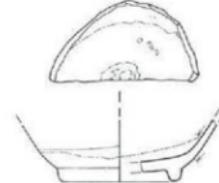
485



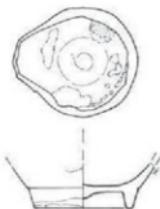
486



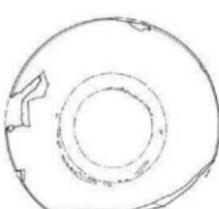
487



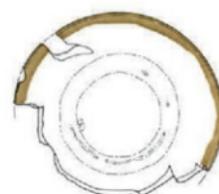
488



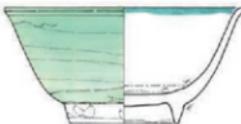
489



490



491



492



493



494

0 10cm

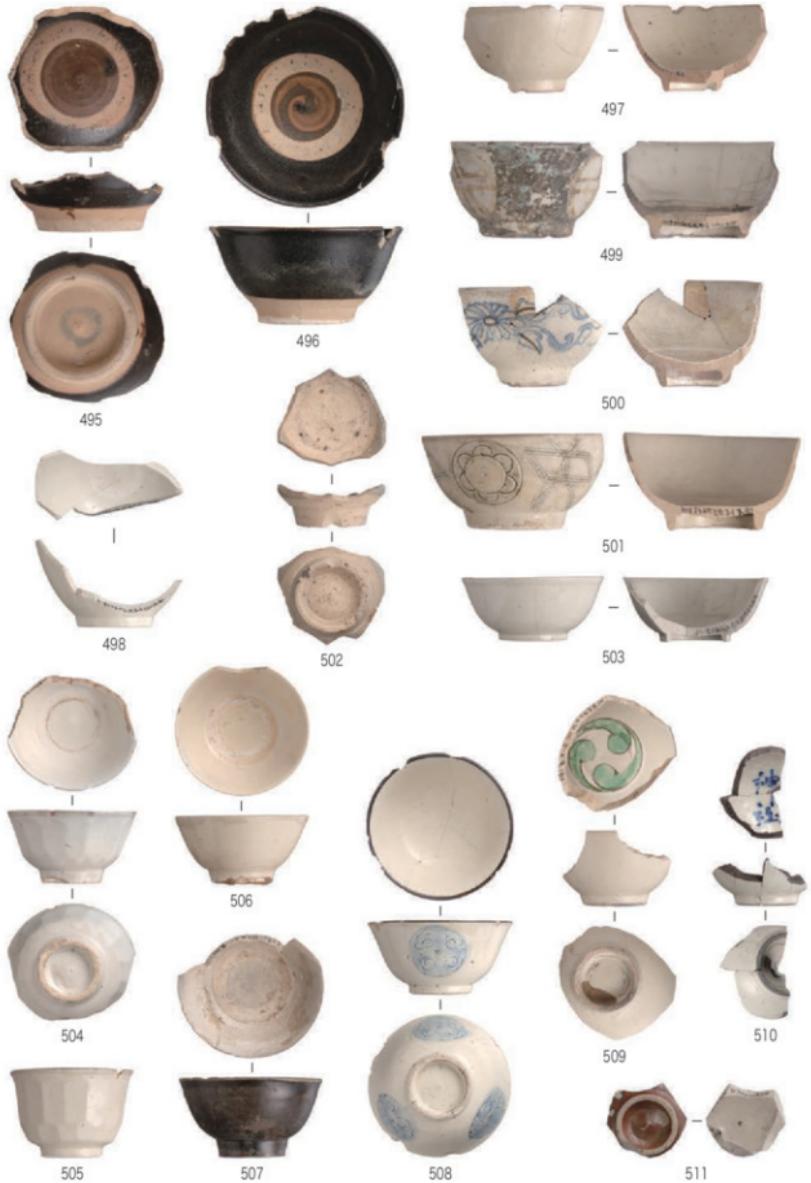
第86図 沖縄産施釉陶器 1



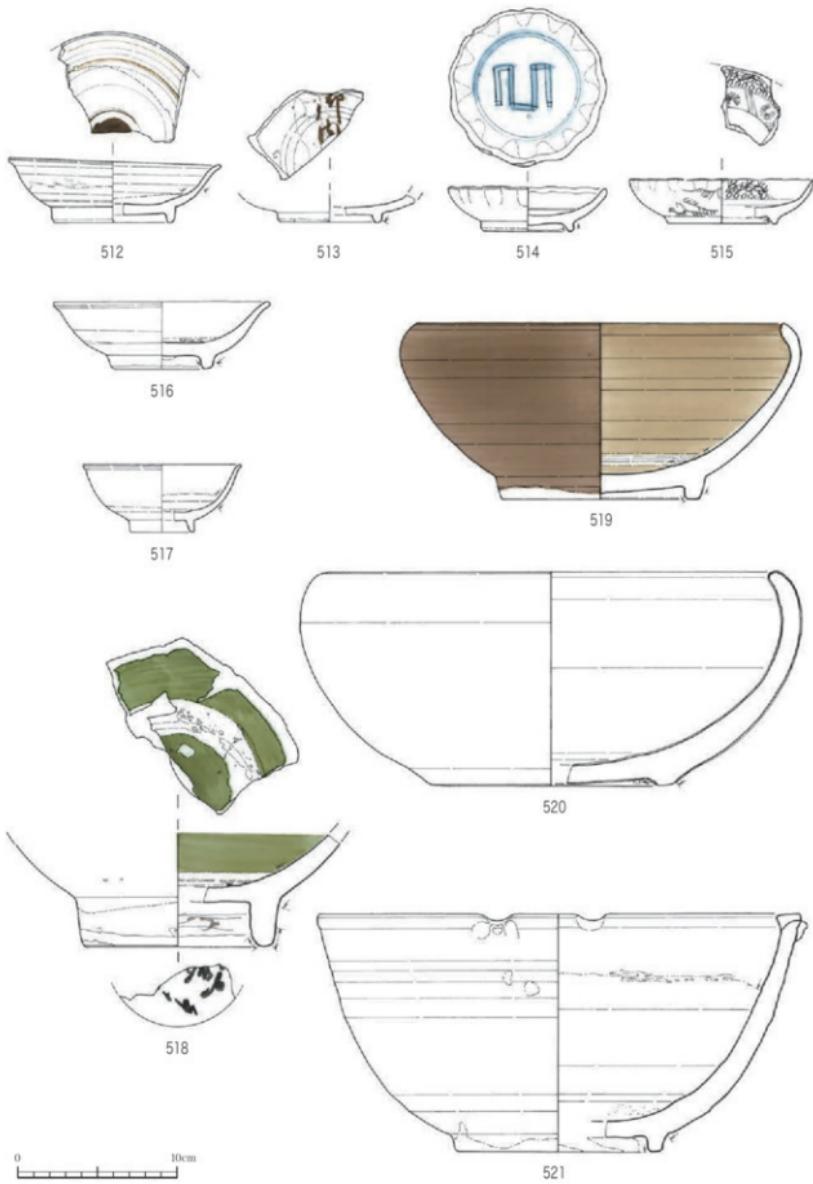
図版73 沖縄産施釉陶器 1



第87図 沖縄産施釉陶器2



図版74 沖縄産施釉陶器 2



第88図 沖縄産施釉陶器 3



512



513



517



516



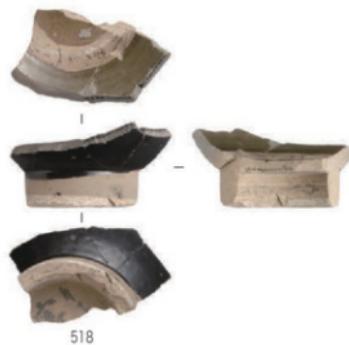
515



514



519



518



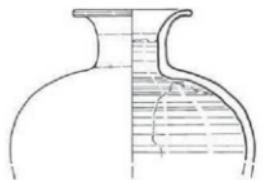
520



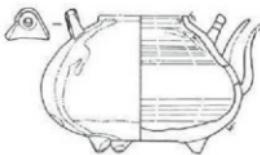
521



図版75 沖縄産施釉陶器3



522



523



524



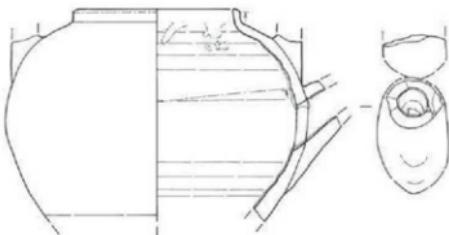
525



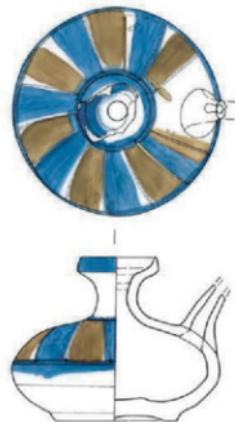
526



527



528



529

0 10cm

第89図 沖縄産施釉陶器 4



522



525



I



523



I



524



526



527



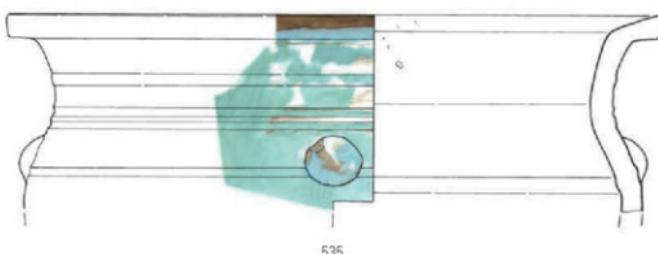
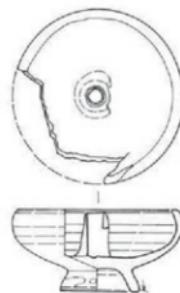
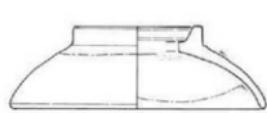
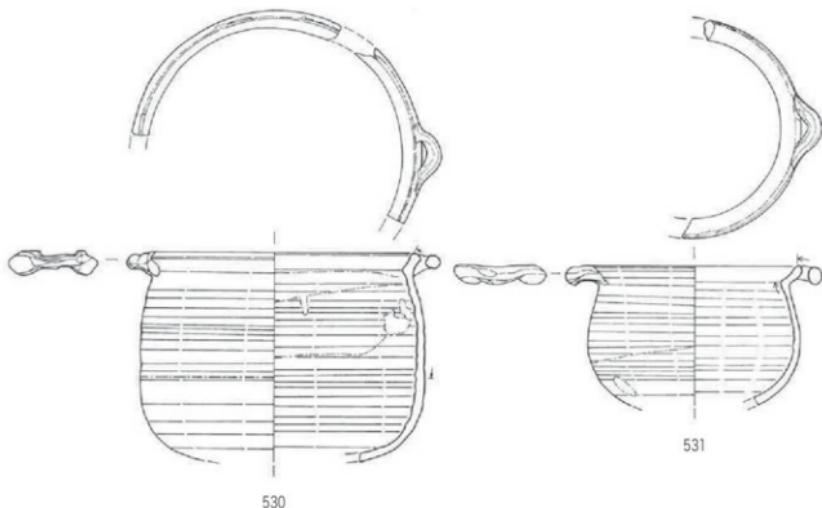
528



529



図版76 沖縄産施釉陶器4



0 10cm

第90図 沖縄産施釉陶器 5



図版77 沖縄産施釉陶器5

第9節 沖縄産無釉陶器（第49～54表、第91～98図、図版78～85）

本報告で取り扱う沖縄産無釉陶器は、年代や作法から大きく2種に大別できる。ここでは、前半に17世紀段階の製品と思われる焼締め陶器の一群を初期無釉陶器として掲載し、後半に18世紀以降の無釉陶器をまとめて報告する。

初期無釉陶器（第49・50表、第91・92図、図版78・79）

荒焼（アラヤチ）とも称される無釉焼締陶器のうち、特に高火度で焼成され器面に泥釉などが施釉される一群を指す。これらは湧田古窯跡（沖縄県教委1993・1999）で生産されたと考えられ、同遺跡及び首里城跡木曳門地区（沖縄埋文2001）や淑順門地区（沖縄埋文2006）の出土例から17世紀頃に位置づけられる。御内原北地区ではシーリ遺構内からまとまって出土しているため、本報告書では「狭義の沖縄産無釉陶器」として別に取り扱う。以下に各器種の分類概念などを記し、個々の詳細は観察表に譲る。

1. 麽（536～542）

器高が15cm以下で最大径を口縁又は胴部に持つ小型のもの（536～539）と、器高が20cmを超える最大径を肩部に持つ大型のもの（540～542）とに大別される。大型品には貼付の繩目文を巡らせるもの（542）もある。

2. 描鉢（543、544）

口縁部を外側に折り曲げ肥厚帯を持つもの（543）と口縁部が内湾するもの（544）がある。いずれの形態的特徴も安里氏らの描鉢編年（安里・上原・家田1987）に当てはまらないことから、喜名焼又は知花焼と称される一群とは異なると思われる。

3. 火炉ⁱ（545）

肩部を内側に屈曲させ、口縁部の上面観が三葉形をなすもの。

4. 筒物（546～549）

円盤形の蓋（546、547）と筒状の身（548、549）でセットになると考えられるもので、他器種に比して丁寧に成形されている。用途は不明だが、茶の湯に用いる建水の可能性などが考えられる。

無釉陶器（第51～54表、第93～98図、図版80～85）

本地区では1,660点が出土しており、そのうち特徴的なもの46点を図示した。器種としては、碗、皿、灯明皿、鉢、急須、蓋、描鉢、壺、火入れ、火炉、植木鉢、甕などがある。以下に各器種の概要を述べる。個々の詳細については観察表に譲る。

1. 風 (550~552)

直口で胴下部にやや丸みを持ち、高台がベタ底になるものと(550)、口唇下部に稜を持つもの(551)とがある。他に特徴的なものとして、喜名焼と思われる底部資料がある(552)。

2. 皿 (553~556)

小皿(553)と灯明皿(554、555)、大型の皿(556)がある。このうち553、555は喜名焼にあたると思われる。

3. 鉢 (557~565)

口縁部が内彎し、口唇が舌状を呈するものに557、558がある。うち558には、底部に「○」の印が刻まれている。口縁部が肥厚し、胴上部に波状文が施されるものに559、560がある。うち560は喜名焼にあたると思われる。口縁部が逆「L」字状を呈するものには562、564、565がある。562は浅鉢、564、565は深鉢である。

4. 蓋 (566~568)

壺の蓋にあたるものと思われる。宝珠状の攝みを持つもの(566)、脚部が長く、上面を水平に成形するもの(567)、平坦な上面に端部が丸みを持つものがある(568)。

5. 急須 (569)

胴部資料である。胴下部に膨らみを持ち、注口は太く短い。

6. 描鉢 (570~577)

口縁部が「く」の字形を呈するものと(570~575)、逆「L」字状を呈するものがある(576)。「く」の字形を呈するものには、胴部から逆「ハ」の字形に立ち上がる器形と(570、572)、胴部に丸みを持つ器形がある(571、573~575)。また、口縁下部に稜を持つもの(571、572)のうち、572は薩摩焼の描鉢に類似している。573は口唇部が広く、胴部に丸みを持つ器形である。574は注口を持つ資料、577は脚部を持つ底部資料である。柳目は間隔を開けて施すもの(570、572~575)と、全体に密に施すもの(571、576、577)がある。

7. 壺 (578~583)

口縁部が外反するもの(578)と肥厚するものとに分けられる。また肥厚口縁には、玉縁状に肥厚するもの(579)と方形を呈するもの(580~583)がある。特徴的な資料としては、581の小型の四耳壺、胴上部に解読不明線刻が見られる580の資料などがある。

8. 火入れ・火炉 (584・585)

火入れは直口口縁で、口唇にやや丸みを持つ。底部は平底(584)。火炉は口縁部が「く」の字状に屈曲し、方形状の横耳が貼付される(585)。

9. 植木鉢 (586~588)

口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口縁部に波状の凸帯を貼付するものと(586、587)、口唇部に縄目状の刻み目を入れるもの(588)がある。

10. 壺 (589~595)

大壺は淑順門の南側にて、底部が現位置を保った状態で出土した。大型の壺で器壁が分厚く、底部から胴部へ逆「ハ」の字形に立ち上がる器形。

壺は口縁部が逆L字状を呈し、口唇の幅が広いもの(590、591、595)と口唇の幅が狭いもの(593、594)、口縁部が逆三角形に肥厚するもの(592)がある。また、特徴的な資料として波文や丸文を施したり(592、595)、胴上部に「十」の印が刻まれた(593)ものなどがある。

〈参考文献〉

- 沖縄県文化財調査報告書第111集「湧田古窯跡(1) -県庁舎行政棟建設に係わる発掘調査」
1993 沖縄県教育委員会
- 那覇市文化財調査報告書第23集「壺屋古窯群I -個人住宅建設に伴う緊急発掘調査-」
1992 那覇市教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第2集「天界寺跡(1) -首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査」2001 沖縄県立埋蔵文化財センター

第49表 沖縄産無釉陶器観察一覧 1

図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (西暦)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第91図 図版78 536	壺	-	口 底	16.2 11.7 9.2	外面肩 部に陰圏 線1条。	器色は褐色。 素地は純赤褐色 で細かい。	叩き+ナデ。 内面に当て具 痕が残る。	口縁部は内側折り返 し成形。全体に泥軸を 施す。	19	B-4シリーズ内黒 褐色土+B-5 シリーズ内黒褐色土 +B-5シリーズ内灰 白色土(畦)
第91図 図版78 537	壺	-	底部	- - 10.6	無文。	器色は灰褐色。 素地は外側が灰 色・内側が純赤褐色で細かく、砂 粒を含む。	叩き+ナデ。 内面に当て具 痕が残る。	両面に泥軸を施す。 外底に目目が残る。	11	搅乱
第91図 図版78 538	壺	-	底部	- - 10.8	無文。	器色は黒褐色。 素地は灰赤色で 細かい。	叩き+ナデ。 内面に当て具 痕?が残る。	全体に泥軸を施す。 外底に目目が残る。	19	B-5シリーズ内黒 褐色土(畦) +B-5シリーズ内黒 褐色土
第91図 図版78 539	壺	-	口 縁 部	10.7 - -	無文。	器色は灰褐色。 素地は灰色でや や細かく、砂粒を 含む。	ナデ(轆轤の 可能性あり)。	口縁部は外側折り返 し成形。両面に泥軸を 施す。	19	搅乱

第50表 沖縄産無釉陶器観察一覧2

図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 器 底 径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第91図 図版78 540	甕	-	口 縁 部	21.5 - -	無文。	器色は褐灰色。 素地は純赤褐色 で細かい。	ナデ(轆轤の 可能性あり)。	外面に泥軸を施釉。肩部 上位に窓状の穿孔がある ため、別器種(風炉など) の可能性あり。	19	B-5 シーリ内底面 黒褐色土(畦)
第91図 図版78 541	甕	-	底 部	- - 13.7	無文。	器色は暗赤灰色。 素地は外側が灰 色、内側が純赤褐色 で細かく、白色 土マーブル状に 混ざる。	ナデ。	外面に泥軸を施釉。両面 に部分的に火ぶくれあり。	19	B-5 シーリ内底面 黒褐色土
第91図 図版78 542	甕	-	口 縁 部	24.8 - -	外面肩部に 貼付の縦目 文1条。	器色は赤灰色。 素地は純赤灰色 で細かく、砂粒を 含む。	叩き+ナデ。 外面に成形 具・内面に当て 具痕が残る。	口縁部は内側折り返し成 形。外面から口唇部外側 まで泥軸を施釉。口唇部に 貝目が残る。	11	搅乱
第92図 図版79 543	擂鉢	-	口 縁 部	30.6 - -	内面側部に 単位不明の 横目(残存 5本)。	器色は外側が灰褐色 ・内側が明褐色。 素地は灰褐色で細か く、白色土がマーブ ル状に混ざる。	叩き+ナデ。 内面に当て具 痕?が残る。	口縁部は外側折り返しで 肥厚帯を成形。外面に泥 軸を施釉。	19	B-4 東側灰泥粘土層
第92図 図版79 544	擂鉢	-	口 縁 部	21.6 - -	外面口縁部に 陰窓線3 条、内面側 部に8本櫛 の横目。	器色は外側が暗 赤灰色・内側が 灰色。素地は灰 赤色で細かい。	ナデ(轆轤の 可能性あり)。	両面に泥軸を施釉。口唇 部に貝目が残る。	19	B-5 シーリ内木炭屑 (畦)
第92図 図版79 545	火 炉	-	口 縁 部	- - -	無文。	器色は外側が暗赤 灰色・内側が灰 色。素地は灰 赤色で細かく、白 色土がマーブル状に 混ざる。	ナデ。	外面から内面口縁部まで 泥軸を施釉。全体に小 さな火ぶくれあり。	19	B-5 シーリ内赤褐色土 2(畦)
第92図 図版79 546	筒 物	蓋	底	17.4 - -	無文。	器色は上面が暗 赤灰色・下面が 灰色。素地は灰 赤色で細かく、砂 粒を含む。	ナデ(轆轤の 可能性あり)。	上面に成形時の痕跡が残 る。両面に自然軸を施釉。	19	B-4 シーリ上層
第92図 図版79 547	筒 物	蓋	底	17.4 - -	無文。	器色は上面が赤 灰色・下面が灰 色。素地は灰 赤色で細かく、砂 粒を含む。	ナデ(轆轤の 可能性あり)。	上面に成形時の痕跡が残 る。両面に自然軸を施釉。	19	B-5 シーリ内上層(黄 色土・畦)
第92図 図版79 548	筒 物	身	口 下 底	17.4 9.0 16.8	外面に陰窓 線多数。	器色は外側が灰 赤色・内側が灰 色。素地は灰 赤色で細かく、砂 粒を含む。	轆轤。	外面胴部から内面口縁部 に泥軸を施釉。外底に貝 目?が残る。547とセットに なる可能性あり。	19	B-5シーリ内木 炭屑(畦) +B-5シーリ内里 褐色土
第92図 図版79 549	筒 物	身	口 縁 部	18.0 - -	外面に陰窓 線多数。	器色は外側が純赤 色・内側が褐褐色。 素地は外側が灰色・ 内側が灰黄色で マーブル状に斑雜。	轆轤。	外面に部分的に泥軸を施 釉。素地は軟質で瓦や瓦 質土器に類似。	11	搅乱

第51表 沖縄産無釉陶器観察一覧3

団 団版 番号	器 器種	器 形	部 位	口 径 器 底 径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第93団 団版80 550	碗	直 口 口 縁	口 底	15.2 6.7 5.6	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	胴下部にやや丸みを持つ器 形。腰部に抉りが入る。高台 はベタ底。口唇部と底部の 一部が被熱で黒ずんでいる。	11	搅乱
第93団 団版80 551	碗	直 口 口 縁	口 縁 部	14.1 — —	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が残る。	口唇下部に棱が入る。	19	C-4 2層
第93団 団版80 552	碗	—	胴 底	— — 6.0	無文	器色:暗茶褐色 素地:暗茶褐色と 茶色がサンドイッチ状 になっている。	轆轤跡が明瞭 に残る。	喜名焼にあたると思われる。 胴部に丸みを持つ器形。 高台は低い。	11	搅乱
第93団 団版80 553	皿	直 口 口 縁	口 底	10.4 — —	無文	器色:茶褐色 素地:暗茶褐色と茶褐色 色がサンドイッチ状 になっている。白色 粒を含む。	表面をナデ調 整している。	小型の皿。喜名焼にあたると 思われる。泥輪が掛けられ、全体に光沢がある。	19	B-1 石積み4裏込内 (黒)
第93団 団版80 554	皿	直 口 口 縁	口 底	10.8 3.0 4.4	無文	器色:橙色 素地:橙色	轆轤跡が明瞭 に残る。	灯明皿。口唇部に煤が付 着。内外面の胴下部まで 比熱で黒く変色している。	11	J-9 遺構上西
第93団 団版80 555	皿	直 口 口 縁	口 底	10.4 2.4 5.1	無文	器色:茶褐色 素地:暗茶褐色と茶褐色 色がサンドイッチ状 になっている。白色 粒を含む。	表面胴下部を ナデ成形、轆 轤跡も残る。	灯明皿。喜名焼にあたると 思われる。口唇部に煤が付 着。泥輪が掛けられ、表 面上に光沢が見られる	11	搅乱
第93団 団版80 556	皿	直 口 口 縁	口 底	20.8 4.48 9.9	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	大型の皿。器壁が厚く、高 台が低い。腰部に抉りが 入る。	11	J-9 遺構上西
第93団 団版80 557	鉢	内 側 口 縁	口 底	15.0 8.2 9.2	無文	器色:橙色 素地:橙色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口唇部は舌状を呈する。	11	搅乱
第93団 団版80 558	鉢	内 側 口 縁	口 底	21.2 12.3 12.0	口縁部に2条の 横線をめぐらし、その間 に波状文が施される。	器色:胴上部は褐色、 胴下部は赤褐色 素地:赤褐色	表面をナデ調 整している。	口唇部は舌状を呈する。底 部に「○」の印が刻まれて いる。	11	搅乱 +J-8茶褐色灰 泥層
第93団 団版80 559	鉢	肥 厚 口 縁	口 底	24.2 12.9 10.2	胴上部に波 状文が施さ れる。	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	胴上部に張りを持つ器形。	11	搅乱
第93団 団版80 560	鉢	肥 厚 口 縁	口 底	13.6 6.9 7.8	胴上部に波 状文が施さ れる。	器色:茶褐色 素地:暗茶褐色と赤 褐色のサンドイッ チ状	表面をナデ調 整している。	喜名焼にあたると思われる。 泥輪が掛けられ、胴半ば に張りを持つ器形。	11	搅乱
第93団 団版80 561	鉢	肥 厚 口 縁	口 縁 部	12.6 — —	無文	器色:表面は赤褐 色、裏面は暗褐色 素地:赤褐色	表面をナデ調 整している。	口唇がやや肥厚する。胴 部からハの字状に開く器 形。	11	搅乱

第52表 沖縄産無釉陶器観察一覧4

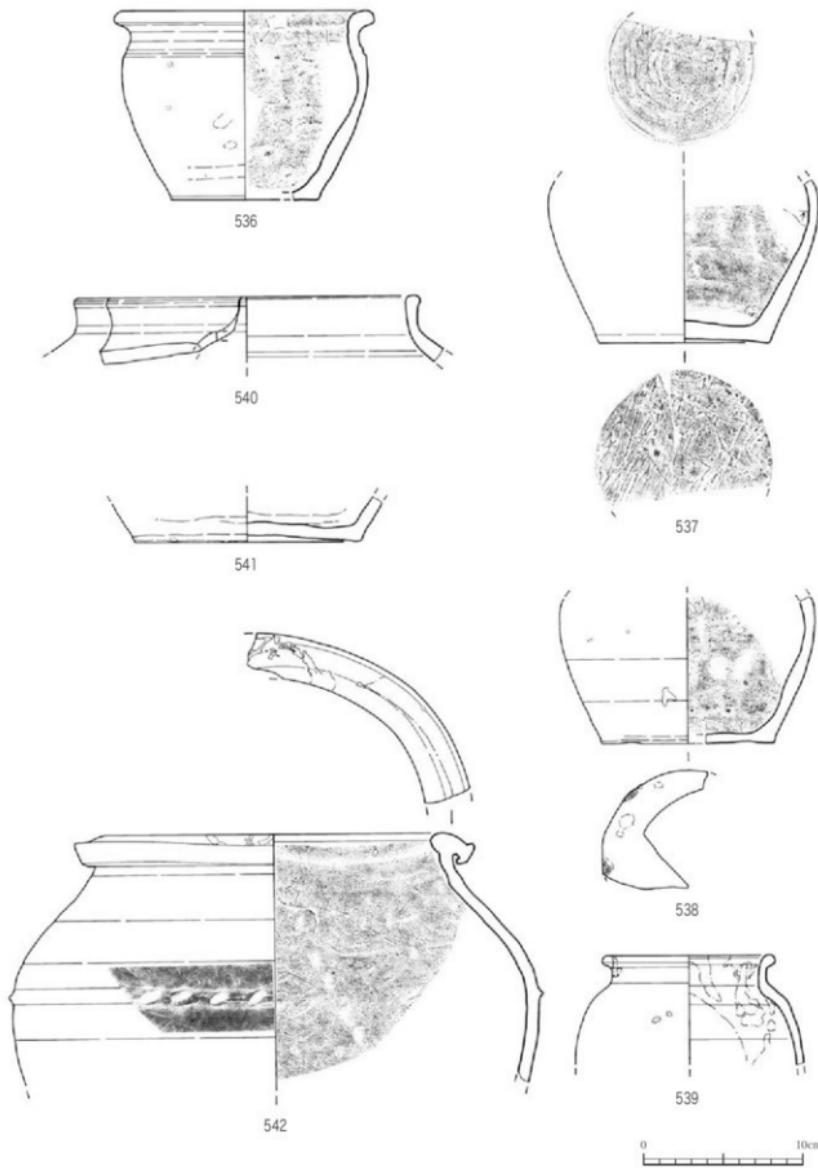
団 団版 番号	器 器種	器 形	部 位	口 径 器底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第94団 団版81 562	鉢	外 反 口 縁	口 縁 部	25.8 — —	無文	器色:茶褐色 素地:茶褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口縁部は逆L字状を呈す。 口唇上部に圓線をめぐら せる。	11	搅乱
第94団 団版81 563	鉢	—	底 部	— — 13.8	無文	器色:橙色 素地:橙色	轆轤跡が明瞭 に残る。	ベタ底の高台を持つ器形。	11	搅乱
第94団 団版81 564	鉢	外 反 口 縁	口 縁 底	37.4 20.0 13.8	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口縁部は逆L字状を呈す。 口唇上部に圓線をめぐら せる。	11 ~20+1-7·20 ~30+1-7·30 ~40	搅乱+1-7·10 ~20+1-7·20 ~30+1-7·30 ~40
第94団 団版81 565	鉢	外 反 口 縁	口 縁 底	29.4 14.0 10.8	無文	器色:橙色 素地:橙色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口縁部は逆L字状を呈す。 口唇上部に圓線をめぐら せる。	11	搅乱
第94団 団版81 566	蓋	—	撮 持 持	— 3.85 10.9	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	壺の蓋だと思われる。宝珠 状の撮みを持ち、口蓋端 部が外側にやや反り返る。	11 +1-9南側	搅乱 +1-9南側
第94団 団版81 567	蓋	—	甲 蓋 部 端 部	— 4.3 7.6	無文	器色:赤褐色 素地:灰褐色	ナデ調整と轆 轤跡が残る。	壺の蓋にあたるものか。上 面を水平にし、端部を斜め に成形する。脚部が長い。	11	搅乱
第94団 団版81 568	蓋	—	甲 蓋 部	17.0 — —	無文	器色:橙色 素地:橙色	ナデ調整と轆 轤跡が残る。	壺の蓋にあたるものか。上 面にヘラ状の道具によるナ デ調整の跡が明瞭に残る。	11	搅乱
第94団 団版81 569	急 須	—	口 縁 胴	11.6 — —	無文	器色:暗褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	胴下部に膨らみがある。注 口は太く短い。	11	搅乱
第95団 団版82 570	播 鉢	—	口 縁 部	32.0 — —	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口縁部が「く」の字状に屈曲す る。胴部から逆「ハ」の字状に 立ち上がる器形。8~9本単 位の脚目を、間隔をあけて施す。	11	搅乱
第95団 団版82 571	播 鉢	—	口 縁 部	26.4 — —	口縁下部に 棱を1条め ぐらす。	器色:暗褐色 素地:赤褐色	表面はナデ成 形、裏面は轆 轤跡が明瞭に 残る。	口縁部が「く」の字状に強 く屈曲する。胴部にやや丸 みを持つ器形。脚目を密に 施す。	11	1-9 南側
第95団 団版82 572	播 鉢	—	口 縁 部	26.2 — —	口縁下部に 棱を1条め ぐらす。	器色:暗褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口縁部が「く」の字状に強く屈 曲する。胴部から逆「ハ」の字 状に立ち上がる器形。10本単 位の脚目を、間隔をあけて施す。	19	搅乱

第53表 沖縄産無釉陶器観察一覧5

団 団版 番号	器 器種	器 形	部 位	口 径 器 底 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第95団 国版82 573	擂鉢	-	口 緑 部	- - -	無文	器色:茶褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口緑部が「く」の字状にゆるや かに屈曲する。注口は分厚く、 丸みを持っている。表面に圓線を4条めぐらせる。5本単位 の櫛目を、間隔をあけて施す。	11	搅乱
第95団 国版82 574	擂鉢	-	口 緑 部	- - -	無文	器色:茶褐色 素地:茶褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口緑部が「く」の字状に屈 曲する。注口がある。9本 単位の櫛目を、間隔をあけ て施す。	11	搅乱
第95団 国版82 575	擂鉢	-	口 緑 部	38.4 - -	無文	器色:茶褐色 素地:茶褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口緑部が「く」の字状に屈曲す る。胴部にやや丸みを持つ器形。 表面に圓線を2条めぐらせる。6本単位の櫛目を、間隔を あけて施す。	11	搅乱
第95団 国版82 576	擂鉢	-	口 少 底	30.1 13.0 10.6	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口緑部が連「L」字状に屈曲す る。口脣部に圓線を1条施す。胴部に丸みを持つ器形。内面に櫛目を密に施す。	11	J-9 遺構上西
第95団 国版82 577	擂鉢	-	底 部	- - 16.8	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	脚付きの擂鉢。脚上部に2 力所穴がある。脚下部に2 条の凹縫がめぐらされる。 櫛目は全体に密に施す。	11	搅乱
第96団 国版83 578	壺	外 反 口 緑	口 少 脣	20.0 - -	頭部に8本 の沈線をめ ぐらせる。	器色:茶褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口緑部が外反し、肩部がゆ るやかに張る器形。頭部は 長く、表面に光沢がある。	11	搅乱
第96団 国版83 579	壺	肥 厚 口 緑	口 緑 部	11.8 - -	無文	器色:茶褐色 素地:暗赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口緑部を外側に折り曲げ て玉緑状に肥厚させる。外 面には泥袖が施され、光 沢がある。	19	B-1 石積み4裏込内 (黒)
第96団 国版83 580	壺	肥 厚 口 緑	口 少 脣	12.8 - -	頭部に3本の 沈線が施され、その下に は線刻が刻まれている。	器色:茶褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口緑部が方形を呈する。頭 部は長く、肩部がゆるやかに 張り出している。表面には 泥輪が施され、光沢がある。	11	搅乱
第96団 国版83 581	壺	肥 厚 口 緑	口 少 脣	9.8 - -	無文	器色:茶褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	小型の四耳壺。口緑部が 方形を呈する。頭部は長く、 脣半ばに膨らみを持つ。	11	搅乱
第96団 国版83 582	壺	肥 厚 口 緑	口 緑 部	13.4 - -	無文	器色:橙色 素地:暗褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口緑部が方形を呈する。 頭部は長い。	19	C-3 野面石積み南側 要石
第96団 国版83 583	壺	肥 厚 口 緑	口 緑 部	12.7 - -	無文	器色:暗褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭 に残る。	口緑部が方形を呈する。	19	B-4 2層
第96団 国版83 584	火 入 れ	直 口 口 緑	口 少 底	8.1 5.35 6.6	脣部に沈線 を1本めぐ らせる。	器色:明褐色・茶 褐色 素地:-	ナデ成形の跡 がじみられる。	口緑部がや丸みを持つ。形 はいびつで、底部は平底、脣部 に削りがいる。焼成時の温度 差によるものか、色調はまだら。	11	搅乱

第54表 沖縄産無釉陶器観察一覧6

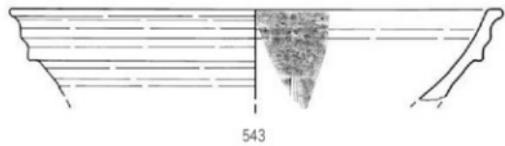
団 団版 番号	器 器種	器 形	部 位	口 径 器底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第96回 団版83 585	火 鉢	-	口 底	16.8 17.6 12.2	肩部に沈線を2本めぐらせる。	器色: 橙色 素地: 橙色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部がくの字状に折れる。底部は平底で、方形状の横耳がつく。	11	搅乱
第97回 団版84 586	植 木鉢	外 反 口 縁	口 縁 部	51.0 - -	口縁部下に波形の凸帯を貼付。肩部に草文を貼付する。	器色: 赤褐色 素地: 赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口唇部が広い。口唇側面に沈線を一本めぐらせる。肩部にわざかな丸みを持つ器形。	11	搅乱
第97回 団版84 587	植 木鉢	外 反 口 縁	口 縁 部	46.8 - -	口縁部下に波形の凸帯を貼付。肩部に草文を貼付する。	器色: 赤褐色 素地: 赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口唇部が広い。肩部から直角に近い形で立ち上がる器形。	11	搅乱
第97回 団版84 588	植 木鉢	外 反 口 縁	口 縁 部	45.4 - -	口唇部に繩目状の刺み目を入れる。	器色: 赤褐色 素地: 赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口唇上面及び側面に沈線を一本めぐらせる。肩部から逆「八」の字状に開く器形。	11	搅乱
第97回 団版84 589	甕	-	底 部	- - 33.2	無文	器色: 茶褐色 素地: 茶褐色	ナデ調整と轆轤跡が残る	底部から肩部へ逆八の字形にたちあがる。器壁が分厚い。	19	B-2 埋甕
第98回 団版85 590	甕	外 反 口 縁	口 縁 部	53.6 - -	無文	器色: 赤褐色 素地: 赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口唇部は広く、口唇側面に3本沈線がめぐらされ、肩部にも3本の沈線が残っている。	11	I-9 南側
第98回 団版85 591	甕	外 反 口 縁	口 縁 部	45.6 - -	無文	器色: 赤褐色 素地: 赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口唇部は広く、口唇側面に3本沈線がめぐらされ、肩部から口縁部にかけてほぼ直角に立ち上がる器形。	11	搅乱
第98回 団版85 592	甕	肥 厚 口 縁	口 縁 部	42.8 - -	口縁下部に波紋が施される。その下には凸帯が一本貼付される。	器色: 暗褐色 素地: 赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆三角形状に肥厚する。口唇側面に2本沈線がめぐらされている。	11	搅乱
第98回 団版85 593	甕	肥 厚 口 縁	口 縁 部	10.8 - -	肩上部に丸文を貼付し、「+」の刺み文をいれる。	器色: 赤褐色 素地: 赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に肥厚する。口唇の幅は狭い。口唇側面に沈線を1本、肩上部に2本めぐらせる。肩下部に丸みを持つ器形。	11	搅乱
第98回 団版85 594	甕	肥 厚 口 縁	口 縁 部	- - -	無文	器色: 暗褐色 素地: 暗赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に肥厚する。口唇の幅は狭い。口唇上部に沈線を1本めぐらせる。	11	搅乱
第98回 団版85 595	甕	外 反 口 縁	口 縁 部	93.4 - -	口縁部に1条、肩上部に3条の凹帯を貼付する。	器色: 赤褐色 素地: 赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口唇は広く、肩部にゆるやかな丸みを持つ。	11	I-9瓦溜まり +J-9遺構上西



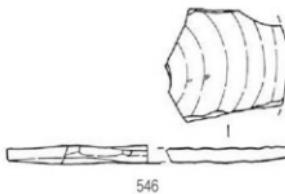
第91図 沖縄産無釉陶器 1



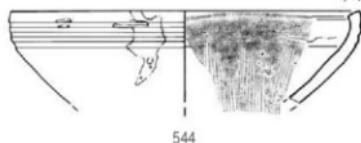
図版78 沖縄産無釉陶器 1



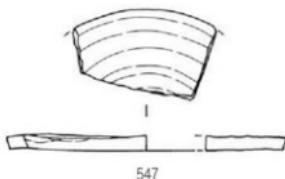
543



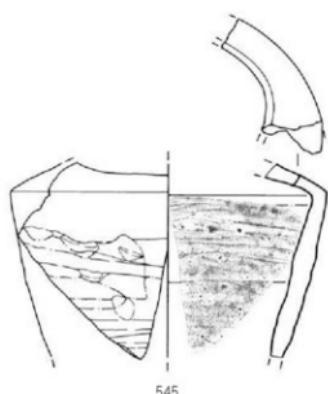
546



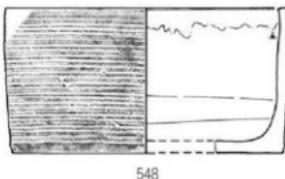
544



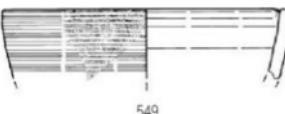
547



545



548



549

0 10cm

第92図 沖縄産無釉陶器2



543



546



544



547



548

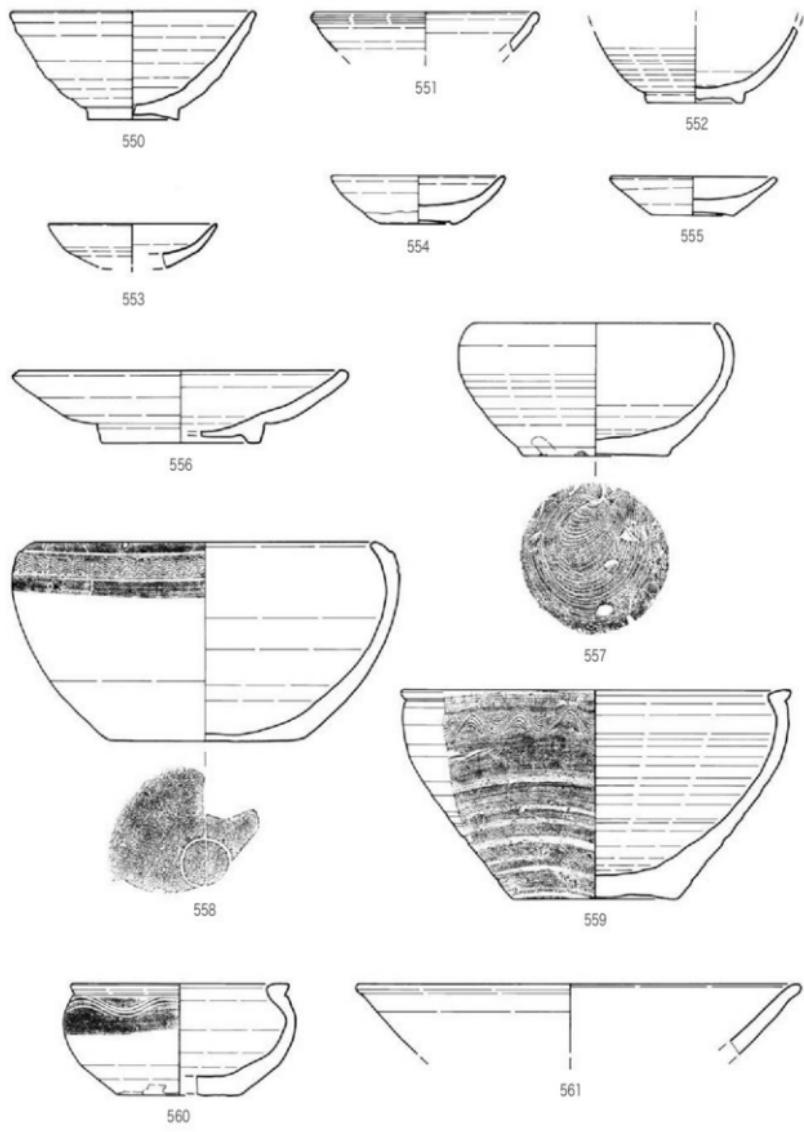


545



549

図版79 沖縄産無釉陶器2



第93図 沖縄産無釉陶器 3

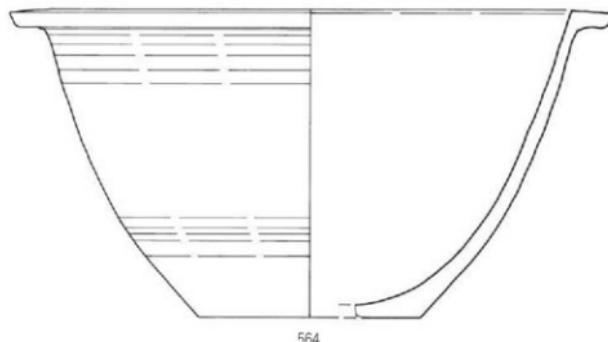


図版80 沖縄産無釉陶器3

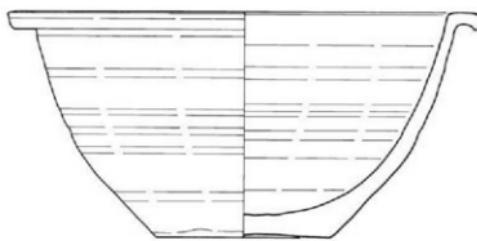


563

562



564



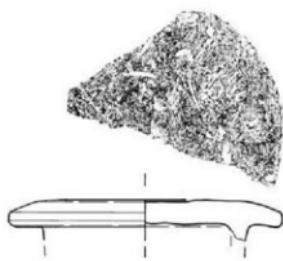
565



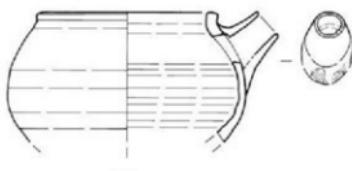
566



567



568



569



第94図 沖縄産無釉陶器 4



562



563



564



565



566



567

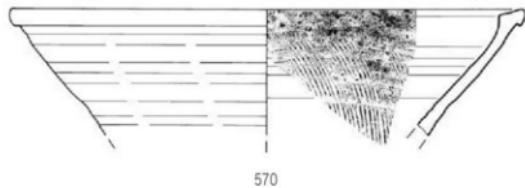


568

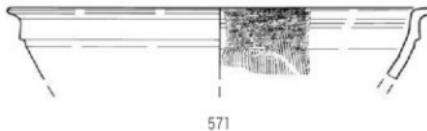


569

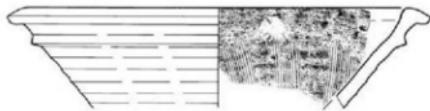
図版81 沖縄産無釉陶器4



570



571



572



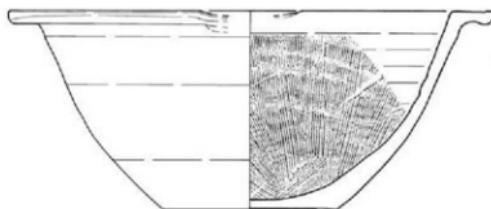
573



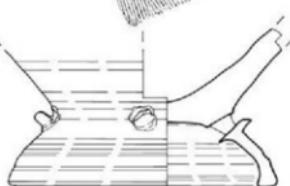
575



574



576



577



第95図 沖縄産無釉陶器 5



570



571



572



573



574



575



I



576

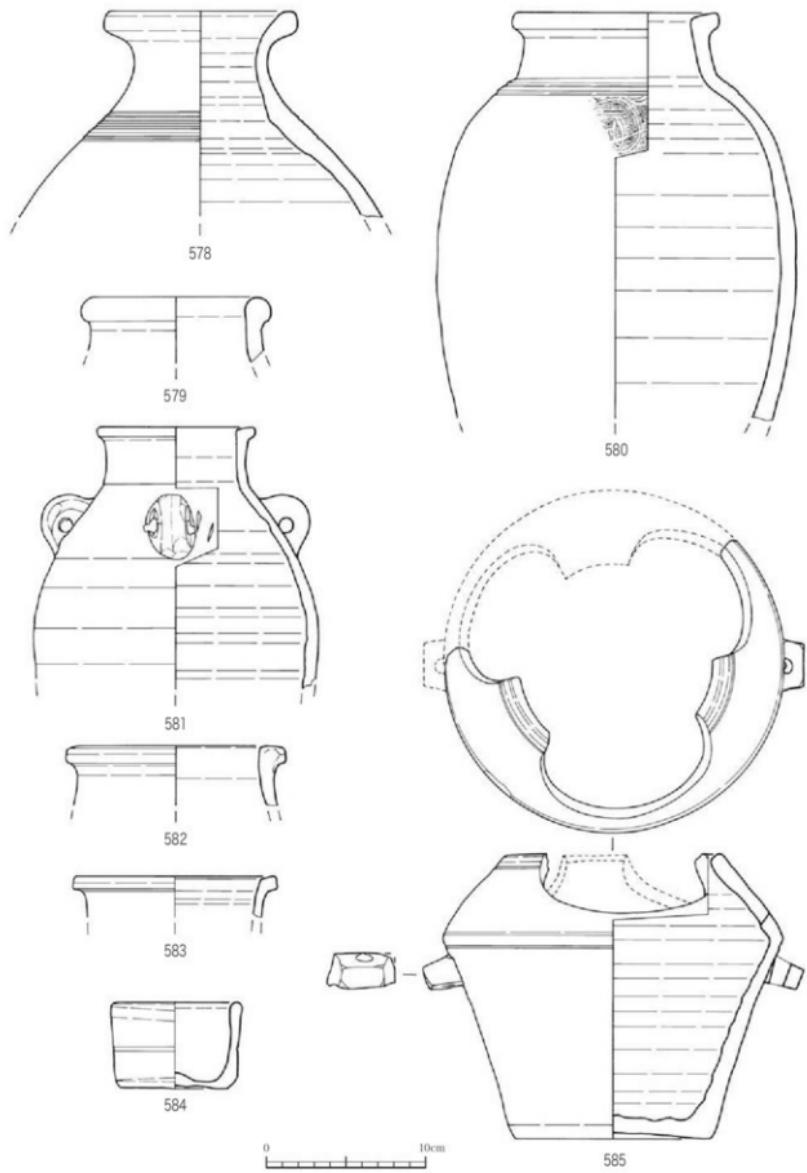


I



577

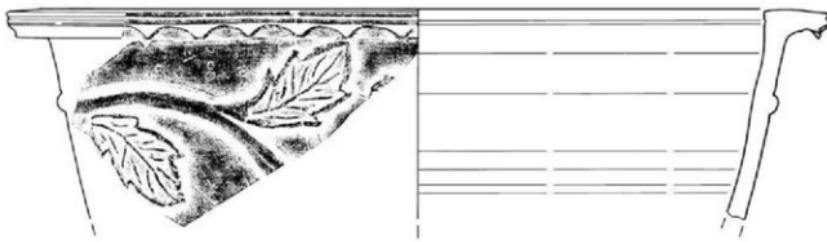
図版82 沖縄産無釉陶器5



第96図 沖縄産無釉陶器 6



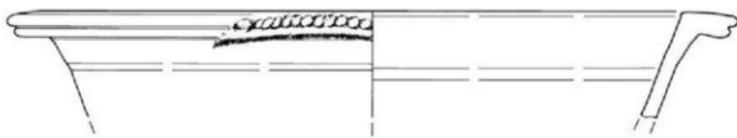
図版83 沖縄産無釉陶器6



586

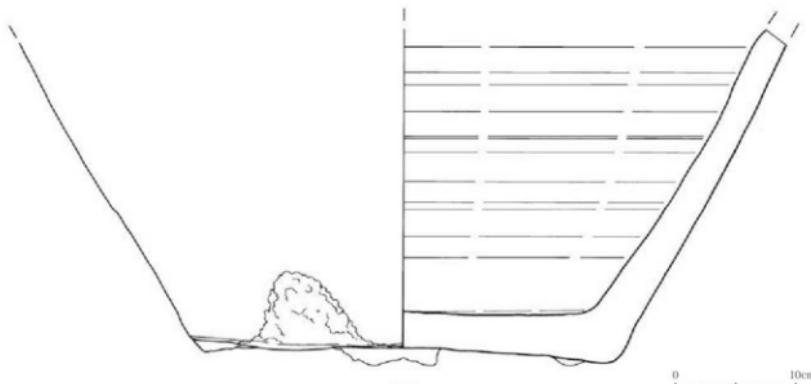


587



588

0 10cm



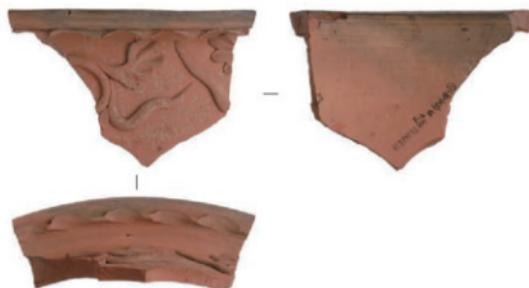
589

0 10cm

第97図 沖縄産無釉陶器 7



586



587

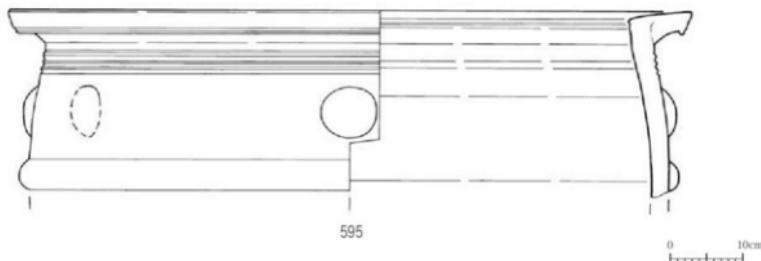
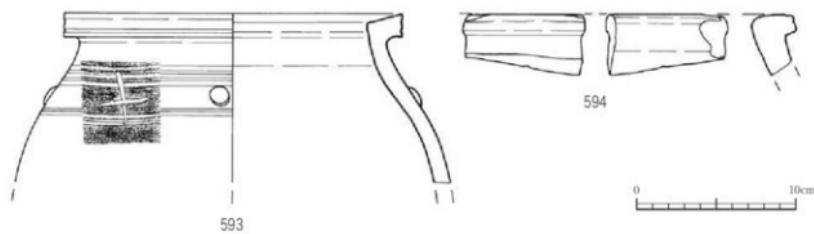
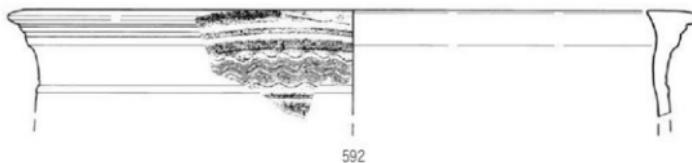
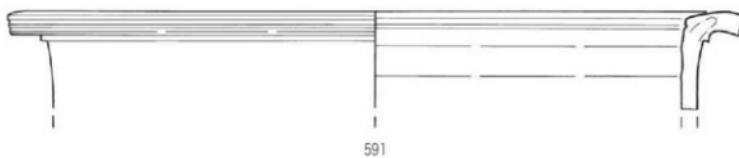
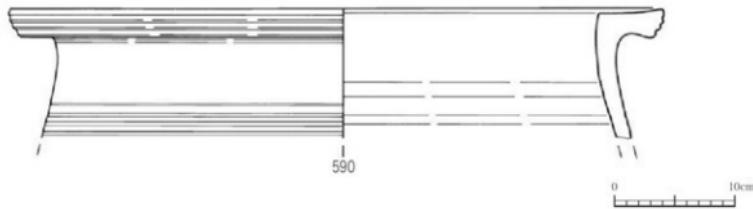


588



589

図版84 沖縄産無釉陶器 7



第98図 沖縄産無釉陶器 8



590



591



592



593



594



595

図版85 沖縄産無釉陶器8

第10節 陶質土器（第55～57表、第99～101図、図版86～88）

陶質土器は、壺屋において「アカモノ」などという呼び名で呼ばれているもので、胎土は細かく、白色粒・黒色粒・赤色粒などを含み、輻輳引きや輪積みにより成形される。器色は橙色や黄褐色のものがある。焼成は弱くもろいものが多い。本遺跡においては3,139点が出土している。器種は浅鉢、鉢、壺、甕、蓋、フライパン状製品、急須の蓋、灯明皿、火炉、サナなどが見られる。以下に器種の概観を述べる。個々の詳細は觀察表に譲る。

1. 浅鉢 (596)

596に示したものである。口縁が内彎し、口唇が舌状を呈する。

2. 鉢 (597～599)

口唇が逆三角形を呈し、肩部が張り出す器形と(597)「ミジクブサー」と呼ばれる水鉢で、内彎口縁に口唇が舌状を呈し、胴部に丸彫りの圓線と櫛書きの波状文を施すもの(598、599)がある。

3. 壺 (600・601)

小型で直口、頸部が短いもの(600)と、外反口縁で肩部が強く張り出すもの(601)がある。

4. 甕 (602)

胴部に沈線がめぐらされ、胴部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる器形。

5. 鍋の蓋 (605、606)

鍋の蓋にあたり、高台状の撮みを持つ。

6. 鍋 (603、604)

口縁部がくの字形を呈し、口唇部に紐状の耳を貼付する。

7. フライパン状製品 (607～610)

口唇部が舌状に肥厚するもの(607、608)、口唇部が平坦に成形されているもの(609)がある。(610)は把手部分にあたる。フライパン状製品は壺屋古窯群でも出土している。

8. 急須の蓋 (611)

宝珠状の撮みを頸長につくる。

9. 急須 (612)

頸部が短く、胴下部を屈曲させている。

10. 灯明皿 (613、614)

口縁部が肥厚し、胴部に削りが入るもの(613)と、底面に左回転による糸切り痕が残るものがある(614)。

11. 火鉢 (615~618)

肩部をくの字形に屈曲させるもの(616)と、胴部に膨らみを持ち、胴半ばに方形の把手を貼付するもの(615、618)、口縁部が逆三角形状に肥厚し、円筒形の器形を呈するもの(617)がある。

12. サナ (619)

七輪の内部に設置し、灰おとしとして用いられる部品である。

〈参考文献〉

沖縄県文化財調査報告書第111集「湧田古窯跡（I）－県庁舎行政棟建設に係わる発掘調査」
1993 沖縄県教育委員会

那覇市文化財調査報告書第23集「壺屋古窯群Ⅰ－個人住宅建設に伴う緊急発掘調査－」
1992 那覇市教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第2集「天界寺跡（I）－首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査」2001 沖縄県立埋蔵文化財センター

第55表 陶質土器観察一覧 1

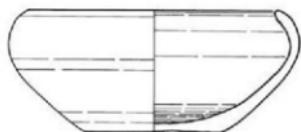
図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口径 器高 底径 (cm)	観 察 事 項					調査 年度 (西暦)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	混和材	調整法	所 見		
第99図 図版86 596	浅 鉢	内 湾 口 縁	口 縁部 ↓ 底部	15.4 7.5 8.4	無文	器色：橙色 素地：橙色	白色粒・黒 色粒・雲母	轆 轤 痕	口縁が内壘し、口唇 が舌状を呈す。	11	複乱
第99図 図版86 597	鉢	内 湾 口 縁	口 縁部	21.6 — —	無文	器色：橙色 素地：橙色	白色粒・黒 色粒・雲母	轆 轤 痕	口縁が内壘し、口唇 部が逆三角形を呈 する。肩部が強く張 り出す器形。	19	B-4 2層
第99図 図版86 598	鉢	内 湾 口 縁	口 縁部 ↓ 底部	20.3 11.4 10.5	胴上部に丸 彫りで圓線を 2本めぐらせ、 その間に神 書きの波状 文を描く。	器色：橙色 素地：橙色	白色粒・黒 色粒・雲母	轆 轤 痕	口縁が内壘し、口唇 が舌状を呈する。	11	J-9 遺構上西
第99図 図版86 599	鉢	内 湾 口 縁	口 縁部 ↓ 底部	20.0 10.6 8.8	胴上部に丸 彫りで圓線を 1本めぐらせる。	器色：橙色 素地：橙色	赤色粒・白 色粒・黒色 粒・雲母	轆 轤 痕	口縁が内壘し、口唇 が舌状を呈する。	11	J-9 遺構上西 +複乱
第99図 図版86 600	壺	直 口 口 縁	口 縁部 ↓ 胴部	11.0 — —	頸部に凸帶 を1本割り 出す。	器色：橙色 素地：橙色	白色粒・黒 色粒・雲母	轆 轤 痕	小型の壺。直口で頸 部が短く、肩部ナデ 形になっている器形。	11	複乱

第56表 陶質土器観察一覧2

図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 器 底 (cm)	観察事項					調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	混和材	調整法	所見		
第99図 図版86 601	壺	直口 口縁 部	口 縁 部 の 肩 部	12.4 — —	肩部に の印が 舞まれる。	器色:茶褐色 素地:明褐色	赤色粒・白色粒・黑色 粒・雲母	表面をナデ 調整してい る。	頸部が短く、肩 部が強く張り出 し、肩部に丸み を持つ器形。	11	搅乱
第99図 図版86 602	甕	肥厚 口 縁	口 縁 部	42.2 — —	肩部に5本の 沈線がめぐらされる。	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黑 色粒・雲母	轆轤痕が 明瞭に残る。	口縁部が逆三 角形状に肥厚す る。肩部から口 縁部にかけてほ ぼ垂直に立ち上 がる器形。	19	搅乱
第100図 図版87 603	鍋	外 反 口 縁	口 縁 部 の 肩 部	12.9 6.5 2.9	無文	器色:橙色 素地:橙色	赤色粒・白 色粒・黑色 粒・雲母	轆轤痕が明 瞭に残る。腰 部から底部に かけて逆削り による調整。	口縁部がくの字 形を呈する。口 縁部に紐状の耳 を貼付する。	11	J-9 遺構上西
第100図 図版87 604	鍋	外 反 口 縁	口 縁 部 の 肩 部	20.9 11.7 3.2	無文	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黑 色粒・雲母	轆轤痕が 明瞭に残る。	口縁部がくの字 形を呈する。口 縁部に紐状の耳 を貼付する。腰 部から底部にかけ てスス痕が付着。	11	J-9 遺構上西
第100図 図版87 605	蓋	—	撮 底	13.5 3.6 —	無文	器色:橙色 素地:橙色	赤色粒・白 色粒・黑色 粒・雲母	轆轤痕が 明瞭に残る。	鍋の蓋。高台状 の撮みを持つ。	11	搅乱
第100図 図版87 606	蓋	—	撮 底	17.8 4.5 —	無文	器色:橙色 素地:橙色	赤色粒・白 色粒・黑色 粒・雲母	轆轤痕が 明瞭に残る。	鍋の蓋。高台状 の撮みを持つ。	11	I-7 30~40
第100図 図版87 607	フライパン 状 製品	肥厚 口 縁	口 縁 部	— — —	無文	器色:乳白色 素地:乳白色	黑色粒・白 色粒	ナデ調整	口唇部が舌状 に肥厚する。焼 成が弱い。	11	搅乱
第100図 図版87 608	フライパン 状 製品	肥厚 口 縁	口 縁 部	20.0 — —	無文	器色:乳白色 素地:乳白色	黑色粒・白 色粒	ナデ調整	口縁部が舌状 に肥厚する。焼 成が弱い。	11	搅乱
第100図 図版87 609	フライパン 状 製品	直 口 縁	口 縁 部 の 底 部	24.7 — —	無文	器色:橙色 素地:橙色	赤色粒・白 色粒・黑色 粒・雲母	轆轤痕が 明瞭に残る。	口唇部が平坦 に成形される。 内底・外底にス ス痕が付着。	11	搅乱
第100図 図版87 610	フライパン 状 製品	—	把手	— — —	無文	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黑 色粒・雲母	指によるナ デ調整	上面から約8mm の孔を穿つ。	11	J-8 茶褐色灰混層

第57表 陶質土器観察一覧3

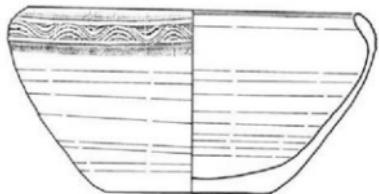
図 図版 番号	器 種	器 形	部 位	口 径 器 底 (cm)	観察事項					調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	混和材	調整法	所見		
第101図 図版88 611	急須の蓋	-	撮 写	撮:2.1 3.6 6.2	無文	器色:薄橙色 素地:薄橙色	白色粒・黒 色粒・雲母	轆 轤 痕 が 明瞭に残る。	宝珠状の振みを首 長につくる。甲蓋部 を底近くまでへら削 りで調整。	11	J-9 遺構上西
第101図 図版88 612	急須	-	口 縁 部 ＼ 底 部	7.8 - -	無文	器色:棕色 素地:棕色	白色粒・黒 色粒・雲母	轆 轤 痕 が 明瞭に残る。	頭部が短く、胴下部 を屈曲させる。胴部 に方形の耳を貼付 する。底部にはスス 痕が付着している。	11	搅乱 +J-9遺構上西 +J-9灰混層
第101図 図版88 613	灯 明 皿	直 口 口 縁	口 縁 部 ＼ 底 部	11.3 2.1 3.8	無文	器色:灰褐色 素地:灰褐色	白色粒・黒 色粒・赤色 粒	轆 轤 痕 が 明瞭に残る。	口縁部がわずかに 肥厚する。腰部に削 りが入る。	11	J-9 遺構上西
第101図 図版88 614	灯 明 皿	-	底 部	- - 4.0	無文	器色:棕色 素地:棕色	白色粒・黒 色粒・雲母	轆 轤 痕 が 明瞭に残る。	内・外面にスス痕が 付着。底面に左回転 による系切り痕が残る。	11	搅乱
第101図 図版88 615	火 炉	内 縁 口 縁	口 縁 部 ＼ 底 部	15.5 10.7 8.2	肩部に丸彫 りで2本の 沈線を施す。	器色:棕色 素地:棕色	白色粒・黒 色粒・雲母	轆 轤 痕 が 明瞭に残る。	肩部に膨らみを持ち、 肩半ばに方形の把手 を貼付する。口縁部 内面には器物をのせる 突起を貼り付ける。	11	搅乱 +J-8茶褐色灰 混層
第101図 図版88 616	火 炉	内 縁 口 縁	口 縁 部 ＼ 肩 部	12.0 - -	肩部に丸彫 りで2本の 沈線を施す。	器色:棕色 素地:棕色	白色粒・黒 色粒	轆 轤 痕 が 明瞭に残る。	肩部をくの字状に屈曲 させ、底部から肩部へ 逆への字形に立ち上 がる器形。口縁部の外 側と内面肩上部にスス 痕が付着している。	11	搅乱
第101図 図版88 617	火 炉	内 縁 口 縁	口 縁 部 ＼ 肩 部	21.3 - -	白化粧土に よる横線を めぐらせる。	器色:棕色 素地:棕色	白色粒・黒 色粒	轆 轤 痕 が 明瞭に残る。	口縁部が逆三角形状 に肥厚する。器形は円 筒形を呈す。口縁部外 面には器物をのせる 突起を貼り付ける。	11	搅乱
第101図 図版88 618	火 炉	-	肩 部	- - -	白化粧土に よる横線を めぐらせる。 「小」「第」と 一文字判読 不明の墨書き あり。	器色:棕色 素地:棕色	白色粒・黒 色粒	轆 轤 痕 が 明瞭に残る。	肩部をくの字状に屈 曲させる器形。折れ 曲がった肩部には 方形の把手が貼付 される。	11	I-9 南側
第101図 図版88 619	サ ナ	-	-	- - -	無文	器色:棕色 素地:棕色	白色粒・黒 色粒・雲母	ナデ調整	七輪の灰おとしに用 いられるサナという器 具。器壁は厚みがあり、 孔が穿たれている。	11	搅乱



596



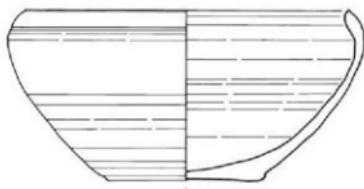
597



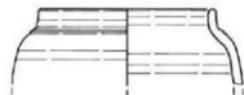
I



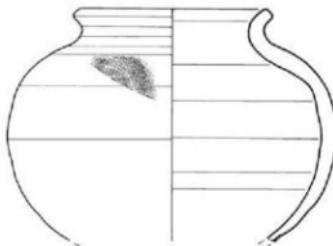
598



599



600



601



602



第99図 陶質土器 1



596



597



I



598



599



600

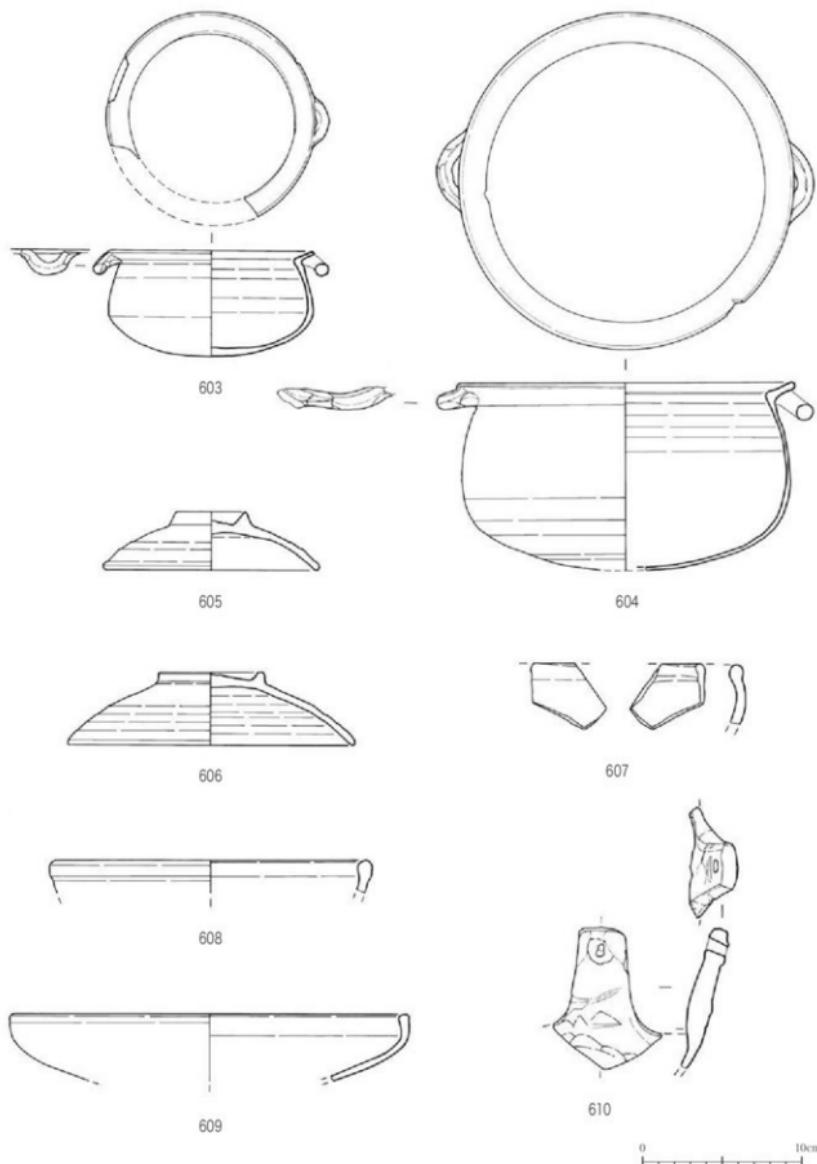


601



602

圖版86 陶質土器 1



0 10cm

第100図 陶質土器 2



603



—



605



604



607



608



606

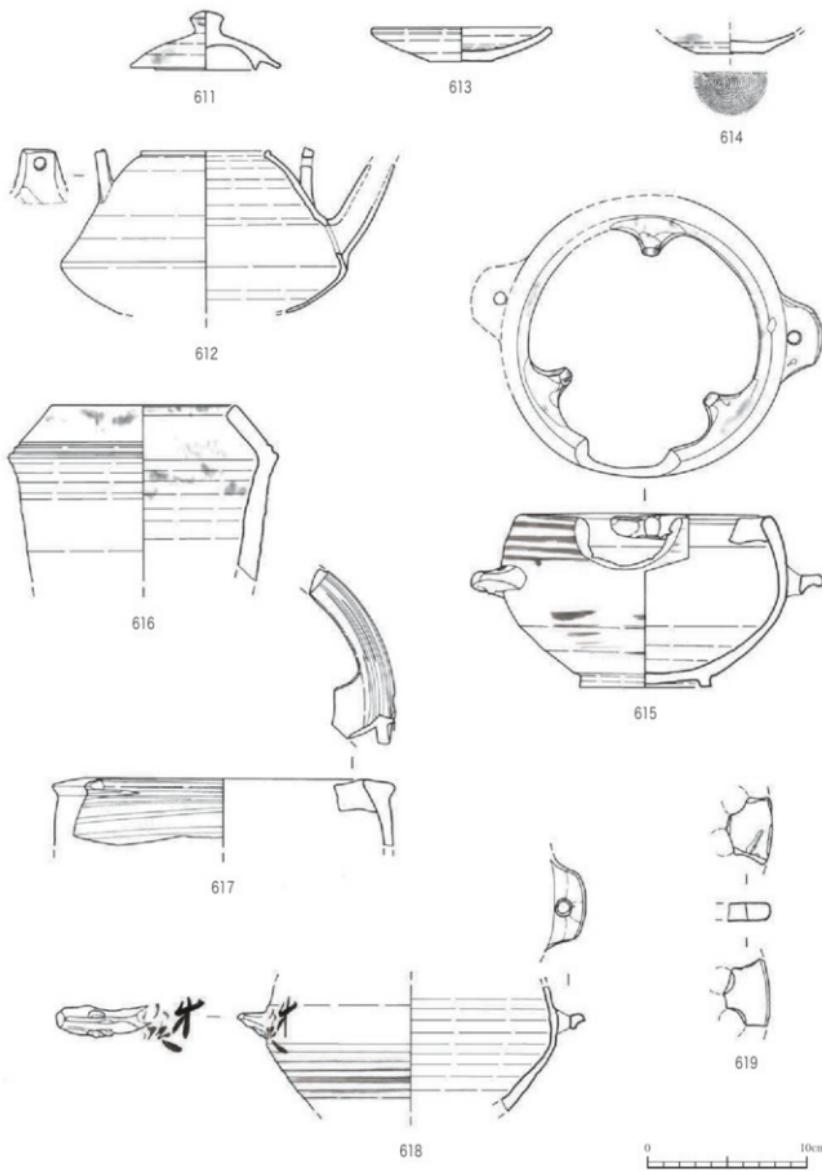


609



610

圖版87 陶質土器2



第101図 陶質土器 3



图版88 陶質土器3

第11節 瓦質土器（第58表、第102～105図、図版89～92）

本遺跡で瓦質土器は87点が出土している。うち特徴的なもの20点を図示した。器種別にみると、植木鉢、火鉢、七輪、火炉、浅鉢、竈、焜爐、甕が出土している。以下に各器種の概要を述べる。個々の詳細は観察表に譲る。

1. 植木鉢 (620～628)

口縁部が内彎し、口縁部や胴上部に波状の凸帯をめぐらせるもの (620～622)、胴部に菊葉文を施すもの (623～625) などがある。また、特徴的な資料として脚付きの植木鉢がある (628)。脚の中央部に孔を穿ち、底部から胴部にかけて丸みを帯びた器形である。

2. 浅鉢 (630, 636)

口縁部を広くつくり、胴部を屈曲させて胴上部に菊花文をめぐらせるもの (630)、底に砂目の付着した底部資料などがある (636)。

3. 火炉 (631, 632)

口縁資料で器形は円筒形を呈し、菊花文と菱形文を組み合わせるもの (631)、底部資料で胴部に丸みを持つもの (632) がある。

4. 七輪 (633, 634)

口縁が外反し、口縁外面に雷文帯を施すもの(633)と、口唇部を平たく成形するもの(634)がある。

5. 火鉢 (635)

胴部にゆるやかな丸みを持つ、円筒形の器形である。

6. 竈 (637)

類例資料が湧田古窯から出土している。形状は方形を呈し、外面には補修に用いたものか漆喰が付着している。

7. 焔爐 (638)

焜爐と思われる資料で、橢円形の器形を呈する。

8. 甕 (639)

底部資料である。底部から胴部にかけて斜め上方へストレートにたちあがる器形。

9. 器種不明 (629)

器物の脚と思われる。縦横の沈線を組み合わせて文様を描く。

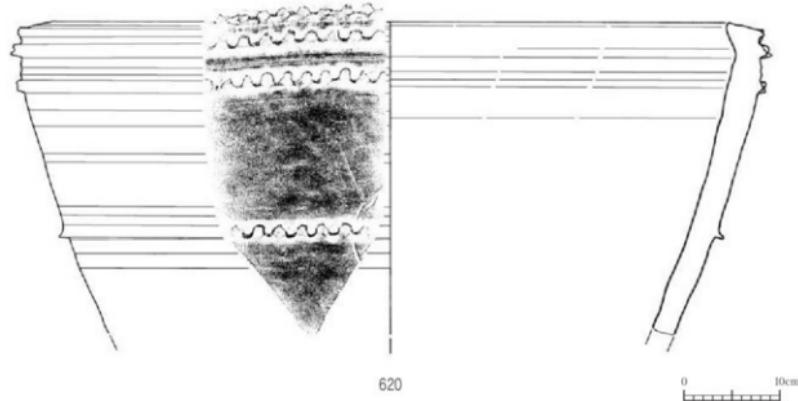
〈参考文献〉

瀬戸哲也 2004「沖縄出土の本土系瓦質土器について」『グスク文化を考える－世界遺産国際シンポジウム〈東アジアの城郭遺跡を比較して〉の記録－』今帰仁村教育委員会

新垣力 2000「モデルとコピーの視点から見た窯業開始期の沖縄」『南島公庫20号』沖縄考古学会

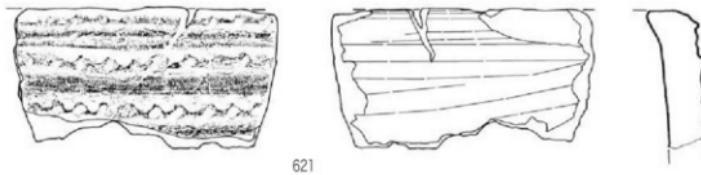
第58表 瓦質土器観察一覧

國 國版 番号	器種	器形	部位	口徑 器高径 (cm)	観察事項					調査 年度 (年)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	混和材	調整法	所見		
第102國 國版89 620	植木鉢	内 縁口 縁	口 ／＼胸	76.2	口縁部に波状の 縞模様に束縛し、胴下部 に1条めぐらせる。	器色:灰色 素地:灰色	黒色粒・白 色粒	ナデ調整	口縫部は舌状を呈する。底部 から斜め上方にむかへば ストレートに立ち上がる器形。	11	搅乱
第102國 國版89 621	植木鉢	内 縁口 縁	口 ／＼胸	-	口縫部に波状の 縞模様に束縛し、胴上部に2条 めぐらせる。	器色:灰色 素地:灰色	黒色粒・白 色粒・雲母	轆轤痕、ナ デ調整	口縫部は舌状を呈 する。胴上部にやや 丸みを持つ器形	19	A-1 石積み6 西側下層
第102國 國版89 622	植木鉢	内 縁口 縁	口 ／＼胸	60.9	口縫部に束縛の外 縁を1条、胴下部に 2条めぐらせる。底部 に菊葉文を施す。	器色:暗灰色 素地:灰色	黒色粒・白 色粒・雲母	轆轤痕、ヘ ラ削り	口縫部は舌状を呈 する。胴上部にやや 丸みを持つ器形	11	搅乱
第102國 國版89 623	植木鉢	-	胴部	-	菊葉文を施す。	器色:暗灰色 素地:灰色	黒色粒・白 色粒・雲母	ヘラ削り	やや丸みを持つ胴 部。	11	搅乱
第103國 國版90 624	植木鉢	-	胴部	-	胴上部に割手は てに斜め白色帶を には施す。	器色:灰色 素地:灰色	黒色粒・白 色粒・雲母	ナデ調整	やや丸みを持つ胴 部。	11	搅乱
第103國 國版90 625	植木鉢	-	胴部	-	胴部に波状の 縞模様に束縛し、 その直上に に菊葉文を施す。	器色:暗灰色 素地:灰色	黒色粒・白 色粒・雲母	轆轤痕、ナ デ調整	ほぼストレートに立 ち上がる器形。	11	搅乱
第103國 國版90 626	植木鉢	-	底部	-	無文	器色:灰色 素地:暗灰色	白色粒・雲 母	ヘラ削り・ 指圧	底部から胴部にかけ て斜め方向へストレー トに立ち上がる器形。	11	搅乱
第103國 國版90 627	植木鉢	-	底部	-	無文	器色:灰色 素地:暗灰色	黒色粒・白 色粒・雲母	叩き痕	底部から胴部にかけ て斜め方向へストレー トに立ち上がる器形。	11	搅乱
第103國 國版90 628	植木鉢	-	底部	-	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	白色粒・赤 色粒・雲母・黑色 粒	轆轤痕・ヘ ラ削り・ナ デ痕	脚付きの植木鉢。脚の中央 部に孔をつくり、底部から胴部 にかけて丸みを帯びた器形。	11	J-9構造上西+ 搅乱
第103國 國版90 629	器種未 明	-	脚部	-	脚面に縱横の 浅縞を組み合 わせて文様を施す。	器色:暗灰色 素地:灰色	白色粒	ナデ調整	器物の脚。	11	搅乱
第104國 國版91 630	浅鉢	内 縁口 縁	口 ／＼胸	-	胴上部に菊 花文をめぐ らせる。	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・雲 母・赤色粒	ナデ調整	口縁部を広くつくり、 脚部を屈曲させる。	11	搅乱
第104國 國版91 631	火鉢	直 口 口縁	口 ／＼胸	17.2	胴部一段に菊花文 と菱形文を交叉し て施す。下部には 割手をつける。	器色:赤褐色 素地:赤褐色	雲母・白色 粒	ナデ調整	口縁部が肥厚し、器形 は円筒形を呈する。口縁 内側に突起を貼付する。	11	搅乱
第104國 國版91 632	火鉢	-	底部	-	無文	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黑 色粒・赤色 粒・雲母	轆轤痕・ヘ ラ削り	脚部に丸みを持つ て立ち上がる器形。底 面に系切り痕を残す。	11	I-9 南側
第104國 國版91 633	七輪	外 反 口 縁	口 ／＼胸	24.0	口縁外面に 青文帯を施す。	器色:茶褐色 素地:茶褐色	白色粒・雲 母・赤色粒	ナデ調整	口縁部の「透」字状を呈す る。脚部が低い。内側面 の深い溝にスス痕が残る。	11	搅乱
第104國 國版91 634	七輪	直 口 口縁	口 ／＼胸	-	無文	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黑 色粒・雲母	轆轤痕・ナ デ痕	口縫部を平たく成形 する。器形は円筒形 を呈する。	11	搅乱
第104國 國版91 635	火鉢	内 縁口 縁	口 ／＼胸	34.6	無文	器色:茶褐色 素地:茶褐色	白色粒・雲 母	ヘラ削り・ナ デ調整	口縫部がひざに肥厚す る。器形は胴部にゆるや かな膨らみを持つ圓筒形。	11	搅乱
第104國 國版91 636	浅鉢	-	底部	-	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	白色粒・雲 母・黑色 粒・赤色粒	ナデ調整・ ヘラ削り	底部外面に砂目が 付着している。	19	E-4 5層
第105國 國版92 637	甕	直 口 口縁	口 ／＼底	24.2	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	白色粒・雲 母・黑色 粒・赤色粒	ナデ調整	形状は梢円形を呈 する。外面に漆喰が 付着。	11	搅乱
第105國 國版92 638	棍炉	-	口 ／＼底	-	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	白色粒・雲 母・黑色 粒・赤色粒	ナデ調整・ 轆轤痕	形状は梢円形を呈 するかと思われる。	11	搅乱
第105國 國版92 639	甕	-	-	32.6	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	赤色粒・白 色粒・雲母	轆轤痕・ヘ ラ削り	底部から胴部にかけ て斜め方向へストレー トに立ち上がる器形。	11	搅乱

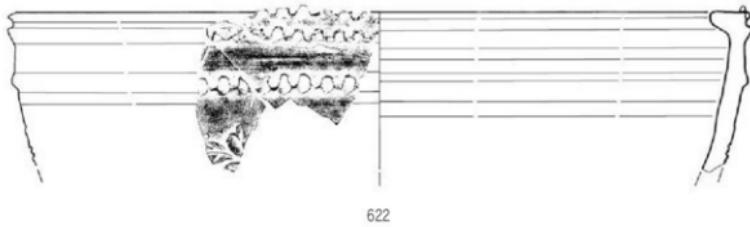


620

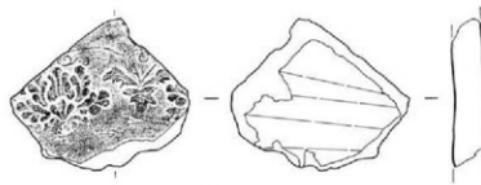
0 10cm



621



622



623

0 10cm

第102図 瓦質土器 1



620



621



622

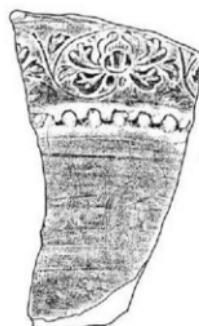


623

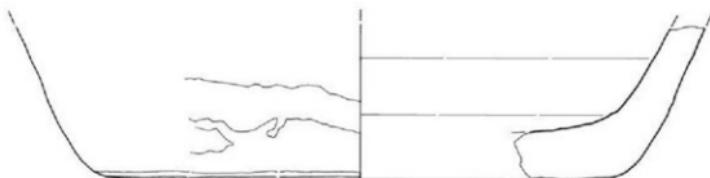
圖版89 瓦質土器 1



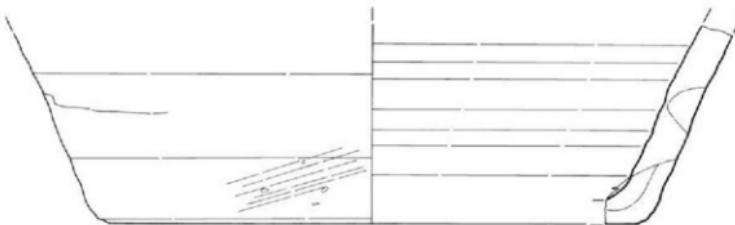
624



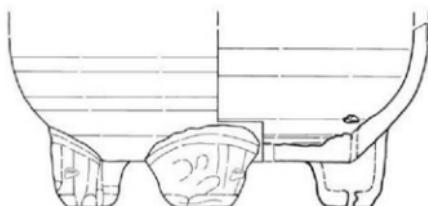
625



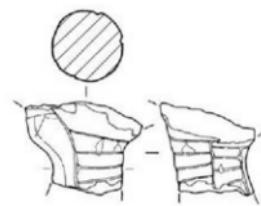
626



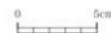
627



628



629



第103図 瓦質土器 2



624



625



626



627

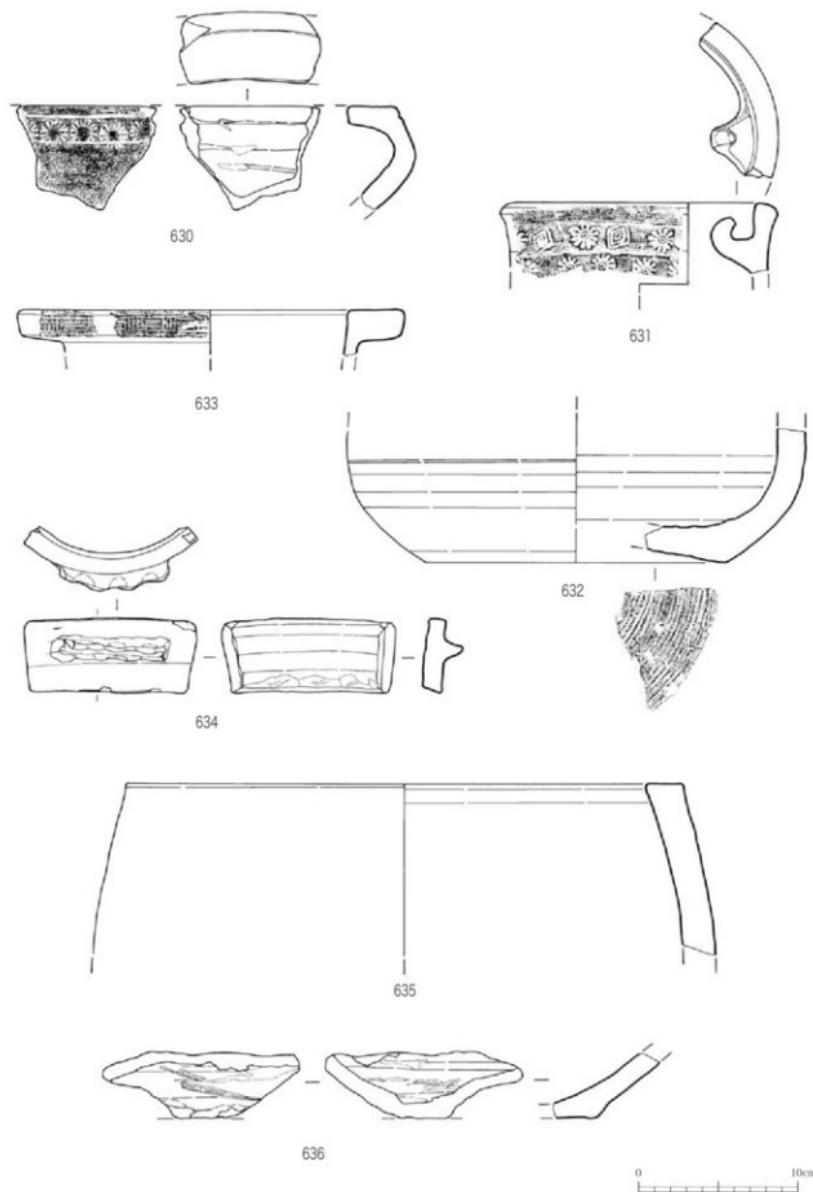


628



629

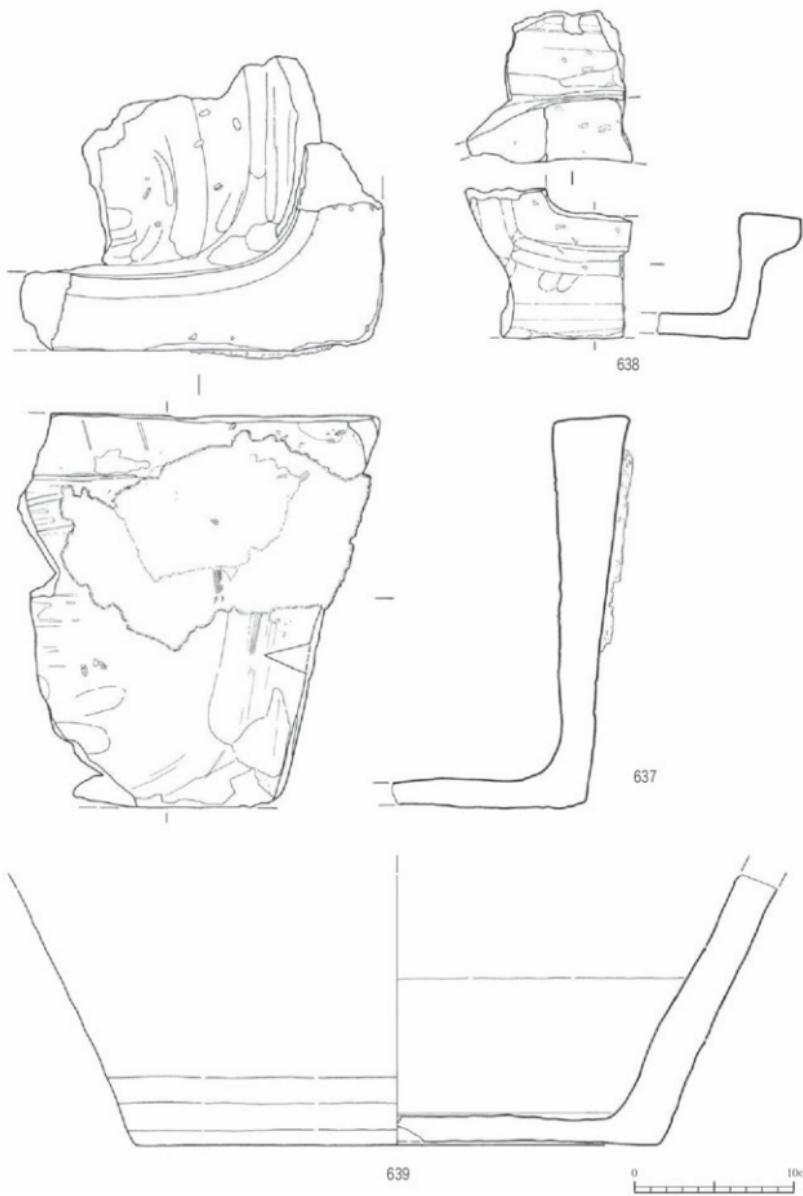
圖版90 瓦質土器2



第104図 瓦質土器 3



圖版91 瓦質土器3



第105図 瓦質土器 4



1



637



638



639

圖版92 瓦質土器4

第12節 土器・カムィヤキ（第59～61表、第106・107図、図版93・94）

当地区では全70点の土器と2点のカムィヤキが出土している。そのうちで特徴的な22点を図化した。

第106図640は、当地区で唯一の先史時代の土器である。やや肥厚した口唇部直下に沈線が巡り、その下には横位に列点文がみられる。その下には左上から右下方向へ2条の沈線文が区画される。口唇部の列点文から大山式と考えられるが、列点文下の鋸歯状沈線文は室川式に特徴的である。大山式から室川式への漸移的な段階に位置づけられる資料とみられる。

第106図641～654はグスク土器である。643～645は壺の口縁部で、643は横ミガキや直線的な形状で他の資料とやや趣を異にしている。一部が二次焼成を受け炭化している。644、645はともに雑なナデ調整である。特に644は、今帰仁城IIにみられる壺bと形状的に類似する。641は碗の口縁部で、内外ともにナデ調整されるが外面は雑である。口縁部は平坦に削られ、同じく碗bに比定される。646～653は壺の底部資料である。646、647、649、650は平底、653のみ丸底である。総じて器面調整は雑である。また、654は鍋とみられる資料である。

第107図655～658は、貝殻片が密に混ざることから宮古式と考えられる資料である。655は半削された中皿で、外面には轆轤痕が残る。656～658は表面が黒色の一群である。658は壺底部、657は壺の胴下半部、656は壺の肩部である。ともに器面は轆轤痕が残るとともに、ナデ・ミガキ調整がなされている。

第107図659、660は厚い器壁や胎土中の大粒な貝殻碎片から八重山土器とみられる資料である。659は壺の口縁部で、八重山式の典型的な資料であるが、残存部位が少ないため中森式とバナリ焼の判別には至らなかった。660は659にも増して厚い器壁からバナリ焼とみられる。内面に欠損しているが蓋置きの突起がみられることから火炉と思われる。外面には型押しにより木葉が施される。

カムィヤキは破片で2点得られた。図化したのは壺の胴部片で、外面は磨かれるも雑で、格子目文の当て具痕が残される。

〈参考文献〉

- 伊藤慎二 2008.6「琉球縄文土器（前期）」小林達雄（編）『総覧縄文土器』p814-821 アム・プロジェクト
金武正紀・宮里未廣・松田朝雄 1991.3『今帰仁城跡発掘調査報告II』今帰仁村文化財調査報告書第14集 今帰仁村教育委員会
今帰仁村教育委員会（編）2009.11『グスク土器展—県内のグスク時代主要遺跡より—』

第59表 土器・カミイヤキ観察一覧1

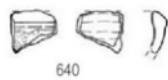
図 図版 番号	分 類	器 種	部 位	口 径 器 底径 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	調整法	所 見		
第106図 図版93 640	先 史 土 器	鉢 ?	口 縁 部	- - -	口唇直下に横位に沈線、さらにその下に横位に列点文がある。口縁部から腹上部には斜方向に数条の沈線文が配置される。	内外ともに赤褐色 素地は粗粒	内外・口唇とともにナデ	口唇は平坦でやや肥厚。胎土中に石灰岩粒をまばらに含む。大山式?	11	J-8 茶褐色灰混層
第106図 図版93 641	グ ス ク 土 器	碗	口 縁 部	- - -	無文	内外橙色 泥質	内外ナデ、ただし外は稚、口縁削り	混和材にやや粒の大きな粘板岩や赤色粒。	19	E-3 5層
第106図 図版93 642	グ ス ク 土 器	鉢	口 縁 部	- - -	無文	内外:橙色 泥質	内外口ともに横ミガキ	平口縁で胴も直線的。胎土中には石灰岩・石英粒が含有。二次焼成を受けて炭化している。	11	搅乱
第106図 図版93 643	グ ス ク 土 器	壺	口 縁 部	- - -	無文	内外とも橙色 泥質	内外ナデ、外には縦横にハケ目残る	混和材に粒の大きい石灰岩。頸部が外反し、内外とも丁寧なナデ調整。	19	D-3 5層
第106図 図版93 644	グ ス ク 土 器	壺	口 縁 部	8.8 - -	無文	内外:黄橙色 泥質	内外稚ナデ 指頭圧痕残 外頭部のみ横ミガキ	混和材に千枚岩・石灰岩・砂岩片(名護層近辺の胎土か?)直口縁で短頭、ナデ調整稚。	19	E-4 5層
第106図 図版93 645	グ ス ク 土 器	壺	口 縁 部	14.4 - -	無文	外:橙色 内:褐灰色 泥質	外:ナデ 内:稚ナデ 口唇の外反は手づくね	断面サンドウィッチ構造で、混和材には赤色・黒色粒・石英、内外とも輪轍痕残る。口唇の指頭圧痕は横位に連続して残り、手づくねで成形されたことがわかる。	11	J-9 遺構上西
第106図 図版93 646	グ ス ク 土 器	平 底 壺	底 部	- - 12.6	無文	内外:橙色 泥質	内:横ミガキ 外:斜ミガキ 底:粗削り	混和材に粘板岩・マンガン・石灰岩粒。焼成良好。	19	E-5 7層

第60表 土器・カミイヤキ観察一覧2

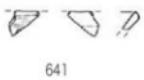
図 図版 番号	分 類	器 種	部 位	口 径 高 度 (cm)	観 察 事 項				調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第106図 図版93 647	グ ス ク 土 器	平 底 壺	底 部	- - -	無文	外:純橙色 中:黒色 内:橙色 泥質	内外:ナデ 外面にハケ目残 る。	混和材に石灰岩・マン ガン小塊・粘板岩粒。 内面・底部に轆轤痕。 一部が二次焼成を 受けて表面炭化。	11	搅乱
第106図 図版93 648	グ ス ク 土 器	壺	底 部	- - 15.8	無文	外:赤色 内:純黄橙色 泥質	外:稚ナデでハ ケ目残る。 内:稚ナデで指 頭圧痕残る。	混和材にチャート・石 英・砂岩・マンガン粒。 底部に凹みが2条。外 は平底だが内は丸底。	19	搅乱
第106図 図版93 649	グ ス ク 土 器	平 底 壺	底 部	- - -	無文	外:褐灰色 内:純黄褐色 泥質	外:荒れ肌 内:稚ナデ 指頭圧痕と縱方 向のハケ目残る。 底:削り	混和材に石英・千枚岩 粒多量。外面は荒れ肌 だが焼成良好で硬質。	19	E-5 7層
第106図 図版93 650	グ ス ク 土 器	平 底 壺	底 部	- - 15.6	無文	内外:橙色 泥質	内外:稚ナデ、 ハケ目残る。	混和材に千枚岩・マン ガン粒。外面にはスス 付着。	11	搅乱
第106図 図版93 651	グ ス ク 土 器	壺	底 部	- - -	無文	内外:純黃橙 色 泥質	内外:稚ナデ、 指頭圧痕・横位 に擦痕残る。 底:粗削り	混和材にマンガン大 粒・小粒のチャート?。 内外とも、器面ナデ調 整後に擦痕が付く。	19	D-4 5層
第106図 図版93 652	グ ス ク 土 器	壺 ?	底 部	- - 23.4	無文	内外:明黄褐 色 泥質	内外:稚ナデで ハケ目・指頭圧 痕残る。	混和材に千枚岩・石灰 岩・マンガン粒・石英。 内面底面と脚下部にス ス付着。	19	E-5 7層
第106図 図版93 653	グ ス ク 土 器	丸 底 壺	底 部	- - -	無文	内外:純褐色 泥質	外:横ヘラミガキ 内:ナデ 底:稚ヘラミガ キ、指頭圧痕・ 条線残る。	混和材に石灰岩・石 英・マンガン小塊。外面 にスス付着。	19	C-3 野面石積み雨側 栗石

第61表 土器・カムイヤキ観察一覧3

國 國版 番号	分 類	器 種	部 位	口徑 高 さ 底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (年)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第107國 國版94 654	グスク土器	鍋	底部	- - -	無文	内外:橙色 中:純黃橙色 泥質	内外:雜ナデ、指頭圧痕・ハケ目 残る。	混和材に石灰岩・ チャート大粒。混和材 の抜け穴無数。焼成悪 く器面は吹粉。	19	擾乱
第107國 國版94 655	宮古式	口 縁 部 → 底 部	中 皿	20.0 2.3 17.8	無文	内外とも橙色 土師質	内外ナデ、口縁は 割り。底部外に指頭圧痕、内に はハケ目残る。	混和材に貝殻片が密。 内外に轆轤痕。	11	擾乱
第107國 國版94 656	宮古式	壺	肩 部	- - -	無文	外:黒褐色 中:純黃褐色 内:橙色 砂質	内外ともナデ・ミ ガキ。	混和材に石灰岩密で 僅かにマンガン塊。内 面に轆轤痕	11	I-6 基壇東
第107國 國版94 657	宮古式	壺	胴 下 半 部	- - -	無文	外:黒褐色 内:純黃褐色 砂質	内外ナデ、外はミ ガキも。	混和材に石灰岩密で 僅かにマンガン塊。外 に轆轤痕。	19	A-1 石積み6 西側上層
第107國 國版94 658	宮古式	壺	底 部	- - -	無文	外:黒色 中:純黃色 内:橙色 砂質	内外:ナデミガキ。	混和材に石灰岩密。 マンガン小塊まばら。 内面に轆轤痕。	19	A-1 石積み6 西側上層
第107國 國版94 659	八重山式	壺	口 縁 部	14.2 - -	無文	内外とも明赤 褐色 土師質	雜横ミガキ、ハケ 目残る。	器壁が厚く、胎土中に は粗く砕かれた貝殻片 が密に含まれる。口縁 は外反。	19	擾乱
第107國 國版94 660	バナリ焼	火鉢 (火盆)	胴 上 部	- - -	無文	内外:赤褐色 中:純赤褐色 砂質	内外:ナデ	混和材に貝殻片・頁岩 片?。外面には型押し で木葉を施す。焼成良 好。	11	擾乱
第107國 國版94 661	カムイヤキ	壺	胴 部	- - -	叩き・当て其痕	内外:褐灰色 須質	外:雜ミガキでハ ケ目残る。 内:雜ナデで指 頭圧痕残る。	混和材に石灰岩・黒色 粒(頁岩?)。外面のミ ガキは雜で、格子目状 の当て具痕が残る。	19	E-4 5層



640



641



642



643



644



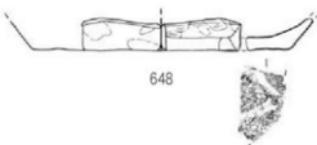
645



646



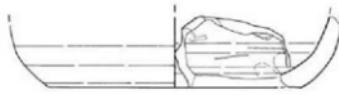
647



648



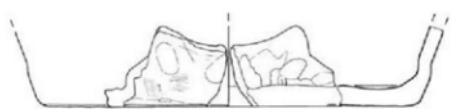
649



650



651



652

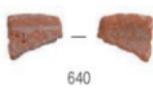


653

0

10cm

第106図 土器 1



640



641



642



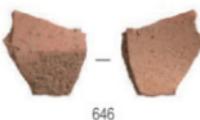
643



644



645



646



647



648



649



650



651

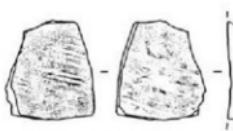
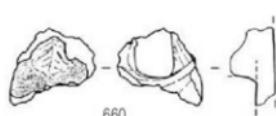
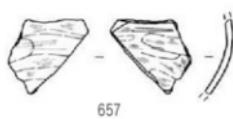
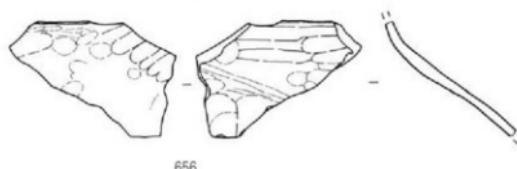
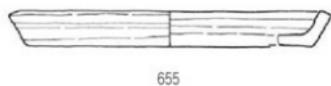
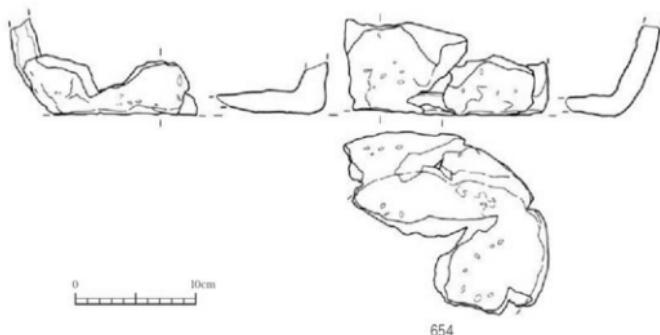


652



653

图版93 土器 1



0 10cm

第107図 土器2・カムィヤキ



654



655



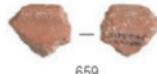
656



657



658



659



660



661

図版94 土器2・カムィヤキ

第13節 土製品・埴堀（第62表、第108図、図版95）

土製品は16点が得られており、人形4点、羽口1点、ミニチュア製品1点を図化した。

第108図663～666は土人形である。666は太夫をモチーフとした人形である。前後で型合わせがされており、側面中央部に接合部のバリを削り取った痕が残る。また下部には穿孔がみられ、成形時の支えと考えられる。太夫人形は、本土では袴襪などとともに18世紀頃からみられるようになる節句関連の人形と考えられている（安芸2000）。

第108図664は翁像の頭部で、鬚や残る衣服の特徴から唐の老人をモチーフとしたと思われる。下面に孔がみられるが、これは胴部との接合部と思われる。前後で型合わせがされており、下面には接合部が顕著に残される。

第108図665はモチーフが判然としないが、衣服から唐人像と思われる。頭部と右手をはめ込む凹みの奥には銷が付着しており、接合に鉄芯が用いられることがわかる。また内部にはヘラ調整の痕が顕著に残る。接合部がみられないため、一枚型から型抜きされたとみられる。

第108図663は中空の人形で、型合わせで製作される。接合部で半割された状態で、ほぼ表面のみが残る状態である。底面には削り痕も残る。モチーフは不明だが、服装は琉球・日本人とは異なる。

第108図667は籠の羽口で、内面のみが被熱によって炭化している。片側のみ端部が残り、製作時における切り取り痕が残る。

ミニチュア製品は1点得られている。第108図662は釜蓋のミニチュアで、型押しで製作されるが、バリが残るほか歪みも激しい。合い口は貼付けされている。江戸遺跡ではこのような生活雑具のミニチュア品は飯事遊びの遊具とされている（江戸遺跡研究会（編）2001）。

埴堀は口縁部片1点を図化した（第108図668）。表面はカラミが付着するほか、激しい被熱により脆くなっている。籠の羽口も出土していることからも、金属鑄溶の存在が考えられる。

今次調査において特筆されるのは、太夫人形やミニチュア製品といった江戸遺跡において散見される土製品の出土である。沖縄における人形は、婦人・女児・漁民・僧侶・武人などが挙げられるが（上原2004）、比較的唐人をモチーフとされるものが多い。当地区出土資料もその例に漏れないが、第108図666の太夫像は例外として注目される。これらいかなる経緯をもって御内原に至ったか、またその性格が江戸遺跡と同様に民間信仰や遊具に関するものと位置づけられるのか現時点では判然としない。

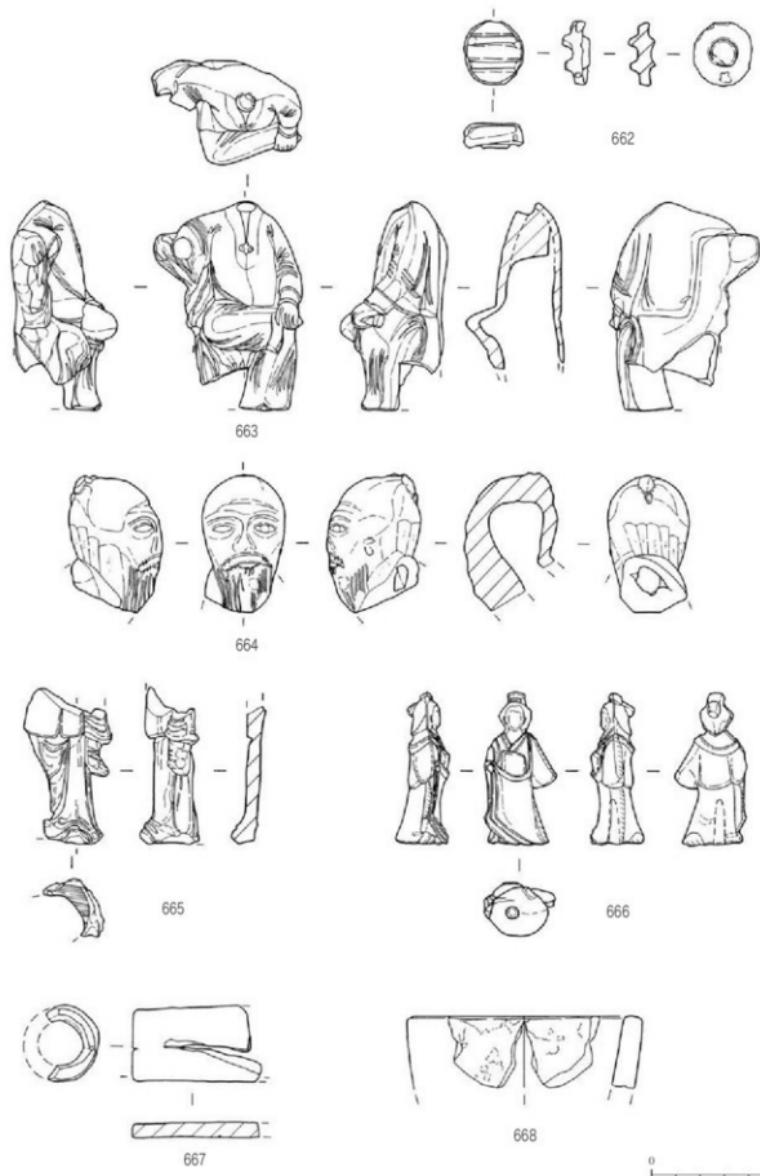
〈参考文献〉

- 安芸毬子 2000.6 「出土した人形と玩具」西秋良宏編『加賀殿再訪 東京大学本郷キャンパスの遺跡』東京大学コレクションX p102-116 東京大学総合研究博物館
上原靜 2004.3 「考古学からみた沖縄諸島の遊戯史」『グスク文化を考える』p371-400 今帰仁村教育委員会
江戸遺跡研究会（編）2001.4 『図説江戸考古学研究事典』柏書房

第62表 土製品・埴堀觀察一覧

() は破損

図 図版 番号	名 称	器色・胎土	製作方法	法量 (mm・g)		観 察 事 項	調査 年度 (平成)	グリッド 層
				縦 横 高 [厚]	重 量			
第108図 図版95 662	ミニチュア 製品	橙色 土師質	型押し・貼付	26.0 24.0 11.0	5.0	蓋のミニチュア製品。バリが残り歪みも 激しい。口は貼付。	11	I-8 20~30 茶褐色灰混層
第108図 図版95 663	土人形	黒灰色で硬質 泥質	一枚型で型抜 き?	85.0 60.5 -	58.1	唐人形?頭部と右手部に芯の銷が付 着。内部にはナデ調整の痕が顕著に残る。 型合わせの接合部がみられない。脚を組 んで腰掛けの人物だが、具体的なモチー フは判別不能。	11	I-9瓦割まり +擾乱
第108図 図版95 664	土人形	黄褐色で粗粒 の胎土 土師質	前後型合わせ	(56.0) (38.5) -	51.2	唐人形の頭部。下面に芯孔がみられる。 下面には接合部が顕著に残る。	11	擾乱
第108図 図版95 665	土人形	黄灰色 陶質	前後型合わせ	(64.0) 35.5 -	14.4	モチーフ不明。側面の型合わせ、底面に は削り痕が残る。	11	J-8 茶褐色灰混層
第108図 図版95 666	土人形	褐色の軟質 土師質	前後型合わせ	62.0 29.0 21.0	19.7	太夫人形。バリを削り取った痕や棒の差 し込み孔など、製作時の痕跡を多く残す。	11	擾乱
第108図 図版95 667	羽 口	鈍橙色で赤色 粒まばら 泥質	粘土帶の張り 合わせ	(53.0) 28.0 5.4	19.2	輪の羽口と思われる資料で、内面のみ二 次焼成を受けて激しく炭化する。片側は 端部も残り、面には切り取り痕が残る。	11	J-8 茶褐色灰混層
第108図 図版95 668	埴 堀	被熱により 黒色化する。	不明	口径: 95.0	10.6	口縁部。表面はカラミが付着するほか、激 しい被熱によって脆くなっている。	19	擾乱

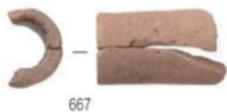


第108図 土製品・埴堀



666

666



図版95 土製品・埴堀

第14節 金属製品（第63～69表、第109～115図、図版96～99）

金属製品は1,104点が出土している。これらは鉄製と銅製とに大別でき、鉄製の比率が高い。中でも鉄釘の量は膨大で、調査中も常に出土する遺物のひとつであった。その他目立つ遺物としては、武具類があげられ、鎧の古札や兜の前立て鍔形が得られている。次に、種別ごとに解説を行い、遺物ごとの特徴は觀察表にて行う。

1. 釘類（669～685）

平成19年度調査においては、特に第3層の火災面、石積み1の周辺裏込め、シーリ遺構内からも多量に得られており、これらは火災で焼け落ちた建造物に使用されていたことが想定できる。この釘は大小様々なサイズが見られ、それは建築材の大きさや、部位・用途により、使い分けがされていたことが考えられる。この観点から集計を行った（CD-ROM参照）。

その結果、破片を含む総点数は2,203点であった。その中で個体数は、完形資料合計と、破片資料の頭部か端部の多い方の数量を合算したところ、870点となった。この内、完形資料では、長さを6段階に分けて集計を行い、II（674）の4～7cmが144点と最も多く、続いてI（675・676）の4cm以内が82点、次にIII（672）の7～10cmが60点、IVの10～15cmが41点、V（670）の15～20cmが16点と続き、VI（669）の20cm以上は6点得られている。この結果から、分類I～IVまでの小型～中型に位置するサイズの釘が多く出土している傾向が読める。

次に遺構・層別で見ると、シーリ遺構では小規模な遺構ながらも総数336点、個体数だと106点が得られており、その中でも木炭層から多量に出土している。また、3層表面（礎石建物跡）や基壇状遺構の被熱面からも、総数で120点、個体数で51点が得られ比較的多い。その他第5層や黄褐色土、石積み2周辺の裏込め内からも多く出土している。これらの平成19年度調査分撹乱以外の遺構・層序から得られた釘のサイズは、IIの4～7cmが83点と最も多く、続いてIの4cm以内が51点、次にIIIの7～10cmが19点、IVの10～15cmが8点、V及びVIの15cm以上のサイズは得られていない。この結果は、全体の集計結果と調和的であるが、IVの15cm以下でまとまることから、より小型の釘が遺構や層に伴って出土している傾向にあると言える。

今次調査では、平成11及び19年度に調査を実施し、平成11年度では主に近世からそれ以降の段階と思われる遺物が得られ、平成19年度調査においては、一部で近世段階の遺構・遺物が含まれるもの、主体となるのは14世紀後半から15世紀前半及び、16世紀の遺物を含む遺構や堆積層であった。この観点から年度別に集計すると、平成19年度調査分では、I～IIIの10cm以内が占め、中でもIIの4～7cmが多く出土している。平成11年度調査分においては、II～Vまでの釘が占めているが、Vの15cm以上の資料も21点含まれており、大型の釘が多い傾向にある。このことから、15cm以上の大型の釘は、撹乱を含む近世以降に多用されていた可能性があり、対して10cm以下の中型・小型の釘は、



第109図 釘の部位名称

中世段階に多く利用していたことが考えられる。この鉄釘のほか、鉄製鉢や銅製の釘及び鎖、鍵が得られているが、出土量は多くない。

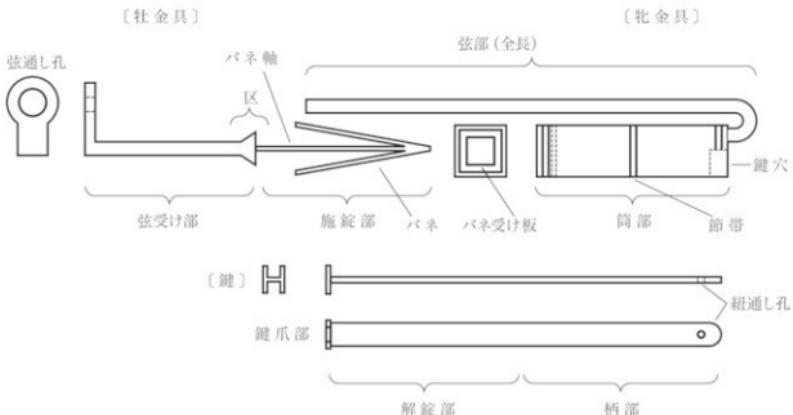
2. 飾り金具・道具・工具類 (686~699, 730~735)

飾り金具は、釘隠しのほか、家具・調度品に用いたと考えられる覆輪等の製品、環座金具等が得られている。これらの中には、武具に関する部品も含まれていると思われるが、ここではこれらを含む用途不明の飾り金具も報告の対照とした。

3. 錠前・鍵 (700~705)

金属製品の中でも特異な遺物として、錠前の部品及びその鍵が断片的に得られている。これらは機械部品に似た形状から、当初は現代遺物に仕分ける予定であったが、第113図700の鍵が出土したことにより、関連する部品が含まれている可能性が高まり、この観点で遺物の抜き出しを行い、数点を抽出することができた。断片的な資料であることから詳細は不明であるが、第110図のような構造で、複数のバネにより施錠するタイプの錠前が存在していたことがわかる。また、鍵の先端にあたる鍵爪部の形状は、「H」字状を呈すことから、2段のバネ軸を解錠する機能が考えられ、扉等を厳重に施錠する目的が考えられる。なお、鍵は今帰仁城跡でも出土例があり、鍵爪部の形状は「コ」字状である（今帰仁村教育委員会1991）。

その用途及び使用箇所について、出土した地区に近接して淑順門が存在しており、その門扉を施錠していたことが推察できる。淑順門は、御内原と表とを仕切る門のひとつで、常に門番が配置され、出入りを厳重に取り締まっていたとされる。しかし、錠前に関連する記録が見あたらぬため、門を施錠していたかは判然としない。



第110図 錠前・鍵の部位名称 (合田1998をもとに作成)

4. 武器・武具類 (706~729)

その他、比較的多く得られた金属製品として、武具類があげられる。この中でも特に銅板を加工した兜の前立て鍛形が目立つ(706~712)。立物の左右を構成する鍛形の形状は、銀杏葉形の意匠を2段用い、この2段の1箇所ずつに猪目透かしが入る。下部の鍛形台に差し込むソケット部はわずかに幅を狭く成形する。また、円形の立物中央飾りと思われる製品も数点出土している。これらの鍛形は、類似する製品が京の内跡でも数多く出土しており、図上復元がされている(第111図)。小札類も多量に得られ、これらは14世紀後半から15世紀前半の陶磁器に伴って出土しており当時の時代背景を考える上で興味深い。

なお、覆輪や切子頭についても鎧の部品の可能性があるが、今回は飾り金具として扱った。また、その他の製品についても武具か否かの検討を要するものが含まれるが、今回は判明する範囲で報告を行った。

5. 装身具 (736~741)

装身具と思われる遺物は、簪や指輪が中心となっており、いずれも近世以降の層及び搅乱層からの出土である。中でも第115図738に示した指輪と思われる製品は、銅線をコイル状に巻き付け、重ねることで装饰としており、手が込んだつくりになっている。本資料は17世紀前半とするシーリ遺構からの出土であり、上限の年代が明確な資料として貴重である。

6. その他の金属製品(図版 742~745)

石積み1・2間栗石内を中心として、銅板をタガネあるいはハサミにより切断したような破片が多數出土している。これらは形状が不定形で、切断面を調整した痕跡も確認できることから、何らかの製品を加工した際に生じた破片か未成品と考えることができる。その中には、同栗石内より出土している兜の前立て鍛形に近似する形状の資料も見られ、その未成品の可能性も考えられるが、詳細は不明である。



第111図 兜の立物復元図(金城ほか2009)

〈参考・引用文献〉

合田芳正 1998『古代の鍵』考古学ライブラリー66 ニューサイエンス社

金城亀信ほか(編) 2009『首里城跡 -京の内跡発掘調査報告書II-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 沖縄県立埋蔵文化財センター

金武正紀ほか(編) 1991『今帰仁城跡発掘調査報告書II』今帰仁村文化財調査報告書第14集 今帰仁村教育委員会

第63表 金属製品観察一覧 1

() は破損

図 図版 番号	種 類	材 質	法 量 (cm・g)						観 察 事 項	調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
			頭部 径	頭部 厚	縦長 縦径	横長 横径	厚さ	重量			
第112図 図版96 669	釘 VI	鉄 製	1.84	1.41	20.9	1.06	1.15 0.71	98.9	約6寸。頭部に打痕が見られる。先端部分は楔形になる。	11	搅乱
第112図 図版96 670	釘 V	鉄 製	1.72	1.24	17.8	1.39	1.08 0.46	94.8	5寸。頭部の角に変形が見られる。先端部分は楔形になる。	11	搅乱
第112図 図版96 671	釘 IV	鉄 製	1.77	1.14	(11.16)	1.28	1.24 0.77	45.7	全体的に錆化が著しく、錆瘤、錆脛れが全体に見られる。 残存部分からの推定で3寸前後。頭部上面は方形。	19	B-3 裏込内
第112図 図版96 672	釘 III	鉄 製	1.16	0.48	(8.0)	0.84	0.6 0.5	11.1	頭部以下は錆化が著しく、錆瘤が見られる。残存部分から 2寸半前後。頭部上面は丸みのある方形。	19	B-4 黄褐色土
第112図 図版96 673	釘 II	鉄 製	0.91	0.52	4.75	0.71	0.55 0.33	4.5	約1寸半。全体的に錆瘤、錆脛れが見られる。頭部上面は 丸みのある方形。先端部は楔形。	19	B-3 裏込内(石 積み2北側)
第112図 図版96 674	釘 II	鉄 製	0.77	0.35	5.3	0.5	0.47 0.35	4.0	2寸前後。胴部分から先端部分は錆化が著しい。先端部 分も錆化が著しいか楔形と思われる。	19	B-3 裏込内(石 積み2北側)
第112図 図版96 675	釘 I	鉄 製	0.89	0.38	(3.6)	0.63	0.53 0.35	2.8	全体的に錆化が著しく、錆脛れが見える。頭部上面は錆 化が著しい。先端部分は欠損。	19	B-3 裏込内
第112図 図版96 676	釘 I	鉄 製	0.6	0.16	3.6	0.32	0.37 0.18	1.5	約1寸。錆化が著しく、錆瘤も見える。頭部上面は丸みの ある方形。先端部は錆化が著しいか楔形と思われる。	19	B-3 裏込内(石 積み2北側)
第112図 図版96 677	鋲 鉄 製		1.32	2.7	2.5	0.56	0.34 0.26	2.6	頭部は笠状。錆化が著しく、全体に錆瘤が見られる。先端 部は楔形と思われる。断面は方形。	19	B-3 裏込内(石 積み2北側)
第112図 図版96 678	角 釘	銅 製	1.51	0.86	(3.9)	1.01	1.05	30.8	胸部から先端部分は欠損しており、一方向から盤で切れ 目を入れ、切断したと思われる跡が見られる。	19	C-5 3層表面
第112図 図版96 679	角 釘	銅 製	-	-	(6.93)	0.65	0.61 0.34	11.4	所々に錆瘤が見られるが状態は良好。頭部は欠損。	19	B-5 3層表面
第112図 図版96 680	釘	銅 製	0.67	-	5.8	0.45	0.42 0.35	7.9	約2寸。頭部は鍛造時に鍛いて成形した稜が見られ る。先端部分で四角錐形になる。	11	搅乱
第112図 図版96 681	鋲 鉄 製	銅 製	0.44	0.08	2.75	0.26	0.28 0.13	0.6	約1寸。断面は円形に近い方形。胸部に鍛造と思われる 稜が見える。先端部は楔形。	11	搅乱
第112図 図版96 682	笠 釘	銅 製	1.81	0.41	7.2	0.7	0.68 0.43	18.6	約2寸半。錆化が進む。頭部は笠状。笠状の上面と側面、 胸部に鍛造の稜が見える。断面は円形に近い多角形。	11	搅乱
第112図 図版96 683	笠 釘	銅 製	1.57	0.24	6.9	0.68	0.61 0.35	13.7	約2寸。頭部は笠状。胸部と頭部の接続部は中央よりす れる。頭部付近の断面は円形に近い多角形が先端部付 近になると方形になる。先端部は楔状になっている。	11	搅乱
第112図 図版96 684	鋲 鉄 製	銅 製	0.84	0.19	2.4 0=	0.3	0.31 0.15	2.1	頭部上面と座金の上面に金鍍金が残る。胸部から先端部 に鍛造時の稜が見られる。	11	搅乱

第64表 金属製品観察一覧2

() は破損

図 図版 番号	種類	材質	法量 (cm·g)						観察事項	調査 年度 (年)	グリッド 層
			頭部 径	頭部 厚	締長 締径	横長 横径	厚さ	重量			
第112図 図版96 685	鉗	銅製	2.93	0.43	1.24	4.3	0.24 0.1	3.1	約1寸。断面は長方形。両端が曲げられ先端にいくつれて薄くなる。両端とも外側に開いているが、先端部は片方が外側に開き、片方は内側に曲がる。	11	搅乱
第113図 図版97 686	鋸座	銅製	-	-	2.59	3.12	0.55	13.5	鍛造。鎌が付属する鎌座。座は平面觀形を呈す。微かに裏面方に凸凹が見られる。座をとめる削鉄は一本の削を扁平し、半分に折り曲げている。針は二手に分け、片方は欠損しており、もう片方は外方向に直角に曲がる。削鉄の折曲げ部分は輪を作り、鎌を通している。鎌は接続部分の間に手を挟みこみ輪の中に通している。玉と環の接続部付近は細くなり、次第に太さが増していく。	19	搅乱
第113図 図版97 687	鋸	銅製	-	-	3.49	1.55	0.28	3.4	鍛造。平面觀は菱形の笠を持つ。線刻が施され、側面は内側に曲がっている。裏側は青銅に砂が付着しているが、中央に鋸がついたのが観察できる。頭部との接続部分付近の削鉄は折り曲げており、先端にいくにつれ扁平になる。	19	B-3 裏込内 (右積み2北側)
第113図 図版97 688	鋸座	銅製	-	-	2.3 Ø= 1.21	2.3 Ø= 1.15	0.04 0.15	1.7	鍛造。鎌が付属する鎌座。平面觀は五枚の葉、もしくは五弁花か、座の中心部から少しずれて穴が開いている。葉は一枚ずつ膨らみを持つ。削鉄は一本の削を薄く鍛ぎ扁平にして半分に折り曲げ、折り返した部分に輪を作り、鎌を通している。環の断面は横円形に近い多角形。	11	搅乱
第113図 図版97 689	飾り金具	銅製	0.72	0.67	1.9	0.25	0.11	20.0	切子頭。然による変形が見られる。針部分は頭部に差込み、外側から溶接していると思われる。精化が進んでる為、針に座金が付着している。	19	B-3 裏込内
第113図 図版97 690	切子頭	銅製	1.9	1.6	2.1	3.1	0.44	30.0	総角付の鎌に付く切子頭。立方体の角を面取りしている。横位に鎌座が入る孔を有し、下面には鎌の基部が残る鎌は2枚の板を重ね、薄い銅板を挟んで切子頭に貫通する。	19	C-5 方形礎石 抜穴内
第113図 図版97 691	切子頭	銅製	2.0	1.52	2.15	-	-	29.4	総角付の鎌に付く切子頭。立方体の角を面取りしている。横位に鎌座が入る孔を有し、下面には鎌の孔が残る。	19	搅乱
第113図 図版97 692	輪金具	銅製	-	-	3.58	3.3	0.3 0.6	10.7	切口は角がとれ、丸みがある。摩擦によるものか、全体に鍛造時につけたと思われる模様が残る。切口付近は細く、中央部は太くなる。断面は細い部分が円形に近い多角形。太い箇所は多角形の楔円になる。鎌座に付属する鎌と思われる。	11	搅乱
第113図 図版97 693	止め金具	鉄製	-	-	(3.35)	1.68	0.45	7.5	全体的に精化が進行し、精瘤、精眼が見られる。環座が付属する環座か?	19	C-5 方形礎石 抜穴内

第65表 金属製品観察一覧 3

() は破損

図 図版 番号	種 類	材 質	法 量 (cm・g)						観 察 事 項	調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
			頭部 径	頭部 厚	縱長 緯径	横長 横径	厚さ	重量			
第113図 図版97 694	鉄 製品	鉄 製	-	-	Ø= 2.45 Ø= 1.51	Ø= 2.38 Ø= 3.08	0.59	8.3	全体的に結化が著しく、環とフック?が銷で付着している。	19	B-3 裏込内
第113図 図版97 695	覆 輪	銅 製	-	-	(2.2)	2.2	0.28	5.1	全体的に結化が著しく、土や小石が付着する。 コの字状に曲がる。	19	B-3 裏込内 (石積み2北側)
第113図 図版97 696	銅 製品	銅 製	-	-	3.05 (4.40)	0.66	41.7		全体的に土や石が銷に付着。 両端、斜めに切落とされたと思われる跡が見られる。	19	C-4 3層表面
第113図 図版97 697	鍋	鉄 製	-	-	3.61 (5.05)	0.77	19.2		鉄鋼の釣り手を通す把手。 鍋の本体部と頸付けされ、半円状の把手に半円形の孔があく。	11	I-9 南側
第113図 図版97 698	扉 (破 片)	鉄 製	-	-	(5.1)	(8.8)	1.34	152.4	大型の縫番が付く扉の破片か。 結化が進行し、銷瘤、銷眼がみられ、部分的に表面が剥れ落ちている。割口は、堅か断で切落としたと思われる。 芯棒が一部削ざつたまま残っている。	11	搅乱
第113図 図版97 699	工具	鉄 製	-	-	1.17	4.69	0.85	28.5	正面觀は長方形。 側面に銷瘤が付着するが、状態は良好である。 側面片方に約5mmの穴がある。貫通はしていない。 長方形の片端は楔形に挟まる。 頭部正面は丸みのある長方形を呈す。 全体的に打痕がみられる。	11	搅乱
第113図 図版97 700	鍵	銅 製	-	-	11.0	0.74	0.15	8.0	青銅の板を加工した鍵前の鍵。 上半部の柄部には径2.5mmの紐通し孔が開けられ、頂部は丸く成形される。 解錠部の先端にある鍵爪部はH状を呈し、バネ軸が2本2段の鍵前牡金具に対応する。	19	搅乱

第66表 金属製品観察一覧 4

() は破損

図 図版 番号	種 類	材 質	法 量 (cm・g)						観 察 事 項	調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
			頭部 径	頭部 厚	縦長 縦径	横長 横径	厚さ	重量			
第113図 図版97 701	鍛前	銅 製	-	-	1.45 (4.7)	0.2 0.3	7.0		鍛前の社金具で、施錠時に牝金具の弦を受ける弦受け部。欠失しているが図の上部にはバネ軸及びバネが付く。弦通し孔は円形の板端部に方形に加工され、その裏側下部には縦長に細長い板状の部位が連なる。	11	搅乱
第113図 図版97 702	鍛前	銅 製	-	-	0.9 0.6 (6.7)	0.28 0.14	7.6		鍛前の社金具。牝金具の筒部内で広がることで施錠する施錠部。1mm厚のバネ軸に0.8mm厚の2枚のバネが付く。内1枚は基部で破損。バネ軸とバネの接合部は、方形に開いた孔に金属を入れ織き広げて接合。図の下部には欠失するか弦受け部が付く。	11	搅乱
第113図 図版97 703	鍛前	銅 製	-	-	0.95 (4.4)	0.5 0.23	10.1		鍛前の社金具。牝金具の筒部内で広がることで施錠する施錠部。径4mmのバネ軸に2枚のバネが付くが、それぞれ基部及び端部で破損している。	19	B-3 裏込内
第113図 図版97 704	鍛前	銅 製	-	-	1.85	5.4	0.05	3.1	鍛前の牝金具である筒部をふさぎ、バネを止めるバネ受け板か。薄い鋼板にバネ部を差し込む孔が方形に設けられ、その左右に径1mmの孔が4点見られる。	11	搅乱
第113図 図版97 705	鍛前 ?	銅 製	-	-	0.67 (5.7)	0.3	6.0		鍛前社金具の施錠部か。 図の上部がバネ軸で、下部がバネと思われるが、歪みが強く疑問が残る。	19	B-3 裏込内
第114図 図版98 706	鍛形	銅 製	-	-	(9.7) (5.9)	0.12	17.8		立物鍛形。 銀杏葉様の意匠を2段で構成し、それぞれ猪口透かしが2箇所ずつ入る。下端部は鍛金は見られない。	19	B-3 裏込内
第114図 図版98 707	鍛形	銅 製	-	-	(12.8)	6.2	0.2	18.8	立物鍛形。 銀杏葉様の意匠を2段で構成し、それぞれ猪口透かしが1箇所ずつ入る。下端部は鍛形台に差し込むソケット部で、本体部より若干段差を付けて細く成形される。 鍛金は見られない。	19	A-4 裏込内
第114図 図版98 708	鍛形	銅 製	-	-	(4.6)	1.4	0.13	2.4	三鍛形台中央の立柱に取り付けられていた立物の破片。 先端は銀杏葉様の意匠で、下部は破損、軸部には円形文をつないでいたと思われる幅1.5mmの枝が残る。 鍛金は見られない。	19	搅乱
第114図 図版98 709	鍛形	銅 製	-	-	(2.8)	3.3	0.07	3.9	形状から三鍛形台中央の立柱に取り付けられていた立物と思われるが、3点の透かしが猪口でなく円形であることから、何らかの飾り金具の可能性もある。 頂部・下端部は破損。	11	搅乱
第114図 図版98 710	鍛形	銅 製	-	-	(5.4) (5.1)	0.18		27.3	三鍛形台中央の立柱に取り付けられていた立物中央部分の破片。 円輪を表すとされる円形文で、上下に幅24mm、左右に幅3mmの枝の痕跡が残る。二次的に敲いて曲げられている。	11	搅乱

第67表 金属製品観察一覧 5

() は破損

図 図版 番号	種 類	材 質	法 量 (cm・g.)						観 察 事 項	調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
			頭部 径	頭部 厚	縦長 縦径	横長 横径	厚さ	重量			
第114図 図版98 711	鍼 形	銅 製	-	-	(3.3)	3.1	0.13	5.7	三鍼形台中央の祓立台に取り付けられていた立物の破片。 目輪を表すとされる円形文で、縁辺の2箇所に幅11mmと3 mmの枝の痕跡が残る。	19	搅乱
第114図 図版98 712	鍼 形	銅 製	-	-	(3.2)	(3.2)	0.1	5.4	三鍼形台中央の祓立台に取り付けられていた立物の破片。 目輪を表すとされる円形文で、縁辺の2箇所に幅11mmと3 mmの枝の痕跡が残る。	11	搅乱
第114図 図版98 713	袖 の 金 物	銅 製	-	-	1.9	(9.4)	0.3	22.8	鎧の袖部、大袖等の上部に付けられた金具と思われる 資料。 厚手の副板を用い、先端は如意頭状に加工する。	19	B-3 裏込内
第114図 図版98 714	金 具 廻 り	鉄 製	-	-	2.25	6.65	0.66	11.0	鎧の金具廻りか。 頭孔と思われる孔が1箇所認められる。	19	B-3 裏込内
第114図 図版98 715	鎧 金 具 廻 り	銅 製	-	-	1.9	5.4	0.17	5.2	鎧金具の部品と思われる製品。 八双金具等とともに化粧板に付けられる金具か。	19	B-3 裏込内
第114図 図版98 716	小 札	鉄 製	-	-	5.6	1.9	0.55	8.6	全体に銷化が進む。 札頭は斜め状になる。 紐孔は7孔と6孔の2列。計13孔。並札。	19	B-3 裏込内(右 積み2北側)
第114図 図版98 717	小 札	鉄 製	-	-	6.25	2.8	0.44	7.1	全体的に銷化が進んでおり、銷眼れ、銷瘤も目立ち、一部 銷で孔があがっている。 札頭は斜め状になる。紐孔2列。	19	B-4 基盤状造構 溝中
第114図 図版98 718	小 札	鉄 製	-	-	5.75	2.05	0.4	7.4	全体的に銷化が進んでおり、銷眼れ、銷瘤も目立ち、一部 銷で孔があがっている。 札頭は斜め状になる。紐孔2列。	19	B-3 裏込内(右 積み2北側)
第114図 図版98 719	小 札	鉄 製	-	-	6.2	2.0	0.5	7.7	全体的に銷化が進行しており、一部銷で孔が塞がる。 所々に銷瘤も見られる。 札頭は二つの半円からなる、2山甚石頭伊予札。 紐孔2列、14孔。	19	B-3 裏込内(右 積み2北側)
第114図 図版98 720	小 札	鉄 製	-	-	6.3	1.6	1.14	14.9	全体的に銷化が進行している。 銷瘤や銷張れで観察は困難。 札頭も銷に覆われ確認できず。	19	B-3 裏込内(右 積み2北側)

第68表 金属製品観察一覧6

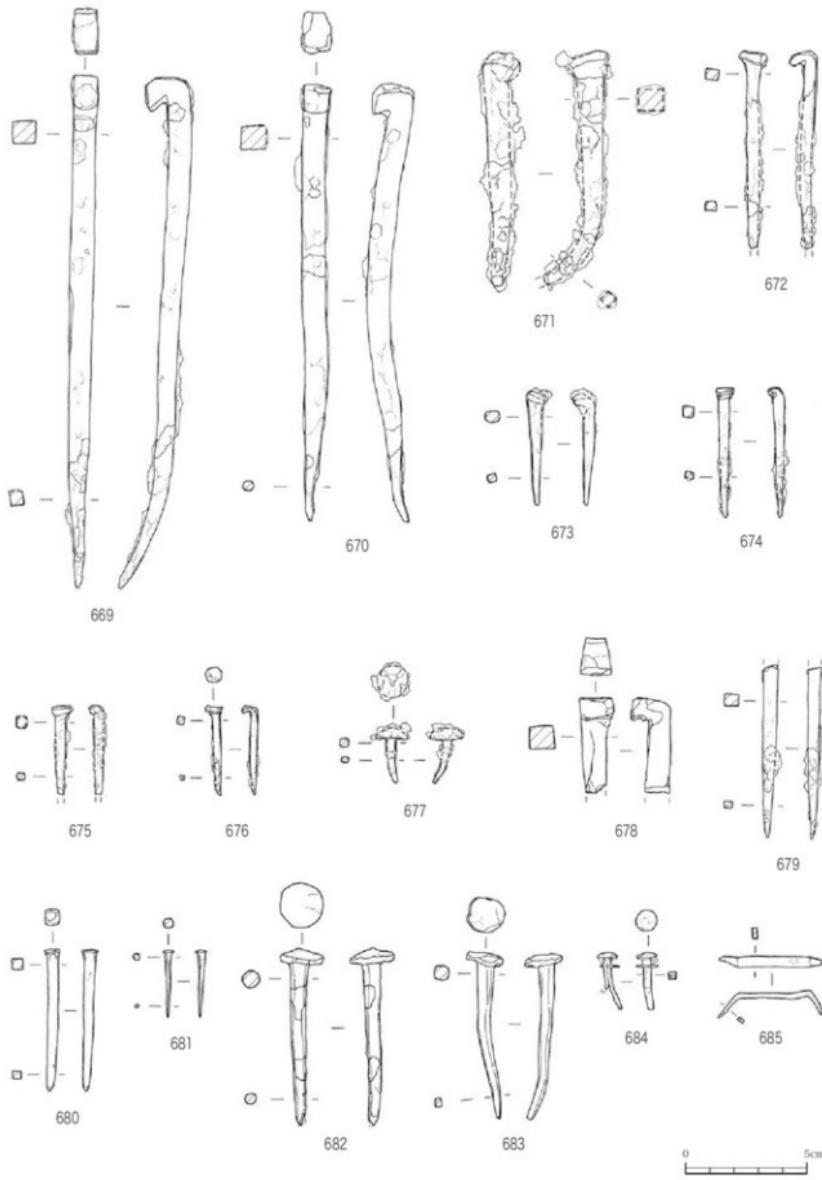
() は破損

図 図版 番号	種類	材質	法量 (cm・g)						観察事項	調査 年度 (平成)	グリッド 層
			頭部 径	頭部 厚	縦長 縦径	横長 横径	厚さ	重量			
第114図 図版98 721	鉛 胸板部	鉄 製	-	-	5.46	6.7	1.08	32.5	胸板や脇板等の鉛胸部の部品と思われる資料。半欠品のため全形は見えないが、方形をした鉄板の縁辺5箇所に孔が穿たれている。	19	B-3 裏込内
第114図 図版98 722	鉛 胸板部	鉄 製	-	-	8.40	6.44	0.7	48.8	胸板や脇板等の鉛胸部の部品と思われる資料。鋸が進み全形は見えないが、方形の鉄板を皿状に凹ませ、角部は丸く成形している。	19	B-3 基層状造構 溝中
第115図 図版99 723	覆輪	銅 製	-	-	10.4	0.66	0.2	13.4	両端部がわざかに弧を描く形状の覆輪。 鋸化した鉄釘が付着している。	19	B-4 基層状造構 表面
第115図 図版99 724	覆輪	銅 製	-	-	(2.39)	(6.2)	0.2	10.2	頸孔を有する覆輪。 形状から胸板を縁取る覆輪と思われる。頸孔に近い端部は内を丸く、頸孔部は橢円台形状に成形する。	19	搅乱
第115図 図版99 725	覆輪	銅 製	-	-	0.9	(1.9)	0.015	1.2	頸孔を有する覆輪。 頸孔部は橢円形状に成形する。	19	B-3 裏込内
第115図 図版99 726	切羽	銅 製	-	-	(4.7)	(2.5)	0.48	5.4	木瓜形切羽の半欠品。 刀剣を通して茎孔から破損する。緑青が覆う。	11	搅乱
第115図 図版99 727	はばき	銅 製	-	-	4.1	(2.1)	0.85	16.1	刀身を鞘に固定する役目を持つ部品。 被熱により溶解・破損する。刀身を通す茎孔は、長軸で22mm、短軸で7mmを測り、小型の刀が想定できる。	19	C-D-4 3層表面
第115図 図版99 728	鐵 ?	鉄 製	-	-	3.7	1.0	0.5	4.8	両端が破損しているが、先端が撥状に広がるタイプの鐵と思われる資料。 矢柄に差し込む部分も扁平に造られている。	19	B-4 黄褐色土
第115図 図版99 729	弾丸	銅 製	-	-	Ø=2.7	Ø=2.4	-	54.7	直径約2.7cmの球。 表面は凹凸が多く、成形も粗く被熱による付着物も多い。	19	C-4 3層表面
第115図 図版99 730	飾り 金具	銅 製	-	-	(3.75)	(6.7)	0.2	17.1	铸造。輪花状に模る。銷による付着付着物が多く、正面からの模様の観察は困難。表面の一部に難易が確認できる。裏面から見ると陽刻で縁側に波状、中央に向かって難が延び、中央には円が掘られていたと思われる。铸造。	19	B-3 裏込内
第115図 図版99 731	飾り 金具	銅 製	-	-	(7.5)	(5.7)	0.1	23.6	铸造。半欠品。圧迫による変形が著しいが、鋸化はほとんど見られず良好。基材から切り抜き、切り口は鏽などで調整した痕が見られる。葉の幹や葉脈は鋸く縫合され、縫合のみに施されている。中央に孔があったと思われ、難易の中に金箔が残る。	11	搅乱
第115図 図版99 732	飾り 金具	銅 製	-	-	(3.36)	(3.47)	0.1	6.5	铸造。全体的に鋸化が進み模様の観察は困難。 3mm弱の難が剥きだまま残っている。	19	搅乱
第115図 図版99 733	飾り 金具	銅 製	-	-	(3.8)	(2.07)	0.39	5.4	铸造。鋸化が進行しており観察は困難。	19	B-3 裏込内

第69表 金属製品観察一覧 7

() は破損

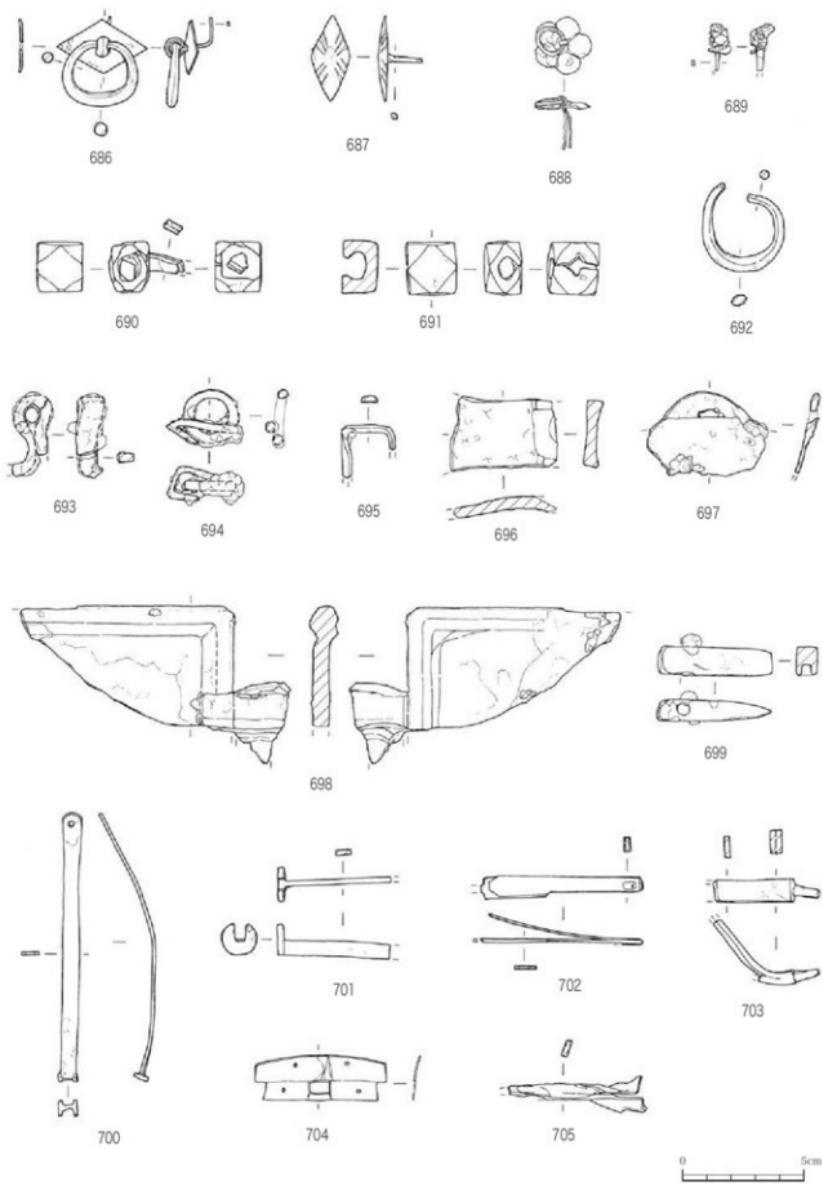
図 図版 番号	種 類	材 質	法 量 (cm・g)						観 察 事 項	調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
			頭部 径	頭部 厚	縦長 径	横長 径	厚さ	重量			
第115図 図版99 734	銅 製品	銅 製	-	-	(4.5)	(7.9)	0.1	20.6	全体的に土や石が鉛に付着。模様は表裏見られない。 緑色はやや消褪し、釘頭4mm弱の鉛が付く。	19	B-3 裏込内
第115図 図版99 735	蝶 番	銅 製	-	-	(1.4)	2.65	0.1	2.3	鍛造。輪花状に唐草模様の間に魚々子文が見える。 模様の上に孔が開く。	19	搅乱
第115図 図版99 736	脛	銅 製	-	-	0.25	14.65	0.25 0.2	4.8	鍛造。カブが耳搔き状の脛。 カブは細長く、浅い削りがみえる。 くびれはほとんどなく、竿の断面は六角形。先端は角錐。	11	搅乱
第115図 図版99 737	脛	銅 製	-	-	0.4	10.3	0.4	2.8	鍛造。カブは小さく、削りは見えない。 頭は細くくびれる。 竿の断面は梢円になり、先端にいくにつれ平たくなり、 徐々に細くくびれ、鋸くなる。	11	搅乱
第115図 図版99 738	装 身 具	銅 製	-	-	0.4	1.35	0.35	0.6	1本の針金にコイル状に細い針金を巻きつけてるのが切断面から観察できる。2本の針金をまとめる様に渦状に巻き、さらに端で2本の針金をまとめている。	19	B-5 シーリ内 木炭層
第115図 図版99 739	指 輪	銅 製	-	-	Ø=2.3	Ø=2.3	0.2	4.7	成形時に鍛造の穂がみえる。 接合部が見えない事から鍛造と思われる。 断面は半円形。 幅は細い部分で5mm前後、太い部分で約7mm。	11	搅乱
第115図 図版99 740	指 輪	銅 製	-	-	0.4	Ø=2.35	0.07	1.0	細板を環状に成形。 厚さは約0.7mmで均一。 端部と中央部の板幅が異なり、端は3~4mm幅、真中で約2mm幅になる。圧迫が原因か一部切れ目が入る。	11	搅乱
第115図 図版99 741	鉛	銅 製	-	-	(2.1)	(3.2)	0.1	2.3	下部半分が欠損。 全体的に鉛化が進み土や小石などが付着する。 割痕を頭部の穴に入れ、先端を二つに割る。	19	B-3 裏込内



第112図 金属製品1



図版96 金属製品1



第113図 金属製品2



686



687



688



689



690



691



692



693



694



695



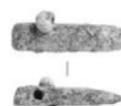
696



697



698



699



700



701



702



703

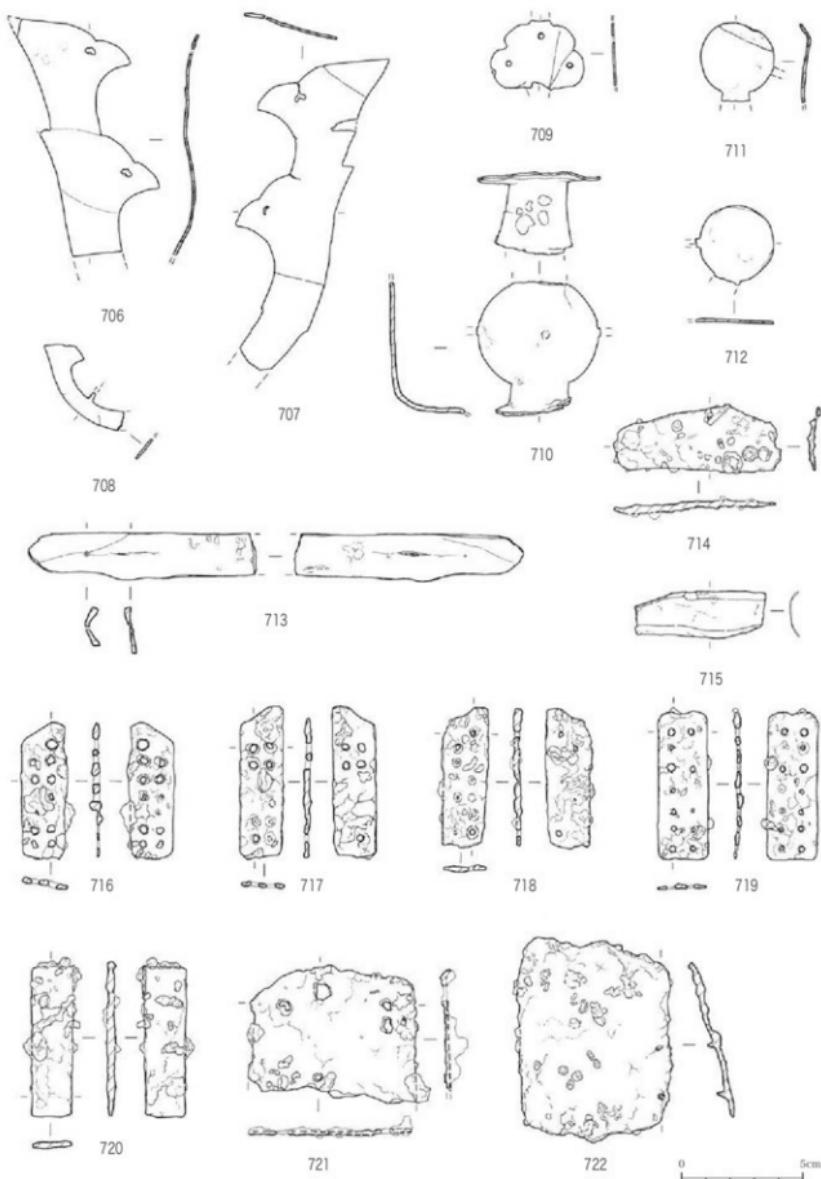


704

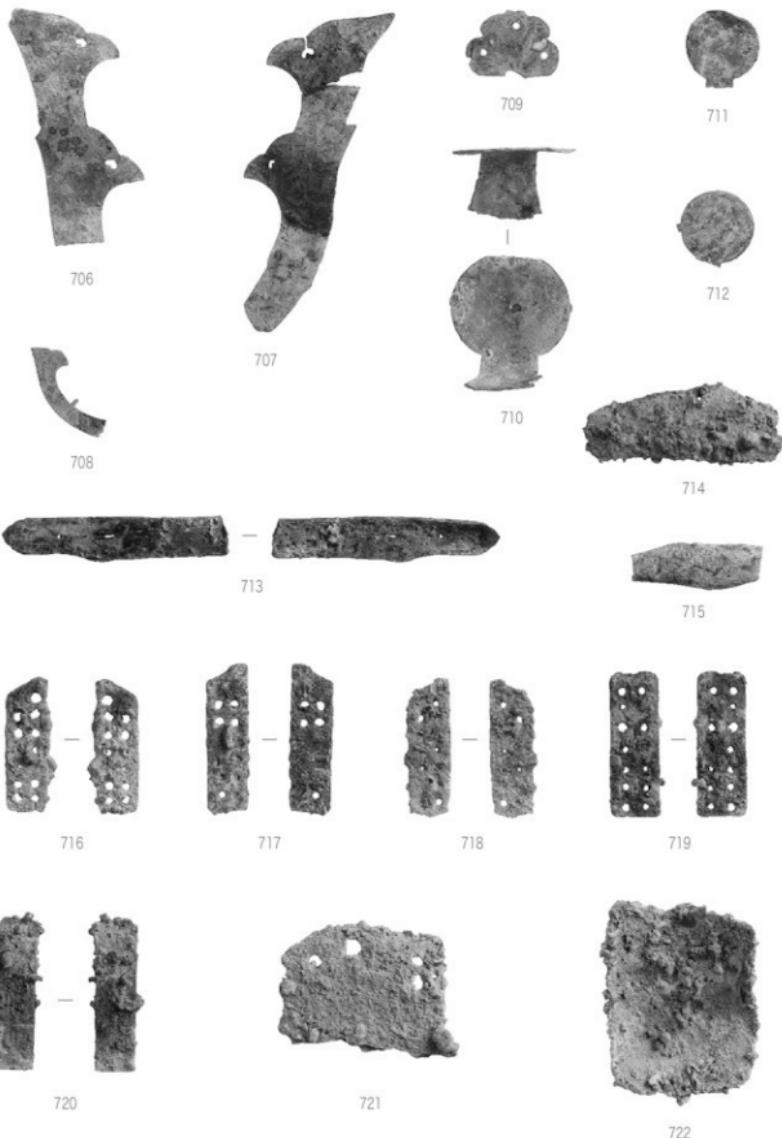


705

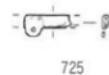
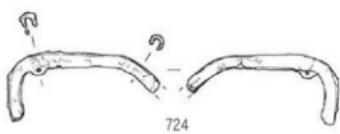
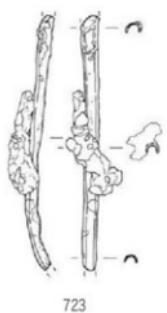
図版97 金属製品2



第114図 金属製品3



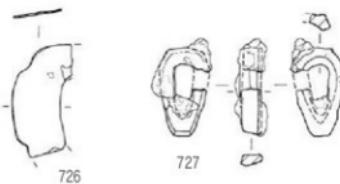
図版98 金属製品3



723

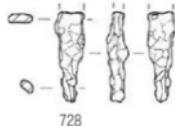
724

725

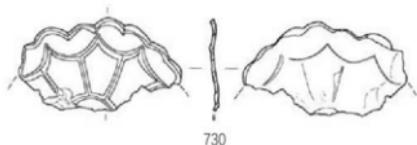


726

727



728



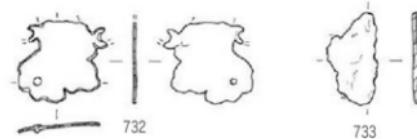
730



731

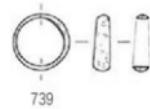


729

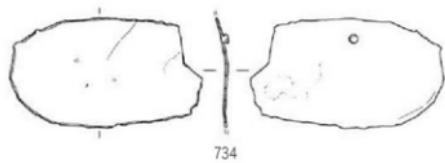


732

733



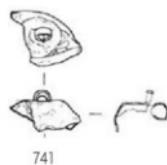
739



734

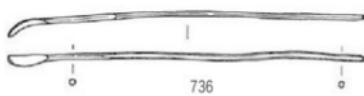


740

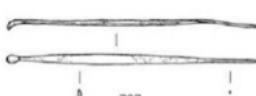


741

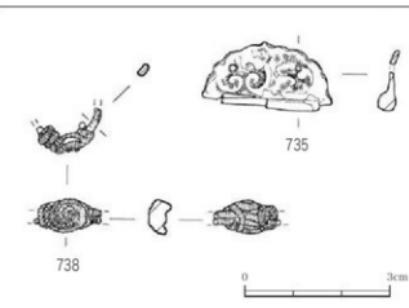
0 5cm



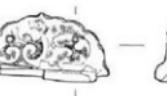
736



737



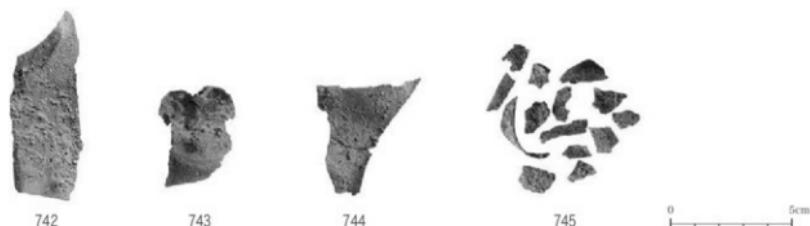
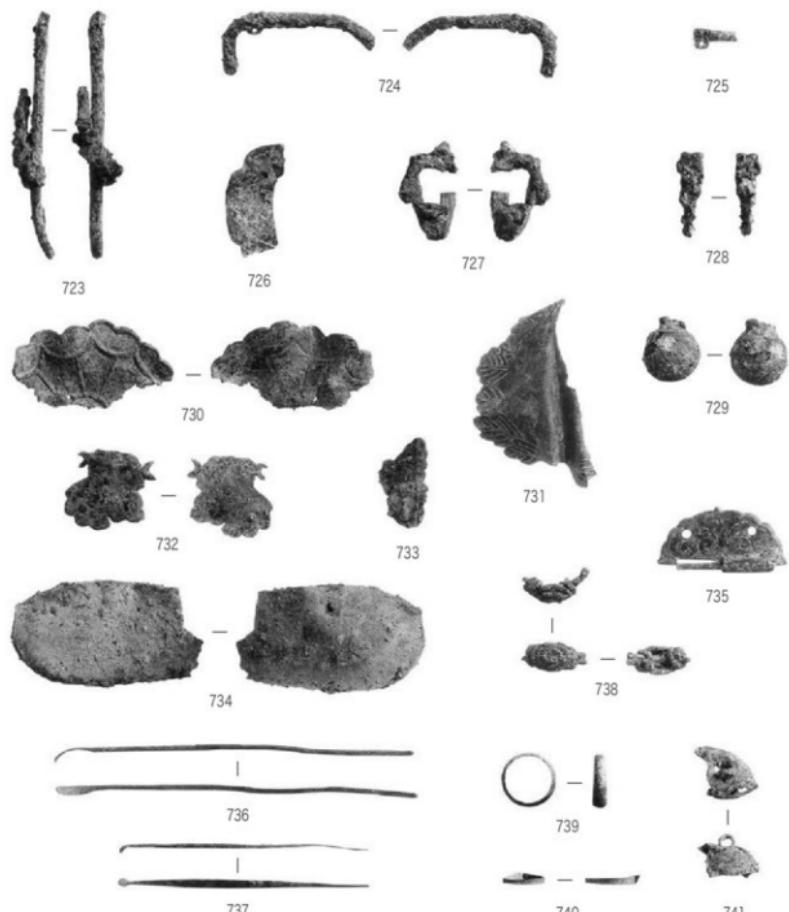
738



735

0 3cm

第115図 金属製品4



图版99 金属製品4

第15節 錢貨（第70～72表、第116～118図、図版100～102）

1. 錢種及び特徴

錢貨の錢種判断は、実見及び拓本以外にX線を用いて行い、集計に際しては、欠損部があるが、錢種の特定が可能なものは計上している。なお、二分の一以下の残存状態のもので、錢種不明のものは、破片として計上している。

特定されたのは24種（近代錢除く）あり、錢種が特定できるもので最も数量が多いのは洪武通寶であり、永樂通寶、開元通寶と続く。鑄錢された國・王朝としては、北宋のものが多く、その他に唐、前蜀、南宋、明、清及び徳川幕府のものがあり、不明なものとして無文錢及び輪錢がある。

その他の特徴を列挙すると下のとおりである。

- ・洪武通寶、永樂通寶及び輪錢が他の錢よりも多い。
- ・出土箇所は、洪武通寶及び永樂通寶はB-3グリッドからの出土が多く、輪錢はB-4・5グリッドのシーリ遺構に集中している。
- ・破片は遺構に伴うものとしてB-4グリッドの基壇状遺構内溝中から多く出土している。
- ・近代錢は、攪乱からの出土が多く、遺構内からの出土はC-3グリッド野面石積南側栗石からの1点だけである。
- ・南宋以前の錢貨の出土数が多くない。
- ・寛永通寶が少ない。
- ・二分の一以下の残存状態の破片が多く、中には輪のみが破片となっているものもある。
- ・熱を受けて溶着したものがある。

2. 小結

前記した錢種及び特徴から、若干の考察をしてみたい。洪武通寶及び永樂通寶が多く出土しているB-3グリッドは、14世紀後半～15世紀前半の陶磁器が出土する基壇状遺構及び造成土が検出された地点であり、その中で1368年初鑄の洪武通寶及び1408年初鑄の永樂通寶が出土している。また、輪錢が多く得られたシーリ遺構では、17世紀前半の陶磁器がまとまって出土している点で、双方の出土陶磁器の年代と概ね符合する年代値が得られており、これが遺構年代を示しているものと思われる。さらに、被熱により溶着している資料が多いのは、本遺構上面が火災により焼失したこと示しているものと思われる。

なお、C-3グリッド野面石積南側栗石から出土した近代錢は、15世紀前半とする遺構年代と異なるが、隙間の多い裏込め内からの出土であり、上層からの混入であることが考えられる。

〈参考文献〉

永井久美男(編) 1998『近世の出土銭II－分類図版篇－』兵庫埋蔵銭調査会

永井久美男 2002『新版 中世出土銭の分類図版』

日本貨幣商協同組合 2002『日本貨幣型録 2002年度版』

長濱健起 2006「首里城跡出土銭貨の錢種構成について」『紀要 沖縄埋文研究』4 沖縄県立埋蔵文化財センター

上原靜 2009「首里城西のアザナ跡の鍛冶・铸造工房」『紀要 沖縄埋文研究』6 沖縄県立埋蔵文化財センター

第70表 錢貨観察一覧 1

國 國版 番号	銭文	国・王朝	初鑄年	法量(mm・g)				その他の	調査 年度 (平成)	グリッド 層
				外径	孔	厚さ	重量			
第116國 國版100 746	開元通寶	唐	621	21.6	6.1	1.9	2.3	輪が欠け、銭文が潰れる	19	擾乱
第116國 國版100 747	景祐元寶	北宋	1034	25.1	5.4	1.2	3.2		19	B-4 2層
第116國 國版100 748	熙寧元寶	北宋	1066	23.1	6.2	1.7	3.8	銭文が潰れる	19	B-4 2層
第116國 國版100 749	熙寧元寶	北宋	1066	25.2	6.4	1.3	3.7	銭文が潰れる	19	B-4 2層
第116國 國版100 750	聖宋元寶	北宋	1101	23.9	6.7	1.6	3.3	銭文が潰れる	19	擾乱
第116國 國版100 751	大觀通寶	北宋	1107	25.1	5.0	2.1	5.5		19	B-3 基壇状遺構 溝中
第116國 國版100 752	淳熙元寶	南宋	1174	25.2	6.4	1.4	3.5		19	擾乱
第116國 國版100 753	洪武通寶	明	1368	23.4	4.6	1.5	3.4		19	擾乱
第116國 國版100 754	洪武通寶	明	1368	23.6	4.6	1.5	3.7		19	擾乱
第116國 國版100 755	洪武通寶	明	1368	24.1	5.4	1.8	4.3	銭文が潰れる。背に「月」?	19	擾乱
第116國 國版100 756	洪武通寶	明	1368	23.8	5.6	2.2	3.7	銭文が潰れる	19	B-4 基壇状遺構 溝中
第116國 國版100 757	洪武通寶	明	1368	30.1	6.5	2.5	8.3		19	E-4 5層
第116國 國版100 758	洪武通寶	明	1368	23.1	5.7	1.7	3.5		19	C-4 炭泥粘土層

第71表 錢貨観察一覧2

國 國版 番号	銭文	国・王朝	初鑄年	法量(mm・g)				その他の	調査 年度 (平成)	グリッド 層
				外径	孔	厚さ	重量			
第117國 國版101 759	洪武通寶	明	1368	27.0	6.4	1.8	5.6	孔は丸みが強い。	19	B-4 3層表面
第117國 國版101 760	洪武通寶	明	1368	23.0	5.4	1.9	3.9	銭文が潰れる。特に「武」が不明瞭。	19	C-4 炭泥粘土層
第117國 國版101 761	洪武通寶	明	1368	24.0	5.5	1.7	3.9	—	19	C-4 2層
第117國 國版101 762	永樂通寶	明	1408	26.3	5.2	1.7	3.3	—	19	擾乱
第117國 國版101 763	永樂通寶	明	1408	25.6	5.1	1.3	4.3	—	19	C-5 3層表面
第117國 國版101 764	永樂通寶	明	1408	25.2	5.6	1.7	4.6	—	19	B-3 基壇状遺構 溝中
第117國 國版101 765	永樂通寶	明	1408	25.8	5.1	2.0	4.5	—	19	B-4 基壇状遺構 溝中
第117國 國版101 766	永樂通寶	明	1408	25.2	5.7	1.4	3.4	—	19	B-4 2層
第117國 國版101 767	元豐□寶	—	—	24.5	7.0	1.4	3.1	銭文が潰れる。	19	B-4 2層
第117國 國版101 768	元豐○○	—	—	—	—	1.3	1.8	—	19	A-2 淑順門内西側溝内
第117國 國版101 769	元豐○○	—	—	—	—	2.2	4.4	—	11	I-6 基壇東
第117國 國版101 770	大□通寶	—	—	24.8	6.1	1.4	3.3	銭文が潰れる。「大觀通寶」か。	19	B-4 2層

□は銭文が不明、○は欠損を表す

第72表 錢貨観察一覧3

図 国版 番号	銘文	国・王朝	初鋲年	法量(mm・g)				その他の	調査 年度 (平成)	グリット 層
				外径	孔	厚さ	重量			
第118図 国版102 771	寛永通寶	江戸幕府	1636	22.9	6.8	1.3	2.4	—	11	擾乱
第118図 国版102 772	寛永通寶	江戸幕府	1697	22.0	6.6	1.3	1.6	—	11	擾乱
第118図 国版102 773	—	—	—	22.6	6.9	1.4	2.5	銭文跡あり、輪を削る。	19	B-4 黄褐色土
第118図 国版102 774	—	—	—	19.2	8.3	0.7	0.8	無文銭。孔の方向が横かにずれる。	11	擾乱
— 国版102 775	—	—	—	12.3	8.6	0.4	0.2	輪銭。ハリが残る。方形を意識した痕が残る。	19	D-4 2層
— 国版102 776	—	—	—	7.0	3.5	1.1	0.2	輪銭。ハリが残る。	19	擾乱
— 国版102 777	—	—	—	—	—	—	146.0	塊。	19	A-4 裏込内
第118図 国版102 778	一錢	—	—	16.0	—	1.4	0.5	近代銭。富士1錢アルミ貨。	19	擾乱
第118図 国版102 779	一錢	—	—	23.0	—	1.4	3.6	近代銭。桐1錢青銅貨。	19	擾乱
第118図 国版102 780	二錢	—	—	31.8	—	2.2	13.5	近代銭。2錢銅貨。「明治八年」。	19	擾乱
第118図 国版102 781	一錢	—	—	23.3	—	1.4	3.6	近代銭。桐1錢青銅貨。「大正十一年」。	19	擾乱

※□は銘文が不明、○は欠損を表す



746



753



753



747



754



748



755



749



756



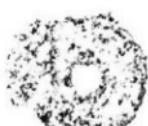
750



757



751



758



752



0 3cm

第116図 錢貨1



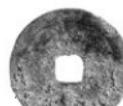
746



753



747



754



748



755



749



756



750



757



751



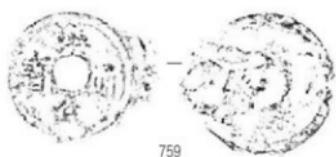
758



752



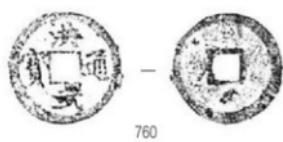
図版100 錢貨1



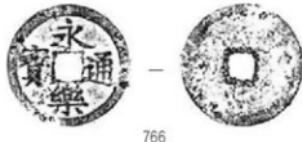
759



765



760



766



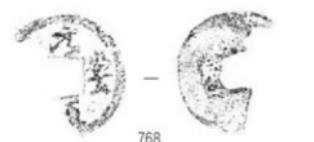
761



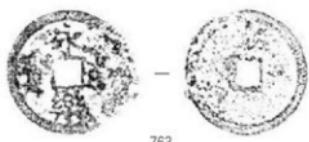
767



762



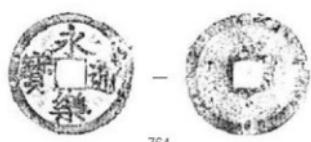
768



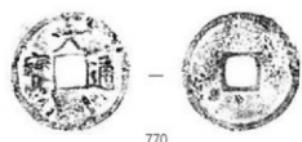
763



769



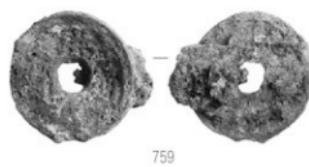
764



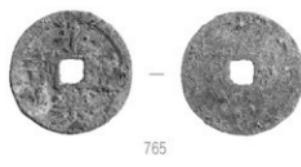
770



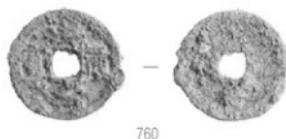
第117図 錢貨2



759



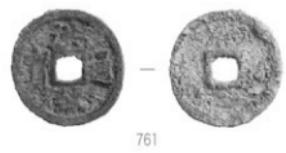
765



760



766



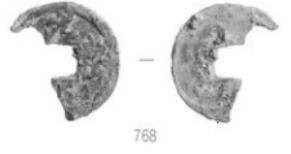
761



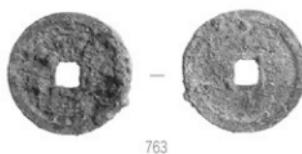
767



762



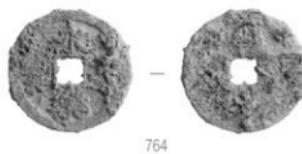
768



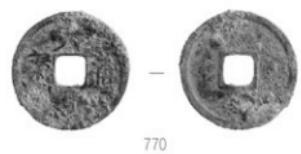
763



769



764



770

図版101 錢貨2



-



771



-



778



-



772



-



779



-



773



-



780



-



774



-



781



第118図 錢貨3



771



774



772



775



773



776



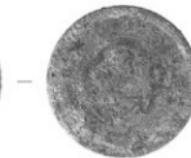
777



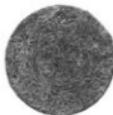
0 3cm



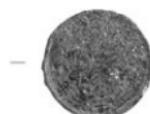
778



780



779



781

図版102 錢貨3

第16節 煙管（第73表、第120図、図版103）

喫煙の風習は新大陸から欧州、東南アジア・中国南部を経由して16世紀に日本に伝わった文化である。物質文化上で確認できるようになるのは17世紀からで、近世を象徴する遺物の一つである（古泉2006）。沖縄においても年代的には近世以前と思われる遺跡・遺構から出土するが、史料的な制約もあり、本土ほど喫煙風習の展開が詳細でないのが実情である。

今次調査では、雁首・吸口が計97点出土し、その内13点を図示した。これらは素材から陶製・金属製に、さらに形状で細分することが可能であった。本稿では煙管の分類と各型式の年代的位置付けについて試み、それを踏まえて当地区出土資料の評価を検討した。なお各資料については第75表を参照されたい。

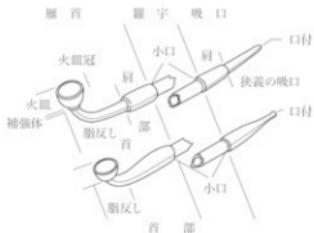
A. 陶製・瓦製（782～794）

陶製煙管は、ナーチューモ古墓群及び銘苅古墓群III報告書において雁首を2種に大別する分類案が提示されている（玉城2000、仲宗根2001）。この分類は当地区出土資料においても概ね適用することが可能である。しかし出土資料上、この分類に含まれないタイプも存在することから、那覇市の分類を補足する形で3種に分類した。

また吸口は雁首との一連性を見出せないとのことから分類案が提示されていないが、本稿では雁首との関連性を一旦保留し、吸口の形状のみで分類を試みた。しかし年代的な特徴は得られず、吸口のバリエーションを提示するに留まった。

①雁首（782～787）

陶首I類：円筒型で火皿のみでり、側面の孔に羅字を装着して使用する。古我地原内古墓や天界寺遺構30などでは底面に紐を結ぶための耳のものもつタイプもみられ、古我地原内古墓報告書では、耳の有無によって釣鐘形・柱状形に分類されている（太田1987）。また陶製以外にも瓦質や瓦の再利用品、石製品も確認されているが、金属製品は管見の限りみられない。釣鐘形・柱状形とともにグスク時代から確認できるが、近代の遺跡・遺構からは認められず、他のタイプに比べて古手と思われる。当地区では第120図782、783の柱状形のみが出土している。



第119図 煙管の部位名称
(江戸遺跡研究会(編) 2001)

陶首II類：全体的に角がない丸形の雁首で、脂返しに湾曲や角がみられず首もなく全長も短い。このタイプは首里城の各地区をはじめ、近世・近代の遺跡で頻繁に出土する。またヤッチのガマでは石製のものが1点、湧田古窯跡では蠟石製のものが1点出土しているなど、稀に石製品もみられる。当地区でこのタイプは第120図786、787の2点が出土している。

陶首III類：六角形や八角形をはじめ直線的で角をもち、多面体形を呈するタイプである。脂返しは角をもち、首と肩が分かれない。このタイプは近世・近代を通じて出土する。無釉かほとんどだが、ナーチューモ古墓群では施釉のものもみられるため一概に無釉とはいえない。当地区では第120図784、785の2点が得られている。特に784はシーリ遺構から出土している点で注目される。

②吸口（788～794）

陶口I類：小口から口付にかけて内湾するタイプである。口付の突起の小さいものと大きいものとがみられる。当地点では第120図788、789、790の3点が出土している。

陶口II類：このタイプは口付から小口までの内湾が小さく、直線的で細長い形状をしている。これも口付の突起の小さいものと大きいものとがみられる。第112図791～794の4点が出土している。特に794は華南三彩系綠釉の製品で、均整のとれた形状の精製品である。

B. 金属製（795・796）

本土では喫煙の習慣が伝来した中近世の頃より金属製煙管が用いられており、大名墓などでも出土事例がみられる。金属製煙管についても那覇市が陶製煙管と同様に分類案を提示しているが（玉城2000、仲宗根2001）、金属製煙管は本土においても東大構内遺跡出土資料を用いた分類案が存在している（原2006）。前者は形状による分類に対し、後者は製造方法（溶接か鍛造か）を加味したものとなっているため、本稿では両者を折衷する形での分類を行った。本土では煙管の形態について、その大まかな変遷過程が明らかになっている。17世紀前葉では、大きな火皿、脂返しの大きな湾曲、肩付の3点が特徴である。これが江戸時代中期になると、火皿の小形化と脂返しの湾曲の縮小化がみられるようになり、19世紀から幕末の頃には小さな火皿、脂返しの湾曲・肩が消滅するという傾向がある（古泉2006）。これを上記の分類に照らし合わせると、I→II→III→IVという変遷過程となる。

①雁首（795）

金首I類：火皿がやや大きく、脂返しが湾曲した長い首をもつ。火皿・首・肩があり、これらは溶接もしくは鍛造されて作られる。当地点ではみられず、また管見の限りでは県内での出土事例は得られていない。

金首II類：I類と類似した形状だが、肩がないものをII類とした。県内では出土遺構より概ね18世紀初頭から19世紀にかけて確認されるが、出土数は後述するIII・IV類に比べて少ないようと思われる。第120図795の1点のみ出土している。

金首III類：小形の火皿をもち、脂返しの湾曲がほとんどみられなくなり首も短い。肩は溶接もしくは鍛造されて作られる。当調査区内では出土しなかつたが、17世紀末頃の遺構を初現に近代まで出土している。

金首IV類：III類と類似した形状だが、肩をもたないもの。当調査区では出土しなかつたが、県内では18世紀頃の遺構を皮切りに、近代まで出土する。

②吸口（796）

金口I類：吸口と肩からなるタイプ。肩は溶接もしくは鍛造によって造られる。当調査区では出土していないが、県内では近世の遺跡から出土している。

金口II類：肩がなく、小口から口付にかけて内湾するもの。当地区では出土しなかつたが、これも近世の遺跡から出土例がみられる。

金口III類：肩がなく、小口から口付にかけて直線的なもの。ヤッチのガマ、天界寺東地区遺構30、潮原古墓群、山川原古墓群、古我地原内古墓群、ナカンダカリヤマ古墓群3号墓などに類例がみられる。

当調査区では796の1点が得られている。この資料は断面がほぼ正円形で、吸口は平坦をなしている。

C. 小結

当地点に出土した煙管は古手とみられる陶製雁首I類から、近世の初頭から中葉に、本土から流入してきたと思われる金属製雁首II類が、そして近代まで使用されるその他のタイプまで幅広い年代の煙管が認められることが分かった。このことは、喫煙の庶民への普及以前から喫煙が行われていたと想定され、御内原地区的特異性が改めて確認される。一方で庶民の近世墓出土と同様の製品も多く、御内原で働く女官の出自や平時の生活レベルが庶民階級と変わらないことを示唆する。一方で華南製の良品も出土することから、王家は渡米の精製品を用いることも多く、しかもそれら良品の下賜も行われていたと想定される。

〈参考文献〉

江戸遺跡研究会(編) 2001.4『図説江戸考古学研究事典』柏書房

太田宏好 1987.12「口 煙管」『古我地原内古墓 -沖縄自動車道(石川～那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(7)』沖縄県教育委員会

熊野正也・川上元・谷口榮・古泉弘編 2006.12『歴史考古学を知る事典』東京堂出版

玉城京子 2000.3「第13節 煙管」『ナーチューモ古墓群 -那覇新都心土地区画整備事業に伴う緊急発掘調査報VII』那覇市教育委員会

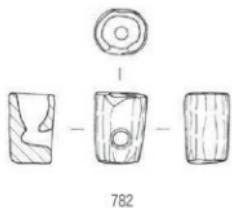
仲宗根啓 2001.3「第5節 煙管」『銘焼古墓群(III) -那覇新都心土地区画整備事業に伴う緊急発掘調査報IX-』那覇市教育委員会

原祐一 2006.3「第5節 金属製品」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室

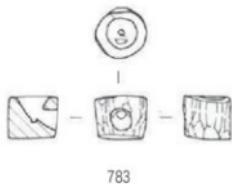
第73表 煙管観察一覧

() は破損

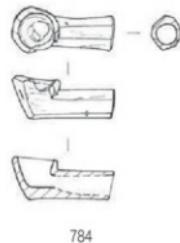
國 國版 番号	種類	部位	材質	分類	法量(cm・g)					観察事項	調査 年度 (年)	グリッド 層
					火皿 外径 内径	小口 外径 内径	吸口 内径 外径	長高	重量			
第120國 國版103 782	羅字 煙管	雁首	冲縄產 瓦質製	陶首 I類	2.15 1.6	0.8 0.7	-	1.85 2.9	10.4	陶製の煙管雁首。全面を研磨して整形。小口には炭が付着。	11	搅乱
第120國 國版103 783	羅字 煙管	雁首	冲縄產 瓦質製	陶首 I類	2.1 1.3	0.8 0.4	-	2.0 1.8	7.3	陶製の煙管雁首。全面を研磨して整形。小口下半部に炭が付着。	11	搅乱
第120國 國版103 784	羅字 煙管	雁首	冲縄產 無釉陶製	陶首 III類	(1.85) (1.4)	1.4	-	4.15 1.8	8.06	八角形の煙管。小口が一部欠損。全面を研磨して面取りされる。煤の付着なし。	19	B-5 シリ内 黒褐色土
第120國 國版103 785	羅字 煙管	雁首	冲縄產 無釉陶製	陶首 III類	1.4 0.9	1.5 1.05	-	3.3 1.4	5.74	多面形の煙管。完形。全面を研磨して多面形に面取りされる。煤の付着なし。	11	搅乱
第120國 國版103 786	羅字 煙管	雁首	中国產 彩釉陶製	陶首 II類	1.5 0.5	1.9 0.8	-	2.6 2.0	4.47	棱を持たず円形。火皿が僅かに剥落。煤の付着なし。	11	搅乱
第120國 國版103 787	羅字 煙管	雁首	冲縄產 施釉陶製	陶首 II類	1.6 1.3	(1.4) (1.0)	-	3.1 2.3	7.78	円形の煙管。火口が一部欠損。火口以外は施釉。	11	搅乱
第120國 國版103 788	羅字 煙管	吸口	冲縄產 施釉陶製	陶口 I類	-	1.4 1.0	0.7 0.5	3.05 2.2	9.22	褐色の胎土で、小口以外は施釉されるが剥落が著しい。小口は平坦。内面は剥れが残る粗製品。	11	I-8 20~30茶 褐色灰混層
第120國 國版103 789	羅字 煙管	吸口	冲縄產 施釉陶製	陶口 I類	-	1.55 1.15	1.0 0.6	3.35 1.9	6.12	灰白色の胎土で表面全体が透明の施釉。吸口は大きく膨らむ。小口は凹状。	11	I-7 20~30
第120國 國版103 790	羅字 煙管	吸口	冲縄產 施釉陶製	陶口 I類	-	1.75 1.2	0.6 0.5	3.2 1.8	5.08	灰白色の胎土で表面全体が透明の施釉。内面には煤が残る。小口は凹状。	11	J-9 造構上西
第120國 國版103 791	羅字 煙管	吸口	產地不明 施釉陶製	陶口 II類	-	(1.25) (0.9)	0.6 0.3	3.35 1.4	3.53	表面淡黄色。内部灰白色の胎土で吸口は小口と接ぐ中尖部に透明の施釉。小口は研磨されて平坦。吸口の凹角が小さい。小口は一部剥落。胎土や施釉箇所、吸口の凹角など細部から、冲縄產でない可能性がある。	11	搅乱
第120國 國版103 792	羅字 煙管	吸口	中国產 彩釉陶製	陶口 II類	-	1.2 0.8	0.7 0.45	2.45 1.2	2.64	灰白色の胎土で小口以外に蓝色で施釉されるが剥落が激しい。小口は研磨され凹状。吸口は僅かに剥落。形状がかなり歪であり、かなり粗末な製品。	11	J-9 造構上西
第120國 國版103 793	羅字 煙管	吸口	中国產 彩釉陶製	陶口 II類	-	1.55 1.45	0.85 0.6	2.9 1.65	4.02	淡黄色の胎土で小口以外に青色で施釉されるが剥落が激しい。小口は研磨され凹状。梢円形だがやや歪む粗末な作り、内面に穿孔跡の羅繩痕が残る。	11	搅乱
第120國 國版103 794	羅字 煙管	吸口	中国產 彩釉陶製	陶口 II類	-	(1.25) (0.9)	0.75 0.3	2.4 1.35	1.94	表面淡黄色。内部灰白色の胎土で緑釉が施されるが吸口部は薄くなっている。小口は研磨され平坦。小口は研磨している。吸口は大きく膨らむ。均整のとれた形状の精製品。	19	搅乱
第120國 國版103 795	羅字 煙管	雁首	銅製	金首 II類	1.05 0.9	0.9 0.8	-	4.8 8.46	羅宇装着部のソケットが方形。片側側面一体に細い溝が刻まれる。ソケット部は土下とも敲打痕。内面に煤が僅かに付着。	11	搅乱	
第120國 國版103 796	羅字 煙管	吸口	銅製	金口 III類	-	1.0 0.85	0.8 0.45	6.6 1.2	10.35	ほぼ正円形。吸口は平坦。	11	J-9 造構上西



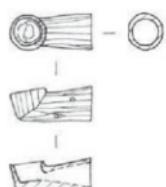
782



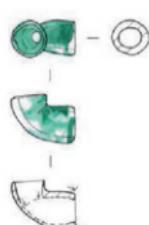
783



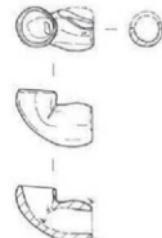
784



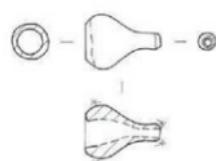
785



786



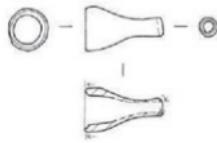
787



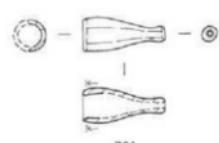
788



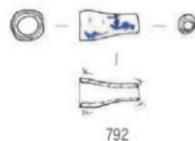
789



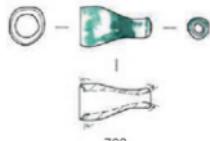
790



791



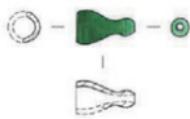
792



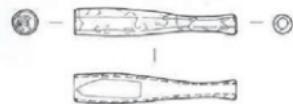
793



795



794



796

0 5cm

第120図 煙管



782



783



784



785



786



787



788



789



790



791



792



793



795



794



796

图版103 烟管

第17節 円盤状製品（第74表、第121図、図版104）

円盤状製品は陶磁器や瓦の周縁を剥離して円盤状に整形されたもので、おはじきや石蹴り遊び、もしくは盤上遊戯の駒と想定されている（上原2004）。当地区では62点の資料が得られたが、加工の差異から3種に分類した。遺物個々の観察所見は第76表を参照されたい。

A. 素材について

原材となった素材は施釉陶器・無釉陶器・磁器・土器・瓦と多彩で、中国産をはじめタイ産・肥前産・薩摩産・沖縄産と産地も幅広い。素材となった器種と部位には、碗底部・胴部・壺胴部・蓋・桶鉢胴部・瓦筒部が認められた。これらの傾向に何らかの傾向や指向は見出しえない。また今次資料のうち、800・805・806・807には二次加工されていない破損面が認められることから、破損した製品を素材とすることが確認される。原材の商品価値を問わず、破損品全てが材料の候補であったことが確認された。

B. 加工法について

①片面調整（797、803、805）

内面ないし外面からの一方向からのみ剥離調整を行って整形される。今次報告では797の中国産染付の碗底部、803の肥前磁器の碗底部、805の沖縄産施釉陶器の碗底部の3例がみられ、これらはいずれも底部を素材としたものだった。

②両面調整（798、799、802、804、806、807）

内外面両方向から剥離調整を行って整形されたもので、最も点数が多かった。両面調整は、一方から大きな剥離によってほぼ形状を作り、逆方向からの微細な調整剥離によって整形される。しかし実際は個人の技量によって左右され、内外両面からの規則的な剥離によって整形されるものもみられる。

③研磨調整（800、801、808）

おそらく剥離調整が行われたが、剥離加工後、側面を研磨して整形されたものである。今次調査では800の中国産褐釉の壺胴部、801の中国産土器の蓋、808の明朝系瓦の筒部の3点の資料が得られている。素材に何らかの傾向は見出せないため、加工方法の選択は素材に基づくわけではないようである。なお、808はその他の製品に比べ球状に近いことから、用途が異なる可能性が挙げられる。

C. 小結

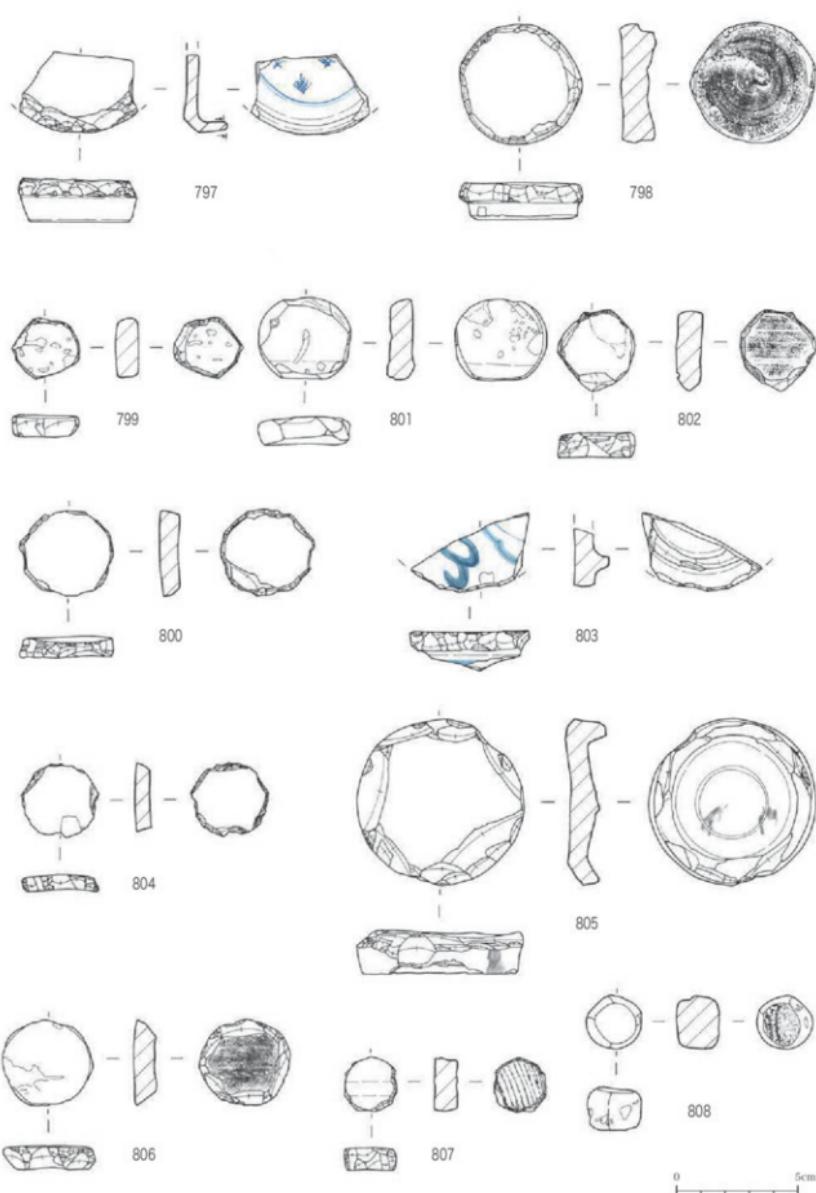
以前より円盤状製品の素材が出土遺跡の性格に対応することが指摘されるが、今次調査においても素材に中国産陶磁器などの良品が含まれていた。加えて加工法にみると、御内原でも製作上での個人の技量が大きく反映されている。用途は依然確定できないが、完成度の技量差、素材と出土地との相関性を踏まえると、概ね使用者自身が製作主体者であるとみられる。

〈参考文献〉

上原静 2004.3『考古学からみた沖縄諸島の遊戯史』『グスク文化を考える』p371-400今帰仁村教育委員会

第74表 円盤状製品観察一覧

団 国版 番号	素材	使用部位	法量(cm・g)		観察事項	調査 年度 (平成)	グリッド 層
			縦 横 高(厚)	重量			
第121団 国版104 797	中国産染付	碗 底 部	— — 1.8	20.0	底部を外面底部方向より打剥。打剥には剥部除去のための大げな剥離と調整の微細剥離とがみられるが、剥離順序は不規則。	11	搅乱
第121団 国版104 798	中国産 黒釉陶器	碗 底 部	4.8 5.1 1.2	43.3	内面より打剥した後、角の残る部分を外側より微細剥離して形成される。一か所のみ角が除去され残るが、全体的に均整が整い、円形を呈す。	11	搅乱
第121団 国版104 799	中国産 黒釉陶器	壺or鉢脚部	2.5 2.8 0.9	8.6	内外面両方より不規則な剥離がされるが、その後研磨調整がなされており剥離面はほとんど残っていない。梢円形を意識したと思われるが角が残る。	19	搅乱
第121団 国版104 800	中国産 褐釉陶器	壺 脚 部	3.5 3.8 0.9	15.0	外側より打剥し、次に内面より微細剥離して調整される。剥離順序は不規則、円形だが調整は粗めで角が残る。	11	搅乱
第121団 国版104 801	中国産土器	蓋	3.3 3.75 1.1	12.7	内面より剥離されるが、その後側面を研磨して整形されるため剥離面はほとんど残っていない。形状は梢円形をなす。	19	搅乱
第121団 国版104 802	タイ産 褐釉陶器	壺脚下半部	3.3 3.2 1.0	13.5	内面より打剥し、さらに外側から微調整して整形される。剥離順序は不規則、一部に剥離面に切られる研磨された半丸をなす面があり、これは打剥調整前の準備作業の可能性がある。円形だが下部は剥離が大きくなってしまい、直線形になっている。	11	搅乱
第121団 国版104 803	肥前産磁器	碗 底 部	— — 0.8	16.1	素材は荒礪文の肥前碗。これを内面より剥離したのち、内面から微細調整を行って整形している。全体の過半が欠損するが、剥離の大きさもおよそ一定で形状は梢円形と想定される。技量をもった人物の手による良品である。	11	搅乱
第121団 国版104 804	薩摩産陶器	壺 脚 部	3.0 3.15 0.6	8.0	基本的には外側→内面の順序で剥離されるが、一か所内面からの剥離が大きくなり角を作ってしまっている。円形を意識したと思われるが、角が残り多面体を呈している。	11	搅乱
第121団 国版104 805	沖縄産 施釉陶器	碗 底 部	6.8 6.85 1.7	65.8	外側から大きく打剥されるが、入念さを欠き剥離されていない角が残されている。微調整もなされておらず、粗製である。他の製品は剥離角度が90°に近いが、この製品は素材形状を反映してか、剥離角度が小さめである。	11	搅乱
第121団 国版104 806	沖縄産 無釉陶器	壺 脚 部	3.5 3.7 0.9	15.0	内面から打剥して整形され、外側から微細な調整剥離をすることで完成されたもの。一か所のみ剥離されずに残った角が残るが、形状は梢円形をなす。	19	搅乱
第121団 国版104 807	沖縄産 無釉陶器	擂鉢脚部	2.2 2.1 0.95	6.9	擂鉢を素材としている。調整は内面から剥離したのち、外側より微細調整を行って整形される。梢円形をなすが、一か所外側からの微細調整が大きくなってしまっている。	11	搅乱
第121団 国版104 808	明朝系瓦	筒 部 ?	2.2 2.3 1.7	10.1	小形の円盤状製品。一部裏面からの剥離調整を残すが、側面は研磨調整がなされ剥離面はほとんど残っていない。	11	搅乱



第121図 円盤状製品



797



798



799



801



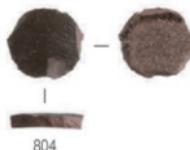
802



800



803



804



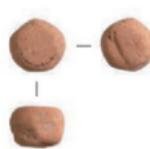
805



806



807



808

図版104 円盤状製品

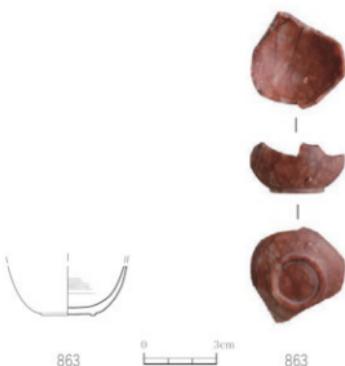
第18節 玉類・玉製品・ガラス製品（第75表、第122・123図、図版105・106）

当地区において、玉類は77点、玉製品は3点、ガラス製品は4点出土しており、うち特徴的なもの23点を図化した。種類別にみると、玉類では管玉、勾玉、丸玉が出土しており、材質は石製とガラス製があり、その他玉製品には、玉髓を加工した製品が得られている。ガラス製品は、ビーズ以外の製品を指す。次に主な資料について報告する。

第123図826の管玉と824の勾玉は、色調・材質が類似しており、同一の材質である可能性が考えられる。また、丸玉は臼形、球形、扁平形など形状にいくつかのバリエーションがみられ、大きさは最大径が約3～5mmに収まるものと、約5～12mmの間に収まるものがある。色調は、被熱や風化などにより本来の色調を保っていない資料も見受けられるが、現状で確認できる色調として白、黒のまだら状や灰色、白色、青色、緑色、赤色、半透明などがみられる。

玉製品では、玉髓を素材とした口縁部の欠損する小杯が1点得られた（第122図・863）。素材となる礫を粗く削って粗加工したと思われるが、底部に螺旋状に粗い研磨による線条痕が残ることから、粗加工の後に荒砥による研磨加工がなされている。さらに全体的に薄く線条痕が確認でき、目の細かい砥石によって丁寧に仕上げられたことが確認できる。このように粗加工後の2段階の研磨調整によって底部2.5mm、胴部1mmの薄さに仕上がった、製作者の技術と手間が投下された良品といえる。

なお、玉を加工した製品は首里城跡においてしばしば出土している。瑪瑙製品には黄金御殿地区に唐草文が線刻される石製品、城郭南側下地区1層では研磨・穿孔のみられる瑪瑙製品が出土している。翡翠製品には木曳門跡地区・用物座跡地区よりもボウル状製品が合計3点出土しており、これらは台湾製と報告されている。翡翠製品は詰所地区砂礫土層からも研磨等の加工面の残る石製品が6点集中して出土している事例や、城の下地区表探資料の不明石製品には丁寧な切断面が残ると報告されている。また蠟石製品には右掖門地区から外面に唐草文が線刻されるシャーレ状容器と皿状製品、城の下地区客土より容器が出土している。



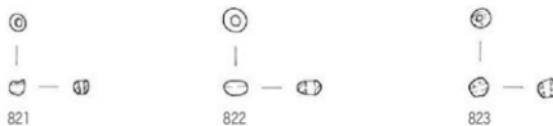
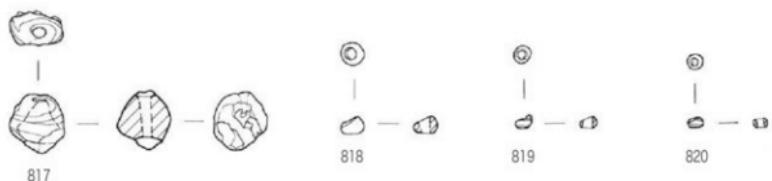
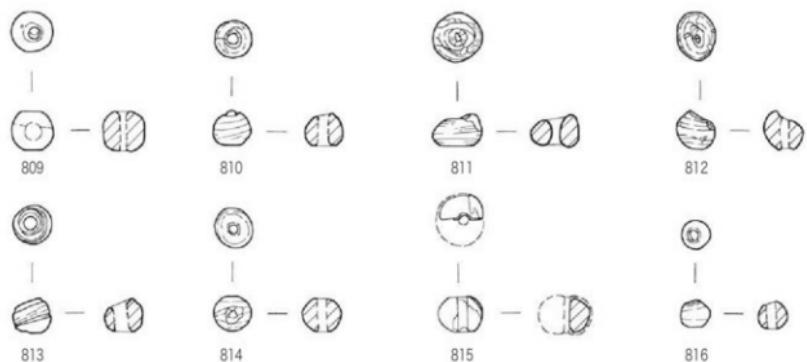
第122図 玉髓製小杯 図版105 玉髓製小杯

ガラス製品は4点を図化した（第123図827～830）。形状は平面が円形で、基盤の片面を扁平にしたような丸餅形を呈する。直径は15～20mm、厚さ6～7mmで、サイズは大小の2種が認められ、小型の資料が厚手に造られている。色調は黒色と緑白色の2種があり、風化した表面は、細かい流文状の筋が確認できる。この特徴から、製造にあたり溶解したガラスを鉄板のような平坦な場所に落とし、冷却させたことが想定できる。用途については、形状や色調から碁石やおはじきを考えることができるが、詳細は不明である。

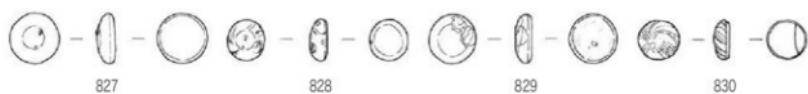
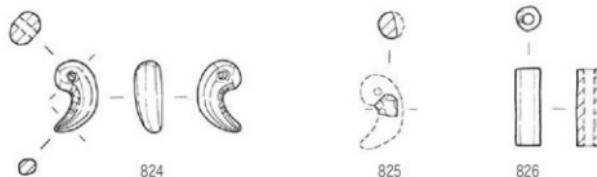
第75表 玉類・玉製品・ガラス製品観察一覧

() は破損

団 國版 番号	名 称	材 質	完 破 部 位	法量 (mm·g)		観 察 事 項	調査 年度 (平成)	グリッド 層
				高さ/最大長 幅/最大径 孔 径	重 量			
第123回 國版106 809	丸玉	石製	完形	8.0 9.0 2.0	1.0	形状はやや縱長で、いびつな球形を呈す。色調は灰色。	19	B-3 裏込内(右端み2北側)
第123回 國版106 810	丸玉	ガラス	完形	6.0 8.0 2.0	0.5	形状は円形を呈す。表面に螺旋状の筋が明瞭に残る。縦に筋が入っている。色調は白色。	19	C-4 炭泥粘土層
第123回 國版106 811	丸玉	ガラス	完形	6.5 10.0 3.0	0.68	形状はいびつな扁平形を呈す。被熱により一部が溶けていると思われる。螺旋状の筋が残る。色調は白色。	19	C-5 方形落込内
第123回 國版106 812	丸玉	ガラス	完形	8.0 8.0 1.0	0.58	形状はいびつな球形を呈す。被熱による変形だと思われる。螺旋状の筋が明瞭に残る。風化による白色化が進んでいるが、色調は青色。	19	C-5 3層表面
第123回 國版106 813	丸玉	ガラス	完形	7.0 8.0 3.0	0.43	形状は円形を呈す。螺旋状の筋が明瞭に残る。風化による白色化が進んでいるが、色調は青色。	19	C-4 炭泥粘土層
第123回 國版106 814	丸玉	ガラス	一部 破損	7.0 8.0 2.0	(0.63)	形状はややいびつな球形を呈す。螺旋状の筋が明瞭に残る。色調は緑色。	19	B-3 裏込内(右端み2北側)
第123回 國版106 815	丸玉	ガラス	半欠	7.0 (5.0) 1.0	(0.62)	形状は円形を呈す。風化により黒の素地が露出している。色調はごった緑色。	19	E-4 5層
第123回 國版106 816	丸玉	ガラス	完形	5.5 6.0 2.0	0.29	形状はややいびつな球形を呈す。色調は緑色。	11	搅乱
第123回 國版106 817	丸玉	ガラス	-	12.0 11.0 2.0	1.13	被熱により溶け、形が変形していると思われる。螺旋状の筋が残る。色調は青色。	19	B-3 裏込内
第123回 國版106 818	丸玉	ガラス	完形	3.5 5.0 2.0	0.08	形状はややいびつな扁平形を呈す。風化により表面がアバタ状を呈す。螺旋状の筋が残る。色調は青色。	19	B-4 シーリ内 黒褐色土
第123回 國版106 819	丸玉	ガラス	完形	2.5 3.5 1.5	0.04	形状は扁平形を呈す。下端の一部が尖り、螺旋状の筋が明瞭に残る。色調は青色。	19	C-5 3層表面
第123回 國版106 820	丸玉	ガラス	完形	2.0 3.0 1.0	0.01	形状はややいびつな扁平形を呈す。螺旋状の筋が明瞭に残る。色調は青色。	19	C-5 3層表面
第123回 國版106 821	丸玉	ガラス	完形	3.0 3.0 1.0	0.07	形状は円形を呈す。上端の一部がとがる。螺旋状の筋が明瞭に残る。色調は半透明。	19	B-5 シーリ内 黒褐色土
第123回 國版106 822	丸玉	ガラス	完形	3.0 5.0 1.5	0.12	形状は整った扁平形を呈す。螺旋状の筋が明瞭に残る。色調は赤色。	19	B-5 シーリ内 木炭灰
第123回 國版106 823	丸玉	ガラス	完形	4.0 4.0 1.5	0.08	形状は整った球形を呈す。螺旋状の筋が明瞭に残る。色調は赤色。	11	搅乱
第123回 國版106 824	勾玉	石製	完形	29.0 17.5 4.0	6.87	丁寧に整形され、非常になめらかな表面。尾部がとがり、頭部に研磨痕が明瞭に残る。色調は白と黒まだら模様。	19	B-4 2層
第123回 國版106 825	勾玉	石製	頭部	- - -	(1.22)	頭部に研磨痕が残る。色調は灰白色。	19	B-4 黄褐色土
第123回 國版106 826	管玉	石製	完形	31.5 10.0 4.0	5.89	丁寧に整形され、非常になめらかな表面。色調は白と黒まだら模様。	19	B-4 2層
第123回 國版106 827	ガラス 製品	ガラス	完形	厚さ:6.7 20.5 -	4.54	黒色で丸餅状の扁平な形状。表面はざらつき光沢はない。下部に流文状の筋あり。	11	I-9 南側
第123回 國版106 828	ガラス 製品	ガラス	完形	厚さ:6.9 15.9 -	2.67	黒色で丸餅状、小型のタイプ。表面はざらつき光沢はない。全面に流文状の筋あり。白砂状の粒子が混入する。	11	搅乱
第123回 國版106 829	ガラス 製品	ガラス	完形	厚さ:6.6 18.8 -	4.15	緑色の白色の製品。表面はやや光沢を発するが、微細な気泡が確認できる。一部に鉄錆が付着する。	11	搅乱
第123回 國版106 830	ガラス 製品	ガラス	完形	厚さ:6.6 17.0 -	2.09	緑色の小型製品。表面は風化により白濁するが、流文状の筋は全面に明瞭。	19	B-1 石積み4 裏込内(西)
第122回 國版105 863	玉杯	玉髓	破片 底部	胴部厚:1.0 底座厚:2.5 底径:22.0	(10.25)	玉の小内窓を割り貰って杯状にし、荒巻による整形、細巻による研磨によって光沢を出したとみられる。底部に荒巻による縦条痕が残る。	11	J-9 灰混層



0 3cm



0 5cm

第123図 玉類・ガラス製品



図版106 玉類・ガラス製品

第19節 貝・パイプウニ製品（第76表、第124図、図版107）

当地区では、貝匙や貝匙作出後の残核、研磨製品、穿孔製品、独楽、碁石など18点の貝製品が得られている。

第124図831、832は貝匙と思われる製品である。831は全面が研磨されている製品で、特に外面は全面に真珠層が露出して光沢をなしている。柄部は欠損している。第124図832は、形状こそ貝匙に類似するが、表層が一部剥がれているのみで全面とも研磨が確認されないため、人工物ではない可能性がある。これも柄部に当たる部位が欠損している。

第124図833はイモガイ科の貝を穿孔した製品で、貝頭部以外を切り取り、中央を穿孔している。第124図834はヤナギンボリイモを研磨した製品で、全面が研磨される。特に表裏面は研磨によって平坦をなしている。第124図835は貝製の独楽である。マガキガイ体層部を打ち欠いて螺軸を露出させている。頭部の突起には使用によると思われる摩耗が認められる。首里城黄金御殿地区など各地に出土事例がみられる。第124図836は背面中心に研磨を施し、上下2つの穿孔が施される。上のものは背面より、下のものは表面より打撃によって穿孔される。破損は成品後とみられ、右半分が欠損する。

第124図838はパイプウニの棘を研磨したもので、研磨によって凹みが形成された製品である。端部が欠損しているため詳細は不明である。第124図837は貝を素材とした碁石で、表裏とも丁寧に研磨され光沢をなす。剥離調整の影響で、背面が内反している。首里城右掖門及び周辺地区などに出土事例がみられる。

図版107-839、840は、製作・使用に伴う痕跡がみられないことから、貝製品の残核とみなされる資料である。839はヤコウガイ貝殻に梢円形の孔と円形の孔が体層から打ち欠かれている。前者のものは形状から貝匙素材の割り取りによるものと思われる。後者の孔は紐をとおして海中に貝殻を飼育ストックするための孔とみられている。840も明確な製作・使用痕はないが、839と同様にヤコウガイ貝殻体層の平坦部に直径1.5cmの円形の孔が打ち欠かれ、同様の用途が想定される。多くの近世遺跡で出土し、首里城城郭南側下地区など首里城内にも類例が多い。同様に御内原地区においても貝製品が製作されていたことを窺わせる。

当地区から出土した貝製品は、首里城の各地区やその他の近世集落跡の資料と大きな差異は見出されなかった。これは当地区が御内原の中でも女官居室に該当することが考えられ、女官達が日常使用する道具自体は平民階層と大差ないものであったことが反映されたものと思われる。

〈参考文献〉

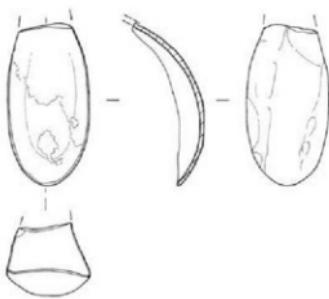
金城達 2004.3 「第22節 貝製品」『首里城跡 - 城郭南側下地区発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第19集 p109-111 沖縄県立埋蔵文化財センター

羽方誠 2007.3 「第2節 黄金御殿地区の遺構と遺物」『首里城跡 - 黄金御殿地区発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第45集 p26-78 沖縄県立埋蔵文化財センター

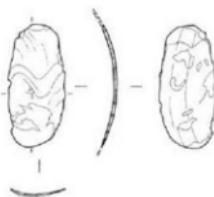
第76表 貝・パイプウニ製品観察一覧

() は破損

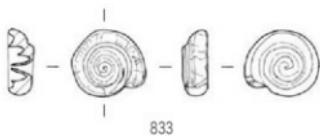
図版番号	名称	貝種	完・破	法量(mm・g)		観察事項	調査年度 (平成)	グリッド層
				縦横 高(厚)	重量			
第124図 図版107 831	貝匙	ヤコウガイ	破	(66.0) 34.0 2.0	9.97	全面研磨。特に外面は全面真珠層が露出して光沢をなす。破損した製品。柄部欠損。	19	搅乱
第124図 図版107 832	貝匙?	ヤコウガイ	破	(50.0) (23.0) 1.0	2.0	表層が一部剥がれているのみで全面とも研磨が確認されないため、人工品でない可能性がある。柄部欠損	19	B-5 シーリ内木炭層(堆)
第124図 図版107 833	イモガイ 研磨製品	イモガイ科	完	27.0 30.0 10.0	9.26	全面研磨。特に表裏面は研磨によって平坦をなしている。完形品。	19	E-4 5層
第124図 図版107 834	イモガイ 穿孔製品	ヤナギ シボリイモ	完	30.0 32.0 17.0	14.86	貝頭部以外を切り取り、中央を穿孔したもの。完形品。	19	E-4 5層
第124図 図版107 835	獨楽	マガキガイ	完	- 26.0 31.0	10.87	マガキガイ体層部を打ち欠いて螺旋を露出させている。頭部の突起には使用によると思われる摩耗が認められる。完形品。首里城黄金御殿地区など各所に出土事例。	19	E-4 6層
第124図 図版107 836	穿孔製品	ウミギク科	破	- - -	5.34	背面中心に研磨を施し、上下2つの穿孔が施される。上のものは背面より、下のものは表面より打撃によって穿孔される。破損は成品後である。右半分が欠損。	11	搅乱
第124図 図版107 837	碁石	—	完	21.5 21.0 4.0	2.87	貝を素材とした碁石。表裏とも丁寧に研磨され光沢をなす。離隔調整の影響で、背面が内反している。完形。首里城右掖門及び周辺地区などに出土事例。	11	搅乱
第124図 図版107 838	パイプウニ 棘研磨製品	パイプウニ	完	(60.0) 9.0 -	3.37	ウニの突起に研磨によって凹みが形成された製品。端部が欠損しているため詳細不明。	11	搅乱
図版107 839	貝匙残核	ヤコウガイ	破	140.0 177.0 -	828.8	ヤコウガイ貝殻に円形の孔と梢円形の孔が体層から打ち欠かれている。おそらく前者は直径1.5cm、後者は貝匙製作のための素材剥片の割り取りによるものと思われる。首里城城郭南側下地区に孔直径1.9cmの出土事例。	19	B-1 石積み6 西側上層
図版107 840	穿孔された ヤコウガイ	ヤコウガイ	完	159.0 175.0 -	1010.4	ヤコウガイ貝殻体層の平坦部に直径1.5cmの円形の孔が打ち欠かれている。これは紐に吊るして海中にストックしておくためのものとされる。首里城城郭南側下地区に孔直径1.1cmの出土事例。	11	搅乱



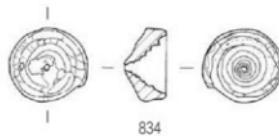
831



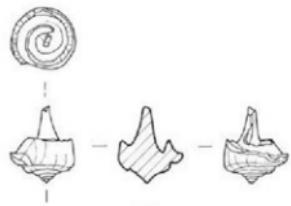
832



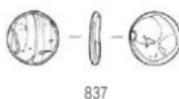
833



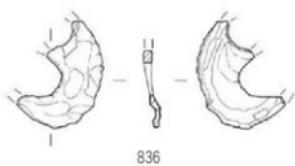
834



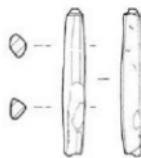
835



837



836



838



第124図 貝・パイプウニ製品



831



832



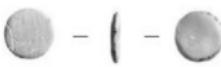
833



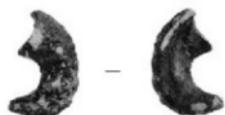
834



835



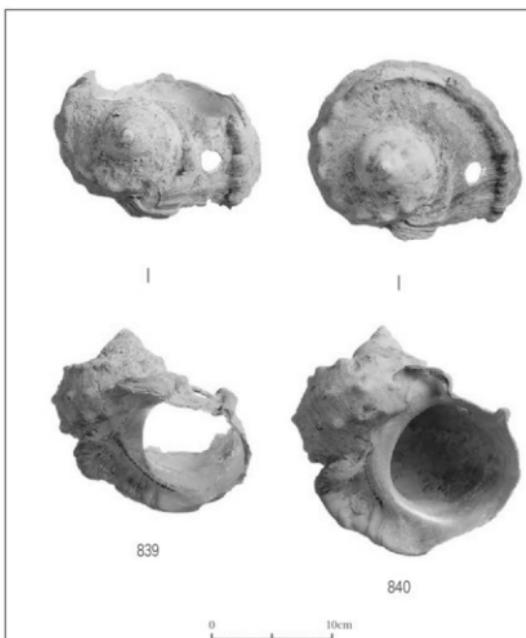
837



836



838



0 10cm

図版107 貝・パイプウニ製品

第20節 骨製品（第77表、第125図、図版108）

当地区では38点の骨製品が得られており、その内9点を国化した。

第125図841は完形の菱形式骨鎌で、茎部は円形、舌部は方形をなし、刃部は断面菱形である。削ったのち丁寧に研磨され、表面は光沢をなす。おそらくは実用的な製品であり、グスク時代に類例が多い。842は彫刻の施された骨製品である。表面に線刻で文様が施され、内面部は断面三角状に切られ、さらに研磨して整形される。線刻は鳳凰や草木が線刻により描かれている。用途は不明。843は骨製のビードで、サメの椎体を素材とし、中央が穿孔される。孔には紐ずれを残す。

第125図844～846は籠状骨製品である。844は半円形をなし、全体に研磨調整がなされる。孔をなす部分には中央部を除いて刃縁に対して垂直方向の線条痕が顕著に残る。845は全体的に研磨される。かなり使用されたらしく、刃縁が鈍くなっている。また中央部に3つの穿孔がなされ、そこにはおそらくジョイントと思われる鉄芯がはまり、その周囲は銷が付着している。846は板状の製品で、全体的に研磨される。両端には短軸方向に線条痕が残る。また中央部に3つの穿孔がなされ、そこにはおそらくジョイントと思われる鉄芯がはまり、その周囲は銷が付着している。おそらく845、846と同様に本来は半円状の製品で、下半が欠損したものと思われる。勝連城跡や渡地村跡など、籠状骨製品は近世よりグスク時代の遺跡において多く類例が得られ、特に骨鎌との伴出例が多い。そのことから比較的古い時期から用いられた道具であったと思われる。第125図847は用途が判然としない製品で、骨を長軸方向に研磨し、中央に溝を刻んでいる。

第125図848、849は近代以降の遺物である。848は歯ブラシで、ブラシ部と柄部が接合可能な個体。ブラシは植毛のための穴が3列組まれ、両端は17、中央は18、ブラシ頭部に3個開いている。柄はブラシに対し外反している。ともに丁寧に研磨され、光沢をなす。首里城御内原地区でも同形状の柄が出土している。849はボタンで、表面中心に研磨され、さらに糸通しの孔が5ヶ所穿たれている。首里城御内原地区でも出土している。

以上のように、出土骨製品の組成は概ねグスク時代と大差ないものであった。これは当地区的年代観とともに、骨製品が実用品としてグスク時代から近世にかけて変わることなく使われていたことを示唆する。一方で近代以降の骨製品もあり、この場所の土地利用の変遷を窺わせる。

〈参考文献〉

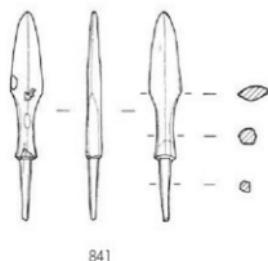
上原靜 1990.3「第1節 遺物」『勝連城跡 -北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査-』勝連町の文化財第11集p18-114 勝連町教育委員会

喜多亮輔 2004.3「第18節 骨製品」『首里城跡 -御内原地区発掘調査報告書-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第34集p131 沖縄県立埋蔵文化財センター

喜多亮輔 2007.7「33節 骨製品」『渡地村跡 -臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告書-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第46集p205-206 沖縄県立埋蔵文化財センター

第77表 骨製品観察一覧

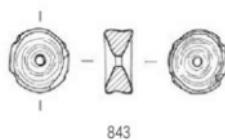
図 図版 番号	名 称	材 質	部 位	法量 (mm・g)		観 察 事 項	調査 年度 (平成)	グリッド 層
				縦 横 高(厚)	重 量			
第125図 図版108 841	骨鐵	ジ ュ ゴ ン	肋骨	85.0 12.0 7.0	4.30	完形の骨鐵。茎部は円形、舌部は方形をなし、刃部は断面菱形をなしている。削ったのちに丁寧に研磨されており、表面には光沢をなす。	19	E-4 6層
第125図 図版108 842	彫刻製品	ウ シ ?	肋骨?	14.5 47.0 6.0	2.73	表面に線刻で文様が施され、内部は断面三角状に切られ、さらに研磨して整形される。線刻は草木が彫られる。	11	搅乱
第125図 図版108 843	ビード	サ メ	椎体	26.0 24.0 11.0	3.88	中央が穿孔された製品。表面に紺ずれ痕を残す。	11	J-9 遺構上西
第125図 図版108 844	箆状骨製品	ウ シ ?	肋骨	35.5 18.0 1.0	1.07	半円形で、全体に研磨調整がなされる。弧をなす部分には中央部を除いて刃縁に対して垂直方向の線条痕が顕著に残る。	19	B-5 3層表面
第125図 図版108 845	箆状骨製品	ウ シ ?	肋骨	41.0 12.0 2.0	0.89	半円状の製品で、全体的に研磨される。かなり使用されたらしく、刃縁が鋒くなっている。また中央部に3つの穿孔がなされ、そこにはおそらくジョイントと思われる鉄芯があり、その周囲は銷が付着している。	19	B-5 シーリ内木炭 層(唯)
第125図 図版108 846	箆状骨製品	ウ シ ?	肋骨	42.5 8.0 2.0	0.74	板状の製品で、全体的に研磨される。両端には短軸方向に線条痕が残る。また中央部に3つの穿孔がなされ、そこにはおそらくジョイントと思われる鉄芯があり、その周囲は銷が付着している。おそらく844と同様に本来は半円状の製品で、下部分が欠損したものと思われる。	19	B-5 シーリ内木炭 層
第125図 図版108 847	有溝製品	ウ シ ?	肋骨	— 12.0 3.0	2.08	骨を長軸方向に研磨し、中央に溝を刻む製品。	11	搅乱
第125図 図版108 848	ハブラシ	ウ シ ?	肋骨?	138.5 10.0 5.0	6.05	ブラシ部と柄部が接合した個体。ブラシは植毛のための穴が3列組まれ、両端は17、中央は18個、ブラシ頭部3個開いている。柄はブラシに対し外反している。ともに丁寧に研磨され、光沢をなす。	11	J-8 茶褐色 灰混層
第125図 図版108 849	ボタン	—	—	16.0 16.0 3.0	0.83	洋服ボタンで、表面中心に研磨され、さらに糸通しの孔が5か所穿たれている。	11	搅乱



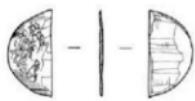
841



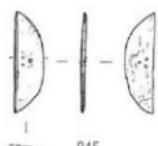
842



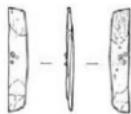
843



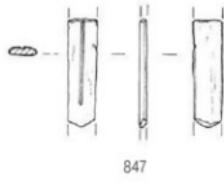
844



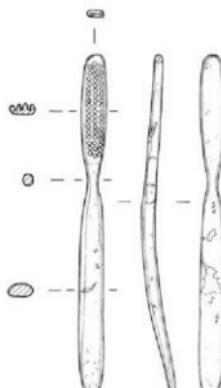
845



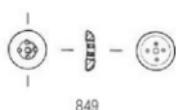
846



847



848



849



第125図 骨製品



841



842



843



844



845



846



847



849



848

第21節 石製品・石造製品（第78表、第126～128図、図版109～111）

当地区では53点の石製品・石造製品が得られている。個別の観察所見は第78表に譲り、ここでは特徴的な14点を図化し、概括的な見解を述べることとする。

第126図850、851は硯である。ともに山口県の赤間石と想定される赤色頁岩を素材とし、形状は今日使われる硯と同様である。この型の硯には裏面によく文字が刻まれるが、双方ともその例に漏れない。これらは「赤間」「赤間闇」と刻まれ、赤間硯であることを窺わせる。

第126図852～855は砥石である。大きさや重量から852～854は手持ち砥石、855は固定砥石と思われる。852～854は、いずれも形状に共通点がみられず、石材も砂岩・頁岩・流紋岩と異なる石質のもので、規格性はみられない。使用箇所もある程度の面積を持つ平坦面であれば使用しており、消費的な道具であることが窺える。対して855は、側面に整形の痕跡を残すなど製作にも手間が加えられている。この両者の差は、使用期間やモノの価値などが反映したものと思われる。

第126図856は石球である。球状で全周に敲打調整によるあばた痕が覆っている。石球は遊具や石弾などが推定されている。後者に関しては首里城下之御庭地区で2.3kgの大形品、渡地村跡において192.2gのやや小形の石球に煤の付着しているものがみられ、大小に関わらず石火矢の石弾の可能性のある有力な資料である。本資料も形状・重量からみる限り後者のものとほぼ同じ形状であることから、遊具よりは石弾とする方が妥当と思われる。

第127図857～859は七厘である。3点とも被熱によって脆くなつており、また赤褐色化や炭化物の付着がみられる。857、858は石材・形状から同一個体と思われるが、接合しなかつたため別個体として扱った。凝灰岩は沖縄本島内でも主に南部で採集可能であるが、859のグリーンタフは久米島に特有の石材である。いずれにせよ、用途を想定した石材選択といえよう。

石造製品では、勾欄の羽目板・部材、持送り石が得られている。第128図860の勾欄の羽目板、同861は勾欄の部材と想定され、共に細粒砂岩(ニービ)を丁寧に加工・装飾している。類例に首里城正殿跡出土資料が挙げられる。同862は持送り石と思われ、こちらは琉球石灰岩をやはり丁寧に加工・装飾している。いずれも往時の御内原の姿を想起させる資料である。

〈参考文献〉

上原靜 2004.3「考古学からみた沖縄諸島の遊戯史」『グスク文化を考える』p371-400今帰仁村教育委員会

金城亀信 2007.7「31節 石製品・石器」『渡地村跡 -臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第46集p199-202 沖縄県立埋蔵文化財センター

知念隆博・新垣力 2004.3「第2節 遺構」『首里城跡 -城郭南側下地区発掘調査報告書-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第19集p109-111 沖縄県立埋蔵文化財センター

当眞嗣一 1994.12「火矢について」『南島考古』第14号p123-152 沖縄考古学会

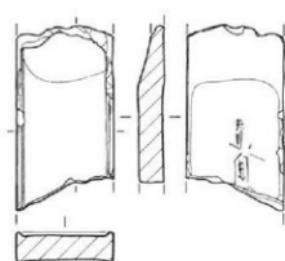
当眞嗣一・上原靜 1986.3「旧首里城正殿跡位置確認調査報告書」沖縄県教育委員会

山本正昭 2001.3「第32節 石球」『首里城跡 -下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集p144-147 沖縄県立埋蔵文化財センター

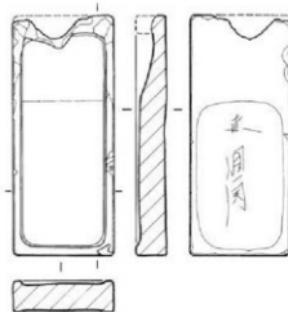
第78表 石製品・石造製品観察一覧

() は破損

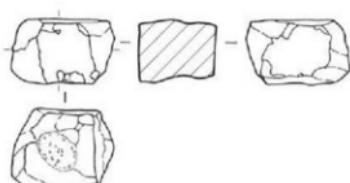
図 図版 番号	素 材	石 材	法量 (cm ³ ·g)		観 察 事 項	調 査 年 度 (平成)	グリッド 層
			縦 横 高(厚)	重 量			
第126図 図版109 850	観	赤色頁岩	(11.4) 6.0 1.6	(224.24)	一般的な形状の観。石材からおそらく本土からの搬入品と思われる。背面に「赤間」と刻まれている。	11	J-8 茶褐色灰混層
第126図 図版109 851	観	赤色頁岩	14.8 6.3 1.9	(349.11)	一般的な形状の観。表面中心に長軸方向に線条痕が無数に残る。背面に「赤間」と刻まれる。	11	擾乱
第126図 図版109 852	砾石	流紋岩	4.0 6.4 4.9	200.0	方形形状の砥石で、表裏の他に2側面も滑面を有する。背面は敲打によって凹みができるおり、滑面は僅かに残る。	19	擾乱
第126図 図版109 853	砾石	砂岩	(7.5) 6.8 3.85	(240.2)	多角形状の砥石で、表裏の他に1側面も滑面を有し、線条痕も確認できる。側面には母岩の切り取り面も残る。	19	E-3 5層
第126図 図版109 854	砾石	頁岩	(6.4) (3.1) 1.1	(23.17)	札状の砥石で、表面をはじめ残る2側面にも滑面を有する。滑面には線条痕が残り、短軸側側面には溝状に残る。	19	擾乱
第126図 図版109 855	砾石	細粒砂岩 (ニーピ)	(21.6) (13.3) (7.4)	(2180.0)	表面に滑面をもち、側面には整形のための粗削が残る。大きさから固定砥石と思われる。	19	擾乱
第126図 図版109 856	石球	細粒砂岩 (ニーピ)	6.4 6.3 (2.5)	(129.01)	全周にあばた状の敲打痕が複っている。半分に割れているようにみえるが、大きな加壓痕がないことから破損によるものではないと思われる。	11	擾乱
第127図 図版110 857	七厘	凝灰岩 (鳥尻層?)	12.2 - 2.8	(460.0)	七厘片。激しい被熱によって全体的に脆くなっているほか、内面には直火による変色や炭化物が付着。858と同一個体の可能性。口径19.0cm。	11	擾乱
第127図 図版110 858	七厘	凝灰岩 (鳥尻層?)	12.4 - 2.8	(980.0)	七厘片で、接合によって約半分ほどに復元。激しい被熱によって全体的に脆くなっているほか、内面は直火によって変色して褐色を呈する。また部分的に炭化物が付着。口径19.0cm。	11	擾乱
第127図 図版110 859	七厘	久米島 グリーンタフ	- - 3.6	(460.0)	七厘の底部片。激しい被熱によって全体的に脆くなっているほか、直火の部分は変色して褐色を呈する。また部分的に炭化物が付着。	11	擾乱
第128図 図版111 860	勾欄の 羽目板	細粒砂岩 (ニーピ)	(16.2) (13.4) 7.0	(2080.0)	表裏とも難刻がなされ、丁寧に研磨されている。	11	擾乱
第128図 図版111 861	勾欄の 部材?	細粒砂岩 (ニーピ)	(19.8) 10.2 8.5	(3720.0)	表面と片側側面の側縁に彫刻が施され、明確に表と裏が意識されている。また表面部には3cm大の穴が残る。	11	擾乱
第128図 図版111 862	持送り石?	琉球 石灰岩	(17.0) (12.9) (10.9)	(1820.0)	平坦に切られた表面に懸垂文形に彫刻が施されている。また下面も弧状に切られ、表面下端にも彫刻がみられる。形状から持送り石と思われる。	19	擾乱



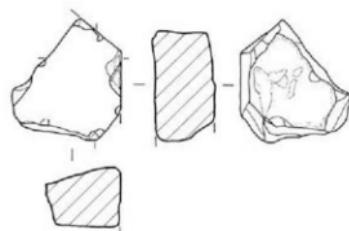
850



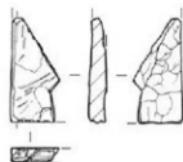
851



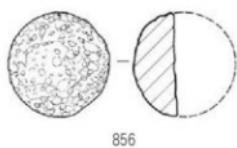
852



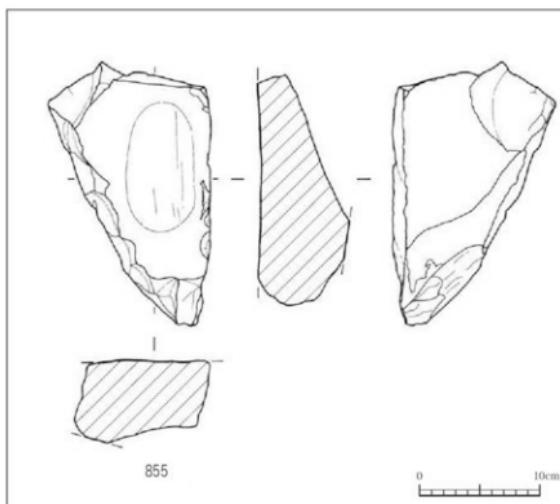
853



854



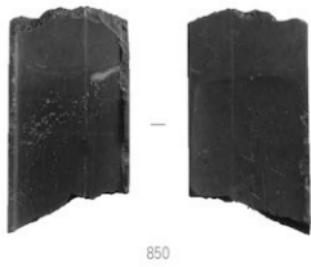
856



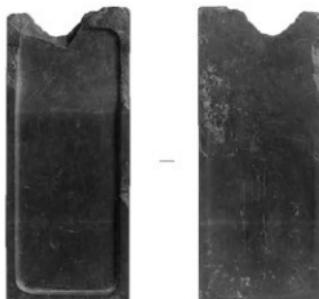
855



第126図 石製品1



850



851



852



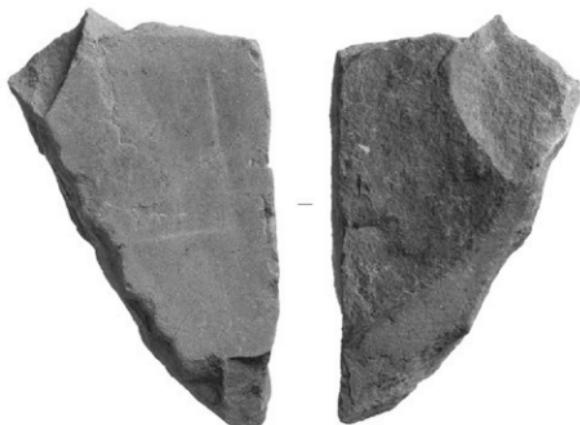
853



854

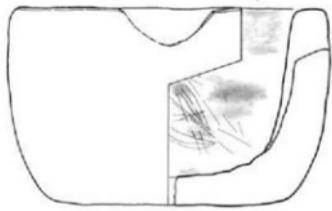


856



855

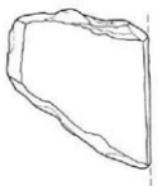
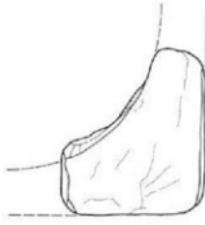
図版109 石製品1



857



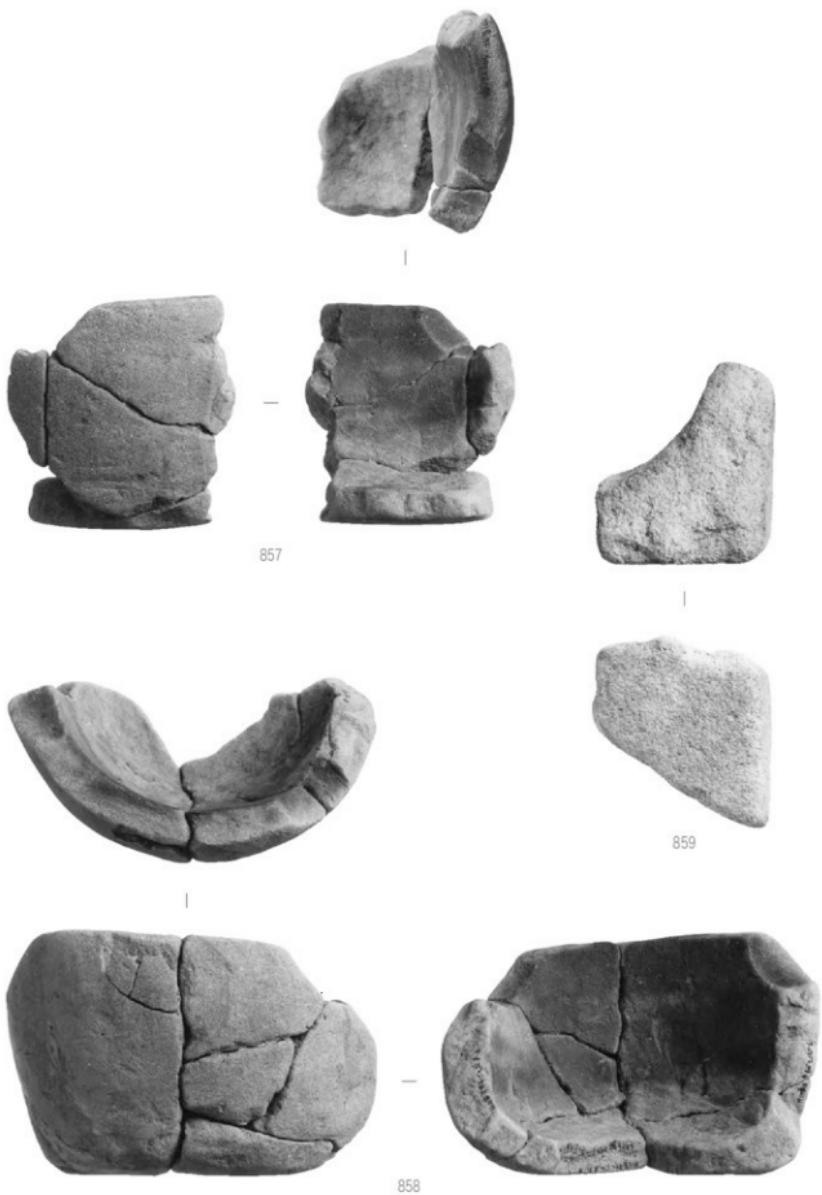
858



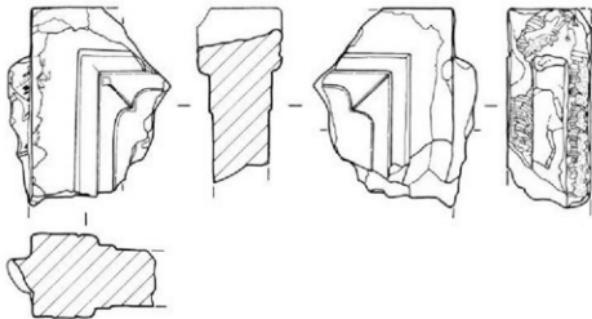
859



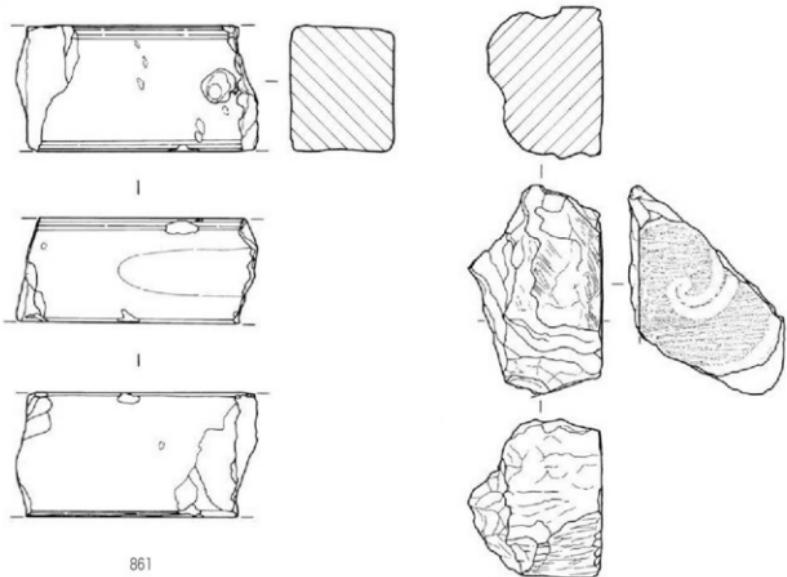
第127図 石製品2



図版110 石製品2



860

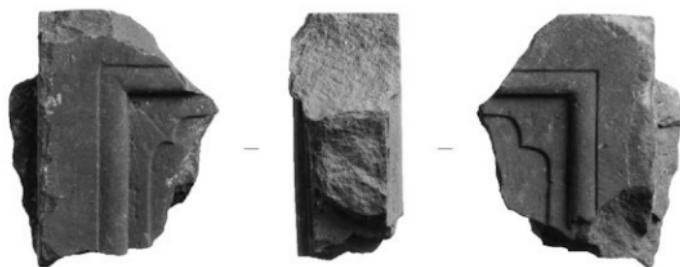


861

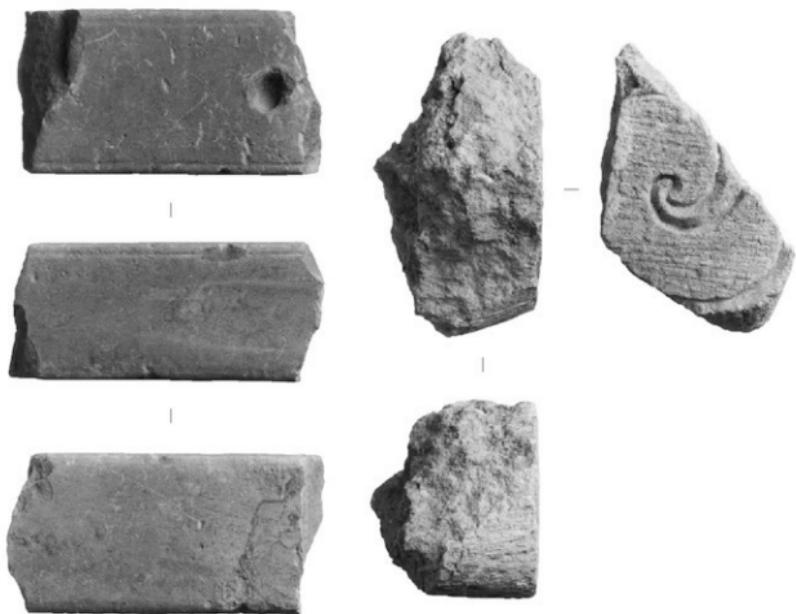
862



第128図 石造製品



860



861

862

図版111 石造製品

第22節 木製品

木製品は平成19(2007)年度に検出したシリ遺構内から出土している。遺構内からは、膨大な量の動物骨とともに糞石も出土している。これは第4章6でも報告したように、遺構上面が粘土層により蓋がされたことにより内容物がパックされ、これらの有機物が残存したことが考えられる。

製品は総数で57点が得られ、全て破損しており、全形を窺うことはできないが、板状になると思われる木材に、竹製と思われる釘が貫かれた形で残る。木材は竹釘の両端に残る資料も見られ、竹釘は複数の木材をつなぎ留める目的で打ち込まれたことが考えられる。図版112-864の資料は竹釘の残りが良好な資料で、そのサイズは長さ50mm、幅5~8mm、断面は角部が明瞭な正方形である。幅は両端で異なることから、太い部分が頭部になると思われる。色調は暗茶褐色を呈し、細部を観察すると、竹の繊維と思われる組織が縦位に走る状況が確認できる。

図版112-865は、全面に木材が付着した状態で得られた資料である。破損部位から竹釘が確認できる。竹釘のサイズは、長さ45mm、幅5×3mmの断面が扁平な形状を有する。

釘部の残りがいいのに対し、木材部分は残りが悪く、本来の加工面は腐食により確認できない。しかし、両資料とも竹釘が打ち込まれる角度に対し、横位に木材の繊維が確認でき、色調は茶褐色を呈する。出土した木製品の大半は、この部位に限られ、先述したように製品の原型を想定するには資料不足であるが、伝世する琉球漆器として15世紀頃の製品も現存しており、かつての首里城ではさかんに漆器や木製品・木器が利用されていたことは想像に難くない。

遺構からの出土遺物は多岐にわたるが、生活に密接な器物類や食物残滓が中心であることからすると、この木製品も何らかの生活用具であったことが考えられる。



図版112 木製品

第23節 屋瓦（第79～90表、第129～156図、図版113～137）

上原 靜（沖縄国際大学）

はじめに

屋瓦は御内原北地区から6,111点が出土した。これらはほとんど破片で後述の明朝系丸瓦に一部接合して全体の形をみたのみである。ただ、これらの破片に残された特徴から造瓦技術別に大別するとグスク時代の高麗系瓦、大和系瓦、近世以降の明朝系瓦、近世大和瓦の4種類になる。出土量は高麗系瓦が0.4%（26点）、大和系瓦が39.9%（2,440点）、明朝系瓦が59.6%（3,645点）となり、この地区における建物や造成の変遷を示している。以下に、種類別に内容を紹介する。なお個々の特徴については第82～90表の観察表に記載した。

A. 高麗系瓦

高麗系瓦は冒頭にも述べたように出土量は僅かで、種類も軒平瓦、丸瓦、平瓦の3種類と少なく、軒丸瓦やその他の種類は得られていない。

A-1. 軒平瓦：軒平瓦は全体の形を示すものではなく、僅かに瓦当部片の一部である（第132図866）。高麗系瓦の軒平瓦は瓦当形態が幅広長方形タイプと長方形タイプの2種類存在することが確認されているが、その後者の破片に相当する。瓦当の文様は蔓と蕾が描かれている。同範文様が浦添城跡にも出土している。

A-2. 丸瓦：玉縁を有する丸瓦で、高麗瓦特有の羽状打捺文様が凸面にみられる。全部で2点である。

A-3. 平瓦：平瓦片は23点出土している。平面形がほぼ長方形を呈し、凸面側の羽状打捺文様のみをみせる細片である。なお当該面に「癸酉年」文字銘などスタンプ刻銘部分を残す破片は含まれていない。

B. 大和系瓦

大和系瓦は高麗系瓦と異なり、造成遺構からまとめて得られた一括資料とそれ以外の堆積層から出土している。種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、雁振瓦、隅瓦の6種類で、明らかに建物で葺かれた構成で揃っている。

B-1. 軒丸瓦：軒丸瓦は6点得られるが、瓦当文は三巴文が1点認められるのみである。

B-2. 軒平瓦：軒平瓦は瓦当文様を中心に入分析すると、唐草文様の1種類を確認することができた。ただ全体を残すものがみられず、いずれも破損資料が多いことから、瓦当部と平瓦部分に分けて、集計を試みた。総数10点である。

B-3. 丸瓦：丸瓦の破片は429点を数え、代表的なものを図化した。丸瓦の特徴を明らかにするため色調、大きさ、凸面の文様、凹面の処理、個体数の視点から分類した。

a. 色調：色調は灰色と褐色の2種類に大別される。その比率は170対259である。破損資料が多くため、玉縁部、端部、筒部の三部分に分けた。個体数をみると端部角が総数42点で、1個体につき左右の角を1つとして、2で割ると、およそ21点の個体が推定される。

b. 大きさ：身の大きさの違いが認められ検討すると、玉縁の長さが小：4cm未満、中：4.1～5.0cm、

- 大:5.1cm以上の三種に分けてみた。また、端部凹面の面取りの長さも1~7cmまでの8段階に分けて観察した。
- c. 文様：丸瓦の凸面に認められる叩き文様の種類は、羽状文、縄目文、その他に分けられる。また、基本的には撫で消し作業が行われ、いずれも消えかかり不明としたものが多い。
 - d. 凹面痕跡：出土資料にみる圧痕はすべて刺網状の資料である。この網状の縦紐間の長さを測り、その状況を観察した。1.5cm以下のものから4.1cmのものの7段階に分けられる。
 - e. 端部処理：端部面取りは1cm以下から7.1cm以上の8段階に分けた。
 - f. 個体数：玉縁の数では74個体、端部角からの推算では21個体が推定される。

B-4. 平瓦：平瓦は1,782点の破片を確認した。器面は総て無文である。

- a. 色調：平瓦は色調が灰色と褐色を帯びるものがある。量的には881対901で、ほぼ同比率を示している。
- b. 大きさ：平面形はほぼ縦長の四角形で復元資料から横約29.4cmの大きさになる。また、平瓦はその厚みは差がみられ3種類に分類される。
- c. 厚み：平瓦の大きさに反映していると推定され、3種類に分類した。基準は次の薄手:1.1~1.4cm、中手:1.5~2.5cm、厚手:2.1~2.5cmである。
- d. 側面：側面の形態的な違いがあり、a~dの4種類に分類した(第79表)。
- e. 端部処理：端部にもその面取りの長さの違いがあり、1cm以下から7.1cm以上の間に8段階に分けられた。個体数をみると角のみを集計すると総数246点で、完全形に4個体の角があることから、4で割った結果61点の個体数が推定される。
- f. 文様：平瓦は基本的には撫で整形が全体になされているが、わずかに叩き文様がみられる。文様は第136図896に示したX状の叩き痕である。
- g. 個体数：端部角からの推算では61個体が推定される。

第79表 大和系平瓦側面部の種類と説明

形態 記号	分類説明	説明
↗ a	側面のナデ整形時に余りの粘土を凹面側に押し上げたもの。	
↗ b	側面が二面の様になるもの。下面側に削り取り痕が残されている。	
↗ c	側面の全ての角がナデ調整され、スムーズな曲面をなすもの。	
↗ d	側面のコーナーが削りのままに近い接をつくるもの。	

B-5. 雁振瓦：雁振瓦はその大きさと形態

から2種類に分けられる(第129図)。I型(小形)は丸瓦部が小さく、その両側に平坦な平瓦が付く形の瓦である。総点数は200点である。第137・138図では代表的なものを図化した。II型(大形)は丸瓦部が大きく、また、両側に付く平瓦は大きく湾曲した造形の瓦で、13点得られた。凸面の文様は羽状叩き文である。裏面の整形も特徴的でI型とはその造形方法では異なり、形式的な推移を想定される。



I型



II型

第129図 雁振瓦の分類

B-6. 役瓦：わずか一例であるが玉縁状の破片である。ただし、その整形や破損面から丸瓦ではなく、瓦当部の一部に付いていた可能性もある。今後の追加資料がまたれる（第138図912）。

C. 明朝系瓦

明朝系瓦に属する種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、役瓦の5種が得られた。軒丸、軒平両瓦の分類基準として上原（註）を参照した。

C-1. 軒丸瓦

色調別には灰色系瓦と赤色系瓦に区分できる。文様は以下の3種類に大別される。草花文側視1型、側視2型、正視型である。さらに、側視花文1型は文様の系統によりA、B群に細分される。側視2型は4種類、正視型は1種類になる。色調と文様との関係をみると、灰色系瓦は牡丹文様と菊文様があり、草花文側視1型A群、B群、草花文正視型に分類され他方、赤色系瓦も牡丹文様系に限定され、草花文側視1型B群、草花文側視2型に細分される。

以下、それぞれ細分した瓦の状況について紹介を進める。

A群は7種類、B群は10種、側視2型は4種に、正視型は1種に分け、都合22種になる。

草花文側視1型	A群	オウチIAa01(913) オウチIAb01(915) オウチIAc01(916) オウチIAd01(918) オウチIAe01(919)
	B群	オウチIBa01(920) オウチIBb01(922) オウチIBc01(925) オウチIBd01(926) オウチIBe01(927) オウチIBa02(921) オウチIBb02(923) オウチIBb03(924) オウチIBe02(928) オウチIBe03(931)
草花文正視型		オウチIA01(937・938)
草花文側視2型		オウチIa(932) オウチIIa(933) オウチIIIa(934) オウチIIIb(936)

C-2. 軒平瓦

文様は牡丹とその他の花の2種類から構成されている。軒丸瓦と同様に色調で灰色系瓦と赤色系瓦に分類される。瓦当文様は側視1型と側視2型がある。前者はA群、B群、C群の3種に、後者はA群、B群の2種に分けられる。色調との関係では草花文側視1型A～C群に灰色瓦が集中し、同1型のC群の一部を草花文側視2型に赤色瓦が偏在する。

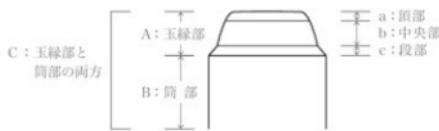
草花文側視1型		A群 オウチⅠA1 (939) オウチⅠA2 (940)
		B群 オウチⅡ1 (941) C群 オウチⅢA01 (942)
		オウチⅢB a 1 (943) オウチⅢB b 1 (944) オウチⅢB c 1 (945) オウチⅢB c 2 (946) オウチⅢB d 1 (947) オウチⅢB d 2 (948) オウチⅢB e 1 (950)
草花文側視2型		オウチⅠA1 (952) オウチⅡA1 (953)

C-3. 丸瓦

- a. 個体数：出土瓦は破片化していることから、部位別に分類し、それぞれ特徴を明らかにした。部位別に玉縁部629点、端部281点、筒部240点の3種類に分ける。
- b. 大きさ：玉縁部はその形態、大きさ、整形で細分を実施した。玉縁の長さの基本的な大きさは、指本数と添える指の形に関係するものと思われる。以下の3タイプに分けることができる。短いタイプ=4.0cm未満、中タイプ=4.0～5.0cm、長いタイプ=5.0cm以上である。平面的な形態と断面に特徴があり、玉縁の頂部をやや面を成すもの、なさず斜面をとるものと長さは共通するが、形状に差があり、長短とグループ分けが難しいものも認められる。
- c. 端部整形：端部は面取りの有無で大別し、面取りの有るものはその幅の長さで6種類に細分し観察した。1cm未満、1～2cm未満、2～3cm未満、3～4cm未満、4～5cm未満、5～6cm未満である。
- d. 面取り：面取りの現状は、4～5cm未満、5～6cm未満のものは殆どみられない。幅のある面取りは概して浅くなされている。他方、1cm未満、1～2cm未満のものは急傾斜で深くなるものも認められる。面取りされないタイプも概して多くみられる。そして、その端部側は面取りがなされないものの、布などで1～2cm未満に押し広げられ、やや広めになっている。面取りが浅く、弱くしたものが認められ、その多くが幅広にされ、一見すると施されていないように見られる。
- e. 付着物の状況：漆喰、セメントの使用が顕著である。漆喰は白黄色を呈し、セメントの色は暗灰色で色調からも区別される。セメントは漆喰の上に重ねた状態になるもので、その後の補修と解せる。マンガンが塗布された丸瓦も絶対的に少ないものの存在する。マンガンの塗布される範囲は凸面側全体である。ただし、玉縁の上面は行われない。

ヘラ書き印について

粘土成形時に鎌や金属のヘラで、手書きした印である。丸瓦の玉縁部分、玉縁と筒部の境にある段部、さらに筒部側の3カ所に記す例が認められる(第130図)。この組み合わせでバリエーションを広げ、機能していたものとみられる。印はヘラによる線描で、点、横線、縱線、斜線、交差線、曲線などがある。これらはさらに線の数や形状により細分されるが、いずれにしても丸瓦の上半部(玉縁側)に多く施文する。便宜上、玉縁側に施すものをA群、筒部側に記すものB群、両側に記すものC群とする。A群14種類、B群7種類、C群1種類で、計22種類となった(第131図)。記号の形状について第80表と、詳細は第81表に示す。



第130図 ヘラ描き印の位置

第80表 丸瓦のヘラ描の種類と説明

形態 記号	分類説明			説 明	刻印位置	形態 記号	分類説明			説 明	刻印位置
	点	1点	丶				B	斜線	3本線	III	
横線	1本線	—	水平方向の線描	Ab	Ac			×	二本線をバツ状に交差した線描	Ab	B
縦線	1本線		垂直方向の線描			B		×	二本線を交差した線刻で、先の「x」形と異なり、左側に大きく傾く線描		B
	3本線	III	垂直方向の平行する三本線の線描	Ab				△	△形に二本線の一部が交差した線描		B
斜線	1本線	＼	左上から右下方への斜め線描	Ab	B			ヰ	やや垂直方向の一本線にやや水平方向の一本線が交差した線描	Ab	
	2本線	/	右上から左下方への斜め線描	Ab				ヰ	右上から左下方向への斜め線の二本線に対して、一本線を交差した線描		B
	1本線	＼＼	左上から右下方への斜め線の二本線描	Ab	B			ヰヰ	垂直方向の三本線に対してやや水平方向の一本線が交差する線描	Ab	
	2本線	／＼	右上から左下方への斜め線の二本線	Ab	B	曲線	2本線	()	水平方向の二本線であるが、下方線が長く弧状の線描	Ab	

第81表 丸瓦の色調とヘラ描

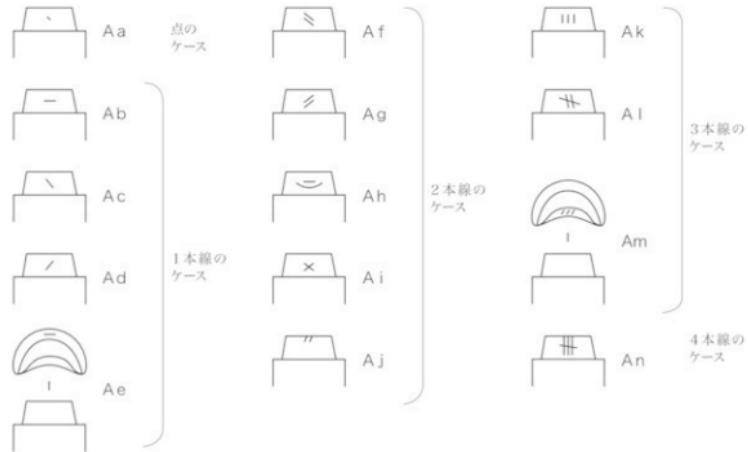
色調	位置	分類			点			横線			縦線			斜線			交差線			曲線			判別不可	計		
		点	横線	縦線	1点	1本	1本	3本	1本	2本	3本	2本	3本	4本	2本	2本	3本	4本	2本	1	曲線	2本	1			
灰色瓦	A	a																							0	
	A	b	1																					14		
	A	c																							0	
	A群不明																							7	7	
	B								1															3		
	B群不明																							5	5	
	計	0	1	0	0	5	1	2	3	0	4	0	1	0	0	0	0	0	0	12	29					
	A	a																							1	
	A	b	2		1	1			2		1										1	2		10		
	A	c	1																					1		
褐色瓦	A群不明																							3	3	
	B																							2		
	B群不明																							1	1	
	C(Ab+B)				1																			1		
	計	0	3	0	1	1	0	2	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	1	2	4	19				
	A	a	0																					0		
	A	b	2	5				6	2	6	2	1								1		25				
	A	c	2																					2		
	A群不明																							7	7	
	B																							16		
赤色瓦	B群不明																							3	3	
	計	2	7	0	0	6	2	15	8	0	1	0	0	1	1	0	0	0	1	1	0	0	10	53		
	A	a	0																					0		
	A	b	2	5				6	2	6	2	1								1		25				
	A	c	2																					2		
	A群不明																							7	7	
	B																							16		
	B群不明																							3	3	
	計	2	7	0	0	6	2	15	8	0	1	0	0	1	1	0	0	0	1	1	0	0	10	53		
	A	a	0																					0		
赤褐色瓦	A	b	0																					0		
	A	c	0																					0		
	A群不明																							0		
	B																							0		
	B群不明																							1	1	
	計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
	合 計	2	11	0	1	12	3	19	11	1	6	2	1	1	1	1	2	27	102							

※1個体にA bは横線、Bに縦線の2種類のヘラ描あり。

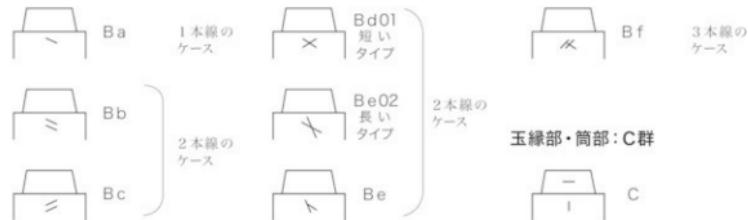
この記号の特徴として、①ヘラ描は粘土が生乾きの時に行われている。②ヘラ描きの部位は屋根葺き時には基本的に見えない部分になる。つまり、瓦同士が重なり合う所や漆喰で塗り込められる所にある。基本的には外部には露出しない。③明朝系瓦の特徴で、赤色瓦に54点、灰色瓦に48点みられる。いずれも漆喰の付着がある。

これらは状況から推して、製作段階に機能していたことが分かり、屋根葺き時には役割を終していることを示すものであろう。この生産段階における意図に関しては少なくとも工人の作業分担や、それに関わる製作量などの帰属に関する印、封印、認証・検定印などの意図が推定される。分配など違いを示すなど、今後製作地やその他の消費地の比較からより真相に迫れるものとみられる。

玉縁部・A群



筒部・B群



玉縁部・筒部・C群



第131図 明朝系丸瓦（印あり分類表）

C-4. 平瓦

- a. 大きさ：凹面に撫でを施す平瓦で、赤色瓦に限定されるが、凹面に縦位方向の撫でが行われている。ただし、大和瓦の様な光沢があり、全面に徹底するものではない。方向は広端から狭端側方向に幅約3cmの道具で撫で、布目が消えている。この瓦のもう一つの特徴としてマンガン釉が使われている。
- b. 付着物の状況：マンガン釉の塗布される平瓦は、その殆どが狭端側の半分にみられる。大形の箇で内面と外面に施す。そのため内外面のレベルの差がわずかにみられる。この狭端側の凹面両側には丸瓦の載った跡である漆喰の付着があり、マンガンの範囲が、丁度中空にさらされている範囲と重なる。マンガンの施されない平瓦においても、漆喰は狭端側の両側に残る。重ねが正殿の場合には二枚重ねである。
- c. 整形：凸面の撫での特徴。赤色瓦では狭端側の撫では概して強く撫でるものと、極めて弱くなされるものがある。あるケースは指が2本程度である。一方、灰色瓦の場合は指撫での強いものはきわめて少ない。広端面側は赤色瓦の場合は指が3本程度の強い横撫でがなされ、3条の凹線が走る。灰色瓦の場合に行われ、道具により、同様の幅で一定の幅広の断面がみられる。
- d. 整形痕：広端側の凸面にはとくに赤色瓦の場合、指3本の撫で溝が横走している。それが灰色瓦になると、道具の様な幅の広い帯状に凹みとして横走する。
- e. その他：平瓦の凸面側に整形時の規則的な擦痕（ヒッカキ痕）や意図的な線描が行われている。また、マンガンの施釉時に筆書きしたものが認められる。

C-5. 役瓦

雲形など漆喰の付着した製品、大形丸瓦、特殊な丸瓦などからなる。ことに前者の漆喰に貼り付けて使用するものは手造ね整形である。

- a. 雲形：製品はその大きさにより小形、中形、大形の3種類に分類される。得られた量は小形が2点で、渦巻きの数は不明であり、焼成別には赤色が占める。中形は5点、破損が著しいため巻きの数は確定することができない。赤色が2点、灰色が1点。大形は6点確認された。他は不明。色調は灰色が1点、赤色5点ずつ及び、その他不明破片からなる。

造形は總て手づくねであり、細かい凸状の襞を作りながら描いている。しかし、その造形を反転した凹状の線で描く製品もみられる。試みに粘土をもって写しとると、明らかに凸状襞になるもので、昭和初期の修理時に応急処置として、現存製品をかたどって製作したものとみられるもので、当然ながら1932（昭和7）年時の製品として断定されるものである。

当製品の利用は大棟や降り棟の側面部分に貼り付けられたもので、その使用を窺わせるように裏面及び側面の半分までが漆喰の付着痕を留めている。

- b. 花形ほか：牡丹の花、茎、葉か龍の角などをデザイン化したものである。3種類を確認することができる。いずれも褐色系と灰色系からなる。

量的には僅かではあるが、明らかに瓦質に造形された粘土製品である。
これら製品も雲形製品同様に裏面や側面の半分以上が漆喰の付着痕を留め、壁状の部分に張り込めたものであることが理解される。

小 結

当該地区からは製作時期、技術の異なる3種類の屋瓦が得られた。グスク時代に属する高麗・大和系両瓦のなかで、とりわけ大和系瓦は種類が豊富で、14世紀後半から15世紀前半にあたるE-4グリッド第5層からほぼまとまって得られたのは特筆すべき成果であろう。これまでにも城内において同様の数値のデータが得られていたが、ここにおいてほぼ城内における大和系瓦の終焉年代が押さえられたものと考えられる。続いて、琉球王府時代の明朝系瓦は灰色瓦と赤色瓦が出土したが、灰色瓦が17世紀前半のシーリ遺構内から出土している点である。これも当該瓦の廃棄年代を示す指標になるものであると同時に首里城における使用年代を示すメルクマールになろう。また、後続する赤色瓦は18世紀頃の搅乱とされる第2層や瓦の出土しない17世紀前半から18世紀初頭の遺構からみて、赤色瓦の初期段階のものもみられ、さらに20世紀まで連続していることが分かった。明朝系瓦にマンガンを施釉する時期について正確な年代をおさえるまでには至っていないが、軒瓦や丸瓦の製作技術、セメント塗布状況から少なくとも近世後半の後葉段階にあることが判断できた。

註) 上原靜 2008「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」『総合学術研究紀要』第11巻第2号

第82表 屋瓦観察一覧1

図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第132図 図版113 866	高 麗 系	軒平瓦	瓦当	褐色系	幅広瓦当型。板状の破片で、瓦当面の右上方へ蔓と葉の文様が描かれている。また、同文様とともに輪郭としての柔軟性が~5本脚型にみられ、素材が木板であった可能性がある。瓦当面は丁寧な彫りがなされ。また、側面には漆喰の付着が認められ、使用方法の一端が窺える。瓦当面の厚み約2cm。	11	搅乱
第132図 図版113 867		平瓦	側面部	褐色系	平瓦片。凸面には羽状打捺文様があり、凹面には系切痕と布目痕が認められる。側面は彫りで形態があり、恐らく軒平瓦の平瓦部をなしていたものとみられる。厚み約2.1cm。器面は褐色を呈するが、胎土中央は赤色を呈する。	19	搅乱
第132図 図版113 868	瓦	平瓦	側面部	灰色系	平瓦の破片。凸面には羽状打捺文様が鮮明に残る。文様の打捺具の重なりは大きく、羽状文様も太い。凹面には系切り痕以外に細い扭筋痕が一筋認められる。側面は分離面になる。厚み約2.4cm。	19	E-4 5層
第132図 図版113 869		平瓦	筒部	灰色系	筒部破片。凸面には羽状打捺文様が鮮明に残る。角なし。胎土中央は灰色を帯びる。比較的薄手で厚み約2.0cm。	11	搅乱
第132図 図版113 870	大 和 系	平瓦	端部	褐色系	端部破片。凸面には羽状打捺文様が鮮明で、打捺具の重なりが認められる。端部の凹面側は幅約3cmの曲面取りがみられる。表面は赤色であるが、胎土中央は灰色を帯びる。厚み約1.6cm。	19	E-4 5層
第132図 図版113 871		軒丸瓦	瓦当	灰色系	瓦当部の細片。残された瓦当面に僅かに瓦文の一部を認める。瓦当面には白砂が付着。また、中央の凸面には系切り痕も残る。瓦当裏は当初の器面は残らず剥離している。	19	搅乱
第132図 図版113 872	瓦	軒丸瓦	瓦当	褐色系	瓦当裏の器部だけの破片である。頸の深さは約4cm。器面の指撫は良好。破片面に集中して白砂がみられる。器面は褐色をおびるが破損部の素地は灰色を呈する。	19	E-4 5層
第132図 図版113 873		軒丸瓦	瓦当	褐色系	前記872と同じく瓦当面がはずれた裏の器部のみの資料。器面整形の指撫は良好。端部に切り込みのためヘラ削りも認められる。	19	搅乱
第132図 図版113 874	大	軒平瓦	瓦当	灰色系	軒平瓦の瓦当部破片で、左側の瓦当面とその角である。中心部は一部破損しているが5枚の花弁をもつ花文で、左右の縁は既報からみると左側へ5割を数える資料に相当する。頭は貼り付けで、頸裏は巻筋の方向に幅の短いヘラ彫でを行っている。	19	C-3 野面石積み 南側梁石
第132図 図版113 875	和 系	軒平瓦	瓦当	褐色系	前資料874と同じタイプの文様で、中心飾りが5枚の花弁を有する花である。両側は破損しているため唐草文様の範囲は不明。瓦当面には多数の細かい白砂が付着する。平瓦に頭を貼り付けた技術である。頸の裏はヘラによる彫撫である。	19	E-4 5層
第132図 図版113 876	瓦	軒平瓦	瓦当	灰色系	軒平瓦の瓦当部破片である。瓦当文様の唐草花が蔓が立体的表面で、断面形が三角状に実る。頸の粘土厚みは約3cmで、接合部分から脱落している。剥離部分には接合時のX状の縫き針が残る。	19	E-4 5層
第133図 図版114 877	丸 瓦	玉縁部	褐色系	端部側は大きくなり丸瓦製品。凸面には羽状文があり、左から右方向に押しつけたことが復元できる。玉縁裏は前取りになされている。凹面には刺し網状の扭筋痕があり、縦5cm、横4cmの形状がみられる。玉縁長さ4.9cm、凹面部幅約13.8cm。	19	C-3 野面石積み 南側梁石	
第133図 図版114 878		玉縁部	褐色系	玉縁部の上端の資料である。玉縁の長さ約4cm、凸面には側でが行なわれているが羽状の打捺文が認められる。玉縁部の角1欠け。凹面には刺し網状の扭筋痕があり、縦4.5cm、横5cmを計測する。凹面部幅13.8cm。	19	E-4 5層	
第133図 図版114 879	大 和 系	玉縁部	褐色系	上記877、878と同じ欠落製品である。玉縁の端部破損のため長さは不明。凸面は側でが行なわれているが、側に羽状文の押しつけがみられる。玉縁部の角は内彌欠ける。凹面には刺し網状の扭筋痕があり、縦3.5cm、横4cmを計測する。凹面部幅約13.8cm。	19	E-4 5層	
第133図 図版114 880		玉縁部	灰色系	玉縁側の破片。打捺文様の羽状文は太く、鮮明である。玉縁頂部は平坦である。刺し網状の扭筋痕はあるが、その大きさは破片のため計測不能。凹面部幅13.5cm。	19	E-4 5層	
第133図 図版114 881	丸瓦	玉縁部	褐色系	玉縁側の破片。ただ、玉縁そのものは欠落している。器厚は約1.5cmと薄手。凸面の側面は鮮明。凹面には刺し網状の扭筋痕があり、縦4~4.5cm、横4.5cmを計測する。	19	E-4 5層	
第133図 図版114 882	丸瓦	筒部	灰色系	筒部の凸面に羽状文がみられる。凹面には刺し網状の扭筋痕があり、縦4~4.5cm、横4.5cmを計測する。器厚約2cmである。	19	E-4 5層	

第83表 屋瓦観察一覧2

図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第134図 図版115 883	丸瓦 大和系瓦	丸瓦	筒部	灰色系	丸瓦の筒部片。凸面の表面は無で消しがされているが、羽状文と重郭文が認められる。重郭文を構成する縦の数は6本である。凹面には剥し網状圧痕があり、縦3.5cm、横4cmを計測する。器壁約1.7cmである。	19	E-4 5層
第134図 図版115 884		丸瓦	筒部	褐色系	筒部側片。西面には重郭文あり、郭の数は5本を数える。凹面には剥し網状圧痕があり、縦4cm、横3.5~4cmを計測する。器壁の厚み約2cm。	19	E-4 5層
第134図 図版115 885		丸瓦	筒部	褐色系	筒部破片。凸面には重郭文あり、郭の数は7本になる。凹面には剥し網状圧痕がみられるが、縦片のため計測不可能。器壁厚み1.5cmである。	19	E-4 5層
第134図 図版115 886		丸瓦	筒部	褐色系	筒部破片で、凸面は撫でが丁寧になれき。叩き文様はみられないが、さらに深い円文様が縦断りで表現される。凹面には剥し網状圧痕があり、縦4cm、横4.5~5cmを計測する。器壁厚み1.5cm。	19	E-4 5層
第134図 図版115 887		丸瓦	端部	褐色系	玉緑割をいたる端部の大形片。端部側に羽状文が鮮明、筒部中央付近はナデで強く消しているが重郭文がみられる。郭の縦数(5本)になる。端部の面取り幅は6cm。凹面には剥し網状圧痕があり、縦5cm、横4cmを計測する。	19	E-4 5層
第134図 図版115 888		丸瓦	端部	褐色系	端部破片。凸面の羽状文は鮮明、端部に角あり。凹面には剥し網状圧痕がみられる。端部面取り幅6cm。	19	E-4 5層
第135図 図版116 889	丸瓦	端部	褐色系	端部資料で、丸瓦幅約15.5cmを計測する。凸面には羽状文あり。凹面の剥し網状圧痕は縦3.5cm、横5cmを計測する。面取り幅8.5cmと長い。器壁約3cm。	19	E-4 5層	
第135図 図版116 890	丸瓦	端部	褐色系	凸面に開口目を施す筒部破片。角なし。器壁約2cm。凹面には剥し網状圧痕があり、縦4.5cmを計測する。端部面取り幅6.5cmである。	19	E-4 5層	
第135図 図版116 891	平瓦	側面部	灰色系	平瓦破片。側面は面取りがなされ、形態的にはaタイプに分類される。表面裏ともに無文である。器壁約1.6cmである。	19	D-4 5層	
第135図 図版116 892	平瓦	側面部	褐色系	平瓦の大形破片。側面はbタイプ。平瓦の凸面には大量の白砂が付着。厚み約2.4cmと厚手。表面には糸切り痕のみで文様はみられない。側面は面取りがなされるが半分のみになり、棊縁が残る。	19	C-3 野面石積み 南側栗石	
第135図 図版116 893	平瓦	側面部	褐色系	平瓦の筒部片で、ヘラ取りされた側面が認められる。形態は側面cタイプである。無文。胎土中央は灰色を呈する。厚み約2.0cm。	19	E-4 5層	
第135図 図版116 894	平瓦	側面部	褐色系	平瓦の筒部破片。成形した側面を残す。側面dタイプである。凸面に白砂付着。胎土中央は灰色。厚み約1.8cmである。	19	E-4 5層	
第136図 図版117 895	特殊・平瓦	—	褐色系	側面のみの平瓦細片。側面形態は2面になり側面分類でbタイプに該当する。厚み約2.0cmである。	19	E-4 5層	
第136図 図版117 896	特殊・平瓦	側面部	褐色系	平瓦の側面のある細片。側面形態は垂直面で、側面dタイプ。×状の叩き文様が認められる。厚み約2.2cmである。	19	C-3 野面石積み 南側栗石	
第136図 図版117 897	特殊・平瓦	側面部	褐色系	側面の細片。叩きによる強弱によるのか、平面には側面側に併行した段差が残る。厚み約2.6cm、平瓦の中央部で2.3cmを計る。	19	C-3 野面石積み 南側栗石	
第136図 図版117 898	特殊・平瓦	側面部	褐色系	垂直になる側面破片。形態は側面dタイプ。僅かながら布痕が確認される。厚み約2.0cm。	19	E-4 5層	
第136図 図版117 899	平瓦	端部	灰色系	比較的大きな端部破片で、角も認められる。表面には白砂がみられる。凹面端部には幅約3.5cmの面取りがなされている。厚み約1.7cm。	19	E-4 5層	

第84表 屋瓦観察一覧3

図 国版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態の特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第136図 国版117 900	大和系 瓦	平瓦	端部	褐色系	大きめの端部破片で角も存在する。端部面取り幅2.6cm。全体に白砂が付着する。厚み約1.6cmである。	19	E-4 5層
第136図 国版117 901		平瓦	端部	褐色系	平瓦の端部で角を残す。削りはなし。ただし、平面部分は当初の系切り痕が斜めに走っているが、この端部側のみ幅1.5cmの横擦でをしている。表面は赤色を帯びるが胎土は黒色とする。器面には白砂が付着する。厚み約1.8cm。	19	E-4 5層
第136図 国版117 902	特殊・平瓦	端部	灰色系	平瓦の背面細片、釘穴が四面側から凸面側に穿たれる。口幅約1.3cm、器厚約1.9cm。器面に白砂付着、特殊瓦	19	C-3 野面石積み 南側栗石	
第137図 国版118 903	大和系 瓦	特殊・平瓦	端部	灰色系	平瓦の側面破片で角も有する。厚み約が3.2cmと厚い。側面は2面をみせる。表面に白砂が大量に付着。	19	擾乱
第137図 国版118 904	特殊・平瓦	側面部	灰色系	極めて薄手の平瓦破片。厚み約1.8cm。表面には白砂が付着。	19	E-2 5層	
第137図 国版118 905	特殊・平瓦	端部	灰色系	上記904と類似する極めて薄手の平瓦破片で角を残す。厚み約1.8cm。器面には白砂が付着している。	19	E-4 5層	
第137図 国版118 906	雁振瓦	平瓦部、 端部	灰色系	平瓦部分で端部角が残る。型的にはI型。平面に無文の叩きを使用した事が認められる。器の表面には白砂が多くみられる。厚み約1.7cm。	19	擾乱	
第137図 国版118 907	雁振瓦	平瓦部	灰色系	平瓦部分の破片である。凸面側に僅かに文様の一部で単線が併行して三条確認できる。側面は重直になる。厚み1.6cm。	19	B-5 シーリ内木炭屑	
第137図 国版118 908	雁振瓦	丸瓦部、 端部	灰色系	丸瓦部分が大きく占める破片で、端部を残している。端部は瓦当面的に幅約6.4cmの縁をつくる。型的にはII型。凸面側には太目の羽状文が確認される。凹面側には布目模と紙方向の強い撗で痕が観察できる。厚み約2.7cm。	19	E-4 5層	
第137図 国版118 909	雁振瓦	平瓦部、 端部	褐色系	平瓦部分の破片で、端部に角を残す。この型式では平瓦部の凸曲が小さく、この型式にもバターンが存在することを示唆する資料である。II型。凸面には羽状文がみられる。厚み約2.0cm。	19	E-4 5層	
第138図 国版119 910	雁振瓦	平瓦部～ 丸瓦部、 端部	褐色系	丸瓦部と平瓦部のみられる端部側の資料である。型式はII型。凸面には羽状文が残る。凹面の丸瓦端部には幅約8cmの削りがなされている。厚み約2.4cm。	19	C-3 野面石積み 南側栗石	
第138図 国版119 911	雁振瓦	平瓦部～ 丸瓦部、 端部	褐色系	上記910と同じ丸瓦部と平瓦部の接合部分の破片である。凸面にはこれまで確認されていない羽状文と重雲文の組み合わせ文になる。厚み約2.8cm。	19	C-2 野面石積み 南側栗石	
第138図 国版119 912	役瓦 (特殊)	瓦当	灰色系	厚み約0.9cmを呈する筒形の板状破片で、鳥被瓦の瓦当縁の一部のようであるが、崎山御獄出土例とは異なり、正確には種を特定できない。筒状になるとその幅は約5.9cmである。	19	E-4 5層	
第139図 国版120 913	軒丸瓦	オウチI Aa01	褐色	瓦当は半分欠落した製品。器面は風化する。瓦当文様は牡丹文様で、文様の彫りが浅いためぼんやりとした印象である。瓦当面と丸瓦との接合角度は重直。粘土パリが外周でみられる。瓦当径は約15cmをわかる。	19	B-1 石積み6 西側上層	
第139図 国版120 914	軒丸瓦	オウチI Aa02	灰色	瓦当の残り良い資料である。瓦当径約15cm。花文様の彫りは浅いが、複雑な文様を表現し、珠又も細かく多くみられる。瓦当と丸瓦との接合角度は100度である。瓦当縁の整形はナデがなされ、よくに同心円的な調整がみられる。丸面や丸瓦凸面に漆喰が付着する。	11	擾乱	
第139図 国版120 915	軒丸瓦	オウチI Ab01	灰色	瓦当径約17cmとやや大きめの資料である。一部欠落。瓦当裏のナデは外周は回転などで、また、中央部には指跡も残る。縁の緑は厚みがあり、平面をなす。	11	擾乱	
第139図 国版120 916	軒丸瓦	オウチI Ac01	灰色	瓦当のみの破片があるが、瓦当中の剥離し文様の花文が欠落した状態になる。瓦当裏には日本のかげ縫合位に残る。瓦当面は焼けた様に黒い。	11	擾乱	
第139図 国版120 917	軒丸瓦	オウチI Ac02	灰色	瓦当の残りが良い資料。瓦当周辺に粘土パリが認められる。瓦当径約14cm。瓦当と丸瓦との接合角度は重直。瓦当裏は施による凹凸がみられ、外周に向かいおちついた縁でなる。頭部の縁は平坦になる。丸瓦部には漆喰が大量にみられる。	11	擾乱	

第85表 屋瓦観察一覧4

図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態の特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第139図 図版120 918	明 朝	軒丸瓦	オウチI Ad01	灰色	はじめ当初の瓦当面を残す資料で、中央から上下面にわずかな折り曲げがみられる。簡略化した模様表現の牡丹文様で、器物の風化のため、鮮明でない。瓦当径約14cm。裏は四凸面になり施でがきなされている。頭部分は厚く、同心円的な施でをおこなう。	11	搅乱
第139図 図版120 919		軒丸瓦	オウチI Ae01	灰色	確かに瓦当部の残る資料。丸の耳状に花弁が上に向いた一部が認められるが、数少ないタイプの文様である。細部ながら取り上げた理由がある。瓦当外周に粘土パリがあり、それを漬した作業がみられる。	11	搅乱
第139図 図版120 920		軒丸瓦	オウチI Ba01(灰)	灰色	頭部分以外は全体に外縁まで剥離した瓦当製品である。文様は鮮明。瓦当裏には施での作業時につけた指3本の痕跡が鮮明に残る。頭部の線は細くなる。	11	搅乱
第139図 図版120 921	系 瓦	軒丸瓦	オウチI Ba02(褐)	褐色	丸瓦部から剥離した瓦当資料である。文様は彫りが浅く不鮮明。裏面に文字ともつかない「下」の墨の印あり。裏のナデは粗く、紙位の指跡が3~4本残る。頭の線は極端に細くなる。	11	搅乱
第139図 図版120 922		軒丸瓦	オウチI Bb01	灰色	瓦当上半の線がぼけられた資料である。丸瓦がそのままされた形を残している。瓦当径約14cm。文様は鮮明である。瓦当裏は不鮮明ながらも縦の指撫で痕が残り、四凸面となる。厚み約3.8cmである。	11	搅乱
第139図 図版120 923		軒丸瓦	オウチI Bb02	灰色	瓦当面の完全形の資料。瓦当径約14cm。文様全体の様子も認識されるが、中央の花芯が剥離している。瓦当面と丸瓦との接合角度は100度である。瓦当裏は撫で整形で、3枚の縦位置の指跡が残る。瓦当断面はレンズ形。頭の線は薄くなる。	11	搅乱
第139図 図版120 924	明 朝	軒丸瓦	オウチI Bb03	灰色	一部に欠落部分があるが、ほぼ全体を知ることができる製品。瓦当径約14.5cm。瓦当断面は凸レンズ形。頭部分は薄くなる。瓦当裏は撫でがなされ。紙位の指痕が残る。また、煤状に真っ黒である。	11	搅乱
第140図 図版121 925		軒丸瓦	オウチI Bc01	灰色	瓦当裏は丸瓦部分が欠落しているため残らない製品である。全体に文様の輪郭があまくぼんやりした印象がある。瓦当径約14cm。瓦当裏のナデは粗く残り、紙位での作業が認識される。断面は凸レンズ形になる。	11	搅乱
第140図 図版121 926		軒丸瓦	オウチI Bd01	灰色	瓦当部の断片である。模様に新しいタイプであることから掲載している。裏面に漆喰の付着あり。瓦当裏の施では頭著に残る。裏面は風化が進んでいる。	11	搅乱
第140図 図版121 927	系 瓦	軒丸瓦	オウチI Be01(灰)	灰色	瓦当径約14.5cm。断面が凸レンズ形。瓦当面と丸瓦との接合角度104度である。瓦当裏のナデは比較的良い。外周は同心円的に撫でがなれる。	11	搅乱
第140図 図版121 928		軒丸瓦	オウチI Be02(灰)	灰色	瓦当径約14.5cm。外周に粘土パリあり。断面は凸レンズ形。瓦当裏面はうねる様に撫でが痕が残る。裏面に漆喰付着。	11	搅乱
第140図 図版121 929		軒丸瓦	オウチI Be類	灰色	瓦当面の一部の資料である。ただ瓦当文様が珠文無しは初見であることからとりあげた。胎土中央は黒色。瓦当裏の外周部分をみると同心円的に撫でがなされている。	19	搅乱
第140図 図版121 930	瓦	軒丸瓦	オウチI Be02(赤)	赤色	瓦当面が完全形の資料。瓦当径約14.3cm。断面が凸レンズ形。瓦当裏は横撫で、外周は同心円的撫で。明らかに木版であることがわかる資料。器面に漆喰を認める。	11	J-8 10~20
第140図 図版121 931		軒丸瓦	オウチI Be03(赤)	赤色	頭部分の被破片資料。文様は鮮明。断面は扁平に近い薄さ。器面にはマンガンが残る。裏は撫でがみられる。	11	搅乱
第140図 図版121 932		軒丸瓦	オウチI a	赤色	瓦当部破片。文様部分に残る筋目から木版を使用。断面形は凸レンズ形をなす。瓦当裏は撫で調整良好。	11	搅乱
第140図 図版121 933	明 朝	軒丸瓦	オウチII a	赤色	外縁がとれた瓦当資料。文様は彫りが深く内厚である。瓦当そのもの厚手である。瓦当裏の施でも良い。漆喰の付着を認める。	11	搅乱
第140図 図版121 934		軒丸瓦	オウチIII a	赤色	瓦当面を殆どよく残す資料。瓦当径約14.3cm。文様は鮮明。瓦当面と丸瓦との接合角度は頗る異なる。瓦当裏の断面は撫でがなされ、頭著な指跡は残っていない。瓦当面から裏にマンガン釉が堆布される。	11	搅乱

第86表 屋瓦観察一覧5

図 図版 番号	技 術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第141図 図版122 935	明 朝 系 瓦	軒丸瓦	オウチIII a	赤色	瓦当面は側面刃を欠くが、その上半部と丸瓦がほぼ当物の形を残した資料である。瓦当径約15cm、丸瓦部の直轄約28.0cm、玉縁約1.5cm。筒部凸側の玉縁側に漆喰が大量に残る。瓦当裏の撫では比較的粗く、指撫で跡が顯著。玉縁裏の側面は一括の面取りである。	11	J-9 遺構上西
第141図 図版122 936		軒丸瓦	オウチIII b	赤色	軒丸瓦資料で、丸瓦部の玉縁側を欠く程度で全体の状況を理解できる。瓦当径約15cm、丸瓦部の側面には大量漆喰がみられる。瓦当面と丸瓦との接合角度は約115度である。瓦当は薄型で、裏面は粘土の混入物のためか、ナデが粗くなる。また、外側は同心円的に行われている。	11	J-9 遺構上西
第141図 図版122 937		軒丸瓦	オウチI A01	灰色	外周が明らかに中央の丸当面のみの資料で風化がみられる。瓦当は厚手。瓦当裏には縦位の本指が押し当てるようになり、凹凸面を呈する。頭も当然欠落しているが、全体の断面形は凸レンズ形を呈する。	11	擾乱
第141図 図版122 938	明 朝 系 瓦	軒丸瓦	オウチI A01	褐色	上記の937資料と同じ文様の製品で、より風化が進み文様は薄くなる。厚手で、断面形は凸レンズ形。瓦当裏には軽くおいでいるが、明らかに縦位の4本指の押し当てが認められる。	11	擾乱
第141図 図版122 939		軒平瓦	オウチI A1	灰色	瓦当面の上部外縁は欠落している。平瓦部が崩離する際にともに損じたもの。溜面全体に風化進行。瓦当裏面は、左上から右下方向に丁寧な撫でがなされている。頭部分は厚みがあり、側面が形成できている。	11	擾乱
第141図 図版122 940		軒平瓦	オウチI A2	灰色	漆の浅い僅かに文様が残る瓦当断片である。瓦当厚みはやや薄い。瓦当裏は撫でがなされるのが、凹凸は少ない。表面のみ色調が褐色に変化がみられる。	11	擾乱
第141図 図版122 941	明 朝 系 瓦	軒平瓦	オウチII I	灰色	漆の浅い僅かに瓦部残る。瓦当は厚手。瓦当裏には縱方向の撫でなされている。	11	擾乱
第141図 図版122 942		軒平瓦	オウチIII A01	灰色	瓦当が3分の2以上の残りがいい資料。平瓦部も残る。瓦当裏のナデは左右に行われている。頭部分は側面に僅かなく窪曲面になる。色調が表面のみ褐色をおびる。	11	擾乱
第142図 図版123 943		軒平瓦	オウチIII B01	灰色	瓦当面と平瓦のそれぞれ一部を残す破片である。平瓦部の桶板縁り紐圧痕を粘土で埋めている。瓦当は薄手である。	11	擾乱
第142図 図版123 944	明 朝 系 瓦	軒平瓦	オウチIII B01	灰色	瓦当の右半分を残す資料。文様は漆の深いもので鮮明。瓦当は厚手。瓦当裏は左右の撫でで確認される。平瓦部の桶板縁り厚痕は底みとしてそのまま残る。溜面は全体に風化している。	11	擾乱
第142図 図版123 945		軒平瓦	オウチIII B01	灰色	瓦当は完全で、平瓦部も全面部分を残す。平瓦部の桶板縁り圧痕は丁寧に埋められている。頭先端は欠落しているが、中厚手である。瓦当裏は粘土の凹凸が著しく粗い撫でになる。漆喰の付着を認める。弦幅2.8cm。	11	擾乱
第142図 図版123 946		軒平瓦	オウチIII B02	赤色	瓦当面の上部を残す破片である。瓦当部は薄手。瓦当裏は横方向の撫がみられる。平瓦部の桶板縁り圧痕はそのままに埋めなんら修理の作業はされていない。	11	擾乱
第142図 図版123 947	明 朝 系 瓦	軒平瓦	オウチIII B01	灰色	細かな部分で欠落しているが、全体を残した資料。平瓦部の桶板縁り圧痕は丁寧に埋められている。頭先端は欠落しているが、中厚手である。瓦当裏は粘土の凹凸が著しく粗い撫でになる。漆喰の付着を認める。弦幅2.4cm。	11	擾乱
第143図 図版124 948		軒平瓦	オウチIII B02	赤色	瓦当面はほぼ完全形。瓦当は中厚。文様は本格が使用されている。整形は全体に粗い仕上げである。瓦当裏のナデは左側から右側下に広がる全体に粗い。弦幅2.2cm。	11	J-9 遺構上西 +擾乱
第143図 図版124 949		軒平瓦	オウチIII B02	赤褐色	瓦当の右側面の破片。瓦当裏のナデは粗く、凹凸面をなす。出土地不明。焼成良好で硬質。胎土は赤色。高名燒古窯に類似する。平瓦部の桶板縁り厚痕はそのまま底みとして残る。漆喰の付着あり。	11	擾乱
第143図 図版124 950	明 朝 系 瓦	軒平瓦	オウチIII B01	赤色	一部に風化が認められるがほぼ完全形の軒平瓦。平瓦部の桶板縁り厚痕は埋められている。瓦当裏の撫で良好。マンガン釉を施す。弦幅約20.5cm、重ね長約11.5cm。	11	J-9 遺構上西
第143図 図版124 951		軒平瓦	オウチIII B01	赤色	瓦当文様はシャープ。平瓦部の整形も良好。瓦当裏も撫で良好。無釉である。弦幅20.5cmである。	11	J-9 遺構上西
第143図 図版124 952		軒平瓦	オウチI A1	赤色	瓦当の上部資料。肉厚の文様。瓦当は中厚手タイプ。粘土パリはみとめられない。撫で整形は良好で、その線状痕もみられない。無釉である。	11	擾乱
第143図 図版124 953	明 朝 系 瓦	軒平瓦	オウチII A1	赤色	瓦当の断片である。表面にマンガン釉が塗布されている。瓦当裏は丁寧な撫でがおこなわれている。	11	擾乱

第87表 屋瓦観察一覧6

図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第144図 図版125 954	明 朝 系 瓦	丸瓦	玉縁部～ 端部	灰色	ほぼ全形の窓える製品。凹面には特徴的な擦でによくくぼみはみられない。大量的漆喰の付着痕あり。凹面は布糸網が覆う。端部には面取りがなされていない。長軸全長約30.5cm、玉縁長約5.5cm、厚み約1.8cm、重量約1.36kg。	19	B-4シーリ内 黒陶色土 +B-5シーリ 内本炭層(壁)
第144図 図版125 955		丸瓦	玉縁部	灰色	玉縁の状況を残す破片。残された筒部の凹面には大量の漆喰が付着している。玉縁裏は一側の面取りがなされている。玉縁の頂部は平坦に成形され、玉縁の長さは4.0cmと短い。	19	B-5 シーリ内上層 (黄色土・蛙)
第144図 図版125 956		丸瓦	玉縁部	褐色	玉縁側の細片。筒部側には横擦の幅広い擦でによるくぼみが走る。その下位は縱擦で痕。玉縁裏は一側の面取りがなされている。浜田系(古いタイプ)。	19	B-4 シーリ内炭混 粘土層
第144図 図版125 957		丸瓦	玉縁部	赤色	ほぼ玉縁側を残した破片。玉縁長約4.5cm。筒部面は全体に擦で仕上げられ、その後の風化でとくに難観される船跡はみられない。玉縁裏は一側の面取り。一束の布糸網り痕が走る。約2.6cmの厚手である。	11	搅乱
第144図 図版125 958		丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁側の筒部破片。玉縁の長さ4.0cm。筒面の破断面は無でが丁寧になれる。おそらく丸瓦の破片とみられる。筒部面に黒色のマンガん釉を施す。その上に漆喰の付着あり。玉縁の裏は2～3回の面取りが行われる。ヘラ彫きの印ありAaタイプ。	11	J-9 造構上西
第145図 図版126 959		丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	玉縁側の筒部破片。玉縁は長く約6.0cm。器面全体に風化進む。玉縁は一側の面取り。布糸網じた痕が一条走る。印ありAbタイプ	11	搅乱
第145図 図版126 960	明 朝	丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁側の破片。灰色漆喰付着。玉縁長さ6.0cm。裏の面取りは一回。印ありAbタイプ。破損部に印の一跡があるので全面柘木、破損の為、分類表(C群)には加えない。	11	搅乱
第145図 図版126 961	系 瓦	丸瓦・ 印あり	完形	灰色	破損しているが接合して全体が復元できる資料。玉縁側から端部に向かい筒部の径が広がる形態。凸面には多数の漆喰が付着している。玉縁裏は一側の面取り。端部は面取りが行わっていない。印ありAcタイプ。接合部可重量約1.74kg、全長約30.4cm、玉縁長さ約5cmがある。	11	搅乱
第145図 図版126 962		丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁側破片。全体が爪形様に溝消した平面形。断面形も凸面し玉縁頂部に平面はみられない。面取りは複数回みられる。漆喰の付着あり。印ありAcタイプ。玉縁長さ約4.5cmである。	11	搅乱
第146図 図版127 963	明 朝 系 瓦	丸瓦・ 印あり	完形	灰色	完全形の資料。玉縁長さ5.5cm、全長33.6cm。縁間に漆喰の付着がある。玉縁裏の側面は一側の面取り。端部は約2.5cmの面取りあり。印ありAdタイプ。重量約1.94kg。	11	I-9 瓦溜まり
第146図 図版127 964		丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	玉縁の状況を残す破片。玉縁長さ約5.5cm。残された筒部の凹面には大量的漆喰が付着している。玉縁裏は一側の面取りがなされている。一束の布糸網り痕が残る。玉縁の長さ6.5cmは長い。印ありAeタイプ。	11	搅乱
第146図 図版127 965		丸瓦・ 印あり	玉縁部	灰色	玉縁側の細片。筒部側には横擦の幅広い擦でによる2条のはみがる。玉縁裏は1回の面取りがなされている。表面は全体に風化が進む。ヘラ彫き印は並行する2本の斜線である。Atタイプ。	11	搅乱
第146図 図版127 966		丸瓦・ 印あり	完形	褐色	完全形の資料。玉縁長さ約5.5cm、全長約31.6cm。縁間に漆喰の付着がある。玉縁裏の側面は一側の面取り。端部には船約2.5cmの面取りあり。ヘラ印はAtタイプ。重量約1.64kg。	11	搅乱
第147図 図版128 967	明	丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁側。筒部の凸面は横擦で痕が確認される。玉縁の凹面の側面は2回面取りがなされている。刻継は鮮明で、Agタイプ。玉縁長さ約4.1cm。	11	J-8茶褐色 灰混層
第147図 図版128 968	朝 系	丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	玉縁側。筒部凸面の擦では縱方向が主である。玉縁裏の側面は1回面取り。凹面には3束の系縒り痕がみられる。印ありAhタイプ。玉縁長さ約6cm。	11	I-7 10～20
第147図 図版128 969	瓦	丸瓦・ 印あり	玉縁部～ 端部	赤色	ほぼ完全形の丸瓦。玉縁長さ約5.5cm、全長約31.0cm。漆喰の付着痕あり。筒部凸面の玉縁側に横擦の幅広い擦が二条確認される。凹面の端部は約1cm幅で面取りが行われている。印ありAiタイプ。重量約1.82kg。	11	搅乱

第88表 屋瓦観察一覧7

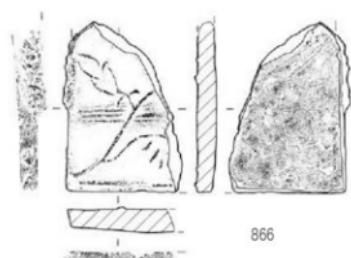
図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第147図 図版128 970	明	丸瓦・ 印あり	玉縁部	灰色	玉縁側の破片である。玉縁裏の側面は1回の面取り。また、凹面側に1条の布糸織り痕が確認される。玉縁の長い約6.7cmの資料。へラ印はA」タイプである。	11	搅乱
第147図 図版128 971	朝 系	丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁の細片。筒部凸面には撫で痕が鮮明である。玉縁長さ約5cm。焼成良好。へラ印はA」タイプである。	11	J-9 遣構上西
第147図 図版128 972	瓦	丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	丸瓦の玉縁側二分の一資料。玉縁頂部は平坦。筒部凸面には横位の横撫で、漆喰付着。玉縁裏の側面は2回の面取り。玉縁長さ約4cm。印ありAkタイプ	11	搅乱
第148図 図版129 973		丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁裏の側面は1回の面取り。凹面には幅広の糸織り痕が明顯。玉縁の頂部は斜面を形成する。セメント漆喰付着。玉縁長さ4.3cm。へラ印はA1タイプである。	11	J-9 遣構上西
第148図 図版129 974		丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	玉縁側細片。玉縁裏の側面は1回の面取り。器全体が風化している。玉縁頂部は平面をつくる。玉縁長さ約4.5cm。印ありAmタイプである。	11	搅乱
第148図 図版129 975	明 朝	丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	丸瓦の玉縁側二分の一破片。漆喰の付着有。玉縁の長さ約4.5cm。全体に風化が進む。玉縁頂部が平坦。玉縁裏には2条の糸織り痕がみられる。へラ印はAnタイプである。	19	B-4 シーリ内清掃 中
第148図 図版129 976	系 瓦	丸瓦・ 印あり	玉縁部	灰色	玉縁の長い破片資料。長さ5.5cm。筒部面には横撫でをみる。玉縁裏には2条の糸織り痕がある。印はA群不明である。	19	A-1 石積み6 西側上層
第148図 図版129 977		丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁のみの細片。玉縁頂部は湾曲した面からなる。印ありA群不明。玉縁長さ約5cm。	19	搅乱
第148図 図版129 978		丸瓦・ 印あり	玉縁部	灰色	玉縁が約6cmと長い丸瓦破片。玉縁裏は側面が1回面取りされている。また、1条の細い布糸織じが横位走る。玉縁の頂部は平坦であるが、やや傾斜を見る。凸面の外周に白漆喰が残る。細線の印が玉縁側の筒部面にある。Baタイプ。	11	搅乱
第149図 図版130 979	明	丸瓦・ 印あり	玉縁部～ 端部	赤色	側面に大きいくず落部はあるが、ほぼ全体をみることができる丸瓦である。玉縁の頂部は湾曲している。筒部の凸面は横撫で、中央部は縱撫でがなされる。とに端部の横撫ででは細かな線状痕が多数にみられる。凹面の特徴として、玉縁裏は2回の面取り。端部に約3cm幅の面取りが行われている。玉縁長さ約4.8cm。全長約30cm。へラ印ありBbタイプ。	11	I-9 瓦溜まり
第149図 図版130 980	朝 系	丸瓦・ 印あり	玉縁部～ 端部	赤色	ほぼ完全形の資料である。玉縁長さ約29.5cm、全長約4.5cm。玉縁の頂部は傾斜した面が残る。筒部の凸面における多くに玉縁側は強い横撫でがあり窪みをつくる。玉縁裏は2回の面取り、端部は面取りなし。へラ印はCタイプである。	11	搅乱
第149図 図版130 981	瓦	丸瓦・ 印あり	玉縁部	灰色	玉縁側の筒部破片で、細線による印あり。Bd01タイプである。漆喰が多数付着している。窪厚み1.3cm。	11	J-9 西側
第150図 図版131 982		丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	玉縁は長さ約6cmと長い。玉縁裏は1回の面取り。横1条の布糸織り痕が走る。縁に当初の形を残すように漆喰が付着。筒部凸面に深い細線があり。Bd02タイプ。窪厚み1.5cm。	11	I-8 10～20茶褐色 灰混層
第150図 図版131 983	明 朝	丸瓦・ 印あり	玉縁部	灰色	玉縁側の丸瓦片。玉縁裏の面取りは長く1回である。布糸織り痕が1条横位に走る。凸面のなは顯著な窪み線を残さない。筒部側に印ありBcタイプ。窪厚み1.4cm。	11	J-8 茶褐色灰混 層
第150図 図版131 984	系 瓦	丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	筒部の破片で、凸面側に細線がある。Bfタイプ。漆喰の付着あり。焼成良好。窪厚み1.4cm。	11	搅乱
第150図 図版131 985		丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	平面形が四角の玉縁側の破片。玉縁頂部は平面を有する。筒部の凸面は撫でがおり、端部側は深い横撫でとなる。玉縁の裏は布糸織り痕が1条と他に縫い目が平行した複数条に残る。漆喰の使用を示す痕跡がある。印ありCタイプ。	11	搅乱

第89表 屋瓦観察一覧8

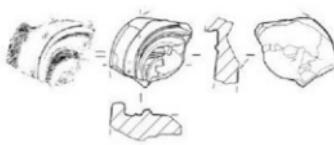
図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第151図 図版132 986	明 朝 系 瓦	平瓦	完形	灰色	平面形が台形。凸面の狭端側には幅広の撫でによる凹線がみられる。凹面の両側に屋根葺き時の白い漆喰が付着する。広端側に桶縦織り圧痕がみられる。狭端長約17.5cm、広端長約22cm、長軸約21.5cm、厚み約1.5cm。重量約1.34kg。	11	搅乱
第151図 図版132 987		平瓦	完形	灰色	平面形が底長の台形。凸面の両端側には幅広の浅い撫でによる凹みがみられる。白い漆喰が付着する。広端側に浅い桶縦織り圧痕が7個みられる。狭端長約16cm、広端長約21.5cm、長軸約24cm、厚み約1.2cm。重量約1.22kg。	11	I-8 20~30茶褐色 灰混層
第151図 図版132 988		平瓦	広端～ 狭端部	褐色	二分の一程の破片。凸面の両端側には幅広の浅い撫でによる凹みがみられる。広端側に浅い桶縦織り圧痕がみられる。厚み約1.5cm。長軸約24cm。	19	B-4シリ 内木炭層 +B-5シリ 内木炭層
第152図 図版133 989	明 朝	平瓦	完形	灰色	平面形が台形。凸面の狭端側が浅い撫でによる凹線が走る。凹面の広端側には縦織り組紐圧痕が6個確認される。また、桶板の圧痕も比較的鮮明にみられる。白い漆喰が確認された。文様が凸面の広端側に波状の線を描く。狭端長約17.5cm、広端長約22cm、長軸約23cm、厚み約2.0cm。重量約1.48kg。	11	I-8 20~30茶褐色 灰混層
第152図 図版133 990		平瓦	広端～ 狭端部	灰色	二分の一程の破片。凸面の中央に大きなV字状の線描きがある。凹面側には狭端側に1条横位の糸縦織り圧痕がみられる。また、広端側には桶板縦織り圧痕が確認される。厚み約1.6cm、長軸約23.5cm。	11	搅乱
第152図 図版133 991		平瓦	狭端部	灰色	平瓦の破片である。凸面全体に羅位の太く、深い描き線が無数に引かれている。丁寧な平行したものではなく、雑な棍をせる。凹面には狭端側に横位の糸縦織り圧痕がみられる。また、桶板縦織り圧痕が確認される。厚み約1.3cm。	11	搅乱
第152図 図版133 992		平瓦	完形	赤色	平面形がほぼ四角形をする。狭端側に僅かな撫でによる凹線が走る。凹面の桶板縦織り圧痕は5個みられる。漆喰の付着あり。狭端長約20.5cm、広端長約22.5cm、長軸約21.5cm、厚み約1.2cm。重量約1.42kg。	11	J-8 茶褐色灰混 層
第153図 図版134 993	明 朝	平瓦	広端～ 狭端部	赤色	三分の二ほど残存する資料。凸面の狭端側に横なで痕がみられる。また、その下には斜め方向の長い削痕が平行して残る。凹面には桶板縦織り圧痕が不鮮明でやや横筋状の羅呈する。両側に僅かに白漆喰の付着痕がみられる。狭端長さ15.5cm、長軸約23.6cm。厚み約1.2cm。	11	搅乱
第153図 図版134 994		平瓦	広端～ 狭端部	赤色	ほぼ完全形に近い台形製品。凸面の広端側に大量の漆喰が付着。漆喰の下面には3本の撫でによる横線がみられる。狭端長約16.5cm、長軸約21.5cm、厚み約1.5cm。重量約1.12kg。	19	搅乱
第153図 図版134 995		平瓦	筒部	赤色	筒部細片で、凸面に僅かにマンガン釉による文字状の部分がある。厚み約1.5cm。	19	搅乱
第153図 図版134 996		平瓦	広端部	赤色	凸面の中央部に円や点の様な墨書きが残る資料。マンガンを使用している。凹面の広端側にマンガンが塗布されている。厚み約1.4cm。	11	搅乱
第154図 図版135 997	明 朝 系 瓦	役瓦	軒丸瓦	赤色	瓦当破片であるが、残る部分から径が大きくなる特殊(大型)製品と推測される。瓦当は撫でがなされているが、起伏のある表面を形成している。花弁の平面形はハート形を呈する。	11	搅乱
第154図 図版135 998		役瓦	隅瓦	灰色	破損品であるが、凸面側が屋根形で、降り棟の端部を呈するような製品。凹面には折りや段部分が作られ、他のものとの組み合わせを考えられている。材質や成形をみると、埠の可能性もあり、屋根瓦とは断定できない。今後検討を要する資料である。厚み約3.0cm。近世大瓦風にもみられる。	11	搅乱
第154図 図版135 999		役瓦	不明	褐色	残された側面の断面がL字形をした瓦。側面は丁寧な仕上げ面。胎土中央は灰色。厚み約1.5cm。	11	I-9 南側

第90表 屋瓦観察一覧9

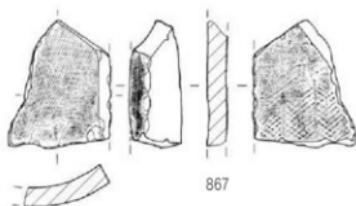
図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第154図 図版135 1000		役瓦	瓦当	灰色	細片であるが、無文の瓦当片。全体の形状が雲形か、裏面は剥離している。一部に漆喰の付着痕確認。	19	擾乱
第154図 図版135 1001	明 朝	役瓦	宝珠形	褐色	全体觀がむすび形の宝珠である。最大厚み約4.4cmで、基本的には平面的なものである。底面は水平に成形、裏面には同心的に凸帯文が2条あり、側縁にも縁取りがなされている。裏面は平坦で、製品をくるためのはぞがつぶれられている。裏面に漆喰痕が確認。高さ約16cm、最大幅4.5cm、重量1.16kg。	11	擾乱
		役瓦	雲形・ 小形不明	赤色			
第154図 図版135 1002	系 瓦	雲形・ 小形不明	赤色	小形の破片で、表面の凹凸の鮮明な手づくね織工をほどこす。裏面は平坦、小形製品。裏に漆喰が付着。厚み約3cm。明褐色。	11	擾乱	
		役瓦	雲形・ 小形不明	赤色	雲形の破片。サイズは中形。文様は凹凸を明瞭につけた雲形。側面には裏面から三分の二まで漆喰の付着痕がおよんでいる。裏面は平坦。焼き込んだ赤色を呈し、堅い。厚み約3.0cm。明褐色。		
第155図 図版136 1004		役瓦	雲形・ 中形1巻	赤色	雲形の部分と尾の部分の中央破片資料。手づくねによる彫りは大きく深い。裏面は平坦。厚み約4.3cm。明褐色。	11	擾乱
第155図 図版136 1005	明 朝	役瓦	雲形・ 中形不明	褐色	雲形の尾部破片資料。本製品には径約1.2cmの穿孔がみられる。2孔である。裏にはバリがなく、表には漆喰の付着が残る。厚み約4.6cm。	11	擾乱
第155図 図版136 1006		役瓦	雲形・ 大形不明	灰色	厚み約7cmと厚み約のある雲形である。細片である。裏面は平坦。胎土は黒色をおび、焼成は甘い。	11	擾乱
第155図 図版136 1007	瓦	役瓦	雲形・ 大形不明	赤色	雲形の細片である。彫りが深くなされ鮮明。裏は平坦で、中央部に当該製品を飾るためにはぞが作られている。厚み6.2cm。明褐色。	11	擾乱
第155図 図版136 1008		役瓦	不明	赤褐色	表面が湾曲した製品で破損のため全体觀は明らかでない。表面には細かいひび割れがあり、自然軸の光沢がみられる。裏は凹面し、大量漆喰が塊として残る。厚み約1.6cm。	11	1~9 南側
第156図 図版137 1009		役瓦	雲形・ 大形不明	赤色	雲形部分の破片で、尾の部分が欠落している。製品自体は大形。厚み約4.5cm。明褐色。	11	擾乱
第156図 図版137 1010		役瓦	雲形・ 大形不明	赤色	大形の雲形で、おおかた破壊されている。裏面は平坦で漆喰の付着が認められる。厚み約7.7cm。明褐色。	11	擾乱
第156図 図版137 1011	明 朝	役瓦	獅子 (シーサー) 形	褐色	陶器製品、渦は立体的で、その底み線の中には赤褐色のガラス質化した釉薬が残る。シーサーの巻ひげであろうか。胎土は白色で、石英粒子を大量含む陶器製品である。	11	擾乱
第156図 図版137 1012		役瓦	不明	褐色	表面に鳥の羽状の凸文が施された役瓦。動物以外となると植物の造形を示しているのか明らかでない。表面の撫で調整は良好。厚み約3.0cm。	19	擾乱
第156図 図版137 1013	系 瓦	役瓦	龍の角	褐色	棒状の製品で、龍の角か植物の茎をイメージしたのであろうか。計測は貼り付けた状態(しつくい)の付着を見るので、厚み約は最大2.3cm~最小2.1cmを測る。	19	C~3 野面石積み 南側梁石
第156図 図版137 1014		役瓦	龍の角	灰色	上記の製品同様に棒状の製品で、龍の角か植物の茎をイメージしたのであろうか。計測は貼り付けた状態(しつくい)の付着を見るので、厚み約は最大2.1cm~最小1.6cmを測る。	19	擾乱



866



871

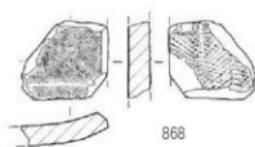


867

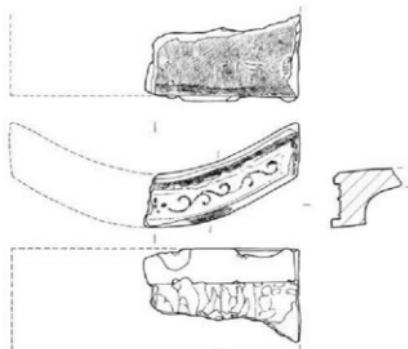


872

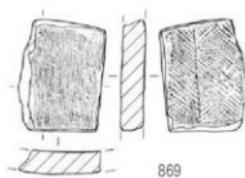
873



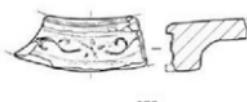
868



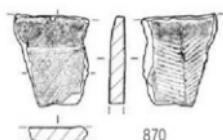
874



869



875



870



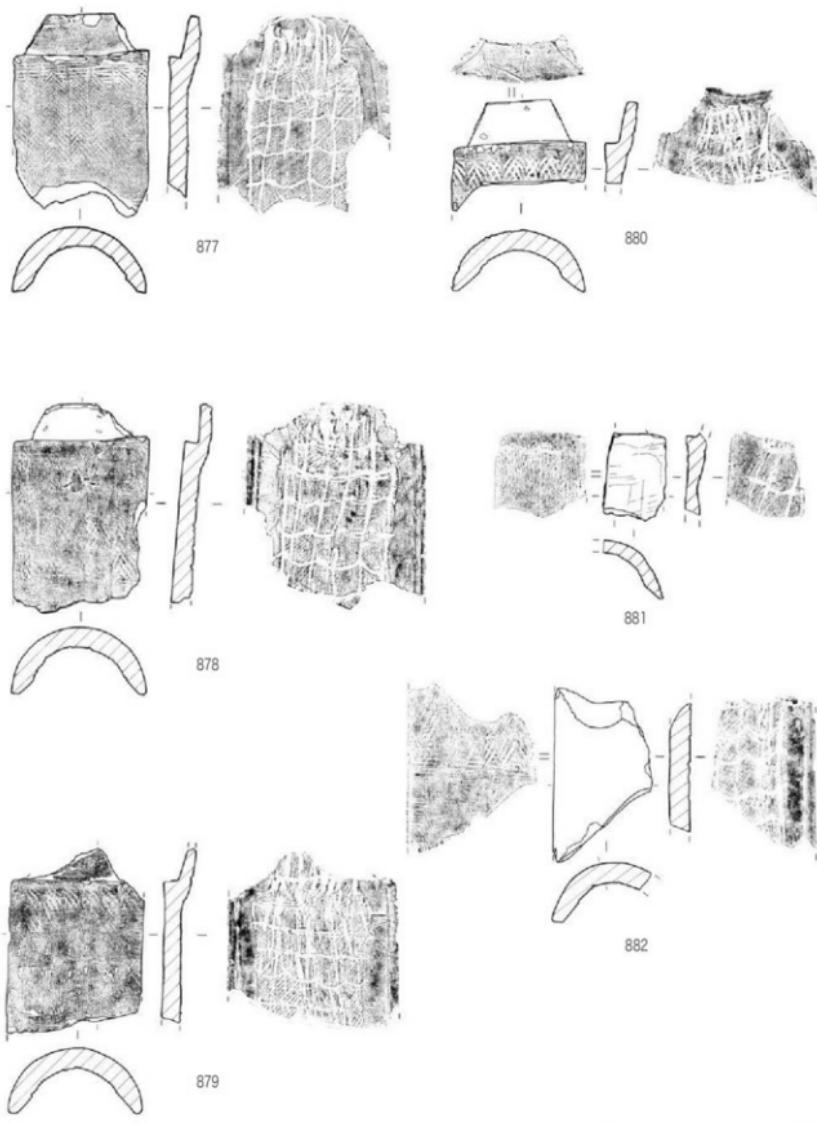
876

0 20cm

第132図 屋瓦1 高麗系軒平瓦・平瓦、大和系軒丸瓦・軒平瓦



图版113 屋瓦1 高麗系軒平瓦・平瓦、大和系軒丸瓦・軒平瓦



第133図 屋瓦2 大和系丸瓦（1）



877



880



878



881

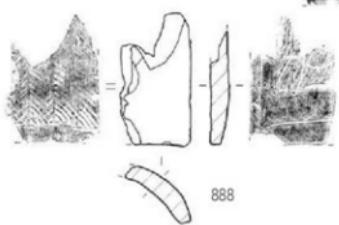
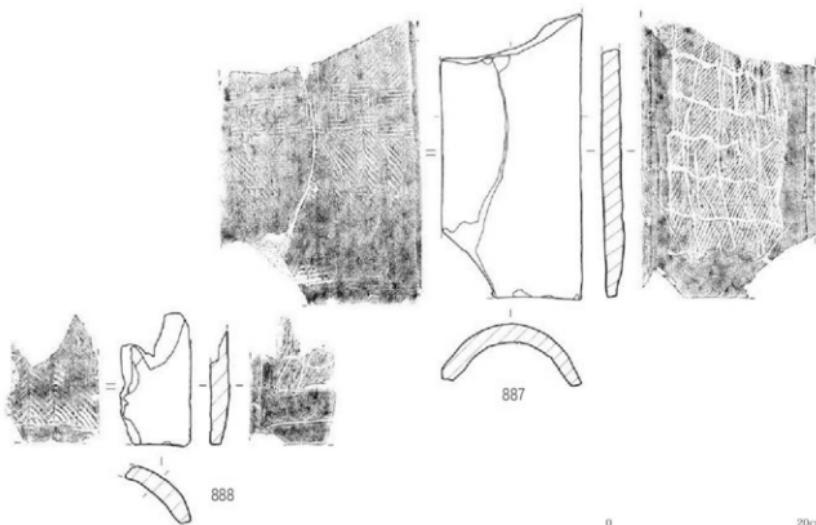
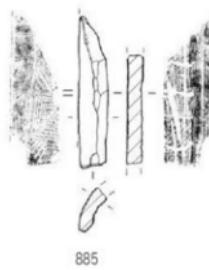
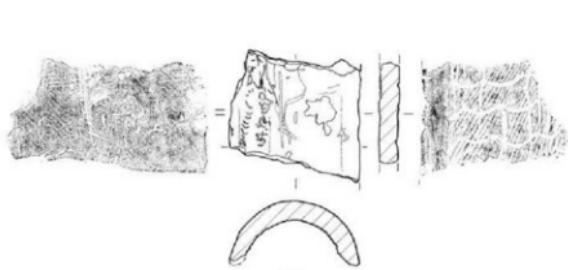
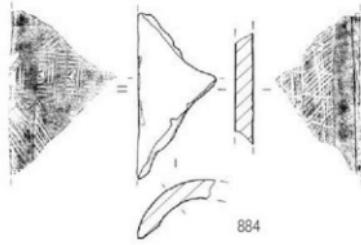
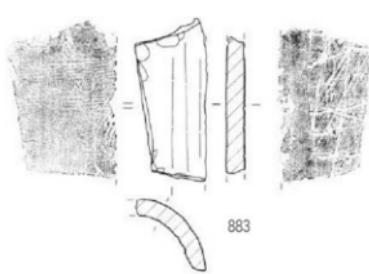


879



882

图版114 屋瓦2 大和系丸瓦（1）

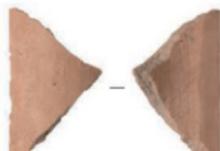


0 20cm

第134図 屋瓦3 大和系丸瓦（2）



883



884



886



885

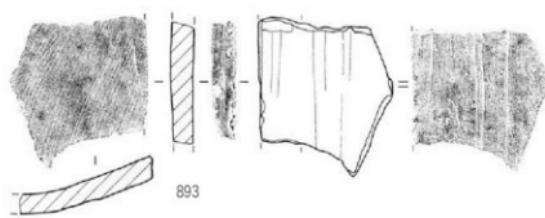
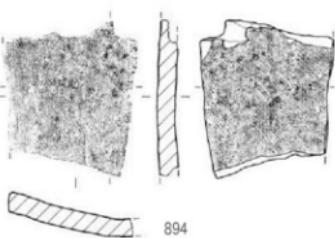
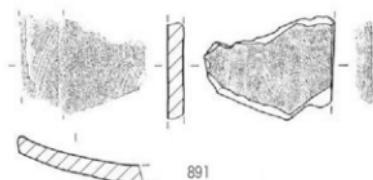
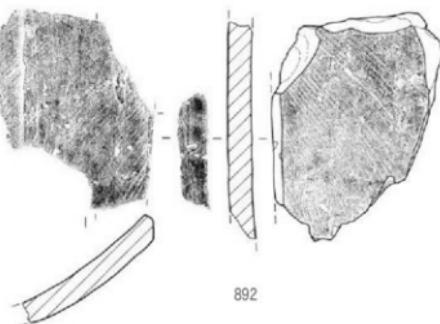
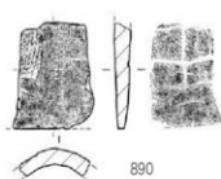
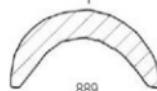
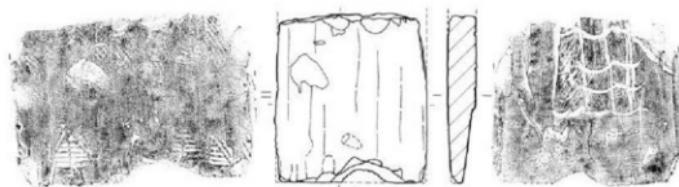


888



887

图版115 屋瓦3 大和系丸瓦（2）



第135図 屋瓦4 大和系丸瓦（3）・平瓦（1）



889



890



892



891

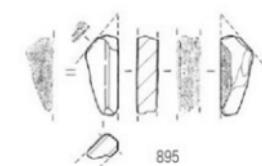


893

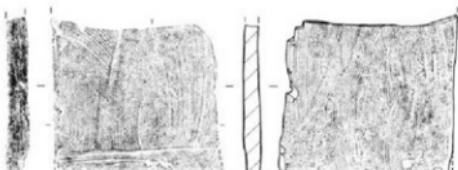


894

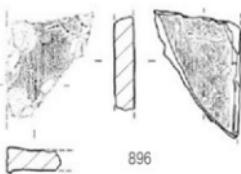
图版116 屋瓦4 大和系丸瓦（3）·平瓦（1）



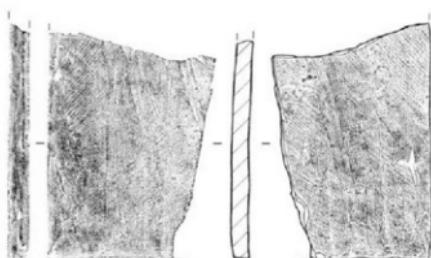
895



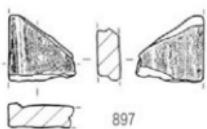
899



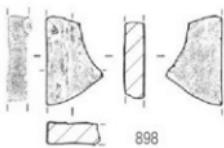
896



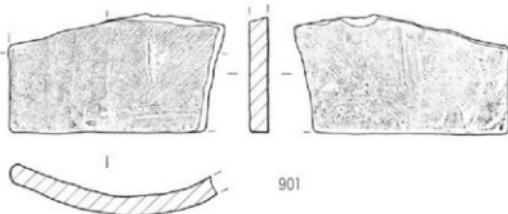
900



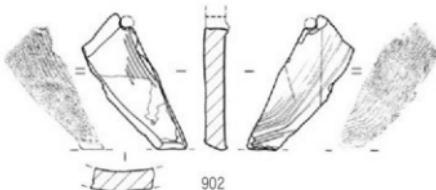
897



898



901



902



第136図 屋瓦5 大和系平瓦（2）



895



899



896



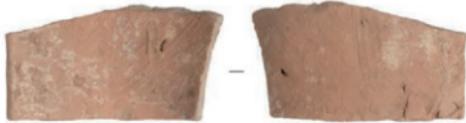
897



900



898

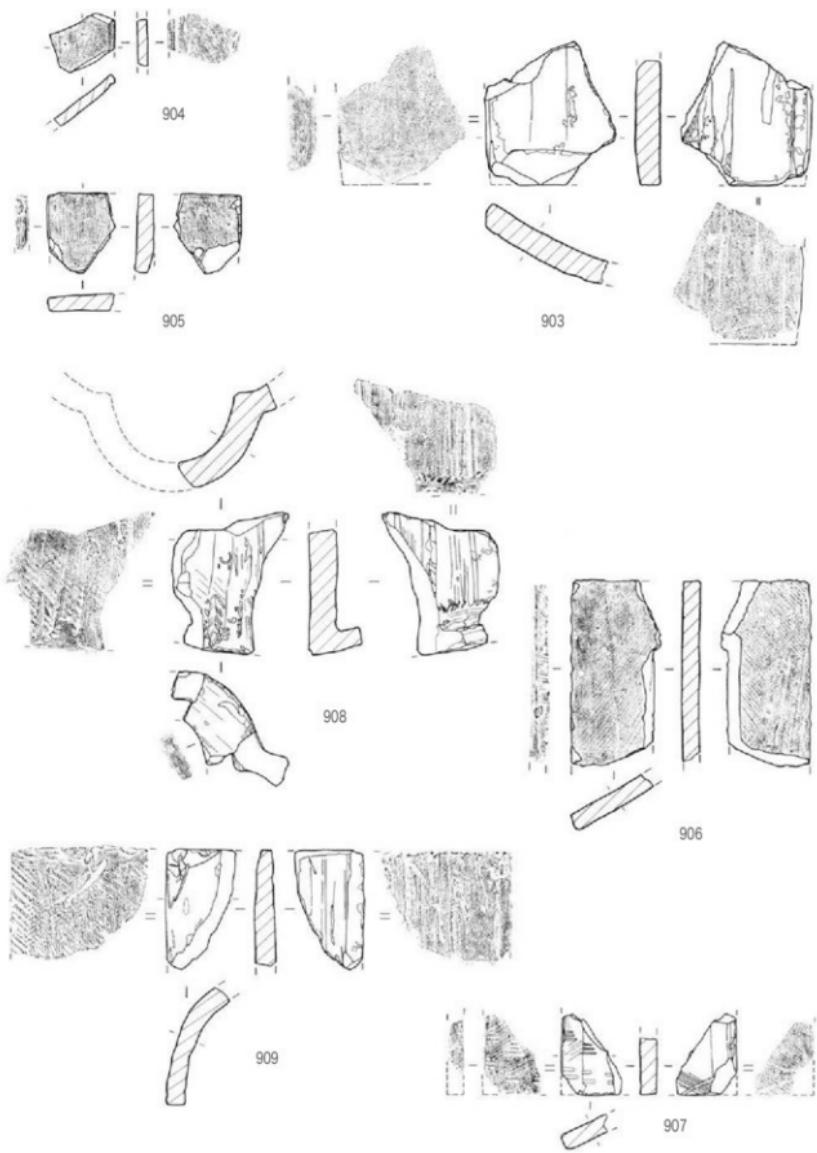


901



902

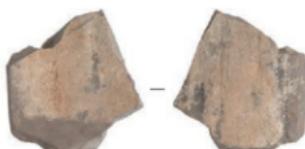
图版117 屋瓦5 大和系平瓦(2)



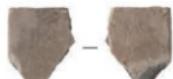
第137図 屋瓦6 大和系平瓦(3)・雁振瓦(1)



904



903



905



908



906

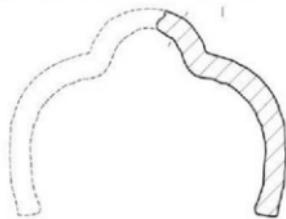
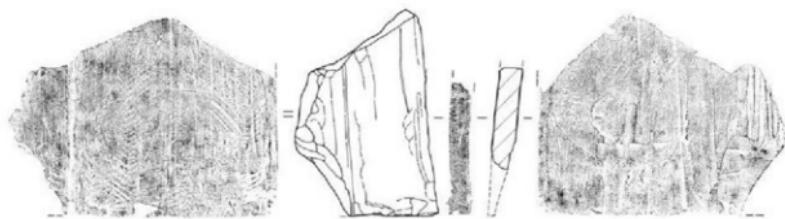


909

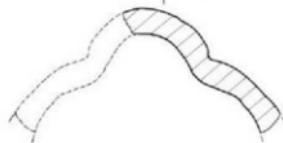
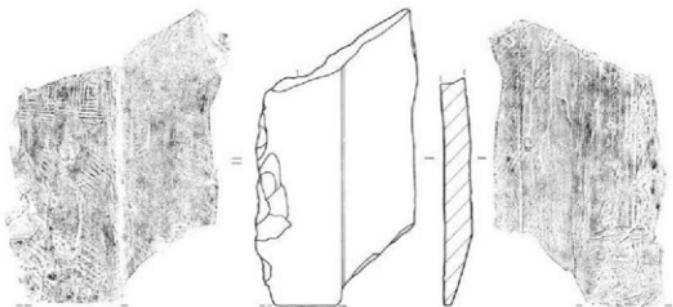


907

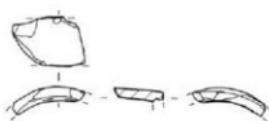
图版118 屋瓦6 大和系平瓦(3) · 雁振瓦(1)



910



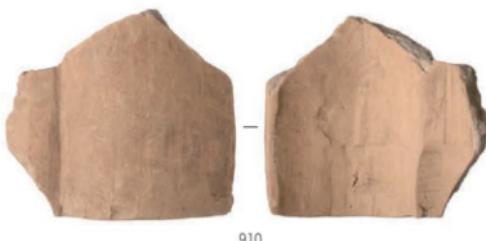
911



912



第138図 屋瓦7 大和系雁振瓦（2）・役瓦



910

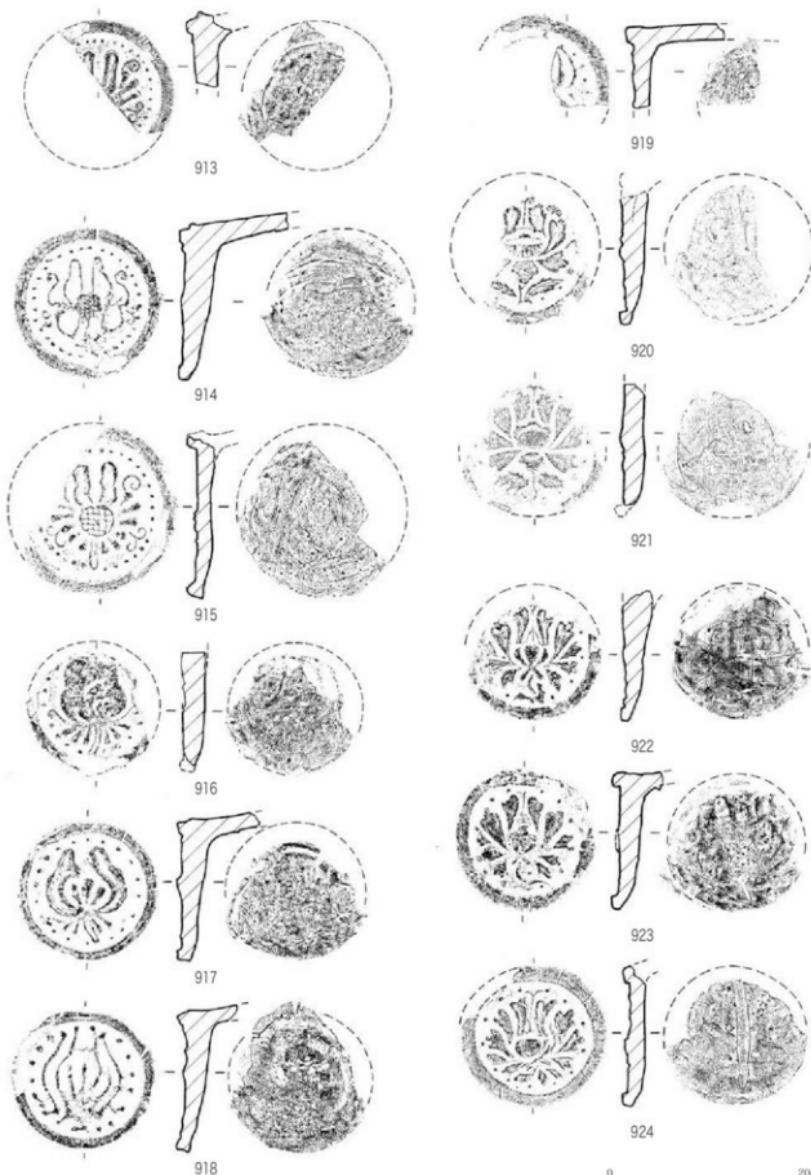


911



912

图版119 屋瓦7 大和系雁振瓦（2）·役瓦



第139図 屋瓦8 明朝系軒丸瓦（1）



913



919



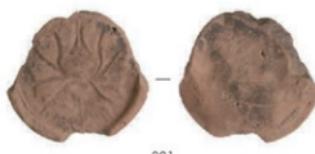
914



920



915



921



916



922



917



923

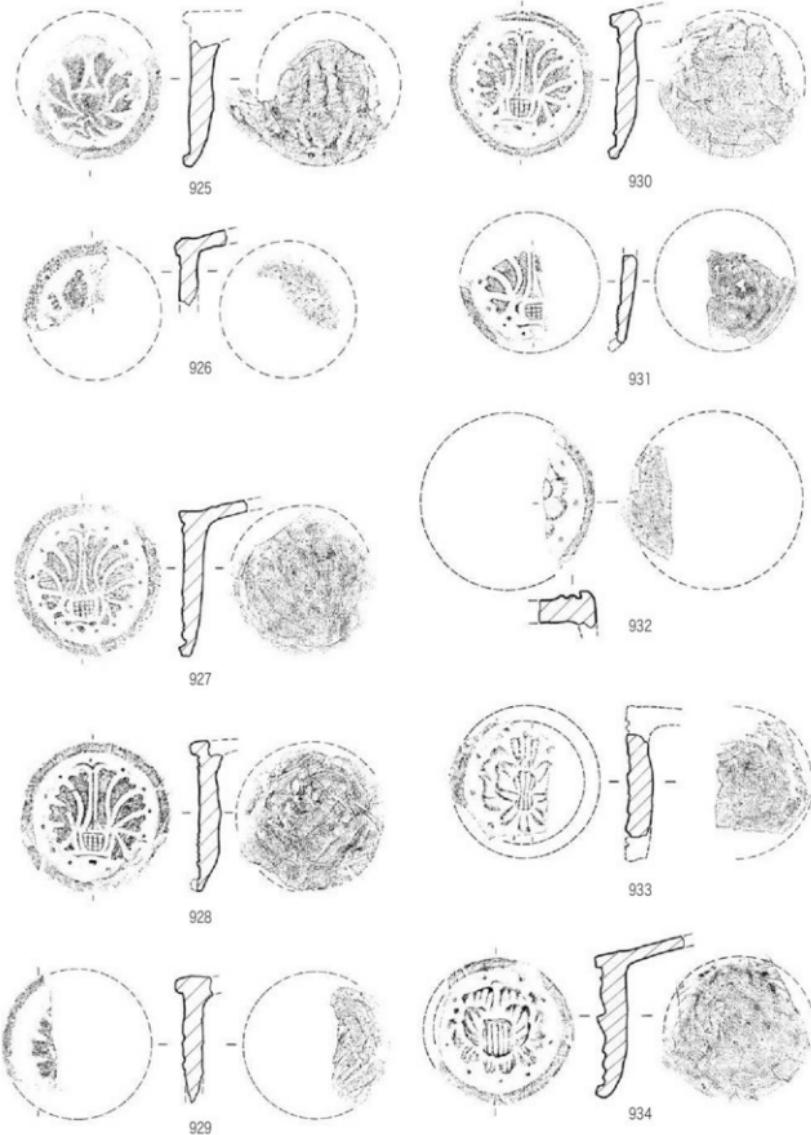


918



924

图版120 屋瓦8 明朝系軒丸瓦 (1)



第140図 屋瓦9 明朝系軒丸瓦（2）



925



930



926



931



927



932



928



933

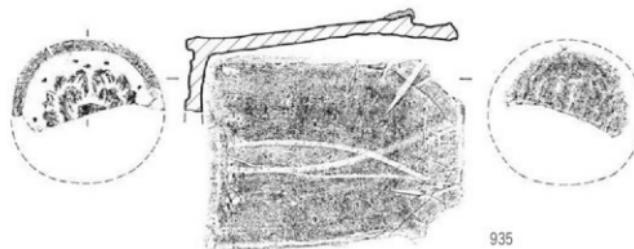


929

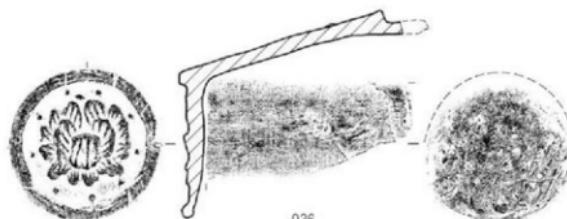


934

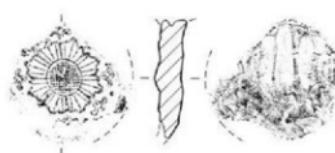
图版121 屋瓦9 明朝系軒丸瓦 (2)



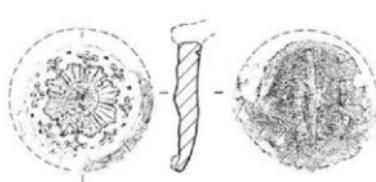
935



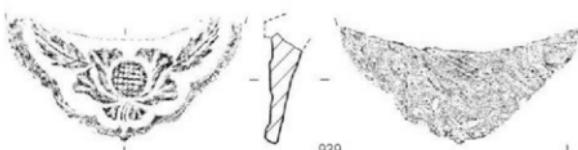
936



937



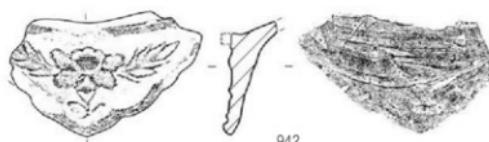
938



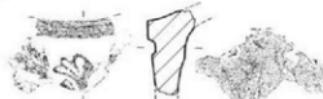
939



940



942



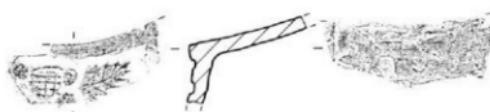
941

0 20cm

第141図 屋瓦10 明朝系軒丸瓦(3)・軒平瓦(1)



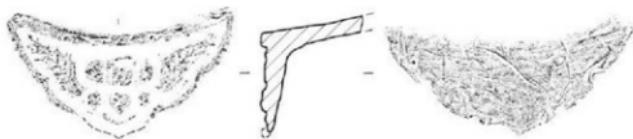
图版122 屋瓦10 明朝系軒丸瓦(3)・軒平瓦(1)



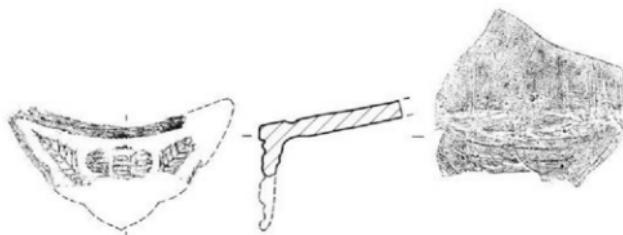
943



944



945



946



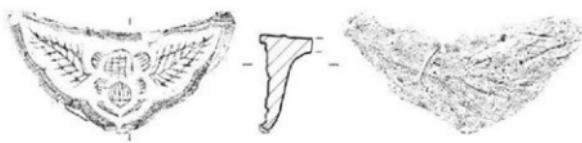
947



第142図 屋瓦11 明朝系軒平瓦（2）



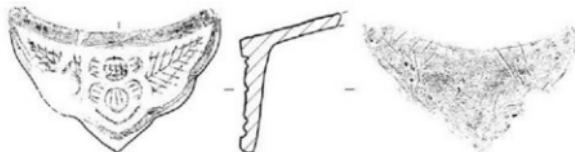
图版123 屋瓦11 明朝系軒平瓦 (2)



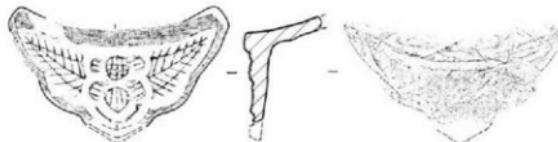
948



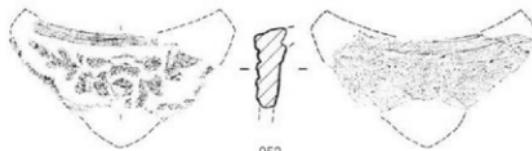
949



950



951



952



953



第143図 屋瓦12 明朝系軒平瓦（3）



948



949



I



950



951

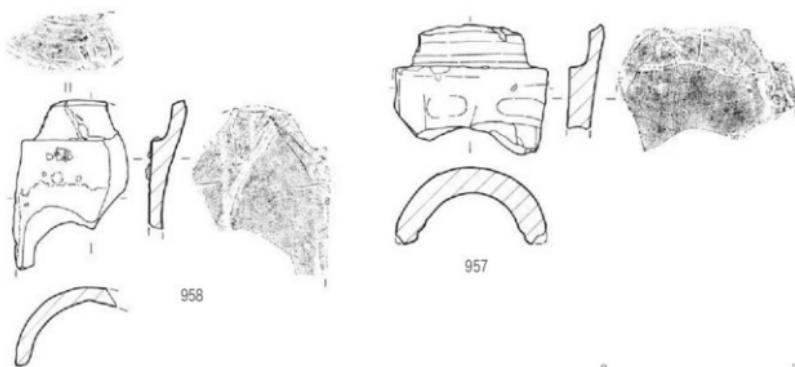
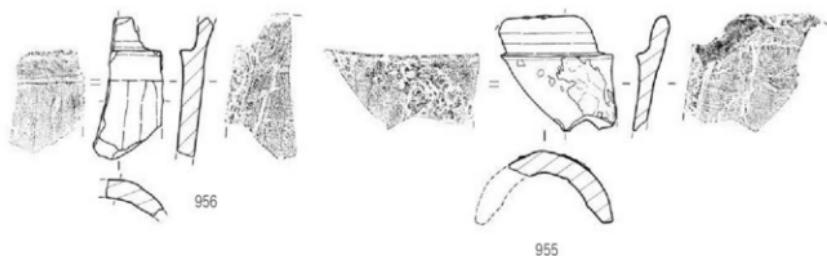
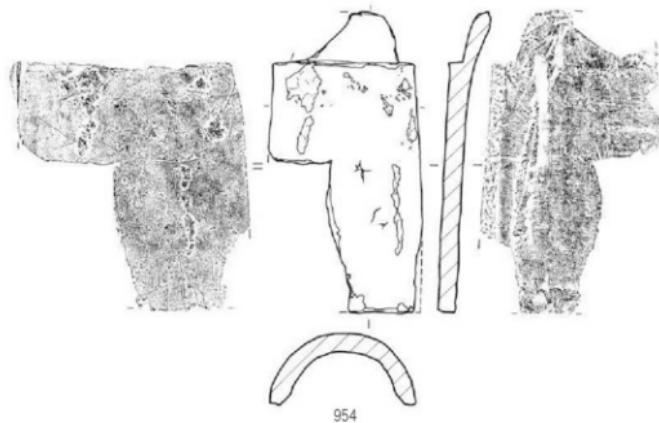


952



953

图版124 屋瓦12 明朝系軒平瓦 (3)



第144図 屋瓦13 明朝系丸瓦（1）



954



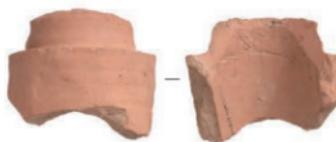
956



955

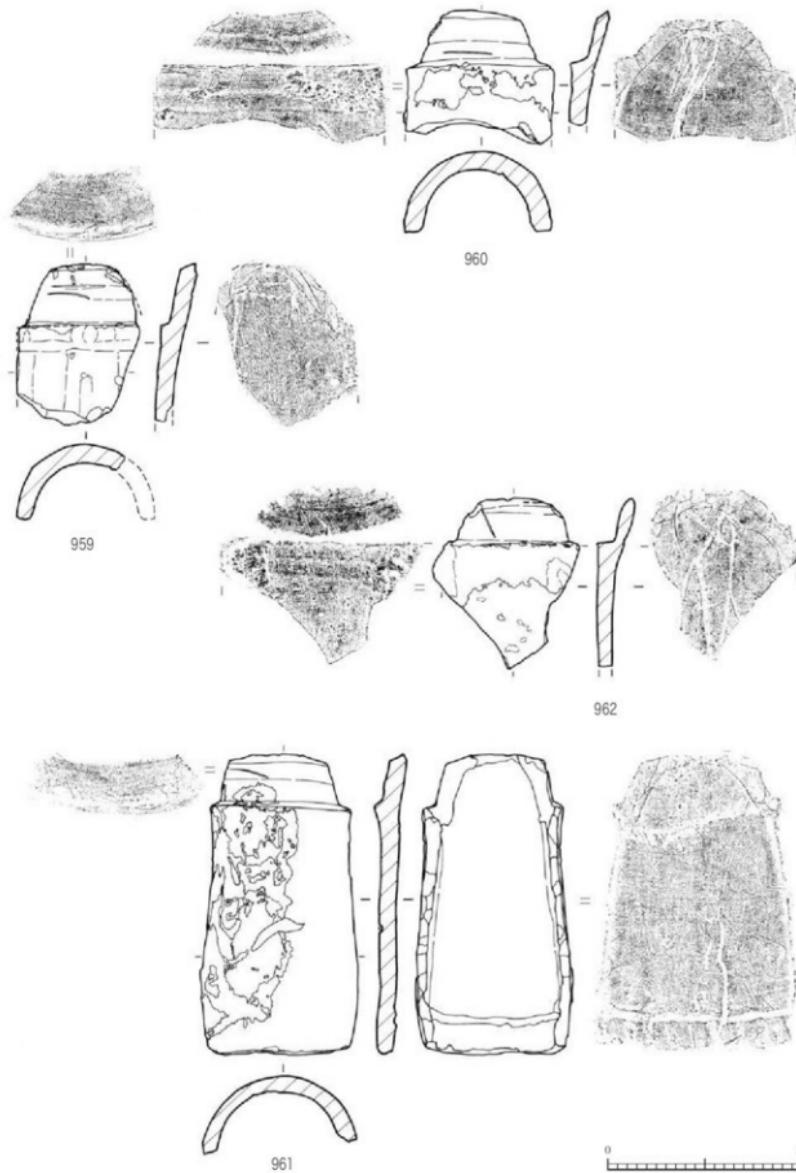


958

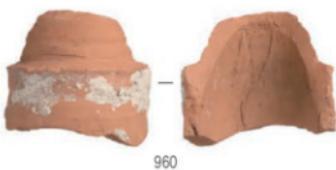


957

图版125 屋瓦13 明朝系丸瓦（1）



第145図 屋瓦14 明朝系丸瓦 (2)



960



959

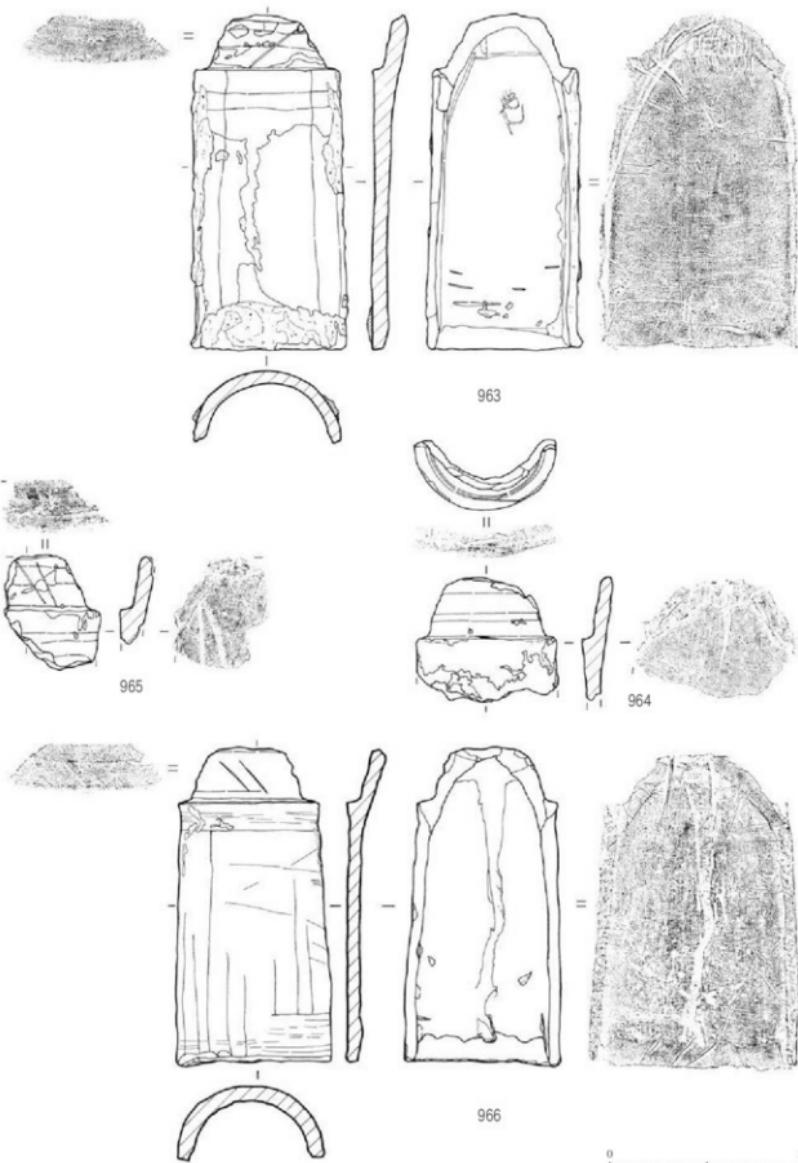


962



961

图版126 屋瓦14 明朝系丸瓦 (2)



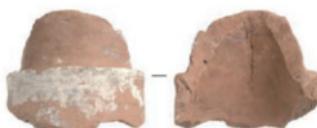
第146図 屋瓦15 明朝系丸瓦（3）



963



965

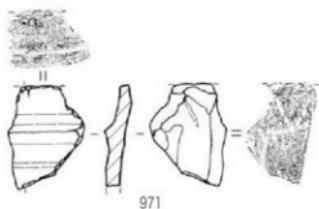
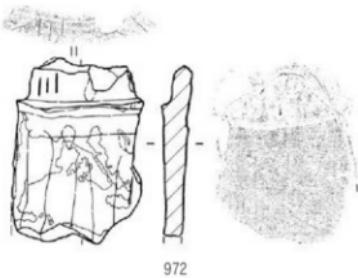
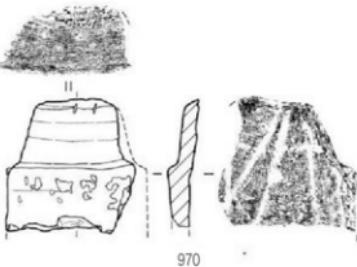
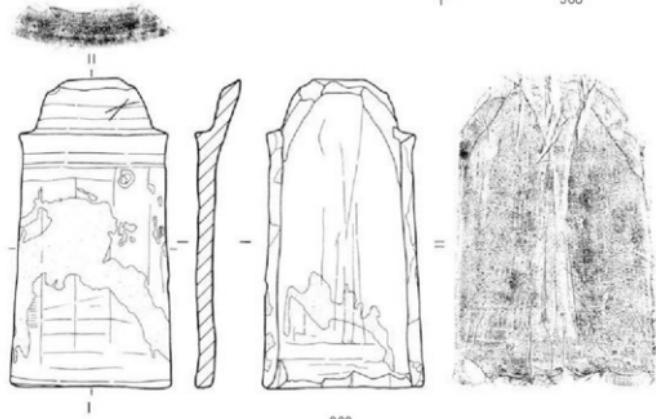
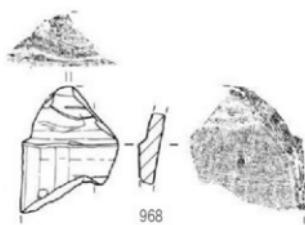
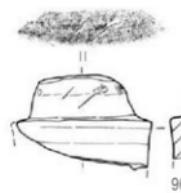


964



966

图版127 屋瓦15 明朝系瓦（3）



0 20cm

第147図 屋瓦16 明朝系丸瓦 (4)



967



968



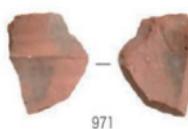
969



970

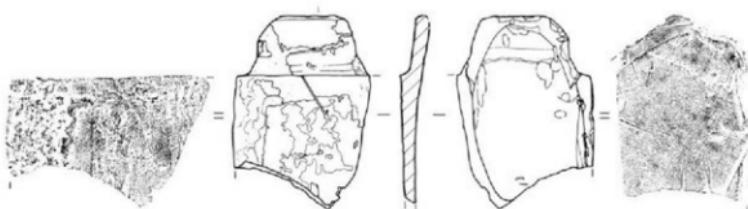
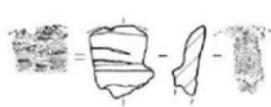
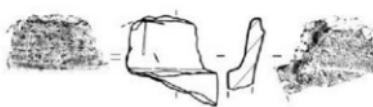
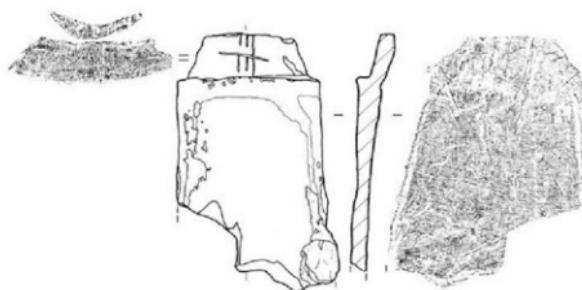
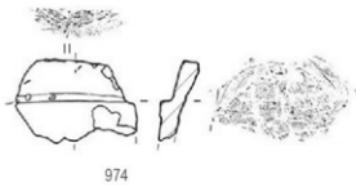
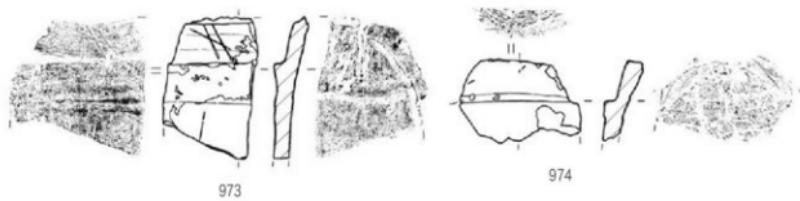


972



971

图版128 屋瓦16 明朝系丸瓦 (4)



0 20cm

第148図 屋瓦17 明朝系丸瓦（5）



973



974



975



976

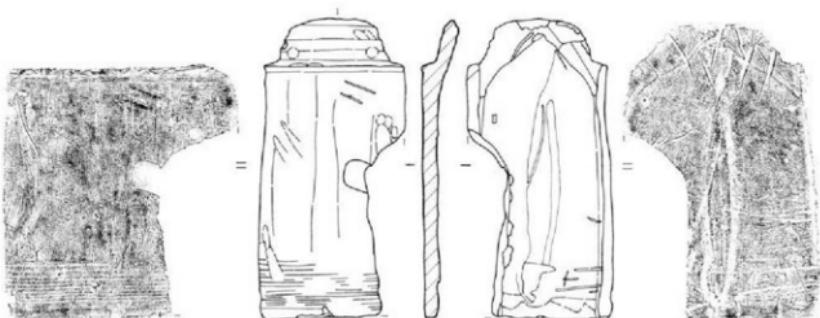


977

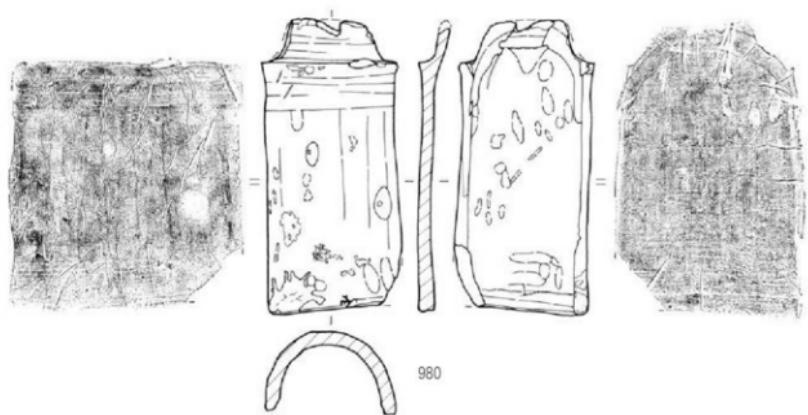


978

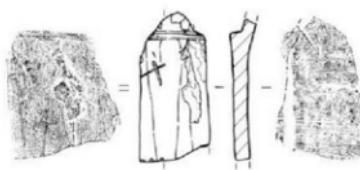
图版129 屋瓦17 明朝系丸瓦 (5)



979



980



981



第149図 屋瓦18 明朝系丸瓦（6）



979

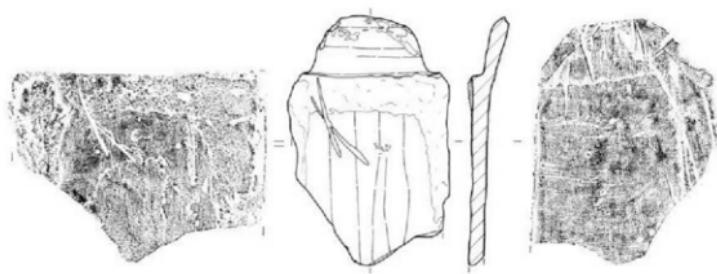


980

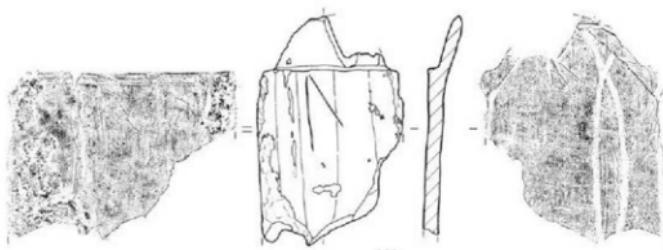


981

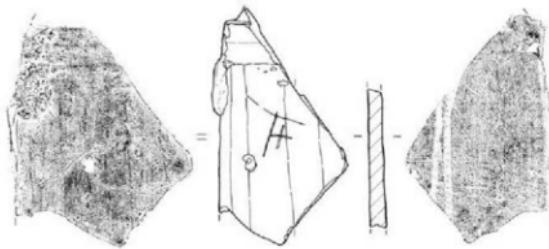
图版130 屋瓦18 明朝系丸瓦 (6)



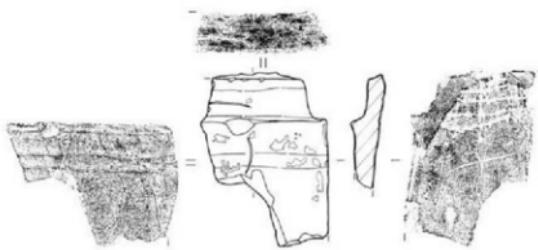
982



983



984



985

0 20cm

第150図 屋瓦19 明朝系丸瓦（7）



982



983

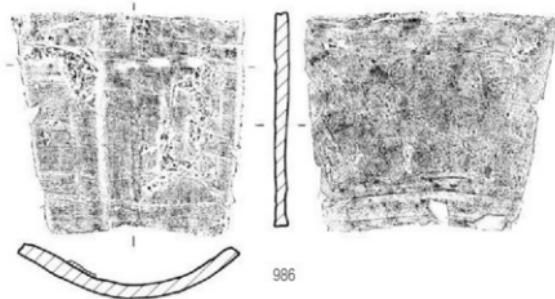


984

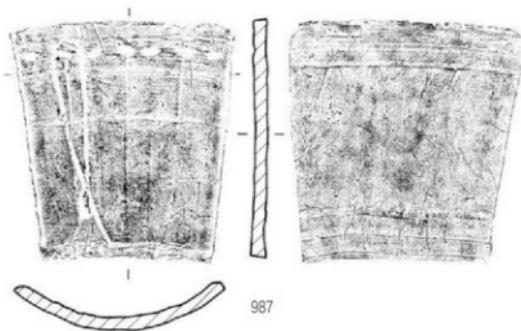


985

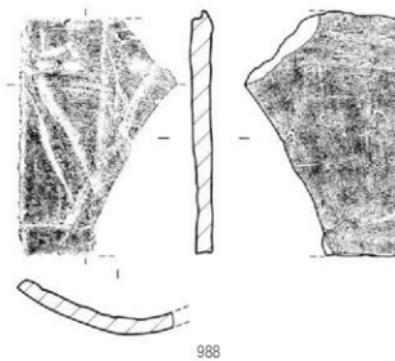
图版131 屋瓦19 明朝系丸瓦 (7)



986



987



988



第151図 屋瓦20 明朝系平瓦（1）



986

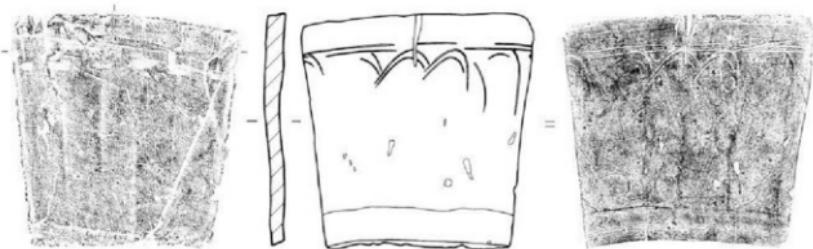


987

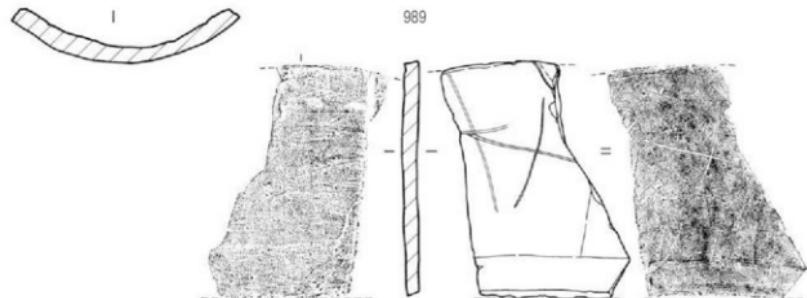


988

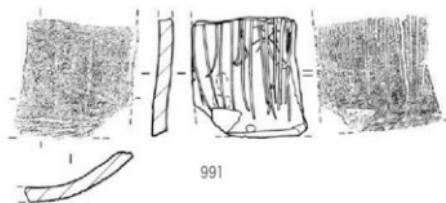
图版132 屋瓦20 明朝系平瓦 (1)



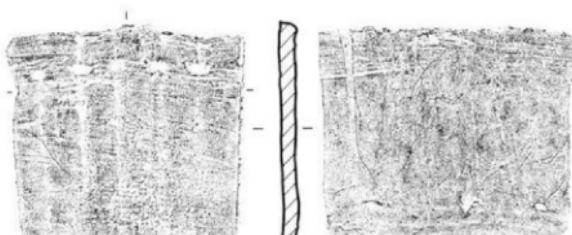
989



990



991



992



第152図 屋瓦21 明朝系平瓦 (2)



989



990

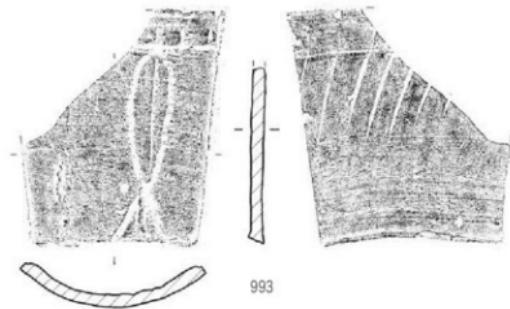


991

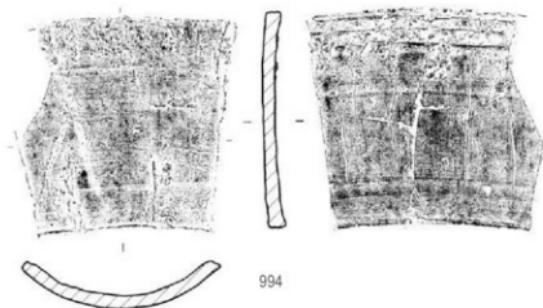


992

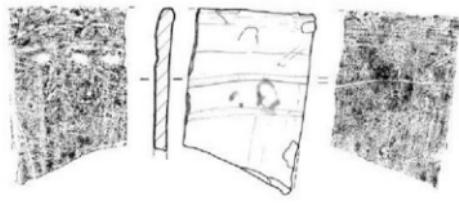
图版133 屋瓦21 明朝系平瓦 (2)



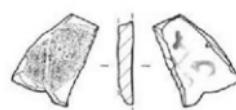
993



994



996



995

0 20cm

第153図 屋瓦22 明朝系平瓦（3）



993



994

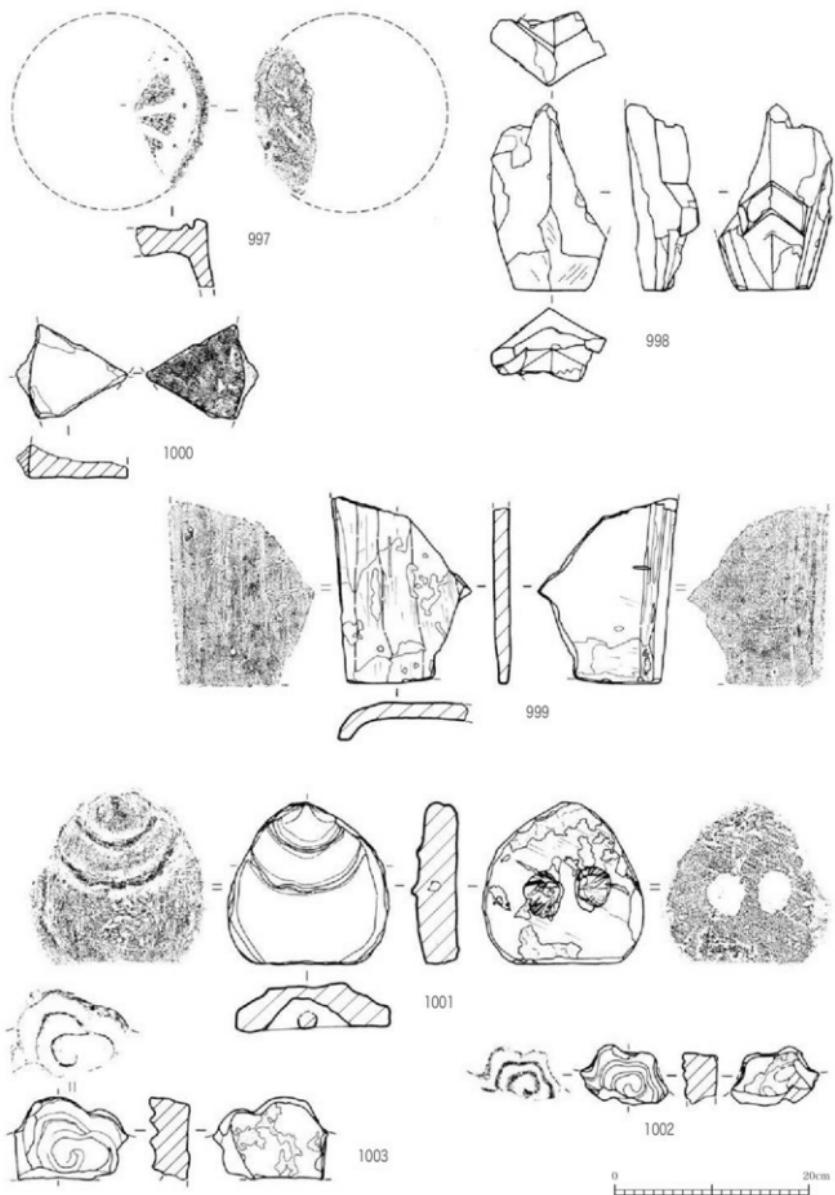


996

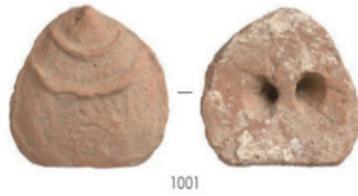
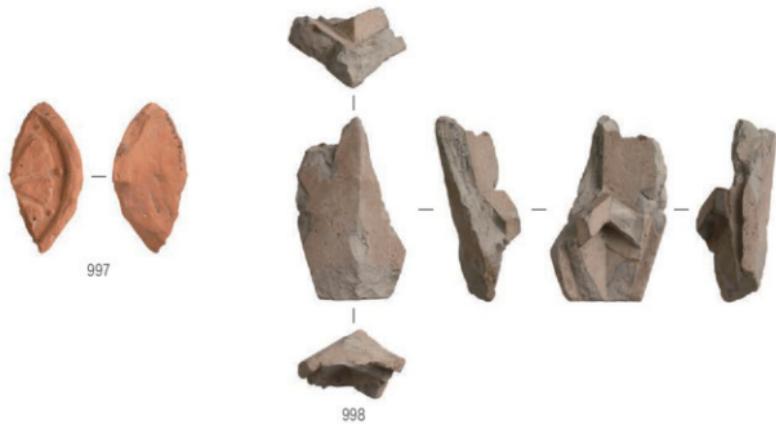


995

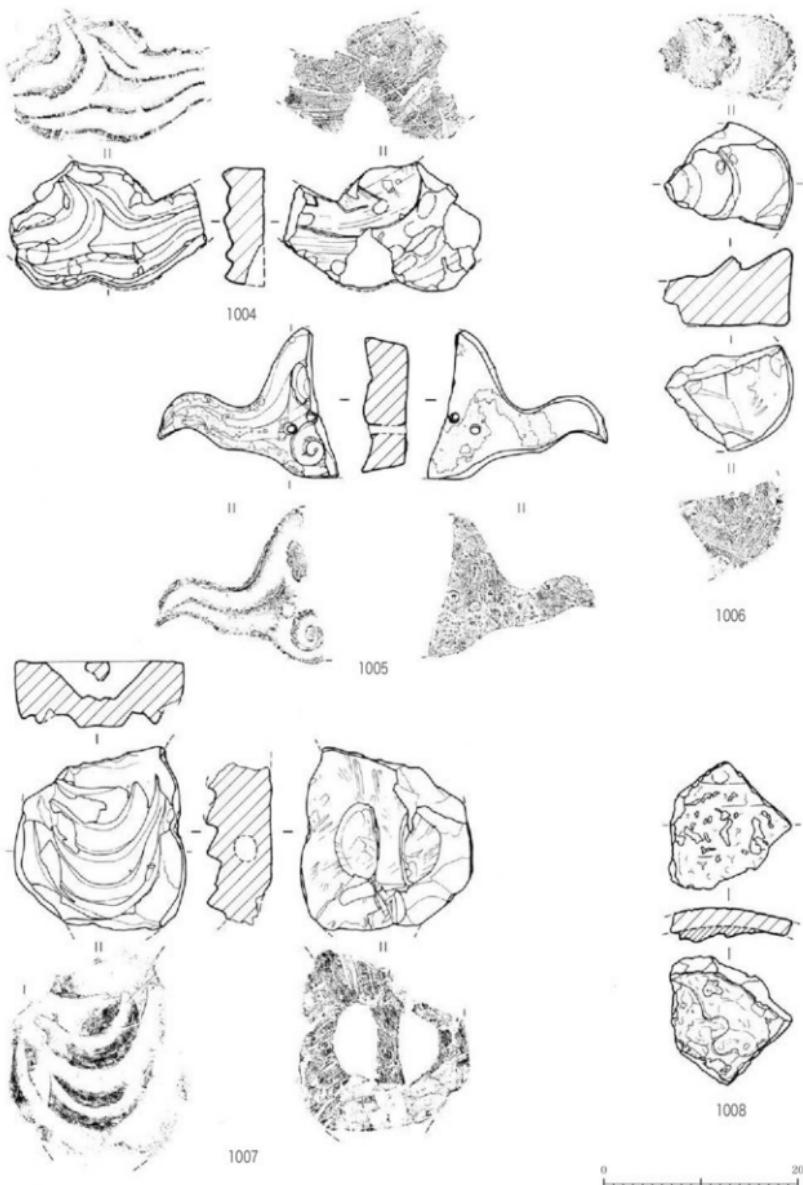
图版134 屋瓦22 明朝系平瓦 (3)



第154図 屋瓦23 明朝系役瓦（1）



图版135 屋瓦23 明朝系役瓦 (1)



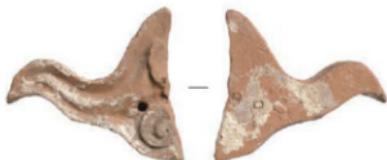
第155図 屋瓦24 明朝系役瓦（2）



1004



1006



1005

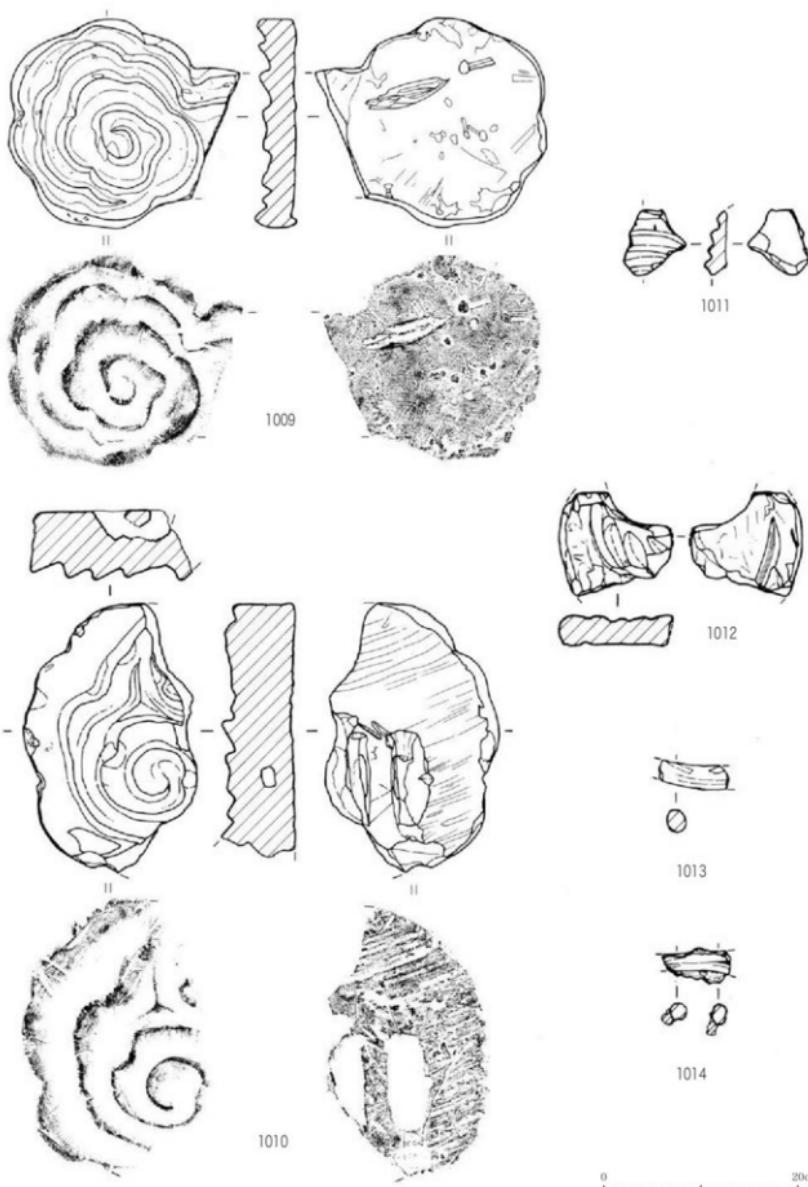


1007

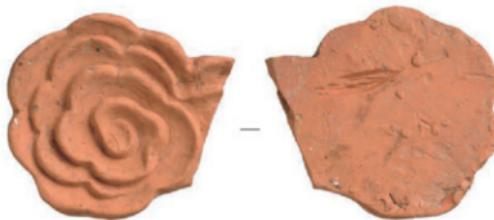


1008

图版136 屋瓦24 明朝系役瓦（2）



第156図 屋瓦25 明朝系役瓦 (3)



1009



1010



1011



1012



1013



1014

图版137 屋瓦25 明朝系役瓦（3）

第24節 塚（第91～94表、第157～163図、図版138～143）

上原 静（沖縄国際大学）

はじめに

塚は総数480点出土した。その機能と平面形態からI～IVの4タイプに大別される。Iは平面形が長四角形で、複数組み合わせて使用するもので、噛み合わせの凹凸面の違いからA～Cに分けられる。IIは下駄状の突起を成形するもので、一つ独立して説明する。IIIは平面的に敷いて機能するもので、平面形が正方形と三角形の2タイプが存在する。IVは平面形が長方形で漆喰などの接合材を併用して積み上げて使用するタイプである。以上これらはさらに色調により違いが認められた。以下に分類別に概観する。

A. 分類

I. 端部噛み合わせタイプ

平面形が一般的に長方形で、長軸の側面か短軸の両側面に段を成形し、それぞれをかみ合わせて使用される。当該製品はその他の製品に比較し概して厚く、還元焼成の灰色製品に偏在する。その用途として地下に埋設される暗渠などとして使用するものがみられる。

- A. 長方形：蓋としての機能が窺われる。
- B. 長方形：底に敷かれる用途が推測される。
- C. 長方形：暗渠の側面を構成するものである。
- D. 特殊？

II. 下駄状タイプ

平面形が長方形をなし、厚手はみられない。最大の特徴は下駄状に歯がつくもので、その端部にかかりを造るものとそうでないものがある。このタイプには還元炎焼成のみで、酸化炎焼成のものはみられない。色調は灰色を呈する。下駄状のかかりを成形している点から、傾斜部分や蓋の様な用途が推測される。

III. 平面敷き用タイプ

平面形が正方形と三角形を呈するのが基本形態である。還元炎焼成の灰色系製品と、酸化炎焼成の赤色系製品の二群に分け、その厚み、その他成形で細分した。

①灰色製品

1. 正方形

Aa類：一辺の長さが約24cmのタイプで、4.5～6cm台の最も厚いタイプからなる。

Ab類：3～4.4cmの薄手のタイプである。側面に×状の線書きを残すものがある。

2. 三角形

Ba類：4.5～6cm台の厚みのあるタイプで、成形には基本的に四角塚を対角線から切り取って二枚にしたもので、切り取った側面に横方向の線状痕がみられる。表面に

「大」のスタンプを残すものがある。スタンプは明瞭でいずれも目立つ表面になされている。スタンプは複数ある。基本的には灰色であるが、酸化のためか褐色をおびるものも含まれる。側面に2本の平行する線描がみられる。

B b 類：3～4.4cm台の薄手をこのタイプとした。対角線の切り取り側面に手書きによる「×」状の線書きをみとめる。

D b 類：打削する等して二次的に使用したと思われる製品。

②赤色製品

1. 正方形

A a 類：4.5～6cm台の厚みのあるタイプである。この類は灰色製品の酸化製品の可能性もある。量的には極めて少ないため、今後の資料検討により、当類を削除することもある。

A b 類：3～4.4cm台の極めて一般的なもので、出土量の多いものである。薄手である。

2. 三角形

B a 類：4.5～6cm台の厚みのあるタイプ。

B b 類：3～4.4cm台の薄手。側面に右上から左下の斜め方向に2本の線書きをするものがみられる。

IV. 積み重ね用タイプ

専ら重ねて使用するために造形された埴である。上記の埴と形状、大きさに違いがあり、まず漆喰が表裏面に大量に付着し、一部の資料に2枚重なった状態で出土をみたものもある。明らかに積み上げて壁状にしたとみられる製品である。平面形が長方形の板状で、色調により赤色と灰色があり、また、その大きさ、厚みなどから数タイプに分けられる。

①灰色製品

還元焼成焰の灰色製品で、大きくA～Cの3タイプになる。そしてそれぞれに厚みによる違いが認められる。

A類：横12cm、縦23.8cm、厚み3.4cmのもので、現時点では小形である。

B類：横16～18cm、縦29～34.2cm、厚み3.3～4.1cm。この種類は長軸の一側面に削りがあり、湾曲した側面を特徴とする一群がある。それで、Ba 1・Bb 1にわけられる。

C類：横22～22.5cm、縦32.5～34.5cm、厚み4.0～4.4cmの厚いものと、大きさはほぼ類似する横22～22.5cm、縦32～34cm、厚み3.5～3.8cmの薄いものでそれぞれをCa1・Cb1に細分してみた。

②赤色製品

酸化焼成焰の赤色である。A、Bの2タイプに分類される。このタイプにも灰色瓦同様に厚みや大きさによりサブタイプに細分される。

A類：横11cmから11.5cm、縦31cm、厚み4.0～4.5cmである。灰色側よりやや縦長の形をなしている。

B類：明らかに厚みに違いがあることから二分される。a類は横15.5～17.0cm、厚み3.5～3.8cmの薄手と、b類の横17cm、縦33～34cm、厚み4.2～4.4cmの厚いものがある。このグループには側面の角を取り除いて丸くしたものがある。

C類：大きさは灰色群にはみられないものである。この種類にも厚みに2タイプに分けられる。a類は横18～18.5cm、厚み3.0～3.6cmと薄いものと、b類の4.0～4.5cmの厚いものがある。なお、前者のa類には僅かであるが、厚み2.8cmと極薄の種類もみられた。

D類：このタイプは保存状態が悪く完形は得られてない。横が19.8cm、厚みは3.2cm、もう一つは横が20.5cm、厚みが4.3cmとなるもので、この種類にも2種類みられることが分かる。

B. 整形状態と保存状況

一様に塗喰の付着があり、積み重ねて使用したことが推測される。なお、表面にマンガンが塗布されるものもある。

C. 刻印及びヘラ描き

埠には、文字や記号を彫り込んだ刻印と手書きによる記号が残されている。まず、刻印は第91表に示した3種類で、表面と側面に施されている。灰色瓦に偏在する特徴が認められる。ヘラ描きは線の数や方向、交わり状況などから12種類を確認できる。その多くが側面に単純な線で印したものである。灰色に17種、赤色で8種に分けられ、これも灰色瓦に多くみられる傾向がある。



第157図 埠の刻印位置（側面模式図）

第91表 埠の刻印・ヘラ描の種類と説明

形態 記号	分類説明	説明	刻印位置			形態 記号	分類説明	説明	刻印位置		
			表	側	裏				表	側	裏
刻印	◎	正門とその内に斜格子模様を描く	○			ヘラ描	III	斜方向の三本線		○	
	○	小さな小円、複数押印する		○			#	アルファベットのH字状		○	
	X	砂時計形の押印、大小有り	○	○			≠	長い横位の二本線に、斜めの短い一本線が加わる		○	
ヘラ描	—	長い横位の一本線を描く		○		3本線	←	横位に方位記号線の様に描く		○	
	==	長い二本線を描く		○			↖	横位に長手のアルファベットのA字状		○	
	×	二本線をバツ形に交差させる		○	○	その他	*	記号ではない。平面にチヌ盤状		○	
	//	斜方向の二本線		○			≡	横位に三本線・斜め方向に細かい六本の線		○	
	→	長い横位の一本線に、斜めの短い一本線が加わる		○							

第92表 埠の色調と刻印・ヘラ描

色調 位置	分類説明 記号	刻印		ヘラ描												計
				1本線			2本線			3本線			その他			
		◎	○	X	—	=	×	//	→	III	#	≠	↖	↖	*	≡
灰色 (褐色)	表面			1												1
	側面	1	1	1	2	6	2		1	1	1	1	1	1	1	20
	裏面						1									1
	計	1	1	2	2	6	3	0	1	1	1	1	1	1	0	22
赤色	表面														1	1
	側面					1		1								2
	裏面															0
	計	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	3
合計		1	1	2	3	6	3	1	1	1	1	1	1	1	1	25

小 結

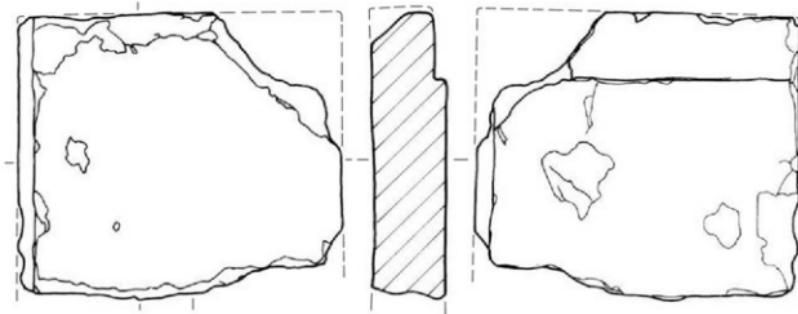
出土した壇は、形態的特徴から4種類に大別したが、その用途や使用の在り方から、組み合わせて立体的に使用するもの、平面的に敷き並べて使用するもの、さらに、平面を積み重ねて使用したものに分けることができ、使用の多様性をみることができた。また、焼成、製作技術の違いが認められ、主として灰色系と赤色系に区別することができた。17世紀前半以降の製作年代を反映していることがみられる。また、出土資料はいわゆる消費遺跡に属するものであるが、生産と関わる刻印やヘラ記号も確認され、生産遺跡における工人の動きや、流通システムを検討する貴重なデータを追加することができた。刻印やヘラ記号は基本的には、a.帰属、b.封印、c.認証・検定、d.権威の象徴としての印などの機能が考えられる。今後、隣接する首里城正殿建物など主要建物（消費建物）の資料追加を待って、さらに周辺地区の出土資料との関連を検討することで、よりその性格がみえてくるものと考えられる。

第93表 埋観察一覧 1

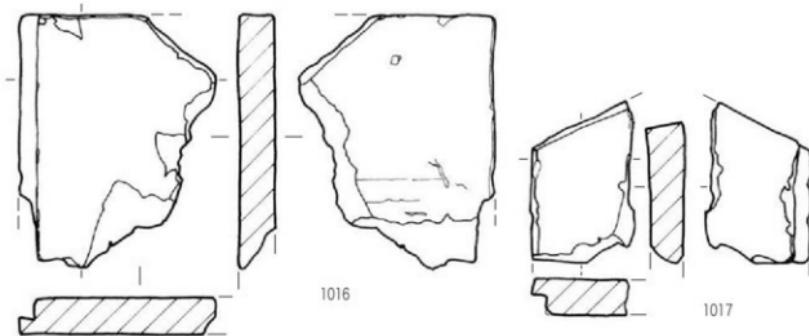
図 図版 番号	種類分類	残存 部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第158図 図版138 1015	I 類	A 角2 有り	灰色	表面はややナデが良好で滑面になり、3mmほど凹面する。裏面はやや粗面を呈しほぼ平坦面になる。長軸の半分を欠落しているが、側面と端部に各々大きさの異なる組み合わせの段を見ることができる。横26.5cm。器厚み5.8cm。	11	J-10 20~30
第158図 図版138 1016	端部 端 部	C 角1 有り	赤色	表面の調整は良好で光沢があり、確かに凹面する。裏面は型枠の様な面跡が筋として残り、やや粗面になり、特段の整形は行われていない。細工として端部側に組み合わせの段が施される。器厚み3.0cm。湧田系堆。	11	擾乱
第158図 図版138 1017	喟 み合 わせ	C 角1 有り	灰色	側の角度が四角ではなく、約120度の鈍角を呈する破片で、組み合わせの段がみられる資料。風化が進んだ表面はやや凹面を呈し、裏面は製作時の搔き傷が残り、苔状の付着物がみられる。厚み2.7~3.1cm。湧田系堆。	11	擾乱
第158図 図版138 1018	式	D 角2 有り	灰色	平面形が長方形を呈する。抉りの施された一側面側は欠落、逆の側面は平面を造形し対象的でない。当該面にはヘラ搔きによる刻線がある。側面は全体に裏面側に向かい内傾する。表面は凹面する撫で面で、裏面は凸凹のある粗面になる。長軸の一端の表面側に目詰めのような漆喰が付着する。器の厚み約4.0cm。	11	擾乱
第159図 図版139 1019	II 類 下駄 駄状 式	- 角2 有り	灰色	平面形長方形の資料。横幅24.1cm、厚み3.2cm。長軸に対して垂直方向に下駄状の突起が付けられている。この高さを含めると7.2cmを測る。表面は光沢がある撫でなされ。裏面は製作時の割り面が残る。また、裏面における長軸の一端は斜めに薄く割りがなされている。下駄部分の側面にもられ、いすれもはの込みの利便を考えての造作とみられる。	11	擾乱
第159図 図版139 1020		Aa 角3 有り	灰色	平面四角形の大形破片。確かに一角のみを欠落する。表面は撫で良好。両面に細かな魚骨や炭火物の混じりあつたものが付着する。裏面は製作時の面の今まで特段の整形跡はみられない。縦横ともに25.5cm。器厚は約5.9cm。	11	J-11 20~30
第160図 図版140 1021		Ab 角1 有り	赤色	平面が四角形の側面を残す破片。表面は風化が進み混入物が露出する。裏面は製作の型枠の板殻が残る粗面になる。色調はやや生焼け褐色。側面に破損しているが、弧状のヘラ書きの刻線が残る。側面の上半部には水垢が水平方向に汚れてみられる。厚み4.2cm。	19	B-1 石積み6 西側上層
第160図 図版140 1022		Ab 角1 有り	赤色	平面形が四角形の4分の1の破片。上面は平滑に撫で仕上げされ、その面にチェス盤の様な手書きによる線書きがなされている。裏面は製作時の粗面のままになる。焼成良好。器厚は約3.3cm。湧田系堆。	11	擾乱
第160図 図版140 1023	III 類	Aa 角3 有り	灰色	一部角を欠落するが、平面四角形の大形資料。表面は平滑に仕上げられるが、やや凹面する。製作時にとくに整形した痕跡はみられない。焼成良好。器厚は4.6cm。	11	擾乱
第161図 図版141 1024	平 敷 式	Ab 角1 有り	灰色	表面は滑面になる。破片であるが、裏面には粘土製品を重ね置いた様に平行する凸線が認められる。厚み4.2cm。	19	擾乱
第161図 図版141 1025		Ba 角1 有り	赤色	平面形が三角形の製品で、45度の側部分がいづれも破損している。表面は撫で良好。裏面は粗面。斜めの面は内側に傾斜する。焼成良好。器厚み約4.5cm。	11	J-10 20~30
第161図 図版141 1026		Bb 角2 有り	灰色	平面形が三角形の製品で、45度の1側が破損している。焼成良好。上面は風化と使用のためであろうか器面の剥離が進んでいる。裏面は粗面のまま。一辺が約24.6cm。器厚み約4.4cm。	19	B-1 石積み6 西側上層
第162図 図版142 1027		Db 角2 有り	灰色	四角形の壇を2分割するように打削した二次製品である。その使用は重ねるためであろう表面に漆喰の付着が多数認められる。一辺の長軸約25cm、幅約13.6cm、厚み4.3cm。	11	擾乱

第94表 埋観察一覧2

図 図版 番号	種類分類	残存 部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第162図 図版142 1028	IV 類 積 み 重 ね ね	Ba1 角2 有り	灰色	長軸の一端が破損した製品であるが、平面形が長方形を呈する。特徴的な点は長軸の一つの側面が角取りが行われている。船約1.70cm、厚み約3.9cm、表面のみに漆喰の付着あり。	11	擾乱
第162図 図版142 1029		Cb1 角2 有り	灰色	上記資料よりさらに大きい長方形を呈する資料。しかし、長軸の一端が破損している。長さは船約2.20cm、厚み約4.0cm、表面に厚み1.5cmを測る漆喰痕をとめる。側面などに面附は認められない。	11	擾乱
第163図 図版143 1030	不 明 片	破片	灰色	船約14cmの製品、両端が欠落しているため本来の長さは不明。厚み最大4.4cm、表面に雲形の粘土紐で描く文様があり、これまで百里城3例目である。注目されるのはこの文様面上に大量の漆喰が塗っている点から、破損後に再利用されたものと考えられる。	11	J-8 茶褐色灰混 層
第163図 図版143 1031	ABB Ab	褐色系 灰色 角2 有り	褐色系 灰色	側面に舟底の平面形が丸く、内部が格子状をなすスタンプ文である。鮮明である。厚み約3.4cm、湧田系埠。	19	B-5 シーリ内木炭 層(壁)
第163図 図版143 1032		角2 有り	褐色系 灰色	側面に竹状のマンで2点施したもの。円文の直徑約1cmと極めて小さい。厚み約3.5cm。	11	擾乱
第163図 図版143 1033	Ab	角3 有り	灰色	25mm×25mmの方形埠、目立つ平面の中央にマンが押されている。ただし、印は小さい。砂時計形をしている。当該スタンプの長軸長さ1.4cm。	11	J-10 20~30
第163図 図版143 1034	ABB ABB	角1 有り	灰色	側面に砂時計形の線書きをしたものである。砂時計形の長軸長さ約2.3cm、埠の厚み約3.3cm。	11	擾乱
第163図 図版143 1035		角1 有り	灰色	側面に長い一本の線書きをした印である。厚み約3.3cm。	19	A-1 石積み6 西側下層
第163図 図版143 1036	III 類 Ab	角1 有り	褐色系 灰色	側面に横位方向に長い沈線を印すもの。厚み約3.7cm。湧田系埠。	11	I-8 10~20茶褐 色灰混層
第163図 図版143 1037		角1 有り	灰色	側面の印は中央にへらの様な道具による引っ搔く線で、大きくな状に印す。厚み約4.2cm。	11	擾乱
第163図 図版143 1038	平 敷 式	Ab	角1 有り	側面にさほど大きくな状の線書きを残す。厚み約3.6cm。	11	擾乱
第163図 図版143 1039		Ab	角1 有り	側面にさ状の線書きをした印。厚み約4.3cm。	19	擾乱
第163図 図版143 1040	Aa Ab	角1 有り	灰色	側面に横位の平行する三本線を印す。厚み約4.8cm。	11	擾乱
第163図 図版143 1041		角1 有り	赤色	側面に平行した斜めの二本線で印す。厚み約3.3cm。	11	擾乱
第163図 図版143 1042	ABB	破片	灰色	側面に横位の一本線に斜めから一本交差させた印である。厚み約3.6cm。	19	B-5 シーリ内木炭 層(壁)
第163図 図版143 1043	Aa ABB	角1 有り	灰色	側面に縱位の平行する二本線に垂直方向から一本交差する線書きである。Hの線にみられる。厚み約4.6cm。	19	B-1 石積み6 西側上層
第163図 図版143 1044		角1 有り	灰色	側面に横位の長い線に斜めから交差する線、さらにはその両方にかかる垂直方向の短い線の計3本の線で構成される。Aの字を横にした様にみられる。厚み約3.6cm。	19	B-5 シーリ内木炭 層(壁)
第163図 図版143 1045	ABB	角1 有り	灰色	側面に極めて細い線で、横位に3本、斜め方向から一本交差させた線描。厚み約3.3cm。	19	擾乱

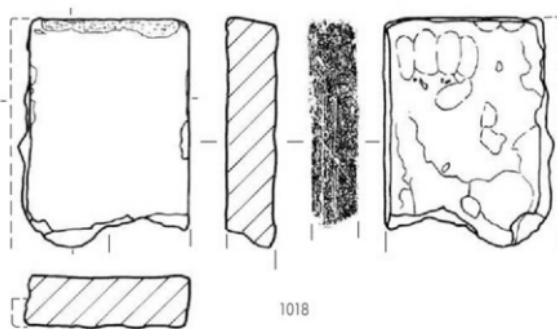


1015



1016

1017



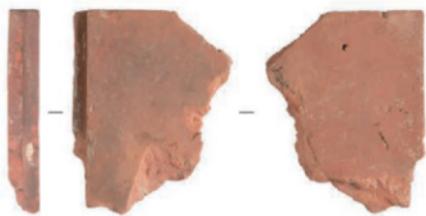
1018

0 20cm

第158図 墳1



1015



1016

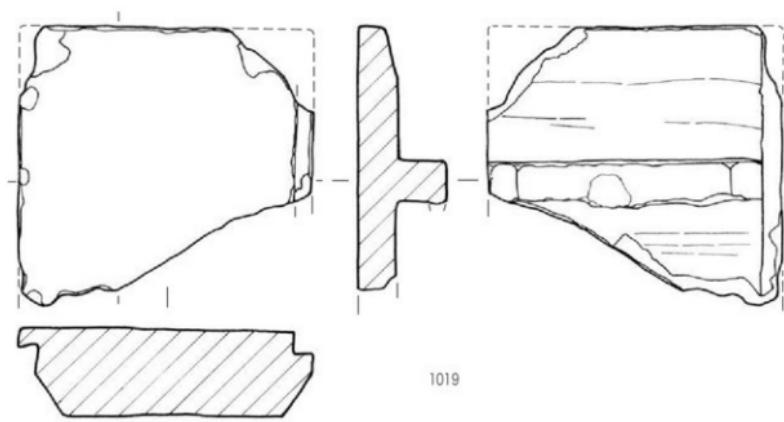


1017

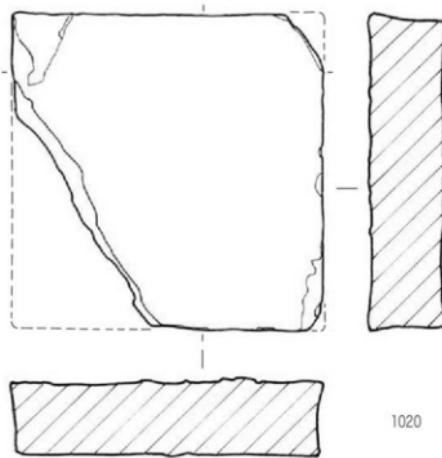


1018

圖版138 塚1



1019



1020



第159図 塚2

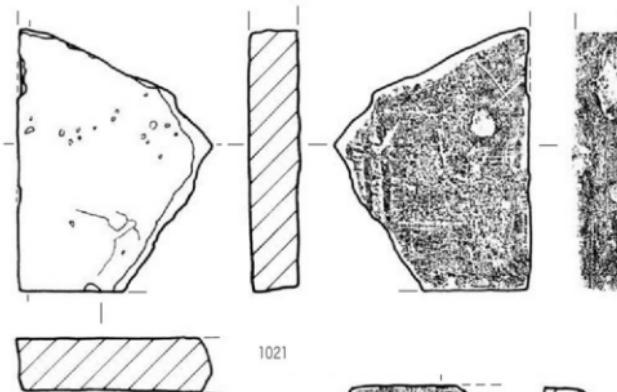


1019

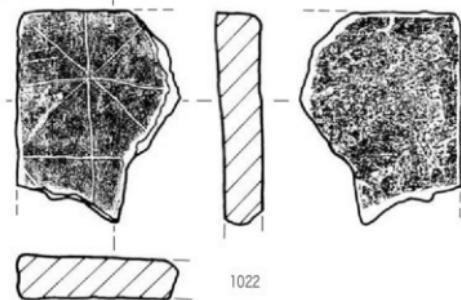


1020

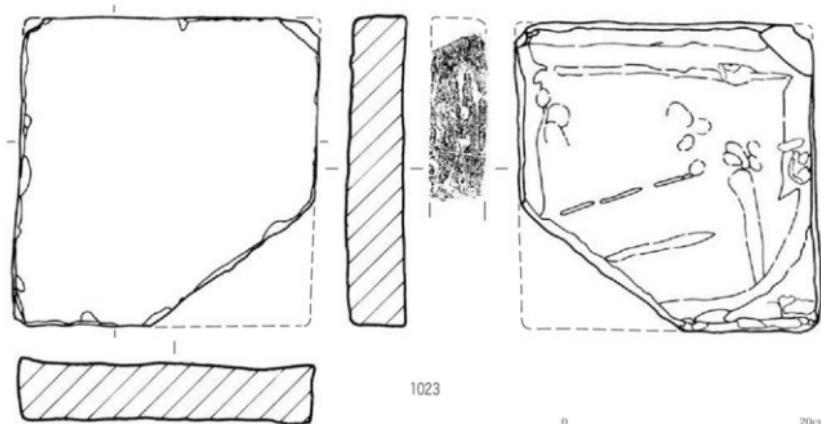
圖版139 塚2



1021



1022



1023

0 20cm

第160図 塗3



1021

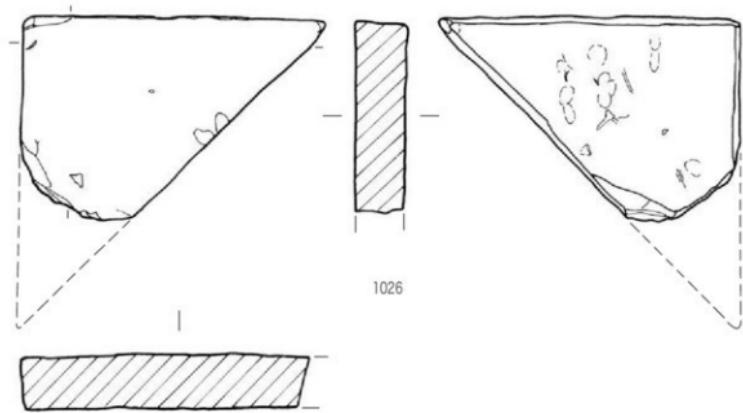
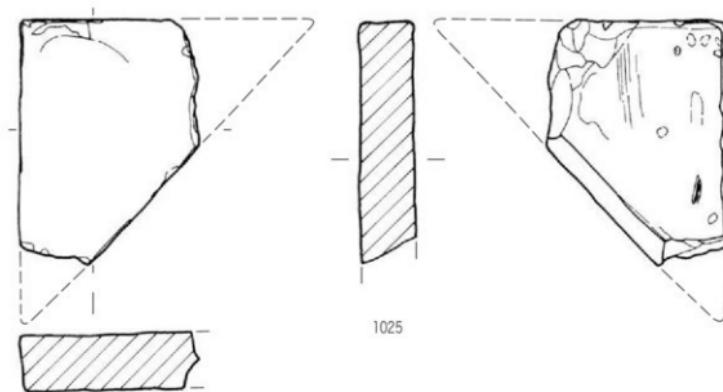
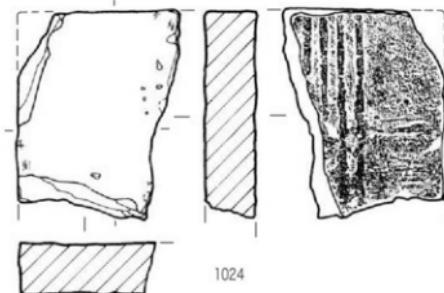


1022



1023

圖版140 塚3

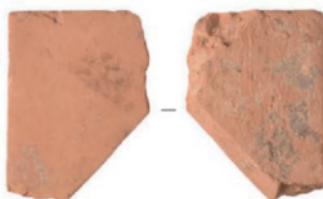


0 20cm

第161図 墳4



1024

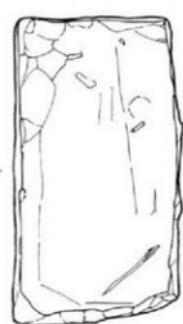


1025

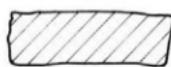


1026

圖版141 塚4



1027



1028



1029



第162図 塚5



1027

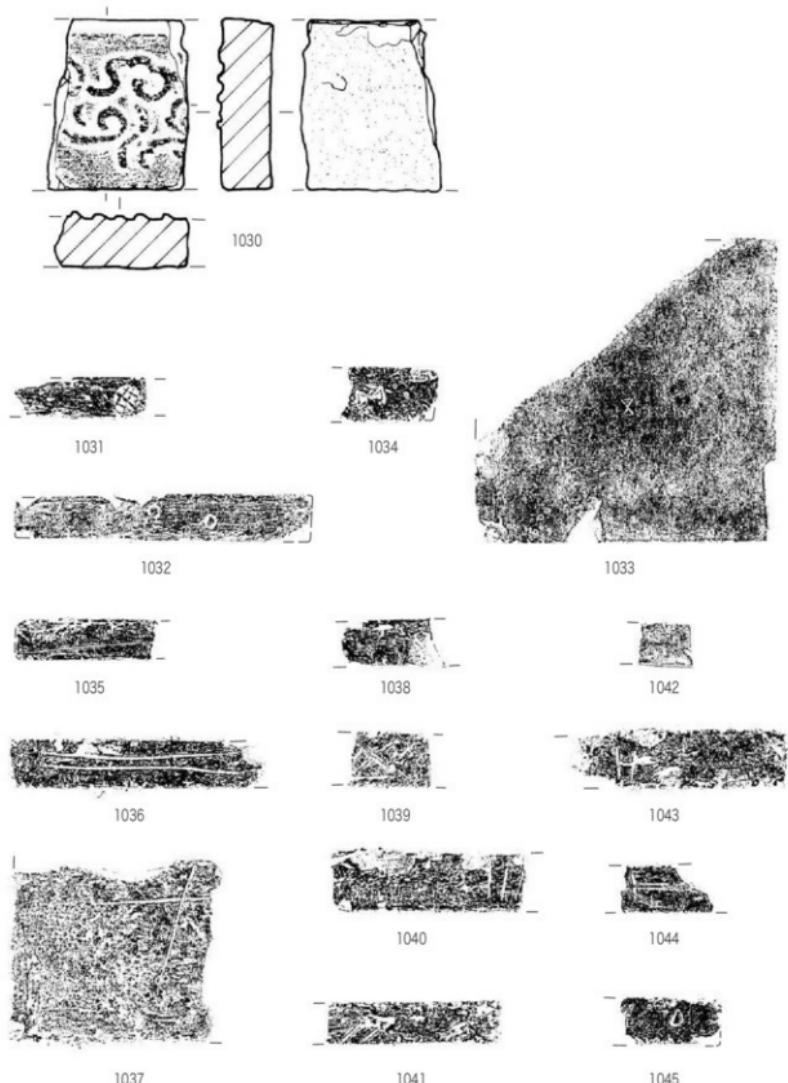


1028



1029

圖版142 塚5



0 20cm

第163図 塚6



1030



1031



1034



1033



1032



1035



1038



1042



1036



1039



1043



1037



1040



1041



1044



1045

图版143 塚6

第25節 貝類遺体

黒住耐二(千葉県立中央博物館)

ここでは、平成11(1999)年度と平成19(2007)年度調査のピックアップ法で得られた貝類遺体について、大半は搅乱層の出土であるが、今回は一括して報告する。なお、シーリ遺構内から出土した貝類を含む自然遺物は、第27節シーリ遺構内の自然遺物としてまとめて報告する。

1. 出土の詳細

第95表及び別添CD-ROMに、平成19(2007)年度調査のピックアップ法で得られた遺体の詳細及び、平成11(1999)年度調査分の出土状況詳細を示した。

両年度分の調査あわせて、全体として少なくとも海産腹足類22科73種、海産二枚貝類18科45種、陸産腹足類5科7種が確認された。その中には、平成11(1999)年度調査のキスジニクタケ・オキナワスレ等の僅かではあるが復帰後と考えられる工事用土砂に含まれる海底堆積物由来の種や、太平洋戦争中の移入カタツムリであるアフリカマイマイが含まれ、いわゆる“混入”も認められたが、その割合はきわめて低いものであった。なお、タニシ類を含む淡水産腹足類は確認されなかった。

2. 優占種とその生息場所

両年度の優占種を第164図に示した。平成19(2007)年度ではカンギクが約30%と最も多く、アラスジケマン・イワカニモリが10%程度と続いている。平成11(1999)年度では、アラスジケマンが約20%と最も多く、カンギク・ヤコウガイ・チョウセンサザエが10%程度となっていた。

これらを生息場所類型で見てみると(第165図)、平成19(2007)年度では約半数がカンギクやイワカニモリの生息する内湾-転石域のもので占められており、アラスジケマンの河口干潟-マングロープ域が約15%と続き他のものはおよそ5%以下であった。平成11(1999)年度では、内湾-転石域が最も多いものの、河口干潟-マングロープ域も20%、他のサンゴ礁域も10%程度であった。

両者の相違は、取上げ方法に起因する部分も想定されるが、詳細な地点ごとの違いによるものかもしれない。ただ、全体としてみると、内湾のカンギクと河口干潟のアラスジケマンが多いという沖縄本島全体のグスク時代の貝類遺体組成を反映していると言えよう。グスク時代になるとカニモリガイ類等の塔型の小形巻貝類が増加する傾向が知られ(例えば黒住・金城1988)、首里城跡においても、イワカニモリやリュウキュウミニナが優占種となっており、この傾向が認められる。

3. 首里城跡としての特徴

優占種とその生息場所では、他のグスク出土貝類遺体と類似した傾向を有していたことを指摘した。首里城跡内の他地点やその他のグスクとの詳細な比較検討は今後の課題であるが、いくつかの注目される点について示しておきたい。

ひとつ目は、カンギクやアラスジケマンが優占するものの、その割合は低く、平成11(1999)年度調査で顕著であったが、5~10%程度の割合を占める優占種が多く、その生息場所も比較的多岐にわたっていた。

第95表 ピックアップ法で得られた貝類遺体リストと最少個体数

腹足類	平成19年調査						平成11年調査						腹足類	平成19年調査						平成11年調査					
	完形	破損	体屈	MNI	完形	破損	体屈	MNI	完形	破損	体屈	MNI		完形	破損	体屈	MNI	完形	破損	体屈	MNI				
ニシキウズ	1	1	8	9	1	4	6	7					オシナシヤタ	1	1	2									
ムラキウズ	0	1	1	1					3	3			ナツヨウロミナシ	1	1	1									
ギンタリハマ	0	0	3	3	2	8	8						クロドモセキ	1	1	1	2	3							
セラサカティ	0	10	67	67	1	22	66	67					マダガイモ	2	2	2	4	3	3	6					
オキナワイシダヒ	2	1	0	3	1		1	2					サザナイトモ	1	1	2	1	1	1	2					
セラサカ	2	0	0	2									セラサカヒコ					1	1	2					
ヤコウガイ	1	18	344	5	55	630							ヤナガシボリ	4	1	4	2	2	2						
ヤコウガイ(フタ)	79	40	84	119	129	116	197	245					ハイロミナシ	2	2	4		1	1						
チャモシサンサザエ	44	31	50	75	124	136	112	260					イカバハイモ	7	1	3	10	1	1	1	3				
チャモシサンサザエ(フタ)	49	13	1		77	8	1	85					アシジマモ					4	4						
コシダガサザエ	3		3										小形モモ	1		2									
カシダグ	404	136	53	593	162	70	30	262					中型モモ		1	1									
カシダグ(フタ)	14	1	2		2								ムシロタケ					1	1						
コシダガマカギ	2												キヌクニタケ					2	2						
キバアカガイ					1		1						ツヅラコ	25	2	25	52	5	9	9	23				
マルツコブネ	5	1	1	8	3		3						オキナワヤタニシ	47	9	15	71	1	1	2	4				
アマオアキガイ	2	2		4	3		3						アリカヒマツ	1	0	3	4				4	4			
ニシキオオブネ	1				1								シリマツマイ	4	5	4	13								
カノコガイ	1				1								オキナワカラワミマイ	2	0	0	2								
オニノコガイ	1	3	4	2	7	1	10						イトマンマイマイ	1	3	1	5								
コザツノブネ	1				1								シリカツマイマイ	1	1	3	5								
ヒメアツカニセリ	1																								
イワリ(ウニナ)カニモリ	92	135	32	259	10	30	10	50																	
カワミカニモリ	13	40	3	56	2	19	2	23																	
ナガタクノカニモリ					1	2	3																		
ゴマツコ	3	2		5																					
リュウキュウウミニナ	12	69	15	96	7	5	2	14																	
イボミニナ	2	19	2	23	2	8	1	11																	
イトケヘタタリ					9	9																			
カワツイ	1	15	27	43	2	3	5	9																	
マドモウニニナ					1	1	2																		
セシシングダイ									4	4															
オハグサダイ	15	7	5	27	101	14	23	138																	
キジマガキ						1	5	6																	
マガキモ	3	56	14	73	58	166	12	236																	
スイショウガイ	1		1	1	1		1																		
モガイ	3	3		4	4	5	4																		
スイジイ							5	1																	
アフラクスズメ	6			6	1		1																		
ヤクシマガカラ	1	2	3		1	1	2																		
ヒメホシダカラ						2																			
チクララサキダカラ					1		1																		
シキシキタ	1		1	2	1	1	4																		
チツモモキ	3	1		4					5	5															
コビンダカラ									5	5															
ハナタクダカラ	6	1	5	12	5	1		6																	
キイダカラ		1	1	2	1		1																		
ハナマルユキ	2	2	9	13	5	8	5	18																	
チリダカラ	1				1	1																			
トミガイ	1				1																				
ペラキツコガイ	1				1																				
カクシミタマ	1				1																				
オキニシ		2	2						1	1															
ウズラサカ									3	3															
ウズラシグマシ	1				1																				
レンジダンモモキ	1				1																				
フレイシ	1		1	1	1																				
シラウモガイ						3		3																	
コオニコブネ	4	4	8	4	1		5																		
アトコガイ	1				1																				
カニノチムシロ	2				1																				
ヒメホウハイ	1				1																				
ノシガイ	1		1		1																				
シマベココバミ	16	2	4	22	1	1	3	5																	
イドキボリ	1	3	3	3	1		3	4																	
ナガイモガボ						1		1																	
リュウキュウツマツ						1		1																	
ナトロボ							1	1																	
ジュドウマクラ						1																			
その他のバイオニア(種)																		3	2	2	5				

この傾向は、これまでの首里城跡各地点の結果（例えば大城1988、金城2007、山本2007、羽方・仲座2007等）とも類似しているようであった。これは、貝塚時代の遺跡前面の環境に依存する優占種組成と異なっていると思われる。嗜好される種が“少量ずつ”持ち込まれた、言い換えると比較的幅広い食用貝類の利用があつた可能性もある。

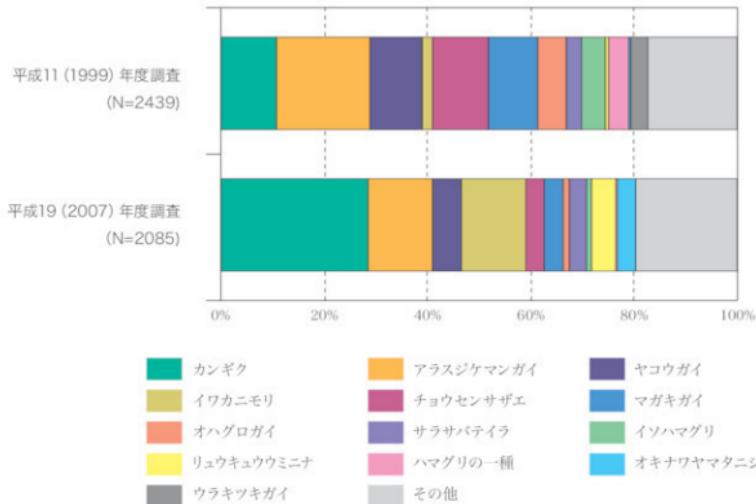
次に、先史時代から現在まで“味の良い貝”として良く利用されるシャコガイ類とクモガイの出土は極めて稀であった。今帰仁城跡では、城外の東斜面で大形のシャコガイ類やサラサバティラが目立ち、“宴会の残滓”とも考えられている（黒住1991）。また、同様な非日常の廃棄遺体として、近世期の役所跡でもある宮古島住屋遺跡でのチョウセンザザエの極めて優占する組成も知られている（黒住1999）。今回の御内原北地区では発掘面積の広さに対して、出土遺体個体数はかなり少ない。これらのことから、当然のことであるが、大多数の中・大形貝類遺体は城外へ持ち出されたと想定される。ただ、これまでのところ、この持ち出された貝類遺体の処理や再利用に関する情報はほとんどないと思われる。貝灰や敷石としての利用等も想定され、これらがわかれることによって、搬出（や再利用？）にかかわっていた人々の生活実態にも貝類遺体から新たな研究の展開があるかもしれない。

また、先史時代に、利器として用いられることが多いホラガイとスイジガイもほとんど確認できなかった。これは、当然金属器等が用いられることに起因すると考えられる。

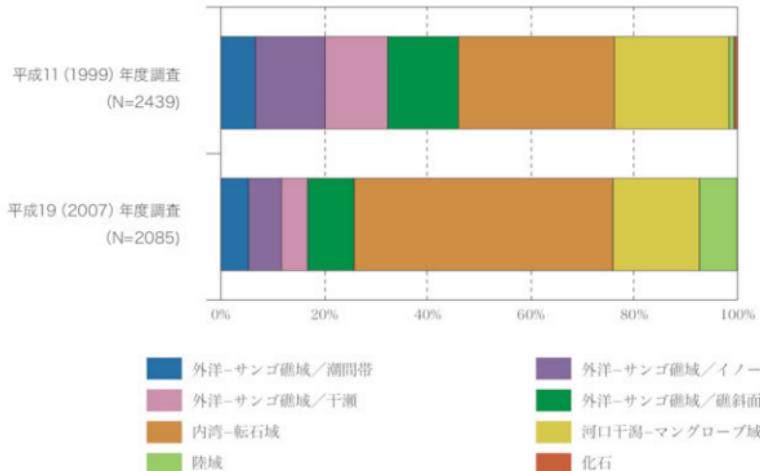
逆に、他遺跡と比較して多く出土した貝類として、ヤコウガイとハマグリの一種が挙げられる。首里城跡におけるヤコウガイの多さは、これまでにも指摘されている（例えば大城1988、上原1989）。当然、隣接したヤコウガイ加工（貝摺）を行った「御細工所跡」では、本種の殻が極めて多く出土し、その利用が想定されている（島袋1991）。前記の“宴会用”に本種の殻に孔を開けて生かしていた例（例えば上原1989）等、多岐の利用が考えられている。しかし、その殻残滓が城内に留められた（後には廃棄されたのではあるか）ことの理由を報告者には想定できない。ただ、近年宮城（2006）は、グスク時代の社会階層ごとの遺物を比較検討し、食料としてのヤコウガイが権力者側に集中していることを指摘している。このような食料残滓以外のヤコウガイ残滓（発掘されるものは軸唇部が多い）の意味付けについても、興味深いものと思われる。

ハマグリの一種は、本州～九州（ヤマト）に分布するハマグリと同種の可能性が高いものの、未だ分類学的な検討が未了な種である。この種を平田ら（1973）はハマグリとして図示・解説している。そのため、首里城跡で発掘されたハマグリ類は、中城湾で得られたもの可能性が高い。ヤマトに分布するハマグリが持ち込まれた可能性も否定できないが、今までのところ、貝合せ等に利用された個体が認められていないので、その可能性はきわめて低いと思われる。なお、中城湾には、平田ら（1973）がチョウセンハマグリとして図示し、“養殖されたこともある”とした別種のトウドユマリハマグリも分布していたはずであるが（先史時代等の遺跡からチョウセンハマグリとして報告されている）、報告者が首里城跡から発掘されたハマグリ類を検討させていただいた中には、トウドユマリハマグリは含まれていなかった。両種をかなり厳密に区別していたことが考えられる。

今回の地点を含め、琉球王国の中核であった首里城において、これまでに王国外から持ち込まれたと考えられる貝類は、ヤマトの近世に用いられた貝杓子由来と想定されるイタヤガイが得られている程度である。様々な交易の結果として、各地の稀少品のひとつとして貝殻が持ち込まれた可能性も想定されるが、出土遺物としては検証できていない。持ち込まれた個体数が極めて稀なことによるものであろう。



第164図 貝類遺体の種組成

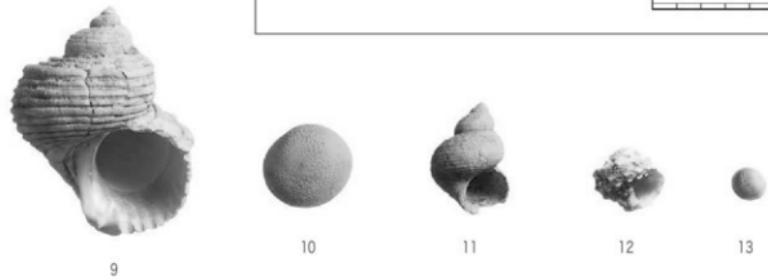
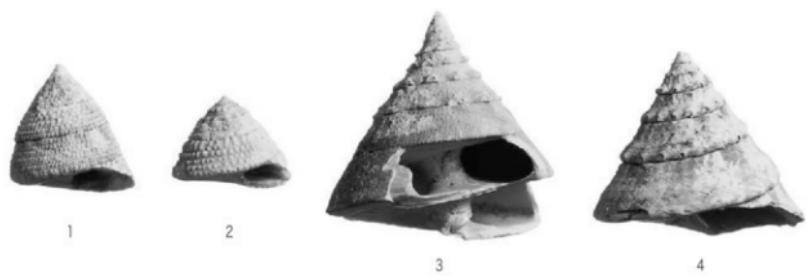


第165図 貝類遺体の生息場所類型組成

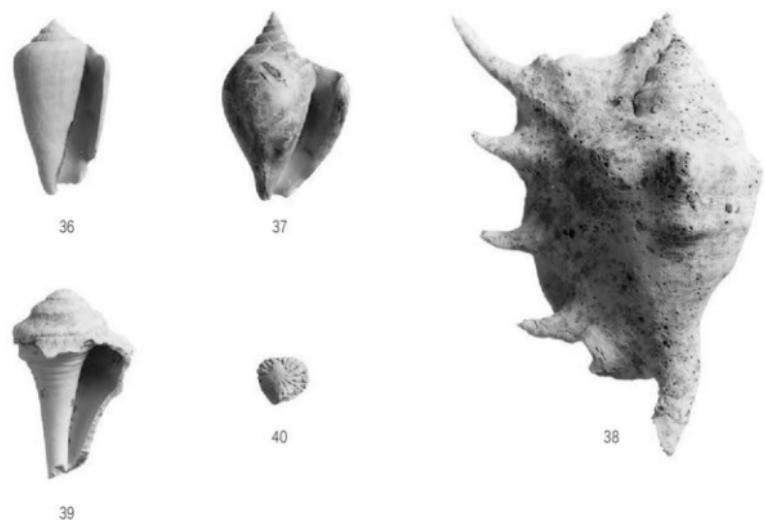
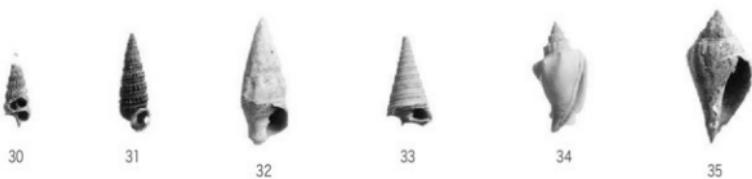
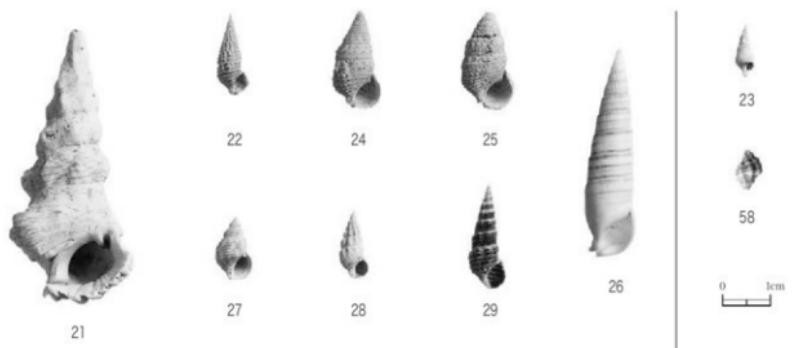
このひとつの要因として、当時の中国が稀少貝類を珍重することがなかったためと考えられる。少し時代は下るが、ヨーロッパ人がアジアへ進出してくると、インドネシア等から多数の貝殻が本国へ送られた状況があり、このような状況とは当時の琉球王国は全く異なっていたようである。

〈引用文献〉

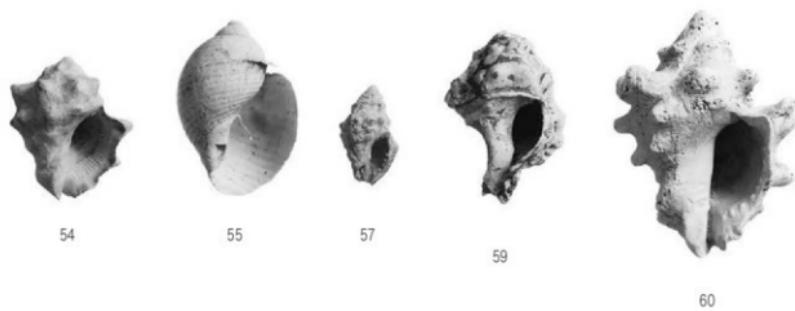
- 上原 靜 1989「首里城跡出土の貝殻」『月刊考古学ジャーナル』311号:5-8
- 大城聖子 1988「貝殻」In 当真嗣一・上原 靜(編)『首里城跡－歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査－』沖縄県文化財調査報告書第88集: 111,121-128.
- 金城亀信 2007「貝類遺存体」In 金城亀信・伊藤由希(編)『真珠道跡－首里城跡真珠道跡地区発掘調査報告書(HI)-』沖縄県立埋蔵文化財発掘調査報告書第42集: 73-75,104.
- 黒住耐二・金城亀信 1988「豊見城村の長嶺、保栄茂および平良グスク試掘調査により出土した貝類」In 金城亀信(編)『豊見城村の遺跡』豊見城村文化財調査報告書第3集: 137-155.
- 黒住耐二 1991「貝類遺存体」In 金武正紀ら(編)『今帰仁城跡発掘調査報告書II』今帰仁村文化財調査報告書第14集: 340-351.
- 黒住耐二 1999「貝類遺存体」In 砂辺和正(編)『住屋遺跡(1)』平良市埋蔵文化財調査報告書第4集: 294-317.
- 島袋春美 1991「貝類」In 金武正紀・島袋春美(編)『御細工所跡』那覇市文化財調査報告書第18集: 123-126, pls. 59, 60.
- 羽方 誠・仲座久宜(編) 2007『首里城跡－黄金御殿地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第45集: 1-275.
- 平田義浩・仲宗根幸男・諸喜田茂充 1973『沖縄の貝・カニ・エビ』144 pp. 風土記社.
- 宮城弘樹 2006「グスクと集落との関係について(覚書)－今帰仁城跡を中心として－』『南島考古』25号: 27-40.
- 山本正昭(編) 2007『首里城跡－御内原西地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第44集: 1-212,4pls.



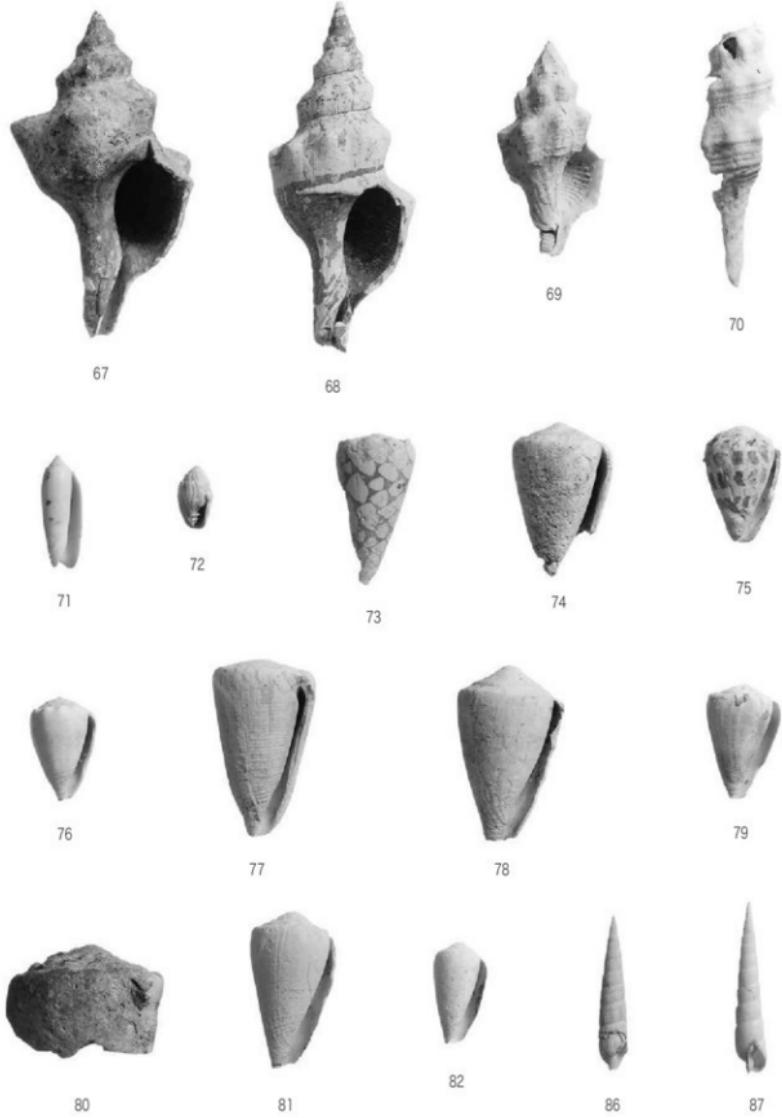
図版144 貝類遺体1 卷貝 (番号は表と一致)



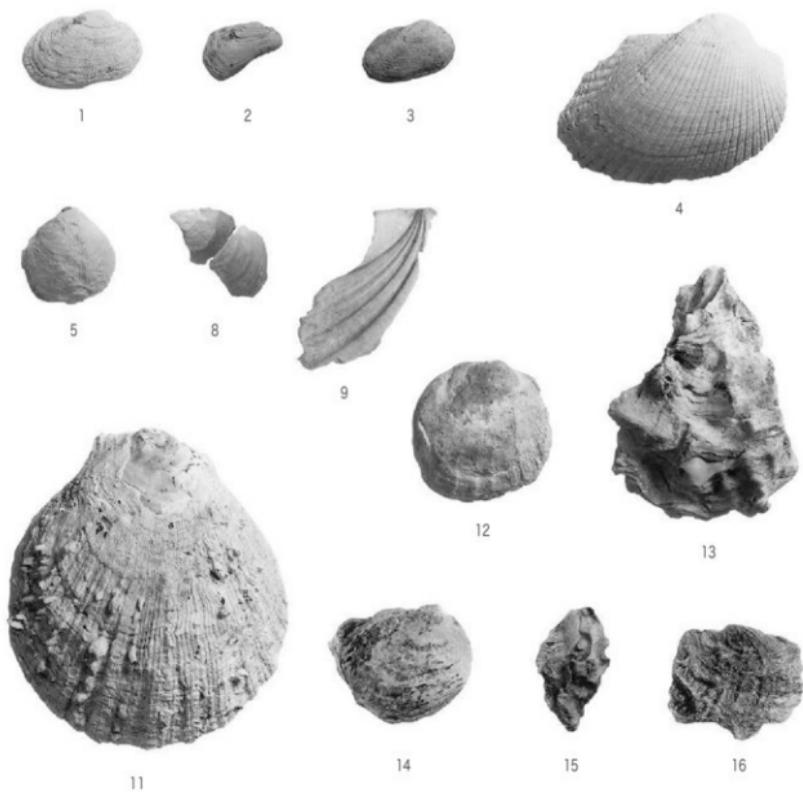
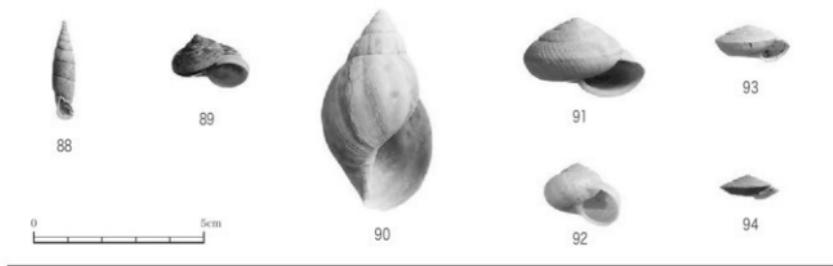
図版145 貝類遺体2 卷貝 (番号は表と一致)



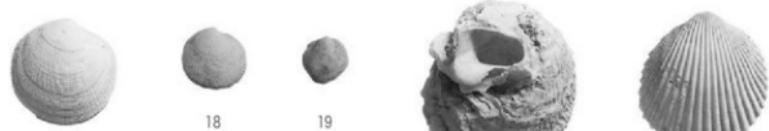
図版146 貝類遺体3 卷貝 (番号は表と一致)



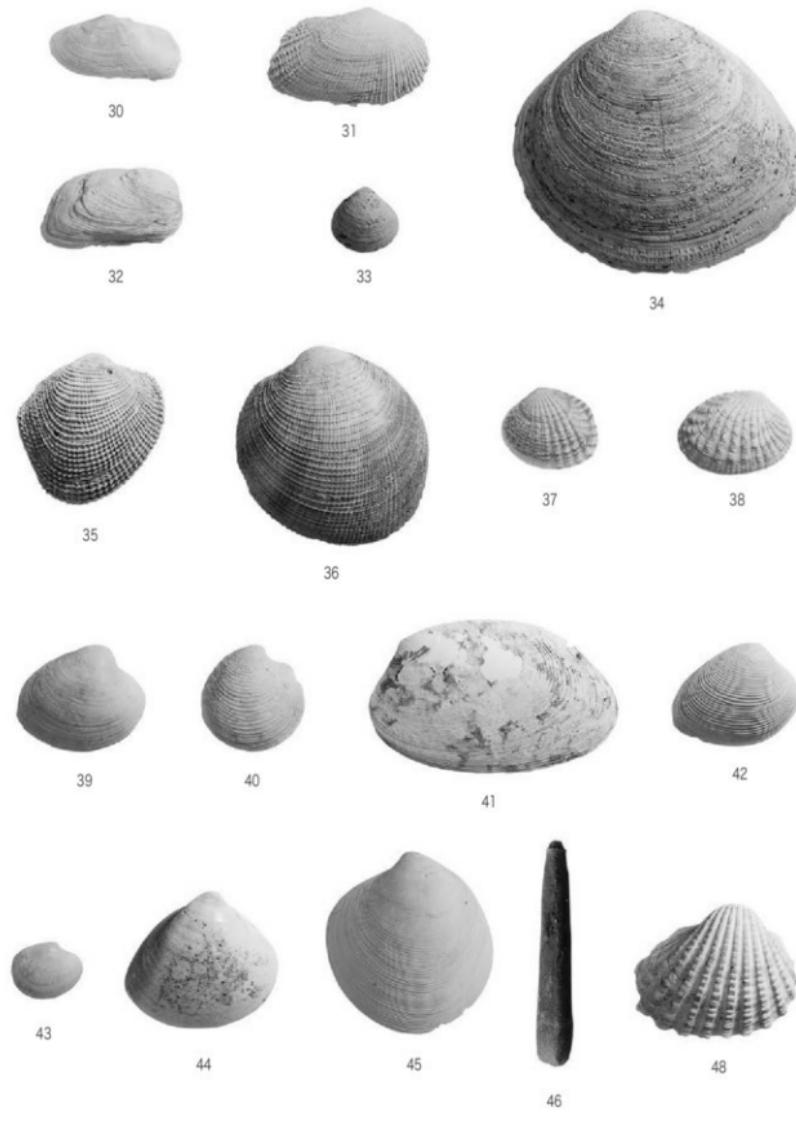
図版147 貝類遺体4 卷貝 (番号は表と一致)



図版148 貝類遺体5 上：巻貝 下：二枚貝（番号は表と一致）



図版149 貝類遺体6 二枚貝（番号は表と一致）



図版150 貝類遺体7 二枚貝（番号は表と一致）

第26節 脊椎動物遺体

菅原広史(浦添市教育委員会)

この節では、平成11(1999)年度及び平成19(2007)年度調査においてピックアップ法で得られた脊椎動物遺体について報告を行う。なお、シーリ遺構内から出土した貝類を含む自然遺物は、第27節シーリ遺構内の自然遺物としてまとめて報告する。

1. 資料の概要

本節で対象とする資料は平成11(1999)年度・19(2007)年度の調査によって得られた脊椎動物遺体のうち、平成19(2007)年度に検出したシーリ遺構から出土した分を除いたものである。本資料は基本的に調査現場において取り上げられた遺物(ピックアップ資料=PU資料)であり、調査年度

第96表 脊椎動物遺体一覧(シーリ遺構出土資料を含む)

軟骨魚綱	サメ類 トビエイ科	CHONDROICHTHYES Lamniformes? Myliobatidae
硬骨魚綱	ウオ科 ニシキ科 イトウダイ科 マカカサウオ科 ボラ科 サソリ科 トビウオ科 テグス科 カツオ科 ハラ科(マハタ型) ハラ科(スジアラ型) イシヒキアジ科 ギンガメアジ科(カスミアジ近似) ギンガメアジ科(ギンガメアジ近似) メジロ近似種 シラカ威 フエダイ科 コロウダイ科 クロカ威 ヘラブナ科 ココロマクログレイ メイドウダイ科 ワカツキダイ科(ハマフエフキ型) ワカツキダイ科(アマミフエフキ型) ワカツキダイ科 イシダイ科 バカ科(シロカベラ型) バカ科(B) バカ科(その他) イシヅラダイ科 アオヅラダイ科 スズメ カツオ ニザメ科 アゴノ威 モガダラカワハギ科 ハリセンボン科	OSTEICHTHYES Anguilla sp. Clupeidae Holocentridae Monacanthidae Mugillidae Hemiramphidae Exocoetidae Trachinidae Brama sp. Sphoerina sp. Serranidae cf. Epinephelus Serranidae cf. Plectropomus Alectis sp. Caranx cf. Caranx meleagrypus Caranx cf. Caranx Serfasciatus Carangidae cf. Selar crumenophthalmus Coryphaena sp. Lutjanidae Pomadasysinae Acanthopagrus sp. Spirurus surba Monopterus grandoculis Oreochromis sp. Lethrinus cf. L. nobilis Lethrinus cf. L. miniatus Lethrinus sp. Oplegnathidae Labridae cf. Semicossyphus reticulatus Labridae (type B) Labridae (others) Balionotopon sp. Scarus sp. Euthynus affinis Kuhniae pelamis Acanthrinidae Siganus sp. Balistidae Diodontidae
()虫綱	ヘビ類 ウミガメ科	REPTILIA Ophidia Cheloniidae
鳥綱		AVE S Gallus gallus
哺乳綱	ニワトリ	MAMMALIA Soricidae Muridae Canis familiaris Felis catus Equus ferus Sus scrofa Cervus nippon Capra hircus Bos taurus Dugong dugon Cetacea

が異なるものの同一地区から出土した資料であるため、ここでは一括して取り扱うこととする。

資料が出土した地点は主に各グリッドの包含層および造成層と搅乱層である。造成がなされたと推測される時期より、造成層出土資料は17世紀に比定されると考えられるが、その他の資料については明確な帰属時期は不明である。

分析の方法は、現生標本との形態比較による同定と計測を中心とするが、その詳細については後述の第27節に記載する内容と同一であるため、ご参照いただきたい。本節で扱う上記資料には魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類が含まれており、魚類については同定結果を集計表に集約したが、その他に分類群については項目が多岐にわたるため一覧表に記載するにとどめている。

2. 分析結果

○魚類(別添CD-ROM 自然遺物出土状況 第26節)

同定対象となる大半は平成11(1999)年度に出土したものであり、平成19(2007)年度資料は魚類と認識できるものは少なからずあるものの、多くは本分析において対象外となるものであった。

出土組成としてはエフキダイ科を第一優占の分類群として、ベラ科及びブダイ科がそれに次ぐ典型的な傾向である。同定された分類群をみると、後述のシーリ遺構出土のそれと共に通しているが、群数の上ではやや少ない。現れない分類群は概ね小型の魚類であることから、資料採集の方法がPUのみであるという点がその差の要因として考えられる。逆に遺構出土資料においてのみ確認され、シーリ遺構に見られない分類群としてシイラ属が挙げられ、尾椎を中心として45点を同定している。

計測値の面では、前上頸骨・歯骨でそれぞれ設定した2ヶ所の計測位置のうち、破損等のため両者を計測可能であった資料は少なく、シーリ出土のそれと比較すると遺存状態が良くないものが目立つ。その中で得られた計測値を同様に比較すると、平均してより大きな値を示す傾向にある。この要因には、HF資料を採集できていないことで結果的に高い計測値へと偏った可能性が疑われる。

○鳥類、爬虫類、哺乳類(第97～99表)

・鳥類

鳥類はその多くがニワトリに同定されると思われるが、検討不十分であるため本報告では具体的な記載は保留した。

・ウミガメ類

爬虫類に同定されるのはウミガメ類がみられ、背甲及び腹甲にあたる部位が多くを占めるが、いずれも破片である。

・イノシシ/ブタ

平成11(1999)・19(2007)年度の調査を通して哺乳類中、最多の出土数を示すのが本群である。四肢骨を中心に全身にわたる各部位が同定されている。

観察の結果、頭蓋にかかわる部位では、形態や骨質の点などから現生イノシシの標本と比較して変異が多くみられる。四肢骨においても上腕骨・桡骨・尺骨・中手骨・中足骨などが他の部位に比べて現生標本との差が顕著にみられる。特に桡骨と尺骨や中手骨・中足骨の骨幹最小幅に対する全長の比率が短い点が目立つほか、骨質が粗いと認められるものも存在する。この点から本分類群にはブタと判断できる資料が多数含まれていると考えられる。ただし、搅乱からの出土も多い上、特に平成11(1999)年度

出土資料には極めて新しい時期のものではないかと思われる状態の資料が少なからず見られることから、考察資料としての取り扱いには、慎重を期さなければならぬ。

下顎骨の観察では多くの歯が脱落して残存していないものの、歯槽の状況などから M3 の萌出が完了した個体は2点のみで、多くは萌出中もしくはそれ以前である。また、四肢骨などでも骨端が未癒合で脱落しているものが多数みられる。そのため、本分類群に属する資料は、その大半が若齢の個体によるものであると考えられる。

・ヤギ

遊離歯及び四肢骨を中心同定された。イノシシ / ブタ、ウシに次いで哺乳類中では3番目の出土を数える。平成11(1999)年度出土の資料中から確認されている。

・ウシ

遊離歯、椎骨、四肢骨が同定され、哺乳類の中ではイノシシに次いで2番目の出土数が確認されている。平成19(2007)年度資料の出土傾向では第5層からの出土が大半を占めていることがみてとれる。なお、ウシ・ウマのサイズと同等のサイズを持つが破片であるため同定が困難である資料については、いずれかに分類される可能性が高いとして、「ウシ / ウマ」の表記をしている。

・ジュゴン

肋骨が数点確認されたものの、いずれも破片であるため明確な様相は不明である。出土が見られるという点のみ記述しておく。

・その他

上記のほかネコの下顎骨、ウマの遊離歯及び桡骨、イルカ・クジラ類の椎骨などかいつれも1点ずつ同定されている。また、シカの上腕骨が確認されたが、これについては第27節のシカに関する記載を参照いただきたい。

3. 小考

平成19(2007)年度資料の出土傾向をみると、哺乳類が注視される。その中でもイノシシ・ブタは第2・3層を中心とした比較的上層で出土したのに対し、ウシは主に第5層から出土する傾向がみてとれる(第99表)。その傾向から、各層の形成時期において両者の利用がいかに集中していた可能性が窺われる。平成11(1999)年度出土資料は、前述の通り出土層位が攪乱であることが多いが、平成19(2007)年度調査に対比して第2層前後にあたる位置から出土していると思われる。とすればイノシシ/ブタが組成の優占となる傾向は、平成19(2007)年度の第2・3層において同分類群が主体となる状況と一致すると言えよう。

組成全体で比較すると(第167図)、MNIのうち90%以上を魚類が占める点で後述のシーリ遺構の様相と一致するが、イノシシ・ブタやウシ・ヤギ等の家畜の出土数は本節で対象とした遺構外出土資料が圧倒する。遺構の内外それぞれから出土する動物遺体の傾向の差は、そこに投棄されるに至った動物に対する扱い方の差を反映しているものと思われる。

なお、本報告書における脊椎動物遺体の分析の中心は時間等の都合上もあり次節のシーリ遺構出土の内容に重点を置いたため、本節の内容は簡略なものに留めている。また、次節において本節の内容と比較して考察を行っているため、合わせてご参照いただきたい。

第97表 平成11年度御内原北地区出土獸骨一覧表1

第98表 平成11年度御内原北地区出土獸骨一覧表2

残存状況のうち、近/遠は近位端/遠位端が残存。

幹は骨幹中央、近幹/遠幹は近位側骨幹/遠位側骨幹。

(近)(遠)は、それぞれの骨端が未融合で脱

第99表 平成19年度調査分ピックアップ資料一覧(歯骨)

第100表 イノシシ・ブタ計測値一覧

部位	LR	計測位置	計測値 (cm)	出上位置	年度	部位	LR	計測位置	計測値 (cm)	出上位置	年度
橈骨	R	Bp	22.0	頸乱	H19	橈骨	R	SD	16.0	J-8 茶褐色灰混刷	H11
尺骨	R	SDO	20.5	B-4 黄褐色土色	H19	橈骨	R	SD	17.5	J-8 灰混刷	H11
DPA			29.3			橈骨	R	SD	15.0	J-8 茶褐色灰混刷	H11
第3中手骨	R	B	9.6	A-1 石筋み6西側上層	H19	尺骨	L	SDO	18.0	頸乱	H11
第4中手骨	L	GL	63.4	B-1 石筋み4面込内	H19	DPA			25.4		
Bp			15.8			尺骨	L	SDO	20.6	J-9 灰混刷	H11
B			13.7			DPA			28.5		
距骨	R	GL	133.0	A-1 石筋み6西側上層	H19	尺骨	L	DPA	24.4	頸乱	H11
GLm			30.2			SDO			19.1		
距骨	L	GL	59.5	A-1 石筋み6西側上層	H19	尺骨	L	SDO	25.9	頸乱	H11
GB			17.0			DPA			34.1		
第3中足骨	L	Bp	11.0	B-4 2列	H19	尺骨	L	SDO	25.4	J-8 茶褐色灰混刷	H11
B			9.0			DPA			36.7		
第4中足骨	L	Bp	11.0	B-4 2列	H19	尺骨	L	SDO	28.4	J-8 茶褐色灰混刷	H11
B			8.5			DPA			38.4		
第4中足骨	L	B	9.5	頸乱	H19	尺骨	R	SDO	26.9	J-8 茶褐色灰混刷	H11
第4中足骨	L	Bp	14.5	頸乱	H19	DPA			35.7		
B			12.2			尺骨	R	SDO	28.6	J-8 茶褐色灰混刷	H11
基節骨	不明	SD	9.7	B-4 2列	H19	DPA			35.7		
中脚骨	不明	Bd	11.7			尺骨	R	SDO	36.9	頸乱	H11
中脚骨	不明	GL	20.4	C-5 3列表面	H19	DPA					
SD			10.9			尺骨	R	SDO	60.6	J-9 道標上西	H11
Bd			10.5			DPA			15.5		
上脚骨	L	m1長	7.2	J-8 茶褐色灰混刷	H11	DPA			12.2		
m1幅			4.0			DPA			16.5		
m2長			9.4			第3中手骨	L	Bp	17.3	J-8 茶褐色灰混刷	H11
m2幅			5.3			第3中手骨	L	Bp	17.1	頸乱	H11
m3長			10.3			B			14.4		
m3幅			7.5			第3中手骨	L	B	14.0	J-9 道標上西	H11
m4長			12.1			第3中手骨	L	Bp	16.1		
m4幅			9.9			DPA			13.1		
M1長			14.7			第3中手骨	L	Bp	15.8	J-9 頸乱	H11
M1幅			13.5			DPA			12.6		
M1	R	GL	14.0	J-8 茶褐色灰混刷	H11	第3中手骨	L	Bp	13.4	J-8 茶褐色灰混刷	H11
制			9.7			DPA			11.7		
M2	L	長	20.1	頸乱	H11	第3中手骨	L	Bp	14.8	頸乱	H11
制			13.4			DPA			17.9		
M2	R	長	19.3	J-8 茶褐色灰混刷	H11	第3中手骨	R	B	11.0	頸乱	H11
制			12.9			DPA			15.9		
下脚骨	L	M1長	14.3	頸乱	H11	第3中手骨	R	Bp	14.7		
M1幅			8.8			DPA					
M2長			17.7			第4中手骨	L	GL	60.8	J-10 29~30	H11
M2幅			11.6			DPA			14.3		
下脚骨	L	GL	20.0	頸乱	H11	DPA			9.8		
M3幅			14.0			第4中手骨	L	Bp	12.6		
下脚骨	L	M1L	13.0	頸乱	H11	DPA					
M1B			8.6			第4中手骨	L	Bp	15.7	J-8 茶褐色灰混刷	H11
M2L			17.0			DPA			12.4		
M2R			11.6			第4中手骨	L	Bp	12.8	J-10 19~20	H11
下脚骨	R	M2L	17.3	頸乱	H11	DPA			9.0		
M2R			11.6			第4中手骨	L	Bp	16.5	J-9 灰混刷	H11
解中骨	L	GLP	32.2	J-8 茶褐色灰混刷	H11	DPA			12.5		
SLC			22.0			第4中手骨	L	Bp	16.2	J-9 道標上西	H11
解中骨	L	GLP	25.6	頸乱	H11	DPA			12.8		
解中骨	RG	BG	17.0			第4中手骨	L	Bp	13.1	頸乱	H11
解中骨	R	SLC	16.1			DPA			10.6		
解中骨	R	GLP	35.6	J-8 茶褐色灰混刷	H11	第4中手骨	L	Bp	11.0	頸乱	H11
解中骨	R	BG	22.9			DPA			12.2		
解中骨	R	GLP	33.9	J-9 道標上西	H11	第4中手骨	R	Bp	14.9		
SLC			25.1			DPA			12.0		
解中骨	R	GLP	23.5			第4中手骨	R	Bp	13.2	頸乱	H11
上腕骨	L	SD	15.7	頸乱	H11	DPA			9.6		
Bd			36.3			第4中手骨	R	Bp	12.9	頸乱	H11
上腕骨	L	SD	15.5	頸乱	H11	DPA			9.6		
上腕骨	L	SD	12.5	頸乱	H11	第4中手骨	L	LA	37.6	頸乱	H11
上腕骨	L	SD	15.2	J-8 茶褐色灰混刷	H11	第4中手骨	L	SD	16.0	頸乱	H11
上腕骨	L	SD	11.1	頸乱	H11	DPA			31.4		
上腕骨	R	SD	13.4	頸乱	H11	第4中手骨	L	LA	27.9		
上腕骨	R	Bd	31.6			DPA					
上腕骨	R	SD	13.0	頸乱	H11	大顎骨	R	Bp	55.2	J-10 29~30	H11
上腕骨	R	Bd	31.1			DPA			14.1		
上腕骨	R	SD	15.7	頸乱	H11	大顎骨	R	SD	42.8	J-10 29~30	H11
上腕骨	R	Bd	38.3	J-9 風呂刷	H11	DPA			21.8		
上腕骨	R	Bd	37.7	J-9 道標上西	H11	大顎骨	R	SD	16.5	頸乱	H11
大顎骨	L	Bp	30.9	頸乱	H11	DPA			18.4		
大顎骨	L	Bp	22.6	頸乱	H11	大顎骨	R	SD	17.4	J-8 系帶柄上層	H11
大顎骨	L	Bp	27.6	1~8 茶褐色灰混刷	H11	DPA			16.4	J-9 道標上西	H11
大顎骨	L	SD	15.3	頸乱	H11	DPA			12.2		
大顎骨	L	SD	27.8	J-9 道標上西	H11	DPA			14.9		
大顎骨	R	Bp	29.7	1~7 30~40	H11	DPA			16.1		
大顎骨	R	Bp	27.0	頸乱	H11	DPA			12.0		
大顎骨	R	SD	15.5			DPA			9.6		
大顎骨	R	SD	21.9	頸乱	H11	DPA			13.1		
大顎骨	R	SD	14.0			DPA			10.6		
大顎骨	R	SD	28.9	J-9 道標上西	H11	DPA			17.4		
大顎骨	R	SD	14.4			DPA			30.0		
大顎骨	R	SD	23.8	J-9 灰混刷	H11	DPA			33.1		
大顎骨	R	SD	13.6			DPA			44.0	J-10 29~30	H11
大顎骨	R	SD	24.0	頸乱	H11	DPA			11.3		
大顎骨	R	SD	16.0			DPA			19.2		
大顎骨	R	SD	17.0	頸乱	H11	DPA			29.3		
大顎骨	R	SD	17.3	頸乱	H11	DPA			16.7		
大顎骨	R	SD	14.0			DPA			16.3		
大顎骨	R	SD	14.3			DPA			14.3		
大顎骨	R	SD	13.6			DPA			17.0		
大顎骨	R	SD	24.0	頸乱	H11	DPA			30.1		
大顎骨	R	SD	16.0			DPA			33.1		
大顎骨	R	SD	17.0	頸乱	H11	DPA			34.9	J-8 茶褐色灰混刷	H11
大顎骨	R	SD	17.3	頸乱	H11	DPA			33.0	J-9 道標上西	H11

第101表 イノシシ・ブタ計測値一覧2

部位	LR	計測位置	計測値 (mm)	出土位置	年度
距骨	R	GLm	32.9	搅乱	H11
	R	GLm	32.7	J-8 茶褐色灰混層	H11
第3中足骨	L	B	9.3	J-6 道標東	H11
第3中足骨	L	Bp	13.0	J-11 29~30	H11
		B	10.1		
第3中足骨	R	Bp	14.0	I-8 茶褐色灰混層	H11
第3中足骨	R	Bp	13.9	搅乱	H11
		B	11.4		
第3中足骨	R	Bp	15.9	J-9 灰混層	H11
		B	12.2		
第4中足骨	L	Bp	14.7	搅乱	H11
第4中足骨	L	Bp	14.4	J-9 道標上西	H11
		B	14.0		
第4中足骨	L	B	9.5	搅乱	H11
第4中足骨	L	B	12.8	I-8 灰混層	H11
第4中足骨	L	Bp	14.5	搅乱	H11
		B	12.4		
第4中足骨	L	Bp	10.0	搅乱	H11
		B	7.2		
第4中足骨	L	Bp	14.2	I-8 茶褐色灰混層	H11
		B	11.3		
第4中足骨	L	Bp	13.9	搅乱	H11
		B	11.1		
第4中足骨	L	Bp	14.1	I-8 灰混層	H11
		B	12.5		
第4中足骨	R	GL	70.8	J-9 道標上西	H11
		Bp	13.5		
		B	11.5		
		Bd	13.8		
第4中足骨	R	Bp	14.6	搅乱	H11
第4中足骨	R	B	12.4	I-8 茶褐色灰混層	H11
第4中足骨	R	Bp	14.4	J-9 道標上西	H11
		B	12.6		
第4中足骨	R	Bp	14.0	搅乱	H11
		B	11.0		
第4中足骨	R	Bp	15.1	J-8 茶褐色灰混層	H11
		B	13.0		
第4中足骨	R	Bp	14.3	搅乱	H11
		B	11.8		
基脚骨	不明	GL	27.1	J-8 茶褐色灰混層	H11
		Bp	12.2		
		SD	9.8		
		Bd	10.3		
基脚骨	不明	GL	31.5	搅乱	H11
		Bp	16.7		
		SD	13.0		
		Bd	15.3		
基脚骨	不明	GL	33.6	J-9 灰混層	H11
		Bp	16.2		
		SD	12.7		
		Bd	15.4		
基脚骨	不明	SD	12.2	搅乱	H11
		Bd	15.3		
基脚骨	不明	SD	12.2	搅乱	H11
		Bd	13.5		
基脚骨	不明	SD	11.5	J-8 茶褐色灰混層	H11
		Bd	13.7		
基脚骨	不明	SD	13.9	J-9 灰混層	H11
		Bd	15.6		
基脚骨	不明	SD	13.7	I-8 茶褐色灰混層	H11
		Bd	15.8		
基脚骨	不明	SD	12.5	J-8 茶褐色灰混層	H11
		Bd	14.1		
基脚骨	不明	SD	12.9	I-8 灰混層	H11
		Bd	15.3		
基脚骨	不明	SD	9.4	搅乱	H11
		Bd	10.8		
基脚骨	不明	GL	32.0	J-9 白砂混層	H11
		Bd	15.7		
		SD	12.2		
		Bd	14.0		
小脚骨	不明	SD	6.1	J-9 道標上西	H11
		Bd	7.2		

第102表 イヌ計測値一覧

部位	LR	計測位置	計測値 (mm)	出土位置	年度
仙椎	—	BFr	20	B-5 シエリ内黒褐色土層	H19
		HFr	9.7		
		PL	30.8		
大腸骨	R	GL	135.1	B-5 シエリ内黒褐色土層	H19
		Bp	30.4		
		SD	10.7		
		Bd	24.4		
		DC	14.3		
脛骨	R	GL	138.8	B-5 シエリ内黒褐色土層	H19
		Bp	25.8		
		SD	9.8		
		Bd	18.4		
上腕骨	L	SD	8.9	J-8 茶褐色灰混層	H11
肩骨	L	SH	16.1	J-9 灰混層	H11
大腸骨	R	SD	11.1	搅乱	H11
脛骨	R	SD	11.0	J-9 道標上西	H11
脛骨	R	SD	10.4	J-9 灰混層	H11
蹠骨	L	GL	41.6	搅乱	H11
		GB	16.9		
第三中足骨	L	Bp	7.3	搅乱	H11
基脚骨	不明	GL	26.1	搅乱	H11
		Bp	9.8		
		SD	5.1		
		Bd	6.9		
基脚骨	不明	GL	25.7	J-8 茶褐色灰混層	H11
		Bp	9.6		
		SD	5.2		
		Bd	7		
基脚骨	不明	SD	4.1	J-8 茶褐色灰混層	H11
		Bd	6.2		
基脚骨	不明	GL	26.3	搅乱	H11
		Bp	10.1		
		SD	4.8		
		Bd	6.7		
基脚骨	不明	GL	22.0	搅乱	H11
		Bp	8.8		
		SD	4.8		
		Bd	7.1		

第103表 ウマ計測値一覧

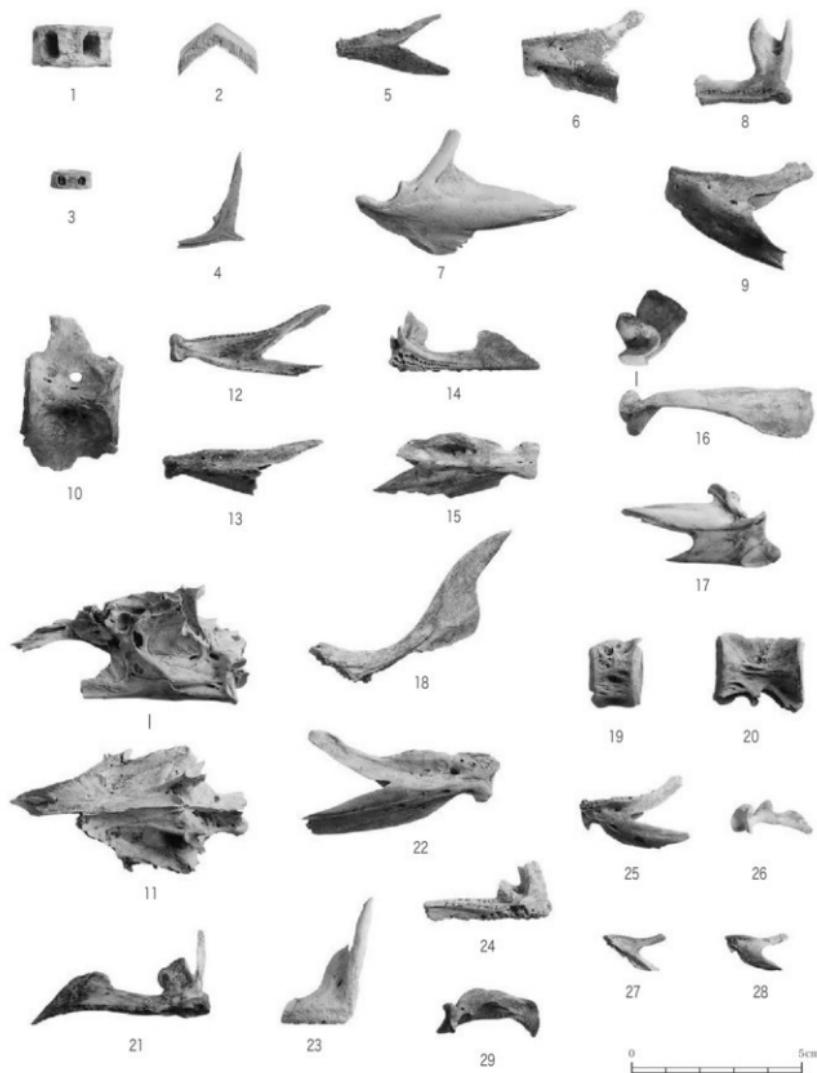
部位	LR	計測位置	計測値 (mm)	出土位置	年度
橈骨	L	Bp	74.1	石積み6 黄込内	H19
		Bfp	65.6		
尺骨	L	DPA	53.4	石積み6 黄込内	H19
M2?	L	長	24	搅乱	H11
		幅	21.4		
		歯冠高	44.4		

第104表 ヤギ計測値一覧

部位	LR	計測位置	計測値 (mm)	出土位置	年度
M1(上顎)	L	長	11.7	J-9 灰混刷	H11
		幅	9.6		
肩甲骨	R	SLC	14.6	J-8 茶褐色灰混刷	H11
上腕骨	R	SD	11.2	規乱	H11
上腕骨	R	SD	9.3	J-8 茶褐色灰混刷	H11
上腕骨	R	BT	23.3	J-9 道橋上西	H11
		Bd	23.7		
桡骨	L	Bp	24.8	規乱	H11
桡骨	R	Bp	22.2	規乱	H11
桡骨	R	SD	11.6	規乱	H11
		Bp	22.7		
尺骨	L	BPC	13.8	J-9 灰混刷	H11
		DPA	20		
中手骨	L	SD	11.2	J-9 道橋上西	H11
		Bp	19.5		
中手骨	L	SD	11.1	J-8 茶褐色灰混刷	H11
中手骨	L	SD	12.1	J-9 道橋上西	H11
中手骨	L	SD	11.1	J-9 灰混刷	H11
中手骨	R	Bp	20.6	J-8 茶褐色灰混刷	H11
中手骨	R	SD	11.9	J-9 道橋上西	H11
大頭骨	R	Bp	33	1-7 30~40	H11
大頭骨	R	SD	13.6	規乱	H11
脛骨	L	SD	9.7	J-8 茶褐色灰混刷	H11
脛骨	L	SD	10.6	規乱	H11
脛骨	R	SD	11.6	J-8 茶褐色灰混刷	H11
		Bd	21.8		
中足骨	L	GL	82.8	J-9 道橋上西	H11
		Bp	16.9		
		SD	9.4		
		Bd	20.2		
中足骨	R	Bp	16.2	規乱	H11
中足骨	R	BP	16.9	規乱	H11
基節骨	不明	GL	27.9	J-8 茶褐色灰混刷	H11
		Bp	9.1		
		SD	9.1		
		SD	10.3		
基節骨	不明	SD	7.2		
基節骨	不明	Bd	9.0		
基節骨	不明	GL	30.8	J-9 道橋上西	H11
		Bp	9.5		
		SD	7.5		
		Bd	9.5		
ヤギ?肩甲骨	R	SLC	11.9	J-9 灰混刷	H11

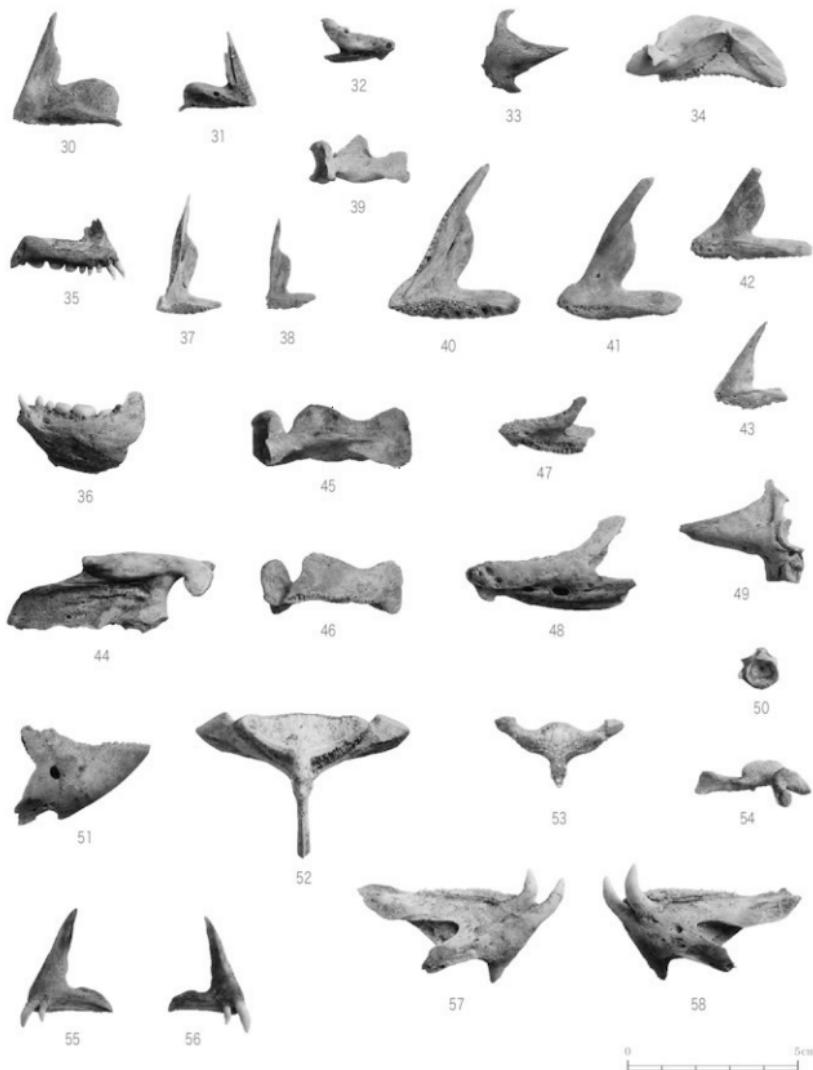
第105表 ウシ計測値一覧

部位	LR	計測位置	計測値 (mm)	出土位置	年度
M1(上顎)	R	長	26.9	E-4 5側	H19
		幅	20.8		
M2(上顎)	R	長	31.4	E-4 5側	H19
		幅	22.8		
尺骨	L	SDO	61.3	E-4 5側	H19
		DPA	76.1		
		LO	115.5		
		BPC	49.6		
中手骨	R	GL	188.6	E-4 5側	H19
		Bp	65.2		
		SD	36.3		
		Bd	64.9		
膝蓋骨	L	GL	68.1	E-4 5側	H19
		GB	55.4		
中足骨	L	GL	216	E-3 5側	H19
		Bp	51.9		
		SD	30.2		
		Bd	59		
中足骨	R	SD	23.9	E-4 5側	H19
基節骨	不明	SD	25.9	D31 5側	H19
		Bd	29.6		
基節骨	不明	SD	24.3	E-3 5側	H19
		Bd	26.3		
中脚骨	不明	GL	42.1	E-4 5側	H19
		Bp	31.3		
		SD	22.3		
		Bd	22.4		
中脚骨	不明	Bp	29.2	D-3 5側	H19
		SD	21.4		
P(上顎)	R	長	15.1	規乱	H11
		幅	19.9		
		歯冠高	17.8		
M2(上顎)	R	長	30	規乱	H11
		幅	22.3		
		歯冠高	44.6		
M1(下顎)	R	長	26.8	規乱	H11
		幅	13		
脣骨	R	SD	36.3	J-9 灰混刷	H11
基節骨	不明	GL	61.5	規乱	H11
		Bp	31.9		
		SD	26		
		Bd	29.4		
基節骨	不明	Bd	29.2	J-8 茶褐色灰混刷	H11
基節骨	不明	GL	58.2	J-9 道橋上西	H11
		Bp	32.8		
		SD	26		
		Bd	27.7		
基節骨	不明	GL	59.7	規乱	H11
		Bp	25		
		SD	21.4		
基節骨	不明	Bp	34.8	規乱	H11



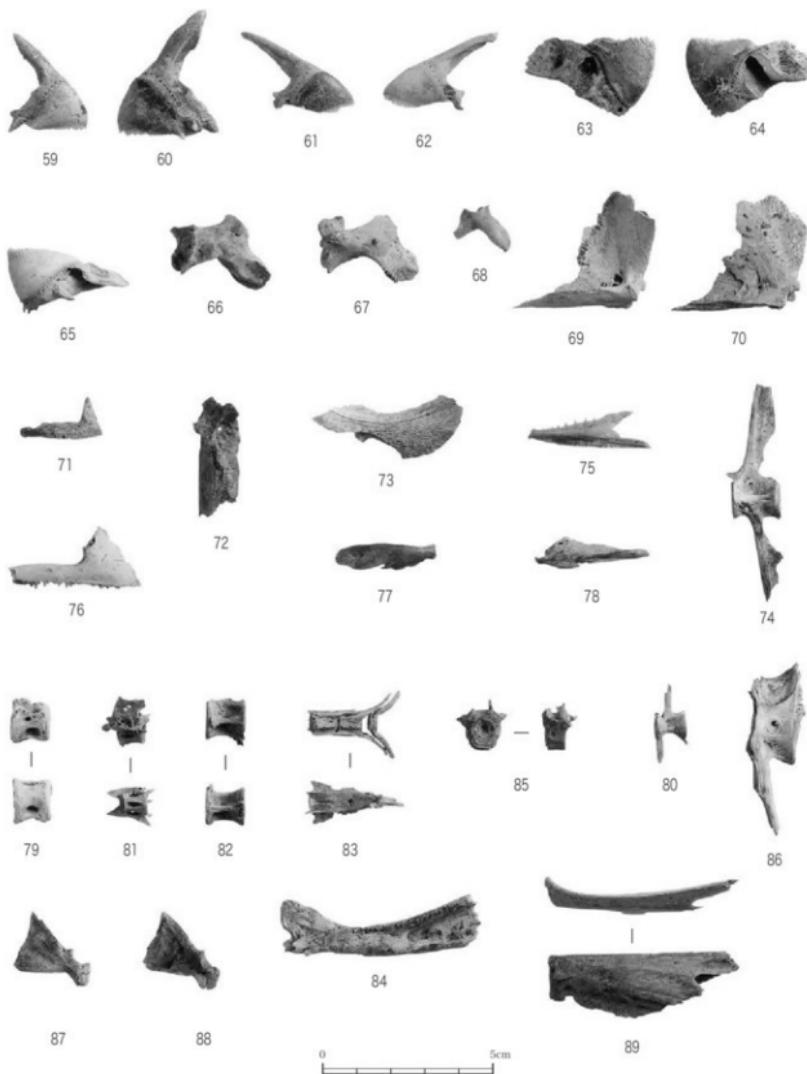
図版151 脊椎動物遺体1 魚(1)

サメ類(メジロザメ科) 1. 椎骨 トビエイ科 2. 衛板 エイ類 3. 椎骨 イットウダイ亜科 4. 左 前鰓蓋骨
マツカサウオ科 5. 左歯骨 アジ科(大型)カスミアジ近似 6. 左歯骨 アジ科ギンガメアジ属 7. 右角骨
アジ科(大型)イヒキアジ近似 8. 左前上顎骨 9. 左歯骨 アジ科(大型) 10. 尾骨
ハタ科 11. 頭蓋骨 ハタ科マハタ型 12. 右歯骨 13. 左歯骨 ハタ科スジアラ型 14. 右前上顎骨 15. 右歯骨
ハタ科 16. 左主上顎骨 17. 左角骨 18. 左擬鎖骨 シヨウダイ属 19. 腹椎 20. 尾椎
フエダイ科 21. 右前上顎骨 22. 右歯骨 コショウダイ類 23. 右前上顎骨 24. 左前上顎骨 25. 左歯骨
コショウダイ類似 26. 右主上顎骨 27. 右歯骨 クロダイ属 28. 左歯骨
クロダイ属 29. 右主上顎骨



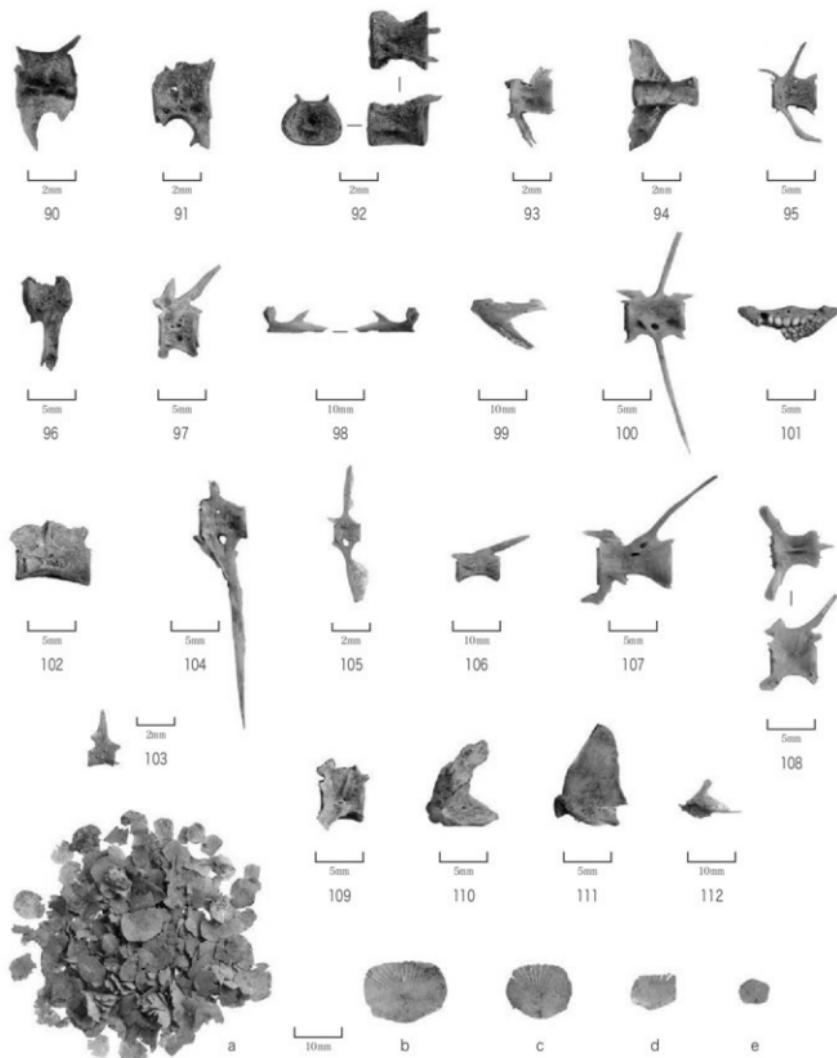
図版152 脊椎動物遺体2 魚(2)

クロダイ属 30. 左前上顎骨 31. 左前上顎骨 32. 右歯骨 33. 右角骨 ヨコシマクロダイ属 34. 右主上顎骨
 35. 右前上顎骨 36. 左歯骨 メイチダイ属 37. 右前上顎骨 38. 左前上顎骨
 メイチダイ属(近似) 39. 右主上顎骨 フエフキダイ属(ハマフエフキ型) 40. 右前上顎骨 41. 左前上顎骨
 フエフキダイ属アマミフエフキ型 42. 左前上顎骨 フエフキダイ科? 43. 右前上顎骨 フエフキダイ属 44. 右口蓋骨
 フエフキダイ科 45. 右主上顎骨 46. 左主上顎骨 47. 右歯骨 48. 左歯骨 49. 左角骨 50. 第1椎骨
 インダ科? 51. 右歯骨 ベラ科シロクラベラ型 52. 下咽頭骨 ベラ科(B) 53. 右歯骨 54. 左歯骨
 ベラ科 55. 左主上顎骨 56. 右前上顎骨 57. 右歯骨 58. 左歯骨



図版153 脊椎動物遺体3 魚(3)

- アオブダイ属A 59. 右前上顎骨 60. 左前上顎骨 63. 右齒骨 64. 左齒骨
 アオブダイ属B 61. 右前上顎骨 62. 左前上顎骨 65. 左齒骨 ブダイ科 66. 右主上顎骨 67. 左主上顎骨
 68. 右角骨 69. 右方骨 70. 左方骨 ニザダイ科 71. 右前上顎骨 72. 右舌顎骨 73. 左擬鎖骨
 ニザダイ科(テングハギ型) 74. 尾椎 カマス属 75. 左舌骨 カツオ類スマ 76. 右前上顎骨
 スマ 77. 右舌骨 カツオ類スマ 78. 右角骨 スマ 79. 腹椎 80. 尾椎 カツオ類 81. 腹椎
 カツオ 82. 腹椎 カツオ類 83. 尾内部 モンガラカワハギ科 84. 腹帶 85. 腹椎 86. 尾椎
 ハリセンボン科? 87. 左角骨 88. 右角骨 未同定 89. 左齒骨



図版154 脊椎動物遺体4 魚(4)

ウナギ属 90. 腹椎 91. 尾椎 ニシン科 92. 腹椎 93. 尾椎 ボラ科 94. 腹椎 95. 尾椎
 トビウオ 96. 腹椎 97. 尾椎 アジ科 メアジ近似種 98. 左前上顎骨 99. 左歯骨 100. 尾椎
 ベラ科(B) 101. 下咽頭骨 アイゴ属 102. 腹椎 103. 腹椎 104. 尾椎 105. 尾椎
 カマス属 106. 腹椎 107. 尾椎 ダツ目未同定 108. 腹椎 109. 腹椎
 未同定 110. 左角骨 111. 左角骨 112. 左角骨 a~e. 鰓



113



114



115



1



117



118



119



116



120



121



122



123

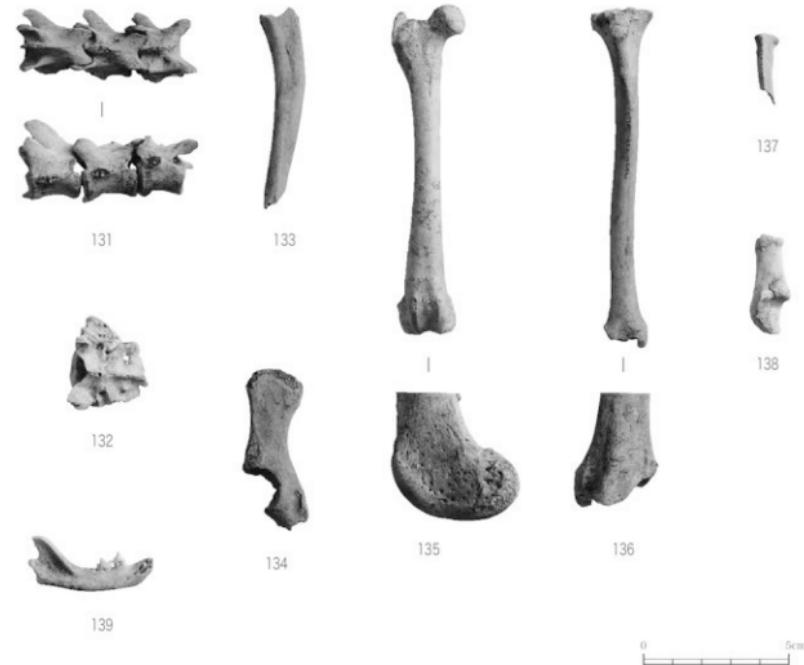
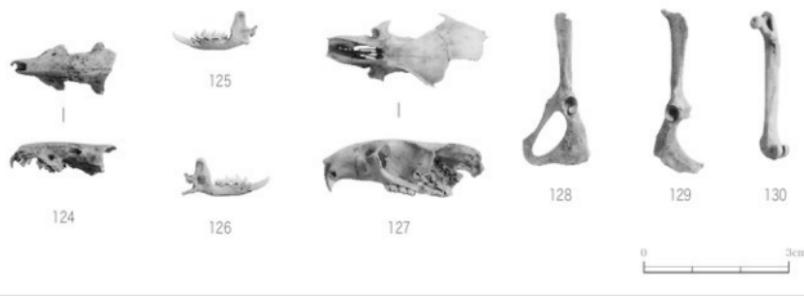


図版155 脊椎動物遺体5

上段 ウミガメ 113. 烏口肩甲骨 114. 指骨 115. 助骨板

下段 ニワトリ 116. 頭蓋骨 117. 第2～5胸椎 118. 右烏口骨 119. 左肩甲骨 120. 右上腕骨

121. 左中手骨 122. 左大腿骨 123. 右中足骨



図版156 脊椎動物遺体6

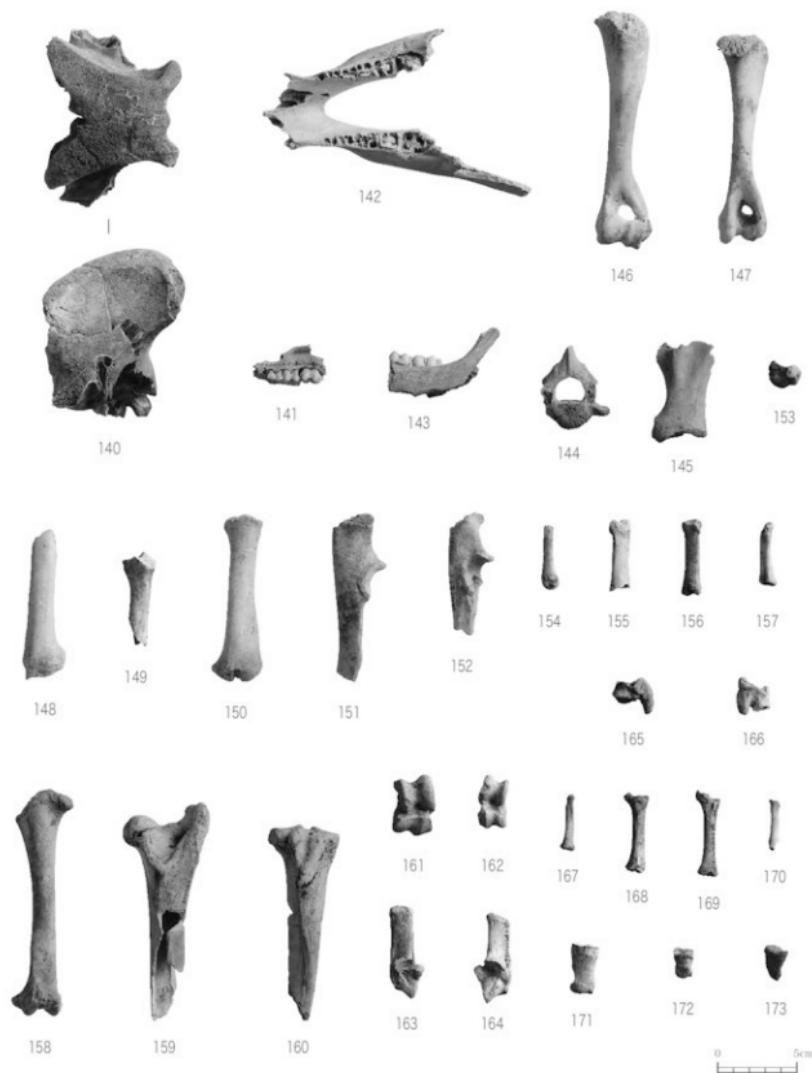
上段 トガリネズミ科 124. 頭蓋骨 125. 左下頸骨 126. 右下頸骨

ネズミ科 127. 頭蓋骨 128. 左寛骨 129. 右寛骨 130. 右大腿骨

下段 イヌ 131. 腰骨 132. 仙椎 133. 左上腕骨 134. 左寛骨 135. 右大腿骨 136. 右脛骨

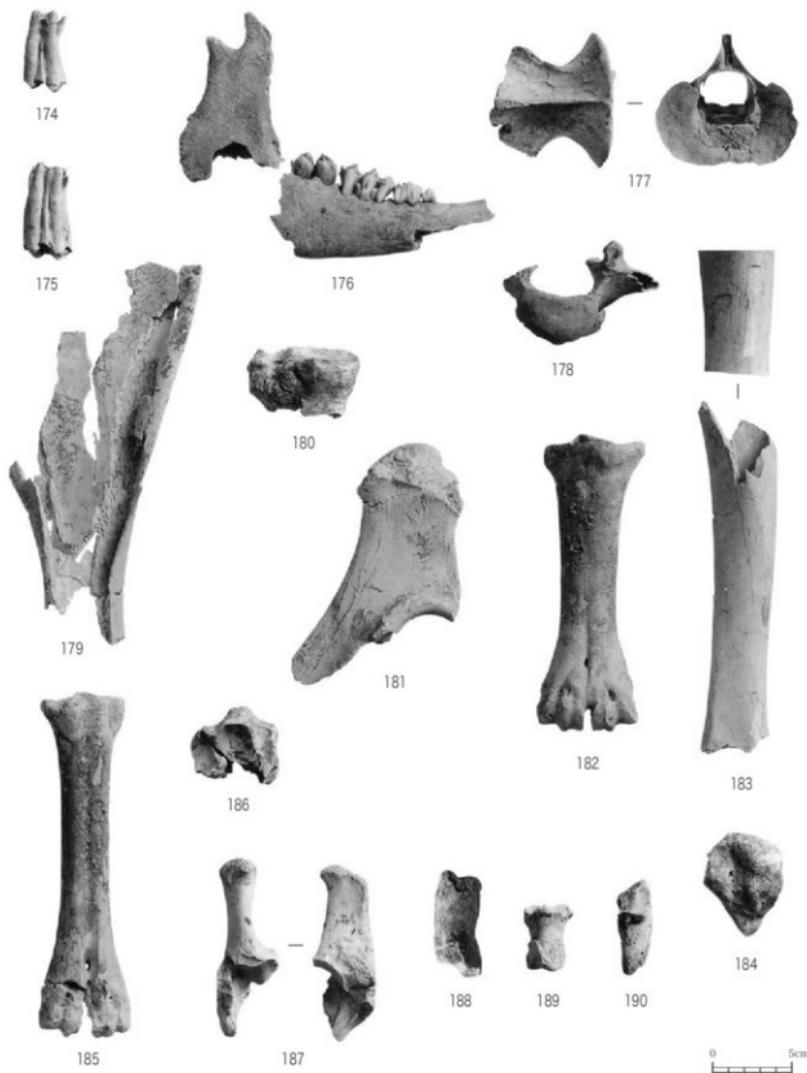
137. 左第3中足骨 138. 左踵骨

ネコ 139. 右下頸骨



図版157 脊椎動物遺体7

- イノシシ/ブタ
 140. 頭蓋骨 141. 左上顎骨 142. 下顎骨 143. 左下顎骨 144. 頸骨 145. 左肩甲骨
 146. 左上腕骨 147. 右上腕骨 148. 左橈骨 149. 右橈骨 150. 右橈骨 151. 左尺骨
 152. 右尺骨 153. 右第4手根骨 154. 左第2中手骨 155. 左第3中手骨 156. 右第4足手骨
 157. 右第5中手骨 158. 右大脛骨 159. 左大脛骨 160. 右脛骨 161. 左距骨 162. 右距骨
 163. 左蹠骨 164. 右蹠骨 165. 左中心足根骨 166. 右第4中足骨 167. 左第2中足骨
 168. 左第3中足骨 169. 左第4中足骨 170. 右第5中足骨 171. 基節骨 172. 中節骨 173. 末節骨



図版158 脊椎動物遺体8

ウシ 174. 右 M1(上顎) 175. 右 M2(上顎) 176. 右下顎骨 177. 軸椎 178. 腰椎 179. 左肩甲骨
 180. 左桡骨 181. 左尺骨 182. 右中手骨 183. 右脛骨 184. 左膝蓋骨 185. 左中足骨
 186. 右第4中心足根骨 187. 左踵骨 188. 基節骨 189. 中節骨 190. 末節骨



図版159 脊椎動物遺体9

- ウマ 191. 左桡骨、左尺骨
 シカ 192. 左肩甲骨 193. 左上腕骨 194. 右上腕骨 195. 左桡骨、左尺骨 196. 右中手骨
 ヤギ 197. 基節骨
 198. 左M1(上顎) 199. 左M2(上顎) 200. 右下顎骨 201. 軸椎
 202. 右肩甲骨 203. 右上腕骨
 204. 右桡骨 205. 左中手骨 206. 右大腿骨 207. 右大腿骨 208. 左中足骨 209. 右中足骨
 ジュゴン 210. 肋骨 211. 肋骨
 イルカ・クジラ類 212. 椎骨

第27節 シーリ遺構内の自然遺物

1. 資料の概要と処理方法

菅原広史(舗添市教育委員会)・仲座久宜

平成19(2007)年度調査において検出したシーリ遺構内の堆積土には、17世紀前半を中心とする陶磁器に伴い、膨大な量の自然遺物が出土している。特に魚骨の量は多く、調査時にピックアップが困難な状況であったことから、遺構内の堆積土全量を土嚢袋に回収して持ち帰り、分析を行うこととした。本報告では、このシーリ遺構内から出土した自然遺物を一括資料として報告する。

口径110cm・底径90cm・深さ60cmの規模の本遺構からは、土嚢袋32点分の土壤サンプルが採集された。サンプルは採取位置によって3つの種別に分けている。遺構の中心を通るグリッドラインを境に、それぞれB-4グリッド・B-5グリッド側から採取されたものと、グリッドラインに沿って設定されたベルトから採取されたサンプルの3種である。また、これらは更に層位別に細分される。ただし調査の都合上、ベルト採取サンプルは、黒褐色土層、赤褐色土層、木炭層、灰白色土層、底面黒褐色土層の5つに細別することができたが、B-4・B-5グリッド採取のサンプルは、黒褐色土層、木炭層の二細別でのみ取り上げている。これらをもとに、取り上げ種別・層位それぞれにおいて、採集した袋ごと便宜上の番号を付して作業を進めることとした(第106表)。



1. 天日干しの状況



2. 土砂の計量



3. フローテーションによる遺物の回収



4. 遺物の同定作業

図版 160 フローテーションの状況

第106表 シーリ遺構内土壤サンプル一覧

グリッド	遺構	土層	日付	重量(g)	容量(ℓ)	分析量①(ℓ)	分析量②(ℓ)	保存量(ℓ)	備考
B-4+B-5	シーリ遺構内	黒褐色土層①	20080219	4270	5.1	2.6	—	2.5	
B-4	シーリ遺構内	黒褐色土層②	20080221	3370	4.7	4.7	—	—	
B-4	シーリ遺構内	黒褐色土層③	20080221	5660	7.1	2.1	5	—	
B-4	シーリ遺構内	黒褐色土層④	20080221	6130	8.3	3.3	—	5	
B-4	シーリ遺構内	黒褐色土層⑤	20080222	3870	4.5	—	—	4.5	
B-4	シーリ遺構内	黒褐色土層⑥	20080222	5460	7.4	2.4	5	—	
B-4	シーリ遺構内	黒褐色土層⑦	20080225	6720	8.3	3.3	5	—	
B-4	シーリ遺構内	黒褐色土層⑧	20080225	5590	7.4	2.4	—	5	
B-4	シーリ遺構内	黒褐色土層⑨	20080226	6500	8	4	—	4	
B-5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑩	20080221	2870	4.5	4.5	—	—	
B-5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑪	20080225	6180	8.6	3.6	5	—	
B-5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑫	20080225	3250	4.2	4.2	—	—	
B-5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑬	20080225	4830	6.4	6.4	—	—	
B-5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑭	20080225	5030	6.9	1.9	—	5	
B-5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑮	20080226	5830	7.1	4.1	—	3	
B-5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑯	20080228	4650	6.5	6.5	—	—	
B-5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑰	20080228	5480	7.2	7.2	—	—	
B-5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑱	20080228	5710	8	3	5	—	
B-5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑲	20080228	3860	5.05	5.05	—	—	
B-5	シーリ遺構内	木炭層	20080214	6300	7.9	—	4	3.9	
B-5	シーリ遺構内アゼ	灰白色土層	20080228	6490	9	—	5	4	
B-5	シーリ遺構内アゼ	黒褐色土層	20080228	2850	4	—	2	2	
B-5	シーリ遺構内アゼ	赤褐色土層①	20080221	5350	7.4	—	4	3.4	
B-5	シーリ遺構内アゼ	赤褐色土層②	20080228	690	1	1	—	—	
B-5	シーリ遺構内アゼ	木炭層①	20080228	6860	8.3	3.3	5	—	
B-5	シーリ遺構内アゼ	木炭層②	20080228	6180	8.6	8.6	—	—	
B-5	シーリ遺構内アゼ	木炭層③	20080228	6000	7.4	7.4	—	—	
B-5	シーリ遺構内アゼ	木炭層④	20080228	3840	5.2	—	—	5.2	
B-5	シーリ遺構内アゼ	底面黒褐色土層①	20080228	7900	9.9	4.9	5	—	
B-5	シーリ遺構内アゼ	底面黒褐色土層②	20080228	5930	9.1	4.1	—	5	
B-5	シーリ遺構内アゼ	底面黒褐色土層③	20080228	5630	8	8	—	—	

*土層の○数字は土養I袋に対し、任意に付加したもの
※「分析量①」は沖縄県立琉球文化財センターで分析、「分析量②」は原住氏へ分析依頼した分量

第107表 土壤サンプルの総量および層序別分析量

グリッド	遺構	土層	重量(g)	容量(ℓ)	分析量①(ℓ)	分析量②(ℓ)	保存量(ℓ)	備考
B-4+B-5	シーリ遺構内	黒褐色土層	4270	5.1	2.6	—	2.5	
B-4	シーリ遺構内	黒褐色土層	43300	55.7	22.2	15	18.5	
B-5	シーリ遺構内	黒褐色土層	47690	64.45	46.45	10	8	
B-5	シーリ遺構内	木炭層	6300	7.9	—	4	3.9	
B-5	シーリ遺構内アゼ	灰白色土層	6490	9	—	5	4	
B-5	シーリ遺構内アゼ	黒褐色土層	2850	4	—	2	2	
B-5	シーリ遺構内アゼ	赤褐色土層	6040	8.4	1	4	3.4	
B-5	シーリ遺構内アゼ	木炭層	22880	29.5	19.3	5	5.2	
B-5	シーリ遺構内アゼ	底面黒褐色土層	19460	27	17	5	5	
合計			159280	211.05	108.55	50	52.5	

土壌サンプルは、天日による乾燥後(図版160-1)、総重量159.28kg、総容量211.05リットルとなった(第107表)。この中から種別・層位ごとに一定量ずつ保存分を取り分けたのち、残りの土壌について浮遊採取法(フローテーション法)および水洗選別法(図版160-3)による分析の対象とした。対象としたサンプルの大半は沖縄県立埋蔵文化財センターにて分析作業を進めたが、貝類・ムシ類については、千葉県立中央博物館の黒住耐二氏・荻野康則氏に分析を依頼した。なお、それぞれの分析・保存の量は第107表のとおりである。

沖縄県立埋蔵文化財センターで行った水洗選別には、5mm・2.5mm・1mmメッシュの篩を用いて沈殿した遺物(ヘビー・フラクション=HF)を回収している。一方、浮遊遺物(ライト・フラクション=L F)の回収には、熱帶魚飼育用の網(0.5mm未満)を用いた。上記作業によって得られたHF・LF資料を、資料整理作業員を中心骨類・植物遺体・糞石・炭化物・ムシ類など種類ごとに抽出した(図版160-4・第113表)。抽出した資料のうち、骨類に関しては菅原広史が同定等の分析を行い、人骨(歯)については片桐千亜紀・土肥直美氏に、種実類・糞石はパリノ・サーヴェイにより同定・分析が行われた。

2. 貝類遺体等(シーリ遺構内)

黒住耐二(千葉県立中央博物館)

① 土壌サンプルの内容と処理

このシーリ遺構については第4章第2節6に、サンプル採取状況等に関しては本節1において詳細に記されている。その年代は、およそ17世紀前半頃である。層序の概略は、上部から黒褐色土層・木炭層・灰白色土層・赤褐色土層・底面黒褐色土層に区分されている(第41図3)。

これらの層から、約2リットルの土壌を分削し、第108表に示した合計12サンプルを対象とした。これらを、70°Cで2日間以上乾燥させ、計量の後、水洗選別を行い、沈殿部分は最小1.0mmメッシュまで、浮遊部分は0.25mm未満のネットで回収するという報告者の従来の方法で処理した。

9.5mmメッシュに残ったものは、可能な限り分類し、その体積と重量を計測した。浮遊部分でも、貝類遺体以外も分類/カウントした。

第108表 シーリ遺構内の土壌サンプルの詳細

グリッド等 作業コード	表面土層 B-5/アゼ ケ-1	黒褐色土層 B-5/アゼ ケ-1	黒褐色土層 B-4 イ-1	黒褐色土層 B-4 ウ-1	黒褐色土層 B-4 ア-1	黒褐色土層 B-5 ケ-1	黒褐色土層 B-5 オ-1	黒褐色土層 B-5 ケ-1	黒褐色土層 B-5/アゼ ケ-1	黒褐色土層 B-5/アゼ ケ-1	木炭層 B-5/アゼ ケ-1	木炭層 B-5/アゼ ケ-1	黒褐色土層 B-5/アゼ ケ-1
全 体	2200	2000	1850	1850	2000	2000	1950	2000	1950	2000	1750	1900	1900
Ⅱ	1550	1220	1290	1370	1460	1350	1370	1360	1420	1360	1430	1410	1410
>85 mm cc/g	220/220	300/125	150/60	180/95	150/95	200/76	75/38	150/64	180/104	150/105	150/78	200/106	
魚骨 no ecg/g	40/3.70/25/26/26/23/31/29/60/1/8/14/2/15/15/25/26/25/25/25/34/26/17/30/1/8/18/30/1/8/19/1/40/1/8/11/10/5/8/1/2/10/3/24/18/30/3												
蟹骨 no ecg/g						72/1)/~			1/(-)/1			1/(-)/~	
鳥骨 no ecg/g									1/(-)/~			1/(-)/~	
頭骨 no ecg/g						71/1)/~			2(1)/~				
貝類 no ecg/g			2(3)/3	1(-)/~	4/10/4	1(-)/~	1(-)/~		4/15)/4	2(5)/4			
糞石 no ecg/g	41(129)/47	42(70)/46	92(5)/12	13(50)/36	71(59)/56	18(38)/13	3(8)/6		9(25)/13	18(80)/33	3(2)/4	B(20)/26	
瓦 no ecg/g	10(12)/4	5(5)/2	6(2)/1	14(15)/5	10(8)/2	6(4)/2	4(3)/~	5(10)/6	14(20)/8	21(30)/9	2(2)/~		
鏡 no ecg/g		71(-)/~	71(-)/~					2(10)/8	2(2)/4		1(1)/2		
瓦片 no ecg/g												11/10/4	
鏡片 no ecg/g												2(8)/8	
鏡サコ骨 no ecg/g												1/-/3	
鏡(非瓦片) no ecg/g	1(2)/6	1(-)/1				4(5)/5	1(10)/16	1(1)/2	3(3)/3		3(10)/14		
鏡(石瓦片) no ecg/g		2(5)/8	1(3)/6			2(2)/2					5(50)/41	4(15)/16	6(25)/28
9.5-10 mm	400/175	400/180	400/182	270/127	290/133	370/166	180/87	350/176	320/149	200/112	200/119	300/146	
4.0-2.0 mm	400/198	350/194	370/191	440/245	430/250	350/172	320/182	340/170	350/178	250/146	360/234	350/194	
2.0-1.0 mm	480/250	400/227	385/228	380/244	200/264	385/228	520/318	360/198	370/214	260/184	420/306	360/217	

第109表 シーリ遺構内土壌サンプルから抽出された貝類遺体等の詳細

半點名の面の＊は直角鏡、○は成鏡、△は鏡、□は多鏡、△△は色彩のこり、△△△は薄色付鏡物アラミド、△△△△は反射鏡、m.j.は小形鏡片、s.j.は小形鏡片

②結果および考察

今回のサンプルからは、少なくとも海産貝類13種、陸産貝類11種と比較的少数の貝類遺体しか抽出されなかった(第109表)。また、淡水産貝類は確認できなかった。以下に、海産貝類と陸産貝類に分けて、その特徴・由来や周辺環境の推定等に関して述べたい。

海産貝類

海産貝類では、食用のカンギクが比較的多かったのみで、他の食用種としてハマグリ類・アラスジケマン・イソハマグリ等の二枚貝類が少数抽出された。第110表には、遺構内からピックアップ法により得られた貝類遺体の組成を示したが、やはりカンギクが極めて多く、他の種としてはチョウセンザザエ(フタ)が目立った程度であり、小形種まで検討できた土壌サンプルでも食用貝類に大きな変化は認められなかった。個体数は少ないながら、ピックアップ法の結果と同様に、詳細な地点と時期が特定できた本遺構でも、カンギクが食用貝類として重要であったと考えられた。そして、出土量は黒褐色土層で多いものの、他の層でもある程度の廃棄が行われていた(第108・110表)。一方、貝類の個体数が極めて少ないとから、この遺構内には貝殻は廃棄しないという規制が明確に存在したことわかる。これは、9.5mmメッシュ上の数として、魚骨は多いにもかかわらず、貝類は少数で、陸上脊椎動物はほとんど見られないことからも明らかであった(第108表)。小形貝類もほとんど得られなかつたことから、これまでに先史時代遺跡で議論してきた“ダシ的な利用”や“海藻類利用”(黒住2002等)は検討できなかつた。むしろ、時代が下り、権力者の居住域であるため、ダシや海藻の利用が認められないということを示している可能性も高いと考えられる。また、他の土壌サンプルを含め種子(詳細は未検討:種子以外も少數含まれる可能性がある)が多数抽出された(第111表)。その中には、穀類はほとんど見られないようであった。つまり、魚類や植物質のものは廃棄するものの、獸骨や貝類は廃棄しないという制約が明瞭に読みとれる。

一方で、水磨を受けた二枚貝を含む小形貝類(イワカワチグサ・オキナワヒシガイ等)も僅かではあるが得られている(第109表)。後代の混入のほとんど認められない堆積物であり、何らかの意図の元に持ち込まれたものと考えられるが、その意図は全く不明である。もしかすると、海岸へ行った折に拾われたものなのかもしれない。また、これらよりも少し大きな1cm程度のチドリダカラ・サラサダマ等の球形の種で、磨減した個体もピックアップ法で数個体得られている(第110表)。これらは、以前に“おはじき様の遊具”的可能性も想定されるのではないかと考えたことのある貝である(黒住1993)。今回も、これらの貝はまとまって出土しなかつたので、まだこの想定を補強するものとは言えないが、今後も注意深く検討する必要があると思われる。

陸産貝類・ヤステ類

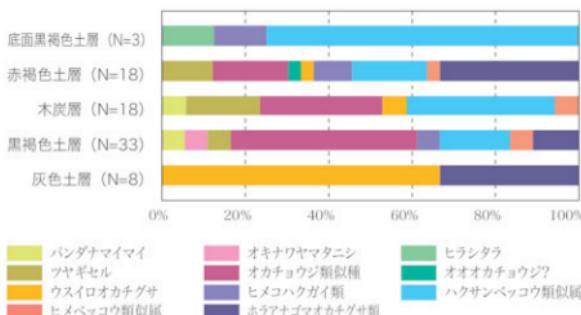
今回のサンプル中から得られた陸産貝類の種組成変化を第166図に示した。最下部の底面黒褐色土層と最上部の灰色土層では個体数が少なく、全体としての変化は明瞭でなかつた。ただ、オカチウジ類似種・ハクサンベッコウ類似属・ホラアナゴマオカチグサ類等が優占種と言えよう。今回の組成に類似したものは、今帰仁城跡周辺遺跡で知られている(黒住2007)。今帰仁城跡周辺遺跡の場合、移入陸産貝類も認められ、後代のものも含まれていたので、詳細に議論できなかつた。今回の組成では、

第110表 ピックアップ法で得られた貝類

種類	層	灰色土層等	黒褐色土層	赤褐色土層	本炭層	底面黒褐色土層
カシギク		1	141	15	2	
ショウゼンザザエ		5	20		2	
ツヤガゼル		4	3		9	
ラスマグサンガイ		1	2		7	
ヤコウガイ			2	1	1	
イソハマグリ		1	5		2	
オキシジミ		1	3	1		2
オキナワヤマタニシ			4	1		
ハマグリの一種			1		3	
イワカニモリ	1		1	1		
シレナシジミ			2		1	
アツキクスズメ			2			
ウラキツキガイ			2			
セラサダメ					1	
マルアマオブタ						
アマオブタガイ						
カワツイ	1					
チヌメドギ					1	
ヒドリダカラ			1			
ヒオシマヤタキ					1	
ヨダライカ			1			
イゼビマイキ						
ヒメシャコガイ			1			1
マスオガイ						
アラタノメガイ		1				
スダレハマグリ						

第111表 シリ遺構土壤サンプルから抽出されたヤステ類体節数及び種実数

No.	出土地点 ゾッド	網仔・色・レベル	ふらい目	体節数	種実数	No.	出土地点 ゾッド	網仔・色・レベル	ふらい目	体節数	種実数
1	B-4	黒褐色	1 mm	194	5	28	B-5	黒褐色	1 mm	502	181
2	B-4	黒褐色	5 mm	21		29	B-5	黒褐色	5 mm	1	
3	B-4	黒褐色	1 mm	1100	697	30	B-5	黒褐色	1 mm	1924	527
4	B-4	黒褐色	2.5 mm	54		31	B-5	黒褐色	2.5 mm	294	57
5	B-4	黒褐色	1 mm	2		32	B-5	黒褐色	5 mm	26	
6	B-4	黒褐色	1 mm	653	106	33	B-5	黒褐色	1 mm	297	31
7	B-4	黒褐色	1 mm	165	26	34	B-5	黒褐色	2.5 mm	8	
8	B-4	黒褐色	2.5 mm	9	13	35	B-5	黒褐色	5 mm	4	
9	B-4	黒褐色	1 mm	26	24	36	B-5	黒褐色	1 mm	259	58
10	B-4	黒褐色	2.5 mm	30		37	B-5	黒褐色	2.5 mm	7	
11	B-4	黒褐色	5 mm	4		38	B-5	黒褐色	5 mm	4	
12	B-4	黒褐色	1 mm	311	10	39	B-5	黒褐色	1 mm	778	346
13	B-4	黒褐色	2.5 mm	40		40	B-5	黒褐色	5 mm	1	
14	B-4	黒褐色	1 mm	517	148	41	B-5	黒褐色	1 mm	936	121
15	B-4	黒褐色	5 mm	10		42	B-5	黒褐色	5 mm	3	
16	B-4	黒褐色土Ⅳ	2.5 mm	49		43	B-5	黒褐色	1 mm	674	373
17	B-4+B-5	黒褐色	1 mm	323	22	44	B-5	黒褐色	2.5 mm	25	
18	B-4+B-5	黒褐色	2.5 mm	35		45	B-5	黒褐色	1 mm	86	
19	B-4+B-5	黒褐色	5 mm	4		46	B-5	黒褐色	2.5 mm	30	
20	B-5	木炭附着	1 mm	72	22	47	B-5	黒褐色	1 mm	445	124
21	B-5	木炭附着	1 mm	519		48	B-5	黒褐色	2.5 mm	2	
22	B-5	木炭附着	2.5 mm	458		49	B-5	黒褐色	5 mm	20	
23	B-5	木炭附着	1 mm	149	21	50	B-5	黒褐色	1 mm	898	188
24	B-5	木炭附着	2.5 mm	5		51	B-5	黒褐色	2.5 mm	632	117
25	B-5	黒褐色	1 mm	350	86	52	B-5	黒褐色	5 mm	12	
26	B-5	黒褐色	2.5 mm	25		53	B-5	黒褐色	5 mm	8	
27	B-5	黒褐色	5 mm	9		54	B-5	木炭附着	5 mm	30	



第166図 土壤サンプル中の陸産貝類種類組成

図版161 ヤステ類

林縁生息種のオキナワヤマタニシやツヤギセル・パンダナマイマイ等は比較的少なかった。また、開けた場所の湿った壁面に生息するウスイロオカチグサもいくつかのサンプルで得られた。ホラアナゴマオカチグサ類に関しては、黒住（2007）でも少し述べたが、類似種は洞窟内にのみ生息する真洞性であり、石灰岩礫中の暗所に生息していたものと考えられる。また、第109・111表に示したように、ヤスデ類（パパヤスデ類）の一部（体節）がきわめて多数認められた（図版161）。

上記の状況から、このシリ遺構周辺の環境について考えてみたい。まず、林縁生息種の陸産貝類が少ないことから、遺構周辺は開けていたと考えられる。ただ、林縁生息種のオキナワヤマタニシ等が僅かながら認められているので、少數の木立は存在した可能性がある。また、石灰岩礫中に生息すると考えたホラアナゴマオカチグサ類が認められたことから、遺構は石灰岩を掘り込んだ構造物と考えられる。

そして、中形で、活動性が高く、樹上にも登るパンダナマイマイやオキナワウスカワマイマイがサンブル中にほとんど見られなかつたことから、遺構は何らかの遮蔽物で覆われていたと考えられる。一方、主に地表徘徊性のヤスデ類が極めて多かつたことから、遮蔽物の下部には彼らが通れるだけの隙間が存在したものと思われる。つまり、遺構は壁に囲まれた空間であった可能性が高い。

シリ遺構は壁に囲まれ、その周辺には人手の入った僅かばかりの木立が存在していたという推定となった。これは、現代でも首里周辺で見られる景観であり、比較的想定しやすい状況ではある。ただ、微小陸産貝類等の遺体群からデータを元に復元できることには意義があると考えられる。

謝辞：貴重なサンプルの検討の機会を与えて頂いた沖縄県立埋蔵文化財センターの仲座久宣氏と土壤サンプルの処理等でお世話になった浦添市教育委員会の菅原広史氏、ヤスデ類のコメントを頂いた千葉県立中央博物館の萩野康則氏にお礼申し上げる。本報告の一部には、文部科学省科学研究費（課題番号：21101005）を用いた。

〈引用文献〉

- 黒住耐二 1993 「貝類遺存体」 In 中村 愿（編）『玉代勢原遺跡』北谷町文化財調査報告書 第13集: 287-293.
- 黒住耐二 2002 「貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活」 In 木下尚子（編）『先史琉球の生業と交易－奄美・沖縄の発掘調査から－』 pp. 67-86. 熊本大学文学部
- 黒住耐二 2007 「今帰仁城跡周辺遺跡から得られた貝類遺体（その2）」 In 宮城弘樹（編）『今帰仁城跡周辺遺跡III』今帰仁村文化財調査報告書第24集: 283-290.

3. 脊椎動物遺体

菅原広史(浦添市教育委員会)

(1) 脊椎動物遺体の分析方法

前述の土壤サンプルから得られたHF資料中の骨類及び、発掘調査現場において取り上げられた骨類(ピックアップ資料=PU資料)について行った同定など、分析方法の概要を以下に示す。対象とするPU資料については全ての資料を実見したが(第99・112表)、前項で記載したHF資料については分析量・時間等の関係から、ベルト部分の土壤サンプルより得られたうち5mm・2.5mmメッシュで回収されたものに分析の焦点を絞っている。なお、1mmメッシュ資料を概観してみると、同定可能な骨類はそれほど含有していない印象である。また、黒住氏が分析にあたった土壤サンプルについては、水洗選別後に貝類遺体が抜き出された資料から脊椎動物遺体を抜き出し、筆者が行ったサンプル資料と同様に分析を行った。ただし、水洗選別の際に用いた篩のサイズが異なるため、一覧・集計表中では各々を区別して記載している(第115~119表)。

○同定について

動物遺体の種同定は現世標本との比較を基本としている。用いた現世標本は筆者が個人的に所蔵するものに加え、沖縄県立埋蔵文化財センター・西本豊広氏(国立歴史民俗博物館)・樋泉岳二氏(早稲田大学)・栃木県立博物館の所蔵する標本を参照させていただいた。分類群ごとの詳細については以下に述べる。

・魚類

分析対象とした部位は主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨を主とした。これに加え、分類群によって頭蓋骨・咽頭骨・口蓋骨・擬鎖骨・腹椎・尾椎なども同定に有効である場合は対象としている。特に、椎骨は他の部位が残存しづらく、椎骨でのみ確認される分類群もあるため注意が必要とされる。しかし、複数の現生標本に類似する形状を持つ例も多く、十分な検討を行いきれない点も加わり、同定が困難である場合が多い。そのため椎骨については明確に同定できる資料以外は「対象外」として扱っている。また、ブダイ科やハタ科・エフキダイ科の一部の椎骨は同定可能である場合もあるが、本分析においては「対象外」とした。椎骨以外の部位においても現段階でいずれかの分類群に属するか判断しがたいものは「保留」、参照した現生標本のいずれにも該当しないと判断されるものは「未同定」として記載している。

・爬虫類・鳥類・哺乳類

基本的には部位が特定できる資料を対処としているが、肋骨については除外している。また、ウミガメ類や哺乳類の椎骨などは部位特定が可能であっても、小破片については対象外とした。

○計測について

同定後の資料について魚類の一部及び哺乳類の分類群資料について骨長計測を行った(第100~105表、第169~178図)。魚類はハタ科・クロダイ属・エフキダイ科・ブダイ科・ベラ科の前上顎骨と歯骨を対象とし(ハタ科は歯骨のみ)、前者は「前上顎骨長・柄状突起長」、後者は「歯骨長・歯骨高」を計測位置とした。また上記以外に椎骨の前開節面下径をポイントとして、同定した資料を計測対象とした。哺乳類の計測位置については基本的にDriesch1976に従っている。

○集計について

各分類群において集計に際し、最小個体数(MNI)および同定標本数(NISP)を算出している(第114表)。NISPは同定対象資料に加え、「対象外」とした椎骨なども集計表に含めたものについては合算している。MNIはPU・HF資料の別を問わず、資料を遺構内出土で一括して扱い、一方で本遺構外の資料とは区分けして算出した。

(2) シリーや遺構出土資料の分析

種同定に関する記載

ここでは同定された分類群について、同定に際する所見について記載する。なお参考として、各分類群の冒頭に沖縄における一般的な方言名を紹介した。ただし、方言名はその分類群の一部の種を示していることが多く、分類群名称と等しく結ばれるものではない点に御留意いただきたい。

①軟骨魚類

サメ類の椎骨および歯が同定されている。歯はHF2.5mm資料から検出されており、かなり小型のサイズを呈す。

②硬骨魚類

・ニシン科

ミジョンと呼ばれ、ミズンの標本に近似する資料である。5mm・2.5mmメッシュのHF資料から出土しており、ピックアップ資料からは検出されていない。

椎骨のみ確認されている。椎骨を前面からみると腹側面が広い「しもぶくれ状」を呈しており、また椎体中心に通る穴の椎体直徑に対する比率が、高い点が特徴である。その他にもいくつかの特徴を有するが、計測値をみると(第178図) 椎体前面上下径で0.9~2.3mm(腹椎N=5・平均1.6mm、尾椎N=24・平均1.5mm)程度で非常に小型であるため、観察には注意が必要である。

ニシン科は沖縄において近年報告が確認されるようになった分類群であるが、その要因としては極めて資料が小さく、土壤サンプルを篩にかけることが採集の条件であるためである。本群のほとんどがHF2.5mmから検出されたことからも窺えよう。水洗選別など微細遺物の採集に調査の視点が置かれるようになったのは最近のことである。本来、普遍的に出土していたものであるかどうか判断しがたい。なお、ニシン科は沿岸及び外洋に広く生息する群であり、漁撈活動域を考察する上でカギになる存在となり得る。本群の取り扱いについては今後重点を置くべき資料である。

・トビウオ科、トビウオ近似

椎骨により同定される分類群である。腹側の前関節突起が左右に開き前方に突出する点、椎体側面の中央上部に神経棘から続くように斜めの隆起線が入る点が特徴として挙げられる。同じダツ目のサヨリ科の椎骨とも類似する形状を有するが前関節の突出方向や、椎体の形状などから判別可能である。計測値(第178図)はいずれも3mm台を示しており(腹椎平均3.4mm・尾椎平均3.2mm)、HF資料でのみ確認されている。

一方で、基本的な形状はトビウオと一致するものの、腹側面の中央に前後に強い隆起線を持つ一群が資料に見られる。この形状が、参照したトビウオの現生標本と一致しないため、これらについては判断を保留し、トビウオ近似として表記した。サイズの点(第178図)では腹椎3.7mm・尾椎3.5mm

(いずれも平均) とトビウオ科のそれと近似する。

・サヨリ科

椎骨で同定される群である。椎骨はトビウオ科と類似する特徴を持つが、腹椎の前関節突起が前傾せず横に飛び出す点、椎体がやや細身で丸みを帯びる印象が持たれるなどの差から判別している。計測値(第178図)は2.4mm～3.8mmである。

・ダツ目未同定

トビウオ科・トビウオ類似資料と形態的特徴が近似するものの、現生標本と一致するとは言い難い資料が見られるため、これらについては判断を保留する意味で本群を設けた。

・ボラ科

椎骨でのみ同定されている。PU資料ではほとんど見られないものの、HF(5mm)・HF(2.5mm)資料から同定される椎骨の中では比較的数が検出されている。計測値(第178図)の平均は腹椎1.7mm(N=24)・尾椎3.8mm(N=8)で、尾椎では8mm程度の値を持つものもあるが、大多数は2mm前後で占められる。

・カマス属

前上顎骨・歯骨及び椎骨が出土する。歯骨に見られる剃刀状の鋭い歯や細長い椎体などが特徴的であり、比較的の同定が容易である。前上顎骨については後端部の数点が同定された。また、本分類群の同定数ではHF(5mm)から検出された椎骨が最多である。椎骨の計測値(第178図)では2.4mm～6.5mmとやや幅があるが、多くは平均(腹椎4.0mm・尾椎3.9mm)周辺の値である。

・ハタ科

ミーバイ、イシミーバイ、アカジンミーバイなどと呼ばれる、サンゴ礁に生息する魚類の代表格の一つである。

主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・擬鎖骨などが対象部位である。前上顎骨及び歯骨からはそれぞれ形態が近似する現生標本から「マハタ型」「スジアラ型」に細分している。主に歯列がその根拠となり、前上顎骨類側に比較的大きな犬歯状の歯が並ぶ点、歯骨の前方で歯列が一時途切れる点などがスジアラ型の特徴である。「マハタ型」と「スジアラ型」の同定数をみるとマハタ型の比率が高い。

ハタ科の計測は歯骨のみで実施している(第169図)。前上顎骨は同定可能であっても完存していないことが多い、計測不能資料が多いため除外した。計測値の平均をみるとマハタ型は歯骨長16.6mm(N=8)・歯骨高7.0mm(N=18)、スジアラ型では歯骨長63.6mm(N=3)・歯骨高8.7mm(N=26)となっており、スジアラ型がより大きな個体で占められると考えられる。

・アジ科

ガーラと呼ばれるギンガメアジ属などの大型魚と、ガチュンと呼ばれるメアジ属などの小型のアジ科の2つの分類群に同定している。回遊魚であるがサンゴ礁の近縁や港内にも入り込んでくる種類である。

大型のアジ科はギンガメアジやカスミアジなどに近似するギンガメアジ属、イトヒキアジに近似するイトヒキアジ属にそれぞれ同定できる。主上顎骨・前上顎骨・歯骨・椎骨などが同定対象となり、歯列の形状などからギンガメアジ属やイトヒキアジ属などの同定が可能である。

一方小型のアジ科は、主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・腹椎・尾椎が主な同定対象であるが、椎骨がより多くの同定数を誇る。同定にはメアジの現生標本を比較に用いており、いずれの部位も形状が近似している。ほとんどがHF資料から検出されたものでありPU資料からは確認されていない。椎骨

の計測値も1.9～3.8mmを示しており(第178図)、比較的小型であることがその要因とみられる。計測平均値(第178図)は腹椎2.2mm(N=11)・尾椎2.5mm(N=85)である。

・シイラ属

回遊魚であり、現在では沖合に漂流物を設置するバヤオを利用した漁法で捕獲されることが多い。カツオなどと同様外洋での獲得活動を示す魚種と言える。

同定されているのは主上顎骨・歯骨・腹椎及び尾椎である。椎骨の椎体側面に細かい隆起線が多数入る点と骨質が脆い点が特徴であり、比較的同定しやすい一群である。平成11年度資料を中心に出土が確認されている。椎骨の計測値は腹椎17.7～20.3mm(平均19.4mm・N=6)、尾椎15.7～23.5mm(平均20.6mm・N=16)であり、他の椎骨のサイズに比べてかなり大きい(第178図)。

なお、これまで首里城の調査報告では本分類群に関する記載はないが、「右掖門及び周辺地区」では「種不明」として図版に掲載されているほか(沖縄県立埋蔵文化財センター2003)、「書院・鎮之間地区」からの出土資料に本分類群の椎骨が含まれていることを、沖縄県立埋蔵文化財センター収蔵資料を実見した上で確認している。

・クロダイ属

チンなどと呼ばれる河口付近の汽水・マングローブ林域に生息する一群である。

主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨における形状が特徴的である。角骨はエフキダイ科などと類似するため注意が必要である。

・エフキダイ科

タマン、ヤキータマン、タカカジ、ダルマーなどと様々な方言名が存在する一群である。近年、前上顎骨などの形状を詳細に観察することで属以下のレベルでの細分が可能となってきた(樋原・名島2007)。

エフキダイ科はヨコシマクロダイ属、メイチダイ属、エフキダイ属の3属が確認された。これらは前上顎骨長と柄状突起長の比率、前上顎骨歯列の形状、口蓋骨の全体形状などから分類が可能である。さらに前述の通り、エフキダイ属前上顎骨はアマミエフキに近似するものと、ハマエフキに近似するものとに細分できる。エフキダイ科全体では出土動物遺体群の第一優占種となり、その中でもエフキダイ属ハマエフキ型が最多数を占める。ハマエフキ型が最多数となる事例はそれほど珍しいこともないが、本資料においてはアマミエフキ型の比率が比較的多いと感じられる。前上顎骨の計測値を比較するため、分布図をみると(第172図)分類群ごとのまとまりかくえ、分類基準の一つである前上顎骨長と柄状突起長の比率の要件が反映されていると言える。なお、各分類群の計測値はメイチダイ属15.0～28.3mm:27.5～44.5mm(前上顎骨長:柄状突起長、以下同)、アマミエフキ型17.8～47.9mm:25.9～47.0mm、ハマエフキ型15.7～50.8mm:18.5～66.7mmとなっている。また、歯骨は細別を行わず、エフキダイ科として一括している(第173図)。

その他の同定部位としては、主上顎骨・歯骨・角骨・方骨などである。腹椎・尾椎については本分析においては「対象外」とした。

・ベラ科

沖縄においてはマクブと呼ばれるシロクラベラが代表的なベラ科であるが、海棲魚類の中では大きな分類群であり(上野2005)、相当数の種が存在するため「科」以下のレベルで同定することは困難である。ただし、咽頭骨の歯列面の形状などである程度の細別が可能であり、「シロクラベラ型」「コブダイ型」「ベラ科B」「その他」に分類している(「コブダイ型」・「ベラ科B」の分類については

金子1996に従った)。主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・上下咽頭骨が主な同定部位である。ペラ科もブダイ科同様頑強な上下の咽頭骨を持つが、やはり本遺構からはほとんど出土しない。他の事例との比較においてこの点においても「異様」な特徴である。このペラ科の計測も前上顎骨と歯骨を対象とした(第174・175図)。前上顎骨長は23.1~55.0mm(平均33.8mm・N=20)、柄状突起長は29.3~59.0mm(平均39.4mm・N=23)、歯骨では歯骨長が25.0~53.8mm(平均36.0mm・N=18)、歯骨高が11.3~28.3mm(平均19.2mm・N=26)の計測値を各々示している。

・ブダイ科

ブダイ科はイラブチャーと呼ばれ、サンゴ礁を生息域とする南洋に特徴的な魚種である。

筆者はこれまでいくつかの遺跡資料の分析を行ってきた中で、ブダイ科を主にブダイ属、イロブダイ属、アオブダイ属の3つの分類群に同定してきたが、御内原地区の分析に当たってはアオブダイ属を更に細分する試みを行った。

シーリ遺構を含めて御内原北地区から出土しているブダイ科の前上顎骨及び歯骨・咽頭骨の多くはアオブダイ属に同定される。その前上顎骨と歯骨を観察してみると、大きく二つの形状に分かれれる傾向が窺える。そこでアオブダイ属A、アオブダイ属Bとして両者を区別した。ブダイ科は種のバリエーションが豊富であるため、いずれの種に同定されるかは明確でないが、この二分類群を見出すことは可能と言えよう。これを受けて計測データを比較してみると(第176・177図)、歯骨の計測値分布にA・Bごとのまとまりが窺える。Aの歯骨長:歯骨高が26.3~55.8mm:19.0~31.9mm、Bは22.6~51.3mm:12.4~27.8mmとなり、高に対する長の比率でBがより大きい。前上顎骨は計測値分布上差が表れないか柄状突起の角度によって区別が可能である。

また、ブダイ科は前上顎骨・歯骨・主上顎骨・角骨・方骨・腹椎・尾椎などが出土しているが、上下の咽頭骨がほとんど出土しない。ブダイ科の骨格では最も頑強な部位であり、通常の出土資料ではこれが最多数の出土であることが多いが、本資料においては状況が異なるようである(腹椎・尾椎は集計上「対象外」扱い)。

・カツオ・スマ類

カツオ・スマの2つの分類群に同定できた。回遊魚の代表的な魚類であり、サンゴ礁など沿岸での漁撈が中心となる沖縄諸島の遺跡からは出土する事例数が少ない。出土部位は前上顎骨・歯骨・椎骨であり、カツオ・スマ類に同定できると判断している。また、腹椎腹側面の形状や、尾椎の椎体側面の隆起線や神經・血管棘の残存形状からの推定など、よりスマ・カツオの両者に同定できると考えられる。

計測値は両者に大きな差はないため、表中では項目を一括しており(第178図)、腹椎5.8~11.3mm(平均8.7mm・N=4)・尾椎6.0~7.3mm(平均6.7mm・N=12)。

これまでの脊椎動物遺体の同定の中では出土が認識されてはこなかったが、近年報告事例が見られるようになり、沖縄諸島における漁撈活動の外洋への展開が示唆される。加えて、これまで比較的近縁性の強いスマが出土していたが、今回カツオも確認された点は、注目される。

・アイゴ属

同定された本分類群のはほとんどが腹椎および尾椎である。尾椎はニザダイ科や小型のアジ科などと類似するが、棘突起や前関節突起の形状・角度などから区別可能である。

本分類群のうち特に微小な資料がHF(2.5mm)から検出されている。椎体長が概ね1mm以下であり、極めて小さいが形状は一致するため本群に同定しており、アイゴ属の幼魚と考えられる。今帰仁城周辺遺跡出土資料において報告事例がみられ、「スク」であろうと言及及されている(樋泉2007)。椎骨前関節面

上下径での計測値で比較すると(第178図)、「アイゴ属」腹椎1.7~4.3(平均2.8mm・N=6)、尾椎1.8~4.8(平均3.5mm・N=16)に対して、「アイゴ属スク」としたものは、腹椎0.5mm~0.9mm(N=11)、尾椎0.5mm~1.0mm(N=34)で平均は両者とも0.6mmである。

・その他

このほか、ウナギ属・イシダイ科・モンガラカワハギ科・ニザダイ科・ハリセンボン科などがそれぞれ少數ずつ出土している。また、骨以外に魚類の鱗が多量に検出されている。サイズや形状などから複数の分類群に由来するものが混在しているものと思われるが、比較検討が不十分であるため具体的な同定には至っていない。

・未同定

角骨・方骨・一部の椎骨などで参照した現生標本に近似する形状を見いだせなかった資料については未同定として、今後の検討課題とした。

・保留・対象外

同定対象部位のうち、破損・変形等や複数の分類群に近似した形状を持つものなど、確実性が低いと判断される場合は保留と記載している。また、ハタ科・エフキダイ科・クロダイ属・ベラ科・ブダイ科とこれらに近似するとみられる椎骨については同定対象外とした。

③鳥類

長管骨の骨幹のみが残存しており同定対象に含めていないものも多いが、同定可能な鳥類はニワトリに同定される。頭蓋骨、頸椎、肩甲骨、上腕骨、手根中手骨、大腿骨、脛足根骨などが確認された。鳥類に関しては比較標本が極めて不十分であることから、明確にニワトリと形状の一一致した資料以外は「鳥類」としての分類群に留めている。

④爬虫類

爬虫類はヘビ類及びウミガメが僅かに出土しているのみである。ヘビ類は椎骨、ウミガメ類は腹甲もしくは背甲の破片がほとんどであるため、詳細については不明である。

⑤哺乳類

・トガリネズミ科

頭蓋骨および下顎骨が出土している。これまでの首里城の報告で「ジネズミ類」と表記されてきたものであると思われる。食虫の性格を持つことから、本遺構で出土している「ヤスデ類」などを狙い混入してきたのではないかと考えられる。

・ネズミ科

上顎骨・下顎骨・椎骨・肩甲骨・上腕骨・尺骨・寛骨・大腿骨・脛骨を中心に出土している。上顎・下顎の歯列形状などからはネズミ科に同定できる。遺構内出土物から想定すると、投棄された「ゴミ」を目的に自然混入した可能性が高いと考えられる。

・イヌ

上腕骨・大腿骨・腰椎が確認されており、各部位にはカットマークが観察される。

・シカ

ニホンジカに同定されると考えられる上腕骨・桡骨・尺骨・大腿骨・脛骨が確認された。上腕骨には関節に近い骨幹部に多数のカットマークが観察される。沖縄諸島にはニホンジカが生息していなかったことから、島外からの持ち込みによるものである。遺構が属する17世紀前半には、薩摩から慶良間諸島ヘシカを持ち込み、「放した」とされる文献上の記述がみられるため関連性が示唆される。なお、本報告に先立ち首里城他地区及び天界寺から出土した資料と合わせ、シカの出土に関する考察を行っている（菅原2009）ためご参照いただきたい。

・イノシシ／ブタ

遺構内から検出された本分類群の資料は基節骨など、小型のものが僅かに混じるのみである。イノシシとブタにまつわる形質的な問題は前節で述べたとおりであるが、遺構内出土の資料は小型であることからも、より判別は難しい。

・その他

以上のほか、ピックアップ資料からはウマ・ウシ・ヤギ・ジュゴンが同定されている。同定対象外とした資料中に哺乳類骨のものと考えられる破片も多く存在するが、魚類や動物遺体以外の遺物の出土様相に比べ、数においてはとりたてて目立つ要素は見られない。

（3）出土組成について

同定結果をもとにシーリ遺構内を含む御内原北地区出土の脊椎動物遺体組成を示したもののが第167図である。このうちシーリ遺構からの出土傾向をみるとMNI、NISPとともに、圧倒的に魚類で占められていることが明確である。特にNISPでは今回の分析に含まれない部位なども存在するため、実際には更に多くを占めるものと思われる。以下、分類群ごとに傾向を述べる。

組成を魚類に絞りMNIで比較すると（第168図）、フエキダイ科が組成中の第一位を占めており、ブダイ科がそれに次ぐ。しかし、それ以外については目立って組成の多くを占める分類群は見られない。優占するフエキダイ科であっても全体に占める比率は約25%であり、圧倒的多数を占めるとまでは言い難い。NISP資料も同様で、PU資料では約40%、HF資料に至っては約16%で組成の第一位からも外れている。従来、フエキダイ科やブダイ科・ベラ科といったサンゴ礁域に特徴的な魚種が組成の大半を占める事例が多いことを考えると、本遺構においては出土数が少ない傾向にあると言えることができるとともに、それ以外の魚類の分類群の多様性を窺うことができる。特に、水洗選別によって得られた微細骨の同定結果に着目すると、トビウオ科やアジ科小型種、アイゴ属の幼魚など首里城の調査において、これまで報告されていない分類群が注目される。これらの多くは椎骨であるためMNIに換算すると多くの数になるわけではないが、小型種の魚類がそれなりの数で検出された点に対して、一考する必要があろう。ただし、フエキダイ科・ベラ科・ブダイ科については椎骨や同定対象外の部位が反映されていないため、実際にはもう少し組成比率が増加すると見込む必要がある点には留意しなければならない。

魚類以外の分類群の組成は極めて少数であるが、カットマークが見られるイヌやシカなどについては、少数といえども検出されている点について留意すべき資料であろう。また、シーリ遺構外の組成比率と比較すると、NISPにおいては哺乳類の傾向が異なるようである。動物遺体の出土傾向から本遺構の利用様相を考える上で、哺乳類の出土が僅少である点が何らかの意義を持つものとして着目される。

第112表 シーリ遺構ピックアップ資料集計表（魚骨）

第113表 水洗遺別資料から得られた遺物の集計

計量には表中790.1< (1未満)、3< (5未満) を含まない。

第114表 最少個体数および同定標本数

分類群	HF(nn)						シーリ遺構内		シーリ遺構以外		
	9.5<	5	9.5-4	2.5	4-2	PU	NISP	MNI	H19 NISP	H1 NISP	MNI
エイサメ類					1		1	1	7	9	3
トビエイ科							0	—	1	1	—
ウツギ属	2		3	4			9	1			—
ニシン科	2		21	8			31	1			—
ヒトウダイ亜科	1						1	1			—
ボラ科	1	9	2	22	2		36	3			—
サゴリ科	9		1				10	1			—
ヒビウオ科	18	3	2			1	24	1			—
トビウオ近似	44	6	2				52	2			—
ダラ科	1						1	1		1	1
ダラ目未同定	13						13	—			—
カマス属	16		6	2	2		26	2	1	2	1
ハタ科(マハタ型)	4		1		14		19	6	14	13	11
ハタ科(スジアラ型)							4	4	1	8	6
ハタ科	1	10					32	43	10	14	11
(ヒトウアジ属(ヒトキアジ近似))			1				1	2		4	2
ヒンガマジ属(カヌミアジ近似)							1	1	1	2	1
ヒンガマジ属(ヒンガマジ近似)	2						2	1		7	—
アグ科(大型)							0	—	2	9	1
アグジ近似種	65	19	35	2	2		123	6			—
シラ属							0	—	3	42	2
フエダイ科	3						4	7	3	1	4
コショウダイ亜科							2	2	1	6	4
コショウダイ類似							3	3	1		—
クロダイ属	1	13	1	1			23	39	7	10	6
ヘダイ							0	—	1	1	—
ヨシシマクロダイ	3						1	4	1	6	4
メイダダイ属	1						4	5	3	1	5
フェフダイ属(ハッフェフキ型)	1	12					21	34	22	11	45
(エフダイ属(アミミフキ型))							9	9	6	3	9
ワラキダイ属	2	19	1				28	50	26	17	28
ワラキダイ科	4	56	4				96	160	31	40	105
ヒンダダイ科	1						2	3	1		—
ベラ科(シロクラベラ型)							1	1	1	4	6
ベラ科(B)	1						1	2	1	1	1
ベラ科(その他)	2			1			3	3	1	2	2
ベラ科	1	9		1			48	59	10	18	49
ロブダイ属							0	—	3	2	—
オオブダイ属A	1						14	15	7	9	34
オオブダイ属B	2	10					28	40	14	9	13
アブダイ属	1		1				3	5	—	10	4
ブダイ科	4	20	1				25	50	15	6	10
スマ		13					5	18	2	2	1
カオメ							2	2	1	1	1
カワオメサメ類	1	1					2	4			4
ニザギ科	1	10	4	3			17	35	2	4	10
アゴ属	18	1	5	2	2		28	2	1	1	—
アゴ属(スク)			27	9			36	3			—
センガラカラハギ科	1						4	5	3	2	—
スマカサウエ科							2	2	2	1	—
ハリセンボン科	4						4	2			—
保留	9	4	8	3			24		23	21	—
未同定	13		9	4			26	—	5	4	—
対象外	19	539	75	308	72	311	1324	—	112	134	—
ヒビ類		17	2	2	1		24	1			—
クサメ科							0	—		11	1
ニワトリ	1						17	18	3		—
鳥類							3	3	—		—
トガリネズミ科							3	3	1		—
ネズミ科	4	5	6	2			14	31	4	1	—
イヌ							6	6	1	14	2
ネコ							0	—		1	1
クマ							0	—	2	2	1
イシシ/ブタ	1						4	5	1	30	345
シカ							5	5	1	1	1
ヤギ							0	—		40	4
ウサギ							0	—	25	27	2
ジブジブ							0	—		3	1
ブルカクジラ類							0	—	1	1	—
哺乳類	4	2	9	4			19				—

第115表 シリ内遺構水洗選別資料集計表(5mm)

第116表 シーリ内遺構水洗遺別資料集計表(9.5mm)

第118表 シリ内構水洗還別資料集計表(2.5mm)

第117表 シリ内遺構水洗選別資料集計表(9.5-4mm)

项目	金额	金额	金额
利息收入	100	100	100
利息支出	—	—	—
手续费及佣金收入	—	—	—
手续费及佣金支出	—	—	—
投资收益	—	—	—
公允价值变动损益	—	—	—
汇兑收益	—	—	—
其他	—	—	—
合计	100	100	100

(4) 考察

上記の分析内容を踏まえ、御内原北地区及びシーリ遺構の動物遺体出土様相について考察を述べる。御内原という立地を考慮すれば、動物の持ち込みは大半が食用であり、持込物の選択制など内容に関して強い意識が働いたものと推測され、考察に際して念頭に置かなければならない要素である。また、シーリ遺構内の出土遺物は基本的に御内原地区において利用されたものが最終的に埋没したものであると考える。

HF資料の重量・容量比率を比較すると、動物骨(ほとんどが魚骨)資料が両者において最多を占める結果となった。非常に雑多な種類の「廃棄物」が出土する中で、魚骨が最多である点が着目される。炭化物や糞石などいすれも日常的に排出されるものが併存する状況にあって他群に優占することが、御内原における魚類利用頻度の高さを反映しているのではないかと考えられる。(ただし、出土資料一個の持つ意義は、動物遺体・陶磁器・植物遺体など各々で異なるため、魚類以外の利用が「低調」と示すわけではない。)

魚類の利用相に言及すれば、その中心はフエフキダイ科・ブダイ科などのサンゴ礁域に特徴づけられる漁撈を反映した結果と考えられるが、その一方でスマ・カツオ類・アジ科など外洋・回遊性や、クロダイ属・ボラ科など河口付近に見られる魚類が含まれる点から、サンゴ礁域に限定されない多様な種類の魚類利用を窺わせる。また、アジ科小型種やニシン科・トビウオ科・アイゴ属スクなどの魚類の出土に注目される。「首里城御内原地区」においても、これらのような「小型」魚種が食性の一端を担っていたと言ふことができよう。

分析において前上顎骨の観察からフエフキダイ科は3属が同定される上、フエフキダイ属を三分している。さらにハマフエフキ型とアマミフエフキ型に分けた中には完全には両者に形状が一致しない前上顎骨は便宜上近しい群へ含めている。種間差や個体差かは明確でないものの、雑多な「種」が混在している可能性があると思われる。また、ブダイ科は大半がアオブダイ属に同定され、本分析においては更にA、Bの分類群を設けた。両者の前上顎骨・歯骨の形状における差は比較的明確であるため、いすれの種とするかは不明確であるものの、特定の2群に集中して出土している可能性は指摘できよう。特にB型については個別資料間の差も少ないように感じられる。ブダイ科については持込みに際してある程度の選択が働いた可能性が示唆される。

次に魚類の出土部位に関する傾向についてである。ブダイ科及びベラ科の咽頭骨が頑強である点は先述したが、鱗を含めた両者の全身部位が出土する中で咽頭骨が出土しない状況は「通常」の出土傾向からすれば「異様」な内容である。これは、御内原地区への持込み形態に起因すると考えられる。咽頭骨は通常魚を捌く際、鰓に付属して抜き取られる部位であることがポイントである。即ち、御内原地区へブダイ科・ベラ科の魚が持ち込まれるときには、「鱗が付いたまま内臓が抜かれ、且つ全身が揃った状態に加え、細かく解体されてもいい状態」だったと推測されるのである。

魚類以外の鳥類あるいは哺乳類についてはシーリ遺構内からの出土は極めて少数に留まることから、積極的に利用様相に言及することは難しい。ただし、首里城他地区の調査事例では(沖縄県立埋蔵文化財センター2005ほか)、数多くの出土数をみてとれる。とすれば、本遺構から鳥・哺乳類骨の出土が僅少である点は、利用が薄弱であったというより、遺構に対する投棄がなされない状況を想定すべきだろう。すなわち、御内原地区へ鳥・哺乳類を食用として持ち込む際には、既に骨から取り外された状態であり、結果として本遺構内へ骨の埋没が少なくなると考えることが妥当ではなかろうか。解体された上で骨を取り外す調理方法が用いられたであろうことを示唆する。

(5)まとめ

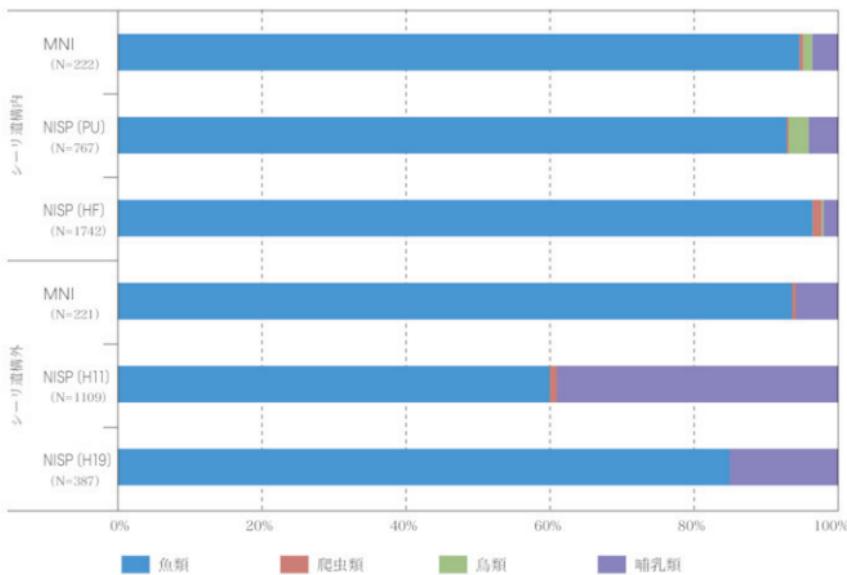
御内原地区という首里城「最奥」の位置づけにある地区的出土資料を考察することは、琉球王国における最上位層の人々の生活様相に言及することに他ならない。本節で述べた脊椎動物遺体の分析・考察結果が、その一端を示すと思われる。ただし、出土品は上位層と同時に御内原地区に住んだ人々がそこで生活した結果をも含んでいる可能性が十分に考えられるため、データを解釈する際にはこの点にも注意を払う必要があるだろう。

調査で得られた資料中には、未同定資料などの十分に検討しきれなかったものや、時間等の都合上で分析対象外としたものも残されている。これらについては今後、明らかにすべき課題として、更なる検討を続けていきたい。

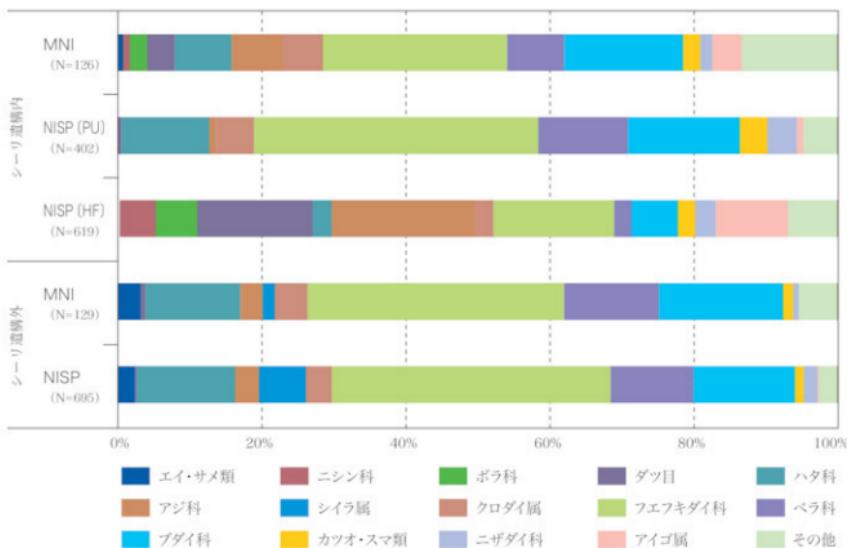
謝辞：本分析にあたり現生標本を参照させていただくと共に、同定について西本豊広氏・樋泉岳二氏に御助言賜った。また、土壤サンプル処理については、黒住耐二氏にお世話になった。その他関係各所の方々に対して末筆ながら記して御礼申し上げる次第である。

〈引用・参考文献〉

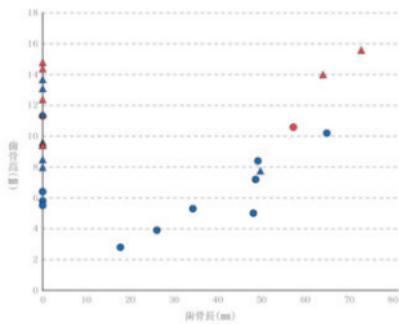
- 上野輝彌 2005『新版 魚の分類の図鑑 世界の魚の種類を考える』東海大学出版会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2003『首里城跡—右掖門及び周辺地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第14集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡—書院・鎮之間地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告第28集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『首里城跡—御内原地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第34集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『首里城跡—御内原西地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第44集
- 樋泉岳二・名島弥生・菅原広史 2009『今帰仁城跡主廓東斜面から出土した脊椎動物遺体』『今帰仁城跡発掘調査報告IV』今帰仁村文化財調査報告書第26集
- 樋泉岳二 2007「第四節 今帰仁城跡周辺遺跡出土の脊椎動物遺体群—III区b・東7区・シングンニー』『今帰仁城跡周辺遺跡III—村内遺跡発掘調査報告—』今帰仁村教育委員会
- 仲座久宜 2009『シーリ遺構から見る御内原のくらし』『沖縄埋文研究』第6号
- 名島弥生 2005「第四節 今帰仁城跡周辺遺跡出土脊椎動物遺体』『今帰仁城周辺遺跡II—今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』今帰仁村教育委員会
- 名島弥生・樋泉岳二 2007『南島考古学におけるフエキダイ科魚類の属レベルでの同定とその意義』『第11回動物考古学研究集会発表資料』
- 菅原広史 2009a「第5章第2節4. 脊椎動物利用にみるアンチの上貝塚の人間活動』『瀬底島・アンチの上貝塚—個人住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書—』本部町文化財調査報告書第9集
- 菅原広史 2009b「首里城および周辺遺跡出土のシカに関する考察』『沖縄埋文研究』第6号
沖縄県立埋蔵文化財センター
- A. von den Driesch 1976 "A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites" Peabody Museum Bulletin 1. Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University



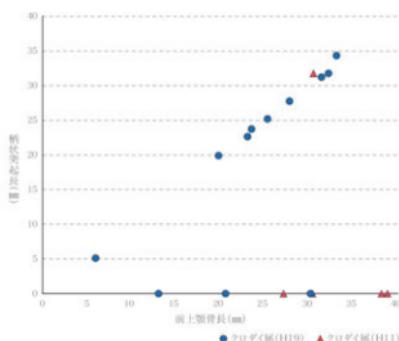
第167図 脊椎動物遺体組成



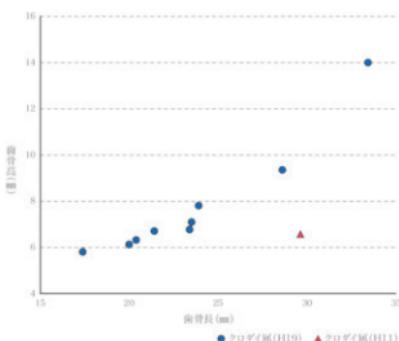
第168図 魚類組成



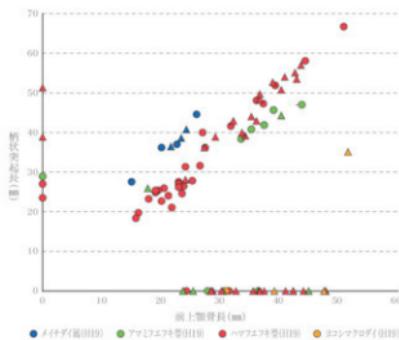
第169図 ハタ科歯骨計測値分布



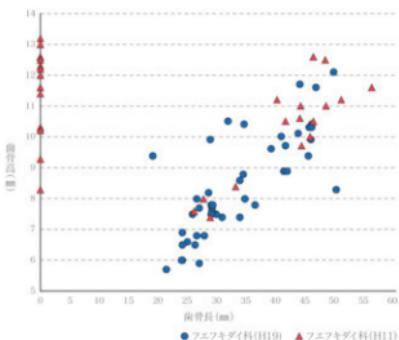
第170図 クロダイ属前上顎骨長計測値分布



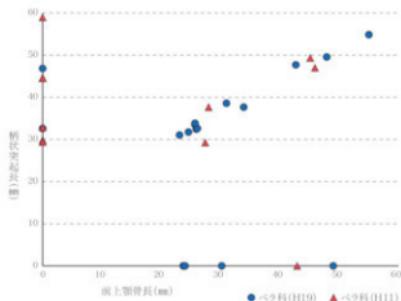
第171図 クロダイ属歯骨計測値分布



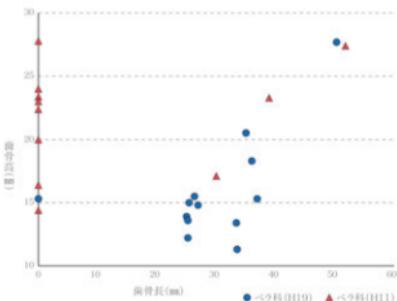
第172図 フエフキダイ科前上顎骨計測値分布



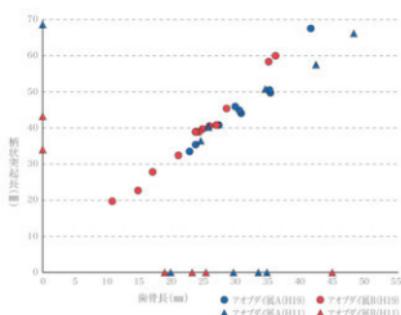
第173図 フエフキダイ科歯骨計測値分布



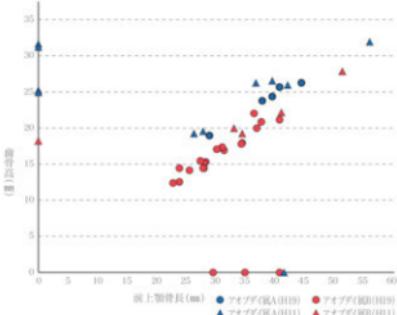
第174図 ベラ科前上顎骨計測値分布



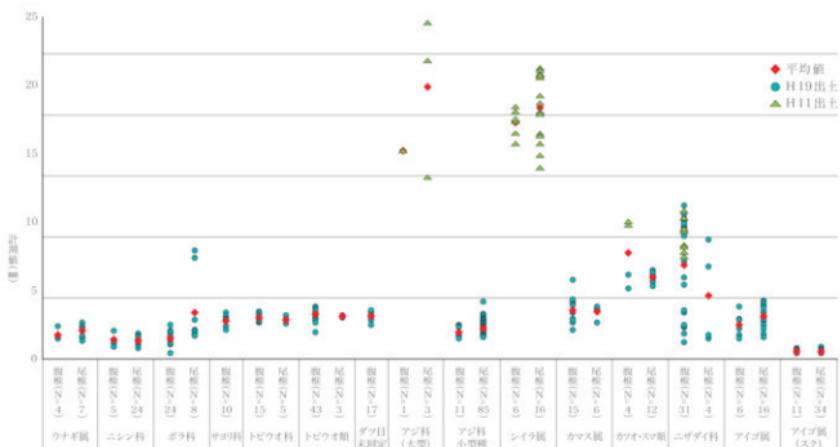
第175図 ベラ科歯骨計測値分布



第176図 アオブダイ属前上顎骨計測値分布



第177図 アオブダイ属歯骨計測値分布



第178図 魚類椎骨計測値分布

4. 人骨（シーリ遺構内）

片桐千亜紀・土肥直美（琉球大学）

①はじめに

沖縄県立埋蔵文化財センターが平成19（2007）年度に実施した、首里城跡御内原北地区シーリ遺構より出土した遊離歯（永久歯・乳歯）について報告する（図版162）。

今回出土した乳歯・永久歯の遊離歯は、出土量こそ少ないものの、御内原内で展開された国王やその親族、女官達の生活の一端が推測できる貴重なものである。

②資料と調査方法

シーリ遺構から出土した遊離歯は乳歯4本、永久歯3本の計7本である。それぞれ歯種別の数量を第179図に示す。

歯の鑑定の際に用いた年齢区分はKnussman (1988) を参考にした。年齢の推定はUbelaker (1989) を参考に歯の放出状態から、Brothwell (1981) を参考に咬耗度から行った。

乳歯の数量								永久歯の数量																				
E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	8	7	6	5	4	3	2	1	1	1	2	3	4	5	6	7	8		
					2	1																						
E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	8	7	6	5	4	3	2	1	1	1	2	3	4	5	6	7	8		

第179図 歯種別数量

③歯の所見

それぞれの歯の所見について、第120表に示す。

第120表 歯の観察一覧

名 称	歯 種	年 齢	所 見
1号人骨	乳歯	上顎左乳側切歯	7歳前後 歯根部吸収、空洞化。自然脱落の可能性が高い。
2号人骨	乳歯	上顎左乳側切歯	7歳前後 歯根部吸収、空洞化。自然脱落の可能性が高い。舌側面の摩耗が著しい。
3号人骨	乳歯	上顎左乳犬歯	10歳前後 歯根部吸収、空洞化。自然脱落の可能性が高い。
4号人骨	乳歯	上顎左第二乳臼歯	10歳前後 歯根部吸収、空洞化。自然脱落の可能性が高い。近心面にC4段階の齶歯。
5号人骨	永久歯	下顎右中切歯	成 人 舌側面に多量の歯石。
6号人骨	永久歯	上顎左第一小臼歯	成 人 遠心面歯根部中央付近まで歯石。
7号人骨	永久歯	下顎左第二大臼歯	成 人 遠心面エナメル質境界面を中心にC4段階の齶歯。

④まとめ

歯の数量と状態によって最小個体数を推定すると4体となる（第120表）。しかし、遺跡が通常人骨が検出される「墓」ではなく、住居空間の生活ゴミ廃棄施設であるシーリ遺構という性格を考えると、一個人の歯が同時にいくつも脱落したとは考えにくく、1本1本が別々の個人のものである可能性が高いと考えるほうが妥当かもしれない。

年齢を推定すると少なくとも7歳前後の小児2名、10歳前後の小児、成人が存在した（第120表）。乳歯については、歯根部がじゅうぶん吸収されており、内部が空洞化していることから、成長とともに

なって自然に脱落したものと考えられる。シーリ遺構は女官達によって使用されたと推定されていることから（仲座2009）、成人の永久歯は女官のものである可能性が示唆されるが、6歳～10歳の小児も存在したことは、御内原の実態が垣間見えるようで、注目される。歯の健康状態を観察すると、4・7号人骨にC4段階の激しい齲歯が認められ、6号人骨は齲歯こそ見られないものの、歯根部中央付近にまで多量の歯石が認められることから、持ち主は歯周ポケットが形成されるような重い歯周病を患っていた可能性がある。以上のことから、これら3本の永久歯の持ち主は、激しい齲歯や歯周病等の口内環境の悪化によってその歯が脱落、もしくは抜歯を行ったと推定される。

シーリ遺構に廃棄された歯の存在意義を考えると、御内原に暮らす人々は、成長に伴って脱落した乳歯であれ、口内環境の悪化に伴って脱落・抜歯した永久歯であれ、生活ゴミと同様の扱いをする思考があった可能性がある。首里城御内原で生活する人々でさえそなれば、近世初頭の琉球王国内の習俗には、脱落した歯を大切にする意識が存在しなかったのかもしれない。

今回確認された事例は首里城御内原だけでなく、琉球王国時代の習俗を推定する上で極めて貴重である。今後、遊離歯のような小さい遺物も注意深く遺跡から回収することによって、さらに様々な事実がわかるだろう。

本稿をまとめるにあたり、鹿児島女子短期大学の竹中正巳教授に歯の鑑定や所見についてご教授頂いた。沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査嘱託員の徳嶺里江氏には整理の御協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

〈引用・参考文献〉

仲座久宜 2009「シーリ遺構から見る御内原のくらし」『紀要沖縄埋文研究6』 沖縄県立埋蔵文化財センター

Knussman R.1988 Martin/knussman Anthropologie.Band1,Stuttgart,Gustav Fischer Verlag.

Ubelaker.1989 Human Skeletal Remains.2nd ed.Taaraxacum Press, Washington,D.C.

Brothwell.D.R1981 Digging up Bones.



図版162 遊離歯 (1. 4号人骨の齲歯、2. 6号人骨の歯石、3. 7号人骨の齲歯)

5. 種実類（シーリ遺構内）

シーリ遺構内からは、植物の種子や実と思われる遺物も多数出土している。これらは、調査中にピックアップした資料と、フローテーションにより得られたものがあり、数種が認められた。これらの種実類は、他の資料とともに自然科学分析委託の中で種実同定を行い、詳細は第6章自然化学分析の章で報告するが、ここではシーリ遺構内から出土した自然遺物の一部として概要を報告する。

栽培種は、木本1分類群（常緑小高木～高木のシュロ属？）1個、草本7分類群（イネ、マメ類、メロン類、トウガラ、カボチャ属？、ウリ科、センダングサ節）112個が検出されたほか、種類・部位不明の双子葉類の種実2個、種実の可能性を含む不明物質47個、炭化材13個が確認された。検出された種実は全て硬化しており、これは炭酸カルシウムにより置換されているためと推定される（図版165）。

栽培種では、イネの胚乳4個（B-5シーリ遺構内）、マメ類の種子15個（各地点）、メロン類の種子83個（B-4シーリ遺構内より1個、B-5シーリ遺構内アゼより63個、シーリ遺構内より19個）、トウガラの種子1個（B-5シーリ遺構内）、カボチャ属？の種子6個（B-5シーリ内アゼ）が確認された。特に、B-5シーリ内アゼの底面黒褐1と黒褐4からは、メロン類の種子が多く検出され、種皮表面に胎座や内果皮が付着した個体も確認されている。

これらの種実の内、シュロ属とセンダングサ節については、遺構周辺に生育していた植物である可能性がある。それ以外の種実類に関しては、食材として利用された植物の可能性が高く、当時の食材の一端を知ることができる。なお、この成果は、土壌及び糞石内の花粉分析結果と合わせ、周辺の植生等の環境復元の参考になるものと思われる。

6. 粪石（シーリ遺構内）

①出土状況及び回収法

平成19年度の調査では、糞石が多数出土している。糞石とは字のごとく、動物の排泄物が形状を保ったまま化石化したもので、国内では福井県鳥浜貝塚の例が著名である。

通常、動物の糞は分解するため残りにくいが、シーリ遺構は精緻な石組みで築造されており、その上面が粘土質の土砂に覆われていたため遺構内がパックされ、原形を留めていたことが考えられる。また、糞石は遺構内堆積土からまんべんなく出土しており、当時は生ゴミ等とともに、糞便も恒常に廃棄していたと思われる。さらに、遺構内部の堆積状況から、繰り返し掻き出して使用していたことが想定できる。

この糞石は調査時において、その色や形状をリアルに保っていたことから、発見当初からその可能性がある遺物として取り扱ってきた。今回は遺構内の全堆積土を土糞袋32点に回収し、将来的に、より詳細な分析を行うための保存用土壌を一部残し、その他はフローテーション後に浮いた遺物と、5mm、2.5mm、1mmのメッシュにより採取した遺物を種類ごとに仕分け、分析を行った。そのため遺物は、①発掘作業中に回収、②土壌採集後フローテーション直前に回収、③フローテーション後に選別、の3通りの回収法で得られたことになり、糞石は①及び②の回収法では形状をほぼ保っているが、③の回収法においては、事前に回取が困難な破片が多い。

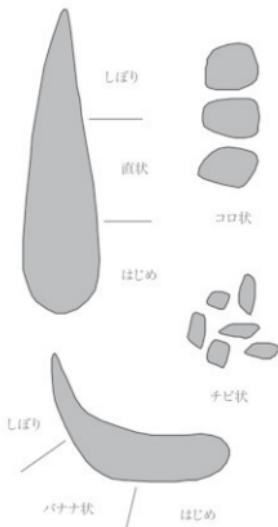
②形状・色調

糞石の形状及び部位・状態については、鳥浜貝塚報告の中で大別されており(千浦1979)、これに準じて行うこととする(第180図)。この中で糞石の部位名称として、排便のはじめの部分を「はじめ」、まっすぐな棒状の部分を「直状」、最後にしづり出されて尖った部位を「しづり」としている。また、全体の形状として、練成度が高いバナナの形状を「バナナ状」とし、強度の便は丸いことから「コロ状」、軟便や崩れた形状を「チビ状」として分けている。

首里城から出土した糞石は、表面に付着物が多く、当初の形状が明瞭でないものも含まれるが、鳥浜貝塚分類に現れる形状を網羅しており、バナナ状の糞石に関しても、はじめ、直状、しづりの区分が認められる資料が含まれる(図版163)。なお、今回は小破片が多いことから計量のみを行い、総計で3317.3gの糞石が得られている。

その色調は、調査時においては潤いのある茶褐色を呈し、とても何世紀もの年月を経たものと思えないほど、その色調を保ったまままでいたが、乾燥するとやや白色に変色する傾向にある。

この出土した糞石1点について、自然化学分析を委託した。分析内容は、①微細遺物分析・種実同定、②花粉・寄生虫卵分析、③实体顕微鏡観察、④薄片作成・鑑定、⑤X線回折分析の5件である。この総合的な成果は、第6章の自然科学分析にて詳細に報告するが、寄生虫卵分析により、線虫及び便虫卵が多数検出されており、ヒトの糞石であることが判明している。この事例により、首里城内ではゴミ穴に排泄物を廃棄していたことがわかる。



第180図 粪石の部位及び名称
(千浦1979をもとに作成)

〈引用・参考文献〉

千浦美智子 1979「糞石」『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査—』福井県教育委員会



図版163 粪石

第6章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平成19(2007)年度の調査において自然化学分析を委託した。今回の分析は、火災面と考えられる堆積層及び、ゴミ穴の可能性が指摘されるシーリ遺構を対象に、その性格及び年代推定を目的として、放射性炭素年代測定、花粉分析、寄生虫卵分析、微細遺物分析、種実同定、昆虫同定を実施した。また、同じシーリ遺構から検出された糞石と思われる土塊についても、実体顕微鏡観察、薄片作成・鑑定、X線回折分析、微細遺物分析、花粉分析、寄生虫卵分析を実施した。

なお、本章で報告する分析業務は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。以下に分析結果を報告する。

1. 試料

試料は、E-5 グリッド第6層焼土層、C-5 グリッド第3層表面の焼土面、B-4 グリッドのゴミ穴とされるシーリ遺構の3箇所から採取したものである。

このうち、E-5 および C-5 グリッドについては、採取された炭化物を用いて年代測定を行う。シーリ遺構は、中部および下部の堆積土を採取し、放射性炭素年代測定1点、微細遺物分析1点、花粉分析、寄生虫卵分析2点も実施し、これとは別に大量の試料を水洗して得られた種実遺体、昆虫遺体についても、それぞれ同定を実施する。また、シーリ遺構より検出された糞石とされる土塊1点について、実体顕微鏡観察、薄片作成・鑑定、X線回折分析、微細遺物分析、花粉分析、寄生虫卵分析を実施する(第121表)。

第121表 分析試料一覧

グリッド	分析対象	試料種別	分析項目*					
			14C	花粉・寄生	微細	種実	X線	薄片
E-5	第6層	炭化物	○					
C-5	第3層表面(焼土面)	炭化物	○					
B-4	シーリ遺構	土壤	○	○	○			
		糞石		○	○		○	○
		水洗済み試料				○		○

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料に土壤や植物根など、目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをビンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

この試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C(30分)、850°C(2時間)で加熱する。次に、液体窒素と液体窒素+エタノール

の温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と、鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

続いて、化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした I4C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸(HOX-II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時にI3C/12C の測定も行うため、この値を用いてδI3C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお曆年較正は RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

(2) 微細遺物分析・種実同定

シーリ遺構の土壤試料(黒褐色土)は、200cc (312.5g)を、糞石とされる土塊は試料8.7gを水に浸し、粒径0.5mmのふるいを通して水洗する。ふるい内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実や炭化材(主に径4mm以上)などの植物質遺物や動物遺存体を抽出する。

抽出された種実と単体試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。

分析後は、種実等を種類毎に容器に入れて返却する。炭化材は70°C (48時間)で乾燥させたあと、容器に入れ返却する。

(3) 花粉分析・寄生虫卵分析

シーリ遺構の土壤試料は、10ccを正確にはかり取る。糞石とされる土塊は、微細遺物分析でふるいを通過した粒径0.5mm以下の粒子を全て回収し、分析試料とする。これらについて水酸化カリウムによる泥化(糞石とされる土塊はこの行程を省く)、ふるい別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、寄生虫卵および花粉・胞子を分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての寄生虫卵と花粉・胞子化石について同定・計数する。

結果は、花粉・胞子化石については同定および計数結果の一覧表として、寄生虫卵については1ccあたりに含まれる寄生虫卵の個数として表示する。寄生虫卵の個数については有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸める。

(4) 昆虫同定

双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴から種類を同定する。なお、同定解析は松本浩一氏(東京農業大学)の協力を得ている。

(5) 実体顕微鏡観察

分析試料をノギスにて測定し、実体顕微鏡下において表面構造、含有物を確認する。また、カッターを用いて試料を切断し、断面についても同様の観察を実施する。観察後の試料は、薄片作成・鑑定、X線回折分析、微細遺物分析、花粉分析・寄生虫卵分析用使用としてそれぞれ用いる。

(6) 薄片作成・鑑定

試料は樹脂による固化の後、ダイヤモンドカッターにより切断して薄片用のチップとした。そのチップをスライドガラスに貼り付け、#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。スライドガラス上で薄くなった薄片の上にカバーガラスを貼り付け観察用プレパラートとする。薄片は、偏光顕微鏡を用いて観察し、試料中に含まれる砂粒、その他の碎屑物を確認する。

(7) X線回折分析

メノウ乳鉢で微粉碎した試料を無反射試料板に充填し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit : 1°
Target : Cu (K α)	Scattering Slit : 1°
Monochrometer : Graphite湾曲	Receiving Slit : 0.3mm
Voltage : 40kV	Scanning Speed : 2°/min
Current : 40mA	Scanning Mode : 連続法
Detector : SC	Sampling Range : 0.02°
Calculation Mode : cps	Scanning Range : 5～61°

3. 分析結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第122表に、曆年較正結果を第123表に示す。試料の測定年代（補正年代）は、E-5グリッド第6層炭化物が 530 ± 30 BP、C-5グリッド第3層焼土面が 640 ± 30 BP、B-4グリッドのシーリ遺構の炭化材が 350 ± 30 BPの値を示す。なお、B-4グリッドシーリ遺構出土の炭化物については、実体鏡による木材組織の観察で樹種の同定を実施し、ヒイラギ?に同定された。

次に、曆年較正結果を第123表に示した。曆年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動及び、半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正することである。曆年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に曆年較正プログラムや曆年較正曲線の改正が

あつた場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。曆年較正については、北半球の大気中炭素由来する較正曲線を用いる。曆年較正是、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差を σ として計算させた結果、E-5グリッド第6層炭化物がcalAD1333-1430、C-5グリッド第3層焼土面がcalAD1305-1397、シーリ遺構黒褐色土はcalAD 1482-1629である。

第122表 放射性炭素年代測定結果

グリッド名 遺構名	層位	試料種別	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.	測定機関番号
E-5 グリッド	第6層	炭化材	—	530± 30	-27.46±0.65	570± 30	9962-1	IAAA-73057
C-5 グリッド	3層表面(焼土面)	炭化材	—	600± 30	-27.14±0.71	640± 30	9962-2	IAAA-73058
B-4 グリッド シーリ遺構	堆積土(中層)	炭化材	ヒラギ?	350± 30	-25.52±0.38	360± 30	9962-3	IAAA-81422

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として逐年前とする表示です。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

第123表 曆年較正結果

グリッド名 遺構名	層位	補正年代 (BP)	曆年較正年代 (cal)					相対比	Code No.
E-5 グリッド	第6層	534± 28	σ	cal AD 1333 - cal AD 1336	cal BP 617 - 614	0.032		9962-1	
			2σ	cal AD 1398 - cal AD 1430	cal BP 552 - 520	0.968			
C-5 グリッド	3層表面 (焼土面)	604± 30	σ	cal AD 1321 - cal AD 1349	cal BP 629 - 601	0.215		9962-2	
			2σ	cal AD 1391 - cal AD 1438	cal BP 559 - 512	0.785			
B-4 グリッド シーリ遺構	堆積土 (中層)	350± 26	σ	cal AD 1305 - cal AD 1331	cal BP 645 - 619	0.393		9962-3	
			2σ	cal AD 1338 - cal AD 1364	cal BP 612 - 586	0.408			
			σ	cal AD 1385 - cal AD 1397	cal BP 565 - 553	0.199			
			2σ	cal AD 1297 - cal AD 1406	cal BP 653 - 544	1.000			
			σ	cal AD 1482 - cal AD 1523	cal BP 468 - 427	0.425			
			2σ	cal AD 1572 - cal AD 1629	cal BP 378 - 321	0.575			
			σ	cal AD 1459 - cal AD 1530	cal BP 491 - 420	0.432			
			2σ	cal AD 1539 - cal AD 1634	cal BP 411 - 316	0.568			

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1枚目を丸めるのが慣例だが、曆年較正曲線や曆年較正プログラムが改訂された場合の計算結果と比較がよいやすいように、1枚目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率は68%、 2σ は95%である。

5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(2) 微細遺物分析・種実同定

微細物分析結果を第124表に示す。植物質遺物では、主に炭化材が検出され、一部を同定し、放射性炭素年代測定の対象とした。種実は、同定可能な個体が検出されず、可能性がある不明個体1個(灰褐色、長さ1.7mm、幅0.7mm程度の扁平な非対称狭倒皮針体。表面は粗面)が確認されたのみであった。そこで、試料600cc(959.2g)を追加し、計800cc(1271.7g)を分析したが、同定可能な種実は検出されなかった。

動物遺存体は比較的多く検出され、大分類の結果、巻貝、二枚貝、魚類(椎骨、その他内臓骨、鱗棘、鰓条骨、前上顎骨、歯骨、歯、その他、鱗)、鳥類(頭部)、大型獸(脊椎)、獸類(頭部)などが確認された。

糞石とされる土塊の洗い出し
分析の結果、径1.5mm程度の炭化材2個、径1.5mm程度の魚骨(鰐鱗)1個、径2mm程度の分類群・部位不明の動物遺存体が検出された。

一方、洗い出し済み試料の種実同定結果を第125表に、栽培種の種実計測値を第126表に示す。栽培種は、木本1分類群(常緑小高木～高木のシユロ属?)1個、草本7分類群(イネ、マメ類、メロン類、トウガン、カボチャ属?、ウリ科、センダングサ節)112個が検出されたほか、種類・部位不明の双子葉類の種実2個、種実の可能性を含む不明物質47個、炭化材13個が確認された。検出された種実は全て硬化しており、これは炭酸カルシウムにより置換されているためと推定される。

栽培種は、イネの胚乳4個(B-5シーリ遺構内)、マメ類の種子15個(各地点)、メロン類の種子83個(B-5シーリ遺構内アゼより4個、79個は主に御内原B-5シーリ遺構内)、トウガンの種子1個(B-5シーリ遺構内)、カボチャ属?の種子6個(B-5シーリ内アゼより5個、B-5シーリ内アゼより1個)が確認された。特に、B-5シーリ内アゼの底面黒褐1と黒褐4からは、メロン類の種子が多く検出され、種皮表面に胎座や内果皮が付着した個体も確認された。以下に、各分類群の形態的特徴などを記す。

・シユロ属 (*Trachycarpus*) ? ヤシ科シユロ属

種子の破片が検出された。灰黄褐色、長さ7.8mm、径6mm程度のやや歪な腎状横梢円体。背面観は長梢円形、側面観は腎形。腹面中央はくびれ、臍がある。種皮は厚く硬く、表面はやや粗面。

・イネ (*Oryza sativa L.*) イネ科イネ属

胚乳が検出された。淡黄灰褐色、長梢円形でやや偏平。大きさは、最小で長さ5.14mm、幅2.63mm、厚さ1.86mm、最大で長さ5.39mm、幅3.18mm、厚さ1.3mm(いずれもB-5シーリ遺構内)。基部一端にある胚が脱落した斜切形の凹部は不明瞭。表面はやや平滑で、2～3本の隆条が縱列する。

・マメ属 (*Leguminosae*)

マメ科種子が検出された。淡黄灰褐色、やや偏平な広梢円体。大きさは、最小で長さ4.86mm、

第124表 微細遺物分析結果

試料 分析量	シーリ遺構 黒褐色土		備 考
	200cc 312.5g	600cc 959.2g	
種類・部位 抽出対象	植物		
炭化材(径4mm以上) 種実?	>50(4.3g)		最大径4.5cm程度 種実のみ
動物遺存体			
巻貝	>2		径2cm程度、スガイ?
二枚貝	>1		最大径2.6cm程度、焼けた破片含む
魚類			
椎骨	>50		最大径4cm程度、施骨含む、タイ類?ウナギ?
その他内臟骨	+		
棘	+		
鰓条骨	+		
前上顎骨	>5		最大径3cm程度
齒骨	+		
齒	>10		径0.2-1cm程度
その他	+		
鱗	>50		最大1cm程度
鳥類			
頭部	1		
大型獸			
脊椎	1		半歳、径3cm程度
獸類			
頭部	1		最大径5.8cm

1) 試料全1477.0gのうち200cc(312.5g)を分析。種実確認されないため600cc(959.2g)を追加、計800cc(1271.7g)分析。

2) 試料中に確認される種類・部位をプラスあるいは個数表示している。動物遺存体は概在である。

幅2.98mm、厚さ2.28mm(B-5シーリ遺構内アゼ)、最大で長さ6.62mm、幅3.54mm、厚さ3.28mm(B-4シーリ遺構内)。B-4・B-5シーリ遺構内出土種子には、腹面の子葉合わせ目上に長さ2.63mm、幅0.89mmの細長い長楕円形の臍が明瞭に露出している。その他の種子に臍は確認されないが、子葉の中間を占める幼痕がやや突出する個体がみられる(B-5シーリ遺構内アゼ)。種皮表面はやや平滑。

・メロン類 (*Cucumis melo L.*) ウリ科キウリ属

種子が検出された。淡黄灰褐色、偏平な狭倒卵形針体。長さ6.19~8.49mm、幅2.78~3.68mm。藤下(1984)の基準による中粒のマクワ・シロウリ型(長さ6.1~8.0mm)に該当する種子が主体で、大粒のモモルディカメロン型(長さ8.1mm以上)を含む。種子の基部には倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。表面に胎座や内果皮の破片が付着した個体も確認された(B-5シーリ遺構内アゼ底面黒褐1、黒褐4)。

第125表 種実同定結果

地区	グリッド	遺構	部位	ふくい 採集日	番号	ツバメ型		マメ類		メロン類		トウガラシ		カボチャ属		ウリ科		セイヨウアサガホ		スズメノヒメ		ヒメアザレ			
						種子	胚乳	種子	胚乳	種子	胚乳	種子	胚乳	種子	胚乳	種子	胚乳	種子	胚乳	種子	胚乳	種子	胚乳	種子	胚乳
調内堅北	B-4	シード内	黒褐3	2.5 mm	08.02.21	2				1	1														
調内堅北	B-5	シード内アゼ	木炭層2	2.5 mm	08.02.28	1				1	4														
調内堅北	B-5	シード内アゼ	底面 黒褐1	2.5 mm	08.02.28	3	2	1	50	5			3	2	2	1									
調内堅北	B-5	シード内	黒褐3	5 mm	08.02.25	6																			
調内堅北	B-5	シード内	黒褐4	2.5 mm	08.02.25	33	2		4	15	4														
調内堅北	B-5	シード内	黒褐8	2.5 mm	08.02.28	4	1																		
調内堅北	B-5	シード内	黒褐9	2.5 mm	08.02.28	34	1	2	1																
調内堅北	B-4	シード内	黒褐6	2.5 mm	08.02.22																				
調内堅北	B-4	シード内	黒褐7	2.5 mm	08.02.25																				
調内堅北	B-4	シード内	黒褐8	5 mm	08.02.25	14																			
調内堅北	B-4	シード内	黒褐8	2.5 mm	08.02.25																				
調内堅北	B-4-B-5シード内	黒褐1	5 mm	08.02.19	16																				
調内堅北	B-4-B-5シード内	黒褐1	2.5 mm	08.02.19		1																			
調内堅北	B-5	シード内アゼ	木炭層1	5 mm	08.02.28	12																			
調内堅北	B-5	シード内アゼ	木炭層2	1 mm	08.02.28	9																			
調内堅北	B-5	シード内アゼ	木炭層3	2.5 mm	08.02.28																				
調内堅北	B-5	シード内アゼ	底面 黑褐1	1 mm	08.02.28	8							4												
調内堅北	B-5	シード内アゼ	底面 黑褐色2	2.5 mm	08.02.28		1						1												
調内堅北	B-5	シード内	黒褐3	2.5 mm	08.02.25																				
調内堅北	B-5	シード内	黒褐4	5 mm	08.02.25	28																			
調内堅北	B-5	シード内	黒褐6	2.5 mm	08.02.25																				
調内堅北	B-5	シード内	黒褐9	5 mm	08.02.28	30																			
調内堅北	B-5	シード内	黒褐10	5 mm	08.02.28	11	1																		
調内堅北	B-5	シード内	黒褐10	2.5 mm	08.02.28																				

第126表 栽培種の種実計測値

地区	グリッド	遺構	部位	イネ胚乳			マメ類			メロン類			トウガラシ			ウリ科			カボチャ属			種子			
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
調内堅	B-4	シード内	黒褐3	6.62	5.54	3.26	6.08	5.09	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
調内堅	B-5	シード内アゼ	木炭層2	5.67	3.32	1.87	6.19	3.13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
調内堅	B-5	シード内アゼ	木炭層3	5.78	3.53	2.14	7.26	3.31	1.17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
調内堅	B-5	シード内アゼ	底面 黑褐1	1 mm	08.02.28	8				7.53	3.66	1.97													
調内堅	B-5	シード内	黒褐3	2.5 mm	08.02.25																				
調内堅	B-5	シード内	黒褐4	5 mm	08.02.25	28																			
調内堅	B-5	シード内	黒褐6	2.5 mm	08.02.25																				
調内堅	B-5	シード内	黒褐9	5 mm	08.02.28	30																			
調内堅	B-5	シード内	黒褐10	5 mm	08.02.28	11	1																		
調内堅	B-5	シード内	黒褐10	2.5 mm	08.02.28																				
調内堅	B-5	シード内	黒褐4	5.36	3.14	1.91	7.48	4.8	—	6.48	2.78	1.34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
調内堅	B-5	シード内	黒褐6	5.14	2.63	1.86	6.34	4.31	—	6.87	3.41	1.76	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
調内堅	B-5	シード内	黒褐8	5.37	3.4	1.39	—	—	—	7.33	3.47	1.53	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
調内堅	B-5	シード内	黒褐9	5.39	3.18	1.3	4.76	3.27	2.03	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
調内堅	B-4-B-5シード内	黒褐1	—	—	—	—	4.43	3.81	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
調内堅	B-5	シード内アゼ	底面 黑褐1	—	—	—	5.38	4.77	2.25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
調内堅	B-5	シード内アゼ	底面 黑褐2	—	—	—	4.86	2.98	2.28	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
調内堅	B-5	シード内	黒褐9	—	—	—	—	—	—	11.69	8.44	3.14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

・トウガン (*Benincasa hispida* (Thunb. ex Murray) Cogn.) ウリ科トウガン属

種子が検出された。灰褐色、長さ11.69mm、幅8.44mm、厚さ3.14mmのやや偏平な倒卵体。基部は斜切形で梢円形の臍がある。種子両面の全周の縁には段差があり薄くなる。種皮は厚くやや堅く、表面は粗面。

・カボチャ属 (*Cucurbita*) ? ウリ科カボチャ属

種子が検出された。淡灰褐色、長さ9.27mm、幅5.22mm、厚さ1.84mmの偏平な倒卵体。基部は尖り、臍がある。両面全周に走る縁は明瞭で、段差があり薄くなる。種皮はやや薄く表面はやや粗面。

カボチャ(属)は栽培のために持ち込まれた渡来種で、日本で栽培しているカボチャには、16世紀に渡来したニホンカボチャ、19世紀に渡来したセイヨウカボチャ、セイヨウカボチャよりさらに後れて渡来したベボカボチャの3種がある。なお、保存状態が悪く、種までの特定に至らない種子をウリ科 (*Cucurbitaceae*) にとどめている。

・センダングサ節 (*Bidens Sect. Psilocarpa*) キク科センダングサ属

果実が検出された。暗灰褐色、長さ5mm、幅0.8mm程度の針形でやや偏平。頂部の両肩から長さ1.7mm程度の下向きの逆刺をもつ針状の芒が伸びる。正中線上は細い縱隆条があり、果皮表面に伏毛が密布する。

第127表 花粉分析・寄生虫卵分析結果

(3) 花粉分析・寄生虫卵分析

結果を第127表に示す。分析試料からは花粉化石がほとんど検出されず、定量解析が行えるだけの個体数を得ることが出来なかつた。わずかに産出した種類をみると、木本花粉では複維管束亜属を含むマツ属、コナラ属アカガシ亜属が、草本花粉ではイネ科、アザ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属、タンポポ亜科が検出されている。

一方、寄生虫卵についてみると、シーリ遺構の黒褐色土下部からは1個体も検出されなかつたが、糞石とされる土塊からはある程度の産出が認められ、回虫卵が約200個/g、鞭虫卵が500個/g検出された。

(4) 昆虫同定

分析した試料のいずれも、各体節に2対の脚を持つ。これは倍脚綱Diplopoda(ヤスデ類)の特徴である。

(5) 実体顕微鏡観察

糞石とされる土塊試料の外観は、長さ約4.9cm、幅約2.3cmで、黄褐色(10YR5/2)を呈する。外観的には、高杉(1984)で示された風化形態のひとつである中央縱裂のような形状も認められる。実体顕微鏡観察の結果、黒色斑や褐色斑を有し、石英粒や結晶化したマンガンも表面に付着している。

種類	シーリ遺構		
	中部	下部	糞石
木本花粉			
マツ属複維管束亜属	1	—	—
マツ属(不明)	6	3	—
コナラ属アカガシ亜属	—	1	—
草本花粉			
イネ科	13	5	3
アザ科	3	3	2
ナデシコ科	2	1	—
アブラナ科	5	5	4
ヨモギ属	1	5	3
タンポポ亜科	31	9	—
不明花粉	1	3	—
シダ類胞子			
シダ類胞子	13	1	1
合計			
木本花粉	7	4	0
草本花粉	55	28	12
不明花粉	1	3	0
シダ類胞子	13	1	1
総計(不明を除く)	75	33	13
寄生虫卵(個/g)			
回虫卵	—	—	200
鞭虫卵	—	—	500

1) 寄生虫卵については、10の位を四捨五入して
100単位に丸めている。

切断して断面を観察した結果、中心部は褐～明褐色(7.5YR4/3～7.5YR5/6)を呈し、空隙が顕著に認められる。また、空隙の表面を灰色や褐色の物質が薄く覆っている状況も確認された。

なお、実体顕微鏡観察の結果からは、種実・骨・鱗等の動植物遺存体は確認されなかつた。

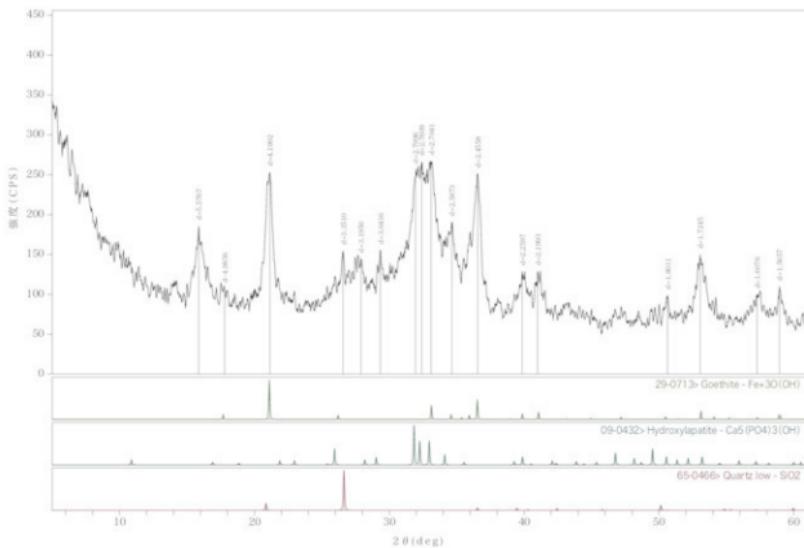
(6) 薄片作成・鑑定

鏡下で確認される碎屑物は、極めて微量であり、鉱物としては細砂へ極細砂径の石英および長石類の小片が認められたのみであり、他の鉱物や岩石片は認められない。また、その形状から、鉱物あるいは岩石に由来する碎屑物ではなく、生物に由来すると考えられる径0.2mmほどの細片も認められた。

基質は、暗赤褐色～赤褐色～黄褐色を呈し、全体的には非晶質であるが、結晶化した部分も認められる。なお、基質の中には、周囲の土壤から試料中に混入した微細なシルトや粘土を構成する鉱物と考えられる部分も認められた。

(7) X線回折分析

X線回折図を第181図に示す。なお、図中下段に参照鉱物の回折プロファイルを掲げている。糞石とされる土塊から検出された鉱物は、針鉄鉱(goethite)、水酸矽灰石(hydroxylapatite)、石英(quartz)である。なお、 $d=5.5767\text{ \AA}$ にも何らかの物質の存在を示唆する回折線が認められるが、全体的に回折強度が弱く、他に同定に有効な回折が確認されていないことから、特定するに至っていない。



第181図 黽石のX線回折図

4. 小結

(1) 焼土面の時期推定

E-4グリッド及びC-5グリッドから出土した炭化物は、石積みや造成等の状況から、E-5グリッド第6層で確認された火災直後に盛り土が行われ、その整地層上面にあたるC-5グリッド第3層表面の焼土および炭の検出層が、その次の火災の跡と想定され、それぞれ別の時期の火災層と推定されている。

今回の結果を見ると、補正年代で、E-5グリッド第6層の炭化物が、 530 ± 30 BPで、C-5グリッド第3層表面が 600 ± 30 BPとなり、上記の調査による所見と年代値の逆転が生じている。放射性炭素年代測定で得られる年代値は、測定試料が木材片の場合、年輪の内と外の使用部位の違いで、年輪分の年代差が生じる可能性がある。また、測定誤差を踏まえた測定年代（補正年代）に大きな差はなく、曆年較正年代においても、ともに14世紀において重複する部分も多い。このことは、2つの火災に時期差がないという推定を考慮すると、誤差の範囲内にある可能性もある。今後、さらにデータを蓄積し、このことを明らかにする必要がある。

(2) シーリ遺構内堆積土について

ゴミ穴とされるシーリ遺構において、種子などの微細物に着目した洗い出し分析を実施した。結果は炭化材と動物遺存体が多く検出されるのみで、当時の食利用を推定できるような種実遺体は検出されなかった。多量確認された炭化材は、周辺域の森林に生育していたものか、あるいは持ち込まれたものに由来すると思われ、何らかの理由により火を受け遺構内に廃棄されたことが考えられる。放射性炭素年代測定の結果では、15世紀後半～17世紀前半（calAD 1482～calAD 1629）の曆年較正年代が得られた。この年代値は、首里城が機能していた年代と調和的であることから、シーリ遺構が使用された年代を示していると考えられる。

その中で、無作為に選択した炭化材について樹種同定を実施した結果、オキナワジイ、ヒイラギ？等の広葉樹に同定された。花粉分析結果からは、複雑管束亜属を含むマツ属、コナラ属アカガシ亜属が検出されている。マツ属複雑管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、他の広葉樹が不適な立地にも生育する極端な陽樹であり、伐採された土地などに最初に進入する代表的な種類である。日本に生育する複雑管束亜属には、アカマツ、クロマツ、リュウキュウマツの3種類があるが、アカマツとクロマツは沖縄には自生していない。一方、リュウキュウマツは沖縄特有で、広く生育していることから、今回の試料もリュウキュウマツに由来する可能性が高く、当時の首里城周辺に生育していたものに由来すると思われる。

草本類についてみると、イネ科、アザラシ科、アブラナ科、ヨモギ属、センダングサ属、タンボボ亜科が認められた。これらは、いずれも開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であることから、当時の首里城内に、これらの草本類が生育していたと推測される。一方、ゴミ穴と考えられているシーリ遺構内より出土した種実遺体には、栽培種のイネ胚乳4個、マメ類種子15個、メロン類種子83個、トウガン種子1個、カボチャ属?種子6個が確認された。特に、B-5シーリ遺構内アゼ底面黒褐1及び黒褐4からは、メロン類の種子が多く検出され、その種皮表面には、胎座や内果皮の破片が付着した個体も確認された。これらの栽培種の可食部である種実は、当時食材として

利用されたものと考えられ、シーリ遺構内より他の遺物とともに出土したことから、食後に廃棄した可能性が考えられる。

栽培種を除く分類群では、ショウ属は、中国より移入した説もある常緑高木のショウ (*T. fortunei* (Hook.) H. Wendl.)、中国南部原産で栽培される常緑小高木のトウヅュウ (*T. wagnerianus* Becc.) と両種の雑種があり、種子が鳥によって散布され、暖地で野生化している。草本のセンダンングサ節は、開けた明るい場所を好む「人里植物」である。これらの種は、当時の首里城内および周辺域に生育していたものに由来するものと考えられる。

動物遺存体は、巻貝、二枚貝、魚類（椎骨、その他内臓骨、鰓棘、鰓条骨、前上頸骨、歯骨、歯、その他、鱗）、鳥類（頭部）、大型獸（脊椎）、獸類（頭部）が確認され、食用後廃棄されたゴミに由来するものを含む可能性が想定される。また、シーリ遺構より検出された昆虫遺体は、すべてヤスデ類に同定された。ヤスデ類は、森林の林床内落ち葉や倒木、石の下、湿った日陰を好む習性があり、食性は腐植物やコケ類とされる。従って、これらはゴミ穴として利用された遺構内に生息していた可能性が高い。

(3) 黄石とされる土塊について

その出土状況及び外観から、黄石の可能性が指摘される試料について分析を実施した。寄生虫卵分析においては、回虫卵、鞭虫卵が検出され、寄生虫卵含量は1gあたり約700個であった。このうち、回虫卵はその形態的特徴を考慮すると、ヒトに寄生する種類の寄生虫卵の可能性がある。寄生虫は、それに感染した中間宿主、あるいは寄生虫卵に汚染されたものなどを摂取することで、終宿主に感染する。鳥取県の青谷上寺地遺跡より出土した黄石の寄生虫卵分析では、1gあたり約5～350個程度が検出されており、中でも鞭虫卵が多い傾向が認められている（金原ほか2006）。これと比較すると、今回の寄生虫卵含量は多いと言える。また、検出されたシーリ遺構内堆積土（中部・下部）からは、寄生虫卵が1個体も検出されなかつことから、周囲からの混入の可能性は低い。

一方、X線回折において黄石から検出された鉱物のうち、水酸構灰石 (hydroxylapatite) は生物の骨や歯などに由来する可能性がある。薄片観察結果からも、生物に由来すると考えられる細片が認められたほか、微細遺物分析からも魚骨（鰓棘）、分類群・部位不明の動物遺存体が検出されることから、水酸構灰石は動物遺存体に由来する可能性がある。黄石のX線回折の事例としては、福井県の鳥浜貝塚や石川県の上山田遺跡から出土した黄石の事例があり、いずれからも水酸構灰石（本文中ではヒドロキシルアバタイトと表記）が確認されている（辻1984）。黄石断面に骨片が多量に認められることから、この水酸構灰石は動物骨片に由来するとされている。

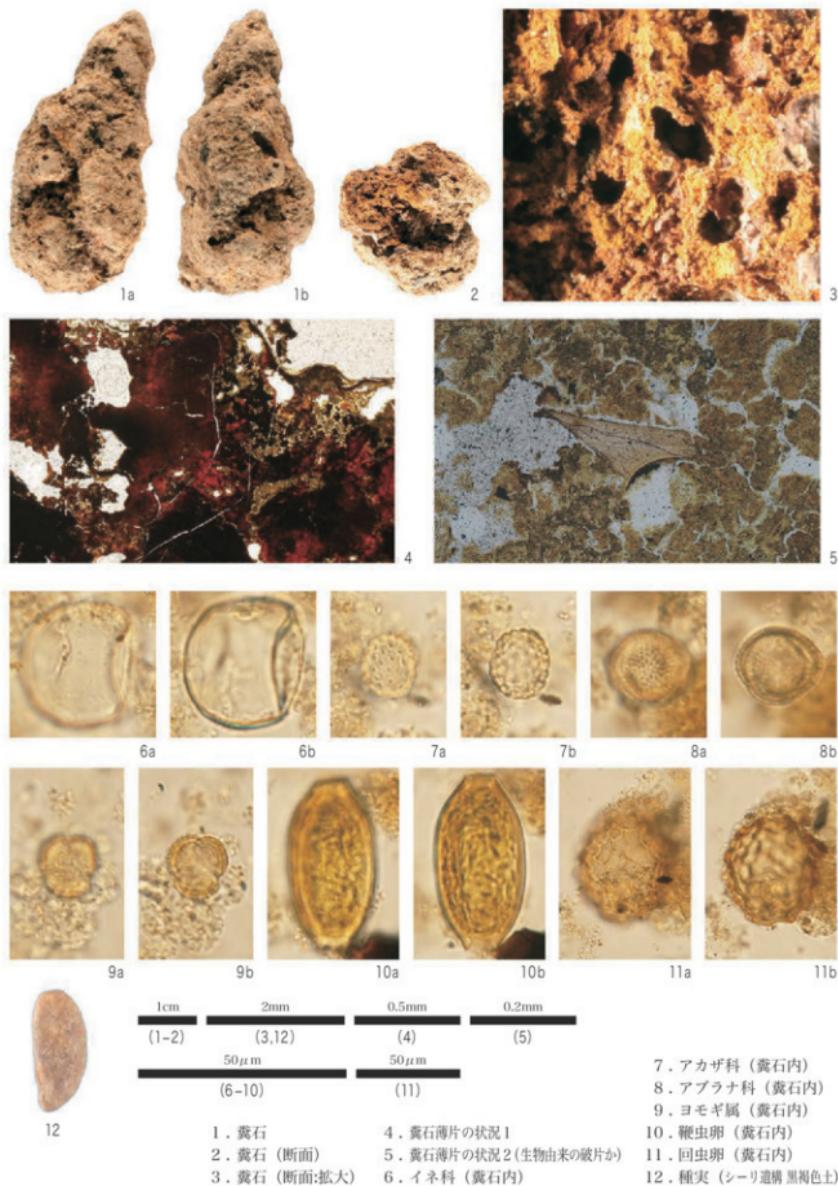
また、薄片観察結果では、基質は暗赤褐色～赤褐色～黄褐色を呈し、全体的には非晶質であるが、結晶化した部分も認められる。X線回折では針鉄鉱が確認されており、おそらく、基質の色調は酸化鉄や非晶質の水酸化鉄などに由来すると考えられる。酸化鉄や水酸化鉄は、黄石とされた塊の形状を保っているものであると考えられ、有機質な部分がその後の時間経過により、酸化鉄や水酸化鉄に置き換わった可能性が想定される。

今回の結果は、既存の調査事例とも調和的である。以上のことから判断すると、対象とした試料は

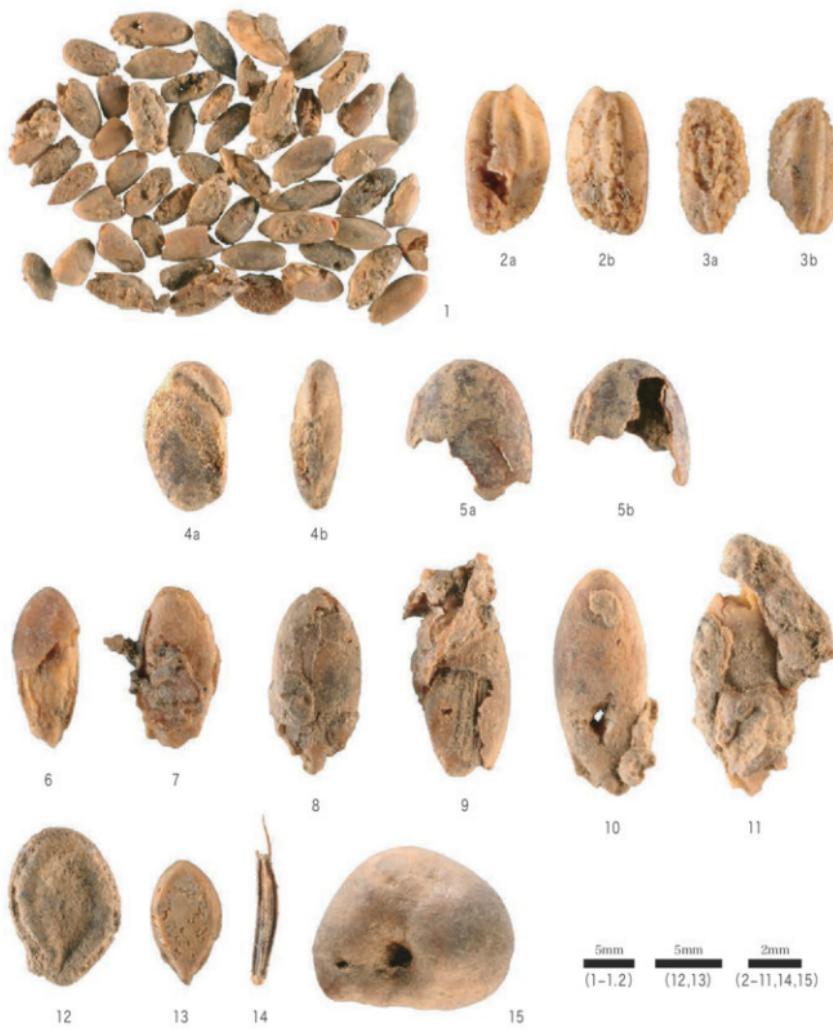
ヒトの糞石である可能性があり、検出された魚骨を含む動物遺存体は、食用されたものに由来する可能性がある。

〈引用文献〉

- 石川茂雄 1994『原色日本植物種子写真図』石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 金原正明、福富恵津子、金原正子 2006「出土糞石の分析と分析方法の検討」『青谷上寺地遺跡8（第2次～第7次調査区発掘調査報告書）』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告10鳥取県埋蔵文化財センター,161-165.
- 中山至大、井之口希秀、南谷忠志 2000『日本植物種子図鑑』東北大出版会,642p.
- 高杉欣一 1984「貝塚出土糞石の2.3の問題」古文化財編集委員会編『古文化財の自然科学的研究』同朋舎,535-537.
- 辻誠一郎 1984「糞石の構成物と包含花粉群集」古文化財編集委員会編『古文化財の自然科学的研究』同朋舎,531-534.



図版164 粪石・粪石薄片・花粉化石・寄生虫卵・種実遺体



1. メロン類 種子・果実(B-5 シーリ内アゼ)
 2. イネ 肥乳(B-5 シーリ内)
 3. イネ 肥乳(B-5 シーリ内)
 4. マメ類 種子(B-5 シーリ内アゼ)
 5. マメ類 種子(B-4・B-5 シーリ内)

6. メロン類 種子・果実(B-5 シーリ内)
 7. メロン類 種子・果実(B-5 シーリ内)
 8. メロン類 種子・果実(B-5 シーリ内)
 9. メロン類 種子・果実(B-5 シーリ内アゼ)
 10. メロン類 種子・果実(B-5 シーリ内アゼ)

11. メロン類 種子・果実(B-5 シーリ内アゼ)
 12. トウガン 種子(B-5 シーリ内)
 13. カボチャ属? 種子(B-5 シーリ内アゼ)
 14. センダングサ節 果実(B-5 シーリ内アゼ)
 15. シュロ属? 種子(B-5 シーリ内)

図版165 種実遺体

第7章 総括

1. はじめに

本報告の対象となった御内原北地区には、横内家資料平面図を参考にすると、内郭石積み、女官居室ほか数棟の建物、淑順門南側の階段や仕切りの石積み、そこから連なる通路等が存在していたとされる（第3・4図）。これら記録類との照合を含め、次に遺構・遺物に大別して考察を行うこととする。

2. 遺構

首里城跡は、戦前から戦後にかけての度重なる改変のため、特に表層付近に位置する近世以降の遺構や堆積層については、残りがよくない。このような中で、今次調査においては断片的であるが、15世紀前半から戦後にかけての様々な遺構を検出した。

特に平成19（2007）年度調査において検出した遺構は多様で、その状況から造成の工程や、その後の変遷を読み取ることができる。その一方、平成11（1999）年度の調査では、内郭石積みや近代頃まで機能していたと考えられる台形状石組みのほか、両調査年度で共通する基壇・礎石建物跡を検出している。次に、本報告の対象となる遺構の変遷をまとめ、各種文献や絵図・平面図との照合を行う。これに統いて、検出の状況から工程・機能を想定復元できる例として造成遺構を特化し、遺構の考察としたい。

遺構の変遷

本報告による遺構の時期は、中世から近・現代における変遷の一端をうかがい知ることができる。本報告の第4章では、個々の遺構・層序について報告したが、ここでは、下層の古い段階から順に、その変遷を辿ることとする。

今次調査により確認された下層部分には、遺構は確認されないが、木炭を主体とする堆積層が確認されている（第6層）。本層からは、14世紀後半から15世紀前半の陶磁器が出土していることから、この時期の火災面として捉えており、その放射性炭素年代測定の結果は、 530 ± 30 BP（補正年代）としている。

次に、火災の直後に大規模な造成工事が行われ（造成遺構、第3～5層）、これとほぼ同時期に内郭石積み（石積み1）が築造されたものと思われる。造成後は、基壇や側溝を有し、強固に舗装された礎石建物が再建されている（基壇状遺構・礎石建物跡）。

そして、この再建された建物は、検出した遺構面が被熱を受けていることから、再び火災により焼失したと見られ、その表面には、焼けた遺物が広がる状況が確認できる（第3層表面）。この遺物の年代も、14世紀後半から15世紀前半を指し、先の第6層と時期差が見られないことから、第6層の火災から数年のうちに再建が行われ、その後まもなく火災に見舞われたことが想定できる。なお、本層の放射性炭素年代測定結果は、 640 ± 30 BP（補正年代）としている。

この結果から、調査区には殆ど時期差のない2枚の火災面が存在し、最初の火災後の再建にあたっては、多量の土砂を用いて造成が行われ、その堆積状況や遺物等の年代から、短期間で施工



第182図 遺構平面図と樹内家資料平面図の重ね図

されたことが考えられる。

その後は、尚真王の在位期間（1477～1526）に行われたとされる外郭拡張工事により、御内原から外郭へ通ずる淑順門及び階段が敷設され（階段遺構ほか）、現在の復元対象となるフォルムが形成されることになる。

また、御内原のゴミ穴、廃棄物貯蔵施設と考えられるシーリ遺構のような特異な遺構も確認されている。この遺構内部からは、膨大な量の自然遺物や1620～1630年代の陶磁器がまとまって出土している点と、 350 ± 30 BP（補正年代）とする放射性炭素年代測定結果から、遺構の年代は17世紀前半の時期と考えられる。出土した遺物からは、そこで生活を彷彿とさせるとともに、当時のゴミ処理の一端を明らかにしている。

文献・絵図史料との照合

次に、これらの遺構の性格を類推するにあたり、まずは検出された遺構を横内家資料平面図（第3・4図）、阪谷図（第6図）に重ね、該当する区画が存在するかを確認した。照合の結果、内郭石積み外面（石積み1）、淑順門南側の階段遺構、台形状石組み及びその東側に延びる側溝状遺構が、横内家資料平面図に符合することが判明した（第182図）。これにより、前記した遺構は、平面図の製作時期とされる明治初期まで存在していた可能性がある。しかし、シーリ遺構に関しては、近世に相当するものの、ゴミ穴という性格からか、室内的施設であった可能性があるためかは判然としないが、現時点では文献や絵図等にその姿を見ることができない。

なお、このうち台形状石組みについては、1931（昭和6年）頃製作とされる阪谷図において確認することができない（第6図）。その理由として、首里城内には1924（大正13）年に沖縄神社が創設され、その中で御内原内において大きく改変がされることから、その際に撤去された可能性がある。

その他、中世に相当する造成遺構や礎石建物跡等の遺構は、現存する絵図や平面図に記載が見られない。次に、確認された火災面の遺物及び分析結果等の情報と、文献上に見える正殿の火災年代を合わせ、年代特定の参考とした。

まず、史実上の首里城正殿の火災を挙げると、1453年の志魯布里の乱での焼失（『李朝実録』）、1459年（『明実録』）の火災のほか、1660年（『球陽』）、1709年（『球陽』）の火災があり、最後に1945年の沖縄戦での消失がある。この中で、遺物の年代としている14世紀後半から15世紀前半とする火災面の年代を照合してみると、1453年及び1459年の2件の記録が該当する。この該当する年代は、繰り返すが、第1に出土陶磁器の年代の範囲内にあること、第2に造成の工程が短期間で行われている点、第3に放射性炭素年代測定により得られた両層の年代値（第6層： 530 ± 30 BP、第3層： 640 ± 30 BP、ともに補正年代）から見ても大きな狂いはないものと思われ、第6層が記録上の1453年、造成後の第3層表面が1459年の火災面である可能性が考えられる。なお、第6層と第5層における放射性炭素年代測定結果では年代の逆転が生じているが、測定試料が木材の場合、使用部位により、年輪の内と外では年輪分の年代差が生じることがあり、この結果は誤差の範囲内にある可能性がある。

また、火災に関する事項として、シーリ遺構の上層には木炭層が堆積しており、本層も火災の痕跡を示すものと思われる。遺構内の遺物が17世紀前半で、放射性炭素年代測定の結果も 350 ± 30 BP

(補正年代)を指している点から、その後の史料上に見える火災年代を照合すると、1660年及び1709年が該当し、そのいずれかの火災により、正殿及び周辺の建物にも延焼し、これに伴い当遺構も廃絶したことが考えられる。

造成遺構の工程・機能

今回検出した2枚の火災面の間には、膨大な量の石や土砂を用いた造成が行われている。この状況は、新たな建物を再建することを見据え、事前に綿密な計画の上で施工されたことをうかがわせている。ここでは、造成遺構及び堆積層の状況から工程を復元し、その機能について考えてみたい。

まず、はじめに造成の工程から復元してみたい(第4章・第10図参考)。第6層の火災直後、土留めとする石灰岩切石、野面石、石灰岩礫に加え、造成土として赤色土、瓦、コーラル(石灰岩粉)、礎石の砂岩(ニービ)を資材として用い造成を開始するが、事前に造成土の流出を防ぐ必要から、台地の縁辺を囲うように、強固な土留め石積みを行う(石積み2)。この土留めとなる石積み2は、検出範囲で長さ15m、高さ170cm、幅は最大で150cmを測る両面積みの石積みで、北面は切石、南面は野面石で積まれており、南面は造成土により埋められることを前提に積まれたことがわかる。

続いて、火災面(第6層)を平場にして小礫を敷き詰め根固めとし(第5e層)、石積み2の南面にあたるよう、赤色土を南北方向へ高さ約100cm、幅約250~300cmのサイズで、細長く数列積み上げて突き固め(第4層)、その傾斜面に石灰岩礫を貼り付け土留めを行う(土留め1・2)。次に両赤色土の間に瓦を投入し(第5層)、最後にその上面を赤色土で覆うことで(第4a層)、表面は赤色土一色となる。

この時点で北側に内郭石積み(石積み1)を積み上げ、石積み2との間を栗石で埋める。そして、ここで一時的な土留めの役割を果たした石積み2の天端を破壊し、基壇の縁石及び側溝を配置し(基壇状遺構・側溝遺構)、この内外を、赤色土上面からコーラルによる舗装を行う(第3c層)。また、その上に石灰岩礫を投入し(第3b層)、次に再びコーラルで舗装を行うが、礎石の沈み込みを防ぐ目的で、その下部のみコーラルを厚く補填し、礎石の形状に合わせてくぼませる(礎石抜け穴・第3a層)。その後礎石を配置し(礎石建物跡)、周辺を堅く突き固める。この一連の造成のち、建物の柱が据えられることになる。

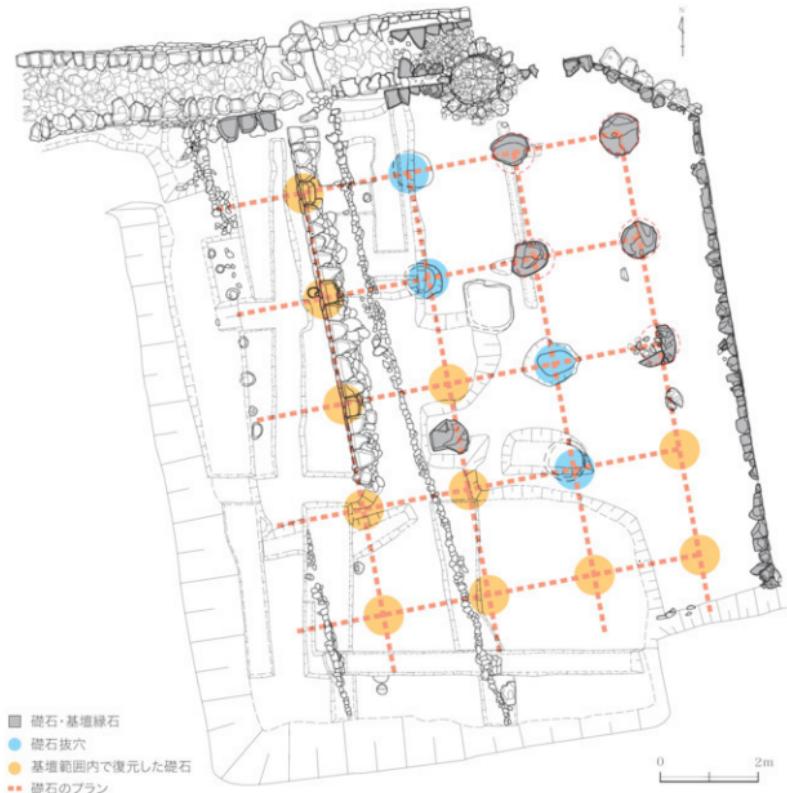
今回確認された規則性を持つ礎石及び礎石抜け穴は、南北に3間、東西に2間の9ヶ所であるが、これに付随する基壇の縁石は、北東角を起点とし、南及び西側に延びていることから、その範囲内において、残存する礎石中央部を結ぶ約220cm間隔で礎石を配置すると、南北に4間、東西に3間の区画で、合計20ヶ所の礎石の配置が可能である。この類推から、本遺構は第183図のように、少なくとも南北に10m、東西に7mを超える規模であったことが考えられる。

続いて、この中に確認された造成土は、第3層から第5層まで、その厚さは合わせて約130cmを測る。このうち赤色土(第4層)の層厚は最大で約100cmにもおよび、造成土の大半を占めるが、この赤色土は分層ができないほど均質なことから、同一地域の赤色土を掘削し、その後すぐに造成土として投入したことが考えられる。このことから、コーラルによる舗装、礎石の配置までが連続して短時間により施工されたことがわかる。

なお、この造成及び土留めの状況は、過去に正殿跡の発掘調査でも確認されている(沖縄県教育委員会1992)。その際には、土留めが少なくとも3条検出され、正殿裏手の井戸から北側へ放射線状に広がっており、今回検出した土留めのラインとも類似する軌跡を辿る。

以上の状況から、この造成土及び土留めの機能を想定してみたい。まず赤色造成土間に多量の瓦が投入されている点及び、土留めが井戸を起点として放射線状に広がるよう、石積み2へつながる点から、大雨等により内郭に貯まった水を、瓦間の隙間を通して石積み2及び、内郭石積み裏込めへと逃し、一帯の冠水を防ぐ暗渠の機能が考えられる。また、この石積み2は、西へ行くと北殿下へ潜り込むように延びており、その延長には、寒水川樋川や瑞泉門前の湧泉があることから、石積みや裏込め内を通過した雨水は、これらの井泉や樋川に導かれるとともに、そこからあふれた水は、その地形及び位置的にみて、最終的に円鑑池や龍潭へ至ることが考えられる。

この状況から、首里城では14世紀後半から15世紀前半の時期には、石積み及び、建物等に係る基壇や礎石建物はもとより、その事前に基盤となる大規模な造成や、地下の上下水道とも言える暗渠等を計画的に敷設することが可能な、高度な土木技術を有していたことがわかる。



第183図 磚石建物跡の想定図

3. 遺物

今次調査で得られた遺物の量は、遺物収納ケースで532箱、総点数で59,312点と膨大な数におよぶ。この量は首里城跡の中でも、御内原という特別な場所に起因しているものと思われる。また、その種別も多岐にわたり、とりわけ陶磁器においては器種やサイズ、産地においてバリエーションに富む点でも特徴と言える。ここでは、出土遺物を人工遺物と自然遺物とに分けてまとめを行う。

人工遺物

調査年度別に見た陶磁器の出土傾向からすると、平成11(1999)年度においては、14世紀後半からの碗をはじめとする小～中型の製品から、酒会壺、青磁器台等の大型品も見られるが、総体として近世以降に相当する中国産・本土産の白磁、染付のほか、沖縄産の陶器が多い傾向にある。また、瓦においては、正殿の棟飾りとして貼付されていたと思われる明朝系に属する役瓦等が多量に出土している。これらの遺物は、大半が撫亂層からの出土であることから、戦後に正殿地区の遺物を含んだ土砂を、調査区内に造成土として持ち込んだ可能性が考えられる。その根拠として、平成19(2007)年度調査区は、正殿に近接するものの、近世段階の遺構は一部を除き削平されて残存せず、その撫亂層下からは、遺構に伴って中世の遺物が出土している。中でも輸入陶磁器については、大きく①14世紀後半～15世紀前半、②16世紀後半～17世紀初頭、③17世紀前半の3グループに大別することができる。次にその傾向を一瞥してみる。

まず、①の14世紀後半～15世紀前半に属するグループは、第6層の火災層から第4・5層の造成層、第3層の造成・火災面までの層・遺構から集中して出土している。その種別は、中国産の青磁が最も多く、次いで褐釉陶器、白磁と続くが、青磁では碗・皿類が多く、これらは多くを粗製が占める傾向にあり、その中に酒会壺等の大型品が少量含まれている状況である。

その中で、火災による堆積層と考えている第6層においては、中国産白磁碗、青磁碗とともに骨鐵が得られている。本層の時期は、先述したとおり志魯布里の乱が起きた1453年に比定されることから、この骨鐵の存在は興味深いものがある。

また、第5層においては、膨大な量の大和系瓦とともに、中国産青磁、褐釉陶器、朝鮮産象嵌青磁、タイ産褐釉陶器等が出土している。これらは造成の目的で投入された二次的な遺物と言えるが、その造成工法及び遺物の使用・廃棄年代を考える上で注目される事例と言える。

次に、その上に造成された第3層及び基壇・礎石建物跡の表面には、被熱を受けた多くの遺物が出土している。陶磁器は中国産青磁の碗、鉢類が多く見られる中、トリの餌入れのような珍しい遺物も含まれている。これらはすべて破片での出土であるが、接合率が高いことから、火災により焼け落ちた状態を保っていることが考えられる。

また、本層からは、銭貨をはじめとする金属製品も多く出土している。銭貨は被熱や鋳化により、全体的に保存状態が悪いことから、銭文の判読はX線により行った。その結果、洪武通寶(初鑄1368年)や永樂通寶(初鑄1408年)が多数を占め、その中に宋及び元代の銭貨がわずかに含まれることが判明した。この結果は、陶磁器の年代や放射性炭素年代測定の年代値とも大きな齟齬はない。

統いて、②の16世紀後半～17世紀初頭にあたるグループは、淑順門周辺に多く出土し、中でも石積み6面(西側)の堆積土から多く出土している。中国産白磁、染付、褐釉陶器のほか、華南三彩も含まれ、①の時期より産地及び器種が豊富になる。

最後に、③17世紀前半のグループは、シーリ遺構から出土した一括遺物である。中国産染付・白磁の碗、小碗、小杯が多い傾向にある。その他、沖縄産の陶器で、小型の甕や筒もの、火炉等が含まれており、器種としては一部で現在の沖縄産陶器に通ずるものがあるが、中には口唇や底部に二枚貝を目痕とした製品が見られる。この点及び口縁部ほかの成形法から、これらは沖縄の土を用い、薩摩焼、特に苗代川系の技法により成形・窯詰めされた製品の可能性があるという。この陶器は、これまでナカンダカリヤマの古墓群（沖縄県立埋蔵文化財センター2005）、首里城跡等で断片的に出土していたものの、今回1620～1630年代とする中国産陶磁器と共に伴することから、この17世紀前半の時期に沖縄において陶器が制作され、首里城内で消費されていたことを示していると言える。

自然遺物

自然遺物は貝・骨類のほか、特異な遺物として種実類やムシの類、糞石が得られている。

貝類においては、シーリ遺構及びそれ以外の地点について分析を行い、シーリ遺構以外では、少なくとも海産腹足類22科73種、海産二枚貝類18科45種、陸産腹足類5科7種が確認されている。また、その優占種及び生息域は、内湾のカンギクと河口干潟のアラスジケマンが多いとする結果が得られており、他のグスク時代遺跡と共通している。なお、シャコガイやクモガイ等の大型貝類の出土が少ないので、城外に持ち出されたことが考えられる。

シーリ遺構内の貝類は、少なくとも海産貝類13種、陸産貝類11種が得られており、海産貝類では、カンギクが比較的多く、その他ハマグリ類・アラスジケマン・イソハマグリ等の二枚貝類が少数抽出されている。この結果から、カンギクが重要な食用貝類として位置付けられるものの、全体に個体数が少ないとから、シーリ遺構内には基本的に貝類を廃棄していなかった可能性が考えられる。このことは、遺構外においても大型の貝類が少ない点及び、シーリ遺構内の堆積状況から、廃棄物が定期的に掻き出されていたとする想定とも調和しており、城内のゴミは一時的にストックするものの、基本的に城外へ持ち出して廃棄していた可能性がある。

次に、陸産貝類では少なくとも11種が認められ、林縁生息種が少ない点や、微小陸産貝類の出土状況から、遺構周辺は壁に囲まれ、人手の入ったわずかな木立が存在していたという環境の推定ができた。調査区となった御内原は、近世以降に製作された各種の絵図や平面図及び、沖縄戦以前の写真においても、特に東側に木立が密集して確認でき、出土した陸産貝の林縁生息種はその環境を示すものと思われる。

また、シーリ遺構については、サンプル中に活動性が高い陸産貝が現られない点からして、遺構は何らかの囲いや壁により覆われていたことが考えられる。さらに、多量のヤスデ類の遺体が含まれることから、隙間のある壁に囲まれた空間であった可能性を示している。このことは地表を掘りくぼめ、円形に石を組んだ遺構の構造や、横内家資料平面図により何らかの建物内に存在していた可能性がある点とも符合する結果と言える。

次に、動物骨・魚骨について、特にシーリ遺構内の遺物に関しては、堆積土全量をフローテーションによる洗い出しを行い、選別後は微小骨に至るまで、膨大な数の標本による詳細な比較同定を行った。その結果、特に魚骨について多くの種を特定することができた。その中で、フェフキダイ科、ブダイ科、

ベラ科、クロダイ属が優占種の上位を占めている。また、サバ科・シイラ・ニシン科・アジ科小型種・ボラ科等の珊瑚礁以外の海域で棲息する魚類も見られ、利用魚種の多様さを示した一方、ブダイ科においては2種が限定して出土しており、持ち込むにあたり選択が行われていた可能性がある。また、ブダイ科、ベラ科の咽頭骨が出土しない点で、内蔵を除去した状態で城内に持ち込んでいた可能性が指摘できる。この分析により、当時の漁撈形態及び魚類の処理方法、食材の一端を復元することが可能と思われる。

そのほか、自然化学分析により土壤分析や糞石の微細遺物分析を実施し、花粉やヒトの寄生虫卵を検出している。この糞石の出土により、城内での排泄は、「冠船之時御座構之図」等の絵図に見られるような「雪隠所」において「糞箱」とする容器に行い、シーリ遺構のようなゴミ穴に生活ゴミとともに破棄していたとする習俗を想定することができるとともに、花粉化石からは周辺の自然環境を読むことができる。

また、ヒトの遊離歯も7点得られており、その内4点が乳歯で、2点が齶歯（虫歯）であった。このことから、御内原内には乳歯が生え替わる7歳前後の子どもが生活していた可能性があり、齶歯になると城内で抜歯を行っていたことが考えられる。また、抜歯後は乳歯を含め、ゴミとともにシーリ遺構内に廃棄している点で、抜歯後の歯の取り扱いに関する習俗についても考えさせる事例となった。

4. おわりに

以上、平成11(1999)年度及び平成19(2007)年度調査分の首里城跡御内原北地区Iの報告を行った。

今回報告の対照となった調査区の内、特に平成19(2007)年度の調査区では、調査の後半から終盤にかけて多くの遺構が検出された。これらの遺構は、首里城の幾多の変遷を物語るとともに、当時の土木技術水準の高さを示した。

また、膨大な数におよぶ出土遺物、特に陶磁器の様相からは、周辺諸国とのつながりや本県における陶器生産のはじまりを垣間見ることができた。さらに、シーリ遺構や出土した自然遺物からは、当時の食生活及びゴミ問題、排泄に関する習俗をも知り得る情報が、多数得られている。今後は、周辺の調査成果及び文献・記録資料の情報を合わせることにより、謎めいた御内原での生活を、よりリアルに復元できるものと考えている。本報告がその端緒となれば幸いである。

最後ではあるが、発掘調査中は多くの方による助言・指導を賜り、遺構の記録作成に際しては、多くの埋蔵文化財センター職員の協力を得た。また、本報告書は2ヶ年におよぶ整理作業の間、多くの様々な分野の方々による分析・助言を賜り、多くの資料整理嘱託員・作業員の協力によりまとめることができた。ご協力いただいたすべての皆様に対し、末筆ながら記して感謝申し上げたい。

〈参考文献〉

沖縄県教育委員会 1992『首里城跡 首里城正殿跡の遺構調査』沖縄県文化財調査報告書第107集
沖縄県教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『ナカンダカリヤマの古墓群』沖縄県立埋蔵文化財センター
調査報告書 第26集 沖縄県立埋蔵文化財センター

報告書抄録

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集

首 里 城 跡

— 御内原北地区発掘調査報告書(1) —

発 行 年 2010(平成22)年3月31日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7
TEL : 098-835-8751・8752

印 刷 株式会社 尚生堂
〒901-2114 沖縄県浦添市安波茶 1-6-3
TEL : 098(876) 2232



表紙：B-C-4・5グリッド造構平面図

裏表紙：中国産青磁顔入れ